

亀泉坂上遺跡

一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査（その2）報告書

2008

国 土 交 通 省
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

亀泉坂上遺跡

一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査（その2）報告書

2008

国 土 交 通 省
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

上武道路は、一般国道17号バイパスの一環として、埼玉県の深谷バイパスから群馬県前橋市田口町の現道に接続する道路として計画されました。平成元年には前橋市今井町の国道50号まで、平成17年には前橋市富田町までの区間が開通・供用されており、国道17号の交通混雑の緩和に寄与するとともに沿線地域の生活道路として活用されています。

上武道路の通過する地域は、本県でも有数の埋蔵文化財が包蔵されています。このため、道路建設に先立ち埋蔵文化財の記録を後世に残すための発掘調査が、昭和48年度より群馬県教育委員会および当事業団によって行われてまいりました。さらに、平成11年度からは前橋市今井町の国道50号以北の発掘調査に着手し、記録保存の措置が取られました。

本書は、平成14年12月より平成16年6月にかけて発掘調査を行いました亀泉坂上遺跡の調査報告書です。

亀泉坂上遺跡は、前橋市亀泉町に所在する旧石器時代から平安時代の複合遺跡です。遺跡の内容としては、竪穴住居跡27軒をはじめとした多数の遺構が検出され、縄文時代前期の集落や古墳時代前期の集落が特徴となっています。その内容からは、旧石器時代以来、恵まれた環境にあったことがわかります。中でも古墳時代以降、寺沢川に面した側から始まり、支谷の谷地へと進んでいく開発の様子を明らかにすることができました。

発掘調査から報告書の作成に至るまで、国土交通省関東地方整備局（旧建設省関東地方整備局）、同高崎河川国道事務所、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、地元関係者等からは種々、ご指導ご協力を賜りました。このたび、報告書を上梓するに際し、これら関係者の皆様に衷心より感謝の意を表し、併せて、本報告書が地域の歴史を解明する上で、多くの人に広く活用されることを願い序とします。

平成20年11月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 高橋 勇 夫

例 言

- 1 本書は、平成14年度、15年度、16年度に行われた一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う亀泉坂上遺跡の発掘調査報告書である。本遺跡は、旧石器時代から平安時代までの複合遺跡である。旧石器時代の成果については別途報告を予定している。
- 2 亀泉坂上（かめいずみさかうえ）遺跡は、群馬県前橋市亀泉町65、66-1、68、71-1・2、77-1・4、78-2・6・8・9・10、79-2・3、81-1・2・3・4・5・10・11・12・13、83-1・2、84-1・2、85、86、87、88-2・3、99、100、106、107、562-5番地に所在する。遺跡名は、大字の「亀泉」と遺跡が広がる小字「坂上」によって付けた。調査対象面積は、13,330.8㎡である。
- 3 事業主体 国土交通省関東地方整備局高崎河川国道事務所（調査時、建設省関東地方建設局高崎工事事務所）
- 4 調査主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 5 調査期間 平成14年度 平成14年12月1日～平成15年3月31日
平成15年度 平成15年5月1日～平成16年3月31日
平成16年度 平成16年4月1日～平成16年6月30日
- 6 調査組織 管理・指導 小野宇三郎、吉田 豊、住谷永市、神保侑史、萩原利通、矢崎俊夫、巾 隆之、右島和夫
事務担当 小山友孝、中沢 悟、関 晴彦、大島信夫、植原恒夫、國定 均、笠原秀樹、小山健夫、竹内 宏、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏、岡嶋伸昌、森下弘美、片岡徳雄、佐藤聖行、阿久津玄洋、田中賢、栗原幸代、大澤友治、吉田恵子、並木綾子、今井もと子、内山佳子、若田 誠、佐藤美佐子、六本木弘子、本間久美子、北原かおり、狩野真子、松下次男、吉田 茂
調査担当 平成14年度 田村公夫、平方篤行、岡部 豊
平成15年度 女屋和志雄、青木さおり、井上昌美、井原陽一
平成16年度 女屋和志雄、新井英樹
- 7 整理主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 8 整理期間 平成19年4月1日～平成20年3月31日（履行期間 平成19年4月1日～平成21年3月31日）
- 9 整理組織 管理・指導 高橋勇夫、木村裕紀、津金澤吉茂、萩原 勉、佐藤明人、西田健彦
事務担当 笠原秀樹、石井 清、大木紳一郎、國定 均、須田朋子、齊藤恵利子、柳岡良宏 佐藤聖行、今泉大作、栗原幸代、矢島一美、齋藤陽子、今井もと子、内山佳子、若田 誠、本間久美子、北原かおり、狩野真子、武藤秀典
整理担当 女屋和志雄
- 10 本書作成の担当者は次のとおりである。
編 集 女屋和志雄
執 筆 第5章 パレオ・ラボ
上記以外 女屋和志雄
遺構・遺物観察指導、助言 新井 潔、神谷佳明
遺構写真 各発掘担当者、新井 潔、小宮山達夫 遺物写真 佐藤元彦
遺構・遺物図面、写真整理、図面作成等

- 高橋裕美、宮澤房子、大嶋 緑、小林町子、小池益美
 器械実測 伊東博子、田所順子、岸 弘子
 保存処理 関 邦一、小材浩一、津久井桂一、多田ひさ子、長岡久幸
- 11 石器・石製品の石材同定は、飯島静男氏（群馬県地質研究会会員）のご教示を得た。
 - 12 委託関係 花粉化石、プラントオパール、大型植物化石、放射性炭素年代測定、樹種同定、甕の内容物、赤色塊分析、火山灰 バレオ・ラボ 株式会社古環境研究所 遺構図面作成 横田設計株式会社
 - 13 発掘調査及び本書の作成にあたり、次の諸氏よりご助言を得た。記して感謝いたします。
 前橋市教育委員会 前原 豊、高山 剛、大胡町教育委員会 山下歳信
 - 14 出土遺物と記録資料は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団で管理し、群馬県埋蔵文化財調査センターで保管している。

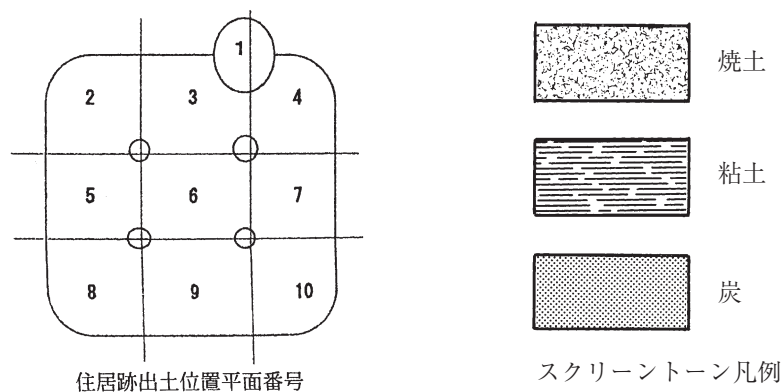
凡 例

- 1 挿図中に使用した方位は、座標北を表している。座標系は、日本平面直角座標系（国家座標）第Ⅸ系で、本遺跡の基点座標値はX=41,000m、Y=-60,000mである。
- 2 遺構断面実測図、等高線に記した数値は、標高を表し、単位はmを用いた。
- 3 挿図の縮尺は、特に記載のない限り以下の通りである。
 遺構 住居跡 1/60 炉・カマド・貯蔵穴1/30 掘立柱建物跡1/60 土坑1/60 古墳 1/60、1/80、1/100 溝 1/60、1/100、1/200、1/500 道1/60、1/500 ピット1/60 水田1/80、1/200 畠・畑 1/60、1/100 全体図1/500
 遺物 1/3 蓋・杯・椀・皿・鉢・高杯・深鉢・短頸壺・瓶 1/4 甕・小型甕・台付甕・深鉢 1/3 磨石・敲石・打製石斧・磨製石斧・多孔石・凹石・石匙・スクレイパー・こも編み石・台石・砥石・錘（おもり）・紡錘車・鉄製品・滑石製模造品 1/2 紡錘車 1/1 石鏃
- 4 写真図版の縮尺率は、挿図とは一致しない。
- 5 遺物観察表にある残存状態は、口縁、胴部、底部の各部位を示して全体の割合を数値で表した。ただし、全体が想定できない場合は、〇〇以下とした。なお、（ ）が推定値、[]が現存値、単位はcmである。
- 6 土器の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」によった。内外面で違う場合は外面で表し、斑模様の場合は中間色で表現している。
- 7 胎土の細砂は径が1ミリ前後、微砂は径が1ミリ以下である。
- 8 本書では、テフラの呼称として次の略語を使用する。
 浅間A軽石 As-A 1783（天明3）年 浅間B軽石 As-B 1108（天仁元）年 浅間C軽石 As-C 4世紀初頭
- 9 本書で掲載した地図は、下記のものを使用した。
 第1図 国土地理院発行 地勢図 1：20万「長野」「宇都宮」
 第2図 「群馬県史」通史編1付図を簡略化した当事業団「波志江西宿Ⅱ遺跡」（2004） 第3図に加筆転載した。
 第3図 前橋市発行 地形図 1：1万
 第4図 国土地理院発行 地形図 1：5万「前橋」

目 次

序	
例言・凡例	
目次・挿図目次・写真図版目次	
第1章 調査に至る経過	1
第2章 遺跡の立地と環境	2
1 遺跡の位置と地形	2
2 周辺の遺跡	4
第3章 発掘調査の方法と経過	11
1 発掘調査の方法	11
2 調査の経過	12
3 整理作業の方法	14
第4章 検出された遺構と遺物	15
第1節 概要	15
第2節 縄文時代の遺構と遺物	15
1 概要	15
2 竪穴住居跡	16
3 土坑	38
4 ピット	61
5 縄文包含層	65
第3節 古墳時代前期の遺構と遺物	71
1 概要	71
2 竪穴住居跡	71
3 土坑	105
4 1号土器集中	107
第4節 古墳時代後期の遺構と遺物	109
1 概要	109
2 竪穴住居跡	109
3 掘立柱建物跡	158
4 土坑	162
5 古墳	167
6 畠	173
7 溝	173
第5節 平安時代の遺構と遺物	175
1 概要	175
2 水田	175

3 溝	176
4 道	179
第6節 江戸時代以降の遺構と遺物	183
1 概要	183
2 溝	183
3 道	192
4 畑	192
第7節 遺構外遺物	194
第5章 自然科学分析	201
1 亀泉坂上遺跡5区の花粉化石	203
2 亀泉坂上遺跡のプラント・オパール	211
3 亀泉坂上遺跡から出土した大型植物化石	215
4 放射性炭素年代測定	221
5 亀泉坂上遺跡出土木材の樹種	223
6 貯蔵穴内出土甕内の内容物分析	225
7 住居跡出土赤色塊の分析	229
8 亀泉坂上遺跡・堤沼上遺跡出土炭化材の樹種同定 —古墳時代と古代の用材選択—	233
第6章 調査のまとめ	251
遺物観察表	259
写真図版	
報告書抄録	
奥付	
付図 亀泉坂上遺跡遺構全体図 (1:500)	



挿図目次

第1図	遺跡位置	3	第42図	縄文包含層遺物図(3)	69
第2図	地形区分	3	第43図	縄文包含層遺物図(4)	70
第3図	周辺遺跡(1)	5	第44図	5号住居跡遺構図・遺物図	72
第4図	周辺遺跡(2)	9	第45図	6号住居跡遺構図(1)	74
第5図	基本土層、グリッド配置図	10	第46図	6号住居跡遺構図(2)	75
第6図	1・2号住居跡遺構図(1)	17	第47図	6号住居跡遺物分布図・遺物図(1)	76
第7図	1・2号住居跡遺構図(2)・遺物分布図	18	第48図	6号住居跡遺物図(2)	77
第8図	1・2号住居跡遺物図(1)	19	第49図	9号住居跡遺構図(1)	79
第9図	2号住居跡遺物図(2)	20	第50図	9号住居跡遺構図(2)・遺物分布図	80
第10図	2号住居跡遺物図(3)	21	第51図	9号住居跡遺物図	81
第11図	24号住居跡遺構図・遺物図(1)	23	第52図	13号住居跡遺構図・遺物図	82
第12図	24号住居跡遺物図(2)	24	第53図	14号住居跡遺構図・遺物図	83
第13図	25号住居跡遺構図(1)	26	第54図	16号住居跡遺構図(1)	85
第14図	25号住居跡遺構図(2)	27	第55図	16号住居跡遺構図(2)	86
第15図	25号住居跡遺構図(3)・遺物分布図	28	第56図	16号住居跡遺構図(3)・遺物分布図	87
第16図	25号住居跡遺物図(1)	29	第57図	16号住居跡遺物図	88
第17図	25号住居跡遺物図(2)	30	第58図	19号住居跡遺構図(1)	90
第18図	25号住居跡遺物図(3)	31	第59図	19号住居跡遺構図(2)	91
第19図	26号住居跡遺構・遺物図	33	第60図	19号住居跡遺物分布図・遺物図(1)	92
第20図	27号住居跡遺構図・遺物分布図・遺物図(1)	35	第61図	19号住居跡遺物図(2)	93
第21図	27号住居跡遺物図(2)	36	第62図	20号住居跡遺物図	94
第22図	27号住居跡遺物図(3)	37	第63図	20号住居跡遺構図	95
第23図	5区土坑分布図	48	第64図	21号住居跡遺構図(1)	97
第24図	1号～10号土坑遺構図	49	第65図	21号住居跡遺構図(2)	98
第25図	11号～20号土坑遺構図	50	第66図	21号住居跡遺構図(3)	99
第26図	21・22・25・30・33～38号土坑遺構図	51	第67図	21号住居跡遺構図(4)・遺物分布図	100
第27図	39～47号土坑遺構図	52	第68図	21号住居跡遺物図(1)	101
第28図	48・51・54～61号土坑遺構図	53	第69図	21号住居跡遺物図(2)	102
第29図	62～72号土坑遺構図	54	第70図	22号住居跡遺構図	103
第30図	73～78号土坑遺構図	55	第71図	22号住居跡遺物図	104
第31図	79～85号土坑遺構図	56	第72図	52・53号土坑遺構図・遺物図	105
第32図	1～3・6・10・12・13号土坑遺物図	57	第73図	1号土器集中遺構図	106
第33図	13・14・20・21・25・33～36・38・43・45・ 54～56号土坑遺物図	58	第74図	1号土器集中遺物図	107
第34図	56・57・59・63～65・68号土坑遺物図	59	第75図	3・4号住居跡遺構図	110
第35図	71・73・74・76～79・81～83号土坑遺物図	60	第76図	7号住居跡遺構図(1)	112
第36図	3区ピット・土坑分布図	62	第77図	7号住居跡遺構図(2)	113
第37図	1～23号ピット遺構図	63	第78図	7号住居跡遺構図(3)	114
第38図	24～45号ピット遺構図	64	第79図	7号住居跡遺構図(4)	115
第39図	縄文包含層遺物分布図	66	第80図	7号住居跡遺物分布図・遺物図(1)	116
第40図	縄文包含層遺物図(1)	67	第81図	7号住居跡遺物図(2)	117
第41図	縄文包含層遺物図(2)	68	第82図	7号住居跡遺物図(3)	118
			第83図	8号住居跡遺構図(1)	120

表 1	亀泉坂上遺跡の炭化材同定点数	233
表 2	堤沼上遺跡出土炭化材同定点数	233
表 3	亀泉坂上遺跡炭化材観察・同定表 (1・2・3)	240
	堤沼上遺跡出土炭化材観察・同定表	242
表 4	亀泉坂上遺跡の遺構別の樹種組成	243
表 5	堤沼上遺跡出土の遺構別の樹種同定	243
表 6	亀泉坂上遺跡住居跡出土の小径木の数と全体数からみた割合	244
表 7	亀泉坂上遺跡住居跡出土材の木取りと樹種の対応関係	244
表 8	住居跡出土木材の年輪幅	245
写真図版 1	亀泉坂上遺跡出土炭化材の走査電子顕微鏡写真	246
写真図版 2	亀泉坂上遺跡出土炭化材の走査電子顕微鏡写真	247
写真図版 3	亀泉坂上遺跡出土炭化材の走査電子顕微鏡写真	248
写真図版 4	堤沼上遺跡出土炭化材の走査電子顕微鏡写真	249

写真図版目次

PL 1

- 1 上武道路予定地を南西上空から望む
- 2 上武道路予定地を北東上空から望む

PL 2

- 1 1区全景 南上空
- 2 2区全景 東上空
- 3 3区全景 南西上空
- 4 3区全景 北西上空
- 5 4区全景 南東上空
- 6 4区全景 南上空
- 7 5区全景 西
- 8 5区全景 東

PL 3

- 1 1区縄文面作業風景 北
- 2 1区縄文面作業遺物出土状況 北
- 3 9号住居跡作業風景 南
- 4 11号住居跡作業風景 北西
- 5 17号住居跡作業風景 東
- 6 18号住居跡作業風景 西
- 7 22号住居跡作業風景 東
- 8 25号住居跡作業風景 南

PL 4

- 1 2号畠作業風景 南
- 2 3区作業風景 南東
- 3 4区作業風景 東
- 4 4区作業風景 南
- 5 5区作業風景 東
- 6 1号古墳作業風景 南
- 7 旧石器確認作業 西
- 8 60Q-3グリッド北壁断面 南

PL 5

- 1 1号住居跡全景 南西
- 2 2号住居跡全景 南西
- 3 2号住居跡遺物出土状態 南西
- 4 2号住居跡1号炉 南
- 5 2号住居跡2号炉 南
- 6 1・2号住居跡断面A 南
- 7 3号住居跡全景 南
- 8 4号住居跡全景カマド断面A 西

PL 6

- 1 5号住居跡全景 南
- 2 5号住居跡遺物出土状態 南西
- 3 5号住居跡掘り方全景 南
- 4 6号住居跡全景 南
- 5 6号住居跡遺物出土状態 南

- 6 6号住居跡断面A 南
- 7 6号住居跡炉跡全景 南
- 8 6号住居跡貯蔵穴1断面M 西

PL 7

- 1 6号住居跡掘り方全景 南
- 2 7号住居跡全景 南東
- 3 7号住居跡掘り方全景 南東
- 4 7号住居跡断面B 北西
- 5 7号住居跡遺物出土状態 南東
- 6 7号住居跡カマド全景 南東
- 7 7号住居跡カマド掘り方全景 南西
- 8 7号住居跡貯蔵穴全景 南西

PL 8

- 1 8号住居跡全景 西
- 2 8号住居跡掘り方全景 西
- 3 8号住居跡断面B 南
- 4 8号住居跡断面B 南
- 5 8号住居跡西カマド全景 東
- 6 8号住居跡西カマド掘り方全景 東
- 7 8号住居跡東カマド全景 西
- 8 8号住居跡東カマド掘り方全景 西

PL 9

- 1 8号住居跡東カマド断面M 西
- 2 8号住居跡東カマド断面N 南西
- 3 8号住居跡東カマド周辺遺物出土状態 西
- 4 8号住居跡貯蔵穴断面L 西
- 5 9号住居跡全景 西
- 6 9号住居跡掘り方全景 西
- 7 9号住居跡遺物出土状態 西
- 8 9号住居跡2号炉断面P 南

PL 10

- 1 9号住居跡貯蔵穴遺物出土状態 南
- 2 10号住居跡全景 南西
- 3 10号住居跡掘り方全景 南西
- 4 10号住居跡断面A 西
- 5 10号住居跡カマド全景 西
- 6 10号住居跡遺物出土状態 西
- 7 10号住居跡カマド掘り方全景 西
- 8 10号住居跡カマド断面N 西

PL 11

- 1 10号住居跡貯蔵穴断面M 西
- 2 11号住居跡全景 西
- 3 11号住居跡入口 西
- 4 11号住居跡掘り方全景 西
- 5 11号住居跡断面A 南西
- 6 11号住居跡断面B 西
- 7 11号住居跡遺物出土状態 南

8 11号住居跡カマド全景 西

PL12

- 1 11号住居跡カマド掘り方全景 西
- 2 11号住居跡カマド掘り方断面E 西
- 3 11号住居跡貯蔵穴遺物出土状態 南
- 4 12号住居跡全景 北
- 5 12号住居跡断面A 東
- 6 12号住居跡断面B 北
- 7 12号住居跡断面C 北
- 8 12号住居跡断面C 北

PL13

- 1 12号住居跡カマド全景 西
- 2 12号住居跡カマド掘り方全景 西
- 3 12号住居跡カマド断面I 西
- 4 12号住居跡カマド遺物出土状態 西
- 5 12号住居跡貯蔵穴全景 北東
- 6 13号住居跡全景 南
- 7 13号住居跡掘り方全景 南
- 8 14号住居跡全景 東

PL14

- 1 14号住居跡断面A 北東
- 2 15号住居跡全景 北
- 3 15号住居跡掘り方全景 北
- 4 15号住居跡遺物出土状態 南西
- 5 15号住居跡カマド掘り方全景 西
- 6 15号住居跡カマド断面O 南西
- 7 16号住居跡全景 西
- 8 16号住居跡掘り方全景 西

PL15

- 1 16号住居跡断面B 西
- 2 16号住居跡断面A 南
- 3 16号住居跡遺物出土状態 西
- 4 16号住居跡遺物出土状態 西
- 5 16号住居跡1号・2号炉全景 西
- 6 16号住居跡貯蔵穴全景 北
- 7 16号住居跡貯蔵穴全景 北
- 8 17号住居跡全景 北東

PL16

- 1 17号住居跡掘り方全景 南東
- 2 17号住居跡断面B 南
- 3 17号住居跡遺物出土状態 北東
- 4 17号住居跡南西隅遺物出土状態 北東
- 5 17号住居跡東カマド全景 南東
- 6 17号住居跡西カマド全景 東
- 7 17号住居跡西カマド掘り方全景 東
- 8 17号住居跡貯蔵穴1全景 南

PL17

- 1 18号住居跡全景 西
- 2 18号住居跡掘り方全景 西
- 3 18号住居跡断面A 西
- 4 18号住居跡東カマド全景 西
- 5 18号住居跡西カマド全景 東
- 6 18号住居跡西カマド全景 東
- 7 18号住居跡西カマド断面L 東
- 8 18号住居跡貯蔵穴1全景 東

PL18

- 1 18号住居跡貯蔵穴2遺物出土状態全景
- 2 19号住居跡全景 南東
- 3 19号住居跡掘り方全景 南東
- 4 19号住居跡掘り方全景 北東
- 5 19号住居跡断面A 南東
- 6 19号住居跡遺物出土状態 南東
- 7 19号住居跡遺物出土状態 西
- 8 19号住居跡炉跡 北東

PL19

- 1 20号住居跡全景 南東
- 2 20号住居跡掘り方全景 南東
- 3 21号住居跡全景 南
- 4 21号住居跡掘り方全景 南
- 5 21号住居跡断面B 西
- 6 21号住居跡掘り方断面B 南
- 7 21号住居跡根太1断面P 南東
- 8 21号住居跡炉跡全景 東

PL20

- 1 21号住居跡遺物出土状態 南
- 2 21号住居跡貯蔵穴1断面O 西
- 3 21号住居跡ビット7断面X 西
- 4 21号住居跡鉄分凝集部 北
- 5 22号住居跡全景 南西
- 6 22号住居跡掘り方全景 南西
- 7 22号住居跡断面A 南東
- 8 22号住居跡断面A西側 南東

PL21

- 1 22号住居跡遺物出土状態 南西
- 2 22号住居跡炉跡全景 南
- 3 22号住居跡全景貯蔵穴断面C 東
- 4 23号住居跡全景 南西
- 5 23号住居跡掘り方全景 南西
- 6 23号住居跡遺物出土状態 南西
- 7 23号住居跡断面B 北西
- 8 23号住居跡カマド全景 南西

PL22

- 1 23号住居跡貯蔵穴遺物出土状態 南東

- | | | | | | |
|------|-----------------|----|------|-------------|----|
| 2 | 24号住居跡全景 | 南東 | 4 | 17号土坑全景 | 東 |
| 3 | 24号住居跡カマド遺物出土状態 | 南 | 5 | 17号土坑断面A | 東 |
| 4 | 25号住居跡全景 | 南西 | 6 | 18号土坑全景 | 西 |
| 5 | 25号住居跡掘り方全景 | 南西 | 7 | 19・20号土坑全景 | 西 |
| 6 | 25号住居跡断面A | 南西 | 8 | 19・20号土坑断面A | 西 |
| 7 | 25号住居跡遺物出土状態 | 南西 | PL28 | | |
| 8 | 25号住居跡1号炉全景 | 南 | 1 | 21号土坑全景 | 南西 |
| PL23 | | | 2 | 21号土坑断面A | 南西 |
| 1 | 25号住居跡1号炉跡断面E | 南西 | 3 | 22号土坑全景 | 南 |
| 2 | 25号住居跡2号炉跡断面V | 西 | 4 | 22号土坑断面A | 南 |
| 3 | 25号住居跡2号炉跡全景 | 南 | 5 | 23号土坑全景 | 南 |
| 4 | 25号住居跡ピット11上面 | 北 | 6 | 23号土坑断面A | 南 |
| 5 | 26号住居跡掘り方全景 | 南 | 7 | 24号土坑全景 | 南 |
| 6 | 26号住居跡遺物出土状態 | 南 | 8 | 24号土坑断面A | 南 |
| 7 | 27号住居跡全景 | 北 | PL29 | | |
| 8 | 27号住居跡掘り方全景 | 東 | 1 | 25号土坑全景 | 南 |
| PL24 | | | 2 | 25号土坑断面A | 南 |
| 1 | 27号住居跡遺物出土状態 | 東 | 3 | 26号土坑全景 | 東 |
| 2 | 1号土坑全景 | 南 | 4 | 26号土坑断面A | 東 |
| 3 | 1号土坑断面A | 南西 | 5 | 27号土坑全景 | 南 |
| 4 | 2号土坑全景 | 南 | 6 | 28号土坑全景 | 南東 |
| 5 | 2号土坑断面A | 南 | 7 | 29号土坑全景 | 東 |
| 6 | 3号土坑全景 | 南 | 8 | 29号土坑断面A | 北 |
| 7 | 3号土坑断面A | 南 | PL30 | | |
| 8 | 4号土坑全景 | 南西 | 1 | 30号土坑全景 | 南 |
| PL25 | | | 2 | 30号土坑断面A | 南 |
| 1 | 4号土坑断面A | 南西 | 3 | 31号土坑全景 | 東 |
| 2 | 5号土坑全景 | 南 | 4 | 31号土坑断面A | 南東 |
| 3 | 5号土坑断面A | 南 | 5 | 32号土坑全景 | 南 |
| 4 | 6号土坑全景 | 南 | 6 | 32号土坑断面A | 南 |
| 5 | 6号土坑断面A | 南 | 7 | 33号土坑全景 | 南 |
| 6 | 7号土坑全景 | 南 | 8 | 33号土坑断面A | 南 |
| 7 | 7号土坑断面A | 南 | PL31 | | |
| 8 | 9号土坑全景 | 南西 | 1 | 34号土坑全景 | 南 |
| PL26 | | | 2 | 34号土坑断面A | 南 |
| 1 | 9号土坑断面A | 南西 | 3 | 35号土坑全景 | 南 |
| 2 | 10号土坑全景 | 西 | 4 | 35号土坑断面A | 南 |
| 3 | 10号土坑断面A | 西 | 5 | 36号土坑全景 | 南 |
| 4 | 10号土坑鬼板出土状態 | 西 | 6 | 36号土坑断面A | 南 |
| 5 | 11号土坑全景 | 南西 | 7 | 37号土坑断面A | 南 |
| 6 | 11号土坑断面A | 南西 | 8 | 38号土坑断面A | 南 |
| 7 | 12号土坑全景 | 南西 | PL32 | | |
| 8 | 13号土坑全景 | 南西 | 1 | 38号土坑全景 | 南 |
| PL27 | | | 2 | 39号土坑全景 | 南 |
| 1 | 15号土坑全景 | 南 | 3 | 39号土坑断面A | 南 |
| 2 | 15号土坑断面A | 南 | 4 | 40号土坑全景 | 南 |
| 3 | 16号土坑全景 | 西 | | | |

- 5 40号土坑断面A 南
- 6 41号土坑全景 南
- 7 41号土坑断面A 南
- 8 42号土坑全景 南

PL33

- 1 42号土坑断面A 南
- 2 43号土坑全景 東
- 3 43号土坑断面A 南
- 4 44号土坑全景 南東
- 5 44号土坑断面A 南
- 6 45号土坑全景 南東
- 7 45号土坑断面A 南
- 8 46号土坑全景 南東

PL34

- 1 46号土坑断面A 南
- 2 47号土坑全景 南
- 3 47号土坑断面A 南
- 4 48号土坑全景 南
- 5 48号土坑断面A 南
- 6 49号土坑全景 南
- 7 49号土坑断面A 南
- 8 50号土坑全景 北東

PL35

- 1 50号土坑断面A 北東
- 2 51号土坑全景 西
- 3 51号土坑断面A 西
- 4 52号土坑断面A 南西
- 5 52号土坑全景 南西
- 6 53号土坑全景 北西
- 7 53号土坑全景 北西
- 8 54号土坑全景 南

PL36

- 1 54号土坑断面A 南
- 2 55号土坑全景 南東
- 3 55号土坑断面A 南東
- 4 56号土坑全景 南
- 5 56号土坑断面A 南
- 6 57号土坑全景 南
- 7 57号土坑断面A 北西
- 8 58号土坑断面A 南西

PL37

- 1 59号土坑全景 南
- 2 59号土坑断面A 南
- 3 60号土坑全景 南
- 4 60号土坑遺物出土状態 南
- 5 60号土坑断面A 南
- 6 61号土坑全景 西

- 7 61号土坑断面A 西
- 8 62号土坑全景 西

PL38

- 1 62号土坑断面A 西
- 2 63号土坑全景 南
- 3 63号土坑断面A 南
- 4 64号土坑全景 西
- 5 64号土坑断面A 北西
- 6 65号土坑全景 南
- 7 65号土坑断面A 西
- 8 66号土坑全景 北東

PL39

- 1 67号土坑全景 北西
- 2 67号土坑断面A 北西
- 3 68号土坑断面A 南
- 4 68号土坑全景 南
- 5 69号土坑全景 南
- 6 69号土坑断面A 南西
- 7 70号土坑全景 南東
- 8 70号土坑断面A 南東

PL40

- 1 71号土坑全景 北
- 2 71号土坑断面A 西
- 3 72号土坑全景 北西
- 4 72号土坑断面A 北西
- 5 73号土坑全景 南西
- 6 73号土坑断面A 南西
- 7 74号土坑全景 北西
- 8 74号土坑断面A 北西

PL41

- 1 75号土坑全景 北西
- 2 75号土坑断面A 南西
- 3 75号土坑底面ピット断面 北東
- 4 76号土坑全景 南西
- 5 76号土坑断面A 北西
- 6 77号土坑全景 東
- 7 77号土坑断面A 東
- 8 77号土坑遺物出土状態 東

PL42

- 1 78号土坑全景 南西
- 2 78号土坑断面A 南西
- 3 79号土坑全景 北西
- 4 79号土坑断面A 南西
- 5 80号土坑全景 南西
- 6 80号土坑断面A 南西
- 7 81号土坑全景 南
- 8 81号土坑断面A 南

PL43

- 1 82号土坑全景 北東
- 2 82号土坑断面A 北東
- 3 83号土坑全景 北東
- 4 83号土坑遺物出土状態 北東
- 5 84号土坑全景 南西
- 6 85号土坑全景 南東
- 7 85号土坑断面A 南東
- 8 1号溝全景 南西

PL44

- 1 2号溝断面A 南
- 2 3号溝断面A 南
- 3 4号溝断面A 西
- 4 5号溝断面C 南
- 5 6号溝全景 東
- 6 6号溝断面A 東
- 7 7号溝断面A 南
- 8 8号・9号溝・2号畠全景 南

PL45

- 1 10号溝全景 南
- 2 10号溝断面A 北
- 3 11号溝断面B 南西
- 4 11号溝断面D 南西
- 5 12号溝断面A 西
- 6 13号溝断面B 南西
- 7 13号溝断面C 南西
- 8 14号溝全景 東

PL46

- 1 14号溝断面C 西
- 2 14号溝断面D 西
- 3 1号掘立柱建物跡全景 南
- 4 2号掘立柱建物跡 南
- 5 3号掘立柱建物跡 東
- 6 6号道断面B 南
- 7 6号道断面C 南
- 8 5号・6号道断面D 南

PL47

- 1 1号土器集中内7号道断面 南
- 2 8号道断面B 西
- 3 1号畑全景 東
- 4 2号畠 西
- 5 2号畠断面A 西
- 6 2号畠断面A 西
- 7 1号古墳石室全景 南
- 8 1号古墳石室全景 南

PL48

- 1 1号古墳石室掘り方全景 南

- 2 1号古墳断面B 南西
- 3 1号古墳断面C 北西
- 4 1号古墳周堀全景 北西
- 5 1号古墳石室前庭遺物出土状態 南
- 6 1号古墳石室耳環出土状態 北
- 7 1号土器集中 北東
- 8 1号土器集中 南西

PL49

- 1 5区P1断面B 南西
- 2 5区全景 北
- 3 5区P1断面A 南東
- 4 5区P1断面A 南東
- 5 5区P1断面A炭化材出土状態 南東
- 6 5区P1断面A炭化材出土状態 南東
- 7 5区P1断面A 南東
- 8 3区倒木断面 南

PL50 1号・2号住居跡出土遺物

PL51 2号・5号・6号住居跡出土遺物

PL52 6号・7号住居跡出土遺物

PL53 7号住居跡出土遺物

PL54 8号住居跡出土遺物

PL55 8号・9号・10号住居跡出土遺物

PL56 10号・11号・12号住居跡出土遺物

PL57 12号・13号・14号・15号住居跡出土遺物

PL58 16号・17号住居跡出土遺物

PL59 17号住居跡出土遺物

PL60 17号・18号・19号住居跡出土遺物

PL61 19号住居跡出土遺物

PL62 20号・21号住居跡出土遺物

PL63 21号・22号・23号住居跡出土遺物

PL64 24号住居跡出土遺物

PL65 24号・25号住居跡出土遺物

PL66 25号住居跡出土遺物

PL67 25号・26号・27号住居跡出土遺物

PL68 27号住居跡出土遺物

PL69 27号住居跡、1号・2号・3号・6号・10号土坑出土遺物

PL70 12~14号・20号・21号・25号・26号・33~36号・38号・43号・45号・50号・52~56号土坑出土遺物

PL71 56号・57号・59号・63~65号・68号・71号・73号・74号・76号・77号土坑出土遺物

PL72 78号・79号・81~83号土坑、1号古墳出土遺物

PL73 1号古墳、5区P1、1号土器集中出土遺物

PL74 1号土器集中、縄文包含層出土遺物

PL75 縄文包含層出土遺物

PL76 縄文包含層、遺構外出土遺物

PL77・78 遺構外出土遺物

第1章 調査に至る経過

亀泉坂上（かめいずみさかうえ）遺跡は、赤城山の南麓、群馬県前橋市亀泉町66番地ほかにある。JR両毛線の駒形駅から北に5km、市街地からは東に4km、畑地が多い市街地近郊の農村地帯にある。（第1図）。

遺跡は、国道17号の改良工事、通称「上武道路」の建設に伴って発掘調査された。上武道路は、埼玉県深谷バイパスから前橋市田口町の現道に取り付く延長40.5kmの大規模バイパスで、都市間連絡道路として、地域の基盤整備と現道の交通混雑解消のために計画された。昭和45年度に国道50号以南の22.4kmがⅠ期工事として事業化、すでに平成元年度に供用されている。建設に先立っては、群馬県教育委員会および財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団（以下事業団）によって35遺跡、延べ53万4,000㎡が発掘調査され、26冊の発掘調査報告書にまとめられている。

国道50号以北は、平成元年度に延長13.1kmのうち（主）前橋大間々桐生線までの4.9km区間がⅡ期工事として事業化され、7工区と呼ばれている。Ⅰ期工事と同様、建設に先立ち、建設省（現国土交通省）関東地方建設局と群馬県教育委員会との間で事業の円滑な遂行と文化財保護を前提とした協議が重ねられ、埋蔵文化財が破壊される地域においては事前に発掘調査を実施することとなった。国土交通省、群馬県教育委員会、事業団の三者は、平成11年4月1日付けで「一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査（その1）の実施に関する協定書」を締結し、国道50号から前橋市堤町までの発掘調査は、整理作業を含めて平成18年3月31日までに完了させることとした。

発掘調査は、平成11年度から事業団が「一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査（その1）」として受託し、平成14年度までに国道50号に接する今井道上Ⅱ遺跡から萱野Ⅱ遺跡までの12遺跡が一部未収地を残して終了した。表面積は、20万9,000㎡に及んだ。

国土交通省は、この動きを受けて本体工事の着工、平成17年度に（主）前橋赤堀線までの暫定供用を提示した。これに伴い残る区間の発掘調査の終了が懸案となり、用地の買収が済んだ所から始めることになった。しかし、萱野Ⅱ遺跡から7工区の終点前橋市上泉町までは、協定書の対象外であったため、協定を変更する必要が生じた。平成13年7月30日～8月9日群馬県教育委員会による試掘調査で発掘調査の必要があると判断され、国土交通省との協議を経て発掘調査することが決定した。

協定は、平成16年11月10日付けで先の三者による「一般国道17号（上武道路）改築に伴う埋蔵文化財発掘調査（その2）の実施に関する協定書」が新たに締結された。

新協定書では、①当初7工区（その1）に東半分が含まれていた萱野Ⅱ遺跡について、同一遺跡であることから7工区（その2）の協定に移行・統合する。これに伴い7工区全体は、萱野Ⅱ遺跡以東を7-1工区、以西を7-2工区と分けることとなった。②調査期間は、整理期間を含め平成22年3月31日までに改める。③7-2工区は、東から順に萱野Ⅱ遺跡、堤沼上遺跡、亀泉坂上遺跡、亀泉西久保Ⅱ遺跡、荻窪南田遺跡、上泉唐ノ堀遺跡の6遺跡、表面積は7万8404.9㎡である。

この区間には、一級河川寺沢川と上毛電鉄に架かる全長418mの仮称亀泉高架橋をはじめ、（主）前橋大間々桐生線との接続など構造物が連続し、工事との競合や調整が避けられない情勢にあった。国土交通省からは、調査の促進だけでなく効率化も求められ、調査を構造物の箇所だけに限るという案が提示され、協議を重ねた結果、最終的には実施に移されている。

第2章 遺跡の立地と環境

1 遺跡の位置と地形

赤城山麓の地形 亀泉坂上遺跡は、群馬県中央部、赤城山の南麓にある。

赤城山は、標高1,828mの黒檜山を最高峰に、荒山、地蔵岳、鍋割山、鈴ヶ岳など10あまりの峰々から成る、那須火山帯に属する複合成層火山である。裾野は富士山に次ぐ広さといわれ、麓に住む前橋、伊勢崎、桐生の人たちからはおらが山として親しまれ、県内では利根川をはさんで好一對の榛名山、長野県境に近い妙義山と合わせて上毛三山の一つに数えられている。

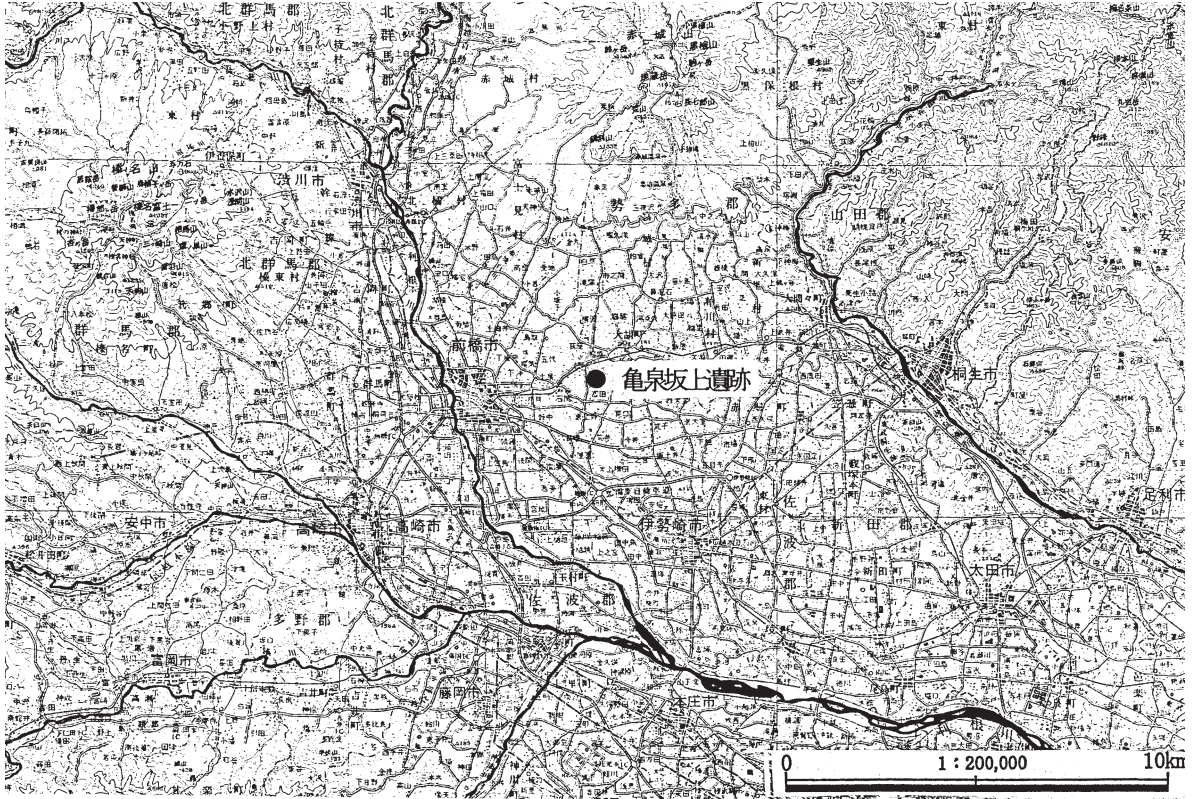
火山活動は、古期成層火山形成期（40～50万年前から13万年前）、新期成層火山形成期（13万年前から4～5万年前）、その後の中央火口丘形成期の3期に大きく分けられる。当初は2,000mを越す成層火山であったものが、噴火と山体崩壊を繰り返して現在の姿に至ったと考えられている。中央火口丘群を形成した後は、現在まで目立った活動はなく火山麓扇状地の形成期になっている。

裾野は長し赤城山、これは県内で広く普及している上毛カルタの一枚で、南麓をピタリと言い当てた表現である。その広くて長い裾野も、標高500m付近で頂上にむけて陰しさを増す。ここに赤城神社が鎮座するのも山と麓を区別するかのようで、地形や地質、植生などの違うことが指摘され、輻射谷の多くもこの付近で始まる。また、畑や水田が見られる限界でもある。裾野の南端は、標高90～130m前後で旧利根川の氾濫原である広瀬川低地帯と接し、対岸は前橋台地、さらにその先は関東平野に続く。

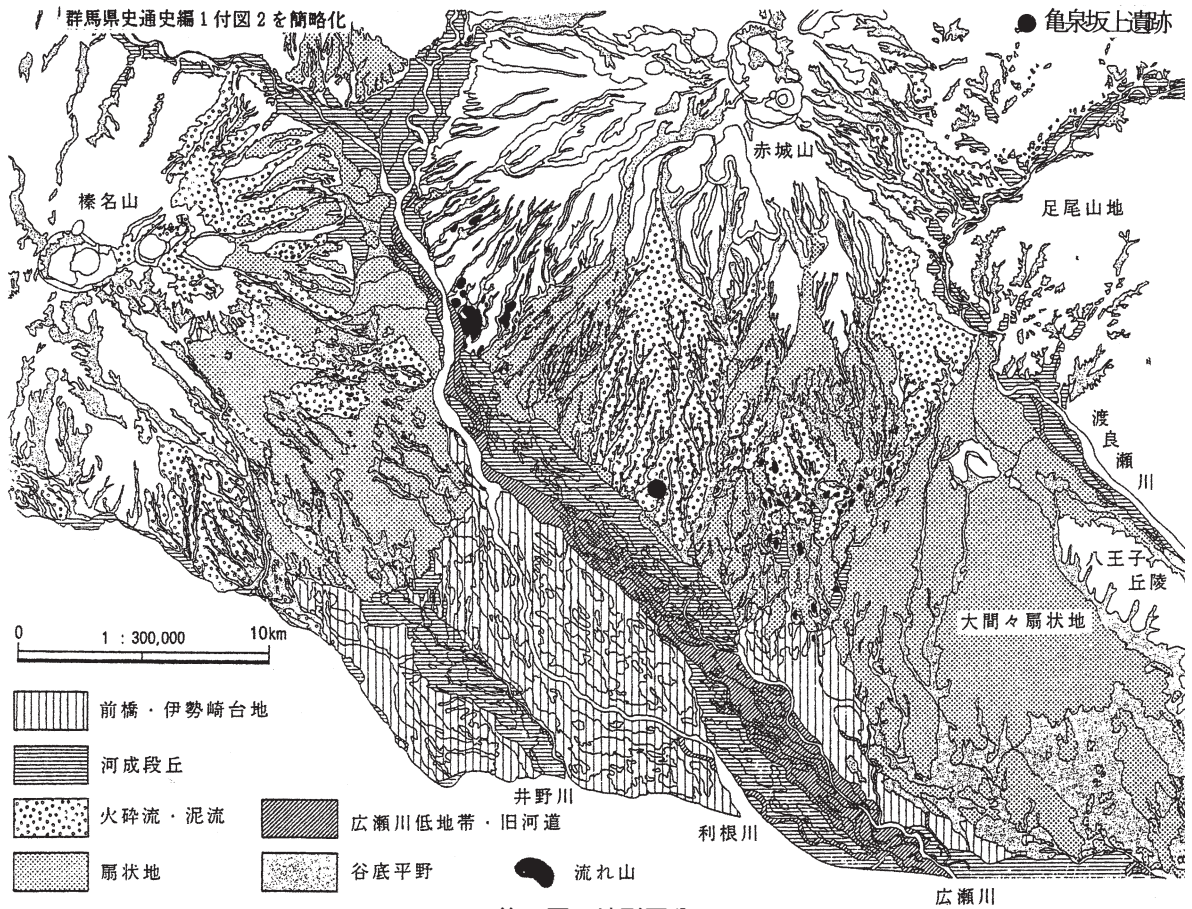
南麓は、中央を下る荒砥川で東西に二分される。西は、基底に古い大胡火砕流が堆積する一帯や赤城白川沿いの扇状地が続き、勾配もなだらかで遮るものが少ない。一方の東には、山体崩壊で発生した岩屑なだれによってできた流れ山と呼ばれる小丘陵が連なり、起伏に富んだところを見せている。多田山、石山、峰岸山などが流れ山の代表格で、南端は権現山、さらに天神山と伊勢崎市の南部にまで達している。東には、唯一山頂から流れ出す粕川をはじめ、神沢川、桂川、早川、鐺木川など西に比べて河川の多いことも特徴で、流域は水田の比率が高い谷底平野となっている。

しかし南麓は、昭和27年大正用水、さらに昭和43年群馬用水が完成するまでは、長い間水不足に苦しんだ。苦闘の歴史をさかのぼれば、古代の女堀までたどりつくといってもよい。かつては県内を代表する養蚕地帯であったのも、桑に適した地味もあるが、それ以上に水が乏しいからであった。そんな中でも谷地田が広がるのは、堤と呼ばれている大小の溜池の存在が大きい。川のように広い範囲ではないが、溜池は谷地の一つひとつを丹念に潤すには確実な灌漑方法である。効果の程は、数の多さが証明している。2つの用水が完成しても依然として健在で、広い裾野とともに南麓らしい景色の一つである。（第1・2図）。

亀泉坂上遺跡の立地 遺跡は、寺沢川の左岸、標高118m～120mの緩い傾斜の台地上に位置する。広瀬川低地帯までは1kmたらず、長かった裾野も終わりに近く山を抜け出すのにあと一步、里からすればわずかに足を踏み入れたという程度の距離である。台地は偏平、谷地との比高差も少ない。ここを選んだのは、低地帯で洪水に被災したためか、それとも新規に開発を目論んでといったところであろうか。ここならば洪水に遭うことも稀であったろうし、低地帯にも、さらに山へも進出することができる。台地に村を構え、目の前の



第1図 遺跡位置



第2図 地形区分

第2章 遺跡の立地と環境

谷地を耕すのは現在の姿に似ている。最近でこそ、市街地近郊であるため変貌著しいが、寺沢川沿いには依然クヌギやナラの雑木林が続き、かつての農村地帯の趣を残している。

明治11年「上野国郷村帳」勢多郡亀泉村の項によると、明治9年小泉村と中亀村が合併して亀泉村となる。地勢として南は耕地、西北東は山林に連なる。地味は、その色赤黒く砂その質悪くして米麦に適し、水利に時々旱に苦しむ。物産は、米250石、麦154石、繭137貫、生糸8貫、薪625駄。戸数は42戸、人口は199人である。米麦養蚕を生業とする、この地域では一般的な村のひとつである。

遺跡名は、旧大字の亀泉に、小字名のひとつ坂上をつけて命名した。上武道路の遺跡区分は、台地と下流にある谷までをセットにして遺跡の範囲とした。ここでは、同一の台地ながら行政区分が違うことから亀泉町にあたる西半分を亀泉坂上遺跡と呼び、堤町にあたる東半分と谷地までを堤沼上遺跡とした。隣接して萱野遺跡、萱野Ⅱ遺跡、沼西Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡、堤沼下遺跡がある。遺跡の範囲は、調査した内容と周辺での遺物の散布状況からすると、東西は台地の幅一杯、南北は500m以上と推定される（第3図）。

2 周辺の遺跡

赤城山南麓の魅力は、平野に続く緩やかな斜面、そしてなんとといっても広いことである。活火山とはいえ、活動は途絶えたままで、時間の経過とともに落ち着きを増していったのではないだろうか。利根川に面して、地の利としても申し分がない。遺跡の数が証明するように、人、ものが集まる所であったのだろう。

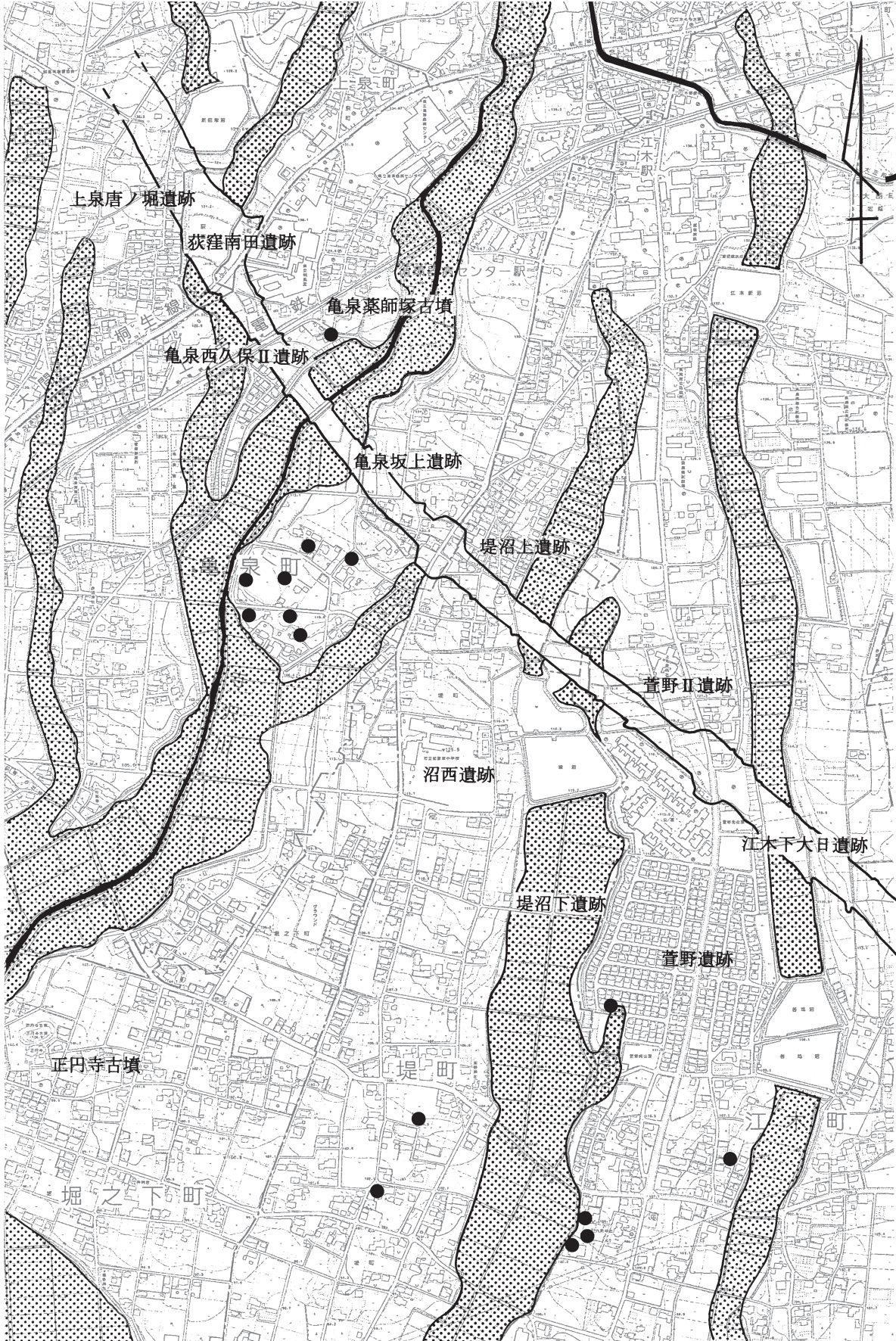
南麓で発掘調査された遺跡は多い。旧石器時代の岩宿遺跡、巨大な用水路女堀、大室の三古墳などを筆頭にして、集落、墳墓、水田や畠などが次々と明らかにされている。そんな中で亀泉坂上遺跡がある荒砥川の西側は、東に比べて発掘調査が少ないといわれてきた。それでも芳賀団地遺跡群のような大集落や、奈良三彩の小壺がポツンと出た檜峯遺跡のような注目すべき例もある。また、この十年あまり、広瀬川低地帯での発見も続いている。その中で関心は、荒砥川の西はどんな様子かである。

亀泉遺跡では、旧石器時代、縄文時代前期、古墳時代前期と後期、平安時代の遺構、そして近世の遺構が検出された。ここでは、遺跡の周辺を時代別に概観し、地域の状況や課題について述べる（第4図）。

旧石器時代

岩宿遺跡の発見から半世紀がたつ。この間、南麓で発見された遺跡は数多く、県内では榛名山麓や鎗木川流域、利根川上流域と並んで研究の進んだ地域である。地域の中核となる拠点集落と、その周辺に小遺跡が散在する遺跡の分布が知られている。伊勢崎市赤堀町下触牛伏遺跡は拠点集落の代表例で、直径50mを超す環状ブロック群が検出されている。桐生市新里町武井遺跡からは、十万点という原石産地以外としては異例ともいえる数の遺物が出土した。石材も種類が多く、さながら中継基地、集積センターの感がある。また、拠点集落ではないが富士見村小暮東新山遺跡では、この時代としては稀な住居跡が発見された。頭無遺跡（1）からは、東北地方との関連を示す湧別技法による細石刃核と荒屋型彫器が相伴していた。冒頭にあげた地の利は、以上の例からも証明できよう。

7工区では、亀泉西久保Ⅱ遺跡（2）を除いた全ての遺跡で遺物が出土した。これまでは二之宮谷地遺跡（3）、荒砥北三木堂遺跡（4）など暗色帯からの出土が多かったが、上層や上泉唐ノ堀遺跡（5）のように3面で出土した遺跡もある。縄文時代並みの遺跡分布といえよう。これが隣接した地域にまで続くのか、それとも通過する箇所だけにすぎないのか、注目するところである。



第3図 周辺遺跡（1）

第2章 遺跡の立地と環境

縄文時代

広い裾野は、格好の舞台となる。遺跡は、前期が馬の背状の丘陵性の台地に多く、中期になると一段高い台地性地帯に移り、水系ごとにまとまりがあると指摘されている（鬼形1996）。

草創期では、隆起線文土器と丸ノミ型石斧が共伴した小島田八日市遺跡（6）がある。早期とともに遺跡の少ない時期ではあるが、利根川沿いに集中することが分かってきた。やや離れてはいるが前橋台地上の徳丸仲田遺跡もそのひとつで、近くでは荒砥北三木堂遺跡（4）の無文土器がある。

遺跡の数が最も多いのは前期である。後半の集落が今井道上Ⅱ遺跡（7）、江木下大日遺跡（8）など7工区の遺跡、芳賀北部団地遺跡（9）など、5～10軒規模で点在している。わずかではあるが時期のちがうところを見れば、台地間を移動しながら生活したのであろう。今後も追加が期待できる時期である。

もう一つのピークが中期である。上ノ山遺跡（10）は40軒を越す集落が、五代伊勢宮遺跡（11）では稀少な中期前半の土坑群が注目である。ほかにも旧大胡町内には見るべき資料が多い。後期は、芳賀西部団地遺跡（12）がある。しかし、晩期まで遺跡の数は大きく減少する。西新井遺跡（13）は、表採資料ではあるが広瀬川低地帯にある。荒砥川の沖積地とされていた所で中期後半の集落が検出された今井白山遺跡（14）の例もあり、次の時代を考えると台地上だけでなく広瀬川低地帯にも目をむける必要がある。

弥生時代

遺跡の少ないのが最大の特徴である。荒口前原遺跡（15）では、中期後半の竜見町式と山草花式が共伴している。導入は県の西部と大差ないが、東西地域のはざまに入ってしまうのか後続がない。小規模な遺跡がわずかに点在する程度である。関心は、この時代低地帯を利用していたのかである。

集落形成の動きは、後期も後半からである。富田東原遺跡（16）、荒砥上ノ坊遺跡（17）などでそれぞれ数軒の住居跡や方形周溝墓が検出されている。7工区でも富田西原遺跡（18）で住居跡6軒が検出されて貴重な一例となった。このほかにも遺跡の数は、これまでに比べれば格段に増加している。確実な歩みといえるが、加速されるのは樽式中枢域の周縁に広く分布する赤井戸式と呼ぶ終末期になってからである。このように南麓地域では、後期の集落が欠落し、中期および終末期には外来的要素の強いことが特徴である。また、後期の稀薄さが逆に古墳時代の導入・展開を容易にしたという見方もある。

古墳時代

芳賀東部団地遺跡（19）は、前期と中期で73軒、開発の初期段階としては、順当な滑り出しといえよう。継続性もあり、地域の動向を占うこともできる。この初期段階は、川に面するか近いことが必須条件のようで、芳賀団地遺跡群が藤沢川沿いにあるように、寺沢川沿いで堤沼上遺跡（20）、大泉坊川沿いで富田西原遺跡、富田高石遺跡（21）が見られる。ただし、上流部に向かったの動きはにぶく標高150m付近が遺跡分布の限界のようで、可耕地の多い広瀬川低地帯とのつながりが強いからではないだろうか。

その低地帯への進出は、石関西梁瀬遺跡（22）、石関西田Ⅱ遺跡（23）で5世紀代の様子が知られており、野中天神遺跡（24）でもその可能性が示唆されている。筑井八日市遺跡（25）の豪族居館は、低地帯を一望でき進出のための拠点であろうか。また、下流の下増田越渡遺跡（26）、常木遺跡（27）では、水田に方形周溝墓も検出されている。さらに、最新の資料では現利根川に近い田口下田尻遺跡で4世紀代の集落が検出され、これまでの見解をかえる成果として注目を集めている。中間での空白の場所を埋める日も近いであろう。弥生時代ははまだ可能性にとどまるが、桃ノ木川沿いに点々と連なる島状の微高地に住まいを構え、河

道沿いに開田していた可能性がいよいよ高くなってきた。

開発が本格化するのは6世紀代、古墳がその象徴で東の大室古墳群と連動するものであろう。まずは6世紀前半、寺沢川との合流点を臨む台地上に初めてともいえる大型の前方後円墳正円寺古墳(28)が作られ、次いで後半に低地帯の中に桂萱大塚(29)、台地上にはオブ塚(30)と続く。これらは牽引役、開発は軌道にのったとみるべきであろう。7世紀になると、大日塚(31)、新田塚古墳(32)が続く。周辺には集落とともに、10~20基前後で群集墳が点在している。終末期古墳は、数の少なさから地域の有力者に限られるといわれるが、堀越古墳(33)と至近距離に萱野Ⅱ遺跡1号墳(34)がある。

上毛古墳総覧によると、古墳の数は荒砥川の西にある桂萱村79基、芳賀村64基、南橋村45基、木瀬村19基である。これに富士見村の29基をたしても365基という荒砥川の半分ほどであるが、低地帯沿いには村が出揃ったというところであろう。低地帯で基盤となる力を蓄え、川を遡上するように山に分け入る。これが、この時代の地域の姿である。

古代

南麓は、勢多郡として整備された。「和名抄」の勢多郡の項には、深田、田邑、芳賀、桂萱、真壁、深渠、深澤、時澤、藤澤の9郷がある。その位置は、全てではないにしても古墳時代の様子から荒砥地区、およびその周辺と考えるのが妥当であろう。現在のところ、二之宮洗橋遺跡(35)で「芳郷」の墨書土器が出土したことから、二之宮の付近に芳賀郷が推定されている。

発見当時は勢多郡衙と推定され、現在は寺院跡とみられているのが上西原遺跡(36)である。その内容は、佐位郡衙とされた国史跡十三宝塚遺跡と類似し、掘立柱建物群、柵で方形に囲まれた基壇建物などが検出され、「勢」と刻印のある国分寺系瓦や塑像、奈良三彩、銅製飾金具などが出土している。郡衙、寺院のいずれにしても造立者や占地の意味を考えると、地域にとって魅力のある遺跡であることにかわりない。

今井道上道下遺跡にある柵で囲まれた方形区画(37)は、富豪層の居館ではないかと考えられている(神谷2004)。区画の南には、あづま道(38)と呼ばれる幹道が東西に通過しており、立地としても妥当な見解である。周辺では、先の「芳郷」墨書のほかに荒砥洗橋遺跡(39)から「大郷長」の墨書土器や「大」の焼印、荒子小学校遺跡(40)からは「識」の銅印が出土している。これらは先の寺院や居館との関連と思われるが、焼印は官衙的な様相をもつ堀越中道遺跡(41)からも出土している。また、茂木山神Ⅱ遺跡(42)では、山ノ上碑の大胡臣を連想させる墨書「大兒万財」が出土している。ポツンと出たのは檜峯遺跡(43)の奈良三彩の小壺だけでない。皇朝十二銭も富田宮下遺跡(44)、富田下大日Ⅲ遺跡(45)で出土している。いずれも数ある集落のひとつにすぎないが、開発の拠点や有力者のいたことを示し、郷の所在を考える手がかりともなる。

弘仁九年(818)、南麓を地震が襲った。類聚国史には、山崩れが多く発生し土砂が谷を埋め、これにより圧死者が多く出たとある。発掘調査では地割れ、噴砂、洪水など被災内容が明らかになってきた。荒砥川沿いにある上ノ山遺跡(10)では大規模な地割れの跡、今井白山遺跡(14)では噴砂、中宮関遺跡(46)、中原遺跡群(47)では洪水砂で埋没した水田が検出されている。

地震後も、水田は山に入った谷地はもちろんのこと、低地帯でも桃の木川沿いに増えている。茶木田遺跡(48)や筑井中屋敷遺跡(49)は、そこに点在していた村のひとつである。6世紀以降、点々としながらも継続した様子を描くことも可能のようだ。また、一方では農業分野以外も見逃すことができない。八ヶ峰生産址(50)は、主体が製炭と製鉄で8世紀の一時期須恵器を焼いている。富田漆田遺跡(51)では9世紀~

第2章 遺跡の立地と環境

10世紀の須恵器窯が6基検出されている。集落内で消費する小規模な生産の跡は、上西原遺跡（36）にも類例がある。

中世

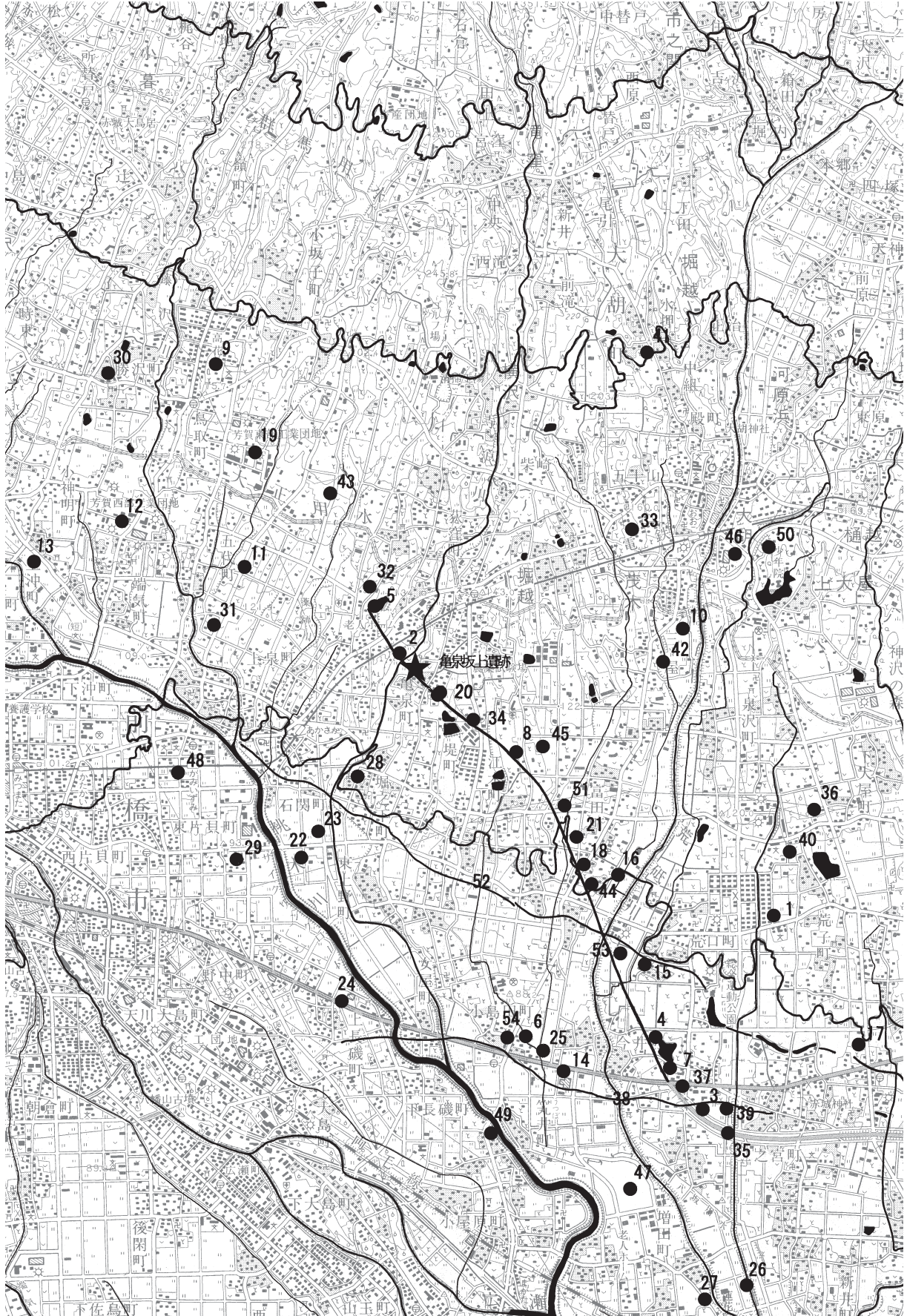
天仁元年（1108）浅間山の噴火は、左大臣藤原宗忠の日記「中右記」によれば上野国内壊滅とある。発掘された水田や畠に復旧された跡はなく、一時は途方に暮れたことであろう。この中で南麓に台頭したのが秀郷流武士団である。そのひとり大胡氏は、重俊を祖とし、「吾妻鏡」に大胡太郎、五郎などの名で記録され、「平家物語」「平治物語」にも登場する。「法然上人行状絵伝」には、大胡隆義とその子実秀が小屋原の蓮性を介して法然に帰依したとある。活躍は12世紀からおよそ14世紀のころ、噴火後の復興や女堀（52）の開削と重なる。実態を解明したい、南麓の要となる一族である。基盤は、荒砥川流域から広瀬川低地帯に及ぶ一帯と考えられている。長楽寺文書、彦部文書には、建武二年（1335）六月十九日付の国宣「上野国大胡郷内野中村」、応安六年（1373）六月二十日付の大胡治部少輔秀重の請文「大胡郷三俣村」「堰口村」、応安六年（1373）六月二十日付の沙弥道喜の請文「大胡郷三俣村」、康暦三年（1381）四月五日付の藤原政宗の沽券「大胡郷三俣神塚村」など、広瀬川低地帯でなじみのある地名が並んでいる。

女堀は、前橋市上泉町から伊勢崎市西国定まで延長約13km、未完の用水路である（52）。掘削年代は、荒砥前田Ⅱ遺跡（53）で堤の盛り土下で柏川テフラが検出されたことから、1128年からそう遠くない時期であることが判明した。これで、浅間山噴火後の復興事業という見解もますます有力になってきた。完成していれば、それこそ一大事、大正用水や群馬用水のような効果があったことだろう。

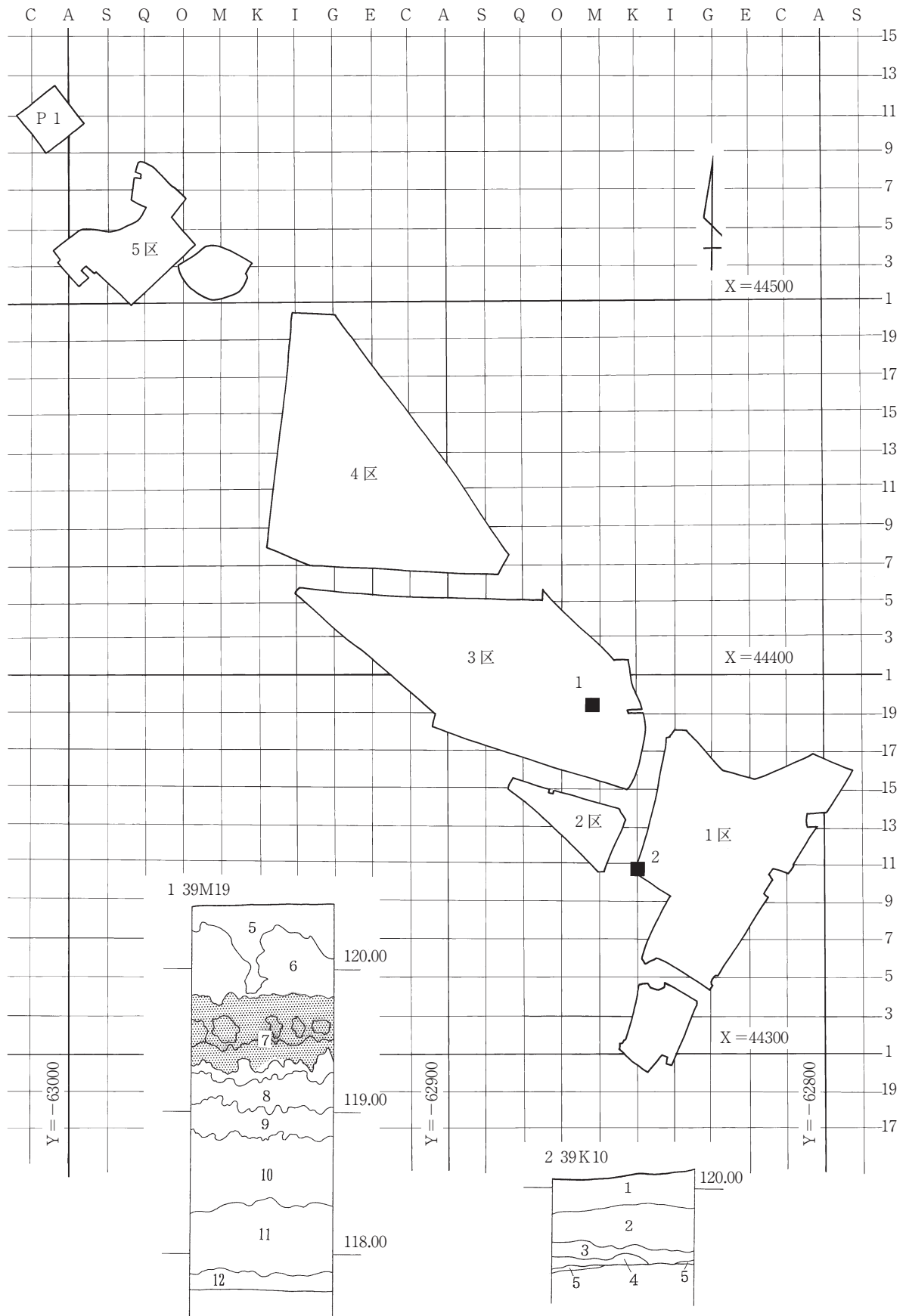
前橋市小島田町大門（54）には、阿弥陀像を彫った異形板碑がある。橋清重が、息子のために仁治元年（1240）に建立した供養碑である。頂部が三角で初期の板碑説もあるが、将棋の駒のように厚く安山岩が使われている。同形のものが亀泉坂上遺跡の周辺にも数基ある。時代もややくだり、浄土教の普及によるものだろう。また、近くでは富田東原遺跡の古墓群（16）が知られている。

参考文献

- 「上野国郡村誌2 勢多郡（2）」1978 群馬県文化事業振興会
勢多郡誌編纂委員会「勢多郡誌」1958 前橋市誌編纂委員会「前橋市史 第1巻」1971
群馬県「群馬県史通史編1 原始古代1」1990 「群馬県史通史編2 原始古代2」1991
柏川村教育委員会「柏川村の遺跡―遺跡詳細分布調査報告書―」1985 群馬県勢多郡柏川村教育委員会
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団「群馬県遺跡大事典」1999「群馬の遺跡1～9」2005・2006
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団「今井道上Ⅱ遺跡」2006「富田漆田遺跡 富田下大日遺跡」2006 「富田細田遺跡・富田宮下遺跡」2006 「江木下大日遺跡」2006「萱野Ⅱ遺跡」2007 「堤沼上遺跡」2008
新里村教育委員会「赤城山麓の歴史地震 弘仁九年に発生した地震とその災害」1991
群馬県教育委員会、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団「地域をつなぐ 未来へつなぐ」1995
小菅将夫「赤城山麓の三万年前のムラ」2006 新泉社
鬼形芳夫「赤城山麓における縄文文化の展開」「群馬県史研究」21 1985 群馬県史編さん委員会
小林 修「赤城山西南麓の後期首長墓の展開」「群馬考古学手帳」12 2002 群馬土器観の会
神谷佳明「古代上野における富豪層について」「研究紀要」22 2004財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
近藤義雄「金沢文庫本「念仏往生伝」成立の背景」「信濃」30巻5号 1978



第4図 周辺遺跡(2)



第5図 基本土層、グリッド配置図

第3章 発掘調査の方法と経過

1 発掘調査の方法

(1) 調査区・グリッドの設定

調査区は、現道や水路で仕切られた区画ごとに、東から1区～5区と付けた。国土交通省による区画番号とは、1区=71、72、2区=73、3区=74、4区=75、5区=76と対応する。

グリッドは、国家座標第IX系（日本測地系）を用いて5mを基準に設定した。これは上武道路調査予定地の統一仕様で、1000m四方で大区画、その中を100m四方で中区画とし、さらに中区画をX軸に5mごとに南から1～20、Y軸に5mごとに東から西にA～Tをつけて小区画に細分したものに当たる。グリッド名称は、南東隅のグリッド杭名で表し、位置を特定するには、一例で7大区39A1とした。これを国家座標系であらわせれば、X=44300、Y=-62800となる（第5図）。

このグリッド表記は、遺構図の作成をはじめ、遺物の取り上げや注記など、諸作業で使用した。ただし、大区画は諸記録の管理登録上の扱いで、実際には省略した。これに代わるものとしてI期工事区にならない遺跡略称「JK」49を使用した。Jは上武、Kは国道の略である。

水準点は、1区が120.00m、2区が120.60m、3区が121.30m、4区が121.00m、118.80m、5区が115.00mである。1区から5区は台地であるが、5区の一部に川沿いの低地がある。3区と4区の境あたりが最高点で、以下東西へわずかに下る地形である。調査対象面積は、13,330.8m²である。

(2) 基本土層と遺構確認

調査に入る前は、水田は5区の寺沢川沿いだけで、しかも大半は土地改良で造成されたものである。残りは畑地として耕作され、その中に宅地が点在していた。戦後の食糧増産を機に開墾され、宅地化が進むのは昭和30年代、前橋市立桂萱東小学校が開校してからである。全体図では省略した攪乱の多くは、屋敷の境界や建物の跡である。また、土地改良による切土・盛土は、宅地を除いて全域で行われている。

1層 暗褐色砂質土 細粒、均質、密、表土および耕作土、厚さ10～40cmで安定した状態

2層 浅間B軽石混入黒褐色砂質土 細粒、均質、密、

3層 浅間C軽石混入黒褐色砂質土 細粒、均質、密、厚さ35～45cm

4層 暗～黒褐色砂質土 細粒、均質、密、厚さ20～35cm

5層 にぶい黄褐色砂質土 細粒、密、ローム漸移層

6層 黄褐色ローム 浅間大窪沢軽石（As-Ok）混入

7層 As-BPグループ スコリアと下位に室田パミス相当の粘質土からなる

8層 暗色帯上位

9層 暗色帯下位

10層 褐色ローム 北橋スコリアを含まない

11層 褐色ローム 北橋スコリアを含む

12層 暗褐色ローム

第3章 発掘調査の方法と経過

2層は、台地上でも厚さ10cm前後で堆積していたらしいが耕作で攪拌され、その後の宅地造成で削平されている。1区と5区の低地など、ごく限られた所にだけ残されている。そのため台地の中央部では、1層が3層の上に直接堆積するような状態である。浅間B軽石層は、古墳時代の住居跡や溝の覆土、谷地などこれも限られた範囲にだけ見られた。また、アッシュを残している所が多かった。3層は、台地上広く、安定して堆積する土層で、重機による掘削、その後の遺構の確認作業の目安とした。厚い所では、黒色の強い上層と暗褐色の下層とに分けることができる。4層とともに住居跡をはじめとした遺構の覆土でもある。4層には5層が斑状に混入している。谷地では50cm以上の厚さを持つが、台地上では10cm前後で意外と薄い。5層は、ローム漸移層である。台地の中央では薄く、縁辺になって厚くなる。重機による表土等の掘削は4層の上面まで行い、遺構確認はその後4層の上面で行った。

5区の谷地では、浅間B軽石層が厚さ10cm前後の純層で見られた。安定した状態である。上面までは重機で掘削し、遺構確認面とした。基盤層は、卵大～拳大の円礫を多く含んでいる。水田面から基盤層の間は、黒褐色砂質土が堆積している。プラント・オパール分析では、高い数値が得られたが遺構は検出していない。

(3) 遺構・遺物の記録

調査にあたっては、図面・写真および調査のメモを記録した。遺構の図化は、前記のグリッドを使い、平面、遺物出土状態、断面をともに1:20、1:40を基本として個別に作成した。遺構図の総枚数は、A2サイズで490枚である。平板測量と電子平板測量を併用し、その業務は断面を除き測量会社に委託した。断面は、調査員と調査作業員が作成した。土層の観察は、各担当者の観察による。土層の色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」による。

遺構写真は、土層の堆積状態、遺物出土状態、完掘を基本にして、35ミリモノクロフィルムとカラーフィルムおよびブローニーモノクロフィルムを用いて担当が地上撮影をした。総数は、35ミリモノクロが155本、ブローニーが128本である。各区の全景は、高所作業車とラジコンヘリで上空から撮影し、ラジコンヘリによる撮影は測量会社に業務を委託した。

2 調査の経過

亀泉坂上遺跡の調査は、中断をはさみ平成14年度、15年度、16年度の3ヶ年にわたり、のべ13箇月をかけて行われた。荒砥川の東では本線の工事がはじまり、7-2工区でも仮称亀泉高架橋の着工が調整会議で話題になり出した頃である。調査は、開始から亀泉坂上遺跡1区とあわせて行い、15年度は工事用の仮設道路確保に追われて亀泉坂上遺跡との間を往復し、当初の予定を大幅に変更しての対応となった。最後の16年度は、残った旧石器調査と解決した未収地の調査を行った。調査経過は次の通りである。

平成14年度 平成14年12月1日～平成15年3月31日

1区のうち用地が買収された範囲を対象とした。面積は2,242m²、水路で2つに分割されている。As-B下、縄文時代の遺構確認を目的としたローム漸移層面、その下層での旧石器の確認調査と都合3面での調査を行い、掘立柱建物跡1棟、溝1条、道5条、縄文包含層を検出することができた。また、遺構ではないが堤沼上遺跡との境界である市道付近は、南北方向の埋没谷であることが明らかとなる。

この間、2月4日、前橋市立荒砥中学校生9名の職場体験学習、2月21日とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財調査センター職員の視察が行われた。また、発掘調査中は、通学路の市道に面して掲示板を設置し、地元の方々に情報を提供した。なお、遺跡掘削工事の業務委託はこの年から始まり、株式会社シン技術コンサルが荒砥前田Ⅱ遺跡に引き続いて受託した。調査の概要は、事業団「年報」22に掲載している。

平成15年度 平成15年5月1日～平成16年1月31日

2～5区の11,088.8㎡が対象である。年度当初の計画では、4月からは通年で上泉唐ノ堀遺跡を調査することになっていたが、仮称亀泉高架橋の工事専用道路を作るため急きょ予定を変更して対応したものである。該当するのは萱野Ⅱ遺跡から寺沢川畔まで、路線の南半分を先行し、その後全域を終了させるというのが新たな計画であった。5月から8月までと翌年1月から3月までは、上記の事情で堤沼上遺跡を調査している。遺跡掘削工事の業務委託は、須賀工業株式会社が受託した。

4月 上泉唐ノ堀遺跡を当初の予定のとおり調査する間で、事務所の設営と表土掘削をした。

5月 7日から6月5日まで、5区の側道の一部を調査した。縄文時代前期の住居跡2軒、土坑22基、ピットが狭い中に重複している。集落でも中心と見られるが、調査範囲は側道だけに限定されている上に土地改良による切土が激しく、遺構の残り方としては床が露呈するような状態であった。上毛古墳綜覧漏れの古墳1基も検出されている。調査範囲を南に拡張したが、ここも土地改良により床面まで破壊されていた。山寄せ、南開口の横穴式石室であることが明らかとなり、耳環をはじめ、大刀、鉄鏃が出土した。耳環は、県内でも稀な中空タイプで注目である。以後、8月下旬までは堤沼上遺跡を調査する。

8月 22日、1区と2区の表土掘削から作業を開始する。1区では、前年度調査した道の延長のほか7条が追加され、さらに住居跡2軒、溝3条、土器集中1箇所を検出した。道は、A s - B下だけではなく、さらに下層のA s - C混入黒褐色砂質土の中と2面あることが明らかとなる。29日、3区の表土掘削を開始する。

9月 3日、1区、2区の全景を撮影する。終了後、グリッドを設定して、旧石器の確認調査を1区で4箇所、2区で2箇所行う。グリッドは、縦2m、横5mの範囲で深さ2mまでか暗色帯の下位までを調査の内容とした。一部は、暗色帯の下、八崎軽石層まで掘り下げた所もある。面積は、調査対象の4パーセントが目安である。なお、土層の記録は、北面、東面2面を基本として断面図を作成した。

その後、調査の中心は3区に移る。15軒の住居跡の調査が本格化し、土坑15基、溝6条、畠1箇所、掘立柱建物跡2棟が検出されている。住居跡は重複が少なく、しかも掘り方の深いものが大半である。7号、12号のように一辺が7mを超す大型のものや新旧2基のカマドがある8号、17号といったような、特徴をあげることができる。2日には、国土交通省の視察、24日には調査工程会議がそれぞれ行われた。

10月 調査の主体は、3区そして4区に移る。7日には、3区の全景をラジコンヘリで上空から撮影した。終了後は、住居跡の精査から掘り方へと進む。17号住居跡の貯蔵穴からは、殻付きのイネ朶が甕に入って出土している（第5章参照）。イネ朶の保管方法を知るヒントとなる。8日からは、旧石器の確認調査を開始する。グリッドは10基設定し、仕様は先述の1区、2区と同じである。23日には、4区で表土掘削がはじまり、ただちに遺構確認、精査の作業に入る。住居跡は3軒、ほかに土坑19基、溝3条を検出する。土地改良による削平が予想外に深く、折角の住居跡も床面まで10cm足らずといったところで、土坑とした中には削平をまぬがれた貯蔵穴が4基もある。22号住居跡は、古墳時代前期の焼失住居である。炭化材の樹種分析では、クヌギが大半を占めていることが明らかとなる。なお、30日からは、11月末日までの予定で旧石器調

第3章 発掘調査の方法と経過

査を促進する目的で職員2名、作業員14名の増員がある。

11月 3区、4区を中心に作業する。12日には、4区の全景をラジコンヘリで上空から撮影する。終了後、住居跡の精査から掘り方調査を、さらに4区の旧石器確認調査を行う。グリッドは19基を設定し、仕様は1区と同様である。うち、1箇所の浅間大窪沢軽石層から石器が出土した。直ちに本調査を行い、黒曜石269点が出土し、礫群1基が検出されている。3区では、ローム層上面で縄文時代の土坑、ピットを調査している。この間では、国土交通省の視察、山梨県自治会協議会の見学、群馬大学附属中学校生3名の総合学習「遺跡発掘体験」が行われた。また、25日からは、早くも工事専用道路の工事が開始されている。また、6日から19日は、用地が解決した亀泉西久保Ⅱ遺跡の東側道を調査している。

12月 3区では縄文面、4区では住居跡の掘り方調査を継続し、旧石器の調査範囲をさらに拡張して行う。4区では、ローム層の上面では確認できなかった土坑が10基あまり検出されている。

1月 4区で旧石器の調査を中心に作業する。範囲を拡張するとともに、浅間大窪沢層よりも下位まで調査する。礫群1基が新たに検出される。27日、遺物の取り上げ、埋め戻しをして調査を完了する。

調査中は、前年度と同様に広報目的で「堤沼上・亀泉坂上遺跡だより」1～15号を発行し、これまでと同様に市道に面して掲示するとともに地元希望者には配布した。調査の概要は、事業団「年報」23に掲載している。

平成16年度 平成16年5月1日～平成16年6月30日

3区に残っていた未収地と5区の構造物P1、A1の調査をする。3区では、7号、11号、18号の各住居跡を完掘し、旧石器の確認調査を3基で行うが遺物の出土はなかった。5区では、1号古墳の周堀、縄文時代の住居跡3軒、土坑21基を検出した。30日には全景撮影、記録作成の後、埋め戻して作業を終了した。この間、5月15日、足利工業大学長尾昌朋助教以下学生41名、地元自治会の見学があった。調査の概要は、事業団「年報」24に掲載している。

以上で出土した遺物数量は、64×42×15cmの遺物収納箱で45箱である。

3 整理作業の方法

整理は、平成19年4月から同20年3月までの1年間の予定で行った。

(1) 遺物整理

遺物総数は、前記のように収納箱45箱である。遺構ごとに分けた後、まず土器の接合を行った。次に復元・彩色し、写真撮影を経て、器械実測により素図を作成の後、それをもとに実測図を作成した。実測した遺物は、土器・土製品417点、石器・石製品190点、金属製品18点のあわせて625点である。掲載を断念した遺物は、出土した遺構・グリッドごとに種類・器種を分類し、集計をした。

金属製品は、当事業団保存処理室でレントゲン撮影をして、残存状態を確認の上、クリーニングを行った。

(2) 遺構図・遺構写真整理

遺構図は、全てに通番をつけて台帳を作成した。平面図と断面図は、照合・修正の上トレースをした。さらに報告書印刷原稿として版下作成をして編集した。遺構写真は、ネガに通番をつけ台帳、ネガ検索台紙を作成した。この中から報告書に掲載した写真を選択し、印刷原稿を作成した。

第4章 検出された遺構と遺物

第1節 概要

亀泉坂上遺跡は、旧石器時代から平安時代までの複合遺跡である。検出した遺構は、竪穴住居跡27軒、掘立柱建物跡3棟、土坑85基、溝15条、道8条、ピット45基、古墳1基、畠2箇所、水田1箇所、土器集中1箇所である。旧石器時代は、上武道路・旧石器時代遺跡群（2）として別途報告するが浅間一大窪沢軽石で黒曜石を主とした269点のほか、暗色帯など複数の箇所から数点ずつが出土している。

遺構の時代別の内訳としては、次のとおりである。

縄文時代前期 竪穴住居跡6軒、土坑73基、ピット45基

古墳時代前期 竪穴住居跡10軒、土坑2基、土器集中1箇所

古墳時代後期 竪穴住居跡11軒、掘立柱建物跡3棟、土坑10基、古墳1基、畠1箇所

平安時代 溝3条、道11条、水田1箇所

近世 溝10条、道1条、畑1箇所

遺物は、収納箱にして45箱が出土した。

第2節 縄文時代の遺構と遺物

1 概要

縄文時代の遺構は、1区～5区で検出されている。時期は、黒浜式と諸磯b式から同c式である。1区は、土坑1基とローム漸移層前後での遺物包含層が検出されている。遺構の数が増すのは3区からで、土坑13基とピット42基が検出されている。4区は、竪穴住居跡1軒と土坑15基、ピット3基が、そして川に近い5区になると住居跡5軒と土坑44基というように、集落らしき様相となる。遺物の中には、黒浜式以前のもの、さらに諸磯a式もあることから時期ごとに地点を変え継続する集落と見られる。

住居跡は、長方形と方形の2つのタイプがある。重複関係は、長方形が古く、方形が新しい。主柱穴は、4本、中央部付近に炉を備え、6軒中、2軒で深鉢が埋設されている。25号住居跡は、建て替えをしており、少なくとも2時期以上にわたる集落であることがわかる。

土坑は、73基が検出されている。その中には、直径1m前後の円形で袋状の断面となるものが多い。住居跡の周囲に集中するだけでなく、2号住居跡のように廃屋に重複していることも特徴である。遺物を伴うものは少ないが、住居跡の周囲にあるところを見れば用途は貯蔵用であるのだろう。その中には、長方形で一段と深いものがあり、形状から見て落とし穴である。また、10号土坑は、粘土か鉄分の凝集層である鬼板を目的とした採掘坑と見られる。土坑の中では、稀な一例である。このほかに3区、4区では、多数のピットが検出されている。土坑よりも小型のものをさし、直径は30cm前後の大きさである。断面は、円筒形をした深いものが大半で、掘立柱建物跡の柱穴に比定してみたが断定できたものはない。

2 竪穴住居跡

1号住居跡（第6～8図 PL5・50）

位置 5区 60PQ-6・7グリッド、西側は、20mあまりで川沿いの低地となる。当時とすれば、台地の中でも最も川に近く、低地との比高差は3mである。遺構の密度からすると、集落の中心部と見られる。

重複関係 2号住居跡、19号～21号土坑よりも古い。

形状 長方形。本来は良好な遺存状態であったと思われるが、土地改良により床面の近くまで削平され、床面の一部は露呈するような状態である。そのためにプランが確定できたのは北東隅の一箇所だけで、南東と南西の両方の隅は周囲の状況からの推定である。残る北西隅は、2号住居跡が重複していて不明である。

規模 長軸4.50m、短軸3.20m、壁高15cm **面積** 14.40m² **主軸方位** N95° E

覆土 床上に、9層としたローム粒が混入する褐色砂質土が薄く残るだけである。自然堆積と見られる。

炉 検出した範囲に該当するものはなく、2号住居跡との重複で削平されたものと見られる。

柱穴 4本支柱穴である。長軸・短軸・深さは、P1が28・18・56cm、P2が28・22・58cm、P3が27・22・36cm、P4が31・25・36cmである。柱間は、P1とP2が200cm、P2とP3が313cm、P3とP4が125cm、P4とP1が295cmである。2号住居跡の柱穴とは、覆土などで明確に区別できたわけではなく、2軒を一括に調査している。北西は、P4をあてたが柱間から見ると2号住居跡のP7も可能性がある。

周溝 なし

床面 ローム層まで掘り下げ、平坦にしている。特に硬化した面はない。

遺物と出土状況 遺物は、1号・2号住居跡として一括で取り上げられ区別することができない。特定できたのは少量で、1～3はその数少ないうちのひとつである。いずれも、覆土からの取り上げである。区別が難しいにしても、本来遺物は少なかったと見られる。非掲載も、深鉢の細片6点だけである。

所見 縄文時代前期、諸磯b式から同c式期の住居跡である。

2号住居跡（第6～10図 PL5・50・51）

位置 5区 60PQ-6・7グリッド、立地は、1号住居跡と同じである。川寄りの台地際に数軒の住居跡が重複しながら並んでいる、という位置関係である。

重複関係 1号住居跡のほかに、7基の土坑が重複している。1号住居跡、10号、16号土坑よりは新しく、9号、19号～22号土坑よりは古い。

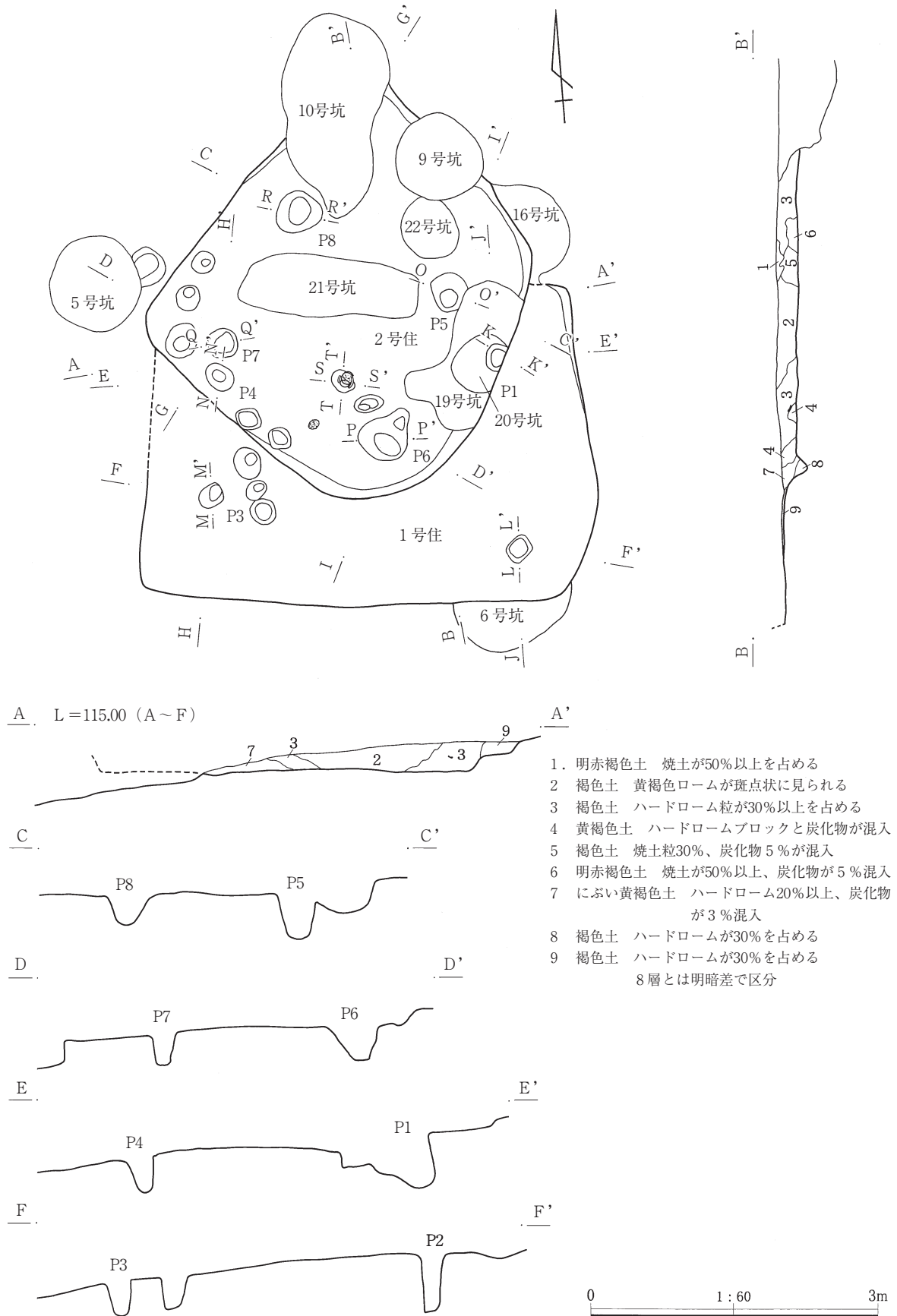
形状 方形。北東と南東の両方の隅が丸い。これに対して西側と南側は、直線で図示したがあくまでも推定である。柱穴との位置関係からすると、さらに50cm以上広がり東側と同じように弧状となってふくらんでいた可能性の方が強い。時期的にも、全体を隅丸方形と見た方が妥当である。

規模 長軸3.60m、短軸3.45m、壁高32cm **面積** 12.42m² **主軸方位** 西壁でN44° E

覆土 8層に分けた。住居跡の中央部は、ローム粒を含む2層、3層の褐色砂質土が占めている。自然堆積と見られるが、炉との関係もあって焼土や炭を混入した土層が多い。

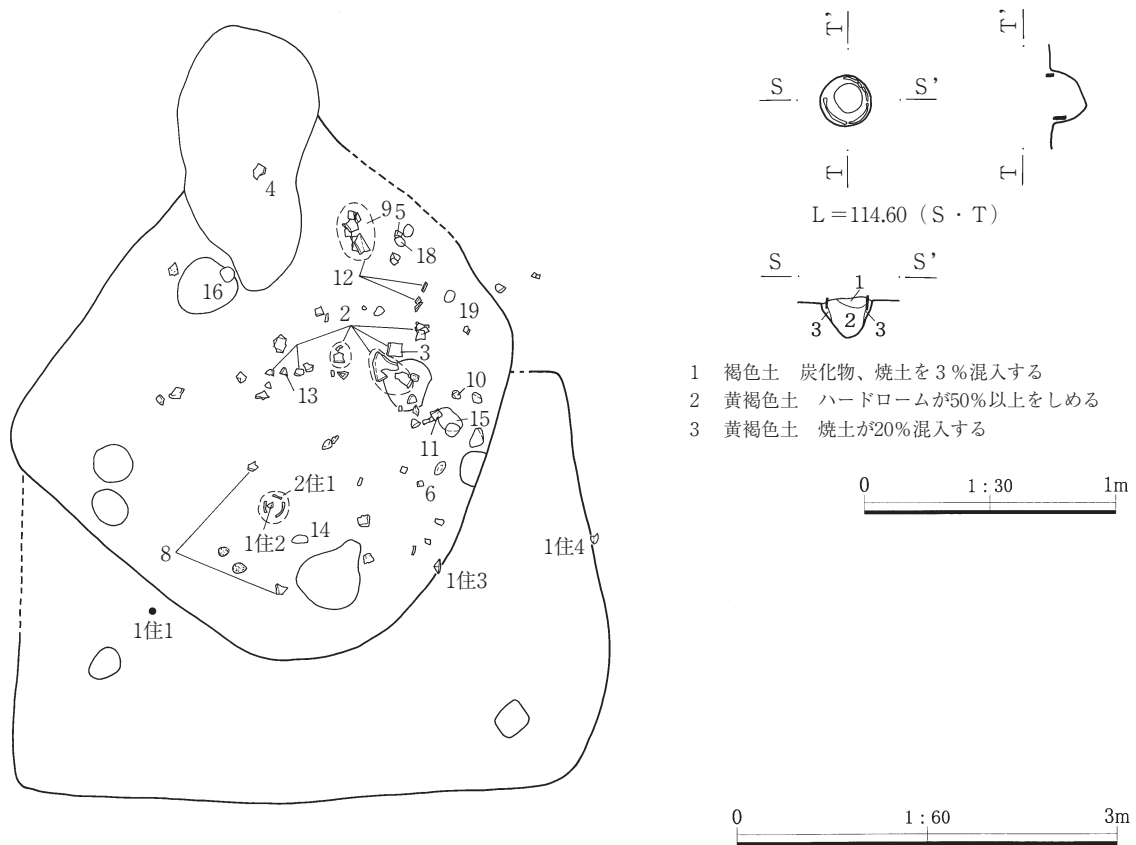
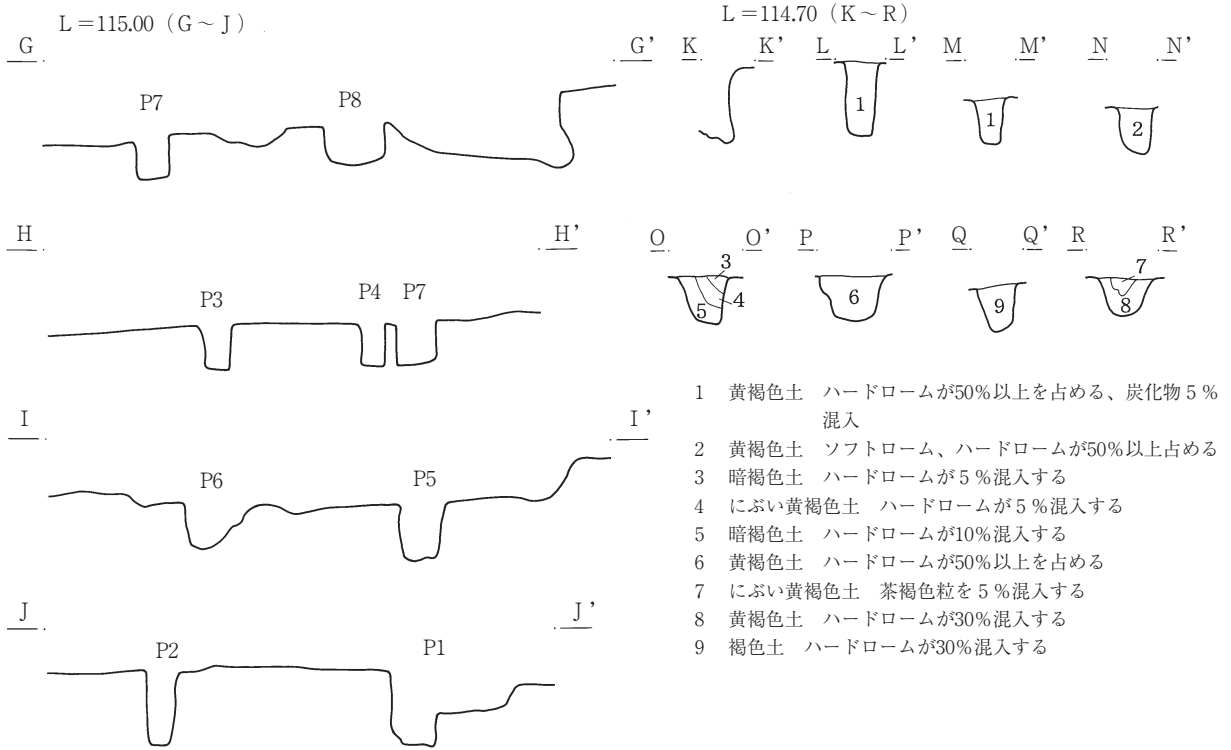
炉 中央部からは外れて、南東隅に寄った所に深鉢を埋設している。深鉢は、上下を欠損していて輪切りにしたような胴部を転用したもので、長期に使用した結果であるのか内面は剥落し、全体が脆い上に褐色から白くなるまで変色している。

柱穴 4本支柱穴である。長軸・短軸・深さは、P5が40・35・40cm、P6が60・50・35cm、P7が27・



第6図 1・2号住居跡遺構図(1)

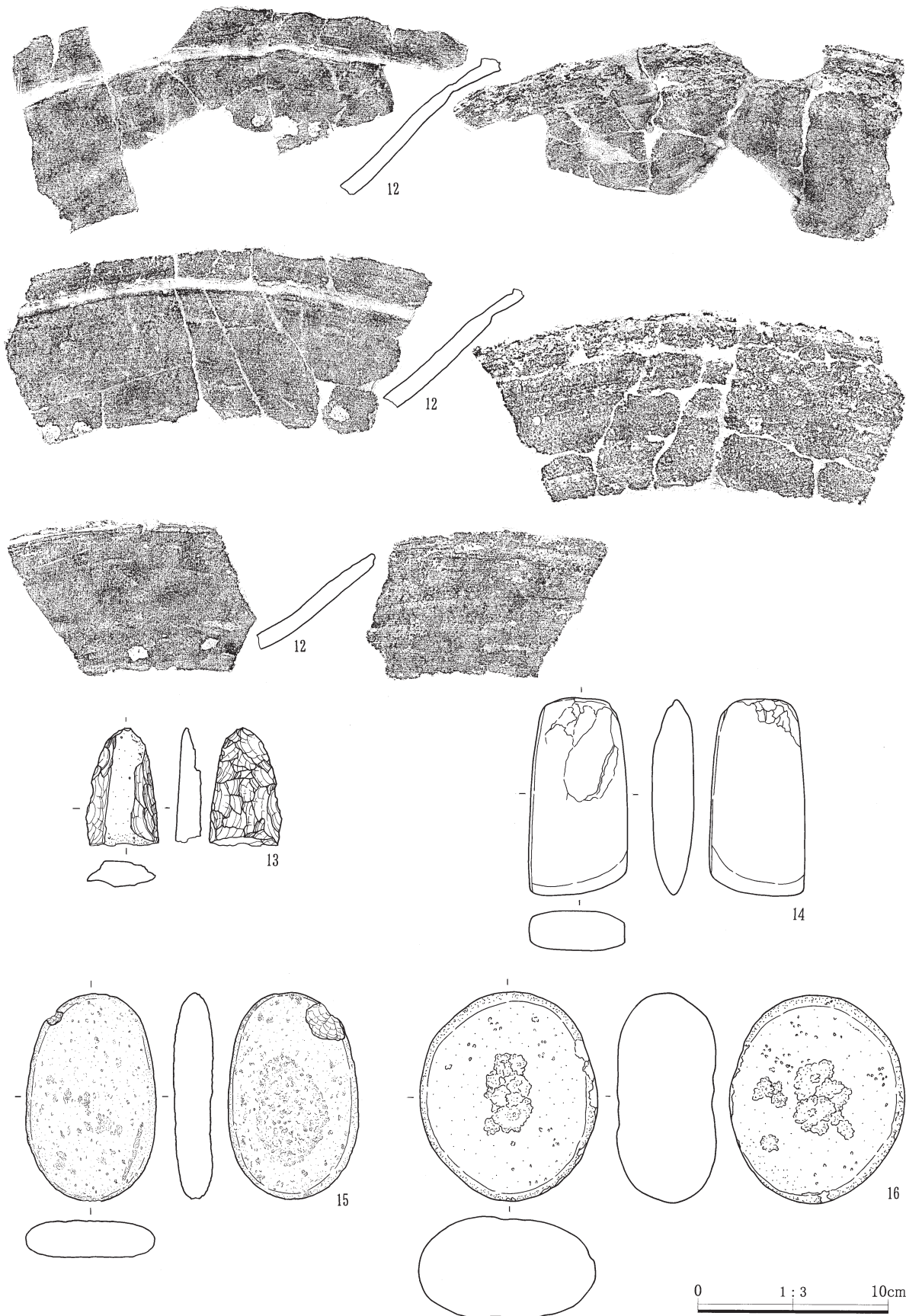
第4章 検出された遺構と遺物



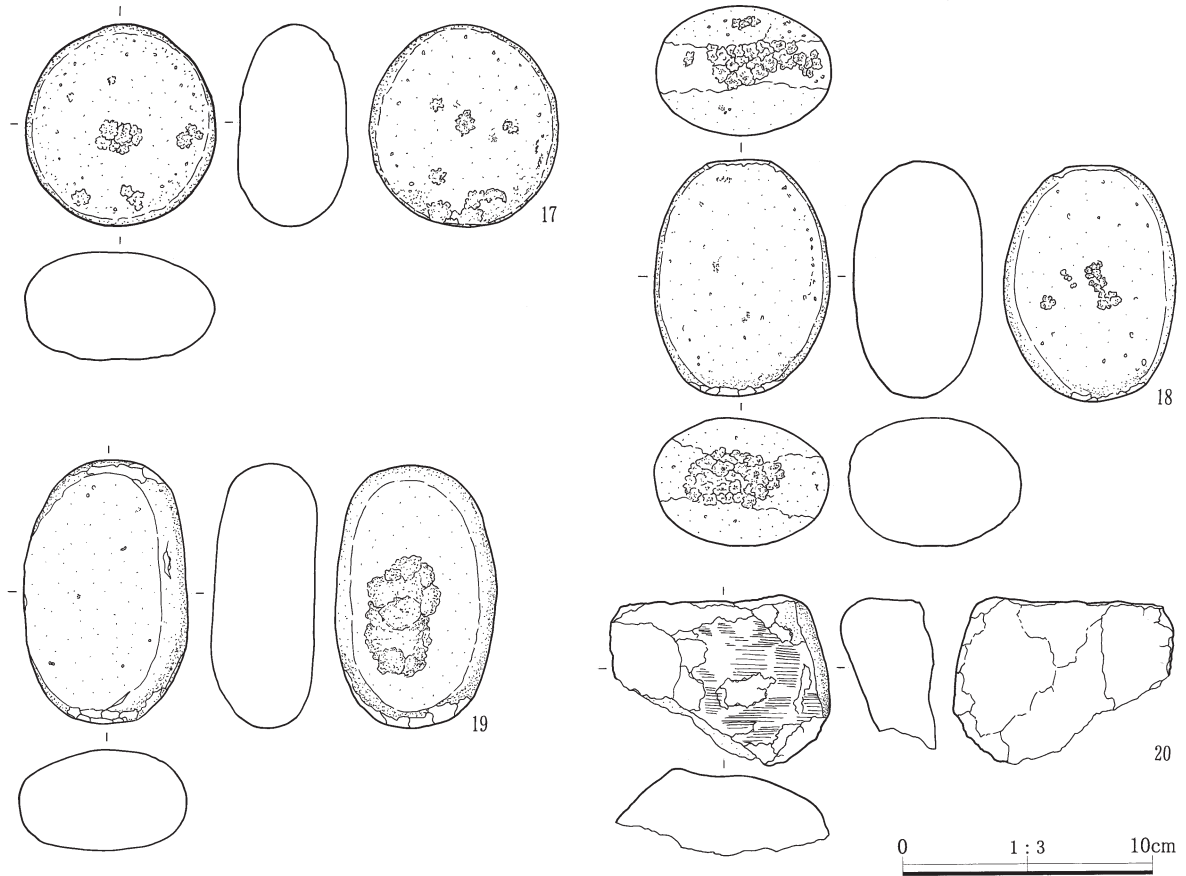
第7図 1・2号住居跡遺構図(2)・遺物分布図



第8図 1・2号住居跡遺物図(1)



第9図 2号住居跡遺物図(2)



第10図 2号住居跡遺物図(3)

27・40cm、P 8が48・45・30cmである。柱間は、P 5とP 6が170cm、P 6とP 7が195cm、P 7とP 8が160cm、P 8とP 5が180cmである。北西の柱穴には、P 8をあてたが北西隅との距離からすると、その痕跡はないが10号土坑内にあつて柱間も広がる可能性もある。

周溝 なし

床面 炉に埋設された土器の上端を基準にして検出した。平坦ではあるが、特に硬化したような状態ではなく、ローム層特有の硬さである。1号住居跡よりは、一段下がって20cm深い。断面Aでもわかるように、南西側の床面は幅1m前後削平されている。

遺物と出土状況 ほぼ全体から出土している。しかし、床面より30cm前後高い位置のものがほとんどで、床直は炉に埋設された1の深鉢だけである。床よりも30cm前後という高さは、1号住居跡の床面に相当しているが、土器には時期差があり、埋没した1号住居跡に投棄したか埋没の途中で混入したものである。その中であつて2の深鉢や12の浅鉢は、破片の数も多くて接合率も高い。これは、投棄したことを示しているであろう。2は、諸磯b式で器高19.5cm、口径26.5cm、無文地に2本単位の平行沈線文を施している。3～7も諸磯b式で、3～5はLR縄文を地文にして平行沈線文を施している。6、7は浮線文、8～10はLR単節縄文、11は変形爪形文を施した浮島Ⅱ式である。12は、無文の浅鉢である。13が短冊形の打製石斧、14が蛇紋岩製の完形の磨製石斧である。15は、北東隅寄りで出土した敲打痕のある台石である。16～19は凹石、磨石である。20は、砥石である。調査では、2号住居跡の方が1号住居跡よりも新しいと判断したが、床から30cm上は1号住居跡の床に相当し、新旧関係が逆転する可能性もある。非掲載は、深鉢35点、剥片64点である。

所見 縄文時代前期、諸磯b式期の住居跡である。

第4章 検出された遺構と遺物

24号住居跡（第11・12図 PL22・64・65）

位置 4区 50E-10グリッド、5区の住居跡があるあたりからは、東に70m離れていて台地の中でも一段高い箇所である。中間の様子は調査していないのでわからないが、重複している11号溝の西側には遺構がなく、溝の覆土にも混入している遺物が少ない。この2点の様子からすると、遺構分布は4区と5区の間で途切れていると見てよい。これに対して24号住居跡の東には、41号～48号、51号、59号、61号土坑が近い位置にまとまっている。24号住居跡は、これらの土坑群を背にして傾斜が変換する台地の中程という位置を占めている。このように遺構の数は、台地を登りつめて東になるほど、多くなるという印象である。その中には住居跡こそないが、調査区を外れた北側でも散布している遺物の量は多く、5区よりも一時期古い別の集落を予想することができる。

重複関係 62号～64号土坑よりも古く、北西側は11号溝で削られている。検出状況は、重複している62号土坑が先で、土坑の調査が進むに従い63号、64号となり、最終的に土坑から漏れた遺物の範囲を住居跡のプランとした。上半部は、住居跡と判断するのが遅れたために遺構の確認作業で大半を削平している。次に示した壁高が、本来の姿ではない。

形状 隅丸方形、炉を中心に見立てると、11号溝で削られているのは1m前後の幅と見られる。

規模 長軸3.10m、短軸2.35m以上、壁高7～9cm、削平分を含めると長軸、短軸は、ほぼ同規模である。

面積 7.285㎡以上 **主軸方位** N63° E

覆土 地山のロームとは、大きな違いがない。確認した時は、プランに相当する範囲が一面に湿ったような状態で、遺物、炭化物を含むロームの2次堆積という様子である。

炉 中央部のやや北寄りにある。長軸70cm、短軸60cmの楕円形をした掘り方で、深さは10cm弱である。1層が使用面と見られ、全体によく焼けている。焼土の一部は、焼き締まっていて固いブロックとなっている。住居跡の規模としてはやや大きく、2層は攪拌された様子もなく掘り方の覆土である。1層の焼けた部分が、炉として使われていた本来の箇所であろう。出土した土器、石はない。

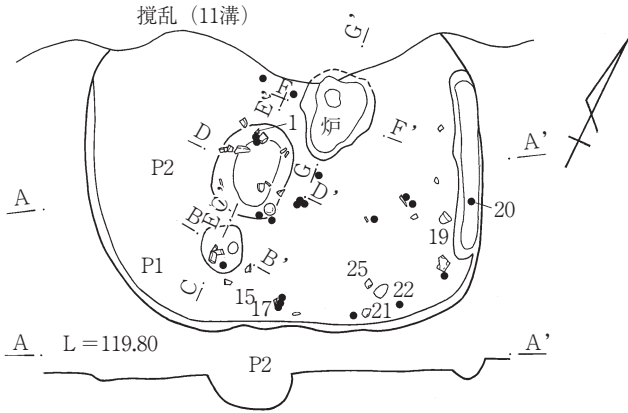
柱穴 南西隅にある、P1の1本だけが検出されている。長軸が38cm、短軸が32cmの円形で、深さは16cmである。これも住居跡全体の覆土と同じように、地山とは区別がむずかしい湿った土で埋まっている。この覆土の状況からは確認漏れも十分に予想され、検出したのが南西隅という位置からすると各隅に対応する4本柱であろうか。

周溝 東壁で検出されている。長さ1.50m、幅20cm、深さ3～5cmである。柱穴などの検出状況からすると、全周していた可能性がある。

床面 遺物が集中している面を基準として判断したが、特に硬化している面はない。

遺物と出土状況 全体から出土したが、土器の半数はP2に集中して出土している。しかし、P2は62号土坑の中にすっぽりと収まり、上下の位置関係にある。覆土もともに暗褐色砂質土で良く似ており、62号土坑の掘り残しであることも十分に考えられる。1、2、4～12が黒浜式深鉢で、このうちの4と5、6～12はそれぞれが同一個体である。遺存状態は良好で、破片として図示したが本来は完形に近い状態であったかと思われる。3、13～18が諸磯a式である。P2では、黒浜式と混在して出土している。石器は、壁際よりの床面から散在して出土している。19はスクレイパー、20、21、23～25は使用痕のある剥片である。22は、表裏によく磨滅した磨り跡がある。非掲載は、深鉢133点、剥片20点である。

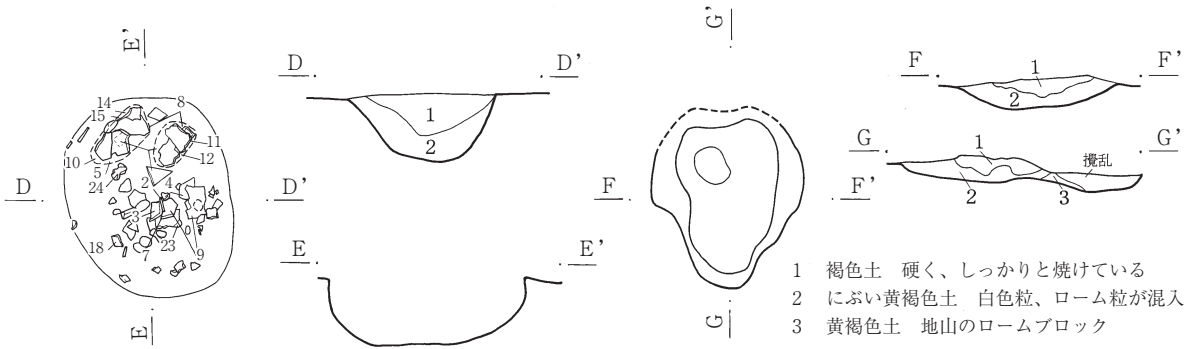
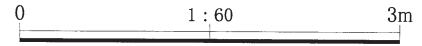
所見 縄文時代前期、黒浜式期の住居跡である。調査した中では、唯一の黒浜式期である。



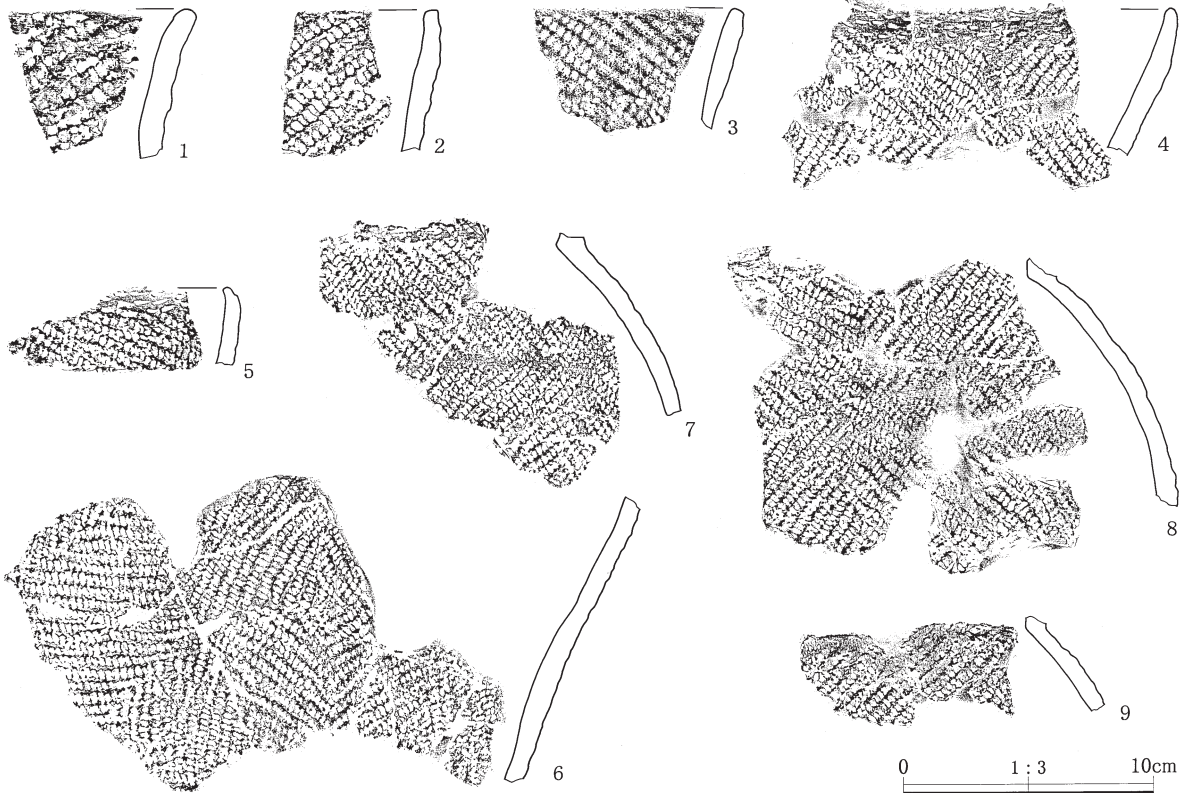
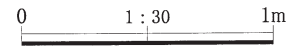
L = 119.70 (B ~ G)



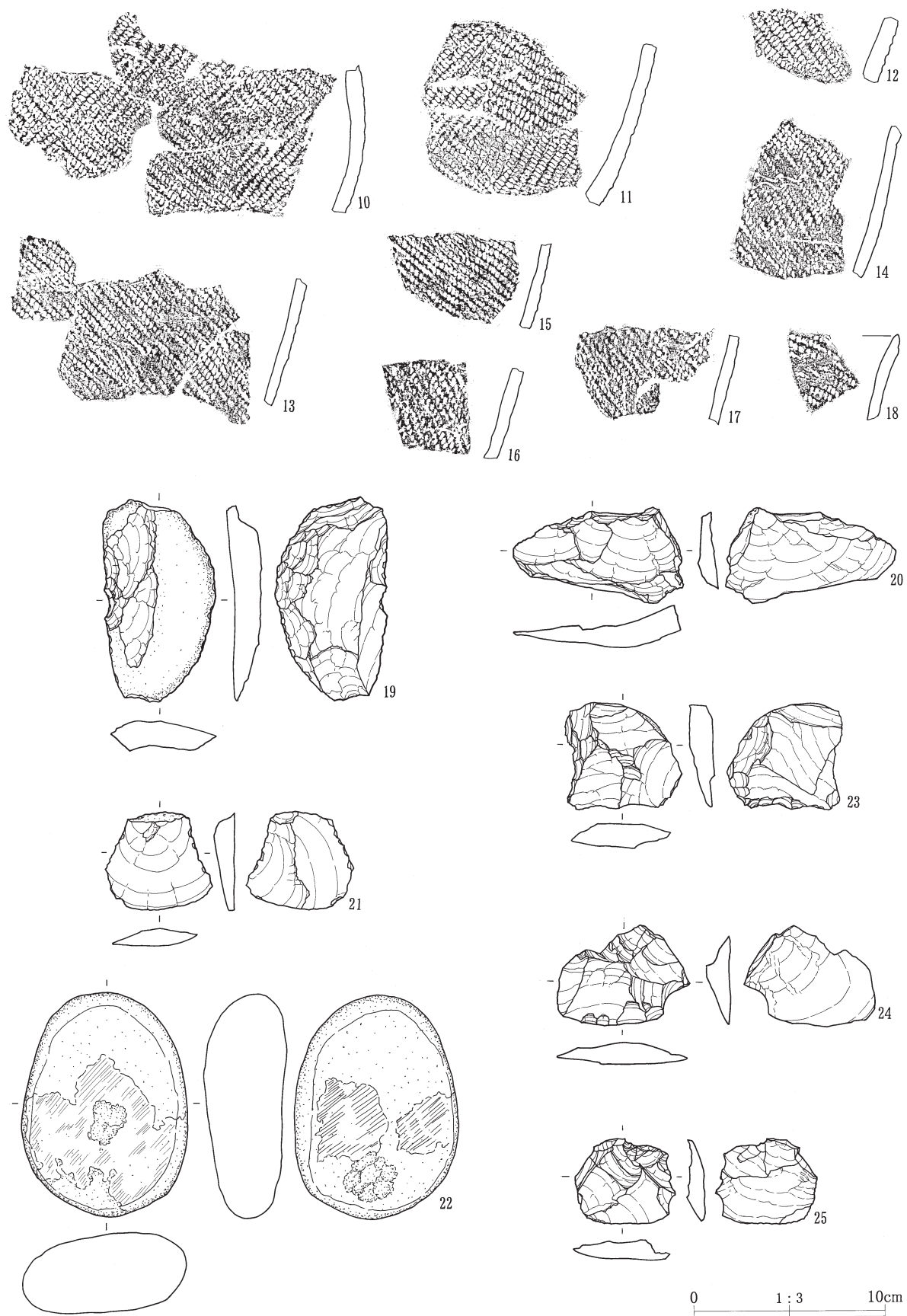
1 褐色土 白色粒を含む、やや粘性あり



- 1 暗褐色土 炭化物を少量含み、白色粒、黒褐色土のブロックを含む、やや粘性あり
- 2 暗褐色土 ロームブロックを少量含む、やや粘性あり



第11図 24号住居跡遺構図・遺物図(1)



第12図 24号住居跡遺物図(2)

25号住居跡（第13～18図 PL22・23・65～67）

位置 5区 60S T-2～4、51A-3グリッド、立地は、北15mにある1号住居跡と同じである。川寄りの台地際に数軒の住居跡が重複しながらなっている、という位置関係である。**重複関係** 26号住居跡、84号土坑よりも新しく、81号、85号土坑よりは古い。**形状** 隅丸長方形、東壁をはじめとして各壁が緩く弧を描いている。北東部は、大きく張り出しているが重複する26号住居跡との区別がつけられずに掘りすぎた結果とも見られる。柱穴との間隔からすると、北西隅のあたりが本来の形状であろう。

規模 長軸6.10m、短軸5.10m、壁高25cm **面積** 31.11m² **主軸方位** N30° E

覆土 暗褐色砂質土、黒褐色砂質土の自然堆積である。壁際になると混入するロームが増える。

炉 2基が検出されている。西側の2本の柱の間にあるのが1号、中央部でも南の壁から1.20mの所にあるのが2号である。1号は、直径が35cm、深さ15cmの掘り方に深鉢を埋設している。2号は、直径が30cm、深さ10cmの掘り方に深鉢を埋設している。2号は、84号土坑と重複しているが炉の方が新しい。2基ともに焼土は少ない。2基が併存していたものか、それとも柱穴のように建て替えに伴って新旧があるのかは判定できない。調査コメントは、併存をあげている。

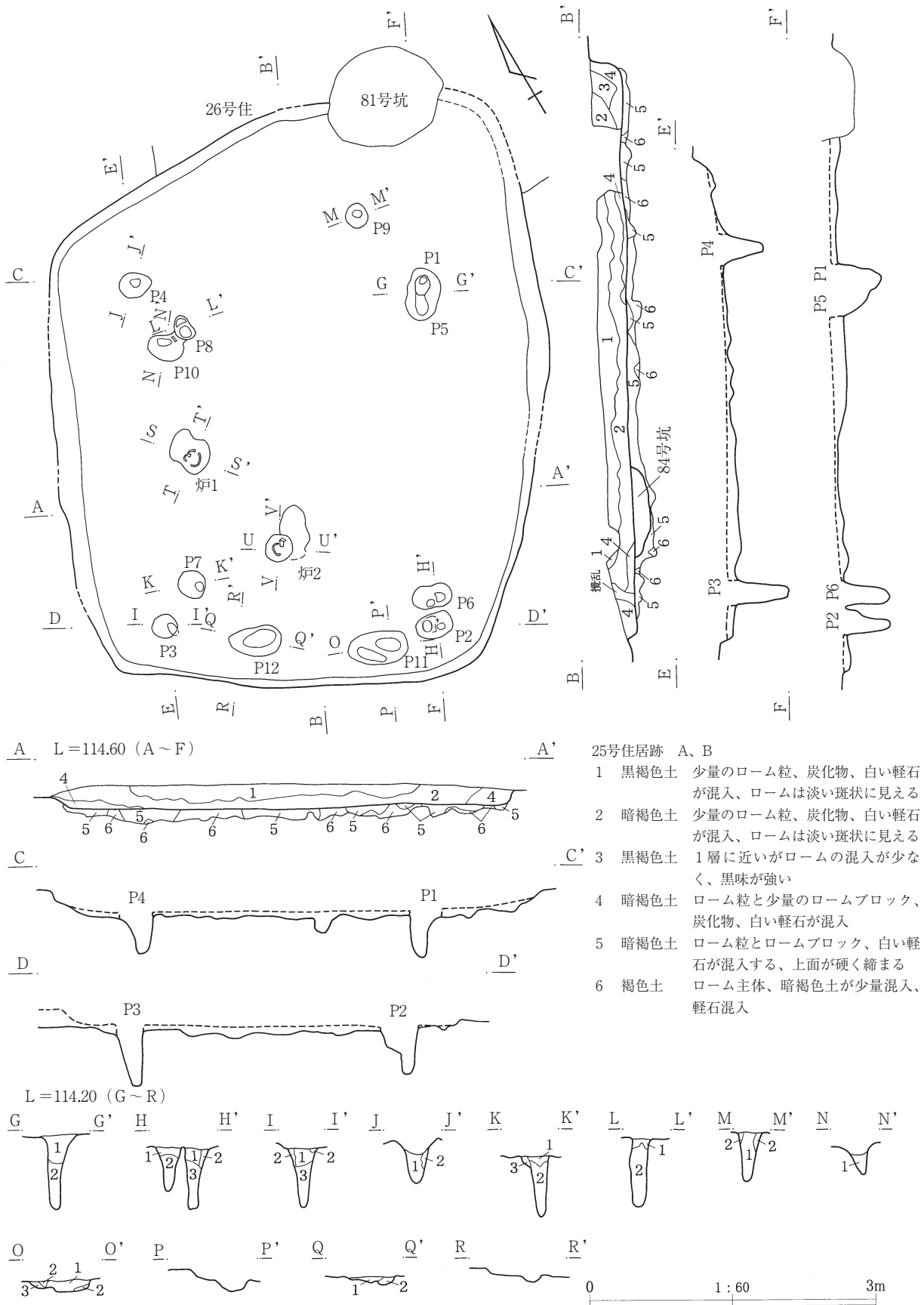
柱穴 4本主柱穴である。建て替えをしており、新期がP1～P4、古期がP5～P8である。東側の2本は重複しているが、内側が古くて外側が新しい。長軸・短軸・深さは、P1が35・35・72cm、P2が28・16・48cm、P3が28・26・64cm、P4が34・28・40cm、P5が34・24・73cm、P6が24・24・62cm、P7が30・28・78cm、P8が18・16・70cmである。柱間は、新期のP1とP2が330cm、P2とP3が250cm、P3とP4が285cm、P4とP1が260cmである。古期は、P5とP6が310cm、P6とP7が240cm、P7とP8が265cm、P8とP5が250cmである。新期の方が広くて拡張していることがわかる。また南の壁際では、床下から入口跡のP11とP12が対で検出されている。長軸・短軸・深さは、P11が62・34・20cm、P12が46・32・24cmである。柱間は、136cmとやや広めである。ピットは直立していて、壁はブロックの状態で硬化している。ただし、この硬化しているのが、暗色帯に見られる自然のものなのか、それとも柱などの圧力によりできたものなのかは断定できない。ほかの柱穴よりも大型なのは、建て替えによる重複分を含んでいるからであろう。

周溝 なし

床面 炉が検出されたことで、床と判断したが南北に傾斜していて南の方が10cm低い。掘りすぎたのか、それとも逆に北側が掘り足りないのか検討を重ねたが判断がつかず、ここでは調査時の見解のままに報告をする。覆土の説明では、5層の上面が固かったことが報告されている。

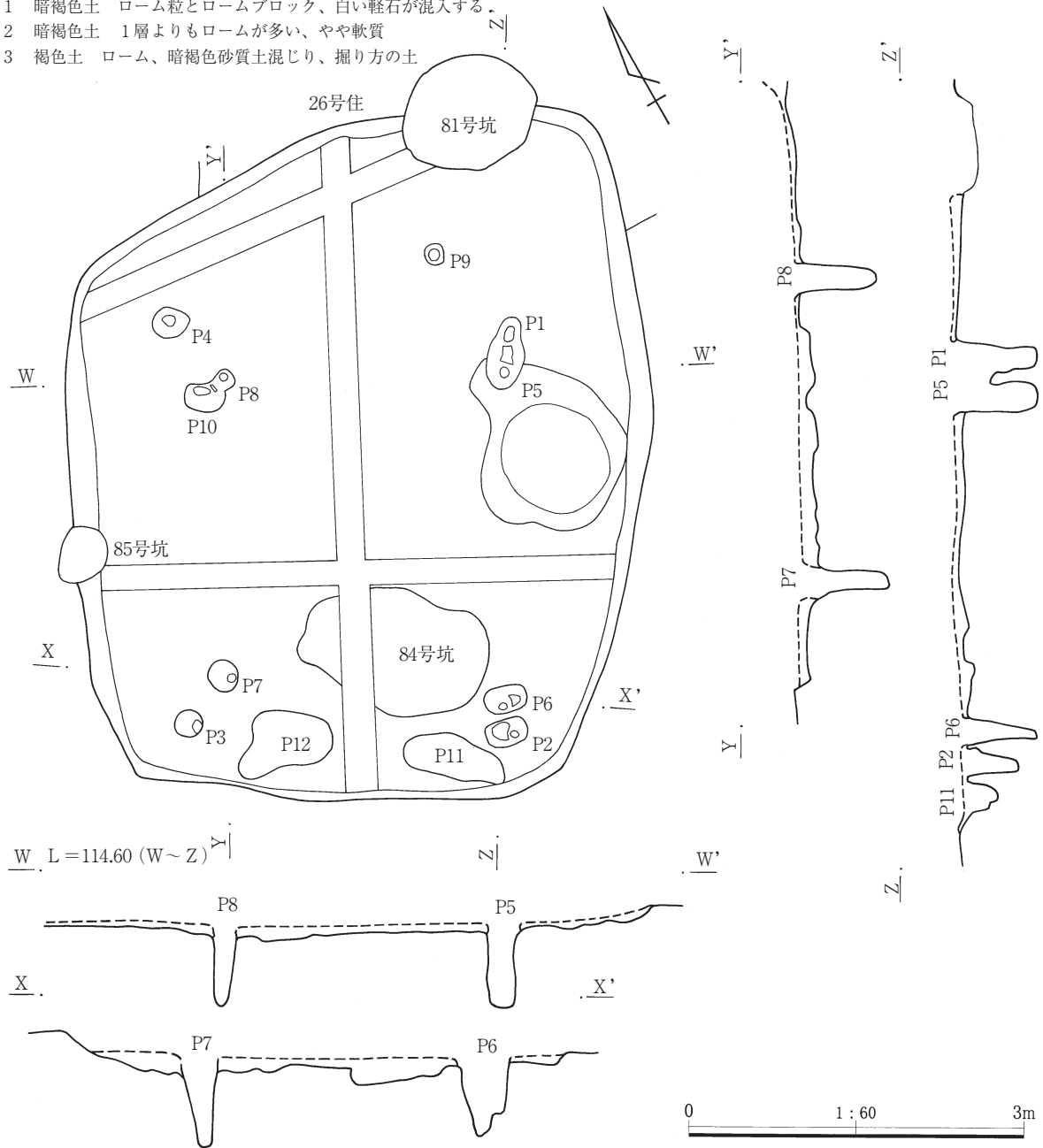
遺物と出土状況 張り出している北東部を除いて、全体から出土している。床面からのものはわずかで層位としては2層が多く、これらに大半は非掲載とした拳大から人頭大までの石が多数含まれている。床面としては2基の炉体土器があげられる。1は、1号炉に埋設された深鉢である。口縁部と底部は打ち欠いたもので、器高は15.3cm、胴部の最大径が19.5cmである。4は、2号炉に埋設された土器である。器高16.0cm、口径17.5cmである。破片の一つは、27号住居跡から出土したものと接合している。2、3、6、7は、2基の炉の周辺に分布しているものが接合した。3は、諸磯c式で推定器高28.8cm、口径22.6cm、6は同じく諸磯c式で器高21.8cm、口径11.6cm、7は浮島Ⅱ式で現高20.1cm、口径18cmである。8、9は、RL単節縄文、10～12は諸磯b式の浮線文、13～17は平行爪形文、18は諸磯c式の集合沈線文、19は貝殻側縁文を施した興津Ⅱ式である。石器は、短冊形打製石斧、使用痕のある剥片、磨石、台石、石錐、石鏃が出土している。非掲載は、深鉢168点、浅鉢4点、剥片109点である。

所見 縄文時代前期、諸磯c式期の住居跡である。



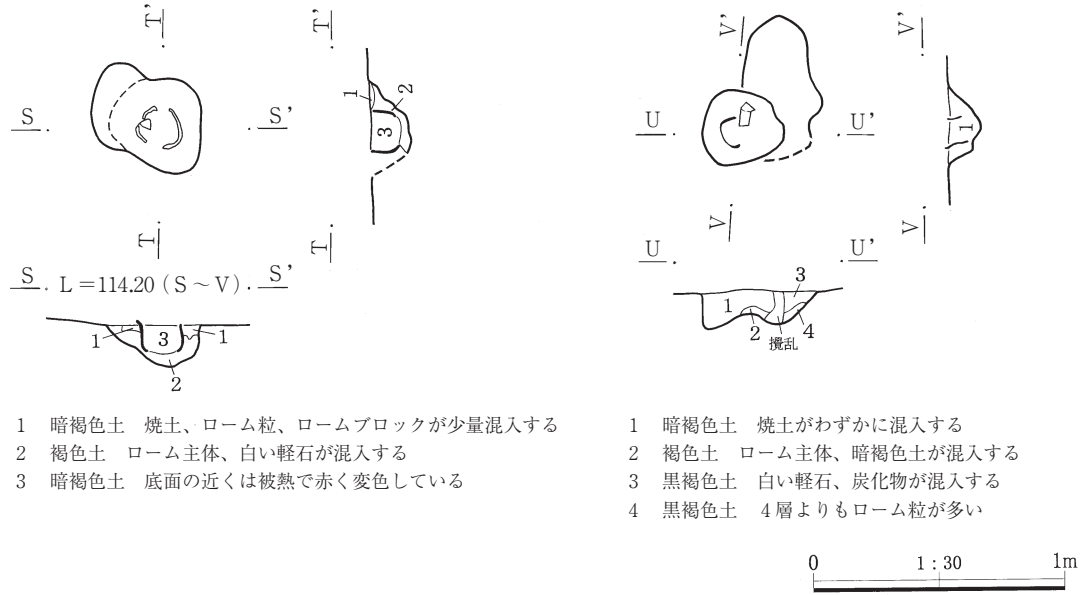
第13図 25号住居跡遺構図(1)

- G P1
 1 暗褐色土 ローム粒、白い軽石混入、ロームは斑状に見える
 2 褐色土 ローム主体、暗褐色土が少量混入、軽石はない
- H P2、P6
 1 暗褐色土 ローム粒、白い軽石、炭化物が少量混入する
 2 暗褐色土 1層よりロームが多い
 3 褐色土 ローム主体、暗褐色土が混入
- I P3
 1 暗褐色土 ローム、白い軽石が少量混入する
 2 褐色土 ローム、暗褐色土が混入、ロームブロックあり
 3 暗褐色土 1層よりもロームが多い、軟質
- J P4
 1 褐色土 暗褐色土、ローム、白い軽石が混入する
 2 褐色土 ローム主体、壁の崩落か
- K P7
 1 暗褐色土 ローム粒とロームブロック、白い軽石が混入する
 2 暗褐色土 1層よりもロームが多い、やや軟質
 3 褐色土 ローム、暗褐色砂質土混じり、掘り方の土
- L P8
 1 褐色土 ローム、暗褐色土が混入する
 2 暗褐色土 ローム、白い軽石が混入する
- M P9
 1 黒褐色土 ローム、白い軽石が混入する
 2 黒褐色土 1層よりもローム粒、ロームブロックが多い
- N P10
 1 暗褐色土 ローム粒、白い軽石が混入する
- O P11
 1 暗褐色土 ローム、白い軽石が混入する
 2 褐色土 ローム、暗褐色土が混入する
 3 灰黄褐色土 ローム、暗褐色土が少量混入する、硬く締まる
- Q P12
 1 暗褐色土 ロームが混入する
 2 暗褐色土 ローム、白い軽石が混入する、やや軟質



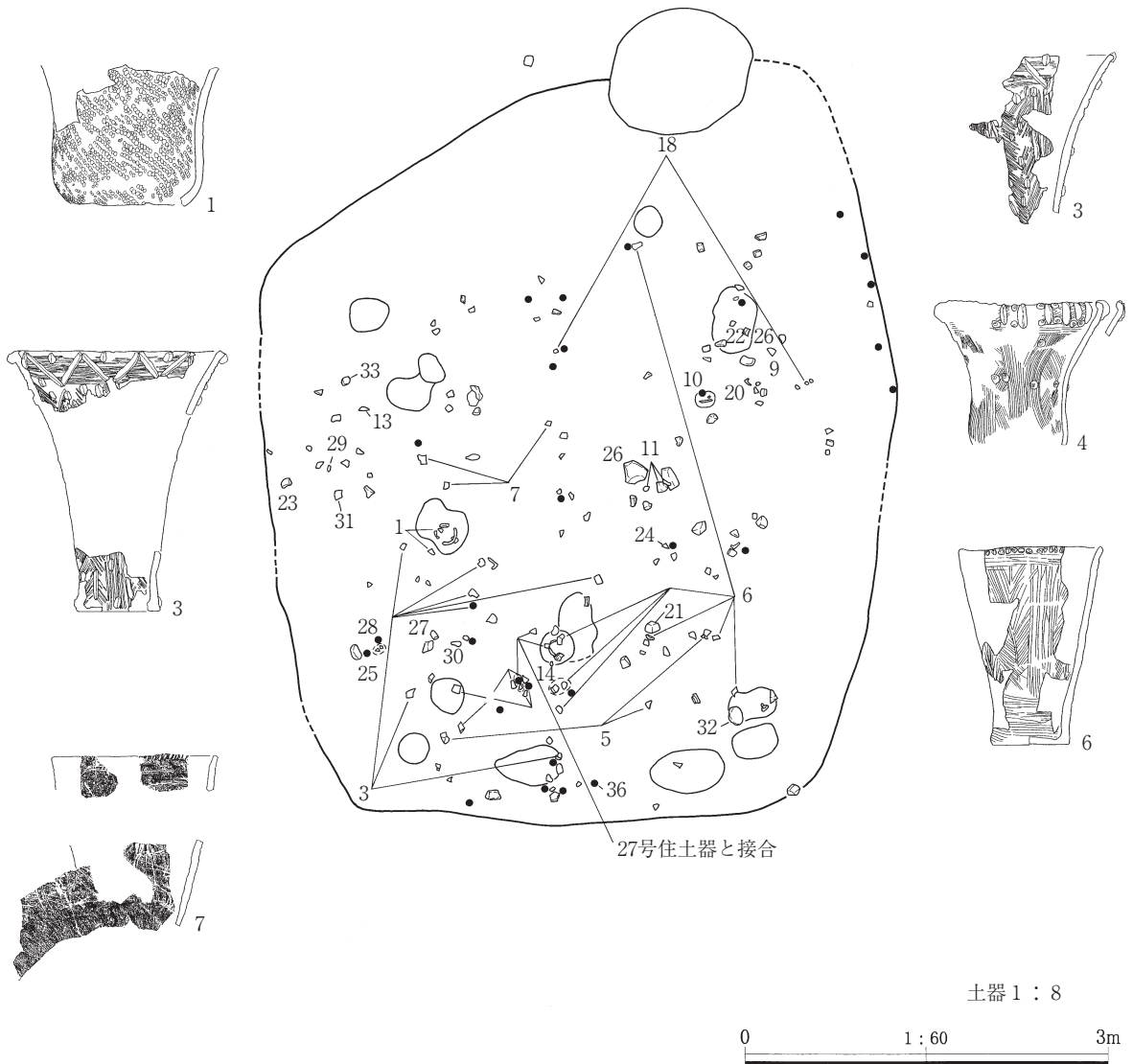
第14図 25号住居跡遺構図(2)

第4章 検出された遺構と遺物

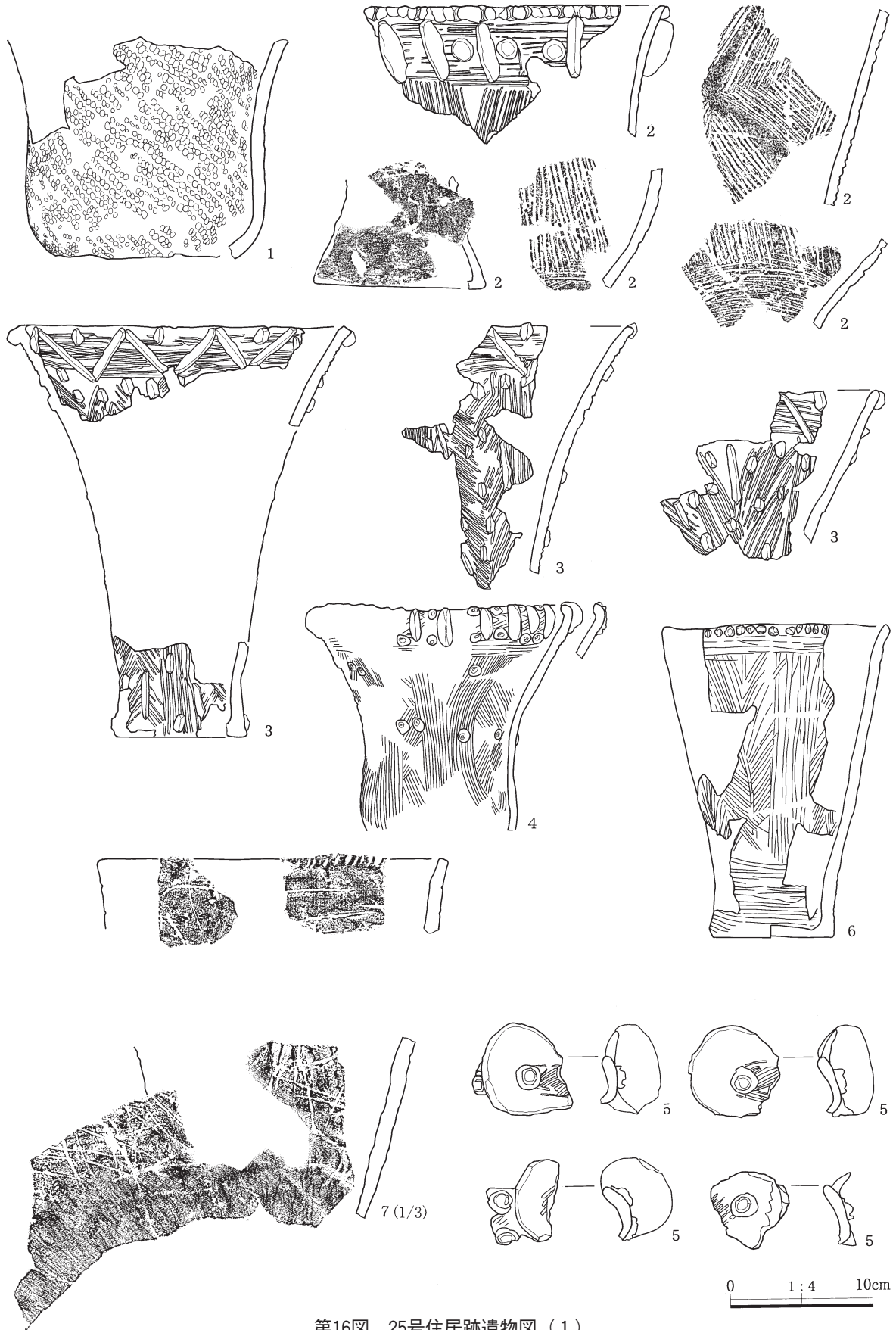


- 1 暗褐色土 焼土、ローム粒、ロームブロックが少量混入する
- 2 褐色土 ローム主体、白い軽石が混入する
- 3 暗褐色土 底面の近くは被熱で赤く変色している

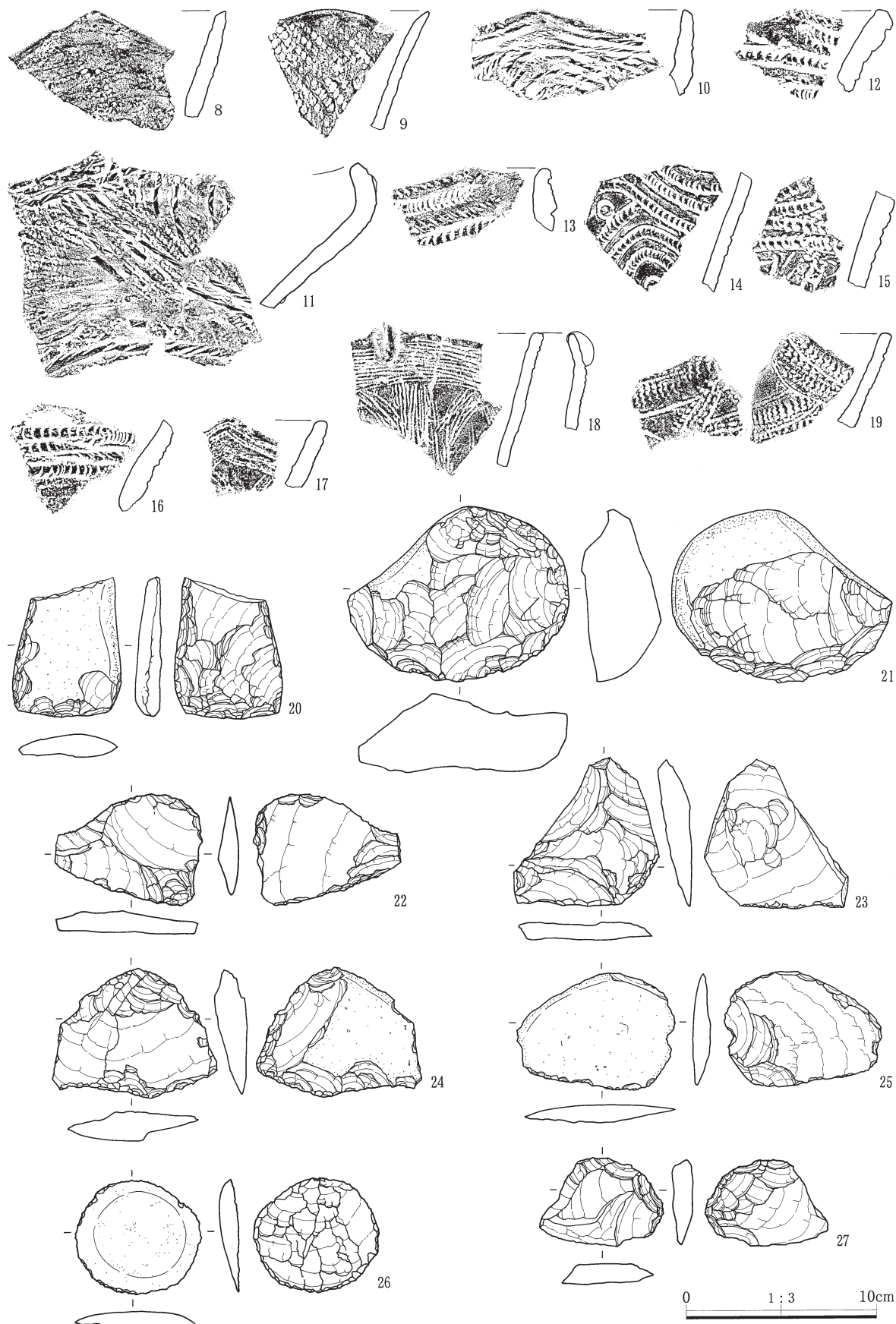
- 1 暗褐色土 焼土がわずかに混入する
- 2 褐色土 ローム主体、暗褐色土が混入する
- 3 黒褐色土 白い軽石、炭化物が混入する
- 4 黒褐色土 4層よりもローム粒が多い



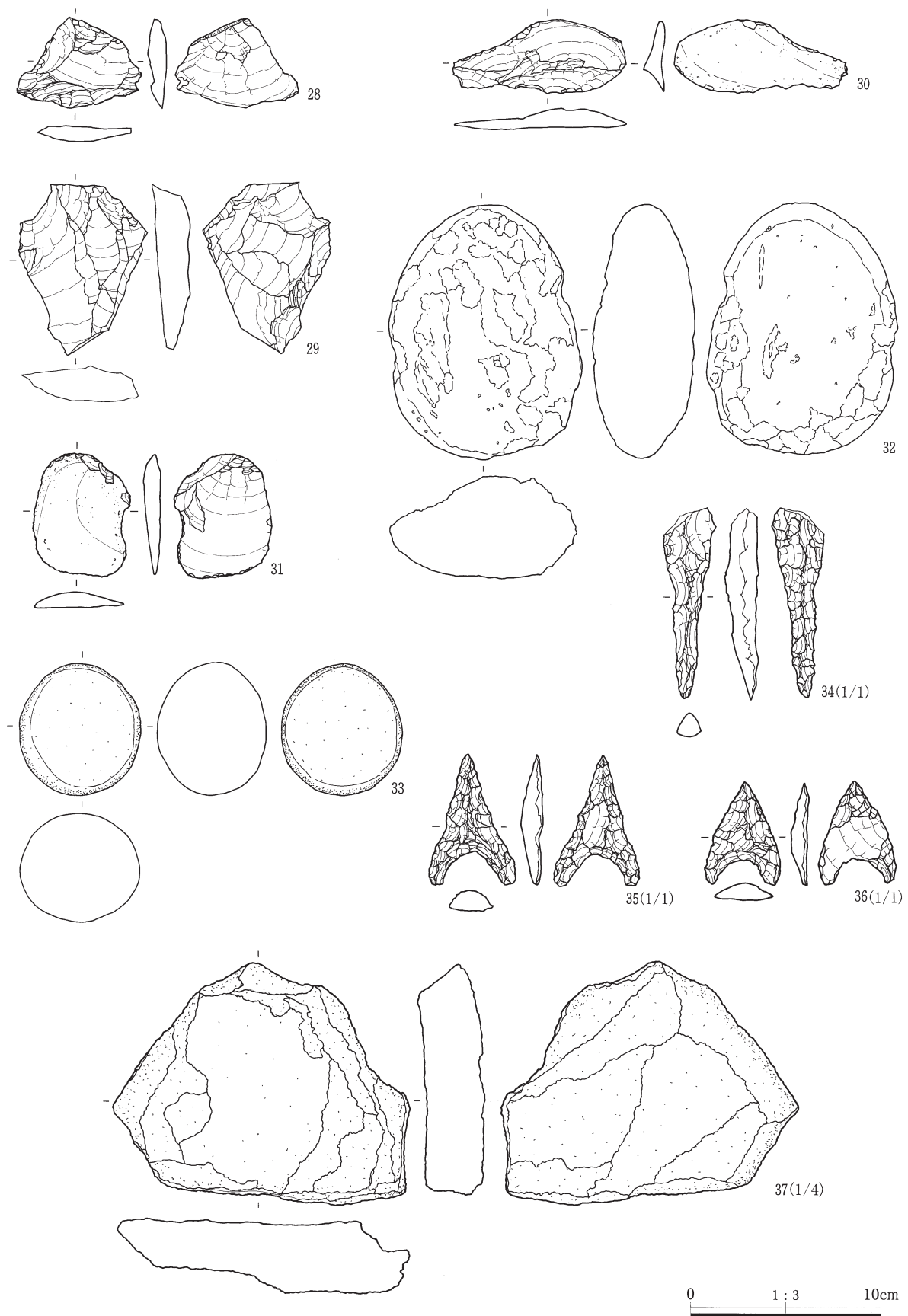
第15図 25号住居跡遺構図(3)・遺物分布図



第16図 25号住居跡遺物図(1)



第17図 25号住居跡遺物図(2)



第18図 25号住居跡遺物図(3)

第4章 検出された遺構と遺物

26号住居跡（第19図 PL23・67）

位置 5区 60S T-3・4グリッド、立地は、北15mにある1号住居跡と同じである。川寄りの台地際に数軒の住居跡が重複しながら並んでいるという、位置関係である。

重複関係 25号住居跡、81号土坑よりも古い。主軸を直交させて、25号住居跡が南側の半分ほどに重複している。古いほうから26号住居跡、25号住居跡、81号土坑の順序である。

形状 長方形、25号住居跡の特に北東部のプランを検討している中で、プランの外から遺物の出土したことが検出のはじまりである。しかし、プランについては、確定した後も依然として周辺から遺物の出土があって推定の要素が強い。床面については、25号住居跡との間でレベルに差はなく、炉を検出したことで確定できた25号住居跡にならない、それに合わせたというのが実態である。しかもローム層の上層が床面であるため、壁の立ち上がりはローム漸移層中にあたり、壁についても疑問を残したままで覆土とははっきりと区別できたわけではない。長軸方向は、横断するトレンチで確認していて誤差は少ないと見られるが、短軸方向は北側に広がる可能性が大である。

規模 長軸4.34m、短軸2.74m、壁高32cm **面積** 11.89m² **主軸方位** N78° W

覆土 25号住居跡との関係を見るために、2軒を横断しているトレンチの断面を掲載する。床面の高さの様子や覆土の違いがわかる。断面AとBのうち、4層～8層、11層、12層が26号住居跡で、それ以外の1層～3層、9層、10層は25号住居跡のものである。26号住居跡の覆土は、暗褐色と黒褐色をした砂質土で、混入しているロームの量や色調の違いで分けたが、その違いはいずれもわずかである。壁際では、細かに分層される傾向にあるが、中央部に向かっては一括して覆うような自然堆積である。

炉 検出した範囲にはない。81号土坑が中央部に重複しており、重複により削平されたのか当初からなかったかについては不明である。

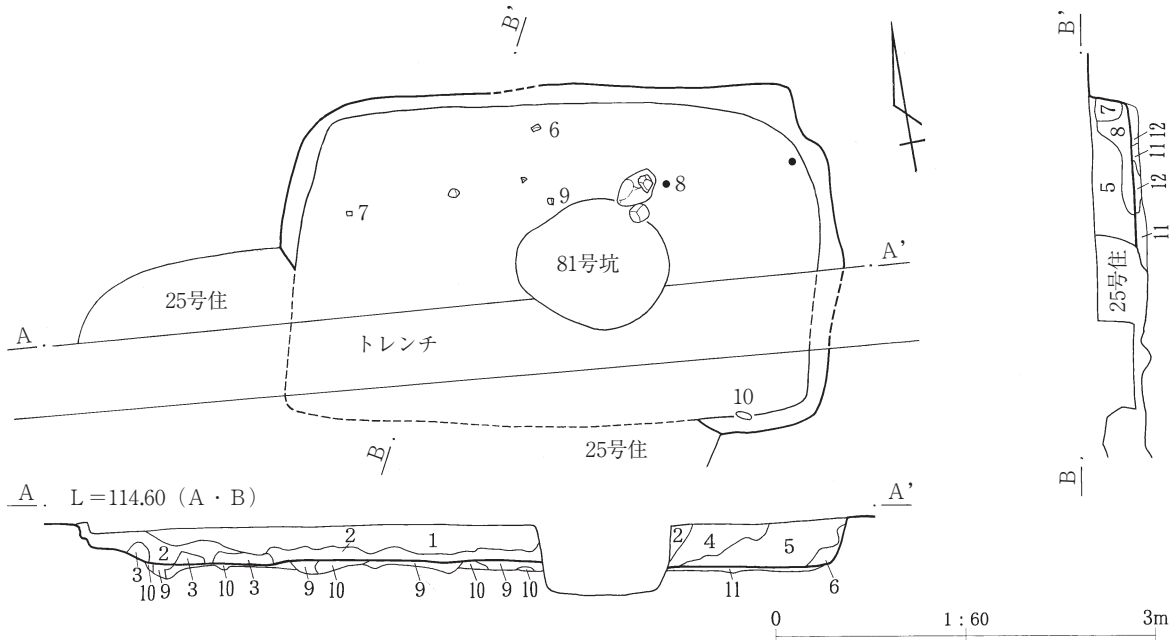
柱穴 検出されたものはない。ここでは図示していないが、推定するプランの中には25号住居跡で記録したP9がある。長軸が23cm、短軸が22cmの円形、深さは50cmである。これに対応するものはないが、25号住居跡の中では支柱穴から大きく外れている。可能性の一つとして報告しておく。

周溝 なし

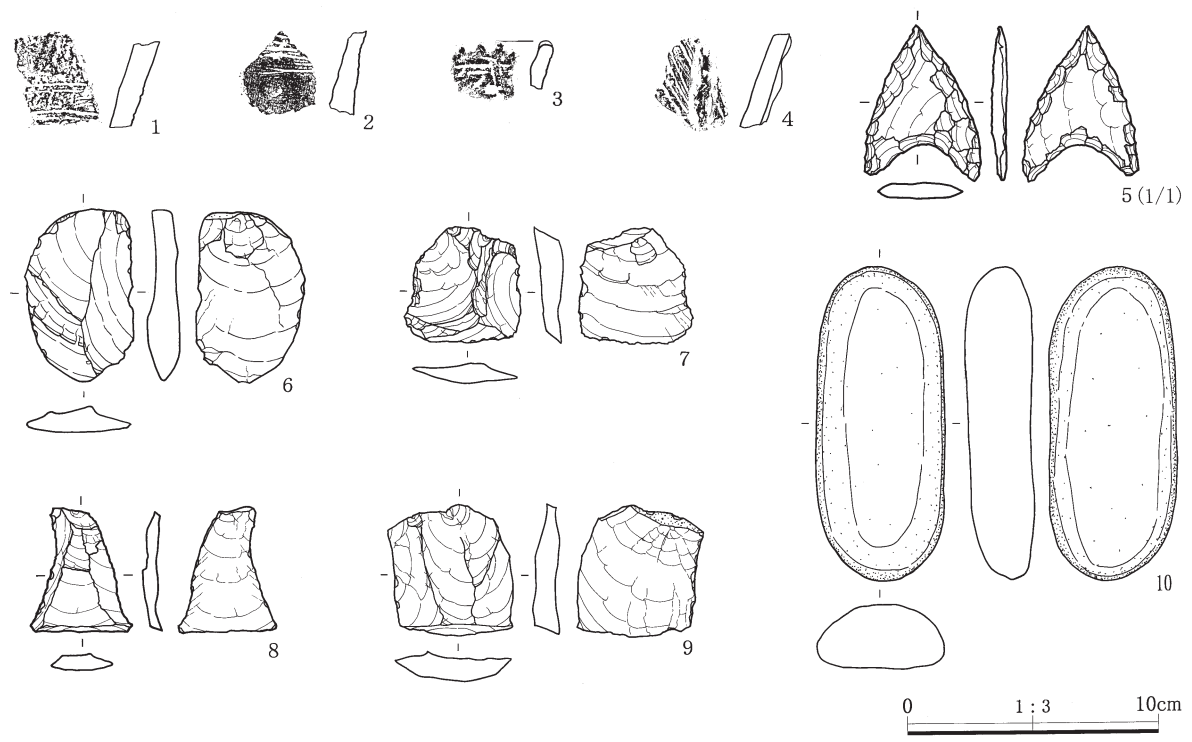
床面 25号住居跡と比較する中で、ロームの上層を床面とした。ローム特有のものなのか、床面の判断材料ともなった一定程度の硬さが認められる。床に相当する土を剥がしてみたが、土坑となるような掘り方はなく、出土した遺物もない。11層、12層が掘り方の覆土である。

遺物と出土状況 数少ない遺物が、中央部の高い位置で出土している。1、2は関山式の深鉢、3、4は諸磯c式の深鉢である。1は、25号住居跡の覆土から出土した破片と接合している。5は覆土中で出土した石鏃である。6～9は、2側縁に使用痕がある剥片である。10が、南東隅の壁際から出土した磨石である。非掲載は、深鉢5点、剥片1点である。このほかに平面図に示してあるが、81号土坑に接して人頭大までの石3点が出土している。床からは20cmも上にあり、はっきりとした使用痕もないために、割愛した。

所見 縄文時代前期諸磯c式期の住居跡である。ただし、形状や規模、柱穴、さらに炉の存否まで不明な点がある。小竪穴状の施設として分類すべきであろうか。



- 1 暗褐色土 ローム粒、炭化物、焼土、白い軽石が混入する、ロームは斑状に見える
- 2 暗褐色土 ローム粒、ロームブロック、焼土が混入する
- 3 褐色土 ロームが主体、暗褐色土、白い軽石が少量混入する
- 4 黒褐色土 ローム粒、白い軽石が混入する、ロームは斑状に見える
- 5 暗褐色土 ローム粒混じり、下位にロームブロックがあり斑状に見える、白い軽石が少量混入する
- 6 暗褐色土 5層よりもロームは多い、5層のように下位にロームブロックと白い軽石が混入する
- 7 暗褐色土 8層よりもロームが多く明るい、白い軽石が混入する
- 8 暗褐色土 7層と似ているが、斑状に見えるロームがほとんどない
- 9 暗褐色土 ローム粒、ロームブロック、白い軽石が混入する、上面が硬く締まる、床下覆土
- 10 褐色土 ロームが主体、暗褐色土が少量混入する、地山の軽石が混入する、床下覆土
- 11 褐色土 ロームが主体、暗褐色土、As-Cらしい軽石が混入、10層よりもロームがよく混じる
- 12 褐色土 11層にくらべて暗褐色土が多い



第19図 26号住居跡遺構・遺物図

第4章 検出された遺構と遺物

27号住居跡（第20～22図 PL23・24・67～69）

位置 5区 60S T-2・3、51A-2・3グリッド、立地は1号住居跡と同じである。川寄り台地際に数軒の住居跡は重複しながら並んでいる、という位置関係である。

重複関係 25号住居跡より新しく、83号土坑よりは古い。また、床下には番号のない土坑が1基ある。古い方から25号住居跡、床下の番号のない土坑、27号住居跡、83号土坑の順序である。

形状 推定方形、北東隅から見て全体の二分の一ほどを検出した。残りの半分は、調査区外である。方形と推定したのは、南東の隅がわずかに丸みを持つからである。P1と壁との位置関係からすると、推定では5m近い規模になるのであろう。北側にある3本のピットは、この見方を補強するものである。

規模 東西3.86m以上、南北4.78m以上、壁高26cm **面積** 18.45m²以上 **主軸方位** N4°W

覆土 暗褐色砂質土で自然埋没している。これを、混入するロームの量や全体の色調の差で1層～5層に分けた。6層～9層は、掘り方である。このうちの7層上面が固いことから、床面を確定することができた。また、9層は床下にある土坑の覆土である。

炉 検出した範囲の中にはない。ただし、P1とP2の間にある硬化面の一部が焼けていて、掘り込みを持つほどではないが炉の可能性が指摘されている。断面Fがそれであるが、位置としても妥当な所である。

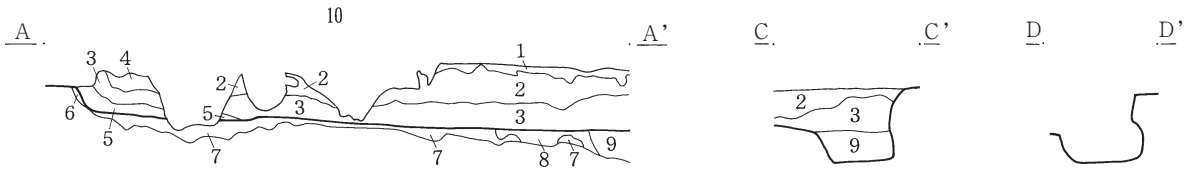
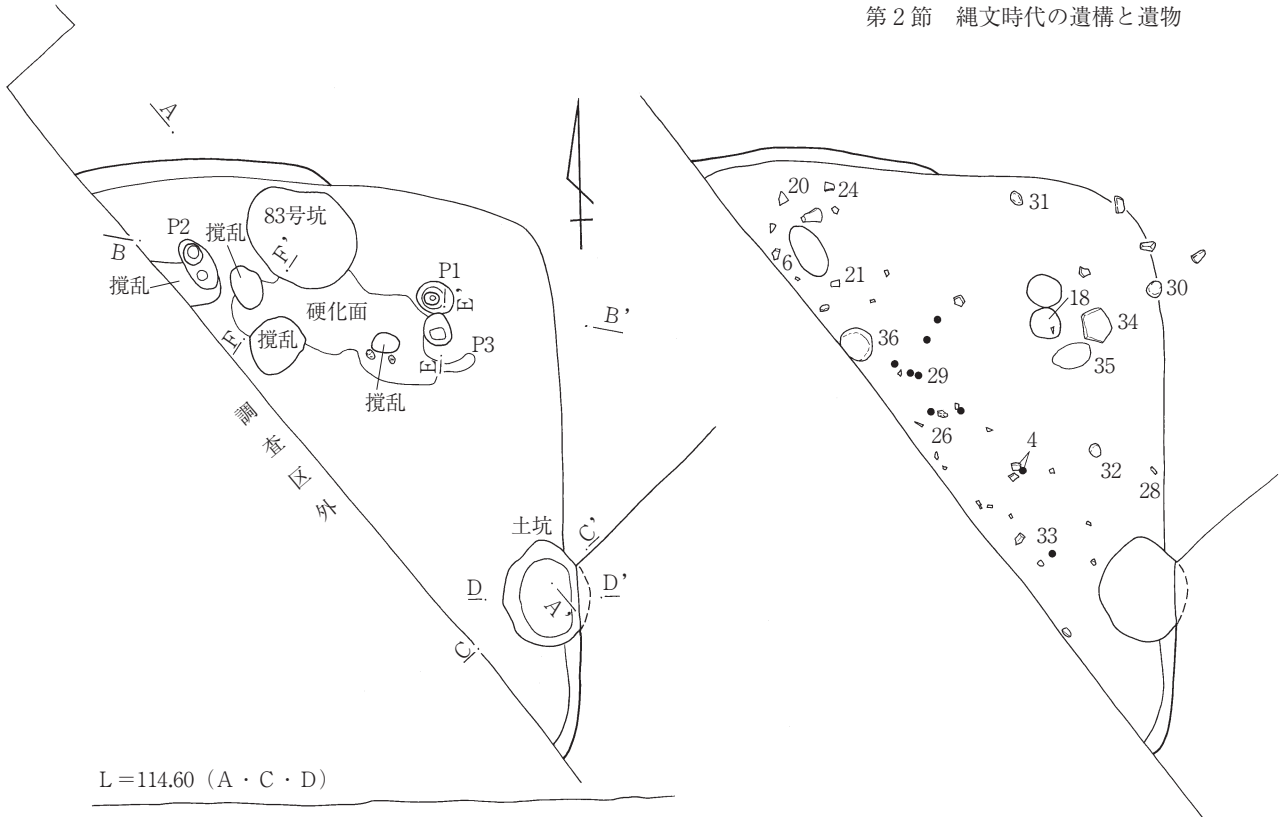
柱穴 長軸・短軸・深さは、P1が28・24・42cm、P2が21・18・54cm、P3が24・22・18cmである。柱間は、P1とP2が195cmである。

周溝 なし

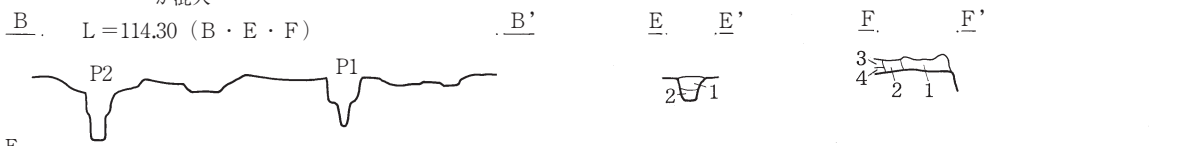
床面 P2とP3の間、83号土坑の南側には硬化面がある。その一部は焼けていて、炉の可能性がある。また、東壁にかかる土坑は、床面で検出されたもので断面では新旧が区別できず、住居跡に伴うものと判断されている。長軸は84cm、短軸が70cmの楕円形で、床からの深さは24cmである。壁の側は、奥行き20cmほどの袋状になっている。中から出土した遺物はない。

遺物と出土状況 周辺も含めて遺物収納箱2箱の量が出土している。しかし、土器は小破片が多く、接合率も低い。床からも高いものが半数以上で、埋没中の混入と見られる。土器は、諸磯b式新段階が主体で、これに諸磯c式が共伴している。1、2は平行爪形文、3は縄文地に平行爪形文、4～7は単節縄文、8～10は底部である。11、12が浮線文、13～20が平行や弧状などの沈線文、21が変形爪形文を施した浮島Ⅱ式である。22は、推定口径33cmの浅鉢である。強く屈曲し、無文ではあるが表面は赤彩されている。石器類は、23が短冊形打製石斧、24、25、27がスクレイパー、26が石錐、28が使用痕のある剥片、29が石鏃である。36は、住居跡の中央部から出土した台石である。幅が24.5cm、厚さは最大10cmの粗粒安山岩を利用している。一方の面は平らで、敲いた跡と磨った跡が残されている。34と35の2点は、北東の隅に近い所から出土している。10個を越す凹穴があいていて、多孔石として使用したものである。このほかに石器類としては、30～33の磨石が目を行っている。重宝な道具であったのか、いずれも全体が磨耗している上に凹み穴、敲打痕を持っている。非掲載は、深鉢233点、浅鉢2点、磨製石斧1点、剥片36点である。深鉢は、縄文施文が200点あまりと最も多くて、次いで平行沈線文、平行爪形文、浮線文、集合沈線文の順となっている。浅鉢は、すべて無文である。剥片は、粗割工程と微細なチップに分けられ、中には黒曜石を含んでいる。磨製石斧は、刃部の小破片で欠損後に刃を付け直している。また、以上のほかに土師器、須恵器が混入している。

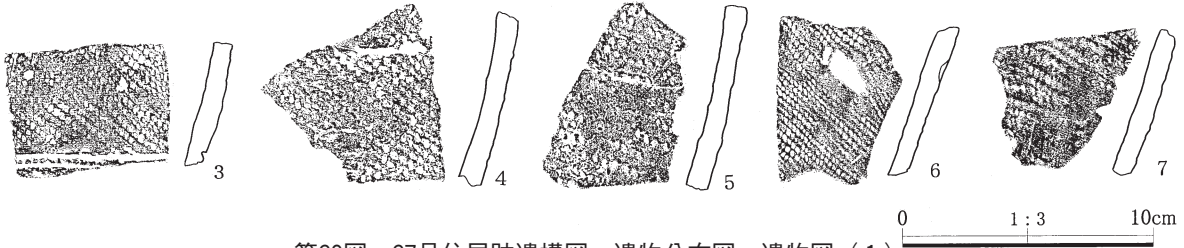
所見 縄文時代前期諸磯b式期の住居跡である。



- 1 黒褐色～暗褐色土 白く細かい軽石が混入する
- 2 暗褐色土 ロームがまばらに混じる、白い軽石が混入する
- 3 暗褐色土 ロームが斑状に混入する、白い軽石が混入
- 4 暗褐色土 3層よりも明るく、やや軟らかい
- 5 暗褐色土 ローム混じり、ロームブロック少量あり、白い軽石が混入
- 6 暗褐色土 5層よりもロームが多く明るい
- 7 暗褐色土 ローム混じり、ロームブロックあり、上面は堅緻
- 8 暗褐色土 7層に似ているがやや黒い、
- 9 住居跡床下土坑覆土 C参照
- 10 表土



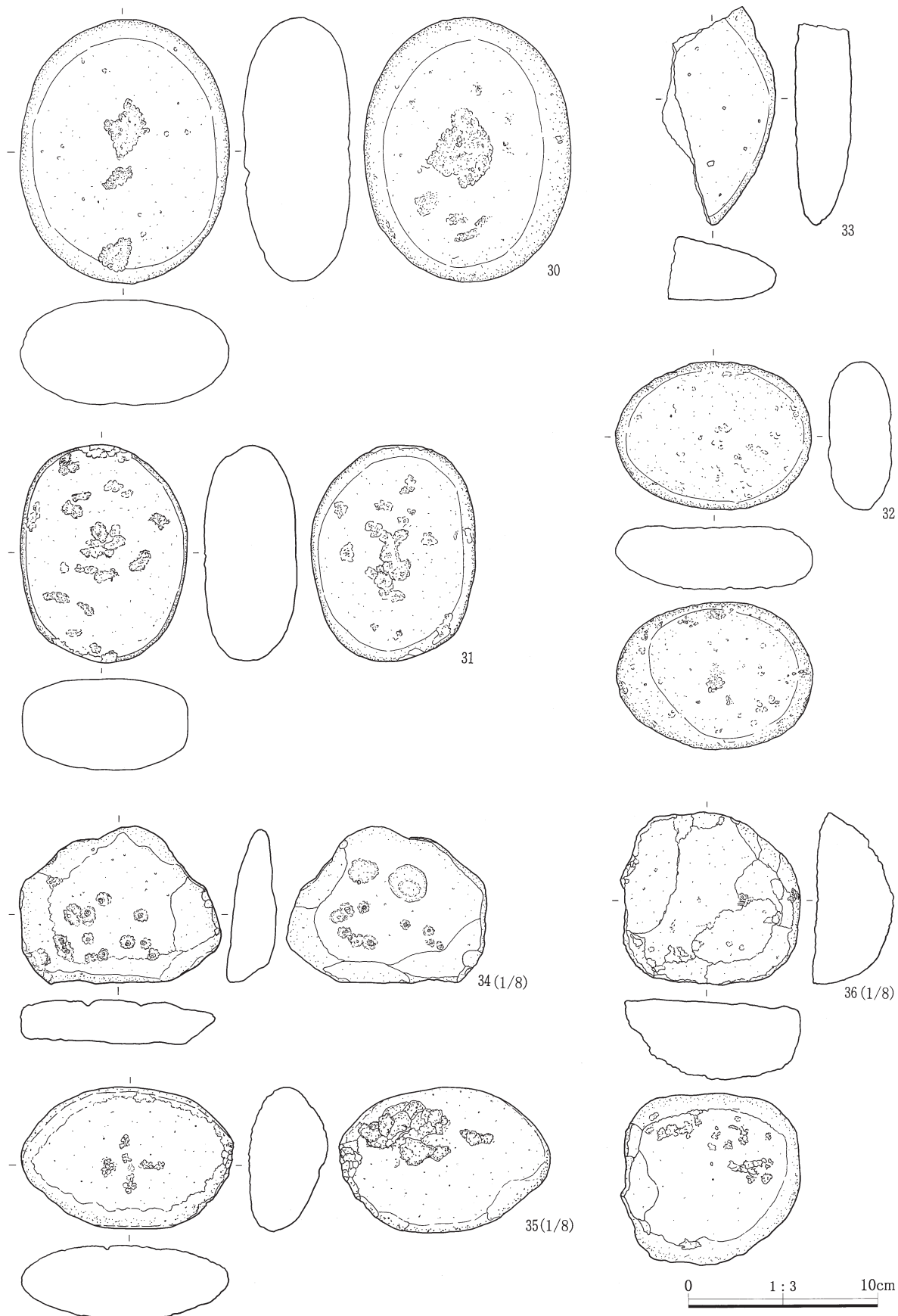
- E
- 1 暗褐色土 ローム混じり、白い軽石が混入、ほか炭化物、ロームブロックが少量混入
- 2 暗褐色土 1層のような軽石、ロームブロックはほとんどない、やや軟らかい
- F
- 1 暗赤褐色土 焼土、暗褐色土混じり、2層よりも焼けている
- 2 暗赤褐色土 1層よりも焼け方が弱い
- 3 黒褐色土 ローム粒が少量混入、白い軽石が混入
- 4 暗褐色土 ローム混じり、ロームブロック少しあり、白い軽石が混入



第20図 27号住居跡遺構図・遺物分布図・遺物図(1)



第21図 27号住居跡遺物図(2)



第22図 27号住居跡遺物図 (3)

3 土 坑

概要 1区で1基、3区で13基、4区で15基、5区で44基の合計73基が検出されている。5区での多さは、住居跡5軒に比例したものと考えられ、そのうちの半数は住居跡と重複している。貯蔵庫というような性格から、建替えに伴い次々と作られていったのであろう。住居跡のまわりに多く、遠くなるに従い減っていくという傾向が両者の関係を示している。4区は群集する傾向にあるのに対して、3区は住居跡との関係が稀薄で散在する傾向にある。また、形状が不安定であることも3区の特徴である。ただし、後述するようにピットの数は圧倒的に多く、すべてが遺構ではないにしても掘立柱建物跡といったような、何らかの施設を考えておくべきであろう。

形状は、円形が57基と最も多く、以下不整形4基、楕円形9基、長方形2基、方形2基である。

円形	直径50cm以下	1基	85号
	直径100cm以下	31基	7・8・9・12・13・14・15・16・20・22・33・35・36・37・39・41・45・46・63・64・65・66・68・69・70・71・73・74・78・80・83号
	直径150cm以下	20基	2・3・4・6・11・30・38・42・44・47・48・54・56・58・60・61・62・77・81・84号
	直径150cm以上	5基	1・57・59・76・82号
不整形		4基	5・10・18・19号
楕円形		9基	17・23・25・40・55・67・72・75・79号
長方形		2基	21・43号
方形		2基	34・51号

楕円形と長方形のうち、21号、75号、76号、79号の4基は、落とし穴である。低地に向かって等高線に直交していて、21号、75号、79号の3基は同じ等高線に同じような間隔で並んでいる。そのうちのひとつ、75号は76号と縦列に並んでいる。

1号土坑（第24・32図 PL24・69）

5区、60O-6グリッドにある。長軸が175cm、短軸が165cmの円形、深さは45cmである。暗褐色砂質土、褐色砂質土などで自然埋没している。遺物は、打製石斧1点、30cm大の石2個、手の平大の石4個、覆土中から関山式、諸磯c式、浮島Ⅱ式の深鉢の破片が出土している。縄文時代前期、5区で最大の土坑である。

2号土坑（第24・32図 PL24・69）

5区、60OP-6グリッドにある。長軸が90cm、短軸が87cmの円形、深さは21cmである。黒褐色砂質土、暗褐色砂質土で自然埋没している。遺物は、凹石1点、剥片2点、諸磯b式の深鉢破片2点が出土している。縄文時代前期の土坑である。

3号土坑（第24・32図 PL24・69）

5区、60P-6グリッドにある。長軸と短軸がともに105cmの円形、深さは46cmである。ロームを含む褐色砂質土で自然埋没している。遺物は、1～4が同一個体で表裏に細い平行沈線文を施している。5は、諸磯b式の浮線文、6は単節RL縄文、7は変形貝殻文を施した浮島Ⅱ式である。このほかに剥片4点、深鉢の

破片5点が出土している。縄文時代前期の土坑である。

4号土坑（第24図 PL24・25）

5区、60OP-6・7グリッドにある。長軸が119cm、短軸が114cmの円形、深さは27cmである。にぶい黄褐色砂質土で自然埋没している。遺物は、諸磯b式の平行爪形文と単節RL縄文を施した深鉢の破片4点が出土している。縄文時代前期の土坑である。

5号土坑（第24図 PL25）

5区、60Q-7グリッドにある。東側に長軸が36cm、短軸が30cm、深さ26cmのピットが重複している。長軸が125cm、短軸が100cmの不整形、深さは20cmである。にぶい黄褐色砂質土、黄褐色砂質土で自然埋没している。出土した遺物はない。縄文時代前期の土坑である。

6号土坑（第24・32図 PL25・69）

5区、60P-6グリッドにある。1号住居跡に重複し、住居跡よりも新しい。長軸が135cm、短軸が114cmの円形、底面が残るだけで深さは8cmである。覆土は、褐色砂質土による自然埋没である。遺物は、1の深鉢ほかに、深鉢の破片4点が出土している。縄文時代前期の土坑である。

7号土坑（第24図 PL25）

5区、60P-7グリッドにある。長軸が89cm、短軸が78cmの円形、深さは30cmである。黄褐色砂質土で自然埋没している。出土した遺物はない。時期は、縄文時代前期の土坑である。

8号土坑（第24図）

5区、60O-6・7グリッド、北東部は調査区外である。長軸は40cm以上、短軸が72cmの円形、深さは26cmである。褐色砂質土で自然埋没している。出土した遺物はない。縄文時代前期の土坑である。

9号土坑（第24図 PL25・26）

5区、60P-7グリッド、2号住居跡の北壁の中央部に重複している。土坑が新しい。長軸が90cm、短軸が90cmの円形、深さは34cmである。褐色砂質土とにぶい黄褐色砂質土で自然埋没している。出土した遺物はない。縄文時代前期の土坑である。

10号土坑（第24・32図 PL26・69）

5区、60PQ-7グリッド、2号住居跡に重複し、土坑が新しい。北側の先端になるほど深くなり、暗色帯にまで達している。暗色帯の前後には、鬼板と呼ばれる鉄分の凝集層があり、これが目的で掘られたかのようである。鉄分の凝集層は、As-BP層が変化したものらしく、厚さは最大で10cmである。長軸が206cm、短軸が87cm以上の楕円形、深さは30cm以上である。覆土は、褐色砂質土とにぶい黄褐色砂質土、黄褐色砂質土で自然埋没している。遺物は、1が波状口縁の深鉢で単節LR縄文、2が深鉢で縄文地に平行沈線文、3、4は平行沈線文で浮島Ⅱ式の深鉢である。5は無文の浅鉢である。ほかに剥片が6点出土している。縄文時代前期の暗色帯前後の粘土か、鉄分が凝集した鬼板を採掘した跡と見られる。

第4章 検出された遺構と遺物

11号土坑（第25図 PL26）

5区、60P Q-7・8グリッドにある。長軸が115cm、短軸が92cmの円形、深さは15cmである。褐色砂質土などで自然埋没している。出土した遺物はない。縄文時代前期の土坑である。

12号土坑（第25・32図 PL26・70）

5区、60P-7グリッドにある。長軸が90cm、短軸が64cmの推定円形、深さは32cmである。ロームブロックを多く含んだ黄褐色砂質土で自然埋没している。遺物の1は、諸磯b式の深鉢口縁の一部である。口唇部を肥厚させ、渦巻き状となっている。ほかに剥片1点が出土している。縄文時代前期の土坑である。

13号土坑（第25・32・33図 PL26・70）

5区、60O P-7グリッドにある。14号土坑よりも古い。長軸が92cm、短軸が60cm以上の円形、深さは53cmである。暗褐色砂質土で自然埋没している。遺物は、黒浜式、諸磯b式の深鉢の破片5点、スクレイパー1点のほかに剥片3点が出土している。縄文時代前期の土坑である。

14号土坑（第25・33図 PL70）

5区、60O P-7グリッドにある。13号土坑よりも新しい。長軸が87cm、短軸が75cm以上の円形、深さは40cmである。にぶい黄褐色砂質土で自然埋没している。遺物は、剥片1点、諸磯b式の平行爪形文と縄文を施した深鉢の破片5点が出土している。縄文時代前期の土坑である。

15号土坑（第25図 PL27）

5区、60P-7グリッドにある。長軸が90cm、短軸が90cmの円形、深さは25cmである。にぶい黄褐色砂質土で自然埋没している。遺物は、剥片2点、深鉢の破片3点が出土している。縄文時代前期の土坑である。

16号土坑（第25図 PL27）

5区、60P-7グリッド、2号住居跡の北東隅に重複し、住居跡よりも古い。長軸が90cm、短軸が50cm以上の円形、底面を残すだけで深さは5cmである。黄褐色砂質土で自然埋没している。出土した遺物はない。縄文時代前期の土坑である。

17号土坑（第25図 PL27）

5区、60P-7グリッドにある。長軸が125cm、短軸が80cmの楕円形、深さは5cmである。底面を残すだけで、覆土は褐色砂質土である。黒曜石の剥片1点が出土している。縄文時代前期の土坑である。

18号土坑（第25図 PL27）

5区、60P Q-7グリッドにある。長軸が143cm、短軸が70cmの不整形、深さは15cmである。底面を残すだけで、覆土は褐色砂質土などで自然埋没している。出土した遺物はない。縄文時代前期の土坑である。

19号土坑（第25図 PL27）

5区、60P-6・7グリッド、2号住居跡の東壁の中央部に20号土坑とともに重複している。20号土坑より

も古い。長軸が158cm、短軸が63cmの長方形、深さは16cmである。褐色砂質土で自然埋没している。3点の剥片が出土している。縄文時代前期の土坑である。21号土坑とは、形状、覆土の点でよく似ている。

20号土坑（第25・33図 PL27・70）

5区、60P-6グリッド、2号住居跡の東壁の中央部に19号土坑とともに重複している。住居跡よりも新しく、19号土坑よりも新しい。長軸が60cm、短軸が55cmの円形、深さは22cmである。褐色砂質土、暗褐色砂質土で自然埋没している。遺物は、深鉢の破片7点が出土している。縄文時代前期の土坑である。

21号土坑（第26・33図 PL28・70）

5区、60PQ-6・7グリッド、2号住居跡の中央部に重複し、住居跡よりも新しい。長軸が182cm、短軸が60cmの長方形、深さは15cmである。長軸は、N100°Eである。暗褐色砂質土、にぶい黄褐色砂質土で自然埋没している。遺物は、短冊形の打製石斧1点が出土している。縄文時代前期の落とし穴である。

22号土坑（第26図 PL28）

5区、60P-7グリッド、2号住居跡の中央部から北東部にかけて重複している。北側に9号土坑、東に16号土坑がある。長軸が63cm、短軸が59cmの円形、深さは10cmである。褐色砂質土で自然埋没している。深鉢の破片1点が出土している。縄文時代前期の土坑である。

25号土坑（第26・33図 PL29・70）

5区、60O-2グリッドにある。長軸が115cm、短軸が77cmの楕円形、深さは20cmである。覆土は、暗褐色砂質土、黒褐色砂質土で自然埋没している。下位にローム粒が混入している。遺物は、短冊形の打製石斧1点が出土している。縄文時代前期の土坑である。

30号土坑（第26図 PL30）

1区、39I-11グリッド、上面に6号道が重複している。As-C混入黒褐色砂質土を取り除いた、ソフトローム層の上面で検出した。長軸が87cm、短軸が84cmの円形、深さは20cmである。覆土は、黒褐色と黒色砂質土で自然埋没している。縄文時代前期の土坑である。掘り方は、下位になるほどはつきりとししない。出土した遺物もなく、人為性に乏しい。

33号土坑（第26・33図 PL30・70）

3区、50C-3グリッド、旧石器試掘坑でローム漸移層を取り除いたソフトローム層上面で検出した。長軸が83cm、短軸が73cmの円形、深さは23cmである。覆土は、黒褐色砂質土とにぶい黄褐色砂質土で自然埋没している。黒浜式の深鉢破片1点が出土している。縄文時代前期の土坑である。

34号土坑（第26・33図 PL31・70）

3区、50C-3グリッドにある。長軸が90cm、短軸が87cmの方形、断面は袋状、深さは30cmである。覆土は、にぶい黄褐色砂質土、黒褐色砂質土で自然埋没している。遺物は、深鉢の口縁部などの破片9点が出土している。周囲1mの範囲からは、剥片や石が出土している。縄文時代前期の土坑である。

第4章 検出された遺構と遺物

35号土坑（第26・33図 PL31・70）

3区、50D-4グリッドにある。長軸が85cm、短軸が77cmの円形、深さは20cmである。覆土は、にぶい黄褐色砂質土と黒褐色砂質土の斑状の混土である。遺物は、短冊形打製石斧の破片1点と剥片1点、黒浜式の深鉢破片1点が出土している。縄文時代前期の土坑である。

36号土坑（第26・33図 PL31・70）

3区、50C-2グリッドにある。長軸が57cm、短軸が57cmの円形、深さは40cmである。覆土は、3層の黒褐色砂質土上面までが掘り方で、1層、2層は壁からの崩落である。遺物は、底面で黒浜式の深鉢破片1点が出土している。縄文時代前期の土坑である。

37号土坑（第26図 PL31）

3区、50BC-3グリッドにある。長軸が75cm、短軸が75cmの円形、深さは27cmである。覆土は、黒褐色砂質土とにぶい黄褐色砂質土で自然埋没している。出土した遺物はない。縄文時代前期の土坑である。

38号土坑（第26・33図 PL31・32・70）

3区、50CD-1グリッドにある。長軸が150cm、短軸が137cmの円形、深さは90cmである。覆土は、暗褐色砂質土と黒褐色砂質土、にぶい黄褐色砂質土の混土による自然埋没である。遺物は、1の磨石1点のほかに剥片1点、黒浜式の深鉢4個体以上の破片22点が出土している。縄文時代前期の土坑である。

39号土坑（第27図 PL32）

3区、50D-2グリッドにある。長軸が75cm、短軸が70cmの円形、深さは25cmである。覆土は、にぶい黄褐色砂質土を主にした黒褐色砂質土と黄褐色砂質土との混土で、固く締まる。自然埋没である。黒浜式の深鉢破片8点が出土している。縄文時代前期の土坑である。

40号土坑（第27図 PL32）

3区、50D-2グリッドにある。長軸が115cm、短軸が70cmの楕円形、深さは25cmである。黒褐色砂質土で自然埋没している。出土した遺物はない。縄文時代前期の土坑である。

41号土坑（第27図 PL 32）

4区、49S-7グリッドにある。長軸が95cm、短軸が95cmの円形、深さは25cmである。褐色砂質土、にぶい黄褐色砂質土で自然埋没している。遺物は、剥片1点と黒浜式の深鉢の破片1点が出土している。縄文時代前期の土坑である。

42号土坑（第27図 PL32・33）

4区、49ST-8グリッドにある。長軸が105cm、短軸が94cmの円形、深さは20cmである。暗褐色砂質土、褐色砂質土などで自然埋没している。出土した遺物はない。縄文時代前期の土坑である。

43号土坑（第27・33図 PL33・70）

4区、49T-7・8グリッドにある。長軸が173cm、短軸が87cmの楕円形、深さは30cmである。底面にピットの跡らしい凹凸がある。黒褐色砂質土、黄褐色砂質土、にぶい黄褐色砂質土で自然埋没している。遺物は、黒浜式の深鉢の破片1点が出土している。縄文時代前期、底面の様子から落とし穴とも見られる。

44号土坑（第27図 PL33）

4区、49T-8グリッドにある。長軸が130cm、短軸が103cmの円形、断面は椀状、深さは26cmである。暗褐色砂質土、にぶい黄褐色砂質土で自然埋没している。遺物は、黒浜式の深鉢の破片2点が出土している。縄文時代前期の土坑である。

45号土坑（第27・33図 PL33・70）

4区、49T-8グリッドにある。長軸が97cm、短軸が97cmの円形、底面は平坦、深さは24cmである。にぶい黄褐色砂質土、暗褐色砂質土などで自然埋没している。遺物は、掲載したほかに黒浜式の深鉢の破片5点が出土している。縄文時代前期の土坑である。

46号土坑（第27図 PL33・34）

4区、49T-8、50A-8グリッドにある。長軸が95cm、短軸が90cmの円形、深さは25cmである。暗褐色砂質土、黄褐色砂質土で自然埋没している。遺物は、剥片1点、黒浜式の深鉢の破片1点が出土している。縄文時代前期の土坑である。

47号土坑（第27図 PL34）

4区、49T-9グリッドにある。長軸が100cm、短軸が93cmの円形、深さは23cmである。暗褐色砂質土、黄褐色砂質土で自然埋没している。出土した遺物はない。縄文時代前期の土坑である。

48号土坑（第28図 PL34）

4区、50A-9グリッドにある。長軸が121cm、短軸が108cmの円形、深さは20cmである。黒褐色砂質土、黄褐色砂質土などで自然埋没している。出土した遺物はない。縄文時代前期の土坑である。

51号土坑（第28図 PL35）

4区、50C-10グリッドにある。61号土坑とは上下の位置関係にあり、同一のものである。長軸が150cm、短軸が102cmの楕円形、深さは36cmである。黒褐色砂質土、暗褐色砂質土で自然埋没している。遺物は、須恵器杯の破片1点が出土しているが混入である。縄文時代前期の土坑である。

54号土坑（第28・33図 PL35・36・70）

3区、49LM-2グリッドにある。長軸が150cm、短軸が140cmの円形、深さは35cmである。黒褐色砂質土で自然埋没している。遺物の1は、黒浜式の深鉢の口縁部破片である。縄文時代前期の土坑である。

第4章 検出された遺構と遺物

55号土坑（第28・33図 PL36・70）

3区、49N-2グリッドにある。長軸が104cm、短軸が66cmの楕円形、深さは20cmである。暗褐色砂質土で自然埋没している。遺物は、黒浜式の深鉢の破片4点が出土している。縄文時代前期の土坑である。

56号土坑（第28・33・34図 PL36・70・71）

3区、39K-18グリッドにある。長軸が122cm、短軸が107cmの円形、深さは30cmである。黒褐色砂質土、暗褐色砂質土などで自然埋没している。遺物は、黒浜式の深鉢の破片30点、剥片2点が出土している。縄文時代前期の土坑である。

57号土坑（第28・34図 PL36・71）

3区、39JK-18グリッドにある。長軸が167cm、短軸が142cmの円形、深さは40cmである。暗褐色砂質土、褐色砂質土で自然埋没している。遺物は、覆土の中位から1の粗粒安山岩製の石皿が出土している。長さ15.0cm、最大幅17.0cm、厚さ7.8cm、板状で破損後、石皿から台石に転用している。裏面には、蜂の巣状に穴があいている。縄文時代前期の土坑である。

58号土坑（第28図 PL36）

3区、39M-20グリッドにある。長軸が102cm、短軸が80cm以上の円形、断面は椀状で深さは33cmである。にぶい黄褐色砂質土で自然埋没している。出土した遺物はない。縄文時代前期の土坑である。

59号土坑（第28・34図 PL37・71）

4区 50CD-10・11グリッドにある。長軸が158cm、短軸が135cmの円形、断面はフラスコ状、深さは34cmである。褐色砂質土と黒褐色砂質土で自然埋没している。遺物は、剥片1点、黒浜式の深鉢の破片2点が出土している。底面の壁際からは、拳大までの石が約10個出土している。埋没時に混入したのではなく、何らかの意図があったものであろう。縄文時代前期の土坑である。

60号土坑（第28図 PL37）

4区、49T-9グリッドにある。ソフトローム層中で検出した。長軸が131cm、短軸が115cmの円形、深さは23cmである。主に暗褐色砂質土で埋没している。覆土から長さ24cm、幅13cm、厚さ18cmほどの大きな割石1点が出土している。特に加工した跡は見られないが墓標のように使われたのかどうか。このほかに黒浜式の深鉢の破片1点が出土している。縄文時代前期の土坑である。

61号土坑（第28図 PL37）

4区、50C-10グリッドにある。51号土坑と上下の位置にあり、同一の土坑である。長軸が137cm、短軸が128cmの円形、断面はフラスコ状、深さは11cmである。黒ボク土と褐色砂質土の混土で自然埋没している。出土した遺物はない。縄文時代前期の土坑である。

62号土坑（第29図 PL37・38）

4区、50E-10グリッド、63号、64号土坑とともに24号住居跡に重複している。古い方から24号住居跡、62

号土坑、63号土坑、最も新しいのが64号土坑である。長軸が111cm、短軸が96cmの円形、深さは42cmである。湿り気をおびて、粘土化したような暗褐色砂質土で自然埋没している。覆土の中～下位で同一と見られる諸磯a式の深鉢の破片5点と剥片1点が出土している。縄文時代前期の土坑である。

63号土坑（第29・34図 PL38・71）

4区、50E-10グリッド、62号、64号土坑とともに24号住居跡に重複している。新旧関係は、62号土坑と同じである。長軸が76cm、短軸が68cmの円形、深さは42cmである。62号土坑と同じ湿り気のある、褐色砂質土で埋没している。深鉢は、同一個体で10片が覆土の中位にまとまる。縄文時代前期の土坑である。

64号土坑（第29・34図 PL38・71）

4区、50E-10グリッドにある。62号、63号土坑とともに24号住居跡に重複している。新旧関係は、62号土坑と同じである。長軸が74cm、短軸が51cm以上の推定円形、深さは28cmである。褐色砂質土で自然埋没している。遺物は、剥片1点、磨石1点、諸磯a式の深鉢の破片1点が出土している。縄文時代前期の土坑である。

65号土坑（第29・34図 PL38・71）

5区、60O-4グリッドにある。長軸が80cm、短軸が57cmの楕円形、深さは17cm、断面は袋状、底面には凹凸がある。暗褐色砂質土、黒褐色砂質土で自然埋没している。遺物は、剥片1点、浅鉢の破片1点、加曾利E式の深鉢の破片1点が出土している。縄文時代前期の土坑である。

66号土坑（第29図 PL38）

5区、60S-2グリッドにある。長軸が71cm、短軸が63cmの円形、深さは10cmである。暗褐色砂質土で自然埋没している。出土した遺物はない。縄文時代前期の土坑である。

67号土坑（第29図 PL39）

5区、60R-4グリッドにある。長軸が110cm、短軸が68cmの楕円形、深さは20cmである。暗褐色砂質土で自然埋没している。遺物は、剥片2点が出土している。縄文時代前期の土坑である。

68号土坑（第29・34図 PL39・71）

5区、60P-3グリッドにある。長軸が98cm、短軸が92cmの円形、深さは52cmである。黒褐色砂質土、暗褐色砂質土ほかで自然埋没している。遺物は、黒浜式、諸磯a式の深鉢破片24点が出土している。時期は、縄文時代前期の土坑である。

69号土坑（第29図 PL39）

5区、60Q-3グリッドにある。長軸が60cm、短軸が46cmの円形、斜めに掘り込まれ、最も深い所で48cmである。暗褐色砂質土で自然埋没している。出土した遺物はない。縄文時代前期の土坑である。

第4章 検出された遺構と遺物

70号土坑（第29図 PL39）

5区、60QR-3・4グリッドにある。長軸が95cm、短軸が58cmの円形、深さは19cmである。暗褐色砂質土で自然埋没している。出土した遺物はない。縄文時代前期の土坑である。

71号土坑（第29・35図 PL40・71）

5区、60T-4グリッドにある。長軸が98cm、短軸が94cmの円形、深さは20cmである。暗褐色砂質土で自然埋没している。遺物は、黒浜式の深鉢の破片1点が出土している。縄文時代前期の土坑である。

72号土坑（第29図 PL40）

5区、60R-5グリッドにある。長軸が125cm、短軸が65cmの楕円形、深さは10cmである。暗褐色砂質土、褐色砂質土で自然埋没している。出土した遺物はない。縄文時代前期の土坑である。

73号土坑（第30・35図 PL40・41）

5区、60S-3グリッドにある。長軸が97cm、短軸が84cmの円形、深さは20cmである。暗褐色砂質土、褐色砂質土で自然埋没している。遺物は、関山式か黒浜式の深鉢の破片1点が出土している。縄文時代前期の土坑である。

74号土坑（第30・35図 PL40・71）

5区、60S-2・3グリッドにある。長軸が70cm、短軸が60cmの円形、深さは25cmである。暗褐色砂質土、褐色砂質土で自然埋没している。剥片1点が出土している。縄文時代前期の土坑である。

75号土坑（第30図 PL41）

5区、60QR-2・3グリッドにある。長軸が245cm、短軸が104cmの長方形、深さは127cmである。底面は平坦で、中央部に直径が20cm、深さ13cmのピットが1基あいている。暗褐色砂質土、褐色砂質土、黒褐色砂質土などで自然埋没している。覆土の中位で人頭大の石1点が出土している。縄文時代前期の落とし穴である。

76号土坑（第30・35図 PL41・71）

5区、60P-4グリッドにある。長軸が195cm、短軸が145cmの楕円形、深さは90cmである。底面は平坦で、中央部に直径10cmのピットが1基あいている。黒色土、暗褐色砂質土、黒褐色砂質土で自然埋没している。遺物は、関山式の深鉢の破片2点が出土している。縄文時代前期の落とし穴である。

77号土坑（第30・35図 PL41・71）

5区、51A-3グリッドにある。長軸が130cm、短軸が120cmの円形、深さは18cmである。暗褐色砂質土、褐色砂質土で自然埋没している。遺物は、剥片1点、形式不明の深鉢7点が出土している。1は、深鉢の底部のまわりを意図的に打ち欠いたものである。用途は不明である。縄文時代前期の土坑である。

78号土坑（第30・35図 PL42・72）

5区、60T-3・4、51A-4グリッドにある。長軸が73cm、短軸が70cmの円形、深さは53cmである。暗褐

色砂質土、黒褐色砂質土で自然埋没している。遺物は、剥片2点、深鉢の破片2点が出土している。縄文時代前期の土坑である。

79号土坑（第31・35図 PL42・72）

5区、60S-3・4グリッドにある。長軸が255cm、短軸が145cmの楕円形、深さは100cmである。底面は平坦である。ピットの有無は、湧水が多くて確認していない。黒褐色砂質土、暗褐色砂質土で自然埋没している。遺物は、剥片4点、関山式の深鉢の破片4点が出土している。縄文時代前期の落とし穴である。

80号土坑（第31図 PL42）

5区、60ST-2・3グリッドにある。長軸が80cm、短軸が77cmの円形、深さは23cmである。暗褐色砂質土などで自然埋没している。出土した遺物はない。縄文時代前期の土坑である。

81号土坑（第31・35図 PL42・72）

5区、60ST-2・3グリッド、26号住居跡に重複している。土坑が新しい。長軸が122cm、短軸が104cmの円形、深さは53cmである。暗褐色砂質土、黒褐色砂質土で自然埋没している。遺物は、石核1点、剥片3点、関山式、諸磯b式の深鉢の破片5点が出土している。縄文時代前期の土坑である。

82号土坑（第31・35図 PL43・72）

5区、60S-2・3グリッドにある。長軸が172cm、短軸が156cmの円形、深さは42cmである。黒褐色砂質土、暗褐色砂質土で自然埋没している。遺物は、短冊形の打製石斧1点、剥片3点、諸磯b式の深鉢の破片6点が出土している。縄文時代前期の土坑である。

83号土坑（第31・35図 PL43・72）

5区、51A-2・3グリッド、27号住居跡に重複している。住居跡よりも新しい。長軸が94cm、短軸が82cmの円形、深さは30cmである。暗褐色砂質土、黒褐色砂質土で自然埋没している。遺物は、石匙1点、諸磯b式の深鉢1と2のほかに破片4点が出土している。縄文時代前期の土坑である。

84号土坑（第31図 PL43）

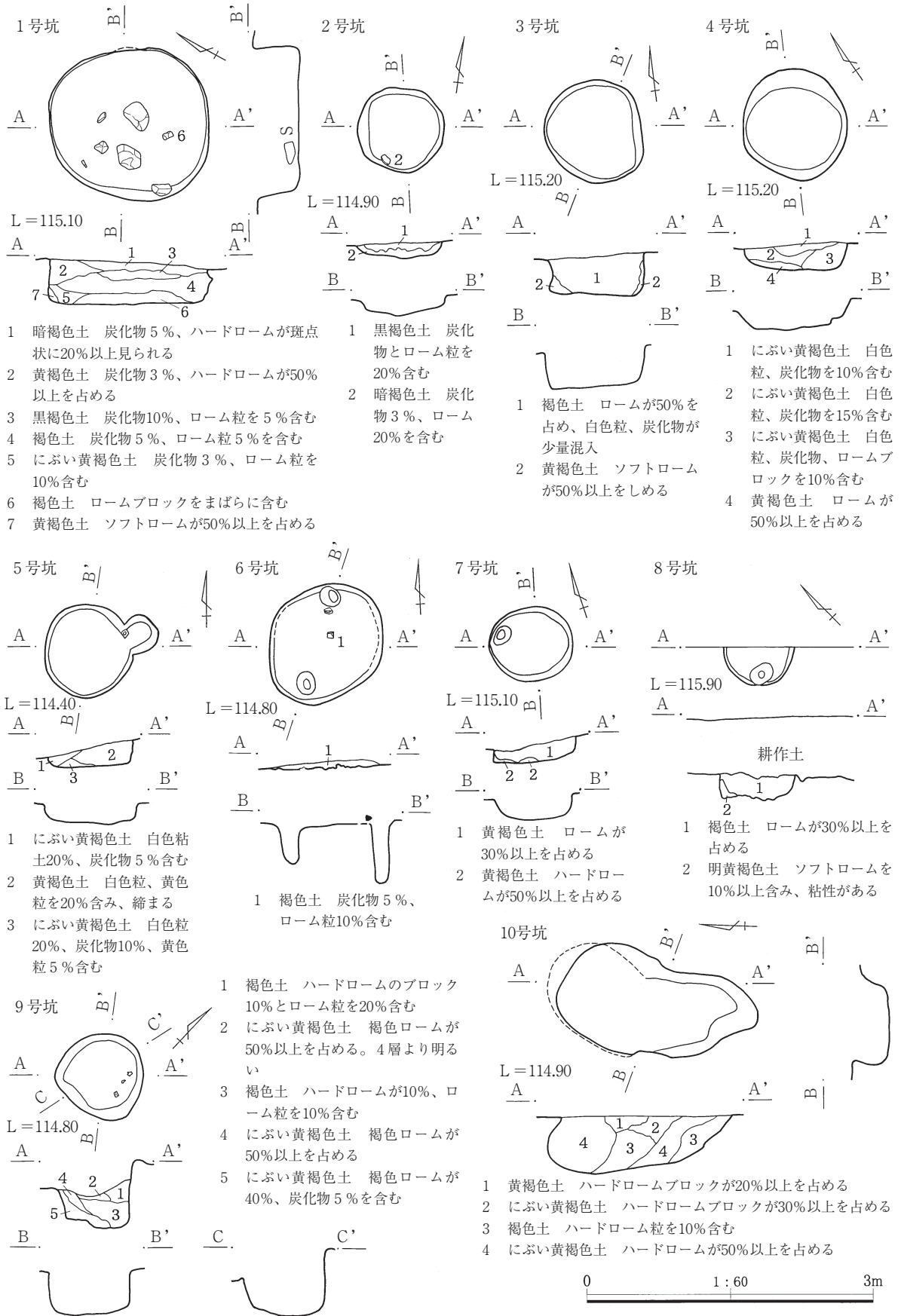
5区、60T-3グリッド、25号住居跡の床下であり、2号炉が重複している。住居跡よりも古い。長軸が100cm以上、短軸が94cmの円形、深さは30cmである。黒褐色砂質土と暗褐色砂質土で自然埋没している。遺物は、前期の深鉢破片4点が出土している。縄文時代前期の土坑である。

85号土坑（第31図 PL43）

5区、51A-3グリッド、25号住居跡の西壁に重複している。土坑が新しい。長軸が47cm、短軸が41cmの円形、深さは22cmである。暗褐色砂質土で自然埋没している。出土した遺物はない。縄文時代前期の土坑である。

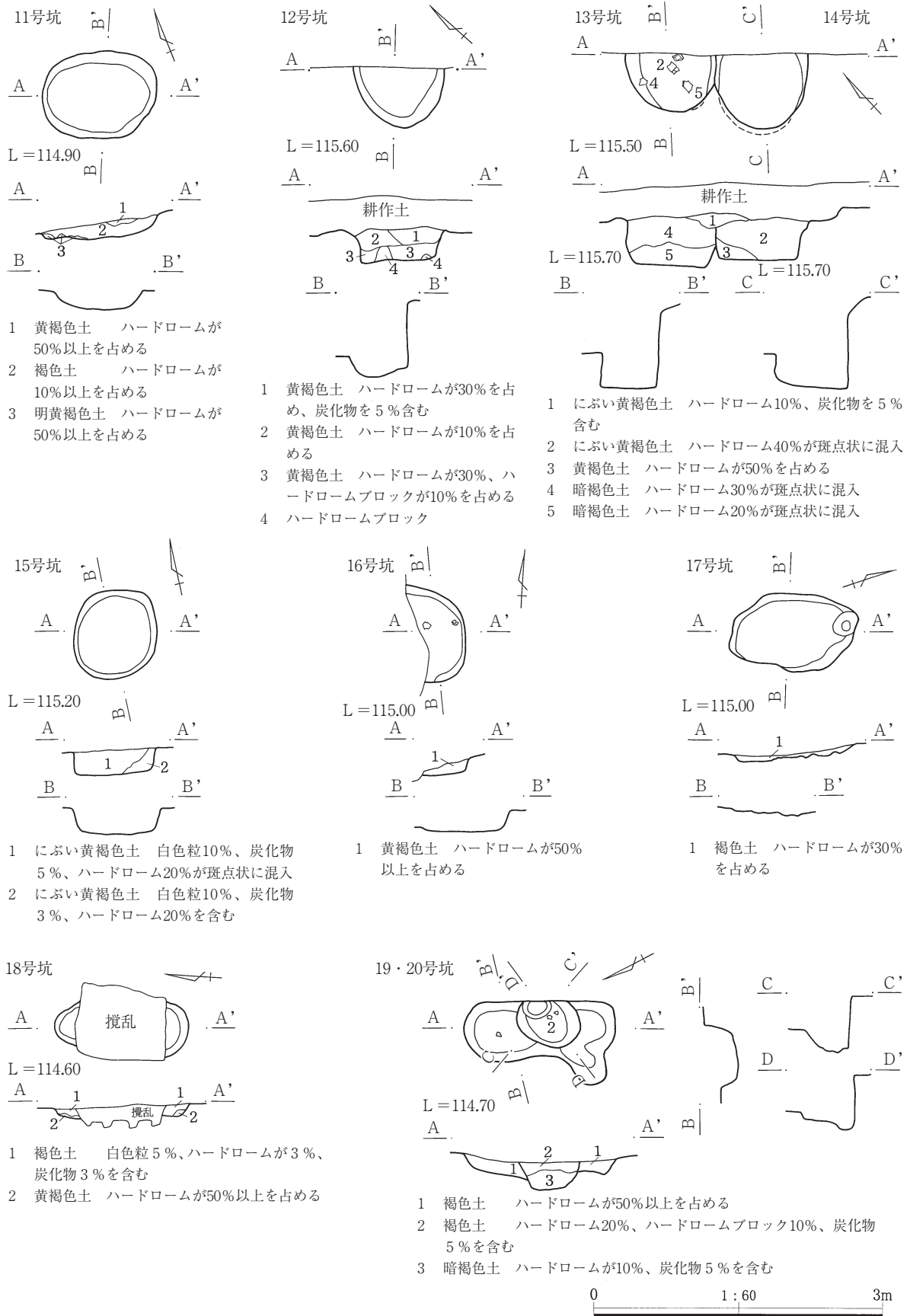


第23図 5区土坑分布図

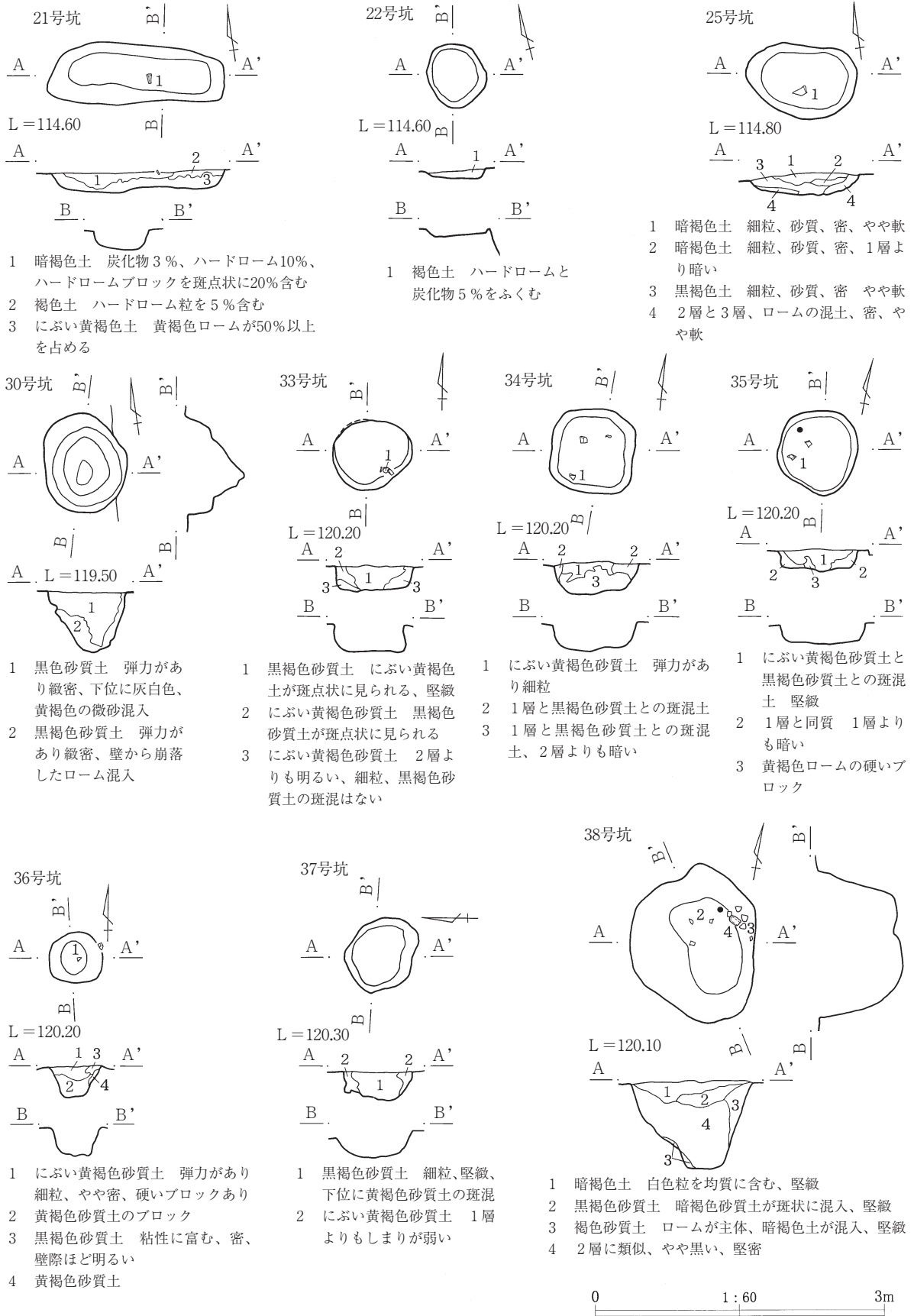


第24図 1号~10号土坑遺構図

第4章 検出された遺構と遺物

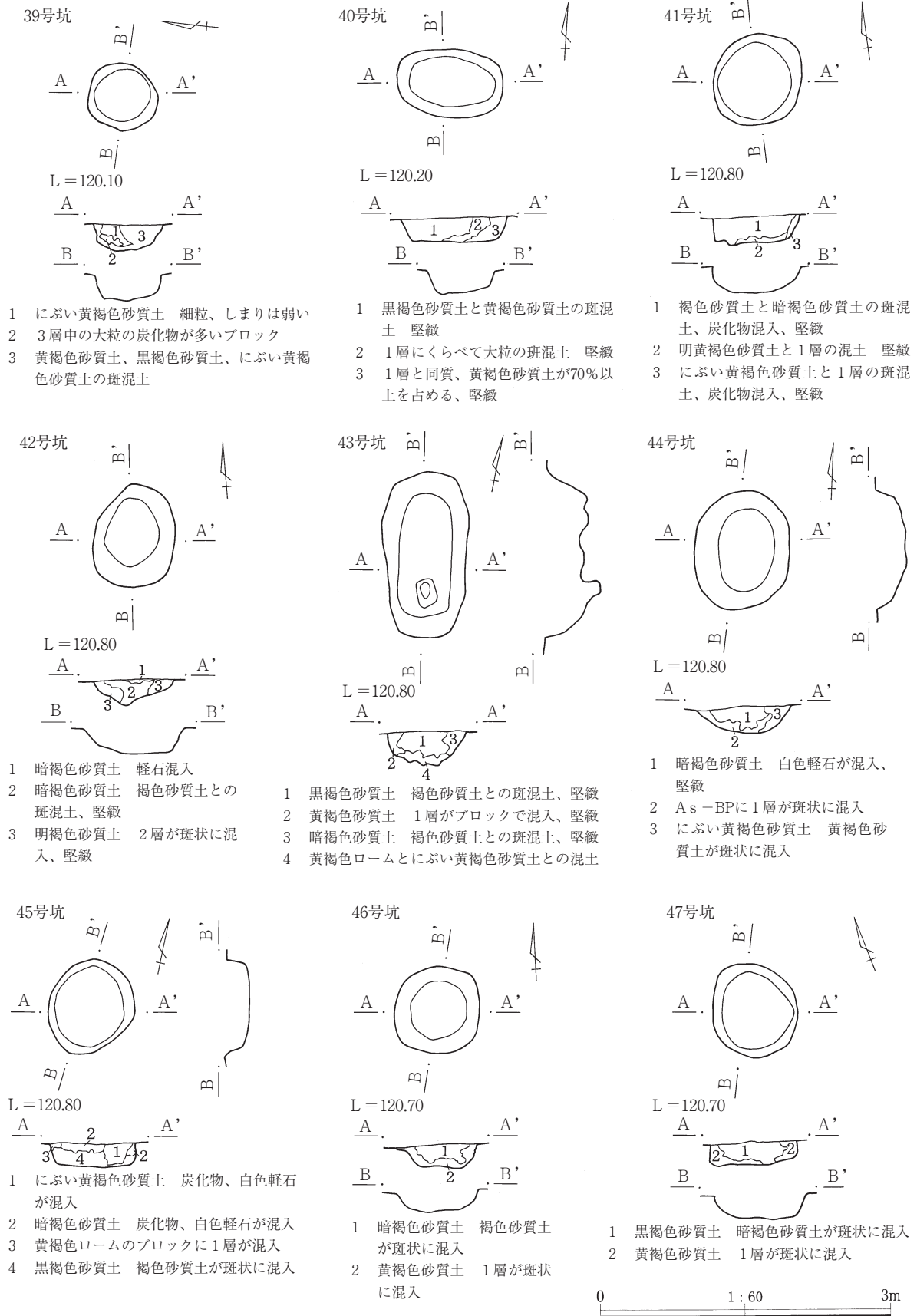


第25図 11号～20号土坑遺構図

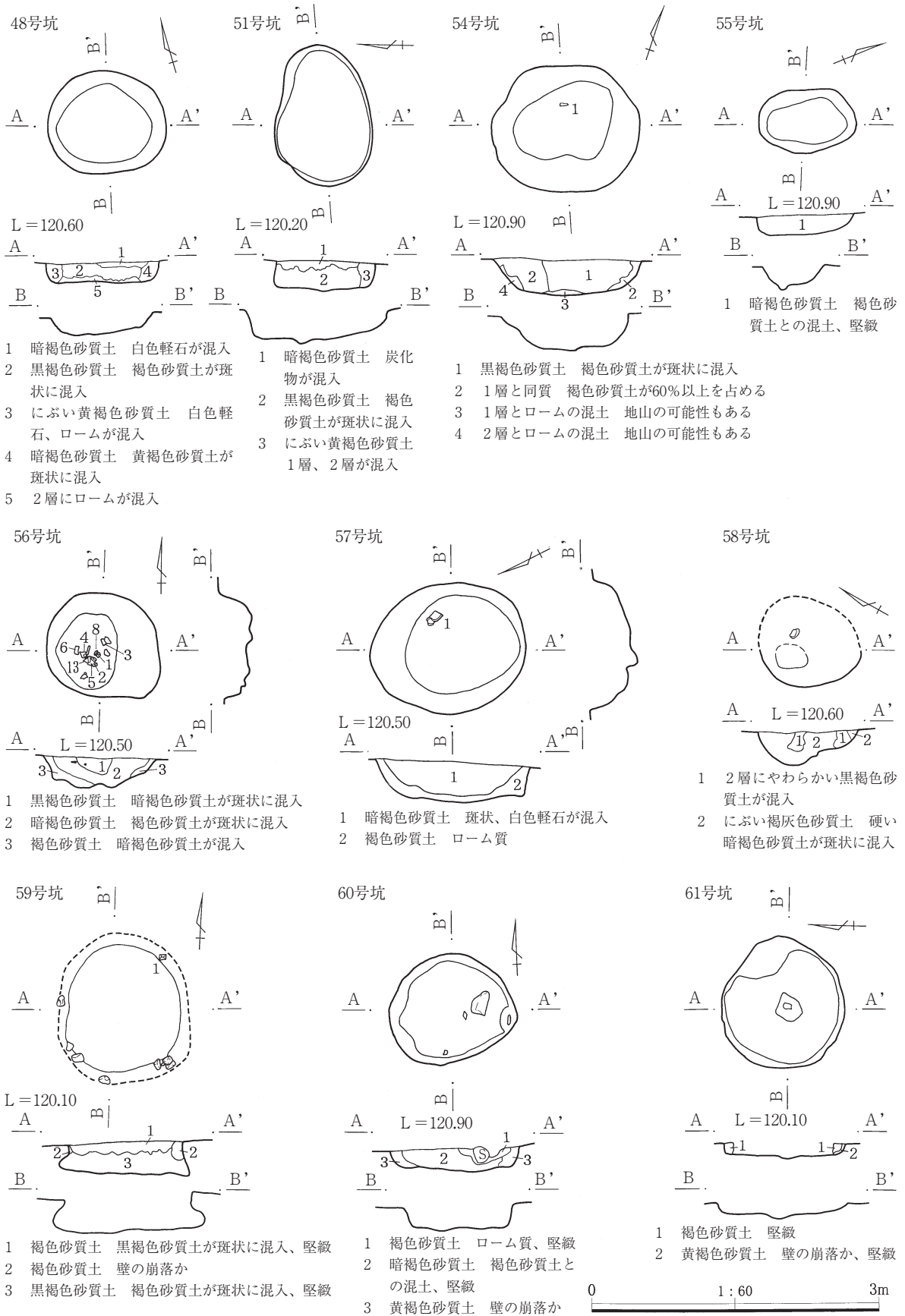


第26図 21・22・25・30・33～38号土坑遺構図

第4章 検出された遺構と遺物

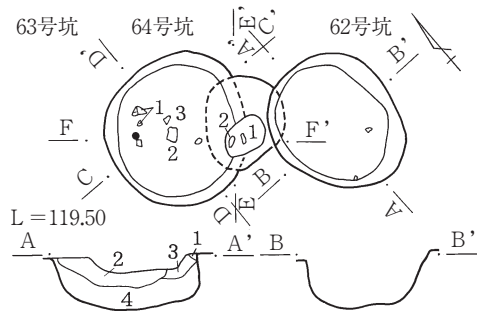


第27図 39~47号土坑遺構図



第28図 48・51・54～61号土坑遺構図

第4章 検出された遺構と遺物



- 1 褐色砂質土 壁の崩落か
- 2 暗褐色砂質土 褐色砂質土を斑状に混入
- 3 褐色砂質土 2層との斑状の混入、均質
- 4 褐色砂質土 1層よりもやや暗い、均質

C. C' D. D'

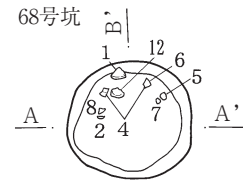


- 1 褐色砂質土 明暗差で斑状、
- 2 褐色砂質土 1層より暗い、均質

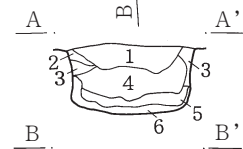
E. E' F. F'



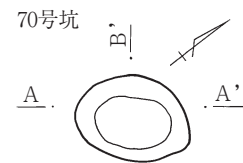
- 1 褐色砂質土 明暗差で斑状



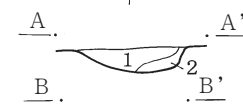
L=114.80



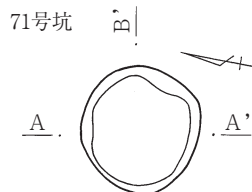
- 1 黒褐色砂質土 ロームが斑状に混入、軽石、炭化物が混入する、堅緻
- 2 黒褐色砂質土 1層よりもロームが多く明るい、軽石、炭化物は少ない
- 3 暗褐色砂質土 ローム粒、ロームブロックを含む、白色軽石が混入
- 4 暗褐色砂質土 3層のようなロームの混入はない
- 5 黒褐色砂質土 ローム分が多く、1層よりも明るい
- 6 褐色砂質土 ローム、暗褐色砂質土が混入



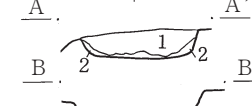
L=114.80



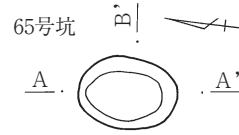
- 1 暗褐色砂質土 ロームが斑状に混入
- 2 暗褐色砂質土 1層よりもローム分が多い



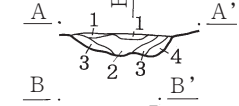
L=114.50



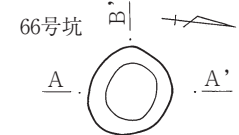
- 1 暗褐色砂質土 ロームが斑状に混入、炭化物が少量混入
- 2 暗褐色砂質土 1層と同質、炭化物、白色軽石はない



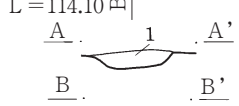
L=114.90



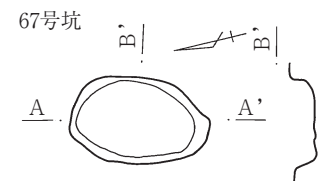
- 1 暗褐色砂質土 ローム粒、ロームブロックが少混
- 2 黒褐色砂質土 As-Cらしい軽石、炭化物が混入
- 3 暗褐色砂質土 1層と同質、ローム粒が混入、やや軟らかい
- 4 暗褐色砂質土 ロームが少量混入、やや軟らかい



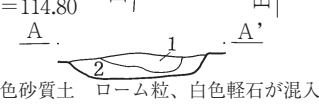
L=114.10



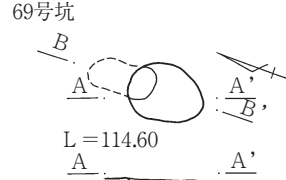
- 1 暗褐色砂質土 黄褐色砂質土が混入、堅緻



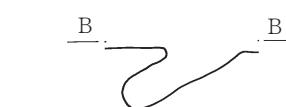
L=114.80



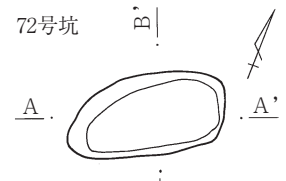
- 1 暗褐色砂質土 ローム粒、白色軽石が混入
- 2 暗褐色砂質土 1層にくらべてロームが多く、明るい



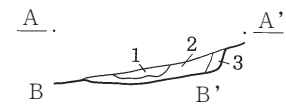
L=114.60



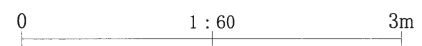
- 1 暗褐色砂質土 ローム粒、白色軽石が混入
- 2 暗褐色砂質土 1層よりもローム分が多く、明るい



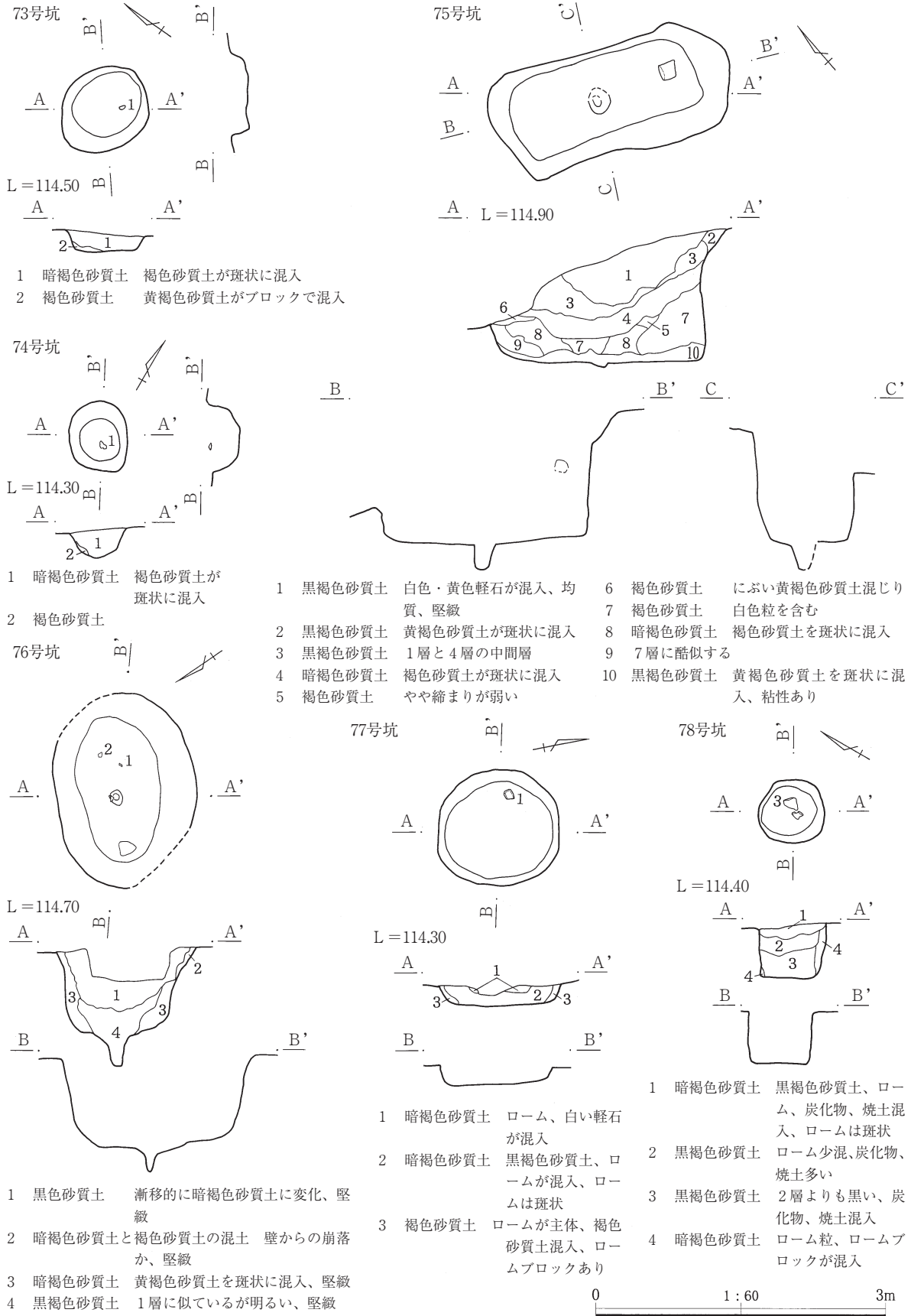
L=113.80



- 1 暗褐色砂質土 黄褐色砂質土が斑状に混入
- 2 暗褐色砂質土 ロームの混入がなく均質
- 3 褐色砂質土 水分で灰色をおびる

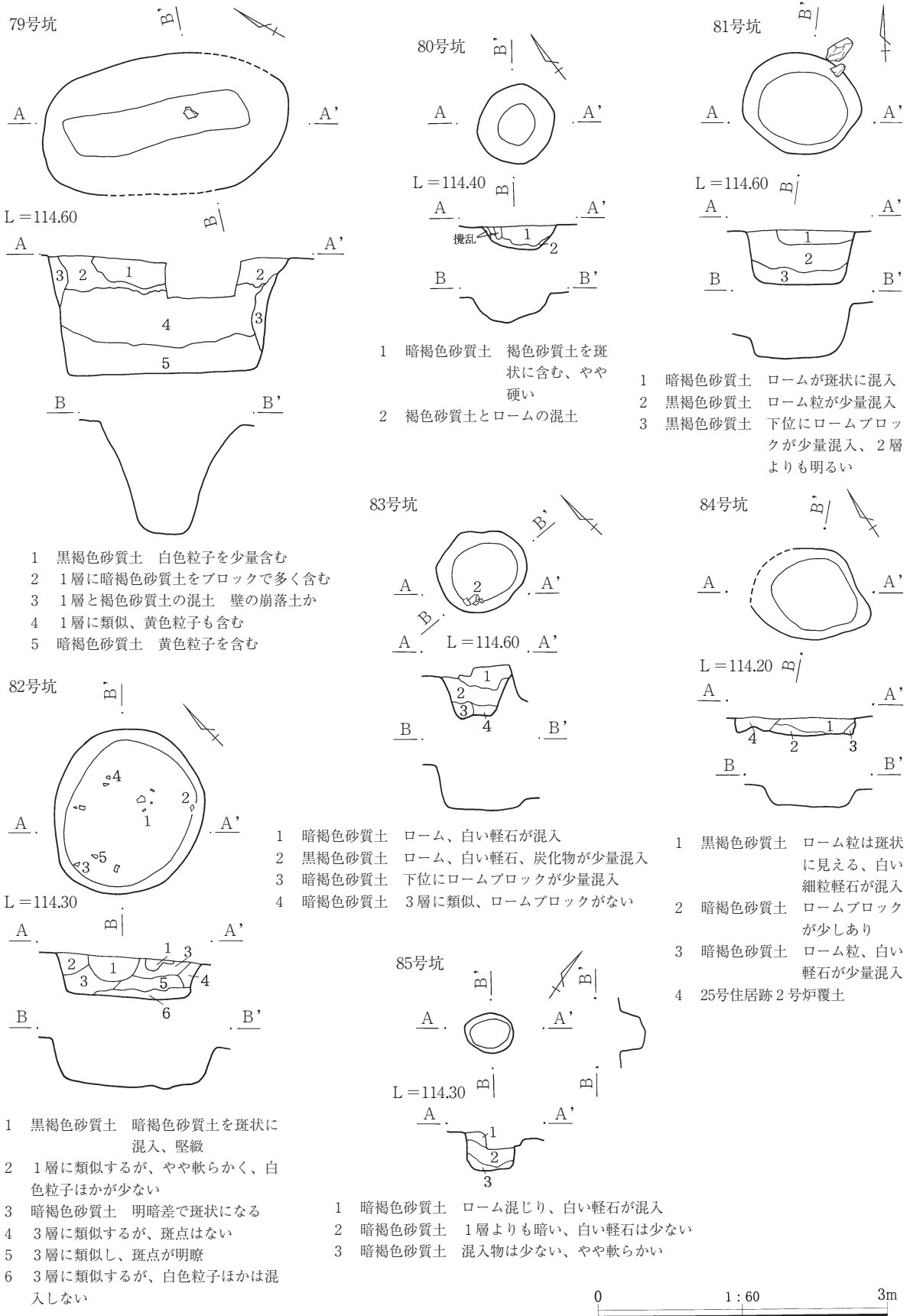


第29図 62~72号土坑遺構図

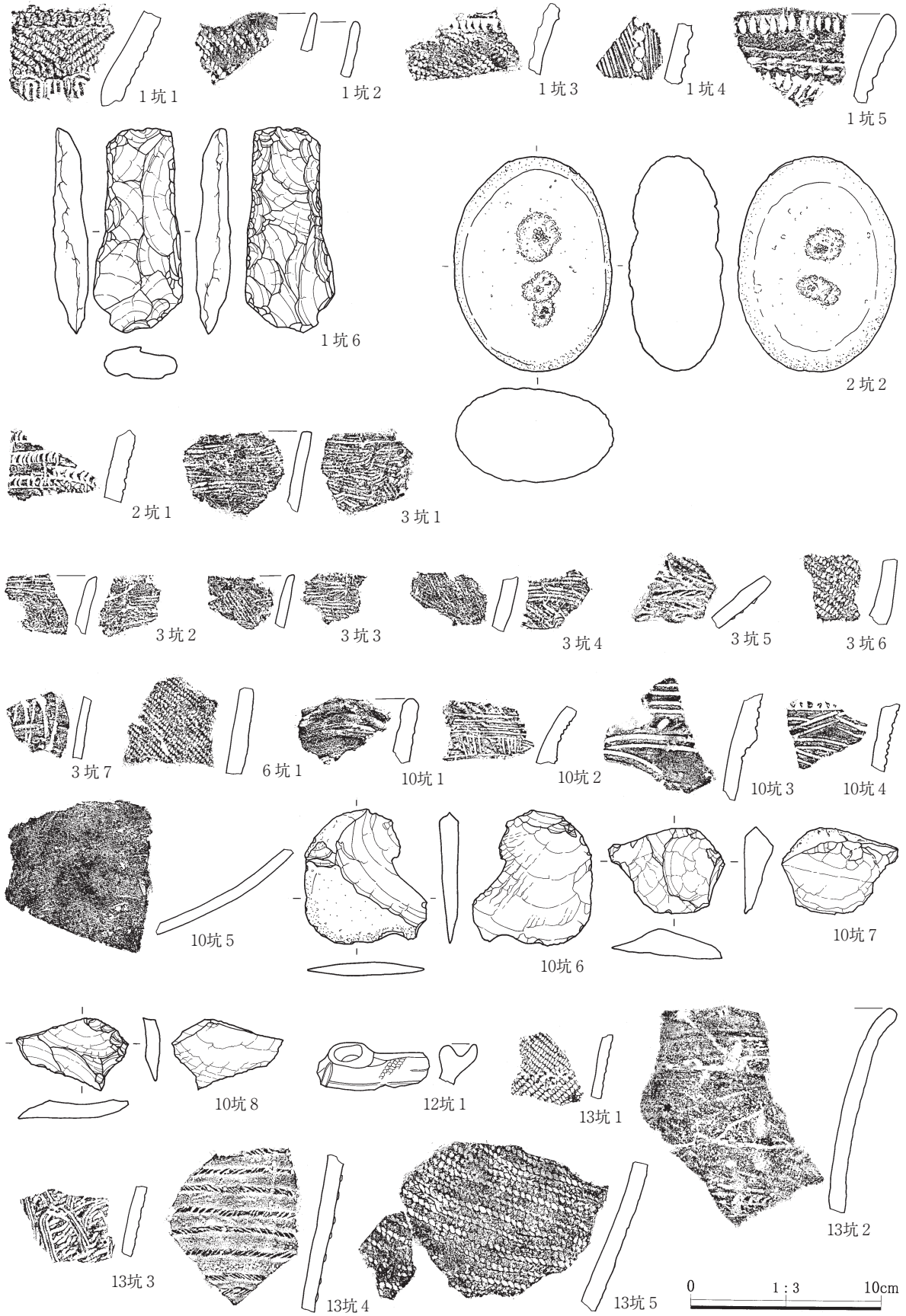


第30図 73~78号土坑遺構図

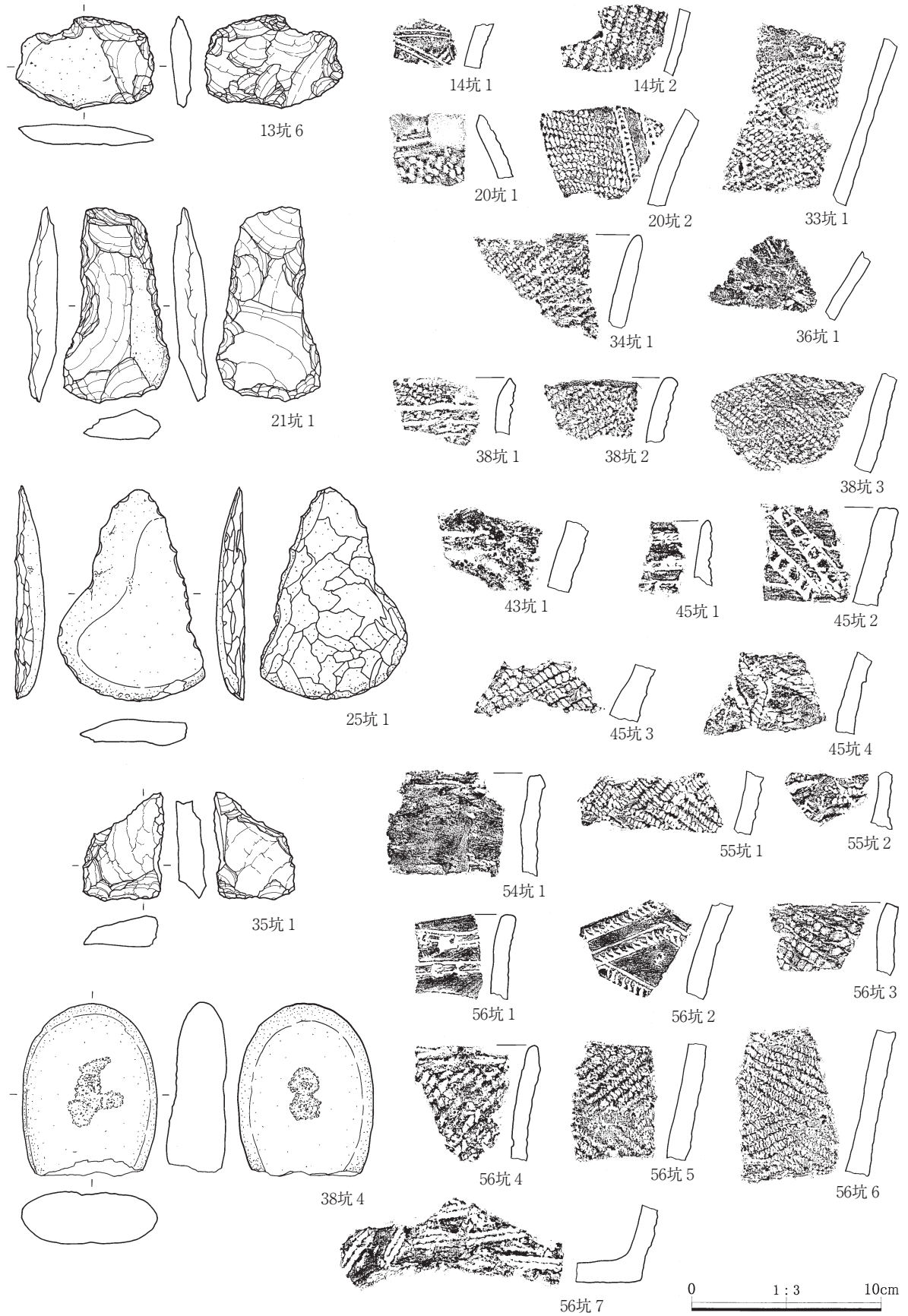
第4章 検出された遺構と遺物



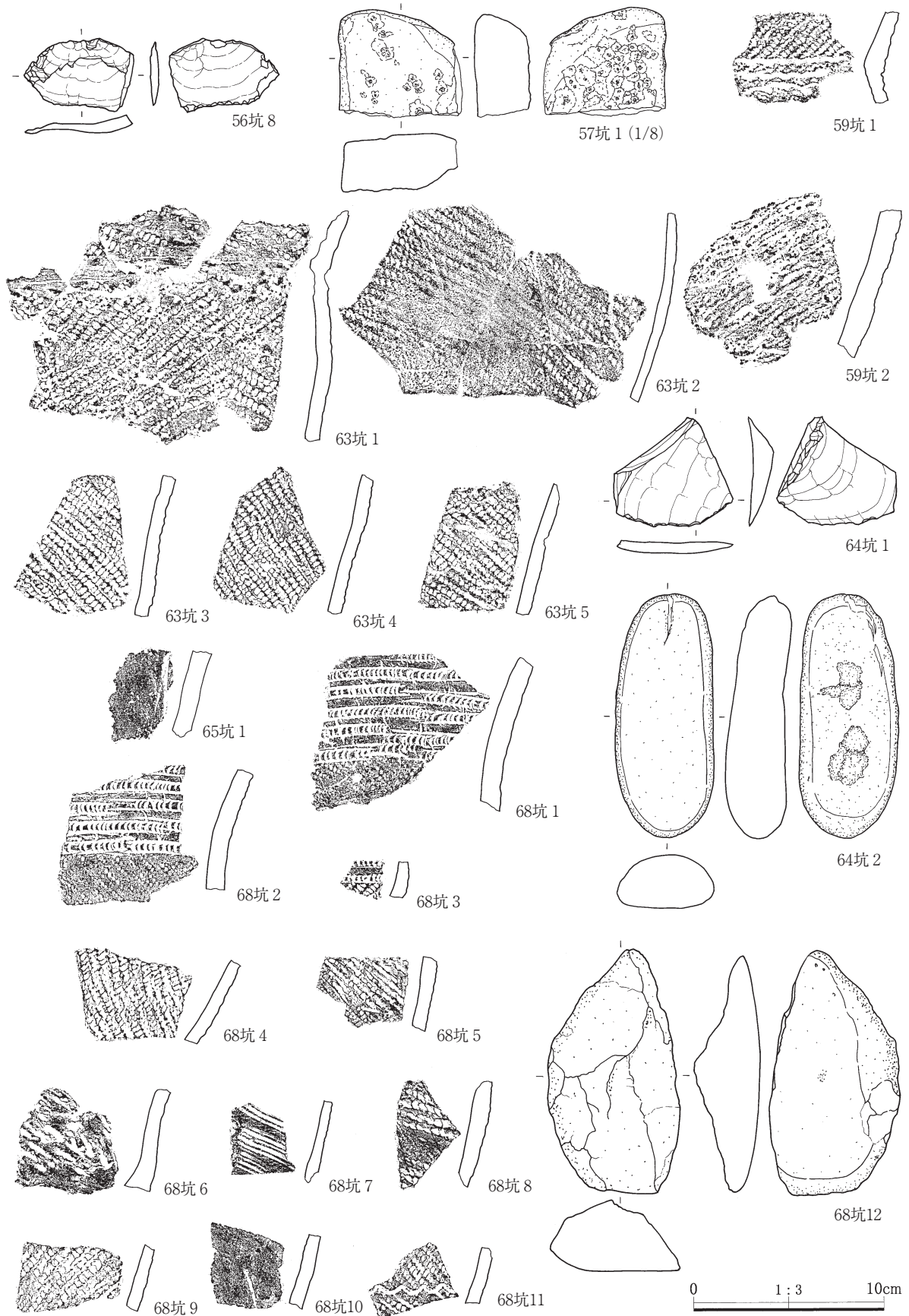
第31図 79～85号土坑遺構図



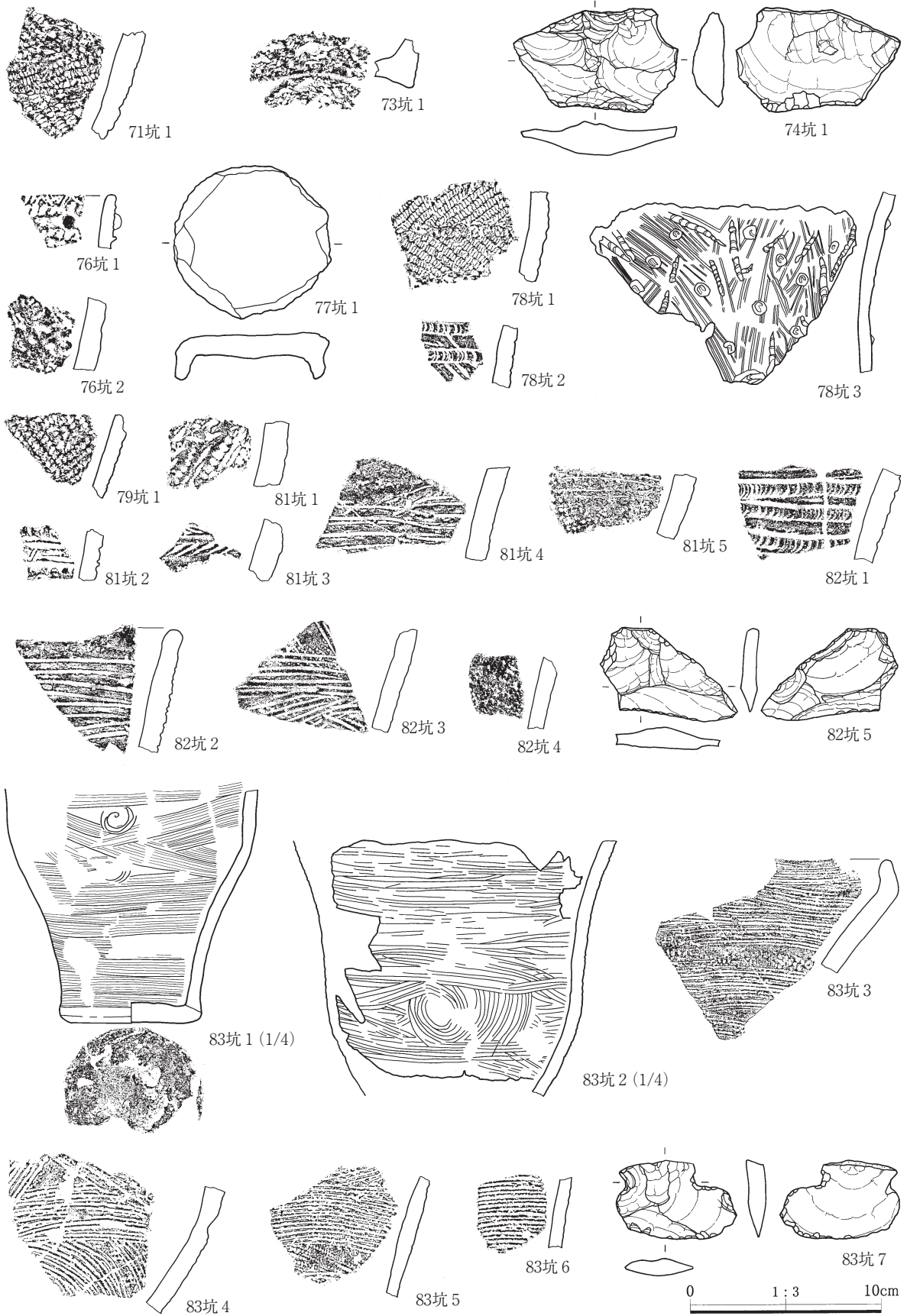
第32図 1～3・6・10・12・13号土坑遺物図



第33図 13・14・20・21・25・33～36・38・43・45・54～56号土坑遺物図



第34図 56・57・59・63～65・68号土坑遺物図



第35図 71・73・74・76～79・81～83号土坑遺物図

4 ピット (第36～38図)

位置 3区で1～42の42基、4区で43～45の3基が検出されている。5区でも1号、2号住居跡の周囲で10基あまりが検出されているが、住居跡に伴うものとしてここでは除外している。第36図は、3区の分布状況で、4区の3基は付図にその位置を掲載しただけである。また、記録した写真は、完掘、断面のいずれも掲載していない。

検出状況 2つの方法により検出した。最も多かったのが、旧石器確認調査中のローム漸移層を掘り下げていく過程である。半数が該当する。検出するにはローム漸移層の上面でも可能なのであろうが、しみ程度にしか見えず、掘り下げることによりはつきりとする、というのが実態である。従って、検出漏れも十分に考えられる。残りは、住居跡や土坑の調査中にその周囲で検出したものである。数としては少ないが、中には掘立柱建物跡を意図して調査したものもある。2～5は、39R-18グリッドでの旧石器確認調査でローム漸移層を削平して検出した。いずれも直径が20～30cmの円筒形で、浅間一大窪沢層のハードロームまで掘り込んでいる。出土した遺物は少なく、覆土の特徴では縄文時代頃と推定されるが遺構としての決め手に欠けている。これらと同様に6～8は、39L-20グリッドの旧石器確認調査中に検出した。大きさ、覆土は、2～5に同じである。10～13は、49N-2グリッドでの旧石器確認調査でローム漸移層を削平して検出した。14～25は、ローム漸移層中の遺物包含層の調査中に土坑とともに検出した。浅いものもあったが、土層を検討した上でしっかりとした掘り方のものだけを記録した。19と20は、やや大きく、間隔も適度である。掘立柱建物跡の遺構としても検討したが、隣接する箇所にはなくて柱穴の可能性を指摘したにとどまる。この周辺では、土坑が検出されているように出土した遺物が多かった。29～42も縄文時代の遺物包含層の調査中に検出した。調査区を斜めに縦断しているが、柵列のように意図があるものかどうかは不明である。43～45は、24号住居跡の周囲で検出した。住居跡との関連が強いピットである。確認の範囲を限定したので、周囲で数は増えそうである。

覆土の特徴 第37図・第38図に断面の状況を掲載した。覆土は、はっきりと区分できるわけではないが、次のように6つに分類してみた。

黒褐色砂質土 1・6・8・9・15・16・18・19・29・30・31・38・39

黒褐色砂質土と暗褐色砂質土 3・4・17

暗褐色砂質土 10・11・12・21・22・23・24・25・26・27・28・32・33・34・35・36・37・40・41・42

褐色砂質土 13・32・43・44

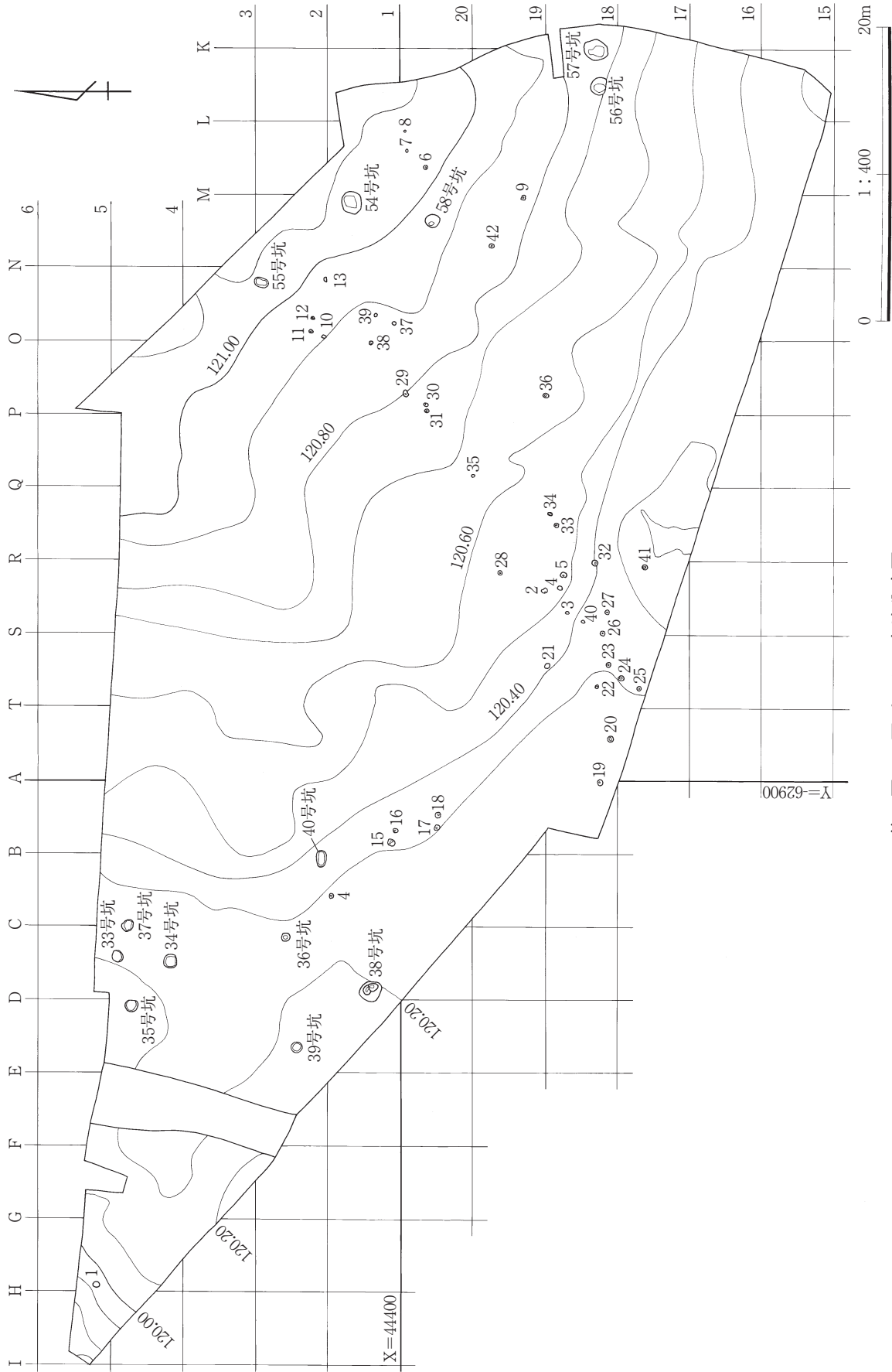
にぶい黄褐色砂質土 2・5・7・20

黄褐色砂質土 14・45

暗褐色砂質土が19基で最も多く、以下、黒褐色砂質土13基、褐色砂質土4基、にぶい黄褐色砂質土4基、黒褐色砂質土と暗褐色砂質土3基、黄褐色砂質土2基の順である。色調は異なるが、分類された6つともに自然埋没で、非常に固く締まっているのが共通した特徴である。

出土遺物 15ピットから深鉢の破片1点、16ピットから深鉢の破片1点、45ピットから深鉢の破片2点が出土している。

遺構の時期 覆土の特徴、出土した遺物から、縄文時代前期を中心とする時期である。その性格については、人為的なものが多いが、中には木の根と見られるものが含まれている。

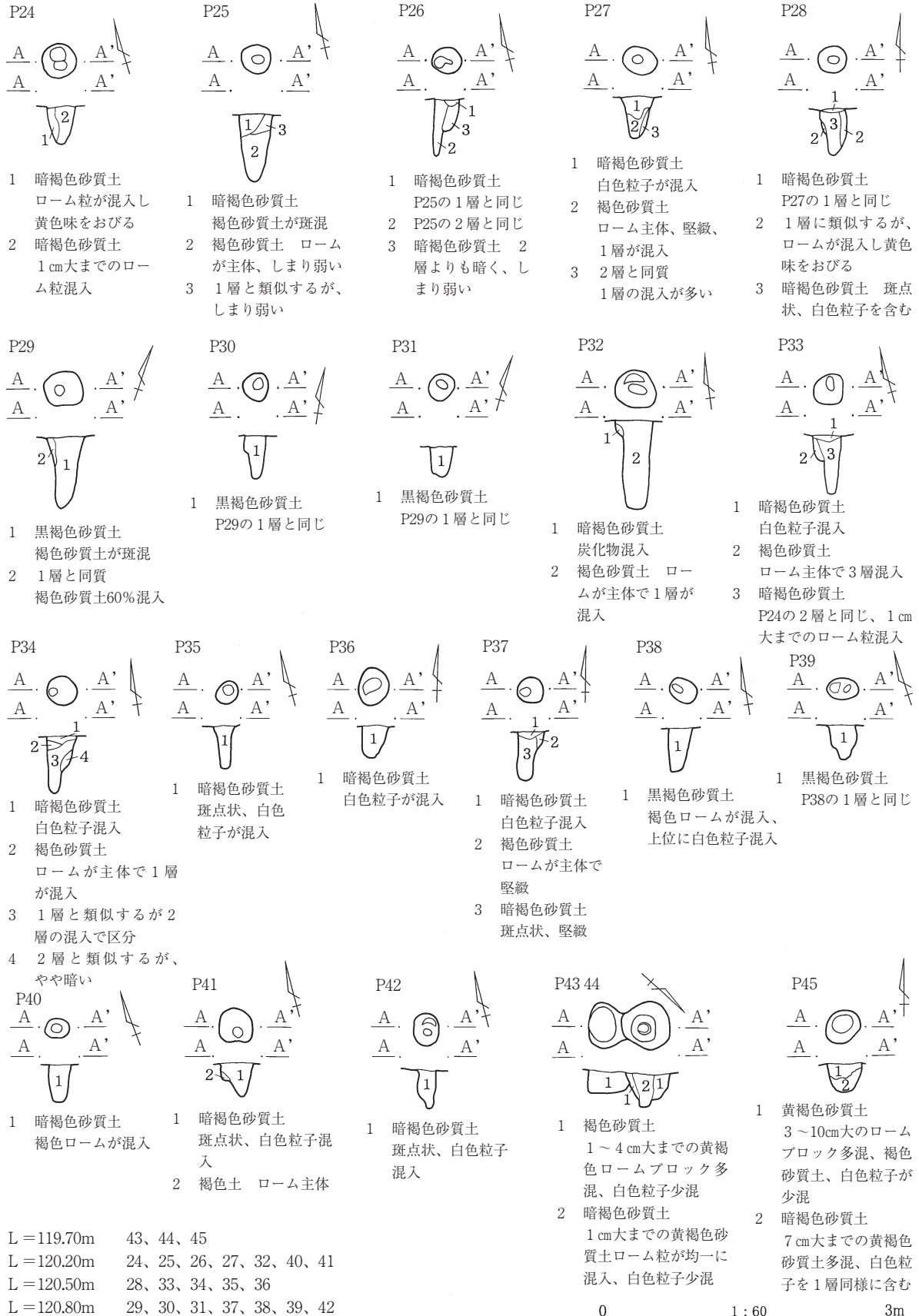


第36図 3区ピット・土坑分布図



第37図 1～23号ピット遺構図

第4章 検出された遺構と遺物



第38図 24~45号ピット遺構図

5 縄文包含層（第39～43図 PL74～76）

位置 1区、38ST-14～16、39A～J-4～16グリッド、1区の東半分に対応する。

検出状況 1区の東側では、3面に分けて調査をしている。1面がAs-B下での主に古代を対象とした調査、2面がこの縄文包含層、そして3面が旧石器確認調査である。2面の調査は、1面で縄文土器と石器が出土していたことから、ローム漸移層からソフトローム層上面までに対象を広げて遺構確認を目的に実施したものである。作業は、グリッドごとに上記の範囲全体を掘り下げ、遺構の有無、土層の観察とともに進めた。その結果、遺物はローム漸移層からまとまって出土するが遺構に伴うのではなく、縄文時代前期後半の遺物包含層であることが判明した。

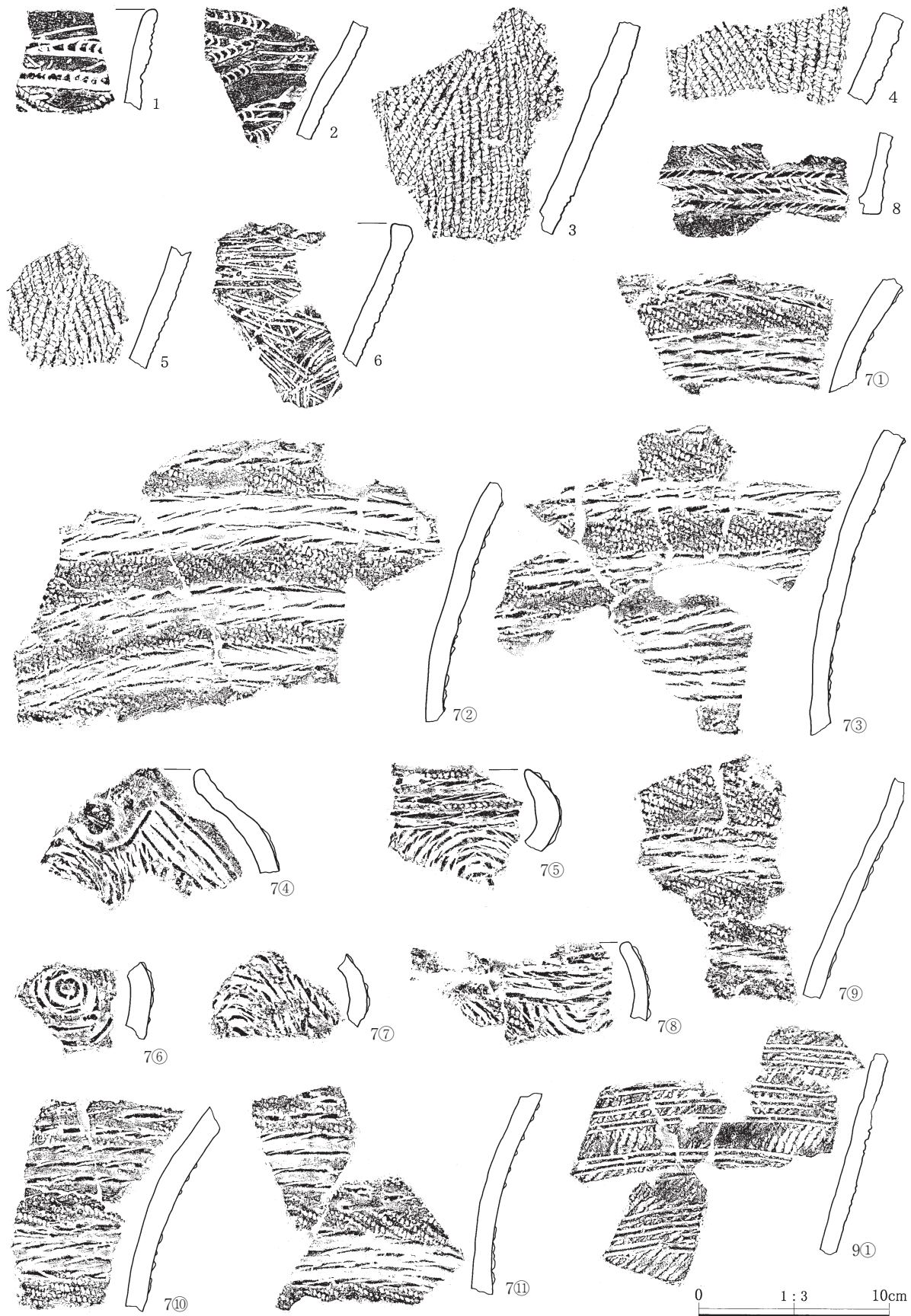
4区、5区の住居跡とは、台地の西と東の位置関係にある。直線にして100m以上も離れていて、時期の上では併存が可能ながら別々のものと見られる。調査区中央部のソフトローム層上面には、埋没谷の谷頭らしきものが検出されている。遺物は、この谷頭に流れ込んだ土砂に混入したものである。調査区の北側には、出土した遺物と同時期のものが散布している。遺構があるとすれば、分布の中心はこの調査区の北側で3区から4区で検出した土坑群が、その一部にあたるであろう。

出土層位 基本土層の4層As-C混入黒褐色砂質土から6層ローム漸移層が出土層位である。レベル差にして50cmと上下に幅があるものの、攪乱はなく、層位の上では安定した状態にある。また、層位ごとに遺物が分けられるというものでもない。7は、諸磯b式の深鉢であるが破片数が多く、まとまった資料である。出土した範囲も広い。中には、最大で27mも離れて接合しているものがある。このほかの接合関係も南北方向のものが多く、土層の堆積状況を示すものであろう。また、39D-12グリッドでは、7層にあたる浅間一大窪沢層上位から剥片2点が出土している。担当者の所見では旧石器の可能性も考えられるとのことであるが、出土したのは2点だけである。

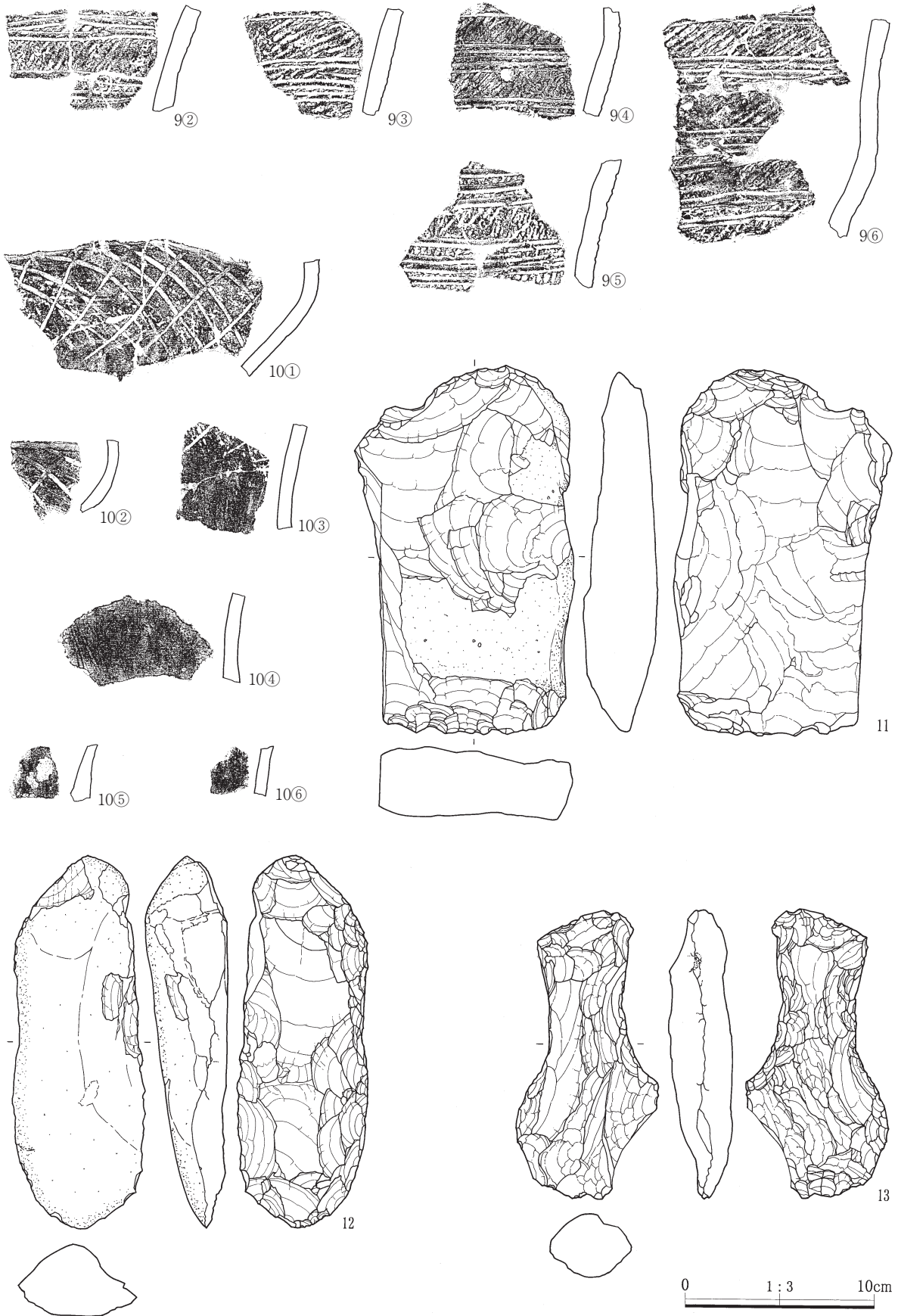
出土遺物 遺物収納箱にして3箱が出土している。土器は、縄文時代前期のみである。破片としては比較的大きく、数の上では諸磯b式が圧倒的で黒浜式は少量である。石器は、製品が多くて微細な剥片類が少ない。掲載したのは、深鉢10点、打製石斧10点、スクレイパー2点、剥片6点、凹石3点、石鏃2点である。1～5は、黒浜式の深鉢である。1は口縁部、2は胴部の破片で、半截竹管による平行爪形文を施している。3～5は、単節RL、LRを施文した胴部の破片で同一個体である。6～9は、諸磯b式である。6は縄文の地文に平行沈線文を施し、7、8が浮線文、9が平行沈線文である。10は、浮島式で口縁部から胴部上半部に棒状工具で斜格子に沈線を施している。11は、大型の打製石斧である。厚さが最大で4cmを超す分厚い剥片を素材として、上下両端に刃部を作り出している。12も同様に厚めの剥片を素材とした打製石斧で、片面は自然面のままである。13、14、15は、撥形の打製石斧である。13は、刃部の一部を欠損している。16、17、18は、短冊形の打製石斧である。19、20は、分銅形の打製石斧である。21、22は、スクレイパーである。23～28は、使用痕のある剥片である。非掲載の中にも、使用痕を持つ剥片は多い。29～31は、凹石である。32、33は、石鏃である。このほかに非掲載は、深鉢の破片75点、浅鉢の破片3点、剥片116点である。さらに拳大程度までの山石がある。山石は、整理作業時に観察したところでは、集石や礫群として使われたようで、破碎したものが大半で大きさがほぼ揃っている。稀に熱でひび割れていたり、赤や黒に変色したものがあって生活の場に近いた感じが感じられた。



第39図 縄文包含層遺物分布図



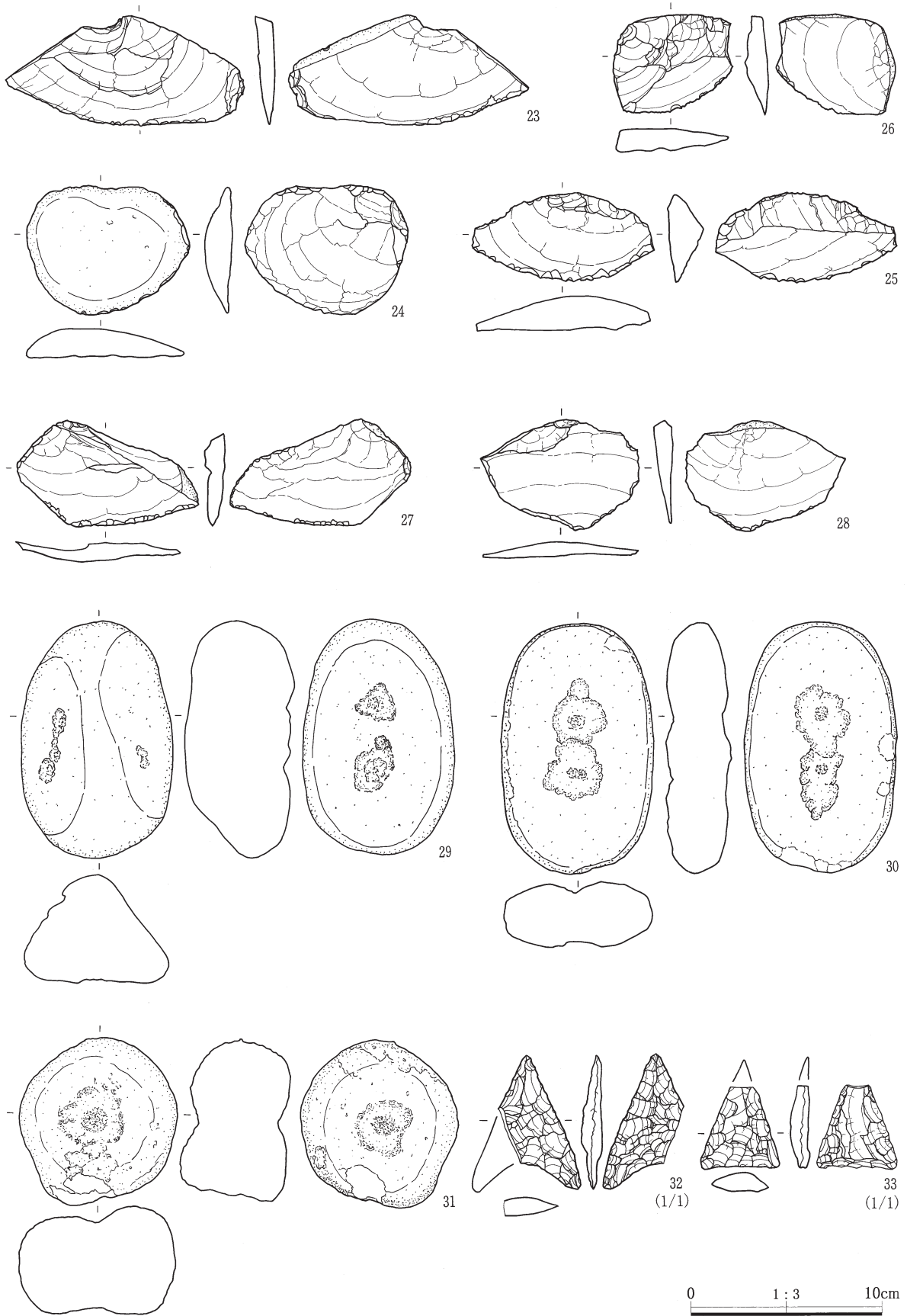
第40図 縄文包含層遺物図(1)



第41図 縄文包含層遺物図(2)



第42図 縄文包含層遺物図(3)



第43図 縄文包含層遺物図(4)

第3節 古墳時代前期の遺構と遺物

1 概要

検出した遺構は、竪穴住居跡10軒、貯蔵穴である土坑2基、土器集中1基である。住居跡は、2区、3区、4区に分布し、重複するものはないが古墳時代後期の居住域と重なる。形状は、長方形と方形の2つがある。長方形は、掘り込みがローム漸移層止まりで浅い。それに対して方形は、ロームを深く掘り込み、床面までが60cmを越すものがほとんどである。遺存状態も良好で柱穴は深く、柱痕らしき跡を残しているものもある。壁際には、間仕切りされたベッド状の跡がある。炉や貯蔵穴を複数持つものがあり、建て替えをしている。土器集中は、住居跡があるあたりからはやや離れている。土器の捨て場ではなく、むしろ、まつりの跡とみられる。

2 竪穴住居跡

5号住居跡（第44図 PL6・51）

位置 3区、49LM-1・2グリッド、北東部は調査区外で未調査である。 **重複関係** なし **形状** 推定長方形 **規模** 東西4.05m以上、南北3.45m、壁高9cm **面積** 13.97m²以上 **主軸方位** N69° E

覆土 6層に分けた。9cmの壁高が示す通り、床面の近くまで耕作等によって削平されている。自然埋没、1層が表土で2層が覆土、3層と4層は、掘り方である。

炉 中央の北、北壁から内側に約80cmの所にある。掘り込みは浅くて、長軸38cm、短軸28cmの楕円形、縁石は抜かれ、焼土は床面より盛り上がっている。南側には、焚口と思われる舌状をした張り出しが付けられている。熱でわずかに変色する程度ではあるが、炉の使用状態を伝えるものである。

柱穴 検出したのは長軸線上にあるP1の1本である。長軸20cm、短軸20cm、深さ32cmの円形である。軸線上で対となる位置で探したが、西側に対応するピットはなかった。P2は、掘り方で検出した縄文時代のピットである。長軸32cm以上、短軸46cm、深さ52cmの円形、黒褐色砂質土にロームを含む土で埋没している。非常に硬く締まり、中からは諸磯b式の深鉢口縁部破片が出土している。このほかに掘り方では、住居に伴うと思われるピットが4本検出されている。

周溝 なし。ただし、掘り方では壁際が一様に窪んでいる。

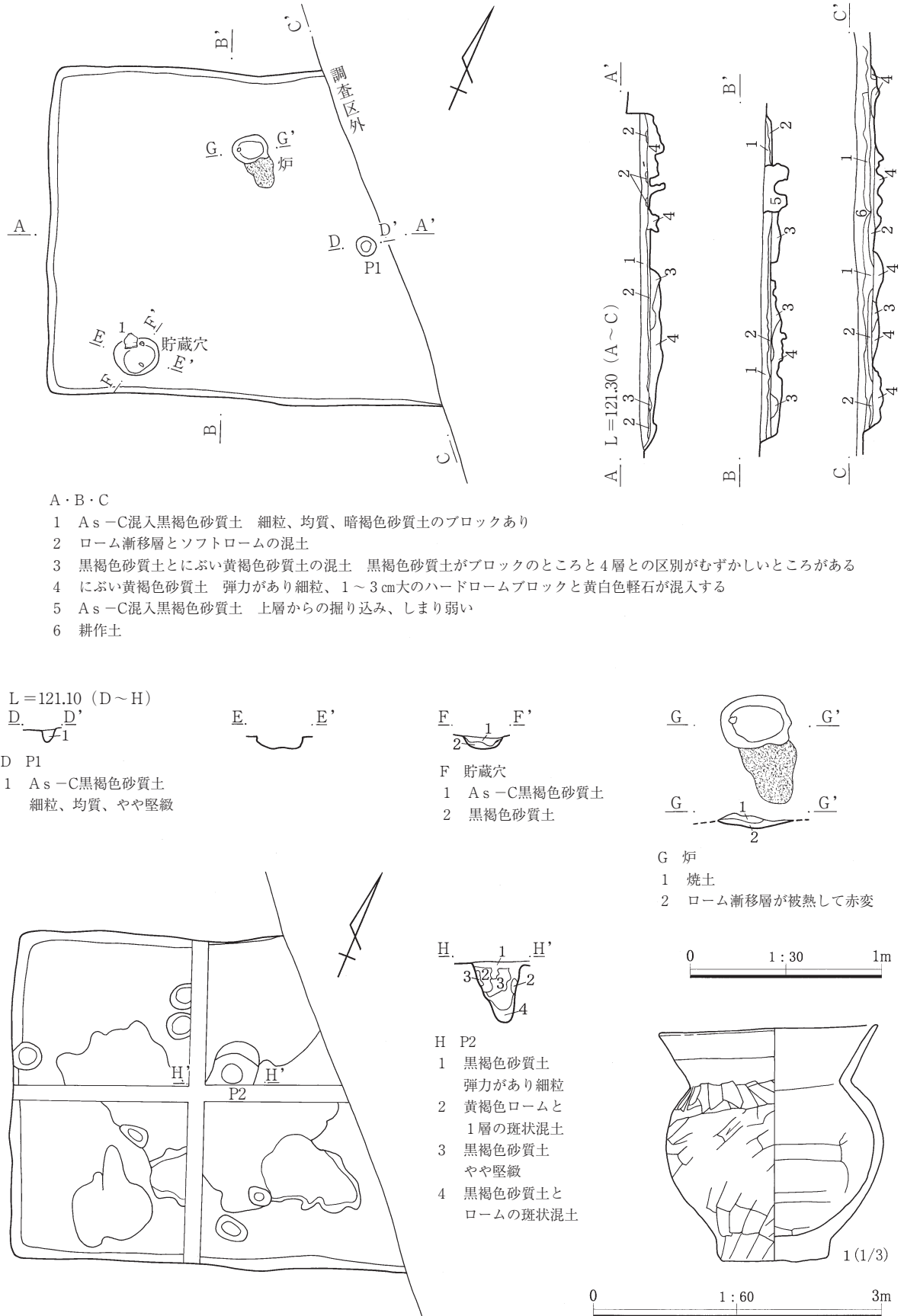
貯蔵穴 南西隅から東に離れて検出された。長軸46cm、短軸35cm、深さ14cmの円形である。

床面 掘りすぎてしまい、正確には検出していない。遺物の出土状態、炉の焼土から判断をした。断面Cで見ると、3層と4層にあたるソフトロームとローム漸移層の混土による、薄い貼り床であったことがわかる。掘り方は、全体が掘り下げられている。一面に掘削痕があるだけで、ローム漸移層との区別が難しく、特に土坑のような箇所や壁際が帯状に低くなるというものではない。床を貼るため、あるいは湿気を抜くため、掘り返すことに主たる目的があったのだろう。

遺物と出土状態 1の小型甕は、貯蔵穴の上面に倒れ込むようにして出土している。非掲載は、杯、S字状口縁台付甕、縄文土器の破片32点が出土している。

所見 古墳時代前期の住居跡である。

第4章 検出された遺構と遺物



第44図 5号住居跡遺構図・遺物図

6号住居跡（第45～48図 PL6・7・51・52）

位置 3区、49NO-2・3グリッド **重複関係** なし **形状** 長方形 **規模** 東西5.70m、南北4.50m、壁高50cm **面積** 25.65m² **主軸方位** N70° E

覆土 12層に分けた。全体は、壁際を除いて1層から4層に分けられる。レンズ状の自然堆積と見たが、2層から4層はわずかに違うだけで、混入するロームの量や状態からすると一括して人為埋没の可能性もある。5層から9層は、2層か4層に類似した壁際のための堆積土である。10層はロームを主とする床材の一部、11層、12層は掘り方である。ローム漸移層と黄褐色ローム、黒褐色砂質土が攪拌されている。

炉 中央北、P1とP4の中間にある。長軸64cm、短軸51cm、深さ10cmの円形である。南側に棒状をした川原石の炉縁石を残している。全体に良く焼けていて、焼土は1～2cmの厚さがある。出土した遺物はない。

柱穴 4本主柱である。長軸・短軸・深さは、P1が65・61・84cm、P2が72・61・88cm、P3が63・55・92cm、P4が73・64・81cmである。上面は大きな円形をしているが、中段以下は一様に細くて深い。穴の中心は、断面図では表現されていないが掘り方に対して、いずれも住居跡の内側に片寄っている。柱は直立するのではなく、壁の一方に密着させることで固定し、あらかじめ小屋組みした時に上屋の荷重で内傾することを考慮しての工夫であろう。柱間は、P1とP2が209cm、P2とP3が250cm、P3とP4が205cm、P4とP1が235cmである。この4本を結んだ線を境にして、掘り方も様子を異にしている。

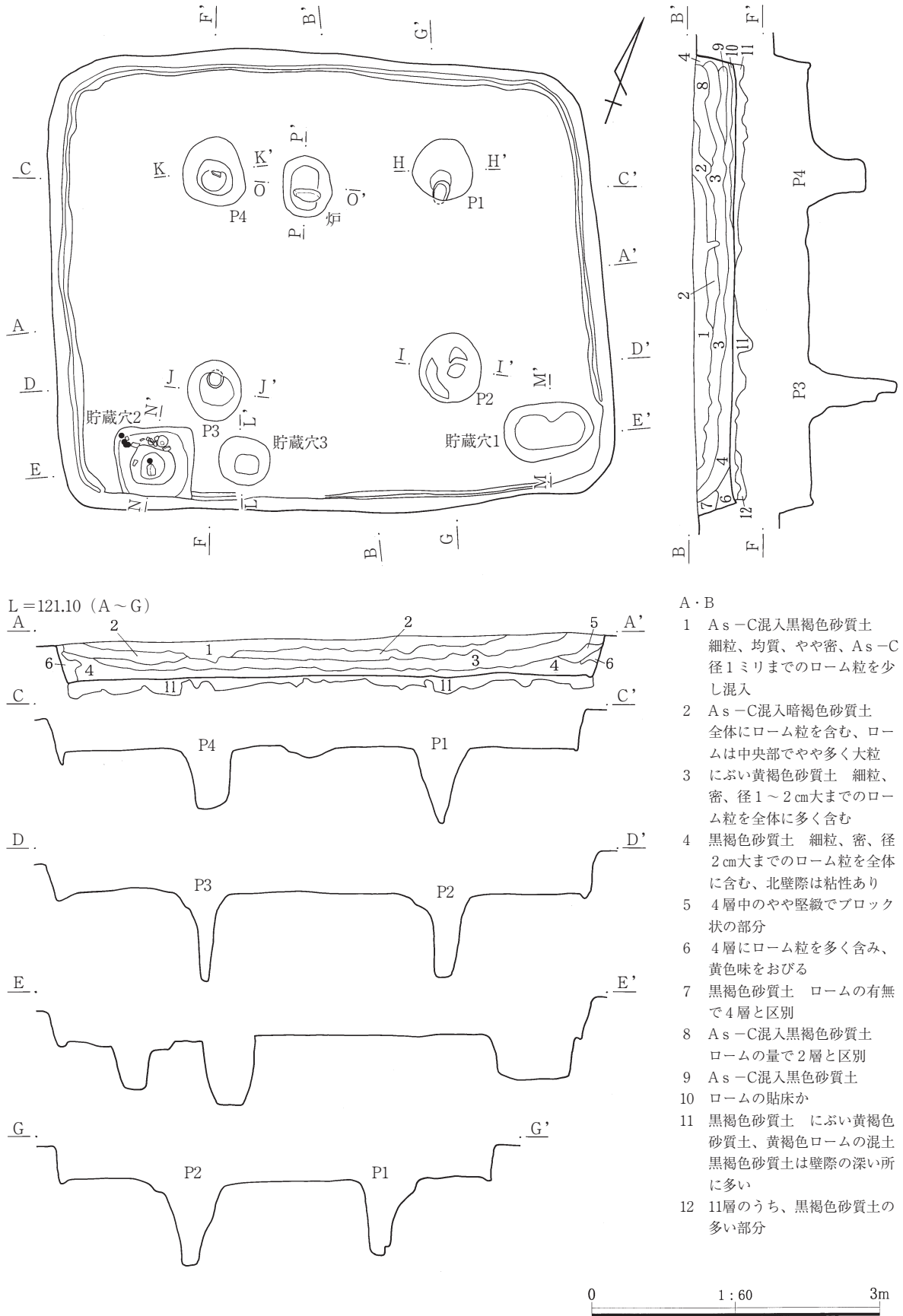
周溝 貯蔵穴のまわりを除いて全周している。幅は6～14cm、深さは10cm以下である。底面は波打つように、鋤跡痕が残されたままである。東壁沿いでは、南から北へ作業したことが掘削痕からわかる。

貯蔵穴 掘り方を含めて3基がある。1号が南東隅、2号が南西隅、3号が南西隅の掘り方からである。1号は、造り替えをしている。2基分を合わせて、長軸93cm、短軸63cm、深さ43cmの長方形、縁に灰白色粘土が付着している。2号は、長軸80cm、短軸76cmの中に10cmの段差で、長軸48cm、短軸38cm、深さ50cmの土坑があいている。この段差分が蓋の厚みである。3号は、2号の東1mにある。長軸56cm、短軸48cm、深さ40cmの方形である。3号が掘り方にあつて最も古く、検出状況からみて次いで1号、さらに2号の順である。1号は先述のとおり、1回程度の造り替えをしている。

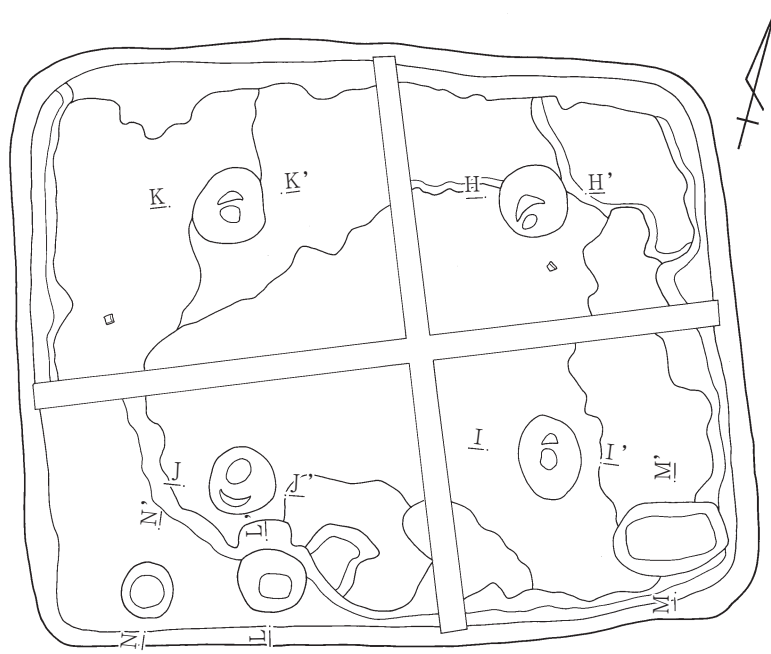
床面 ロームに黒褐色砂質土を混ぜ合わせた土による、貼り床である。薄い硬化面を残す程度で、硬さは一様ではない。全体の中では、炉を境として西半分がわずかではあるが高い。掘り方は、ほぼ全体が一段下げられている。その中でも主柱穴を結んだ外側は、さらに深くなる。幅1m前後の帯状で、内側との段差は約10cmである。この帯の中にも、さらに掘削による列や筋が複数あり、作業の単位と見られる。遺存状態が良好な北壁では、東から西に向かって作業をしたことがわかる。また周溝は、この帯とは区別して掘られていて、さらに数センチ深い。

遺物と出土状態 床面の全体と2層、3層にあたる東西両辺の床より20～25cm上で出土した。大型の壺や甕がなく、埴、器台、小型甕などの小型の器種が壁際などに残されている。南の壁際から出土した9の埴、13の器台、17の敲石、18のすり石は、南の壁際から出土したものであるが原位置である。炉の真南にあたり、道具の収納場所のようで壁際の利用状況を示している。南西隅からP3にかけては、集中が見られる。1のS字口縁台付甕、6の埴や12の器台があり、6は炉内覆土の破片と接合している。14の手づくねは、1号貯蔵穴から出土した。16の土製品は、大人の指ほどの大きさで、整形時の指跡をそのまま残している。端部は丸く、一方にめくれている。非掲載は、土師器137点、縄文土器13点、石3点が出土している。

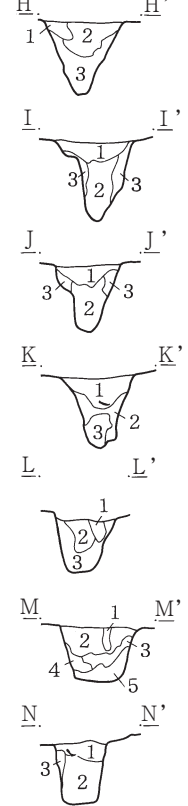
所見 古墳時代前期の住居跡である。As-C降下後の時期である。



第45図 6号住居跡遺構図(1)



L = 120.70 (H~P)



H P1

- 1 A s - C混入黒褐色砂質土と暗褐色砂質土の混入
- 2 黒褐色砂質土 黄褐色砂質土、A s - C混入黒褐色砂質土、ロームブロックが混入
- 3 暗褐色砂質土 4 cm大までのロームブロック30%混入

I P2

- 1 黒褐色砂質土 ローム粒40%、炭化物3%が混入
- 2 黒褐色砂質土 1 cm大ロームブロックと炭化物が5%混入
- 3 にぶい黄褐色砂質土 5 cm大までのロームブロック40%、炭化物5%混入

J P3

- 1 黒褐色砂質土 ローム、焼土、炭化物40%混入
- 2 暗褐色砂質土 ロームブロック、にぶい黄褐色砂質土40%混入
- 3 黄褐色砂質土 ロームブロック、暗褐色砂質土30%混入

K P4

- 1 黒褐色砂質土 1 cm大ロームブロック15%混入
- 2 褐色砂質土 1~3 cm大の黒色土ブロック15%混入
- 3 暗褐色砂質土 ローム粒混入、しまり弱い

L 貯蔵穴3

- 1 硬いロームブロック
- 2 ロームと黒褐色砂質土の混入
- 3 黒褐色砂質土 1 cm大ロームをやや多く含む、しまり弱い

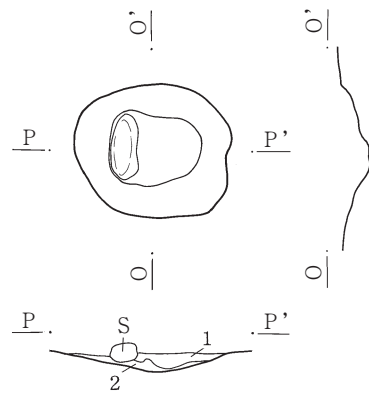
M 貯蔵穴1

- 1 にぶい黄褐色砂質土 1 cm大ロームブロックや暗褐色砂質土のブロックが混入
- 2 黒褐色砂質土 1 cm大ローム40%、炭化物少量が混入
- 3 にぶい黄褐色砂質土 1 cm大ローム10%、炭化物少量が混入
- 4 黒褐色砂質土 2 cm大までのローム粒5%混入
- 5 暗褐色砂質土

N 貯蔵穴2

- 1 黒褐色砂質土 ローム粒5%混入
- 2 黒褐色砂質土 1~5 cm大までのローム2%混入
- 3 ロームブロックと1層、2層が20%混入

0 1 : 60 3m

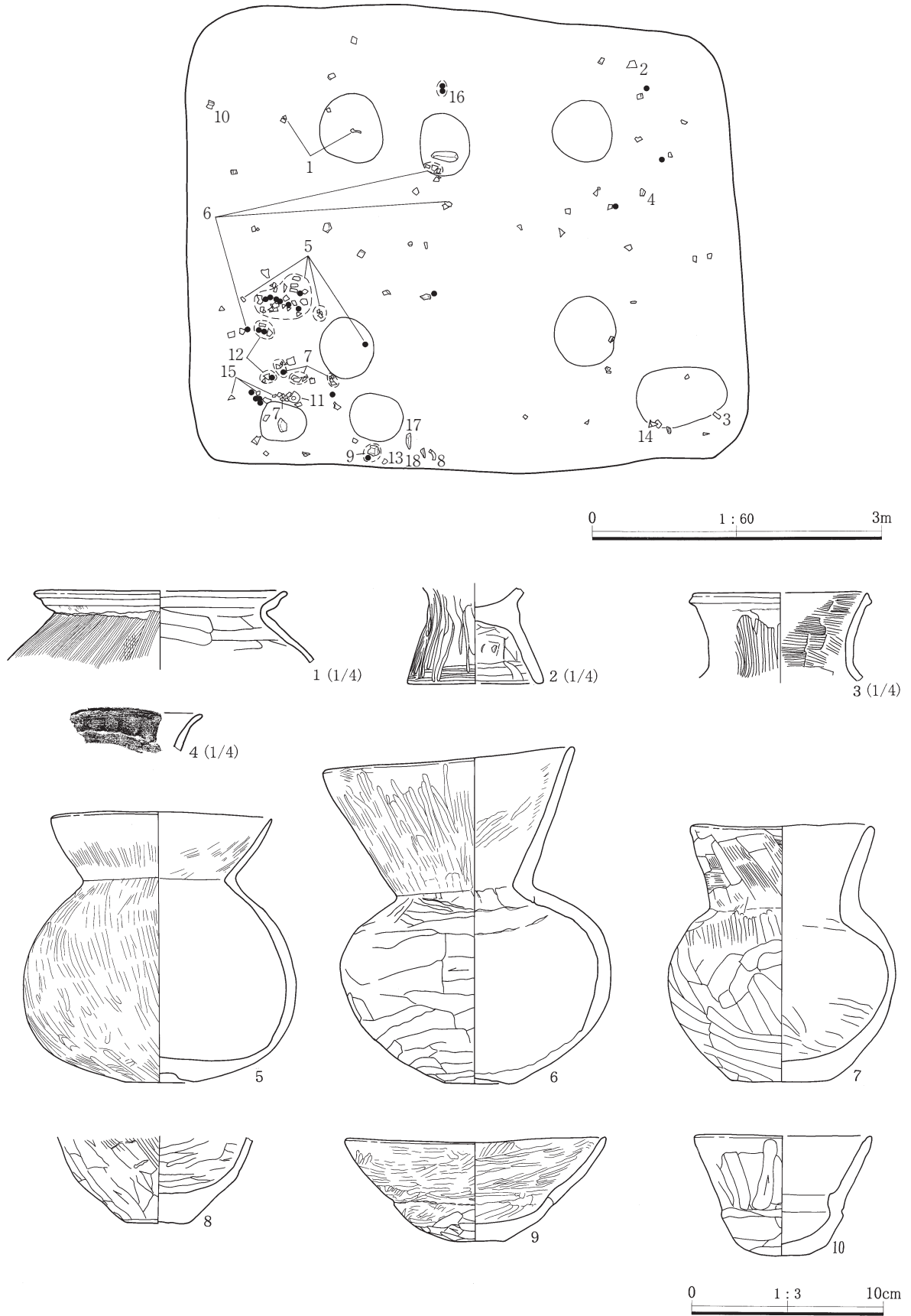


P 炉

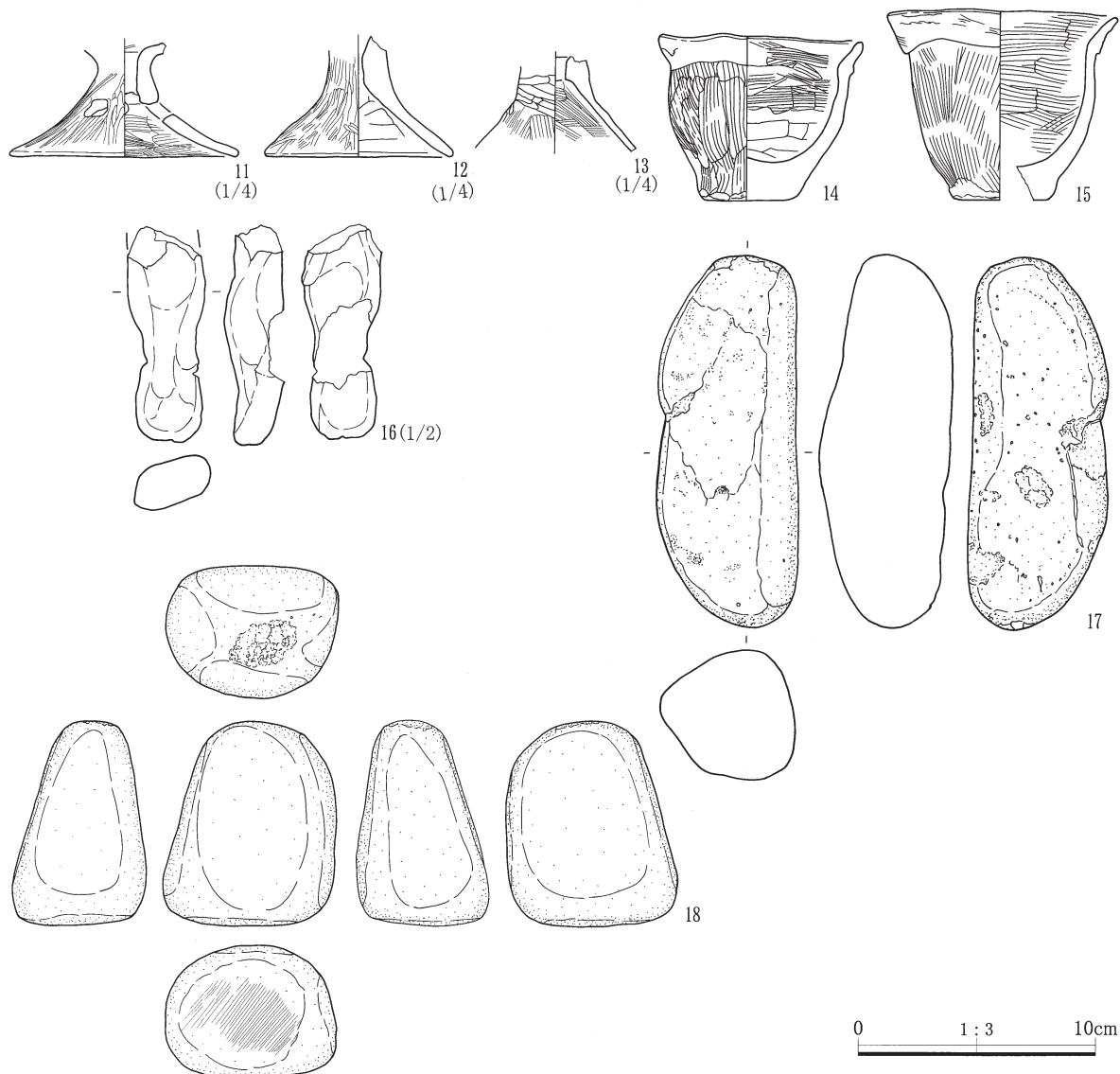
- 1 暗褐色砂質土 焼土3%混入
- 2 焼土 橙色、カリカリに焼けている

0 1 : 30 1m

第46図 6号住居跡遺構図(2)



第47図 6号住居跡遺物分布図・遺物図(1)



第48図 6号住居跡遺物図(2)



6号住居跡周辺の様子



3区での旧石器確認調査の様子

第4章 検出された遺構と遺物

9号住居跡（第49～51図 PL9・10・55）

位置 3区、39MN-17・18グリッド、東壁から西へ幅1mと北西隅が攪乱されている。重複関係 南東隅に5号溝が重複している。**形状** 長方形 **規模** 東西4.85m、南北4.20m、壁高15cm **面積** 20.37m² **主軸方位** N84° E

覆土 6層に分けた。自然埋没である。2層が主の埋没土で、3層は壁際だけに分布する。4層、5層が貼り床材に相当する掘り方である。

炉 中央部のやや北、南北に2基が並んでいる。検出した当初は、1号と2号をあわせた範囲に一面焼土が盛り上がっていた。掘り下げると、焼けて固くなっている所があり炉と判断した。北側が1号、接するように南側にあるのが2号である。1号は、長軸152cm、短軸52cmの楕円形で浅い皿状の断面をしている。ロームが焼けていただけで、炭、灰はない。焼け方は、強い所と弱そうな所とがあり、2号炉程度のものが2～3基重複しているように見える。2号は、長軸55cm、短軸36cmの楕円形、一面に厚く焼土が残されている。2基の違いは架けていた甕の大小か、機能による差で、ふたつは併存していたと思われる。また、これとは別に北西の隅寄りでも畳半分ほどの焼土がある。床面上、一面に焼土があるという状態で特定の掘り込みもなく、炉ではないと判断した。焼失の可能性もあるが、断定できなかった。

柱穴 4本支柱穴である。長軸・短軸・深さは、P1が22・21・20、P2が30・25・11cm、P3が32・31・20cm、P4が25・23・19cmである。柱間は、P1とP2が180cm、P2とP3が266cm、P3とP4が178cm、P4とP1が256cmである。なお、P5は24・23・19cm、P6が21・18・28cm、P7は29・24・19cmである。P5とP7は棟持ち柱として調査したが、4本の支柱穴の中軸線上にはなく、特にP7が一方に片寄っている。また、P6も用途が不明である。

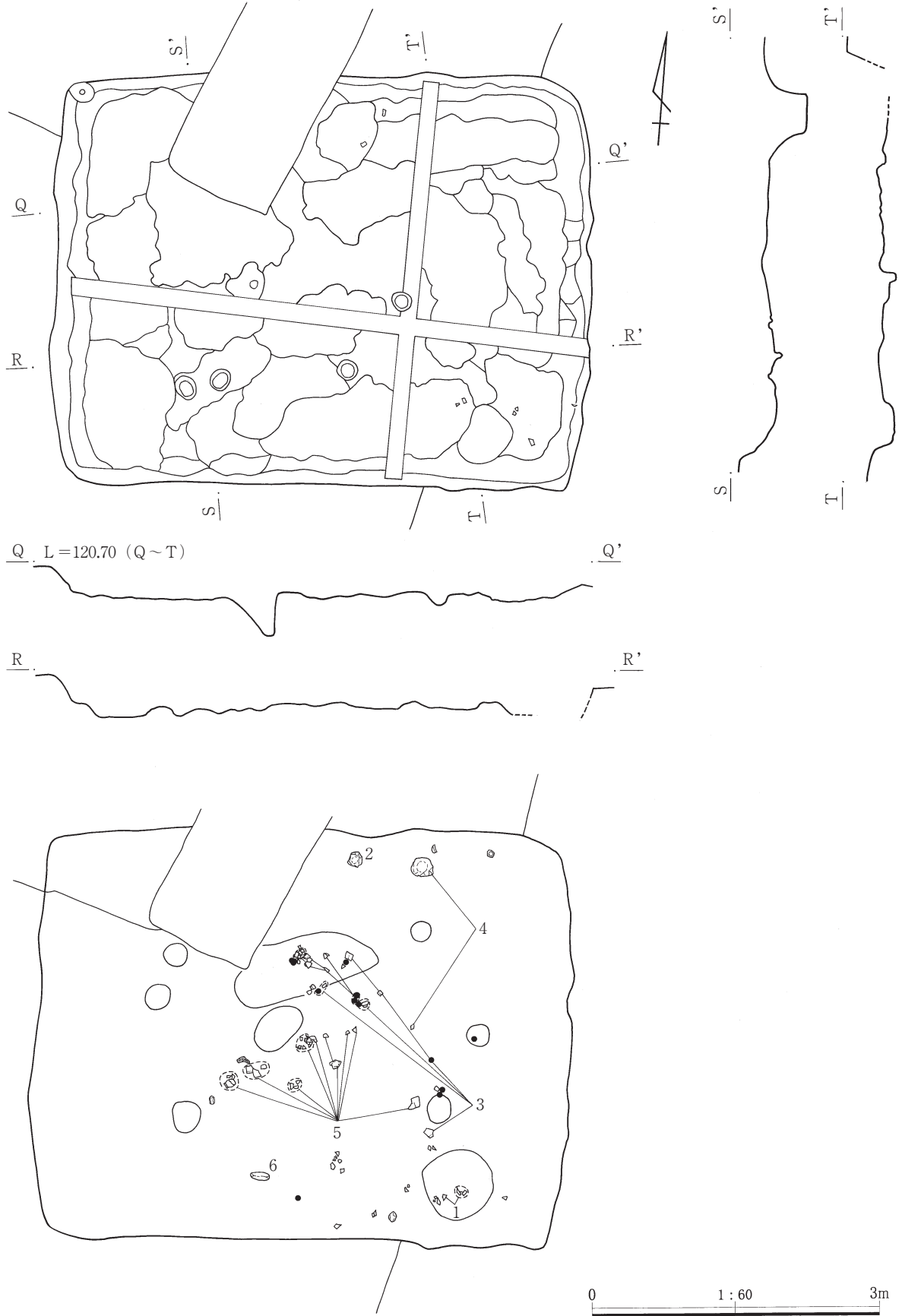
周溝 南東隅にある貯蔵穴の手前から西壁の北西隅の手前までを検出した。さらに、攪乱されている東壁にまであった可能性もある。幅10cm前後、深さ3～5cmである。

貯蔵穴 南東隅にある。長軸72cm、短軸72cm、深さ28cmの方形である。断面は、上方が少しふくらむ円筒形である。覆土の上位から埴と甕が出土している。

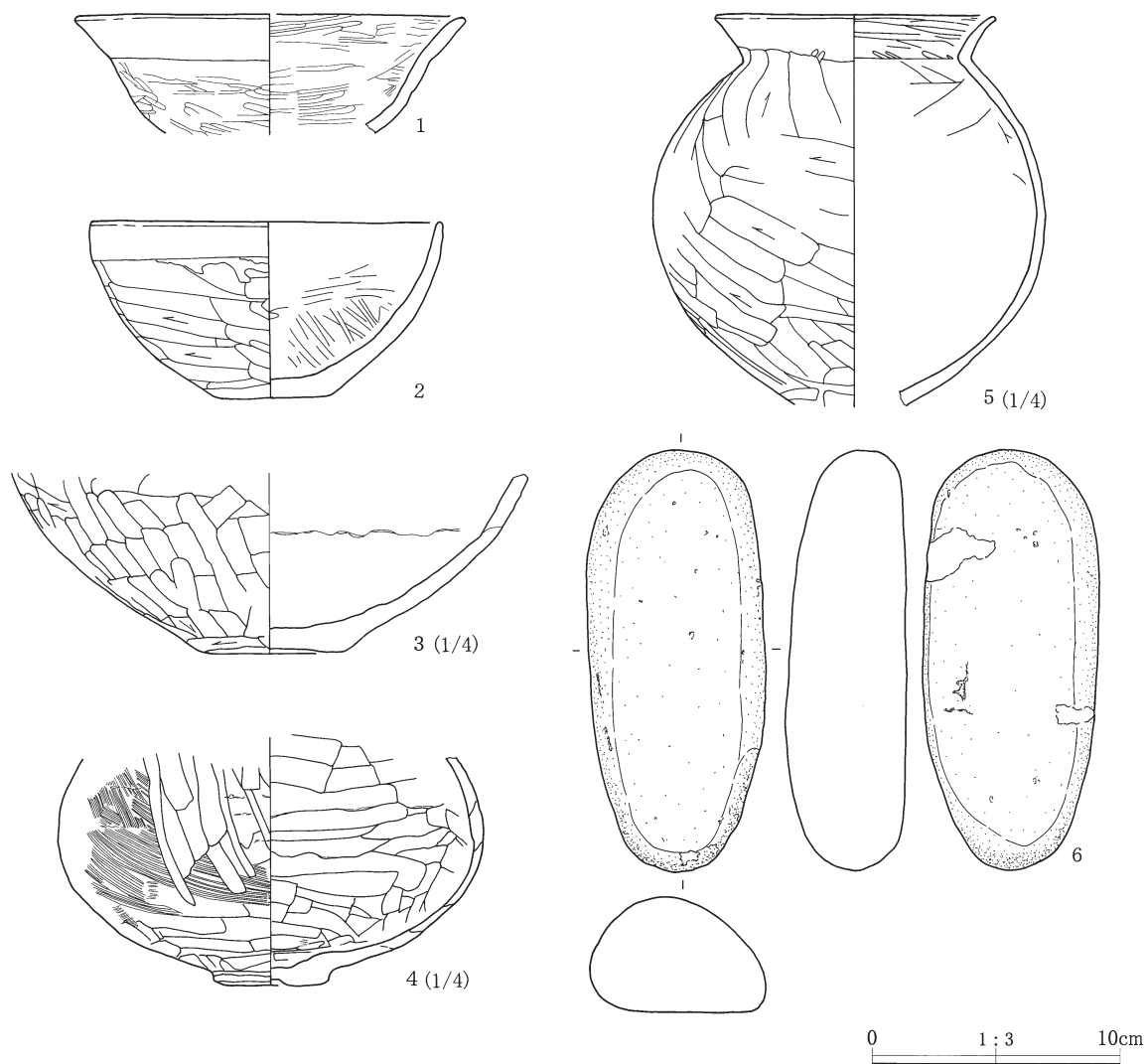
床面 炉と残されていた焼土から4層の上面を床面としたが、特別に硬化したような様子はない。掘り方は、全体が掘り下げられている。浅い土坑状のものと、壁に沿って東西方向で帯や筋になるものとに区別される。土坑状のものは、一人が1回ごとに掘削した跡と見られる。帯のものは、幅を一定にして作業した跡と見られる。北壁沿いにあるものが典型的で、幅が80cm、周囲よりも一段深くなる。南壁沿いでもその傾向は見られるが、複数ある一部は重複している。鋤跡痕は、波形、先端部は丸い。

遺物と出土状態 炉のまわりと壁際に集中している。1の埴は貯蔵穴の上面から出土し、蓋の存在を暗示している。2の鉢は北壁の中央部、床面から出土している。3と4の壺は、下胴部だけで破損後の再利用である。3は、鉢のように使用されたのか1号炉内で出土し、4は北壁際で出土している。2つとも覆土に同一個体の破片はなく、下胴部だけで持ち込まれ使用されたものである。5の甕は、熱で変色した跡が歴然としている。出土位置からすれば、2号炉に設置されていたものであろう。6は、こも編み石としてみたが一面にススが付着している。非掲載は、土師器333点、石2点である。甕は7個体以上があるが、大型のものはない。また、細片が殆どで、接合率も低い。

所見 古墳時代前期の住居跡である。



第50図 9号住居跡遺構図(2)・遺物分布図



第51図 9号住居跡遺物図

13号住居跡（第52図 PL13・57）

位置 2区、39LM-13・14グリッド、3区との境にある市道にかかり、南西隅を中心とした範囲を検出した。重複関係 なし 形状 推定方形 規模 東西3.40m、南北2.15m以上、壁高20cm 面積 7.31㎡以上 主軸方位 N80° E

覆土 5層に分けた。自然埋没である。5層が貼り床材にあたる掘り方である。

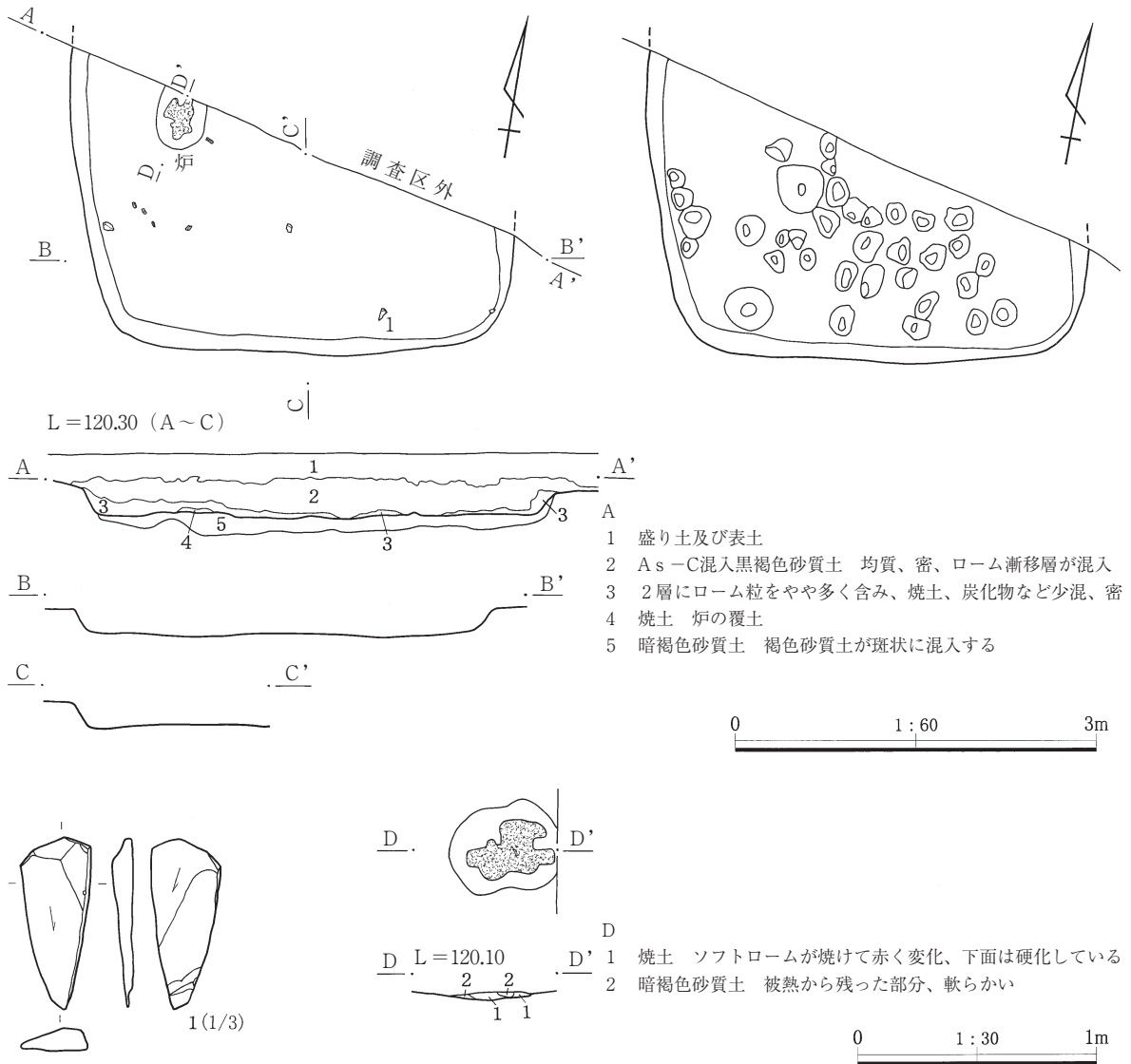
炉 中央から西へ1m外れた所にある。長軸45cm、短軸37cm、深さ6cmの浅い掘り方で、強い焼け方をしたのか、塊となった焼土と焼けて硬化した面がみられる。

柱穴 検出した範囲にはない。周溝 検出した範囲にはない。床面 ローム漸移層からソフトローム上面まで掘り下げて、4層の暗褐色砂質土と褐色砂質土との混土で貼り床をしている。平坦ではあるが、硬化した面は見られない。掘り方は、鋤跡痕らしきものを図示したがはっきりとはしない。

遺物と出土状態 掲載した砥石1点のほかに、炉の周囲で出土した罎、高杯、甕の小破片が少量ある。砥石は、頁岩製、平面・断面ともに三角形をしている。その材質と形状からすると、東毛地域に分布する剣形をした石製模造品の可能性もある。非掲載は、土師器13点、縄文土器2点がある。

所見 古墳時代前期の住居跡である。出土した土器の特徴から前期と判断した。

第4章 検出された遺構と遺物



第52図 13号住居跡遺構図・遺物図

14号住居跡 (第53図 PL13・14・57)

位置 2区、39P-14グリッド、北東隅だけを検出しただけで、残りは調査区外である。

重複関係 なし 形状 推定方形 規模 東西1.70m以上、南北2.20m以上、壁は垂直で、高さ66cmである。

面積 3.74m²以上 主軸方位 N80° E

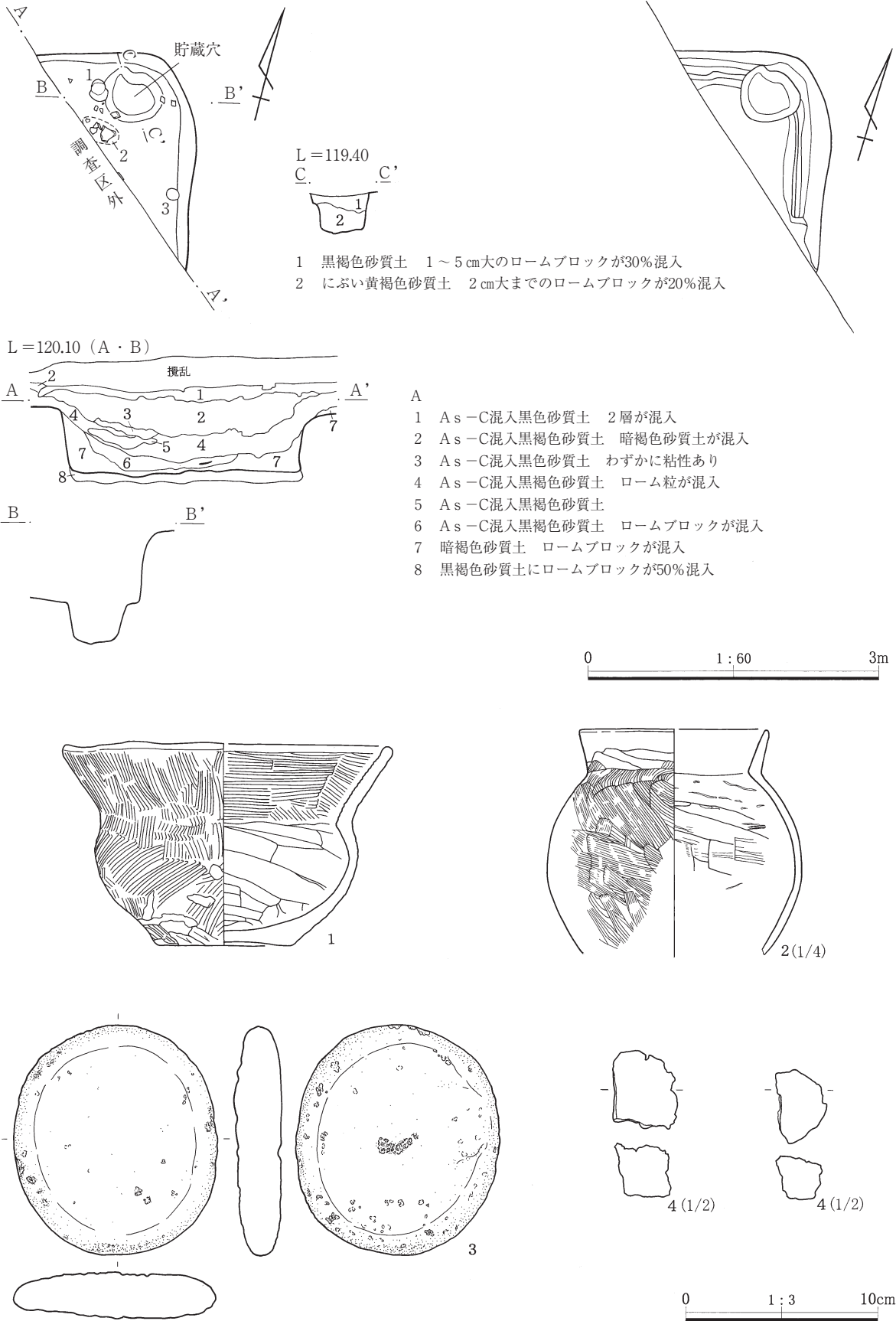
覆土 8層に分けた。自然埋没である。8層が貼り床材にあたる掘り方である。

炉 検出した範囲にはない。柱穴 検出した範囲にはない。周溝 床面では検出できなかった。掘り方で検出、幅が20cm前後、深さ4~6cmである。貯蔵穴 北東隅にある。長軸60cm、短軸52cm、深さ38cmの方形である。

床面 黒褐色砂質土とロームブロックとの混土による貼り床をしている。

遺物と出土状態 1の埴は貯蔵穴の脇で出土した。ほかには、単口縁甕が出土している。非掲載は、土師器103点、須恵器2点がある。

所見 古墳時代前期の住居跡である。土器の特徴から前期と判断した。



第53図 14号住居跡遺構図・遺物図

第4章 検出された遺構と遺物

16号住居跡（第54～57図 PL14・15・58）

位置 3区、39PQ-17・18グリッド **重複関係** 東壁に7号溝が重複している。**形状** 方形 **規模** 東西6.50m、南北6.80m、壁は垂直で残高64cmである。**面積** 44.20m² **主軸方位** N-S

覆土 15層に分けた。As-Cを混入する黒褐色砂質土で自然埋没している。

炉 中央部の北側、南北に2基が並んでいる。北側の方がよく焼けている。長軸90cm、短軸65cmの長円形で、2基分が連結した様で焼け方にも強弱がある。南側は、北側の半分ほどで長軸65cm、短軸45cmの円形、北側よりも1～2cm深い。

柱穴 P1からP4が支柱穴である。長軸・短軸・深さは、P1が68・60・94cm、P2が65・58・76cm、P3が76・68・82cm、P4が64・62・90cmである。柱間は、P1とP2が340cm、P2とP3が350cm、P3とP4が315cm、P4とP1が335cmである。支柱穴4本は、掘り方が大きく、一様に深い。また、6号住居跡で検出されたような、穴の中心が片寄っているのを見ることができる。ここでは、住居跡の外側に中心があり、P2は柱の根元を固定するための石が詰め込まれている。P5は、炉のすぐ北側にあり68・58・50cm、P6は東の周溝に重複し、62・22・24cmである。P7は、41・38・61cm、P8が56・52・16cm、P9が50・31・17cmである。ただし、P5とP7は、貯蔵穴の可能性はある。

周溝 全周している。幅20～25cm、深さ10cm前後である。

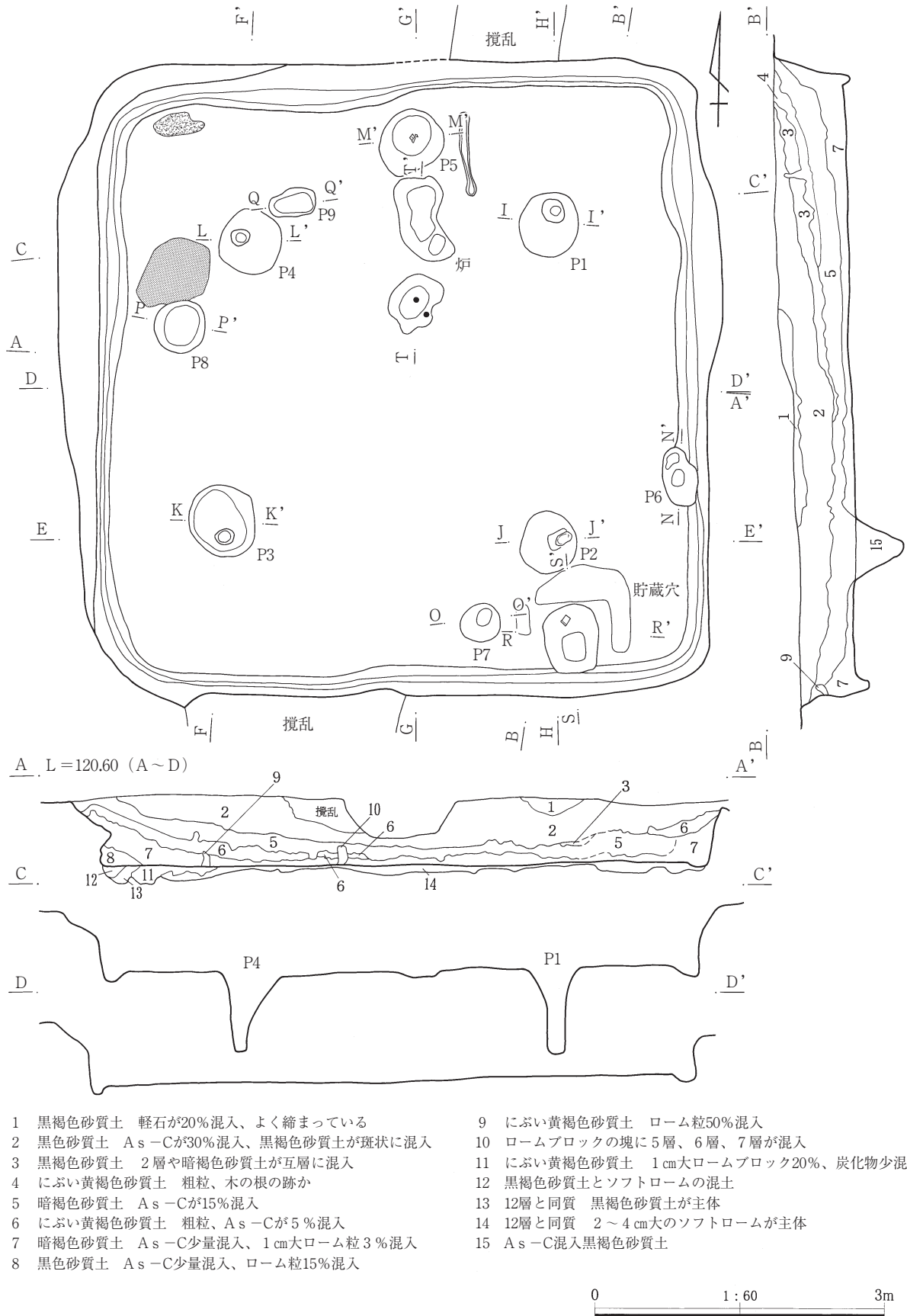
貯蔵穴 南東隅に2基がある。東が1号、西のP7が2号である。1号は、長軸70cm、短軸55cm、深さ60cmの方形で、周溝までの間に砂利を混ぜた周堤をコの字状にめぐらしている。周堤は、幅が20～30cm、床面よりも1～2cm高い。上面には、1～4cm大の砂利が敷かれている。質を選んだというわけではなく、近場にあるような粗粒安山岩などが使われている。大きさの点では、東西が大粒で、北が1cm前後と小粒である。また、周堤の幅は、北が広く、東西が狭い。周堤と穴の縁とは平坦なすき間があることから、ここまで蓋がされていて、周堤は露出していたのであろう。

2号は、長軸42cm、短軸40cm、深さ60cmの円筒形である。1号が黒色砂質土のみで埋没しているのに対して、柱穴のように細かに分層されている。入口の施設と見るには、直立していて、しかも大型である。1号に併存すると見ているが、深さは同じでも大きさは半分である。用途の違いがあるのだろう。

床面 支柱穴の外側、壁際までが一段高く、内側は低くて軟らかい。壁際は、幅1mあまりのベッド状遺構と関連したもので、P5の脇にある間仕切りの溝がその痕跡であろう。また、P5の西側では、直径10cmの円形痕が1mの範囲に密集していた。掘り方は、支柱穴を結んだ中央部が一段高い島状で、壁際が幅1m強の帯状に深い。帯の中は、いくつかの単位に分けて掘削したらしく、長さ1～2mで単位をくくることができる。北東隅を例にとると、3列平均で掘削、東から西へ動いている。

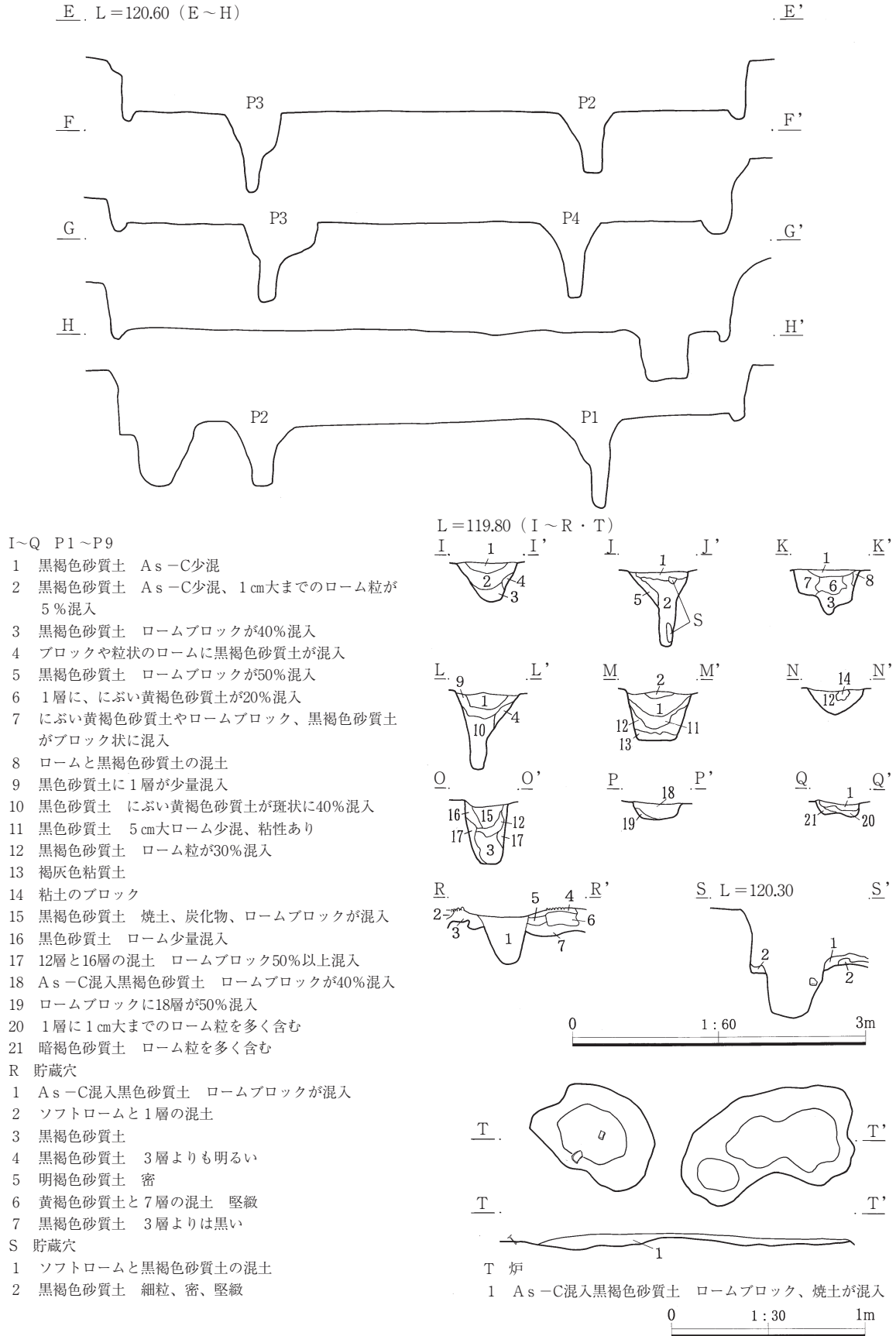
遺物と出土状態 炉よりも東側に多く、貯蔵穴がある東南隅がその中でも多い。レベルは、全体に高く、2のようにレベル差60cmというのものもある。住居に伴うものと埋没中に混入した二者があり、掲載したものは床から15cm前後までである。甕は、S字状口縁、単口縁を報告したが数は少なく、破片も小さい。2、3、6は離れたもの同士が接合し流れ込みである。床に近い所では、1の埴がある程度で、P5から9の砥石、P2から8の台石が出土している。9は、4面が凹面でその幅から用途は鎌などに使用されたものとみられる。非掲載は、土師器262点、縄文土器10点、石8点がある。甕が261点と最も多く、接合率も低い。また、非掲載の中には、6点の炭化したモモの果核がある。形状のしっかりとしたものでは、長さ2.90cm、幅1.80cm、長さ2.10cm、幅1.20cmと計測することができた。

所見 古墳時代前期の住居跡である。As-C降下後の時期である。



第54図 16号住居跡遺構図(1)

第4章 検出された遺構と遺物

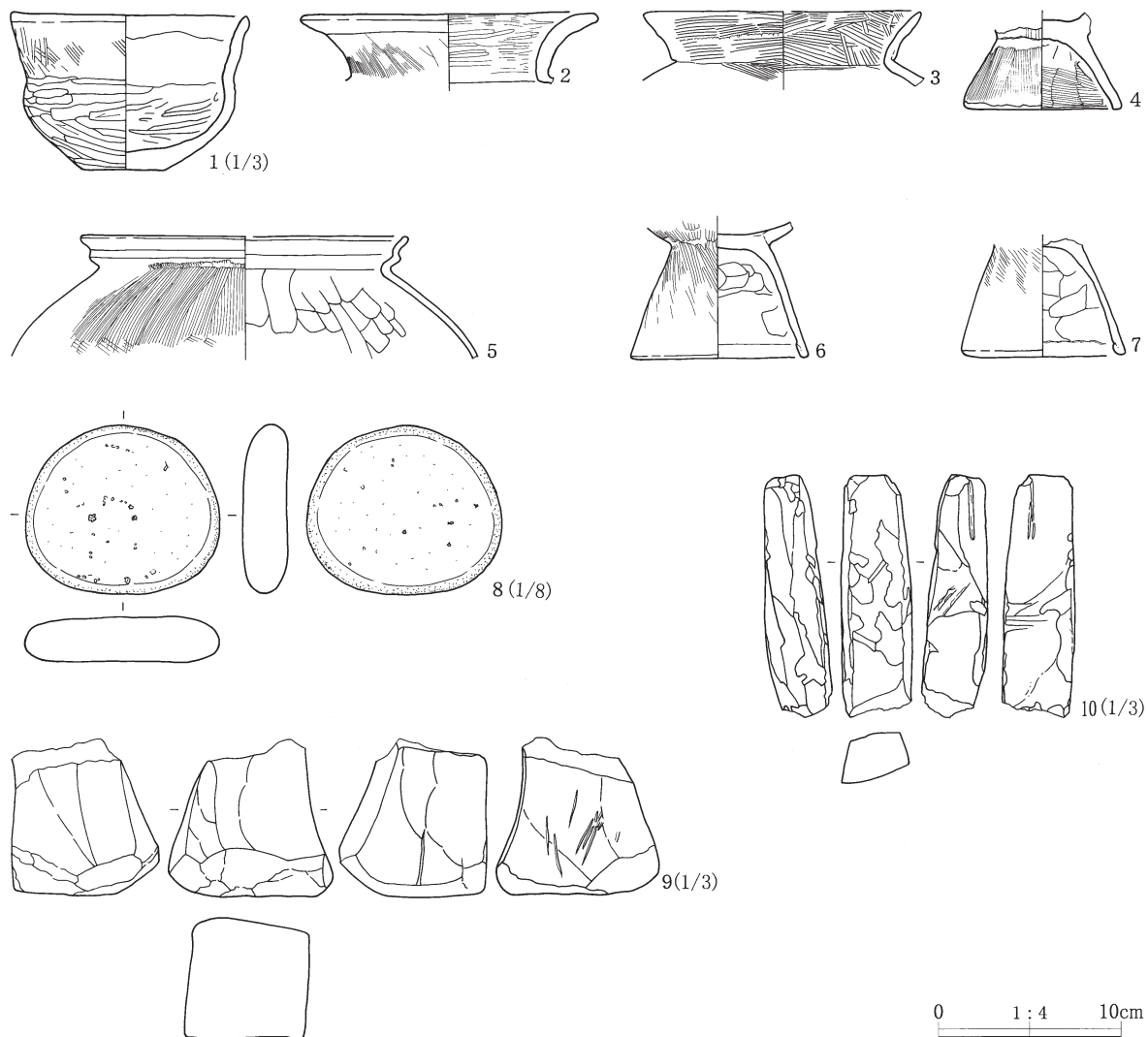


第55図 16号住居跡遺構図(2)



第56図 16号住居跡遺構図(3)・遺物分布図

第4章 検出された遺構と遺物



第57図 16号住居跡遺物図



16号住居跡調査風景
床面を剥いで掘り方を調査中

19号住居跡（第58・61図 PL18・60・61）

位置 3区、39ST-18~20、40A18・19グリッド **重複関係** なし **形状** 方形、南東隅とP1の東にかけて攪乱されている。これを除けば掘り込みも深く、良好な状態で残されている。**規模** 東西6.65m、南北5.90m、壁高55cm **面積** 39.23m² **主軸方位** N60° E

覆土 1~17層に分けた。全体に良く締まっており、主に北側からの流入による自然埋没である。10層を除いて、3層から14層までは混入するロームの大きさや量で区分したもので、違いは微差である。15層~17層は掘り方である。これも良く締まっており、壁際になるほどロームが大粒で量が多くなる。

炉 中央部の北にある。南北95cm、最大幅65cmのヒョウタンのような形状で、焼土の状態を見ると少なくとも2つの円形とそれに続く半円形、単独の円形がある。複数で、2つの時期にわたり使われている。中心は、中央の円形で縁の一部は硬化するほどに焼き締まっている。南に続く半円は焚口であるが、これも同じように赤く焼け硬化している。掘り込みは浅く、床がわずかにくぼむ程度である。炭や灰はなく、焼土だけである。中央の円形からは、縁石代わりに置かれた拳大の割石2個と甌が出土し、近くには遺物が多い。炉の使用状態を示していると同時に、炉が住居の中心の場であることも分かる。

柱穴 4本主柱穴である。長軸・短軸・深さは、P1が80・56・78cm、P2が73・68・80cm、P3が84・60・112cm、P4が62・56・74cmである。いずれも楕円形の掘り方で、この中に建て替えによる2基分がある。外側が古くて、内側が新しい。柱間は、P1とP2が230cm、P2とP3が314cm、P3とP4が248cm、P4とP1が315cmである。炉の南にあるP5は、長軸・短軸・深さが30・28・4cm、P6は同じく52・46・5cmである。ともに浅くて、柱穴ではなく炉辺の施設といった用途が考えられる。

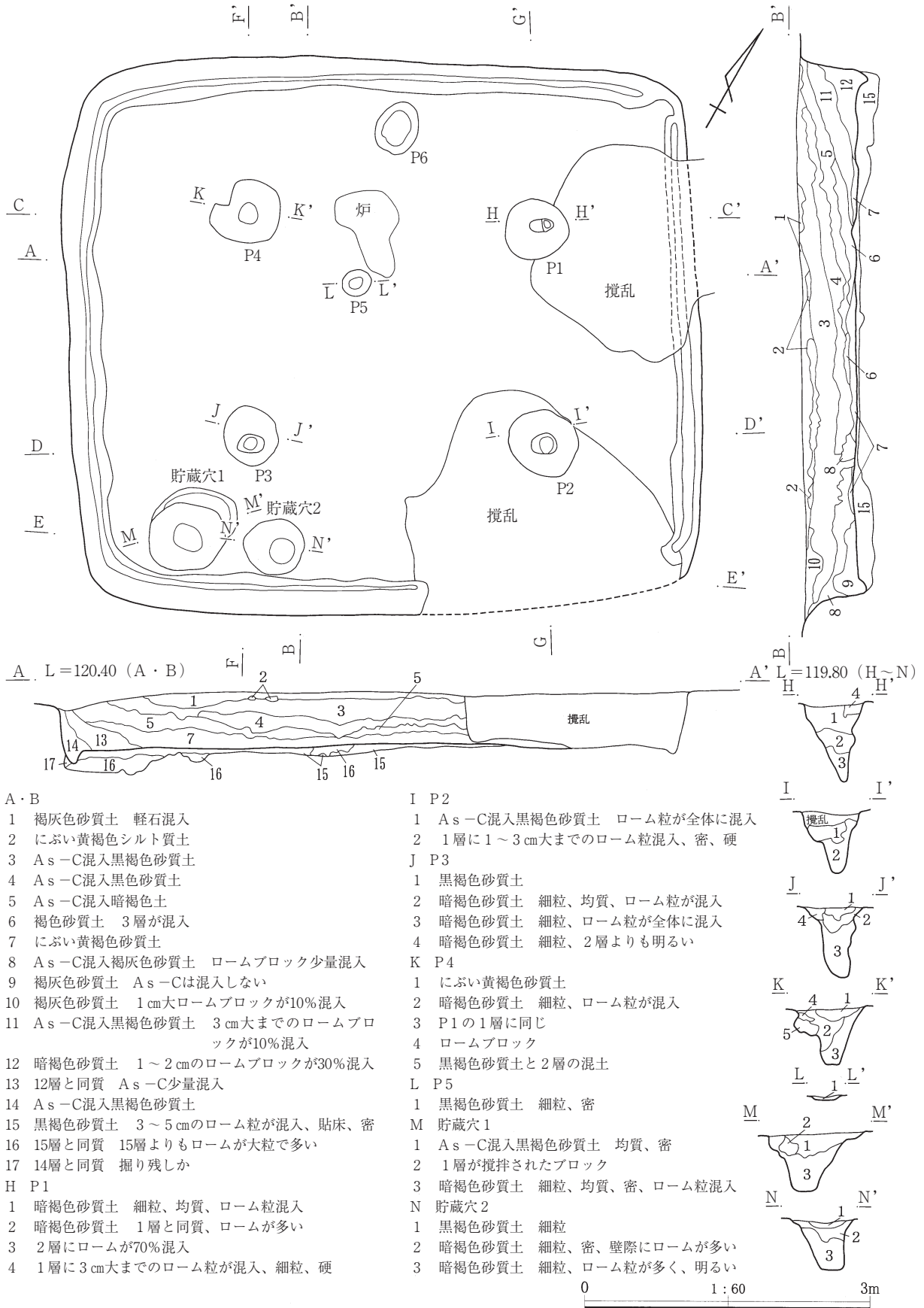
周溝 全周している。幅が15cm前後、深さは5cm前後で一定している。断面はV字でも、壁側が垂直になる。中には、連続した鋤跡が残されている。

貯蔵穴 南西隅に新旧2基がある。1号が新しい。長軸68cm、短軸60cm、深さ64cmの方形、2号が同じく50・50・52cmの方形である。2基ともに遺物は出土していない。1号は、底面にだけ厚さ2~3cmで黄白色粘土が貼付されている。防水用かと思われる。

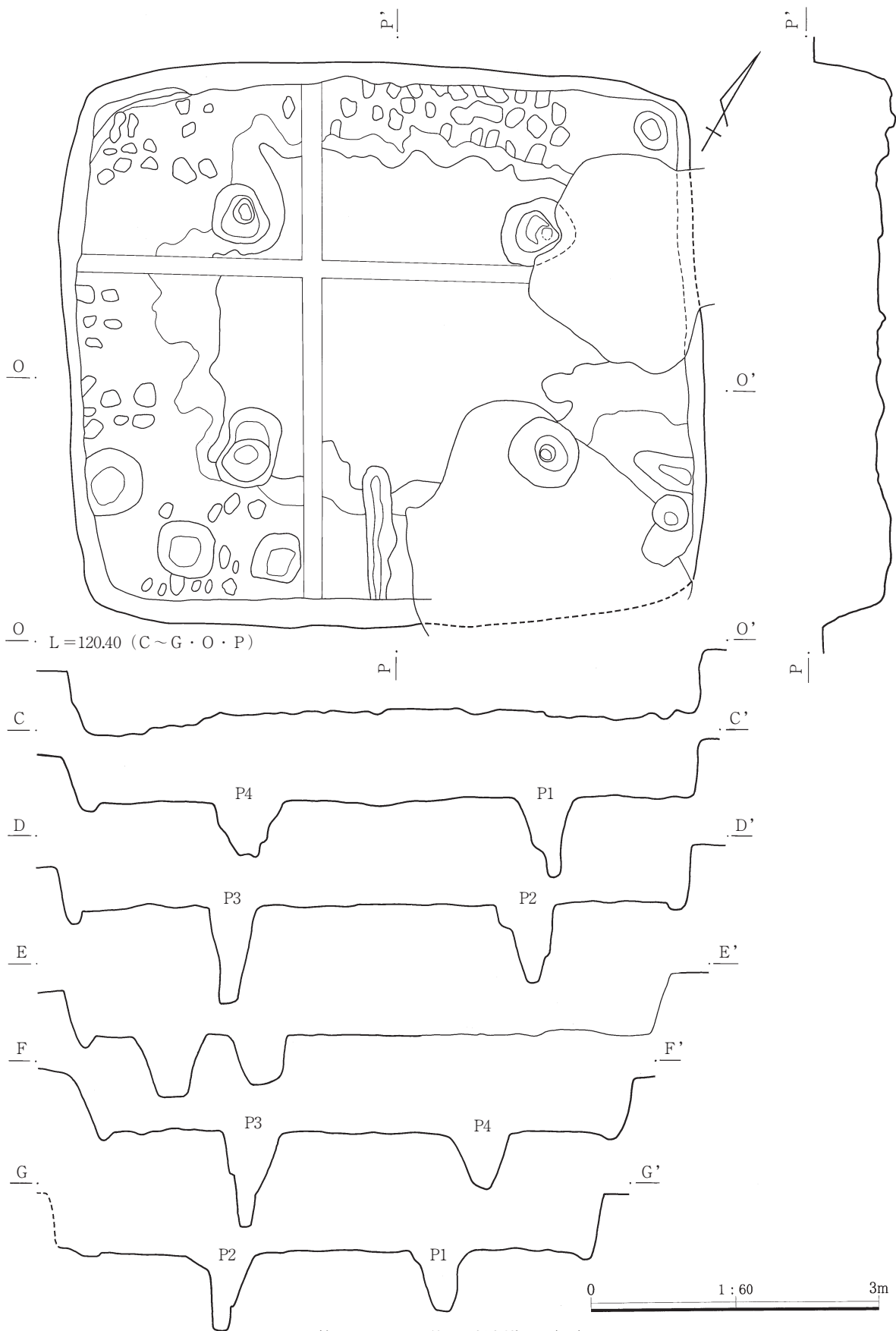
床面 主柱穴を結んだ内側は、貼り床で硬化している。壁際は、炉の東から南東隅までが内側よりも1~2cm高いベッド状の構造である。間仕切り溝は、柱穴とは連結しないで、床に段差のない西壁に2本、同じ北壁に1本がある。同じ壁際でも床の高さが違い、構造にも違いのあることが分かる。掘り方は、主柱穴を結んだ内側を一段高い島状に掘り残している。段差は3~5cm、西側ほどはっきりとしている。掘削の鋤跡は、一段深い北の壁際に良く残されていたが、西から東に向かって作業していることが分かる。南壁中央部には、入口がある。側板を埋め込んだと思われる平行する2条の細い溝と、補強の杭の跡1基が検出されている。幅が最大で80cm、壁からの長さは1.40mである。

遺物と出土状態 破片の数が多く、個体と器種も多い。炉の西側に殆どの遺物があり、北西隅に集中する。検出面から深さ20cmまでと、床直から床上10cmまでの上下でまとまっている。床面の近くは、炉とその周囲、南西隅の貯蔵穴の周囲である。炉内は、14の単孔の甌がつぶれている。住居跡全体では、埴、器台のほかにS字状口縁台付甕、小型甕、甌が出土しているが、甕類は少ない。2号貯蔵穴の上面は、上蓋に置いていたかのように並んでいる。住居跡中央で出土した16の台石も、手の平程度の範囲に一面の敲打痕があり、いかにも作業するにふさわしい場所である。非掲載は、土師器483点、石器8点がある。

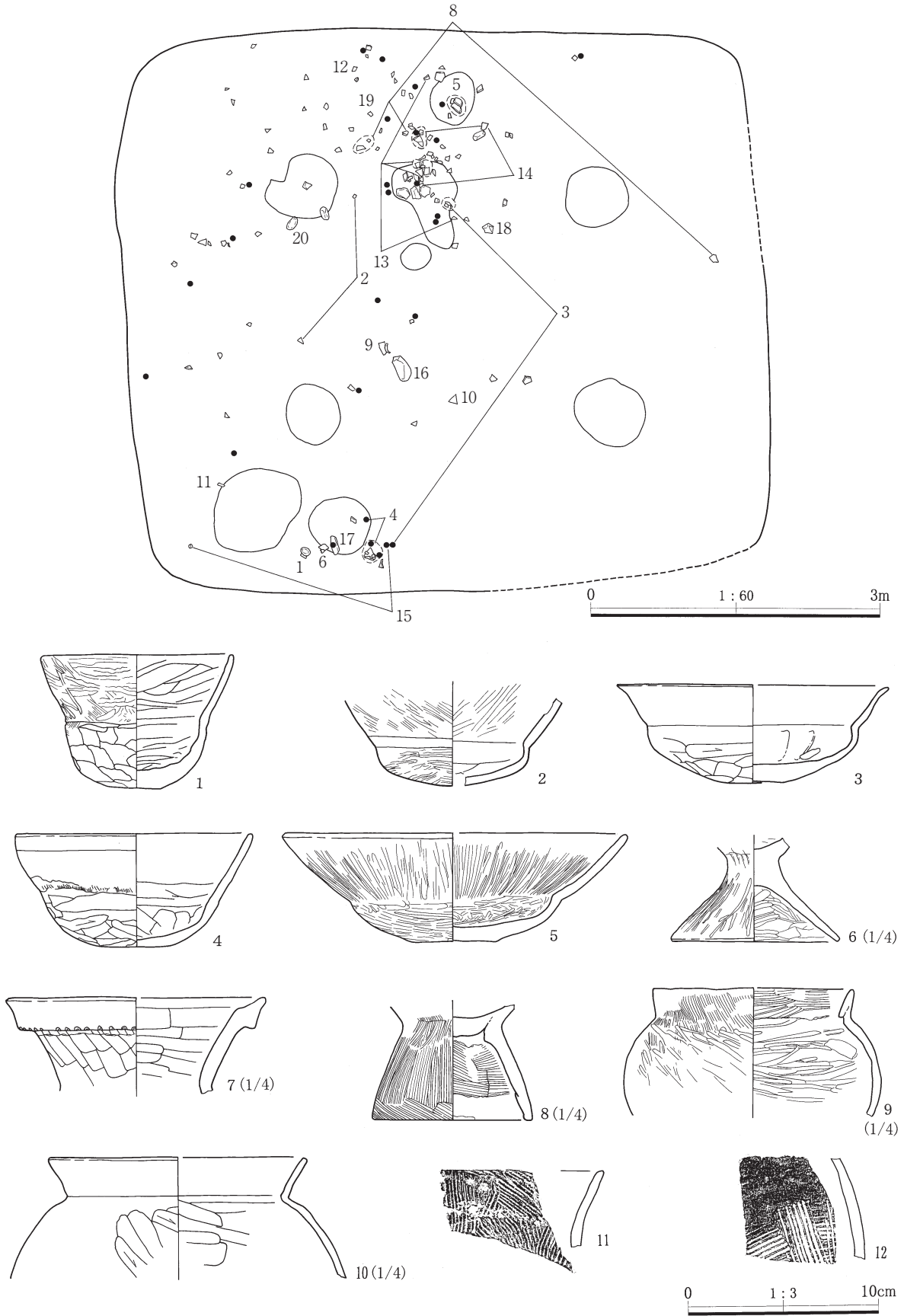
所見 古墳時代前期の住居跡である。As-C降下後の時期である。柱穴と貯蔵穴の様子から、建て替えをしていることがわかる。



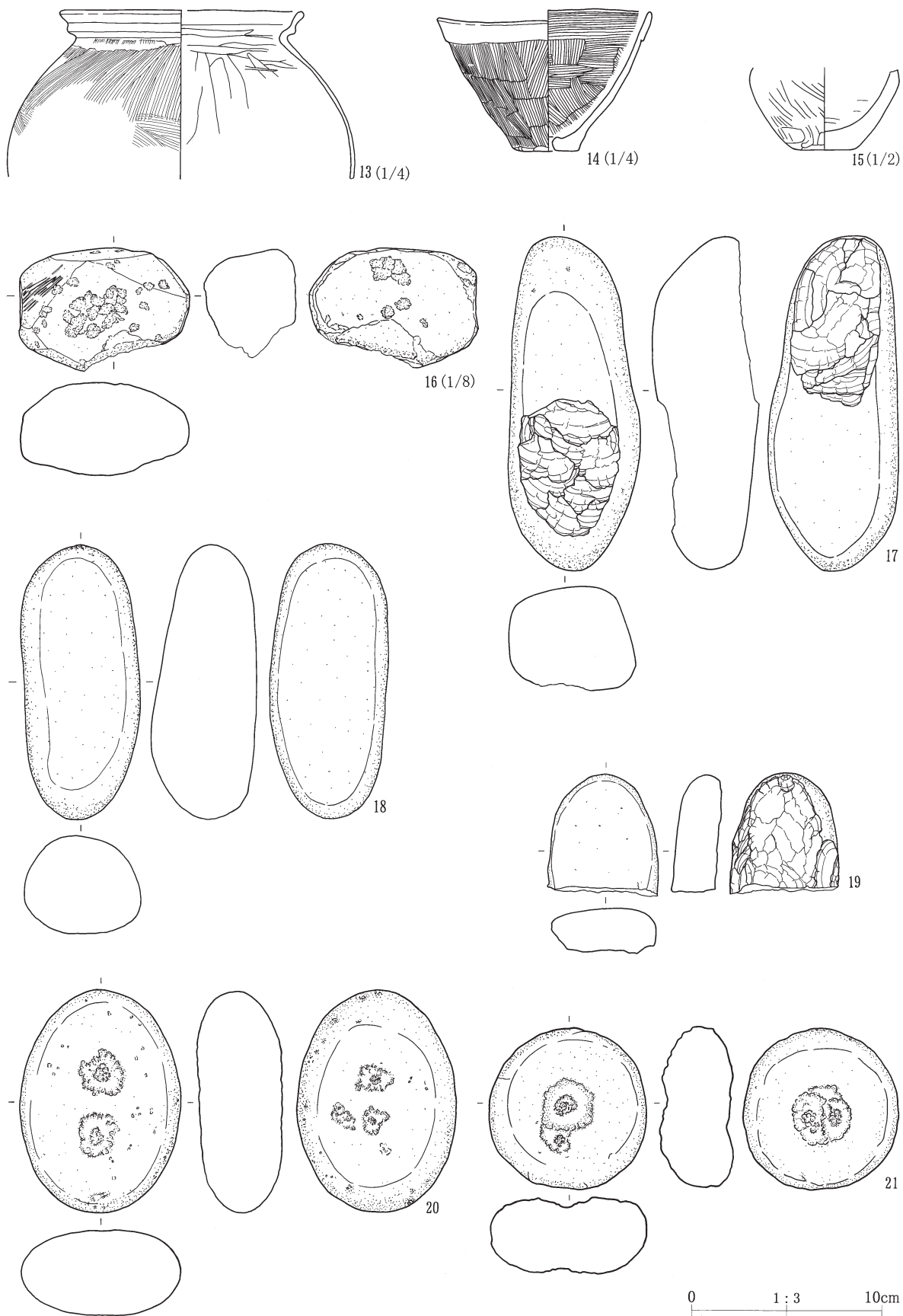
第58図 19号住居跡遺構図(1)



第59図 19号住居跡遺構図(2)



第60図 19号住居跡遺物分布図・遺物図(1)



第61図 19号住居跡遺物図(2)

第4章 検出された遺構と遺物

20号住居跡（第62・63図 PL19・62）

位置 3区、40BC-20、50BC-1グリッド 重複関係 なし 形状 長方形、南西隅と中央部を大きく攪乱されている。規模 東西5.45m、南北4.80m、壁高15cm 面積 26.16m² 主軸方位 N53° E

覆土 1～9層に分けた。1層から5層は、As-Cを混入する暗褐色、黒褐色の砂質土、自然埋没である。7層～9層はローム漸移層を主とした掘り方で、9層は貼り床材である。

炉 中央部の北、P3寄りに2箇所がある。1号は、長軸80cm、短軸46cm、深さ2cmの楕円形の掘り方の中に、わずかに焼土が残されている。2号は、長軸45cm、短軸26cmの範囲に焼土が溜まっている。5号住居跡に類似することから炉と判断したが、中央部を外れており、複数あるうちのひとつと推定される。

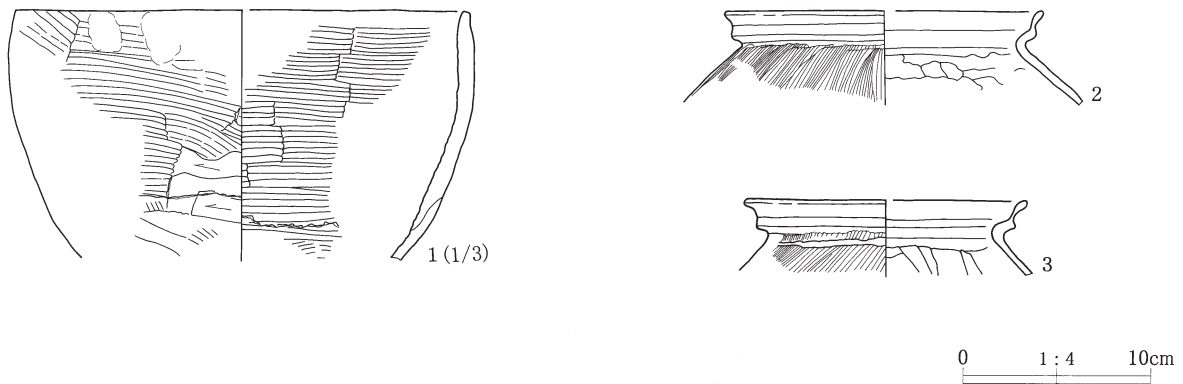
柱穴 推定4本の支柱穴である。長軸・短軸・深さは、P1が21・20・8cm、P2が26・23・8cm、P3が22・19・8cm、P4が21・20・33cmである。P1からP3が支柱穴であるが、いずれも浅いことが共通している。P4は、掘り方が深く、しっかりとして棟持柱を想定したが、対応する東側にはない。柱間は、P1とP3が285cm、P2とP3が190cmである。周溝 なし

貯蔵穴 同時期の住居跡には多い南西隅が攪乱されているので確定はできないが、北東隅にある土坑をあてる。長軸50cm、短軸24cm、深さ10cmの方形で、掘り込みは浅いが主軸が壁と平行している。出土した遺物はない。これとは別に、掘り方では南東隅寄りに浅い土坑状のものがある。

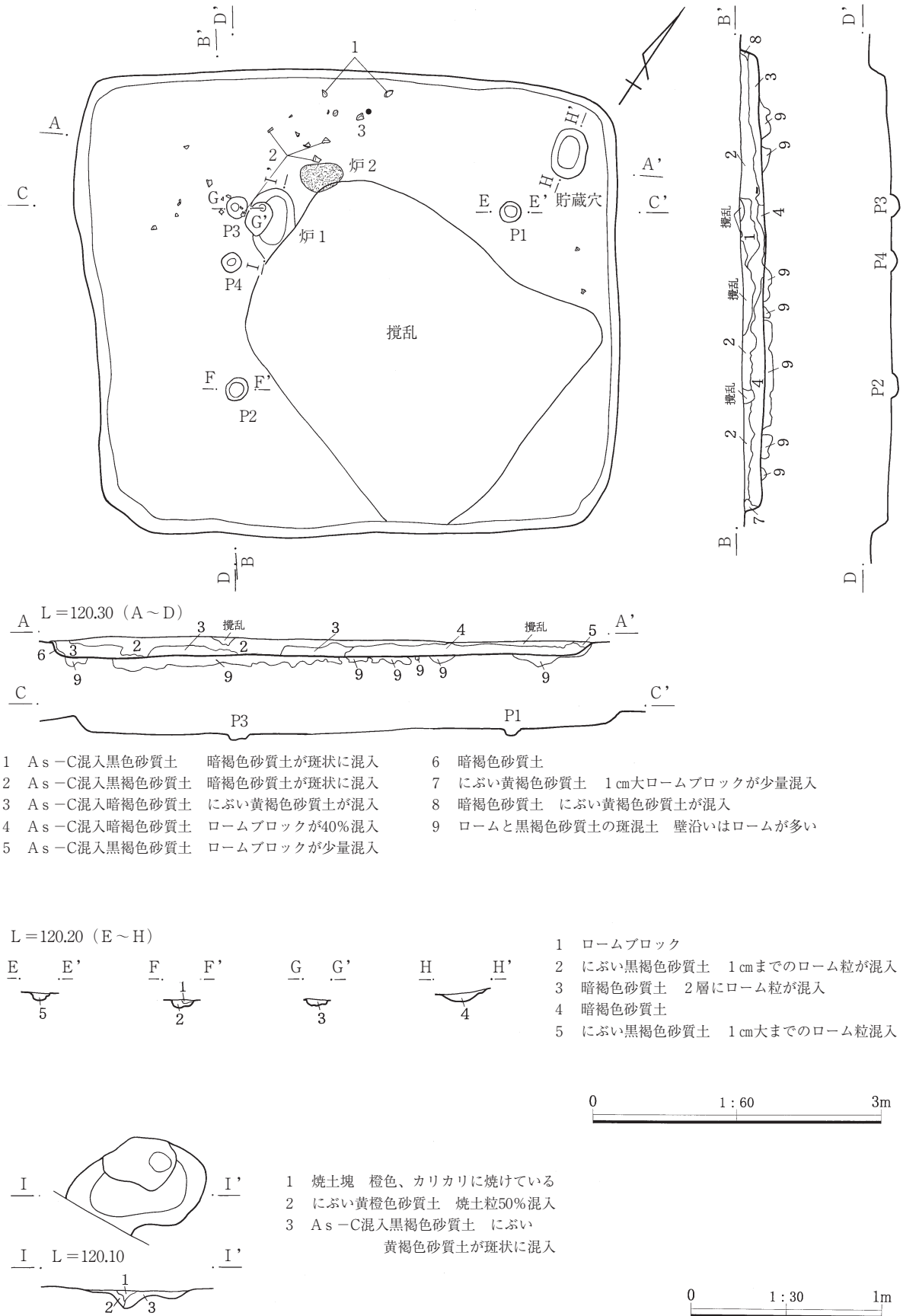
床面 ソフトロームを10～15cm掘り下げて、ローム漸移層を主にした暗褐色砂質土、黒褐色砂質土との混土で貼り床をしている。覆土とは色調で容易に区別できたが、硬化した面は検出できず、床は遺物分布と炉の焼土塊の分布状態から特定した。掘り方は、全体が掘り下げられている中で、壁から30～40cm内側がさらに帯状に下がる。しかし、周囲の住居跡に見られるような支柱穴を境にして段差を持つなど、はっきりとしたものではない。帯状に見える中には、鋤跡が点々と残されている。検出した帯状のものと壁とのズレは、ほかの住居跡にはない注目する点で、拡張した跡か建て替えを検討してみたが柱穴、貯蔵穴はひとつしかなく可能性にとどまる。南壁の中央部には、入口施設と見られる間仕切り溝がある。壁に直交し2条で対になるうちの西側と見られ、長さは1.12m、幅16～20cm、深さ7～9cmである。壁高が50cm前後で浅いと判断されることと溝に傾斜はなく、梯子というよりは踏み台のような構造であろうか。

遺物と出土状態 炉の北側から壁際との間で1の鉢、2、3のS字状口縁台付甕が出土している。全体では、北西隅が多い。非掲載は、土師器43点、須恵器1点、縄文土器13点、内耳土器1点である。いずれも細片で、接合率も低い。

所見 古墳時代前期の住居跡である。As-C降下後の時期である。



第62図 20号住居跡遺物図



第63図 20号住居跡遺構図

第4章 検出された遺構と遺物

21号住居跡（第64～69図 PL19・20・62・63）

位置 3区、50A～C-3～5グリッド、北東隅だけが市道にかかり未調査である。

重複関係 中央部を東西に8号道が重複している。形状 方形 規模 東西8.40m、南北7.40m、壁高45cm

面積 62.16m² 主軸方位 N65° E

覆土 1～20層に分けた。壁際を除いて、1層～4層で自然埋没している。いずれも、As-Cを混入する黒色から黒褐色の砂質土で、違いは微差である。15層～18層が掘り方である。

炉 中央部の北側、P1とP4を結んだ線上にある。長軸148cm、短軸70～90cm、深さ9～12cmのヒョウタンのような形をしている。焼け方と遺物の出土状態からすると、2基が南北に連結していることが分かる。北側は焼土だけが残され、南側には焼土のほかに縁石2個が原位置で残されている。位置や縁石の有無から見て、わずかに大きくもある南が中心であろう。

柱穴 4本支柱穴である。長軸・短軸・深さは、P1が62・48・78cm、P2が36・28・70cm、P3が56・52・72cm、P4が80・62・66cmである。柱間は、P1とP2が386cm、P2とP3が380cm、P3とP4が354cm、P4とP1が386cmである。P5は、炉に接して検出、長軸68cm、短軸56cm、深さ21cmである。P6は、長軸46cm、短軸40cm、深さ10cmである。接している間仕切り板を止める杭の跡であろうか。P7は長軸62cm、短軸38cm、深さ24cmの方形、東側に粘土塊がある。P8は、掘り方で検出したもので長軸48cm、短軸44cm、深さ52cmである。

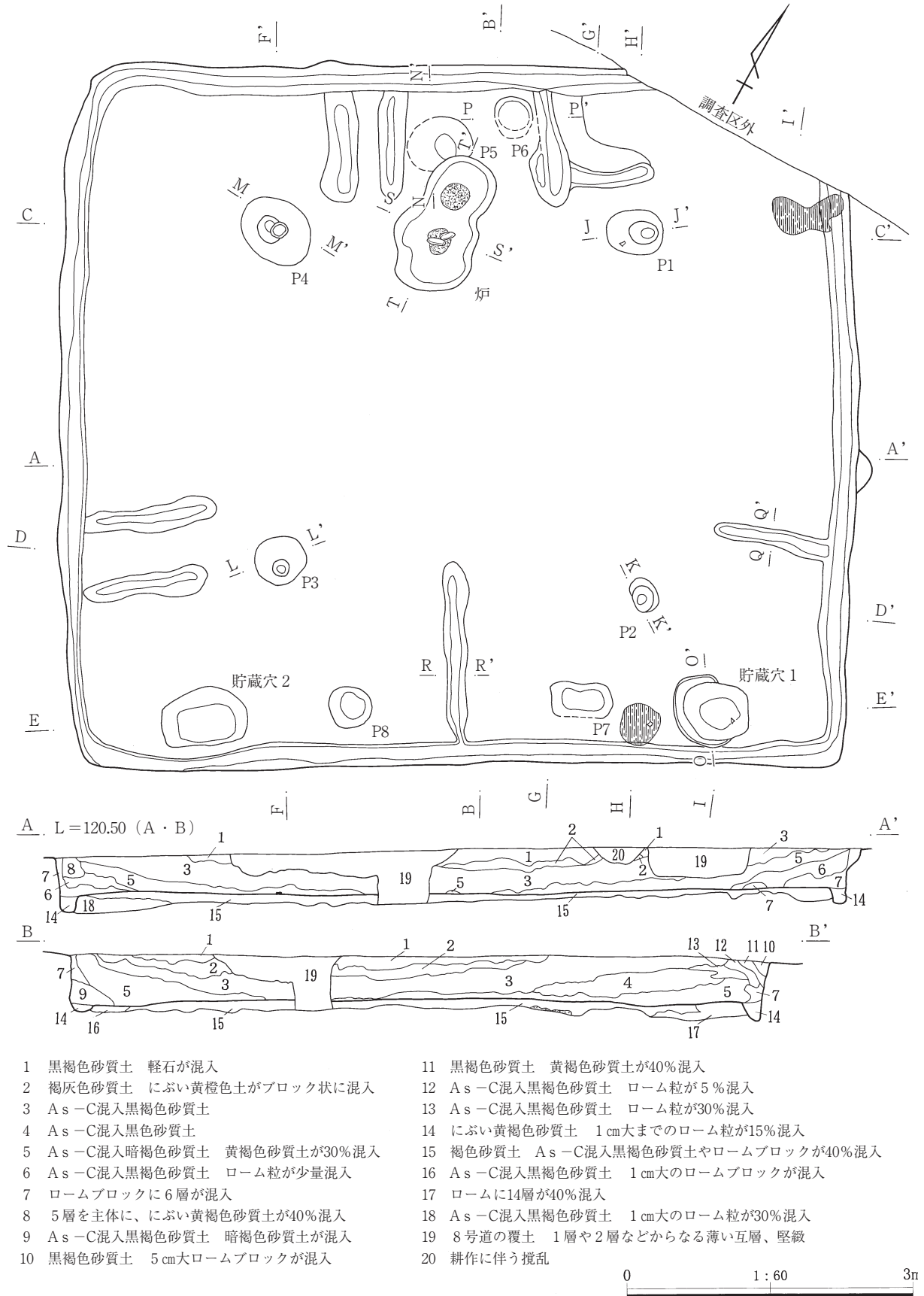
周溝 全周している。幅が20cm前後、深さ10cm前後である。

貯蔵穴 新旧2基がある。新しいのが南東隅にある1号で、長軸62cm、短軸58cm、深さ68cmの方形である。掘り方で検出されたのが、南西隅の2号である。長軸82cm、短軸66cm、深さ76cmの方形で、厚さ1～2cmの縞状の土20層以上で埋没していた。西の両方の隅の近くに小さなピットがあく。北が27・25・11cm、南が25・21・9cmで、間仕切りか貯蔵穴の蓋と関係したものであろう。

床面 覆土の15層が貼り床である。褐色砂質土、黒褐色砂質土、ロームブロックほかの混土である。支柱穴を含む中央部がわずかに高く、壁際が帯状に低い。その中でP6が接する北東隅は、L字形の溝で仕切られ、間口2.60m、奥行き1mの範囲がほかより10cmほど高くなっている。それに続く東の壁沿いも、北ほどではないが南北4.50m、奥行き1mで同じように高い。間仕切り溝は、北で2条、東で1条、西で2条、南で1条がそれぞれ検出されている。南を除いて、いずれもベッド状遺構のための根太と見られる。幅は15～20cm、深さが10cm前後である。南は、入口用と見られ、2m近い長さがある。掘り方は、壁際が1m前後の幅で掘り下げられ、中央部が方形に一段高い。

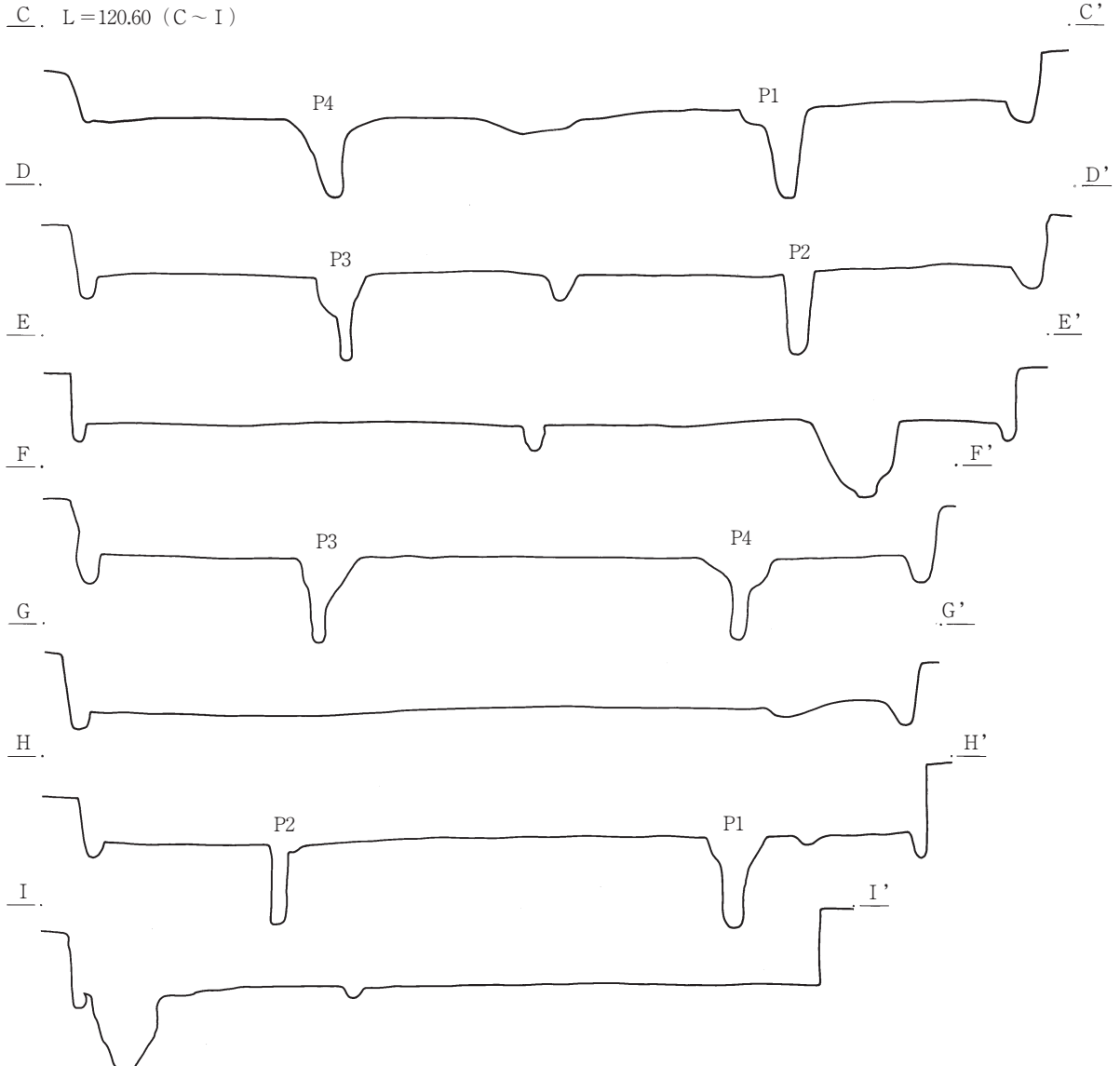
遺物と出土状態 炉の周辺と西壁から柱穴までに多い。壁際に粘土塊が点在している。いずれも床直で、南東隅のものが最も大きく50×40cmの範囲、ほか2箇所は半分以下の大きさである。壁際という位置から見て、仮置きしていたものであろう。特に南東隅は、方形の見た目にもしっかりとした形状をしており、木組みの中にでも入れてあったものであろうか。また、P2のすぐ脇の床が部分的ながら焼けていた。粘土は、この火と関係したものであろうか。9のS字口縁台付甕は炉内と西壁で接合し、その炉からは11の土製紡錘車が出土している。ここでも、壺・甕類が少なく、埴ほか小型の器種が目立っている。非掲載は、土師器1311点、石器17点がある。

所見 古墳時代前期の住居跡である。貯蔵穴と間仕切り溝の様子からすると、建て替えをしている。ただし、柱穴は、新規に掘らずに同じ位置での建て替えである。

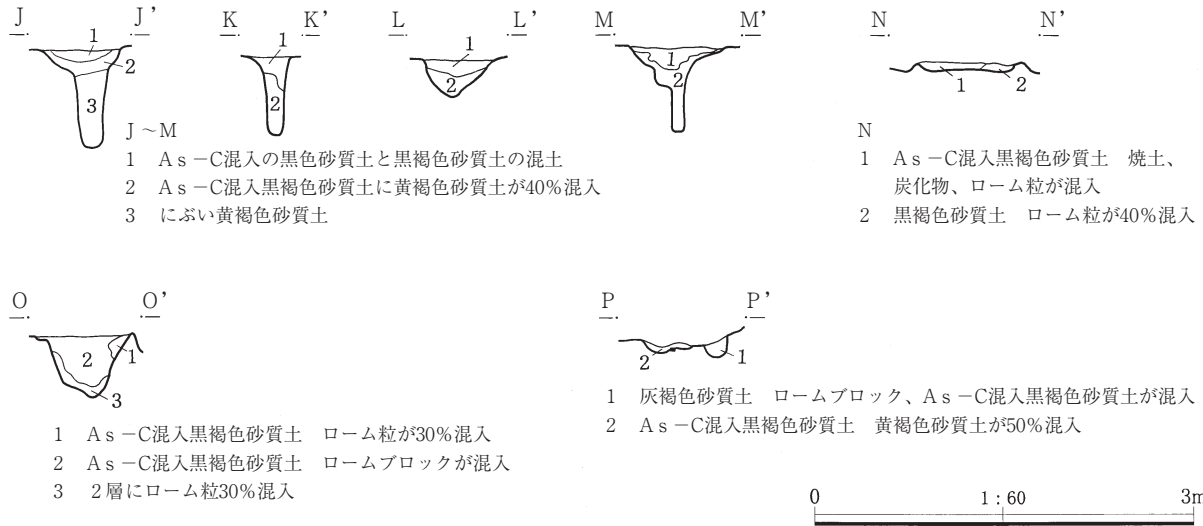


第64図 21号住居跡遺構図(1)

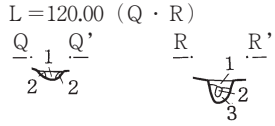
第4章 検出された遺構と遺物



L=120.00 (J~P)



第65図 21号住居跡遺構図(2)



Q 根太2

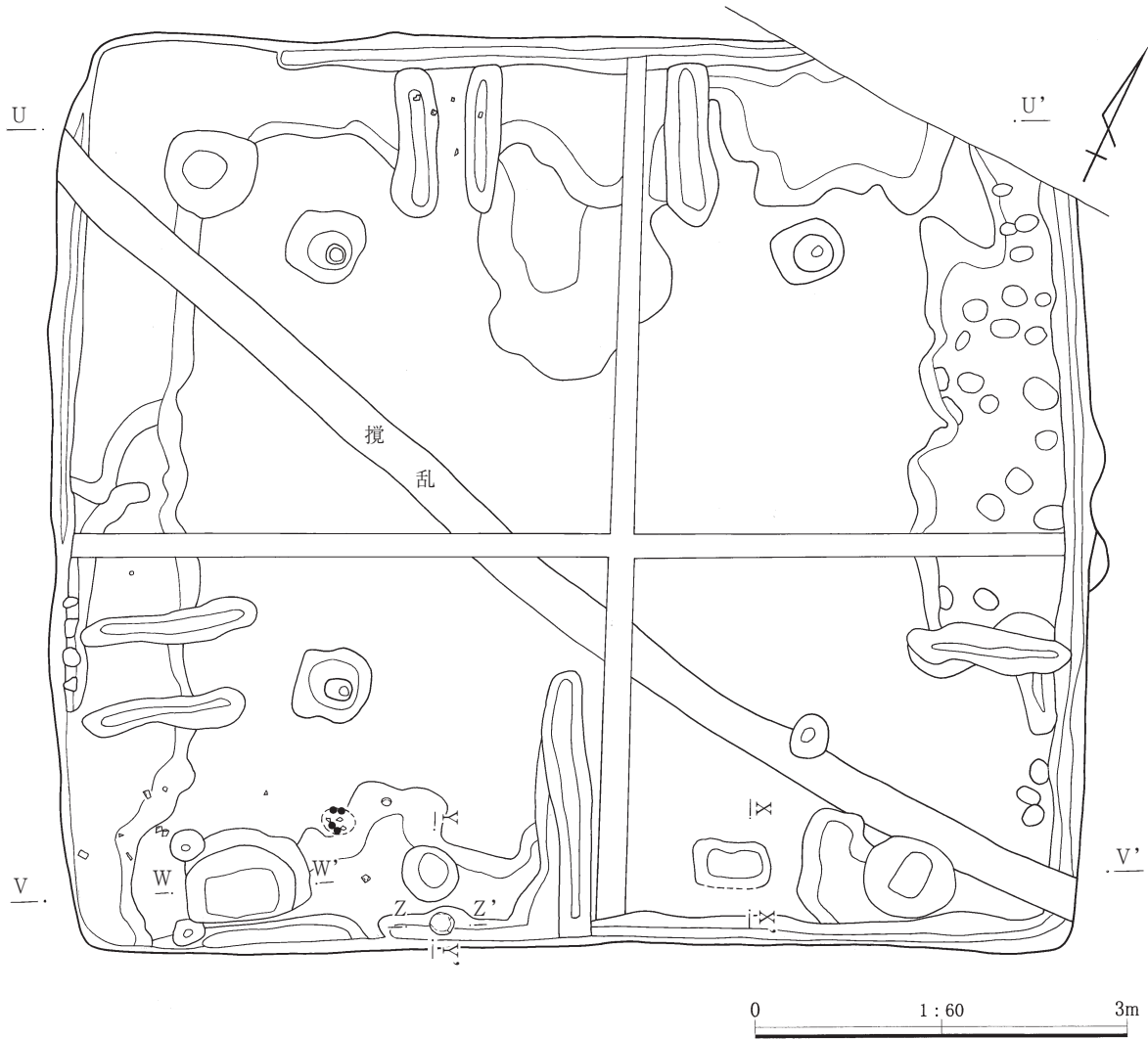
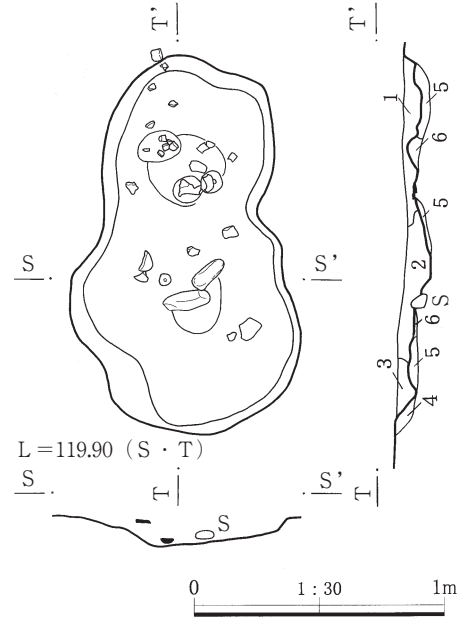
- 1 As-C混入黒褐色砂質土 黄褐色砂質土が50%混入
- 2 にぶい黄褐色砂質土 1cm大のローム粒が20%混入

R 根太3

- 1 As-C混入黒褐色砂質土 にぶい黄褐色砂質土が混入
- 2 ロームブロック
- 3 にぶい黄褐色砂質土 1cm大のローム粒が5%混入

T 炉

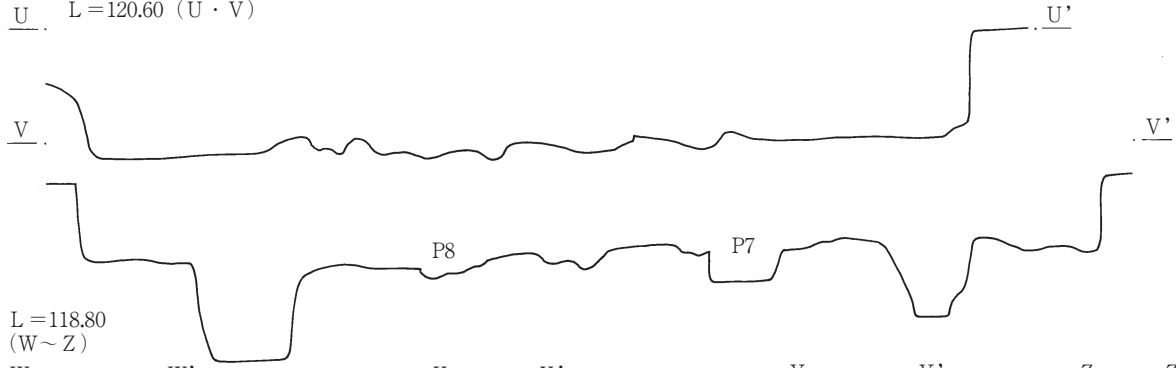
- 1 As-C混入黒褐色砂質土 焼土、ローム粒が混入
- 2 As-C混入黒褐色砂質土 暗赤褐色砂質土が斑状に混入
- 3 As-C混入黒色砂質土 ロームブロックが斑状に混入
- 4 褐灰色砂質土 ローム粒が混入
- 5 ロームブロックに3層や2層、1層が混入
- 6 焼土ブロック



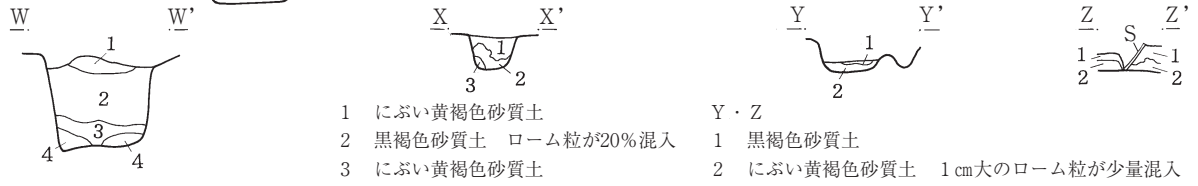
第66図 21号住居跡遺構図(3)

第4章 検出された遺構と遺物

U L=120.60 (U・V)

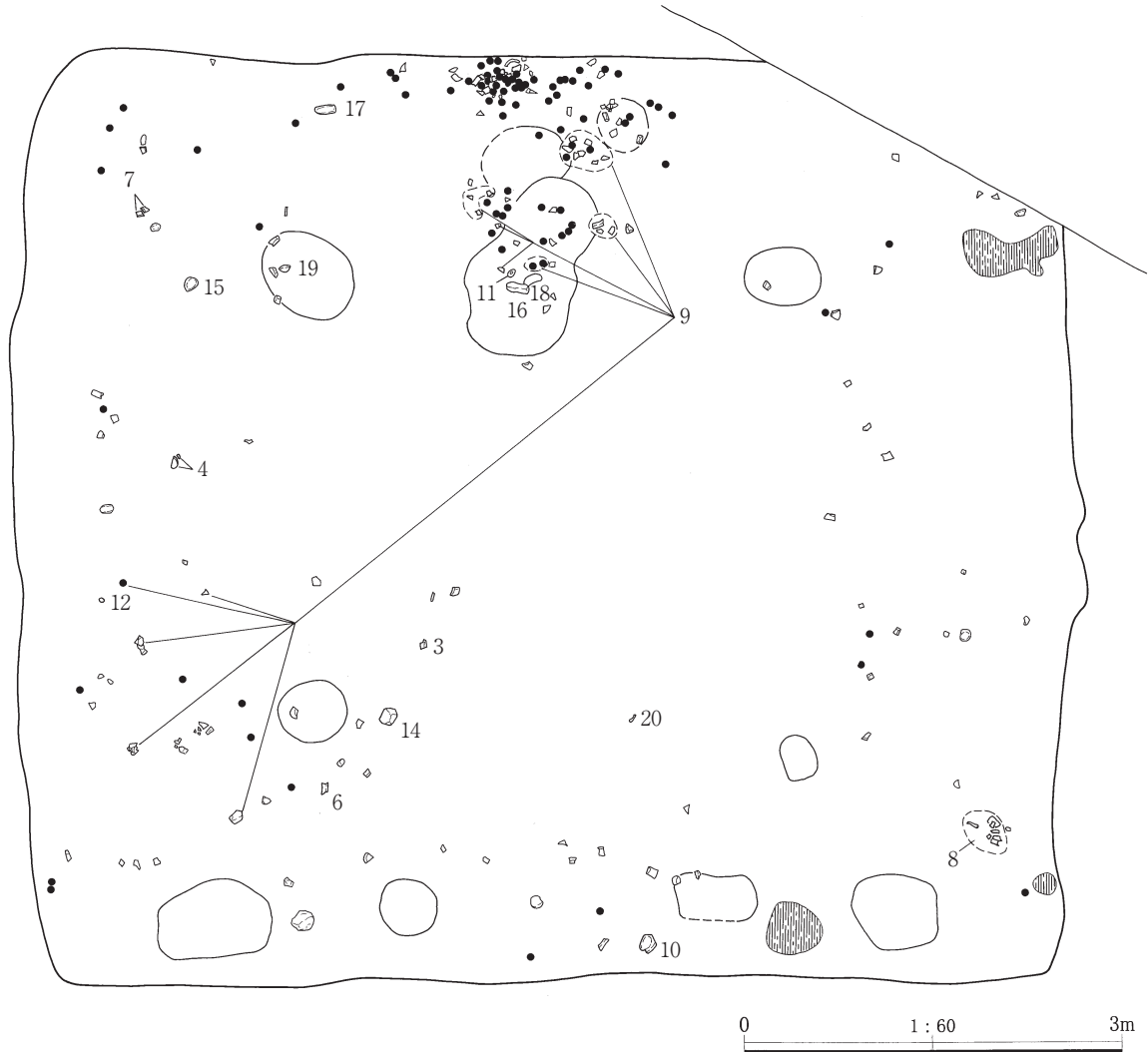


L=118.80
(W~Z)

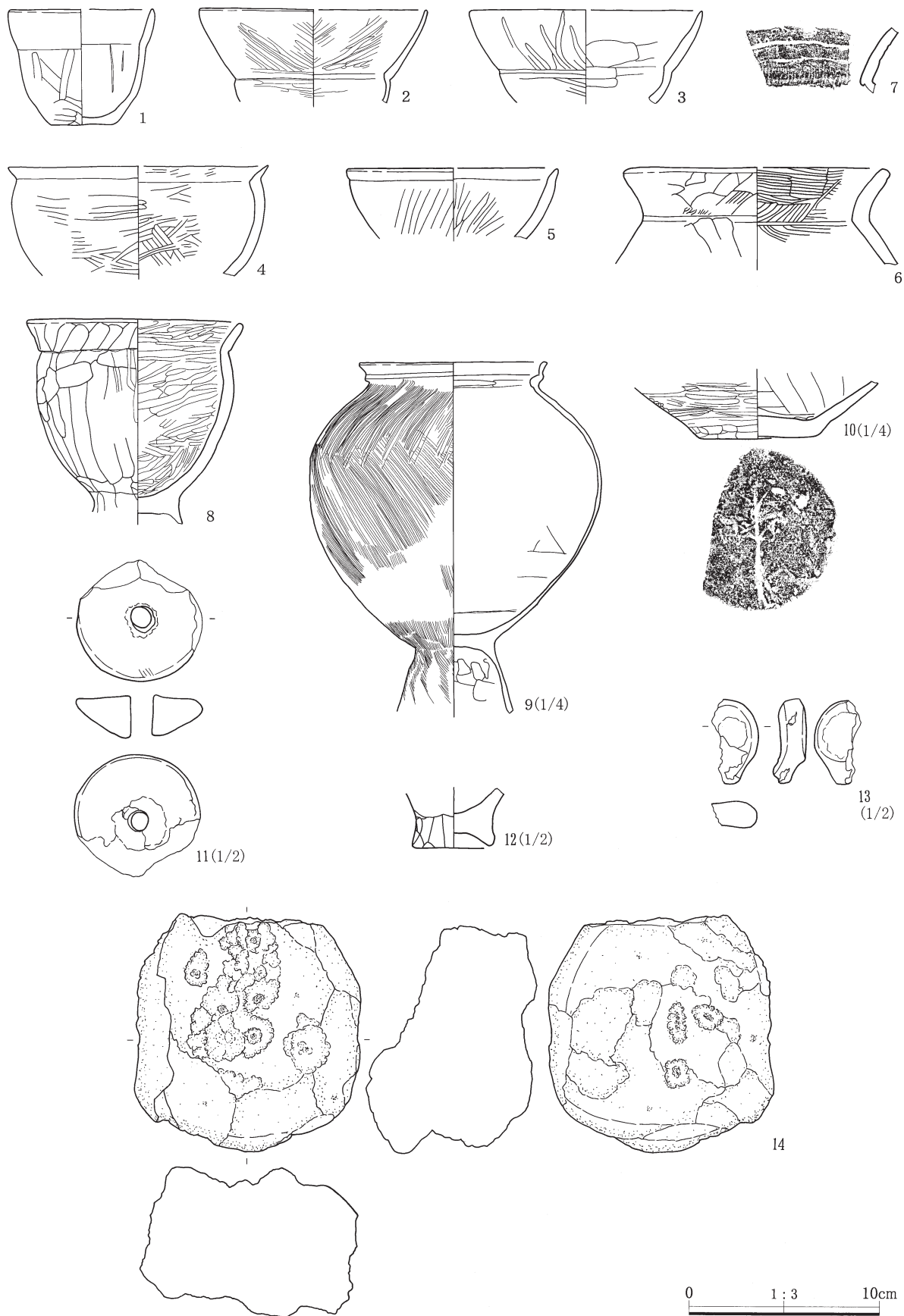


- | | | | | |
|---|-------------------|-----|---|--------------------------|
| 1 | にぶい黄褐色砂質土 | Y・Z | 1 | 黒褐色砂質土 |
| 2 | 黒褐色砂質土 ローム粒が20%混入 | | 2 | にぶい黄褐色砂質土 1cm大のローム粒が少量混入 |
| 3 | にぶい黄褐色砂質土 | | | |

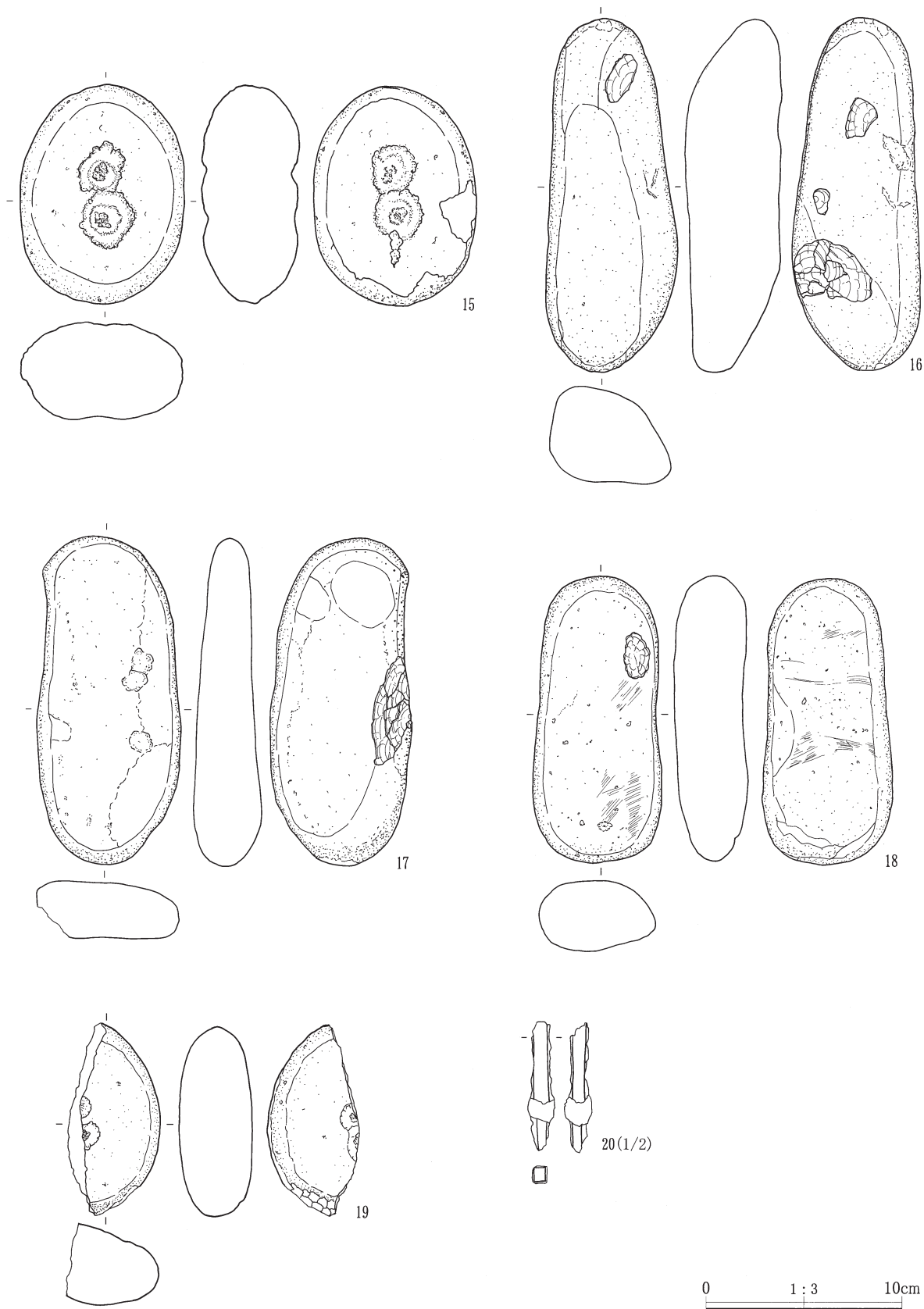
- 1 ロームブロックに黒褐色砂質土が混入
- 2 黒褐色砂質土にロームや黄褐色砂質土が互層で混入
- 3 黒褐色砂質土
- 4 3層に1~3cm大のローム粒が3%混入



第67図 21号住居跡遺構図(4)・遺物分布図

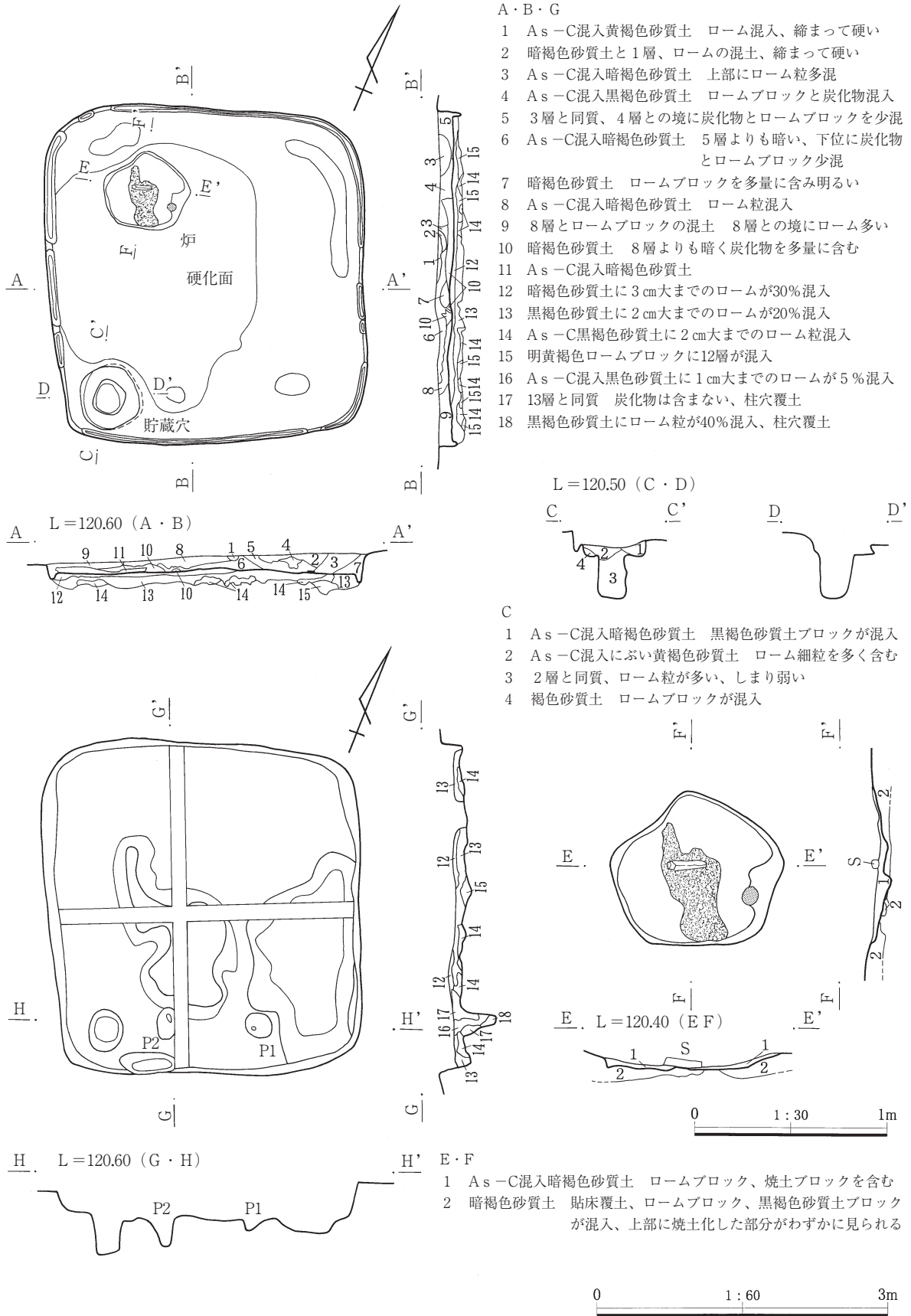


第68図 21号住居跡遺物図(1)



第69図 21号住居跡遺物図(2)

第3節 古墳時代前期の遺構と遺物



第70図 22号住居跡遺構図

第4章 検出された遺構と遺物

22号住居跡 (第70・71図 PL20・21・63)

位置 4区、50AB-7グリッド 重複関係 なし 形状 方形、隅が丸く、東壁が緩く弧を描いている。

規模 東西3.10m、南北3.30m、壁高16cm 面積 10.23m² 主軸方位 N31° W

覆土 1~18層に分けた。ロームの混入状態で細かに分層されている。ロームは、ブロックとなるのが多く、人為的な埋没土か土屋根が崩落したものと見られる。12層~18層が掘り方である。

炉 中央から外れて、北西隅寄りにある。長軸78cm、短軸70cm、深さ7~8cmである。柱穴 なし

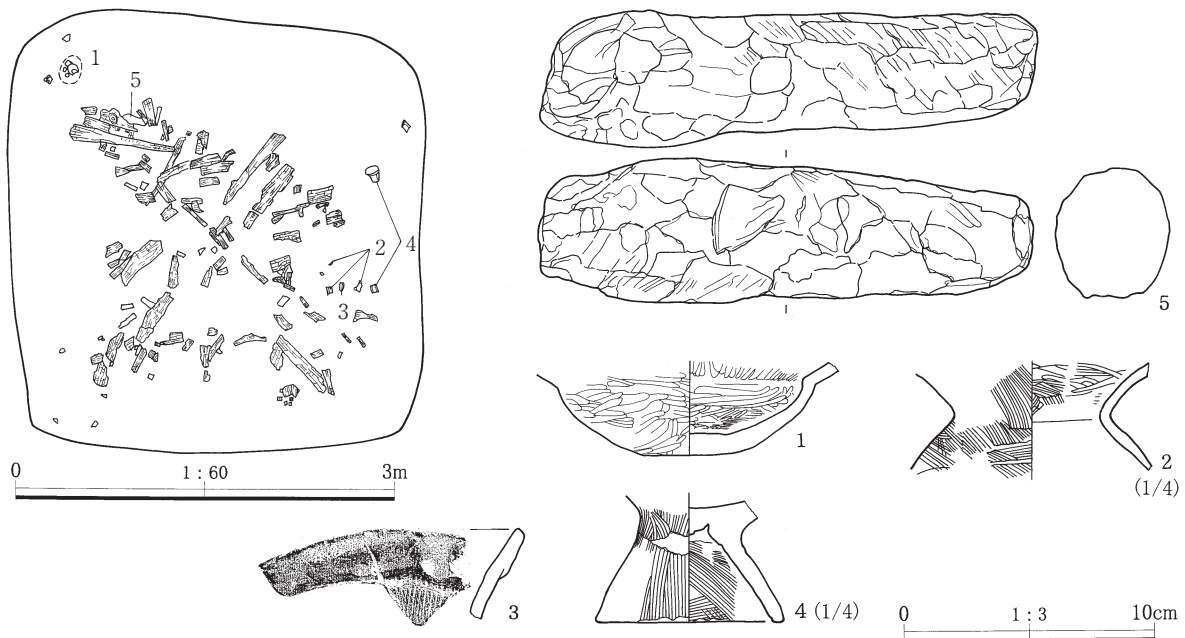
周溝 全周している。幅は10cm前後、深さは5~7cmである。

貯蔵穴 南西隅にある。長軸42cm、短軸30cm、深さ60cm、隅の丸い方形である。床とは5cmの段差がある、ひとまわり大きな掘り方の中にあり、この段差が蓋の厚みであろう。

床面 ハードロームまで掘り込んで、12層、13層、14層を薄い互層にして貼り床をしている。中央部から西側、炉を含む南北2.50m、東西2.0mの範囲に硬化面がある。北の両方の隅には、As-C混入黒褐色砂質土の帯状の盛り土がある。壁には平行しているが、周溝とは20cmほどのすき間がある。高さは最大で10cm、幅が10cm前後と一定である。全周していたのか、南にも2箇所のブロックがある。調査時の所見では土屋根の痕跡かとしているが、本来屋内にあるもので床に密着している。掘り方は、はっきりとはしないが全体が掘り返されている。周溝の部分は段差にして残され、造作の違うところを見せている。中央部でも一面が島のように残る。また、南の中央部には、2本のピット意図からなる入口施設がある。長軸・短軸・深さは、西が34・18・40cm、東が28・26・12cm、壁からは50cm、間口90cmである。

遺物と出土状態 非常に少ない。1の埴、4の台付甕は床面で出土した。5は、炉に据えてあったもので縁石に代わるものである。非掲載は、土師器34点、縄文土器9点がある。

所見 古墳時代前期の住居跡である。焼失住居である。炭化材は、壁から1m離れ、住居跡の中央部にだけ残る。四隅を対角線に結んでいるところから、上屋は入母屋と推定される。炉の上面は折り重なっている。火元かどうかは特定できない。炭化材の樹種は、クヌギ節で占められている。枝分かれしているのは1本だけで、素性の良い直幹か太枝から割り出している。丸太とわかるのは数点である。詳細は第5章に掲載した。



第71図 22号住居跡遺物図

3 土坑

ここで報告する2基の土坑は、住居跡の貯蔵穴である。住居跡は、土地改良で大半が削平され、貯蔵穴だけがかろうじて残されていたものである。柱穴は、検出されていない。時期は、出土した土器から判断した。前期の住居跡は、3区と4区で7軒が検出され、3区を中心に一群を構成している。2基は、4区にあつて23号住居跡とともに、一群のうち北から北西部にあたる。図面、写真、遺物で使用した名称は、調査時の土坑のままである。

52号土坑 (第72図 PL35・70)

位置 4区、50E-8グリッド、同時期の22号住居跡とは20m離れ、53号土坑とは15mの位置である。重複している遺構はない。

形状 円形、壁は垂直に近く、底面は平坦である。

規模 長軸51cm、短軸48cm、検出面からの深さ24cmである。

覆土 にぶい黄褐色砂質土と暗褐色砂質土で自然埋没している。

遺物 覆土の中位で埴が出土した。

時期 前期

所見 住居跡の貯蔵穴である。

53号土坑 (第72図 PL35・70)

位置 4区、50H-10グリッド、52号土坑からは15mの位置である。

形状 円形、壁は外反し、断面形は碗のようである。

規模 長軸50cm、短軸41cm、検出面からの深さ17cmである。

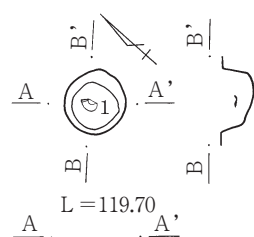
覆土 暗褐色砂質土で自然埋没している。

遺物 壺の上半部が口縁部を上にして、押しつぶされた状態で出土した。

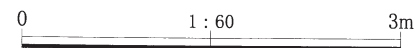
時期 前期

所見 住居跡の貯蔵穴である。

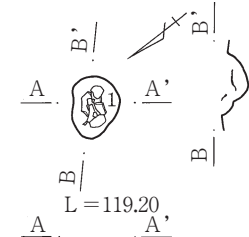
52号土坑



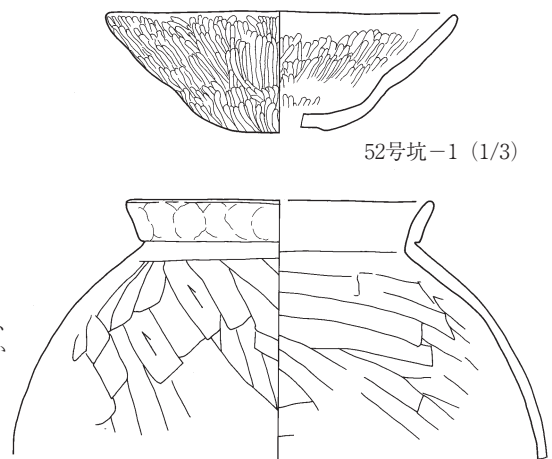
- 1 にぶい黄褐色砂質土 ロームの小塊少混、粘性としまりに乏しい
- 2 暗褐色砂質土 大きなローム塊を斑状に含む、粘性はあるがしまりに乏しい



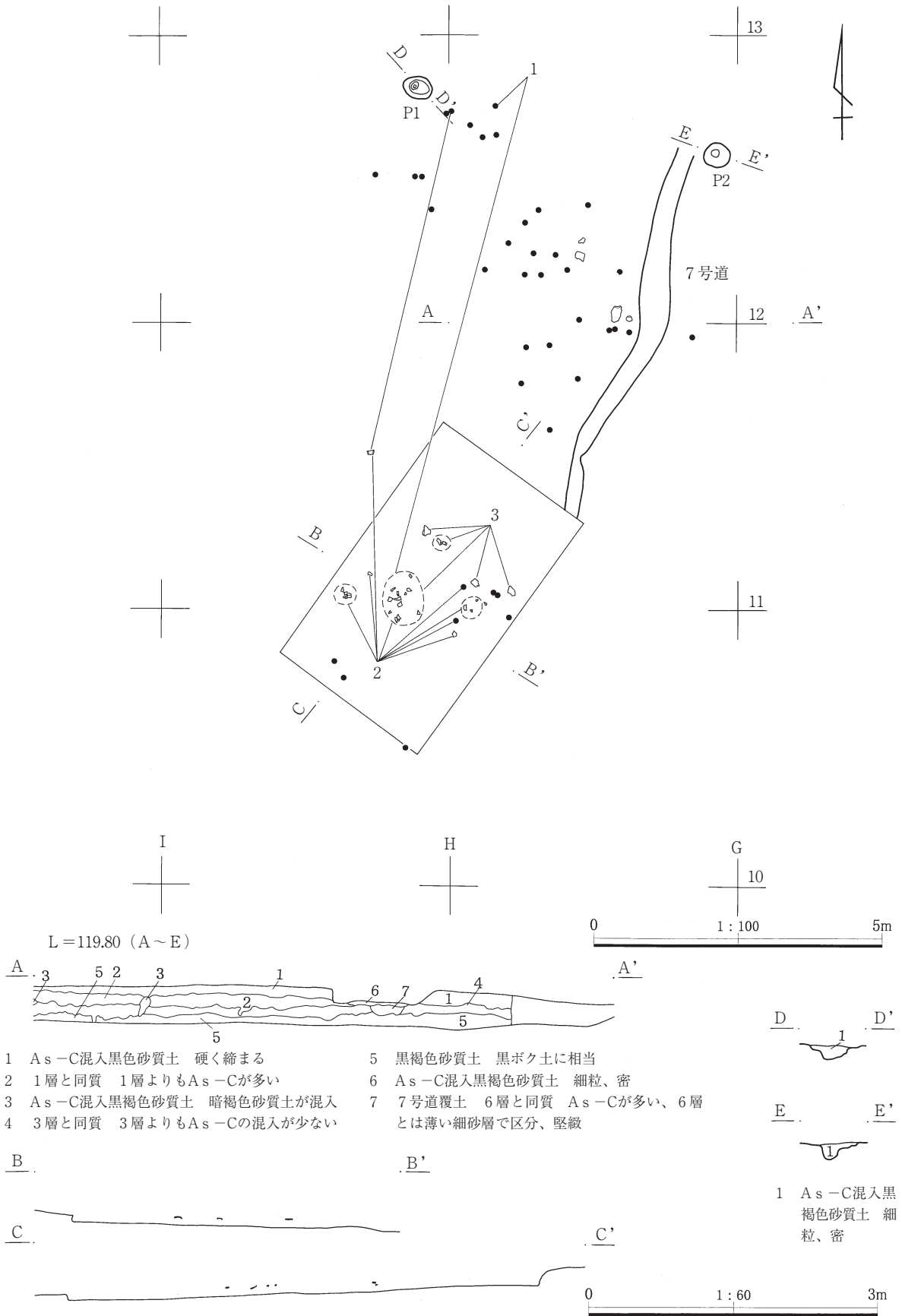
53号土坑



- 1 暗褐色砂質土 白色粒、ローム粒混入、中位にかけて黒味をおびる



第72図 52・53号土坑遺構図・遺物図



第73図 1号土器集中遺構図

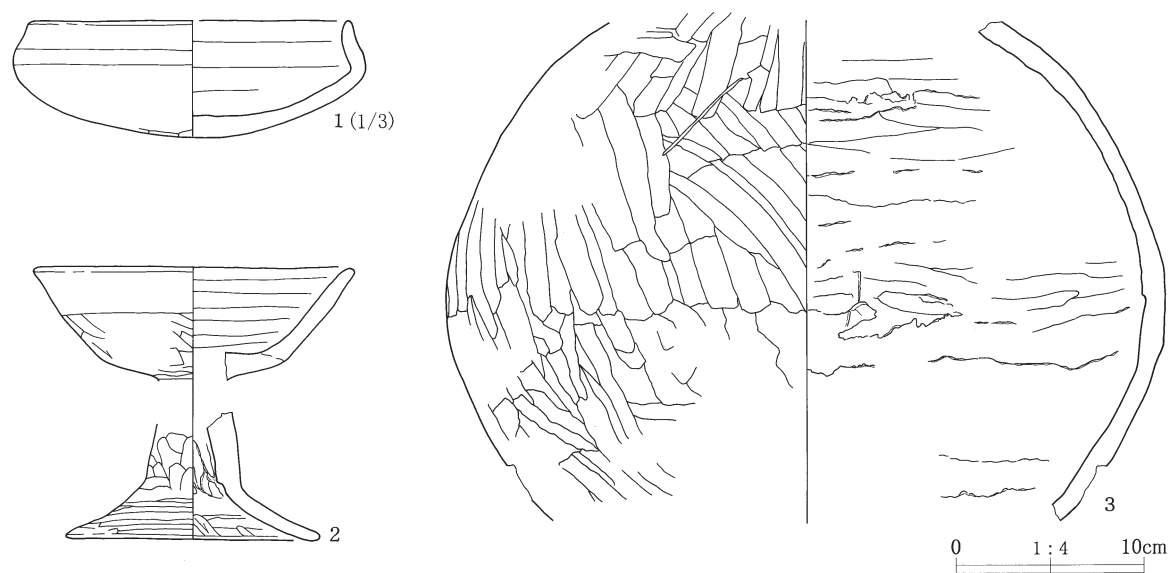
4 1号土器集中（第73・74図 PL47・48・73・74）

位置 1区、39GH-10~12グリッドで、基本土層5層As-C混入黒褐色砂質土での遺構確認中に検出した。土器は、南北15m、東西7mの範囲に散在している。

重複関係 7号道、9号道が重複し、土器の集中よりも道の方が新しい。北端にある2基のピットは、遺構確認中に検出したものである。周囲に確認の範囲を広げたが、検出したのはこの2基だけである。P1は、長径が50cm・短径40cmの円形、深さは12cmである。P2は長径44cm、短径40cmの円形、深さは16cmである。掘り込みは浅くて、底面はローム層にまで達していない。2本ともにAs-Cが混入する黒褐色土で自然埋没している。2本の間隔は540cmと広いが、2本をつなぐと地形勾配に直交して掘立柱建物跡の柱跡のようにも見える。

1区の特に関西側は、後世の削平が深く、住居跡は痕跡程度にしか残されていない。4号溝で区画されていたと思われる畑の存在や、そこでの耕作が主な原因かと思われる。2軒あるうちの3号住居跡は、かろうじて床面を残しているが、4号住居跡はカマドの掘り方を検出しているだけである。この程度の残り方ならば、後世の掘削がローム層にまで達していることから、2軒のほかに住居跡の存在していた可能性は高い。この2基のピットも住居跡の柱穴か、それとも1号掘立柱建物跡のような建物跡の一部なのだろうか。想定される集落全体の中では遺構が少ない一画だけに、簡易な建物を想定できる遺構として土器との関係が注目される。

出土遺物 土器破片の総数は、大小あわせて約180片である。数は多くはないが、良好な遺存状態であること、接合例もあって一括性の高いことから地形の勾配に沿って北から流れ込んできたのではなく、人為的な遺構である土器集中と判断した。接合作業の結果、壺、杯、高杯、各個体のあることが判明した。最も多いのは、壺の破片で3個体以上になる。いずれも球胴形で前期から中期の特徴を持っている。3は、そのうちの残存率の高い1個体である。図示していないが、くの字に外反する口縁部を持つ。底部は欠損している。これらは壺1枚ほどの中に集中しているが、接合した中には、掲載した1の杯のように最大で10mも離れているものがある。自然と見るには、やや距離がある。土器のほかには、人頭大の山石2点と拳程度の大きさ



第74図 1号土器集中遺物図

第4章 検出された遺構と遺物

に割られた軽石が約50個出土している。軽石は、おもりと見て古墳時代の遺構で取り上げたが、この数の多さは特徴的である。山石は、自然の流れ込みとしても、軽石は共伴関係にあると見られる。

時期 古墳時代前期、検出されている住居跡に対応する時期である。

所見 遺構を想定して、周辺に精査の範囲を拡大したが遺構らしき掘り込み、ピットはなかった。また、焼土、炭化物もない。住居跡が多く集まる西側の2区や3区から見ると、遺構は格段に少なくなり、加えて地形の勾配も強くなる。73図で図示した南北両端でのレベル差は40cmである。地山のローム層が一段深くなる箇所でもある。集落の中では縁辺部という表現が適当である。祭祀の跡として考えたいが、単に投棄したものかと思われる。

第4節 古墳時代後期の遺構と遺物

1 概要

検出した遺構は、竪穴住居跡11軒（3・4・7・8・10・11・12・15・17・18・23号）、掘立柱建物跡3棟（1～3号）、土坑10基（23・24・26・27・28・29・31・32・49・50号）、古墳1基、溝1条（9号）、畠1箇所である。

1区で竪穴住居跡2軒（3・4号）、掘立柱建物跡1棟（1号）、2区で土坑4基（26・27・28・29号）、3区で竪穴住居跡8軒（7・8・10～12・15・17・18号）、掘立柱建物跡2棟（2・3号）土坑2基（31・32号）、溝1条（9号）と畠1箇所である。4区は、竪穴住居跡1軒（23号）と竪穴住居跡の貯蔵穴である土坑2基（49・50号）、5区で古墳1基、土坑2基（23・24号）の内訳である。

住居跡は、接近してはいるが重複しているものではなく、むしろ平行や直交を意識したような位置関係である。前期の居住域とは重なる。前期との違いは、5区にあたる台地の縁辺部に古墳が作られていて、前期は所在のつかめていない墓域が隣接していることである。形状は、長方形と方形の2つがある。長方形は、11号と15号の2軒だけであるが浅い掘り込みで、方形の半分以下と違いのあるところを見せている。規模では、一辺が8m近い大型のものと、5m前後のものに分けられ、7号、12号、2軒の大型住居跡が集落の中心的存在と見られる。7号では建て替えをした跡が検出されているが、ほかにも3軒でカマドや貯蔵穴が複数あり、対応するかのようで継続性のあるところを見せている。掘立柱建物跡は、住居跡と同じように柱穴の掘り込みが浅いものと深いものがある。畠は、住居跡に隣接している。小面積ではあるが、畝間が広いのが特徴である。水田は、寺沢川沿いの低地にあった可能性が高い。

2 竪穴住居跡

3号住居跡（第75図 PL5）

位置 1区、39GH-14・15グリッド **重複関係** 中央部を南北に2号溝が重複する。**形状** 推定方形、重機により床面が露呈するまで掘削する。東壁とそれに続くコの字の部分で、北東隅を除いて推定要素が強い。

規模 東西1.60m以上、南北2.75m、壁高3cm **面積** 4.40m²以上 **主軸方位** N90°E

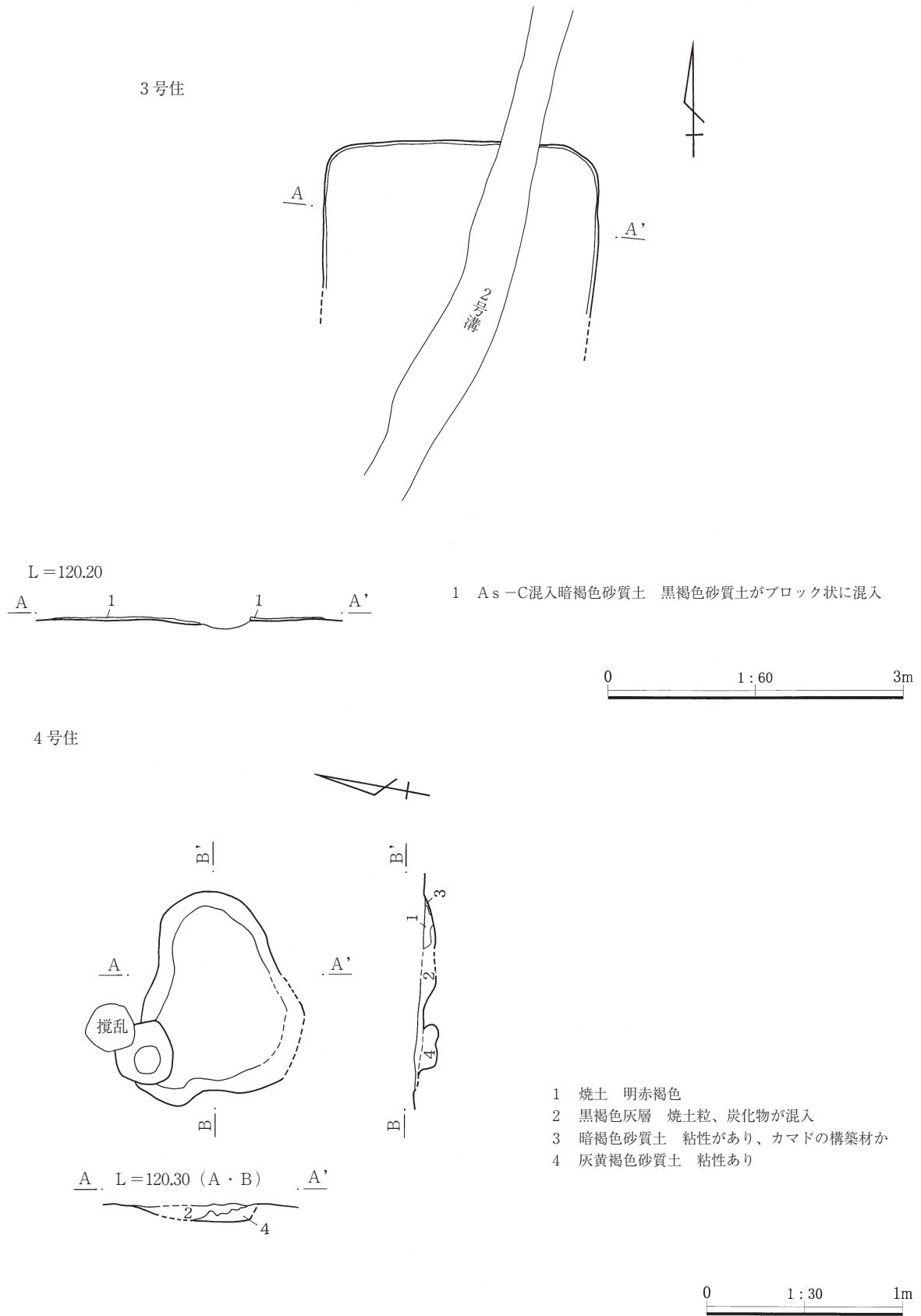
覆土 暗褐色砂質土にAs-C混入黒褐色砂質土がブロックで混入する。カマド、柱穴、周溝、貯蔵穴 検出した範囲にはない。**床面** ローム漸移層まで掘り込んで貼り床をしている。**遺物と出土状態** 非掲載としたが、土師器杯の底部小破片1点だけが出土している。

所見 古墳時代の後期としたが、規模や床までの掘り込みの深さでは、13号住居跡が小さくて浅い点によく似ている。東壁にカマドがないことから前期の可能性もある。

4号住居跡（第75図 PL5）

位置 1区、39H-16グリッド、カマドだけを検出した。**重複関係** なし **形状** 推定方形 **規模** 不明 **主軸方位** N64°E **カマド** わずかに残る覆土の様子では、東壁のほぼ中央部にあたる。長軸110cm、最大幅86cm、深さ6cmの不整楕円形の掘り方で、先端部が焼けている。袖穴が左だけにある。

所見 古墳時代後期の住居跡である。



第75図 3・4号住居跡遺構図

7号住居跡（第76～82図 PL 7・52・53）

位置 3区、49OP-1～3グリッド **重複関係** 南西隅から北に7号溝が重複している。**形状** 方形、カマドを境にして南が30cm外側に出ている。カマドの外側には、ピットが対のようにある。壁から50cm離れた位置で煙出しと関係した、軒端を支える補助柱穴とみられる。**規模** 東西7.45m、南北7.70m、壁高68cm
面積 57.36㎡ **主軸方位** N60° E

覆土 13層に分けた。8層以下が掘り方で、床までは4層、5層のAs-Cを混入する黒色から黒褐色砂質土でほとんどが自然埋没している。上面には、As-Bの1次層が20cmの厚さで堆積している。

カマド 東壁の南寄りにある。全長150cm、焚口の幅40cmの1穴式、壁を境にして煙道だけが屋外にのびる構造である。全体は、衝立のように掘り残したロームに粘土を貼って作られている。焚口は、崩落しているが角閃石安山岩の転石による石組みである。内部の焼土は厚く、覆土の様子から1度は改築をしていることがわかる。また、掘り方には、燃焼部の両側に平行する掘り込みがある。この掘り込みは、周囲の住居跡にはない特異な構造で、幅が30cm前後で長さも十分にあり、優にカマド1基分の大きさである。右側からは、拳よりも大きな石が数個詰め込まれたような状態で出土し、左側からは粘土塊と甕の破片が出土した。また、屋外では軒端を支えていたと見られる小ピットが、煙道をはさんで対にある。壁からは50cm離れ、直径が20cm前後、深さ13cmと33cmである。

柱穴 6本主柱穴である。長軸・短軸・深さは、P1が48・38・62cm、P2が46・34・71cm、P3が38・26・88cm、P4が2基の重複で32・25・68cm（古）、35・33・62cm（新）、P5が50・48・42cm、P6が29・28・35cmである。柱間はP1とP2が402cm、P2とP3が420cm、P3とP4が416cm、P4とP1が430cmである。P2では、底面にAs-C混入黒褐色砂質土を貼っていた形跡があり、固く締まっている。P4は、内側が古く、外が新しい。2基分がはっきりと認められたのはP4だけであるが、底面に段差のあることからP1やP2にもその可能性があり、建て替えをした跡と見られる。

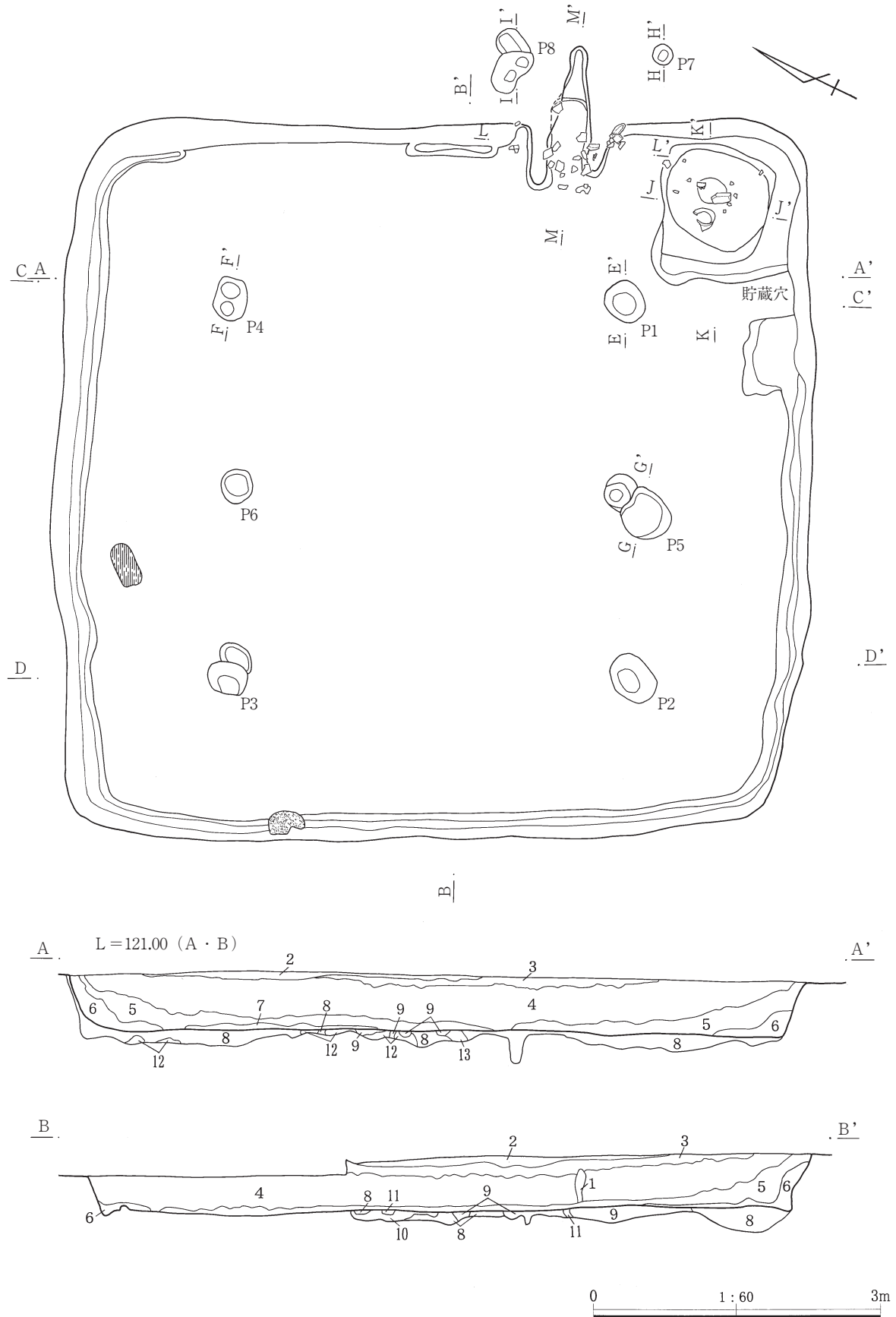
周溝 東壁で一部が途切れるほかは全周している。幅10cm前後、深さ3～6cmである。

貯蔵穴 住居跡の南東隅に、床と10cmの段差を設けて間仕切りした中に作られている。長軸110cm・短軸95cm・深さ76cm、断面がすり鉢状をした方形である。壁の一部には灰白色粘土が貼られているが、粘土はAs-Bのざらついた壁を養生するため、全体に貼られていた可能性がある。

床面 カマドに続く、主柱穴を結んだ内側が平坦で堅緻、外側の壁までが軟らかい。貯蔵穴の西には、床面が一段下がり、まわりには馬蹄形にロームを貼った入口と見られる跡がある。高さは、押しつぶされてわずかに1cmと低いが、固く締まっていて間口75cm、奥行き50cmを測る。梯子の滑り止めと見るには固定する穴がなく、また傾斜もないことから全体が踏み台の土台なのであろう。掘り方は、主柱穴を結んだ内側がわずかに数cm高い程度である。間仕切り溝は、壁との間で合計13本検出されている。北壁の7本には新旧があり、うち6本は平行するが隅の造作用であるのか、北東の1本だけが壁に対して斜めになっている。

遺物と出土状態 壁際から1.50～2mの範囲で帯状になって集中している。南は、床上5～10cmまでのレベルに集中している。この中には、小型甕1、甕2以上、須恵器杯、こも編み石、割石が混在する。土製勾玉、砥石は、覆土の中位からの出土である。須恵器は、掲載したほかに蓋5、杯身3、はそう2、高杯2といずれも小破片ながらも出土した点数は多い。非掲載は、土師器969点、須恵器57点、縄文29点、石14点である。細片が多く、接合率は低い。石の中には、軽石がある。明らかに割っていて、紐をかけたような刻みとみられる跡がある。10号住居跡では、おもりとした。

所見 古墳時代後期の住居跡である。12号と並び50㎡を超す、大型住居跡である。



第76図 7号住居跡遺構図(1)

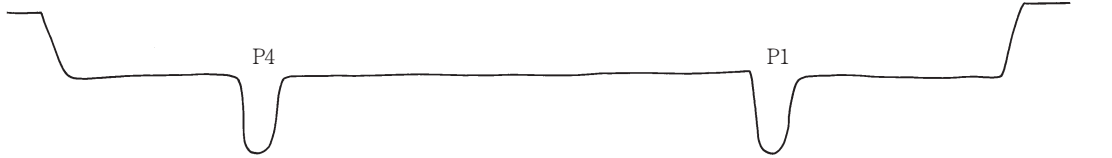
第4節 古墳時代後期の遺構と遺物

A・B

- 1 木の根による攪乱
- 2 As-B混入暗褐色砂質土
- 3 As-B 1次層
- 4 As-C混入黒褐色砂質土
- 5 As-C混入黒褐色砂質土 におい黄褐色砂質土が混入
- 6 暗褐色砂質土 黄褐色砂質土が斑状に混入
- 7 黄褐色砂質土に黒褐色砂質土が混入

- 8 暗褐色砂質土 多量のロームブロックと少量の黒褐色砂質土ブロックが混入
- 9 黄褐色砂質土 5層との境に暗褐色砂質土が多く含まれている
- 10 8層と9層の混土 8層よりも明るい
- 11 黒褐色砂質土 ロームが少量混入
- 12 黄褐色砂質土 暗褐色砂質土が少量混入
- 13 黒褐色砂質土と黄褐色砂質土の混土

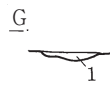
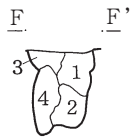
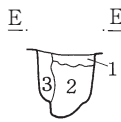
C. L=121.00 (C・D)



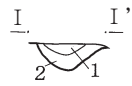
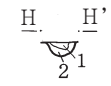
D.



L=120.50 (E~G・J・K)



L=121.00 (H・I)



E P1

- 1 As-C混入黒褐色砂質土
- 2 におい黄褐色砂質土 細粒、均質
- 3 褐色砂質土

F P4

- 1 As-C混入暗褐色砂質土 細粒、均質、1cm大までのローム粒をまばらに含む
- 2 1層とローム漸移層との混土 におい黄褐色、やや密
- 3 におい黄褐色砂質土 1cm大のローム粒が10%混入
- 4 3層と同質 ローム粒20%混入

G P5

- 1 As-C混入黒褐色砂質土

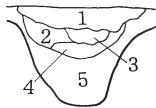
H P7

- 1 暗褐色砂質土 黒褐色砂質土が中央部に多い
- 2 黄褐色砂質土 暗褐色砂質土が全体に混入

I P8

- 1 におい黄褐色砂質土 ロームブロックを少量混入
- 2 黄褐色砂質土 暗褐色砂質土が混入

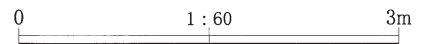
J. J'



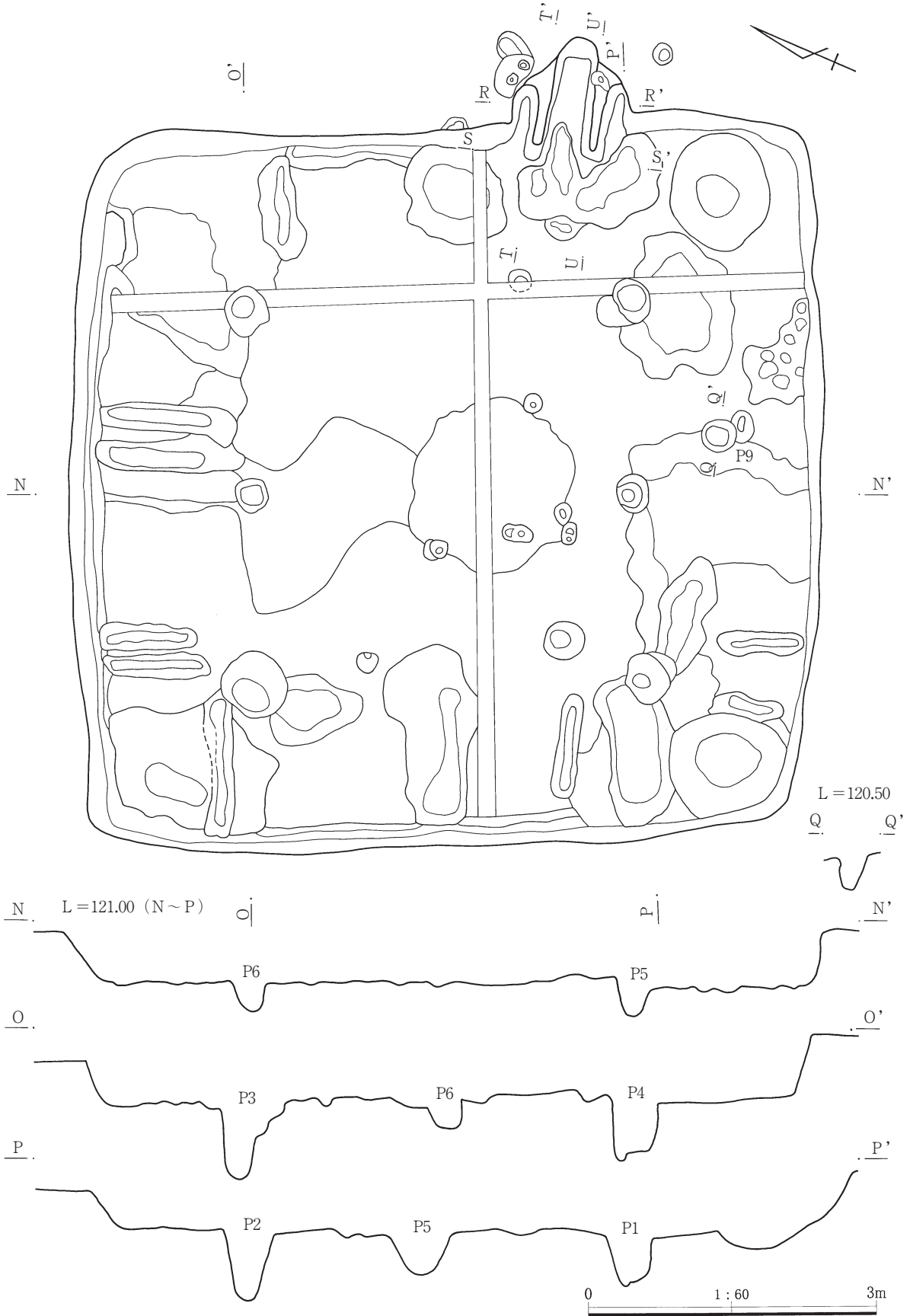
J 貯蔵穴

- 1 As-C混入黒褐色砂質土 均質、密、住居全体の覆土
- 2 1層と同質 均質、密、1層よりもローム粒が多い
- 3 黒褐色砂質土 粘性があり細粒
- 4 暗褐色砂質土 大粒のロームが混入、南壁の中段以下に焼土粒は斑点状に混入
- 5 暗褐色砂質土 細粒、均質、底面の近くでローム粒多い

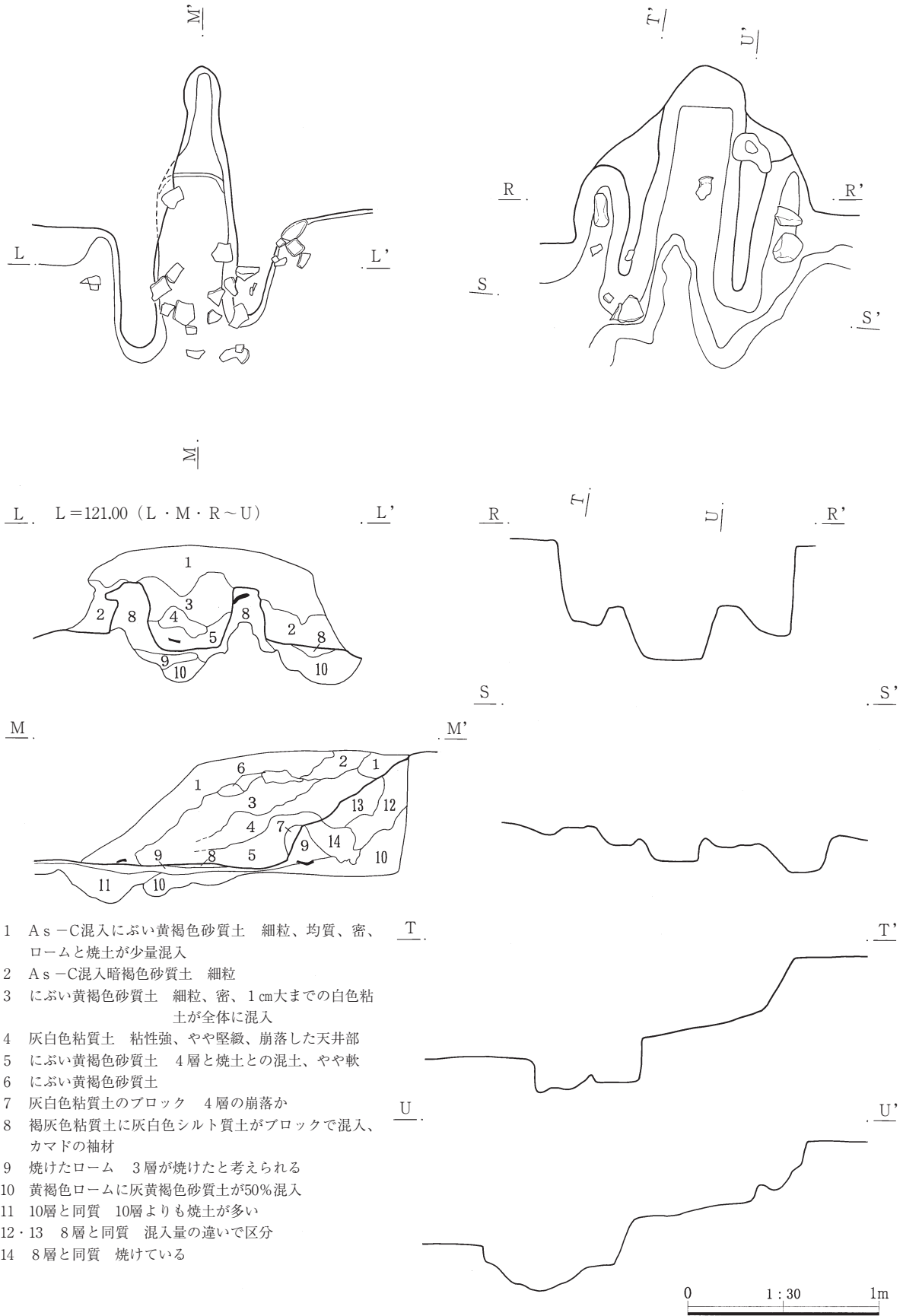
K. K'



第77図 7号住居跡遺構図(2)

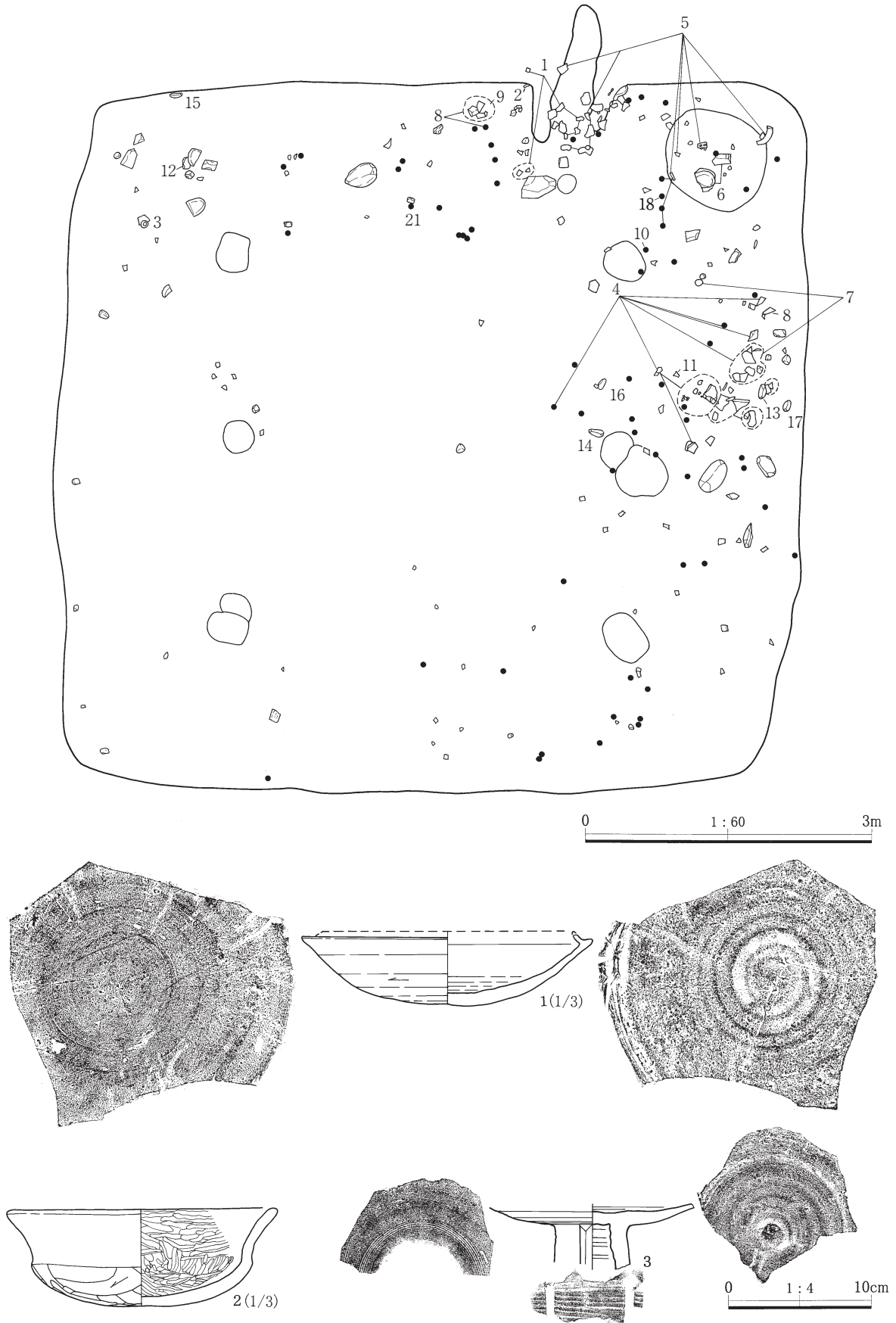


第78図 7号住居跡遺構図(3)

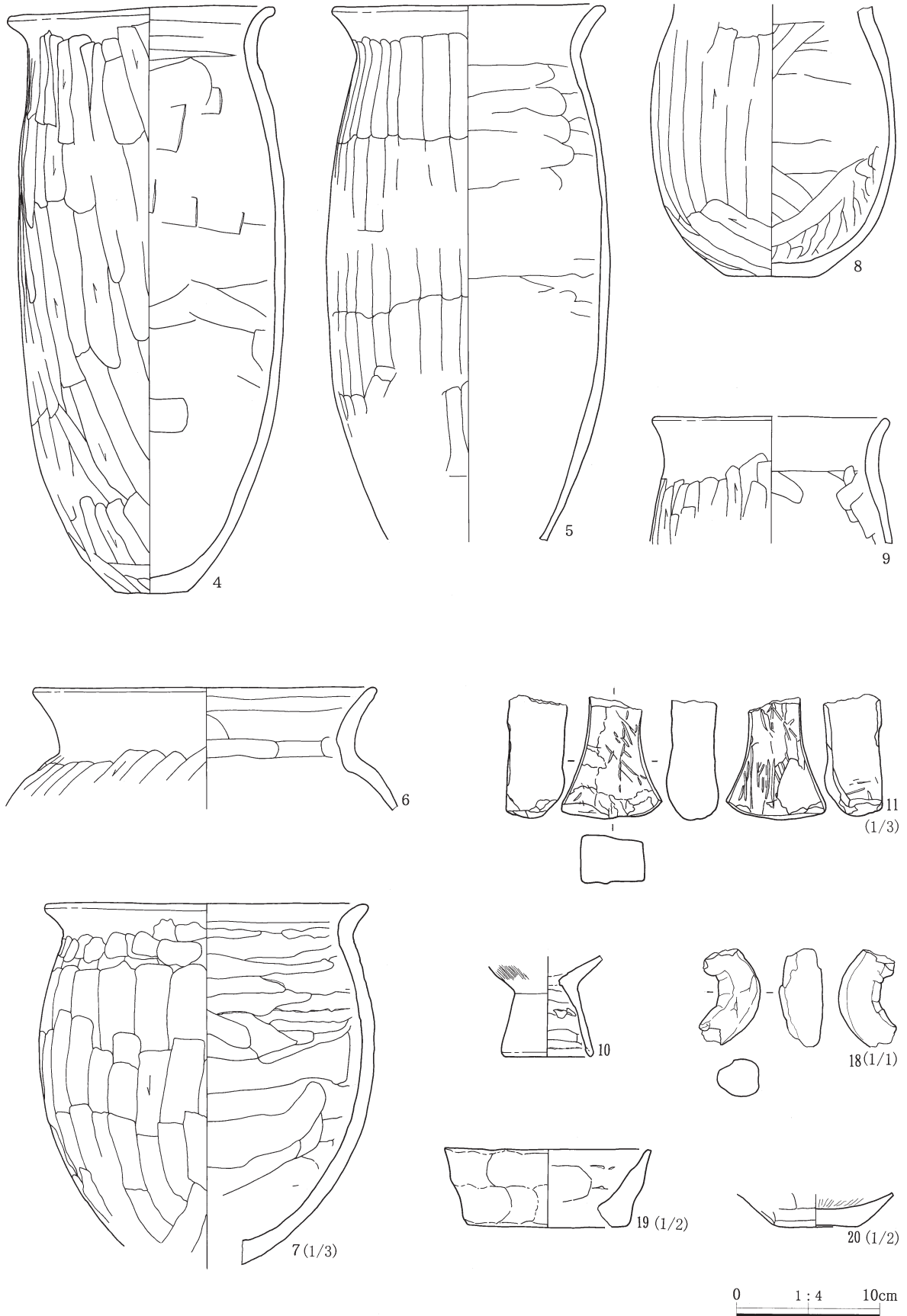


- 1 As-C混入にぶい黄褐色砂質土 細粒、均質、密、ロームと焼土が少量混入
- 2 As-C混入暗褐色砂質土 細粒
- 3 にぶい黄褐色砂質土 細粒、密、1cm大までの白色粘土が全体に混入
- 4 灰白色粘質土 粘性強、やや堅緻、崩落した天井部
- 5 にぶい黄褐色砂質土 4層と焼土との混土、やや軟
- 6 にぶい黄褐色砂質土
- 7 灰白色粘質土のブロック 4層の崩落か
- 8 褐灰色粘質土に灰白色シルト質土がブロックで混入、カマドの袖材
- 9 焼けたローム 3層が焼けたと考えられる
- 10 黄褐色ロームに灰黄褐色砂質土が50%混入
- 11 10層と同質 10層よりも焼土が多い
- 12・13 8層と同質 混入量の違いで区分
- 14 8層と同質 焼けている

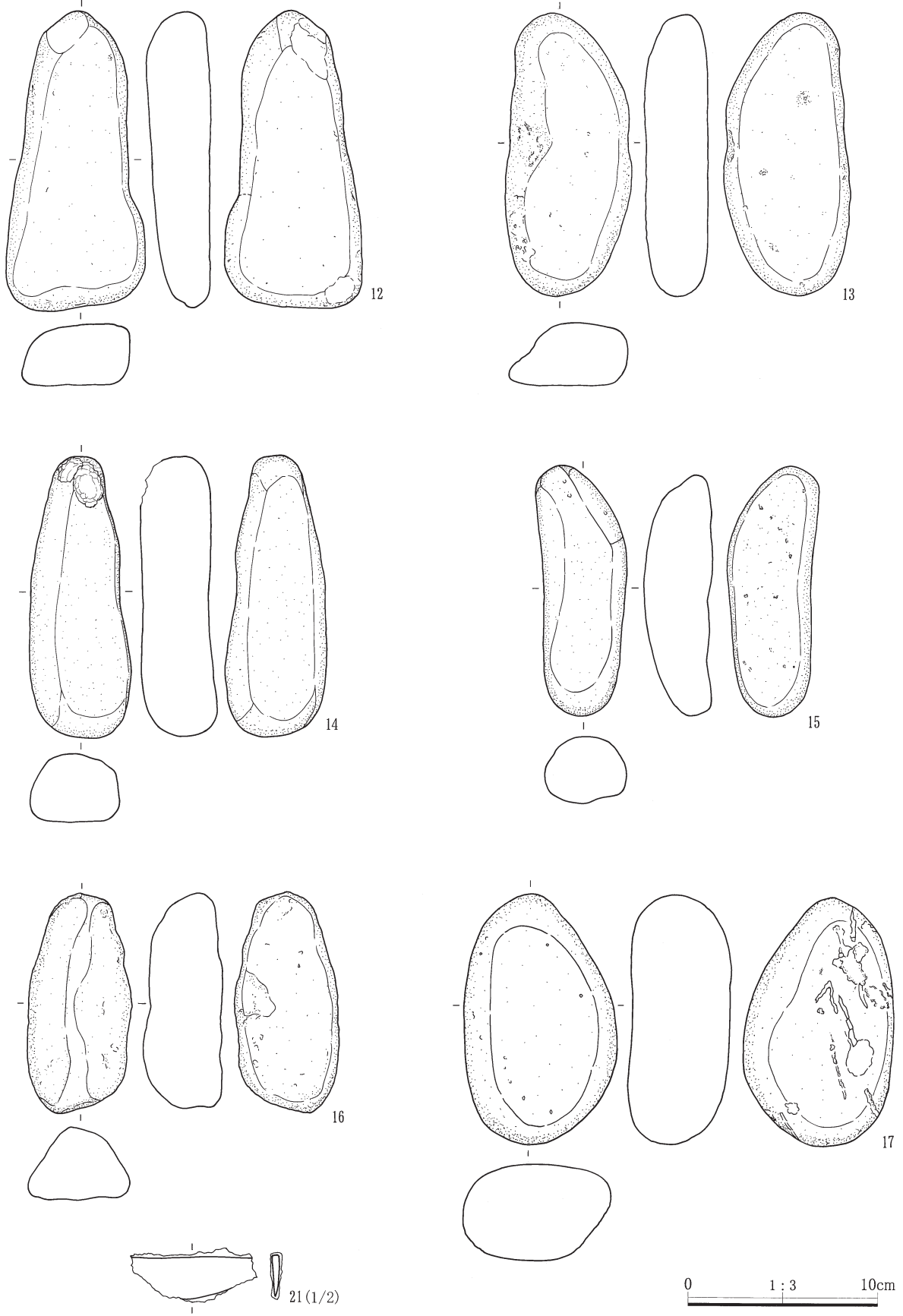
第79図 7号住居跡遺構図(4)



第80図 7号住居跡遺物分布図・遺物図(1)



第81図 7号住居跡遺物図(2)



第82図 7号住居跡遺物図(3)

8号住居跡（第83～88図 PL 8・9・54・55）

位置 3区、39NO-20、49NO-1グリッド **重複関係** 南西隅に8号溝が重複している。形状 方形

規模 東西4.30m、南北4.20m、壁高50cm **面積** 18.06m² **主軸方位** N84° E

覆土 7層に分けた。1層がロームを多く含み攪拌されたような土である。調査時の所見では、住居が半分ほど埋没した後、南側から投げ入れたように堆積したとある。1枚の土層にしてはあるが、ロームの混入状態で上中下に細分することができる。その混入するロームの状態から人為的な埋没土と判断した。また、後述するように遺物が多数含まれている。3層中から出土した炭化材は、2点あり垂木と思われる。一つは長さが1m弱の棒状をしており、一方の端は床に着いている。北側から崩れ落ちたという状態である。2点は、ともに南北の方向で、カマドのある東西両辺を妻とした切妻造りを示していると思われる。

カマド 東壁中央部と西壁中央部に各1基ずつある。ともに壁を境に燃焼部と煙道が作られている。西が古く、東が新しい。西カマドは、東に作り替えた時に削平されたもので、煙道部と燃焼部の底面を残すだけである。推定全長150cm、掘り方で検出した両袖穴の32cmという幅からすると1穴式であろうか。底面は、赤くカリカリに焼けた焼土で埋まり、上には黒褐色砂質土の混土が薄く貼られている。東カマドは、全長170cm、焚口の幅25cmと細長く、これも1穴式であろう。屋外に1m以上ものびた、長くて傾斜の少ない煙道が特徴である。燃焼部は、割石を芯材にして暗褐色の粘土を厚く貼付して作られている。石は、長さ40cmほどの粗粒安山岩を半分にしたもので、壁には露出しないで完全な芯材として使われている。袖などの芯用に、ロームを掘り残していないための養生策である。天井は、すべて崩落している。覆土には、スサ入りの焼土塊と粘土が混在し、さらにすき間に黒褐色砂質土が流れ込んだ状態である。甕などを抜き取るなどして人為的に壊されたようで、支脚は抜かれ、架けていた甕も焚口前に崩落したままである。

柱穴 4本主柱穴である。長軸・短軸・深さは、P1が28・23・70cm、P2が34・30・78cm、P3が31・27・88cm、P4が35・32・72cmである。柱間は、P1とP2が168cm、P2とP3が170cm、P3とP4が150cm、P4とP1が170cmである。

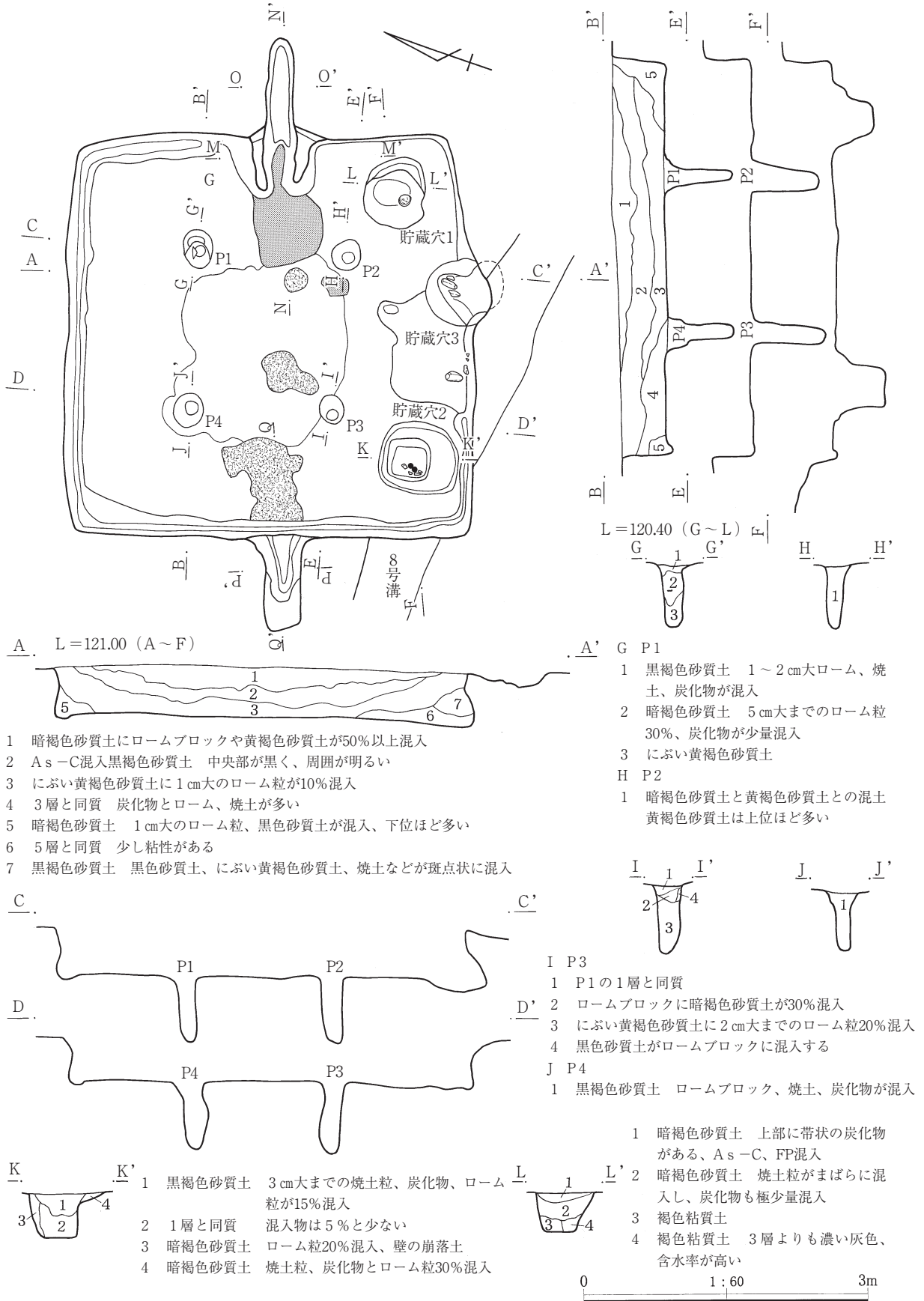
周溝 カマドの南から南壁の半分を除いた部分にめぐる。幅10cm前後、深さ3～8cmである。

貯蔵穴 南壁に沿って両方の隅と中央部の3基がある。カマドの新旧に対応し、南西隅にある2号が古く、南東隅の1号、中央部の3号が新しい。長軸・短軸・深さは、1号が62・60・43cmの方形、2号が45・40・53cmの方形、3号が72・64・16cmの円形で壁にかかり、その一部は奥行き20cmほどのウロ状になる。深さの違いは、用途を示しているのであろう。1号は、床面と5cmの段差があり、蓋の厚みと思われる。1号の底面からは杯1点、3号からはこも編み石3点と拳大の灰白色粘土塊が、これも底面から出土した。

床面 全体が平坦で硬いが、特に主柱穴の内側には1～2ミリ単位の薄い硬化面が数枚見られた。むき出しの床面なのであろう。カマドの焚き口にも続いており、頻繁な使用の跡をうかがわせる。また、南壁中央部には、入口と思われる一段低い窪みがある。2号と3号の貯蔵穴の間にあるもので、最大間口110cm、奥行き80cm、深さ5cmである。掘り方で検出されたP5は、直立しているが梯子を固定するための穴とみられる。掘り方は、壁際が幅1m前後で一段低くなる。

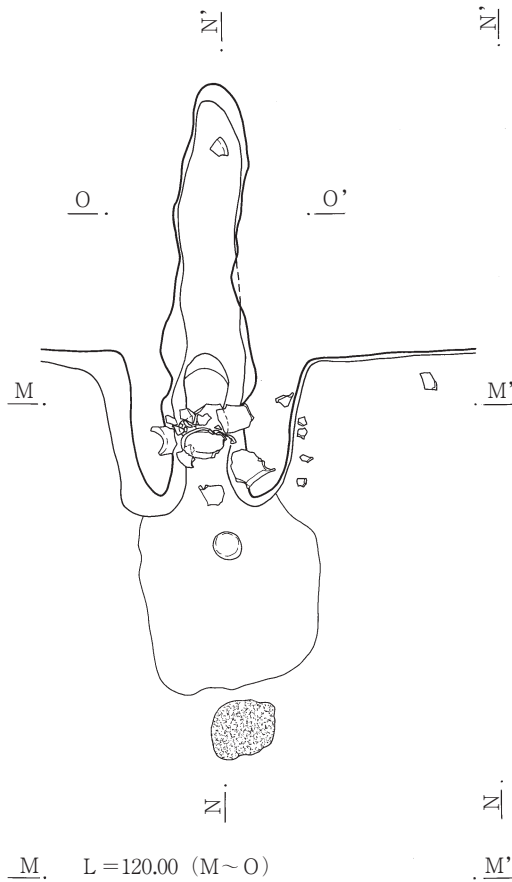
遺物と出土状態 1層と5層中に集中があり、上下に区別できる。1層は入口側からの投棄、5層は壁沿いにある。1、6～8は1層に含まれ、22、23も埋没土への混入である。3の杯は貯蔵穴内、12、13の甕が床に近い所で出土している。14～21の敲石は壁沿いである。非掲載は、土師器636点、須恵器13点、縄文土器15点があり、このほかに、調査後に紛失した土製勾玉1点がある。

所見 古墳時代後期の住居跡である。焼失住居の可能性がある。



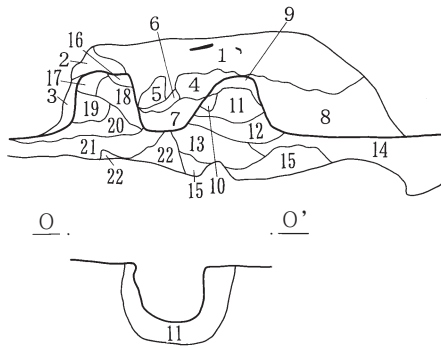
第83図 8号住居跡遺構図(1)

第4節 古墳時代後期の遺構と遺物



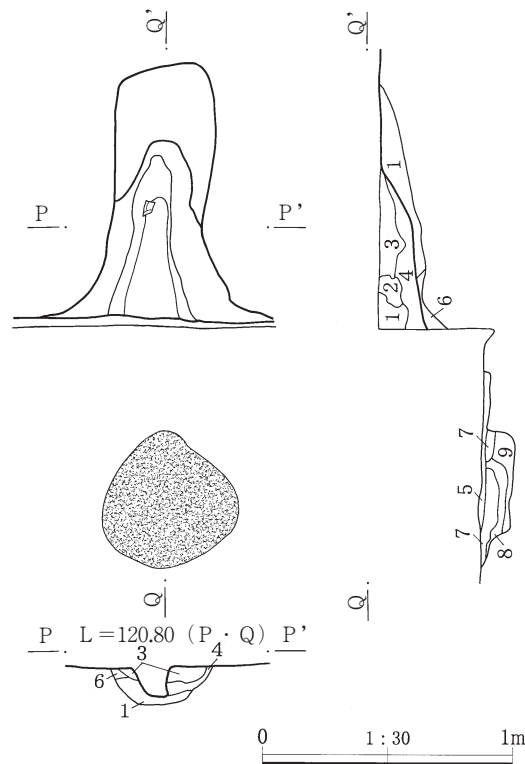
M·N·O カマド

- 1 As-C混入暗褐色砂質土 軽石、焼土混入
- 2 暗褐色粘質土 袖からの崩落土
- 3 暗褐色砂質土 2層との境に焼土、黒色砂質土、ロームのブロック混入
- 4 暗褐色粘質土 1層よりも赤味をおびる、焼土混入
- 5 赤褐色砂質土 焼けて硬い、4層が混入
- 6 暗褐色砂質土 4層、7層よりも黒い、焼土混入
- 7 暗褐色粘質土 4層よりも赤味をおびる、焼土が多量に混入
- 8 暗褐色粘質土 1層よりも黒い、As-Cなどの軽石と黒褐色砂質土が混入
- 9 暗褐色粘質土 As-C、焼土混入
- 10 赤褐色砂質土と9層の混土 焼土ブロックあり
- 11 9層と黄褐色砂質土、ロームとの混土 焼土が混入し脆い
- 12 暗褐色砂質土 As-C、焼土、ローム粒混入
- 13 黄褐色砂質土と灰黄褐色砂質土の混土 少量の焼土混入
- 14 灰黄褐色砂質土 多量のロームブロックを含み、As-C、焼土粒混入
- 15 黄褐色砂質土 やや縮まっている
- 16 灰黄褐色粘質土 As-Cと焼土少混
- 17 黄褐色ロームと16層との混土 砂質で脆い
- 18 灰黄褐色砂質土 16層よりも赤味をおび、As-C、焼土混入
- 19 暗褐色砂質土 ロームブロック、黒褐色砂質土、焼土が少混
- 20 灰黄褐色粘質土 As-Cとわずかにロームブロック混入
- 21 黄褐色砂質土 黒褐色砂質土が混入、縮まっている
- 22 黄褐色砂質土 21層よりも明るい

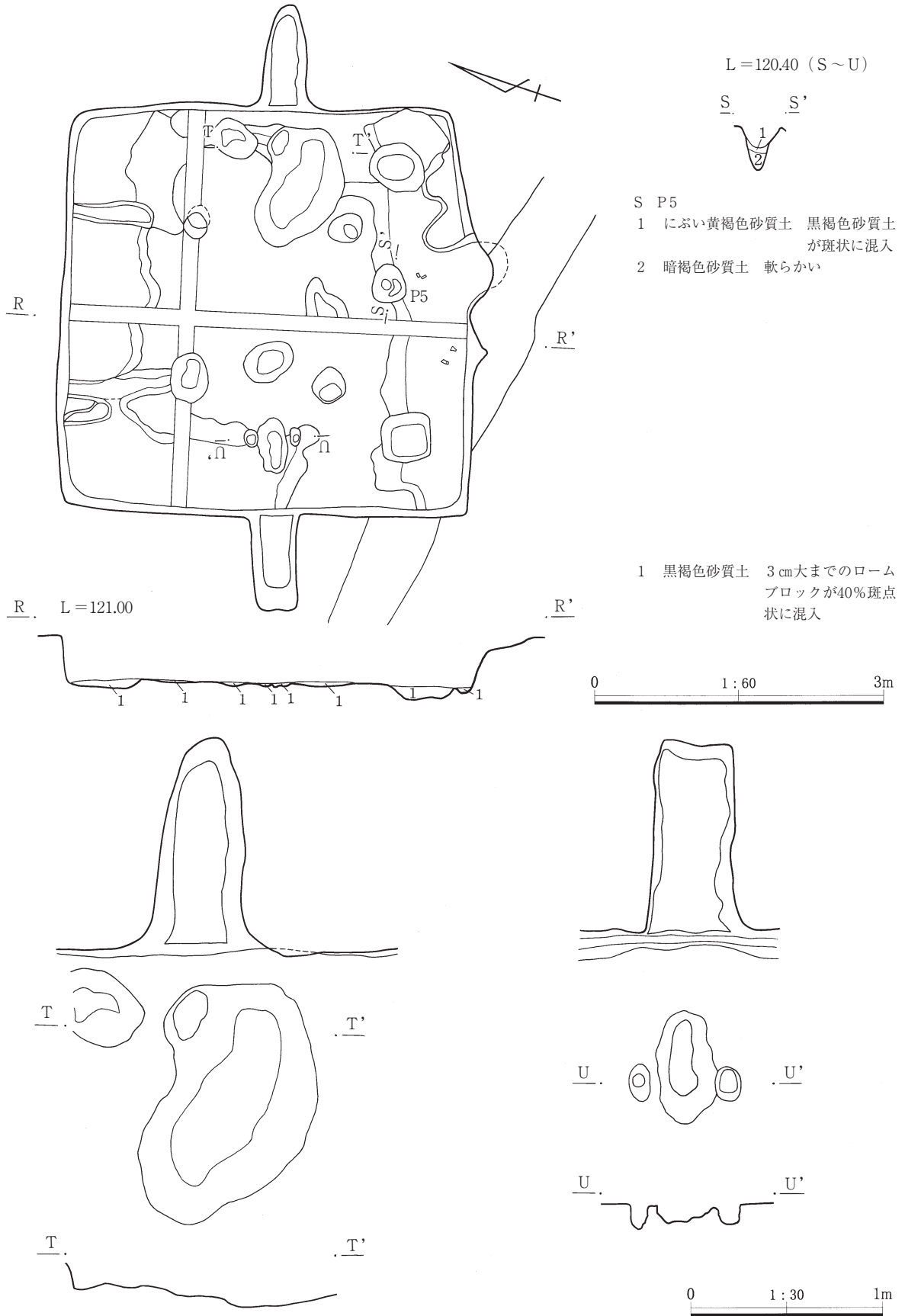


P·Q カマド

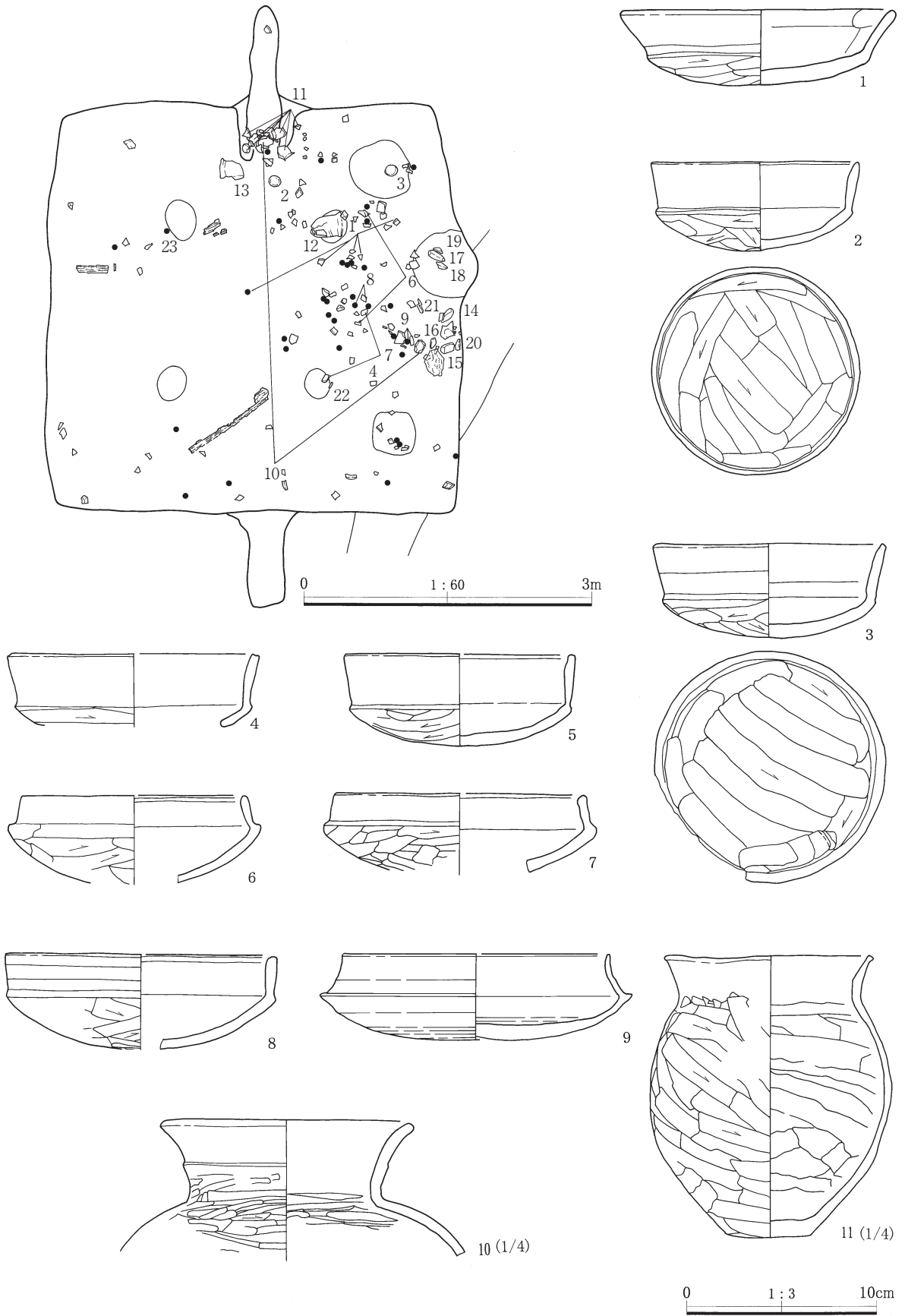
- 1 As-C混入暗褐色砂質土 弾力があり細粒、やや密
- 2 1層が被熱赤変したブロック
- 3 にぶい黄褐色粘質土 崩落した天井部、被熱赤変
- 4 黒褐色砂質土 細粒、均質、硬、As-C、ローム粒が混入
- 5 褐灰色砂質土 細粒、密、やや軟、焼土多混
- 6 1層にソフトロームが混入
- 7 焼土 焼けて硬い
- 8 黒褐色砂質土と硬い黄褐色ロームブロックとの斑混土
- 9 8層と同質 ロームが主体、貼床の材料



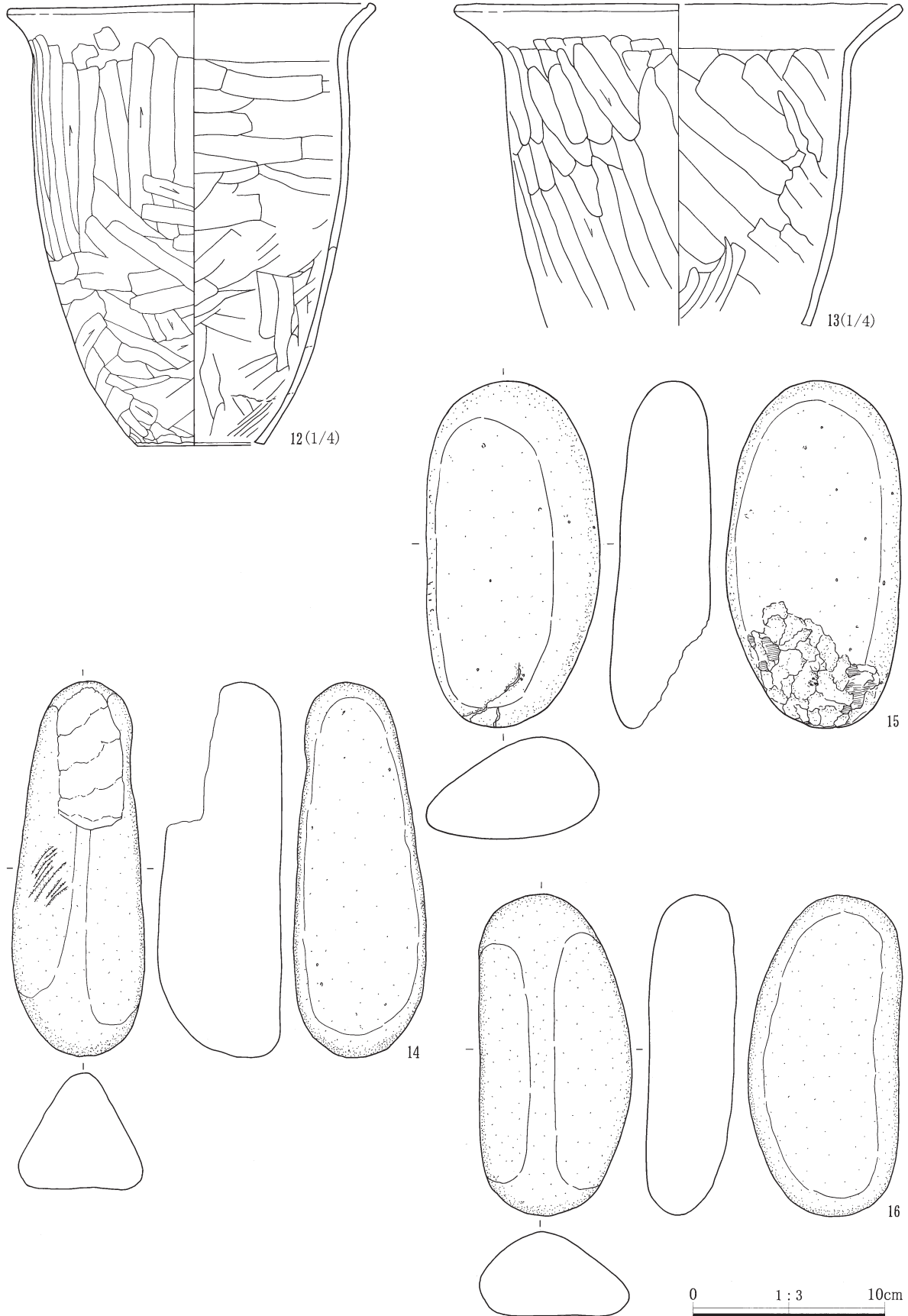
第84図 8号住居跡遺構図(2)



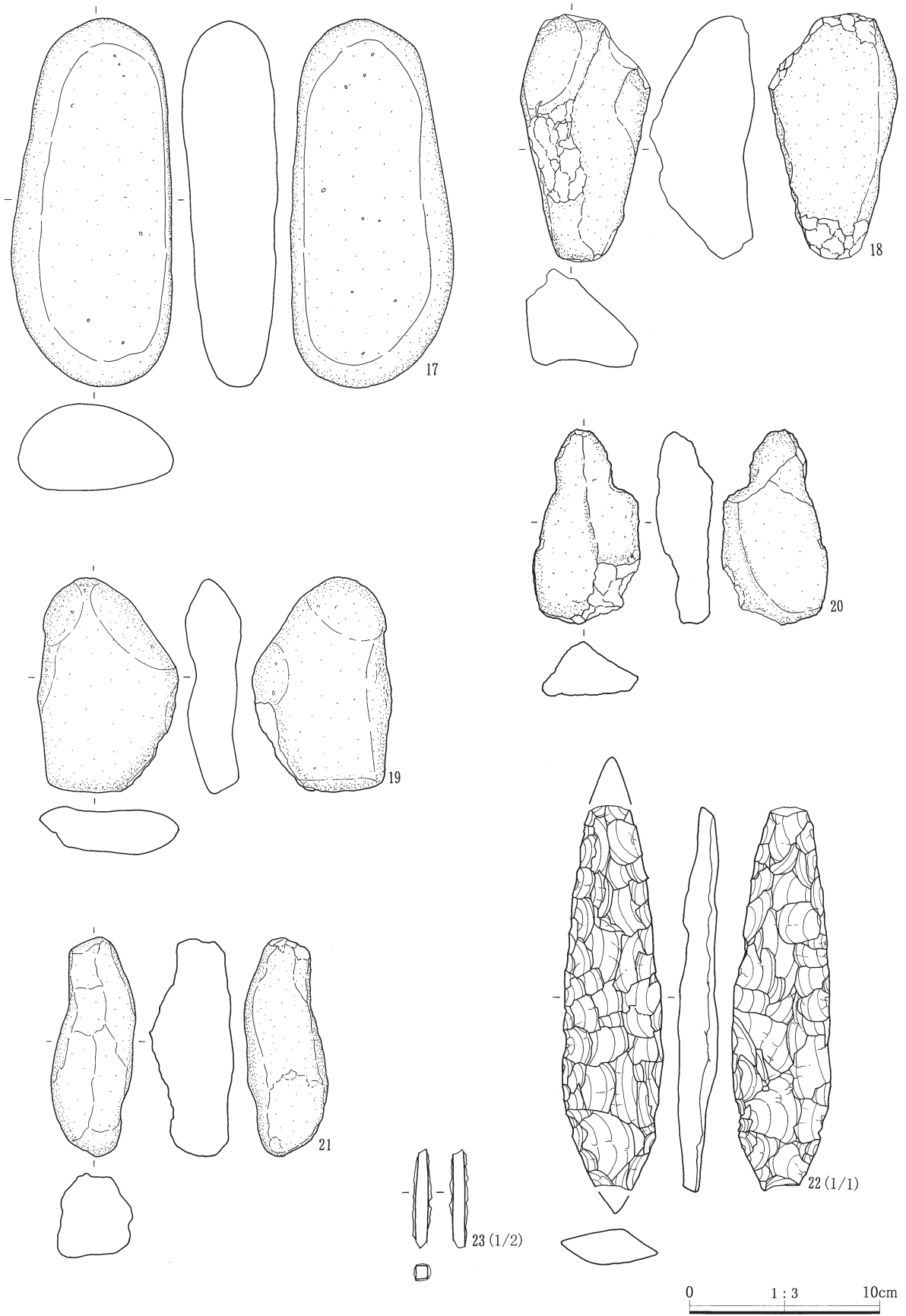
第85図 8号住居跡遺構図(3)



第86図 8号住居跡遺物分布・遺物図(1)



第87図 8号住居跡遺物図(2)



第88図 8号住居跡遺物図(3)

第4章 検出された遺構と遺物

10号住居跡（第89～91図 PL10・11・55・56）

位置 3区、39NO-18・19グリッド 重複関係 なし 形状 方形 規模 東西4.10m、南北3.90m、壁高35cm 面積 15.99m² 主軸方位 N80° E

覆土 11層に分けた。全体は、1～3cm大のロームが多く含まれ、壁際に焼土と炭が多い。土屋根が焼け落ちたか、焼失後、周堤帯が崩れて流れ込んだかのようなものである。中でも3層と4層には、ロームのほかに灰白色粘土や焼土、炭化物が多く含まれ、3層の上面は床面ほどではないが薄く硬化している。この硬化した状態は6号住居跡でも見られたが、土屋根の一部が焼けたことで、さらに硬さを増したものとみてよいだろう。8層は、北壁の側にだけ分布するもので、これも焼けて締まっている。10層、11層は、掘り方である。ロームと黒褐色砂質土の混土で、ともに大粒で掘削してまもなく埋め戻されたような貼り床材である。

カマド 東壁の中央部にある。壁を境にして燃焼部と煙道が作られている。全長190cm、焚口の幅35cm、屋外に傾斜の少ない、長さが1m近い煙道を持つ1穴式である。掘り残したロームを芯にして作り上げるのではなく、4層と5層を一面に敷き、その上に石を芯にして2層の褐灰色粘質土と6層を貼付して作られている。左側の芯は、現在寺沢川沿いの崖に露出している基盤の砂岩を面取りしたもので、右側は粗粒安山岩の割石である。燃焼部は天井が崩落していたが、支脚を残している。支脚は、4層に浅く埋め込まれ、中央から見てわずかに左に寄っている。煙道は、内側が1cmほどの厚さで一様に赤く焼けていて、火のまわりの良さ和使用期間の長さを感じさせる。それに比べて、燃焼部内は、焼けているのが支脚よりも手前だけで、奥は焼けていない。しかも袖口から燃焼部の半分までは切り取られたかのように削平されている。遺物らしきものはなく、意図的に壊されたようである。

柱穴 4本主柱穴である。長軸・短軸・深さはP1が32・29・68cm、P2が25・20・50cm、P3が23・20・56cm、P4が32・30・66cmである。柱間は、P1とP2が156cm、P2とP3が165cm、P3とP4が160cm、P4とP1が170cmである。

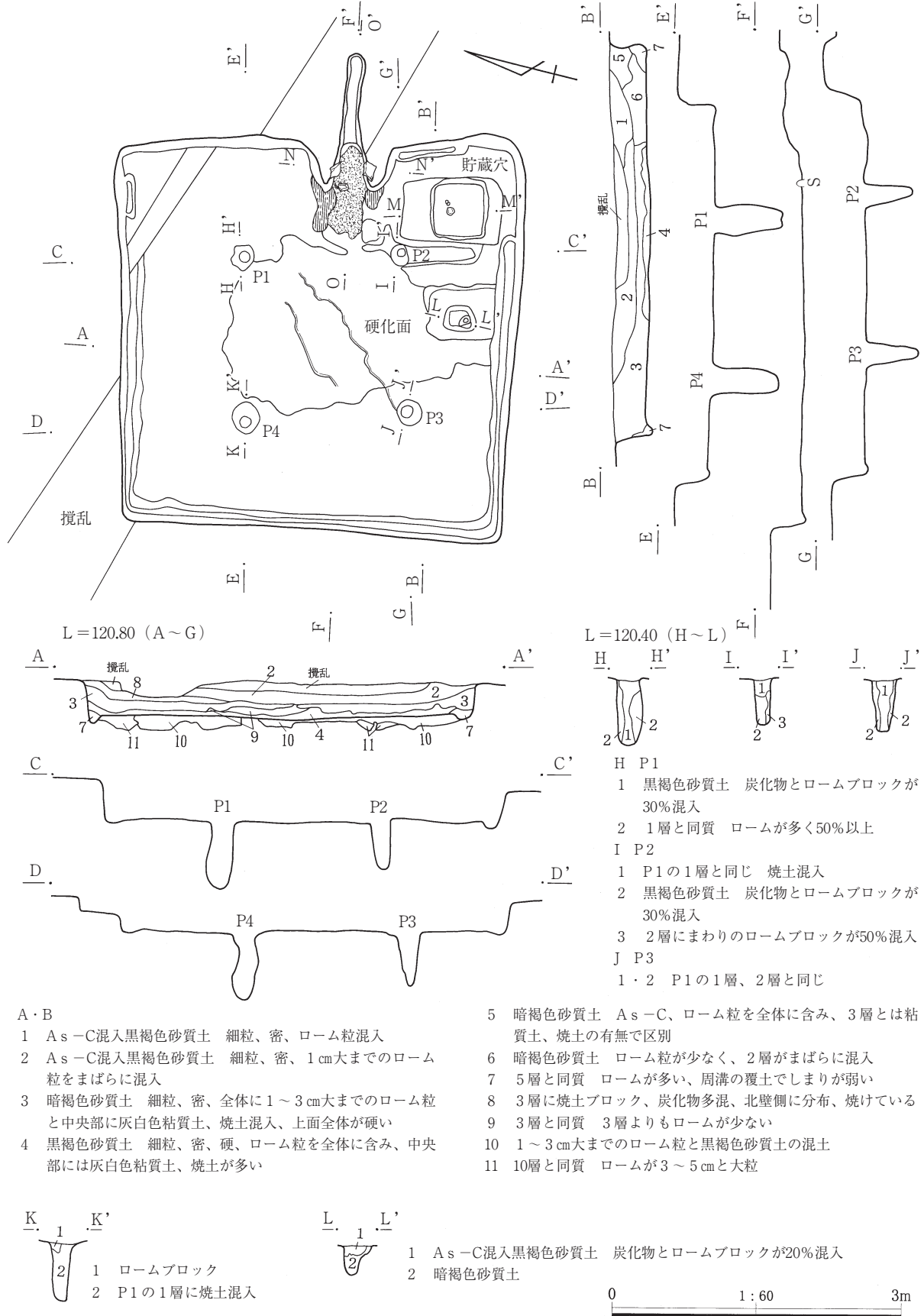
周溝 東を除く3辺は連続し、東はカマドの右脇だけにある。幅10～15cm、深さ10cm前後である。

貯蔵穴 南東隅にある。長軸64cm・短軸58cm・深さ48cmの方形である。南東隅は、P2と壁との間にロームで土手を作り、およそ1m四方の広さに仕切られている。床には、長軸100cm、短軸64cmの長方形をした浅い掘り込みがある。これは上蓋の大きさと見られ、床との段差は1cm足らずである。土手は、幅20cm、高さ3～4cmの断面台形である。一方の端は、カマド右袖に続くようにある。

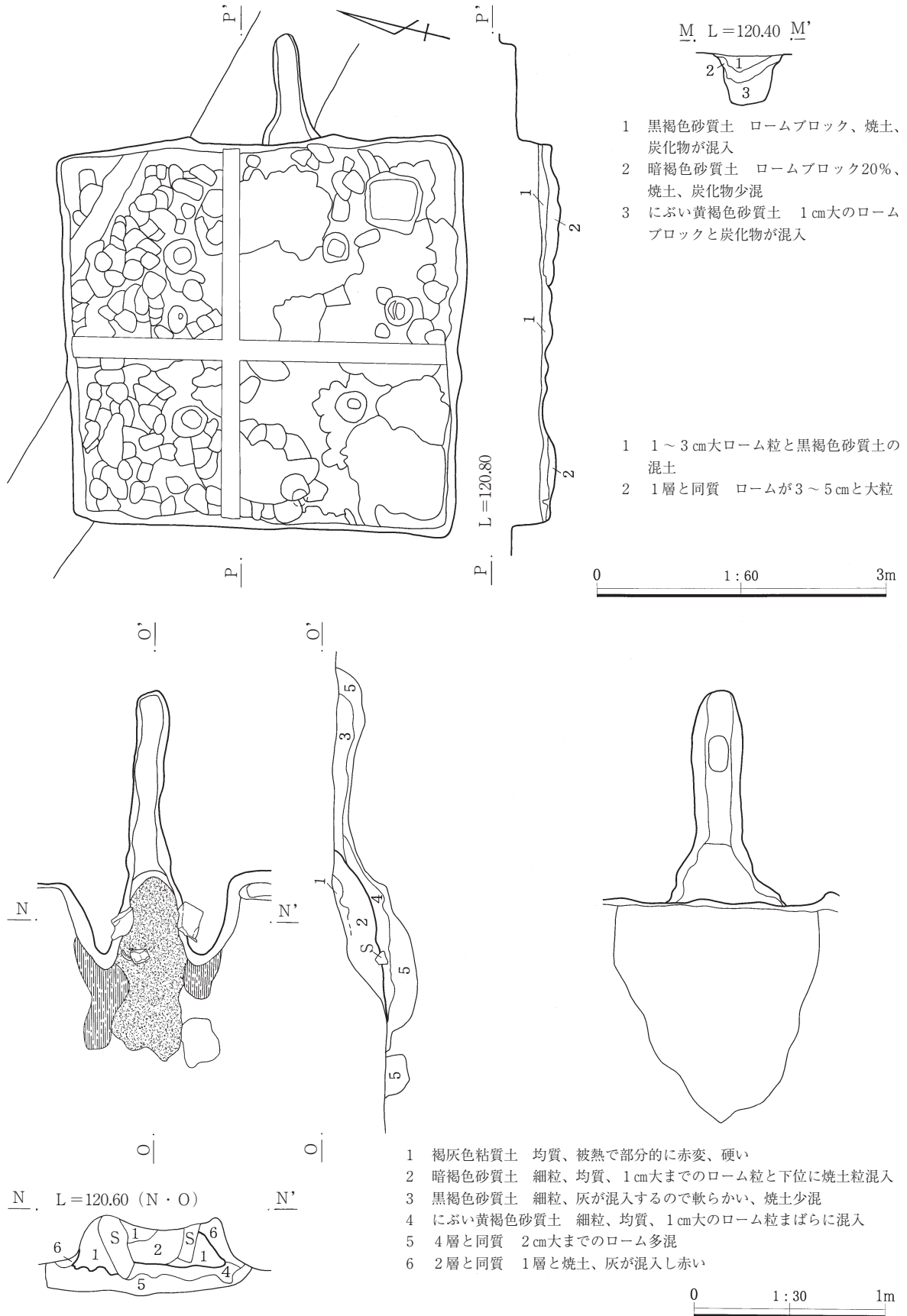
床面 全体に平坦で硬化している。主柱穴を結んだ内側は、特に堅緻である。貼り床は、ロームと黒褐色砂質土の混土である。掘り方は、全体が一様に掘り下げられている中で、壁際だけはわずかに一段深い。鋤跡痕が、北半分によく残る。南半分では、土坑状に見えるのが掘削範囲の1回分で、次々に場所を変えながら作業にあたっていたことがわかる。南壁の入り口と思われる箇所は、一部に暗色帯を貼り、その上に掘り上げた土を戻したようで、ロームの粒も大きく、締まりも中央部に比べて弱く感じられた。この中から検出されたピットは、入口に関係したようにも見えるが北に延長した箇所でもピット1基がある。

遺物と出土状態 遺物は、3層の硬化面よりも上に多い。1～4の杯は、覆土の中位以上で出土し、1～2m以上も離れた破片が接合した。5の甕ほかも同様である。遺物の多くは、住居跡が埋没していく過程で混入、投棄されたものと見られる。非掲載は、土師器147点、縄文5点、陶磁器1点である。甕は、掲載したほかには細片が多く、接合率も低い。

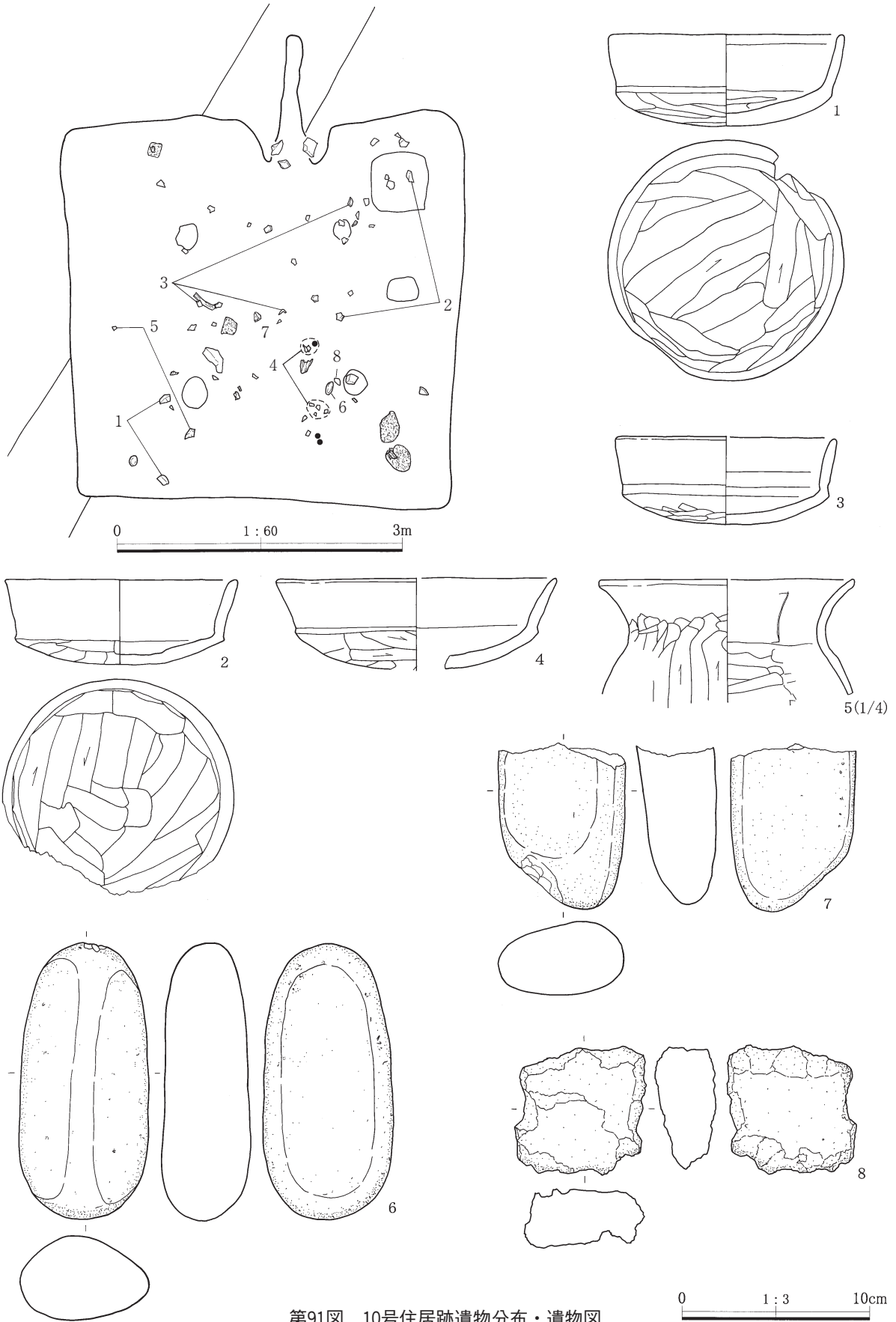
所見 古墳時代後期の住居跡である。焼失住居である。



第89図 10号住居跡遺構図(1)



第90図 10号住居跡遺構図(2)



第91図 10号住居跡遺物分布・遺物図

第4章 検出された遺構と遺物

11号住居跡（第92・93図 PL11・12・56）

位置 3区、39PQ-20グリッド **重複関係** なし **形状** 長方形、南東隅だけが丸く、ほかの3辺は直角である。**規模** 東西3.90m、南北3.00m、壁高40cm **面積** 11.70m² **主軸方位** N70° E

覆土 17層に分けた。1層、2層を除いたほかは、ロームを多く含む。主に西側からの人為的な埋没土と見られる。4層と5層は、壁際から住居跡の中央部に向かってやや厚く堆積している。5層の上面には、8層とした薄い細砂層がある。3層の粘質土とセットになり、にぶい黄褐色、住居跡の中央部にすり鉢状に溜まるノコ状の堆積物である。これにより3層の後、1層、2層が堆積するまでの間には、時差のあったことが分かる。10層から16層が入り口施設で、17層が掘り方の貼り床材である。

カマド 東壁の中央部にある。壁を境として燃烧部と煙道が作られている。全長185cm、焚口の幅は40cmでやや広い。燃烧部は、焚口に石を立てるほかは灰白色粘土で作られている。検出時の状況は、石を抜かれて粘質土の大半も腰砕けのように流れ出していた。ただし、焚口の手前にある粘土の帯は、袖から流れ出たのではなく、区画をするような意味で貼り付けたものと見られる。煙道は、長くて傾斜が少ない。

柱穴 床面では検出することができなかったが、掘り方面で対となる小さなピット2本を検出した。長軸・短軸・深さは、P1が20・16・4cm、P2が22・20・10cm、柱間は205cmである。柱穴としては妥当な位置で、対応すべき北側の2本は検出されていないが4本主柱穴とみられる。また、調査時の所見によると、床面で見ると柱穴のようなものがあつたと記録されている。円形痕の内側にロームがあつて、その周りに黒土がドーナツ状にめぐるといふもので、掘り込み自身は床が窪んだ程度できわめて浅い。

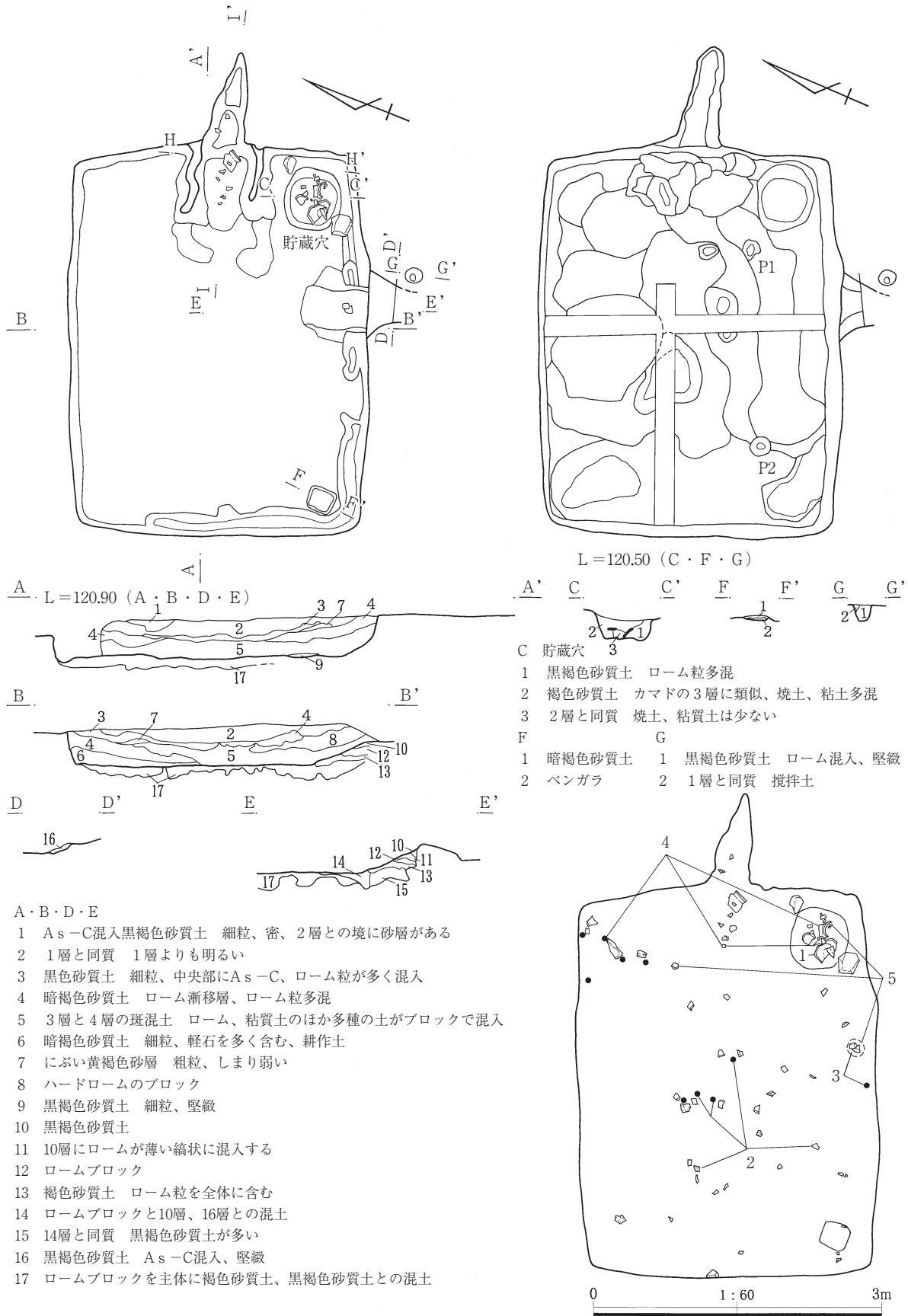
周溝 西壁と南壁だけを図示したが、貯蔵穴がある南東隅を除いてほぼ全周していたらしい。幅、深さともに10cm前後である。北は痕跡らしいものが見られたが、床の軟弱部分の中にあり、はっきりとしないので図示していない。カマドの両側は、掘り方で検出されている。

貯蔵穴 南東隅にある。長軸63cm・短軸60cm・深さ18cmの方形である。中からは杯が床面に着き、甕と甑の破片が折り重なって出土した。詰め込んだような状態で、周りではカマドの袖石なども出土している。カマドがある北側には、少し離れて幅10cmの粘土の帯が貼ってある。穴の路肩を養生策するには離れすぎている。住居跡の隅を仕切るのが目的であろう。

床面 全体に固く締まっているが、中でも壁際を除いた中央部は特に硬化し、高さの点でも壁際にくらべて1～1.5cm低い。南壁のやや東寄りに入口施設がある。ロームと黒褐色砂質土を互層にして固めた斜路のことで、長さ68cm、上面の幅40cm、約40度の傾斜である。硬化した面は、道のように壁の外側にまで続き、基本土層4層面が踏み固められて路面のようになっている。周堤帯を越して、さらに外に伸びていたことは確実な様子である。路面らしき硬化面の脇にある小ピットは、入口の上屋を支えるものであろう。直径が28cm、深さは26cmである。また、屋内の南西隅では、拳程度のベンガラの塊が出土している。木杵か曲物のようなものがあつた様子で、すぐ脇にはロームの塊が置かれている。ベンガラは、分析の結果、水成起源の褐鉄鉱と推定された（第5章参照）。掘り方は、全体がAs-YP中のソフトロームまで掘削されている。土坑が連続するとか、一定の傾向を持つとかの特徴はない。掘削痕は、北東と南西の壁際で壁に平行した列が複数見られる。鋤跡の幅は最大で20cm、方形をしている。

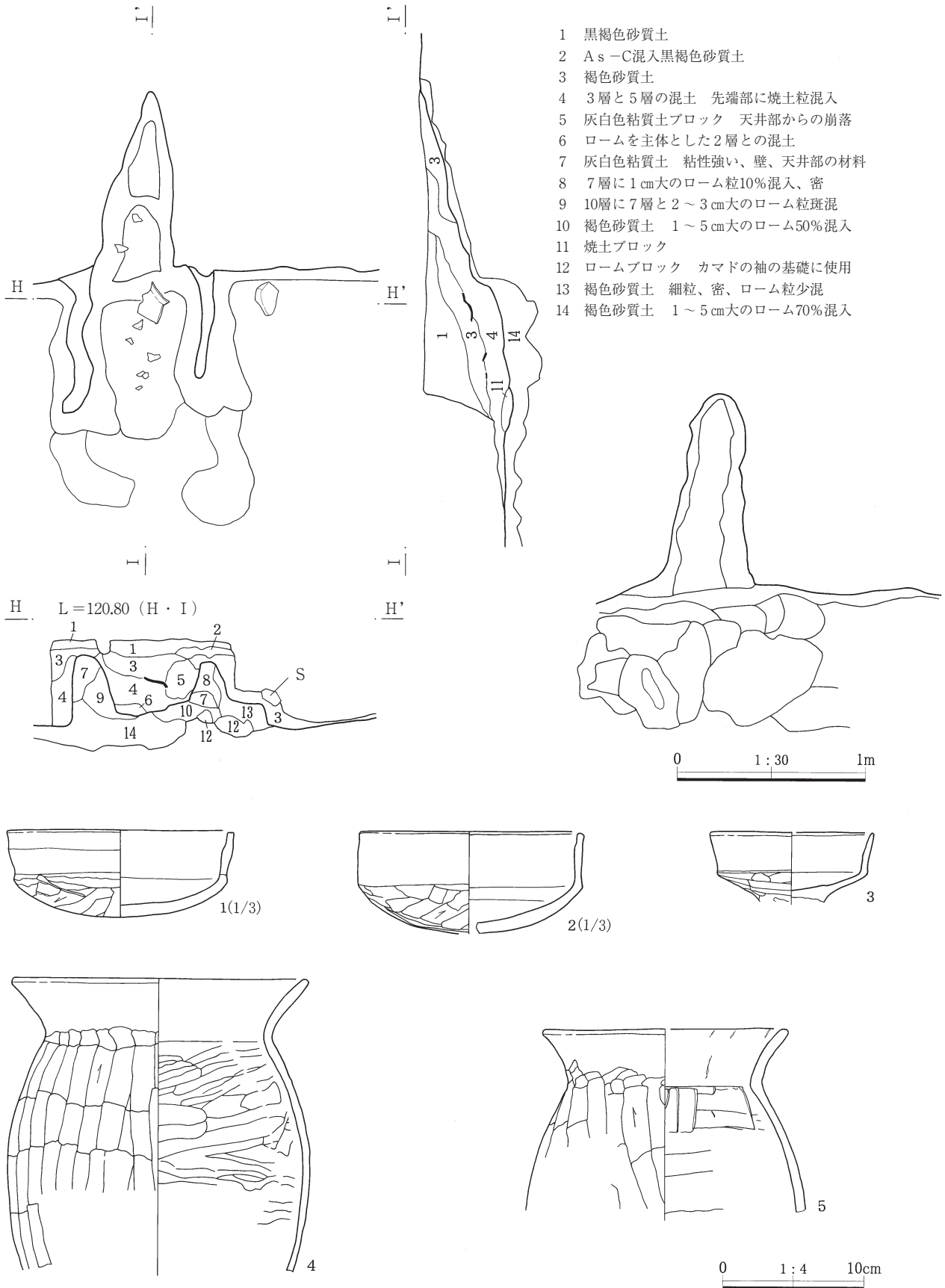
遺物と出土状態 4層と5層の上面でほとんどが出土している。住居跡の時期を決めたのは、貯蔵穴から出土した1の杯、4、5の甕である。非掲載は、土師器171点、縄文土器8点である

所見 古墳時代後期の住居跡である。15号住居跡と並ぶ、集落内では数少ない長方形である。



第92図 11号住居跡遺構図(1)・遺物分布図

第4章 検出された遺構と遺物



第93図 11号住居跡遺構図(2)・遺物分布図

12号住居跡（第94～98図 PL12・13・56・57）

位置 3区、39K～M-15・16グリッド、南半分は、2区と3区を分ける市道にかかり未調査である。

重複関係 なし **形状** 推定方形、東壁は、カマドを境にした南側、南東隅全体が北側よりも約40cm外側に張り出し、壁も垂直になっている。それに対して、北側は張り出すのではなく、カマドに続く箇所だけが棚として一段低くなっていた可能性がある。現状では、棚のように幅が広がっているように見える。また、中段以上の壁が一様に斜めになっているが、これは埋没に伴う自然崩落なのか、それとも壁まわり棚なのかどうかは判別がつけられなかった。**規模** 東西7.85m、南北6.90m、壁高75cm **面積** 54.16m² **主軸方位** N72° E

覆土 21層に分けた。自然埋没である。3層は、As-Bの1次層で厚さが20cmである。アッシュを残して、降下後は開墾されていないことがわかる。4層、5層は住居跡全体を覆い、中央部の厚いところでは約40cmもある。壁際にある7層、8層は、周堤帯からの流れ込みなのか、混入しているロームの量が多い。15層から17層は、掘り方の貼床材である。18層、19層は、P5の覆土である。

カマド 東壁の中央部にある。全長180cm、焚口の幅27cm、高さ30cm前後の1穴式、煙道がわずかに屋外にのびる構造である。全体は、壁際を奥行き1m以上掘り込み、2本の土手のように残したロームに粘土を貼って作られている。ロームは、高さ30cm、最大幅50cm、長さは1m近くもある。両側ともに段があるのは、粘土の剥落を防ぐための工夫である。特に右側は、階段式になっている。焚口は天井とともに崩落していたが、角閃石安山岩の転石による鳥居状の石組みである。焚口の幅と高さは、石に残されていた煤や赤く変色した跡からの推定である。内部は、支脚こそなかったが床には焼土が残り、壁まで赤く焼けている。火のまわりが良かったのと、長期間使用していたことがわかる。左袖が東壁に取り付く箇所には、床の部分だけ小石を含む粘土が貼り付けられている。これは、すき間を塞ぐための補強で、日々の補修用が貯蔵穴の側にあるカマドと同質の粘土の塊である。量とすればわずかではあるが、仮置きしていたものであろう。

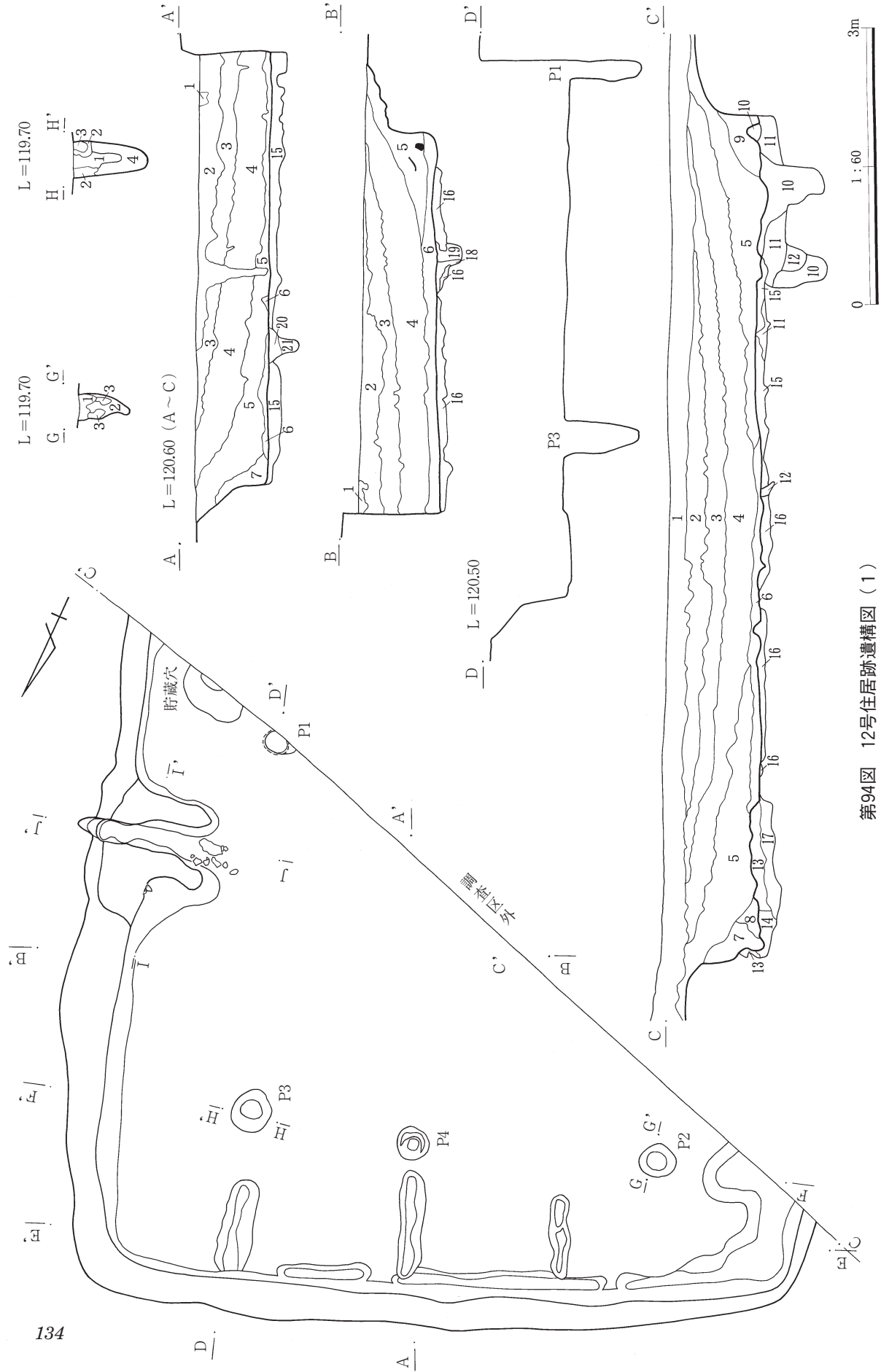
柱穴 推定8本主柱穴で、そのうちの4本である。長軸・短軸・深さは、P1が32・24・74cm、P2が36・34・56cm、P3が48・42・80cm、P4が38・35・34cmである。柱間は、P1とP3が400cm、P2とP4が270cm、P3とP4が180cmである。なお、P1とP3の間には、P5の痕跡がある。これは、掘り方調査の断面だけで確認したもので、補助的なものらしく、ほかのものに比べて24cmと浅い。P4も36cmと同様に浅い。また、P3の1本だけであるが、底面に灰白色粘土の圧痕がある。粘土は、貼ったように見える。

周溝 北西隅から北の壁際が、わずかに窪む程度である。断面でもはっきりとしない。

貯蔵穴 東南隅にある。調査区の壁にかかるため、全貌は明らかではないが、長軸70cm・短軸45cm以上・深さ80cmの方形である。円筒形で深いことが特徴である。掘り方では、P1までをむすんだ1m四方の範囲が一段低い。出土した遺物はない。**床面** ロームを多量に含む暗褐色砂質土による貼床である。一様な堅さではあるが、全体が波を打ったように見える。間仕切り溝は、北壁に3本、東壁に1本がある。掘り方は、全体が掘り下げられ、柱穴を境にして内側と外側での段差はない。

遺物と出土状態 カマドの焚口から半径1m以内に半分以上が集中している。1の杯は、カマド前の床直、3、4の甕はカマドからの自然崩落、6の甕は東側からの混入である。4の甕には粘土が付着し、5の甕の底面には長さ7mmの糊跡が付いている。12の石皿も混入であるが、2の杯や10のこも編み石は壁上に置かれていたものが棚から滑り落ちたかのようである。13の土玉は、カマドの右袖から出土している。非掲載は、土師器71点、縄文2点である。

所見 古墳時代後期、7号住居跡と並ぶ大型住居である。



第94図 12号住居跡遺構図(1)

第4節 古墳時代後期の遺構と遺物

A・B・C

- 1 灰褐色砂質土 表土
- 2 As-B混入黒褐色砂質土
- 3 As-B
- 4 黒褐色砂質土
- 5 As-C混入暗褐色砂質土
- 6 5層に黄褐色ロームが30%混入
- 7 5層に2cm大までのローム15%混入
- 8 黒褐色砂質土 軟らかい、1cm大までのローム粒混入
- 9 黒褐色砂質土 軟らかい
- 10 暗褐色砂質土 ロームブロック少混
- 11 黄褐色砂質土 10層が混入

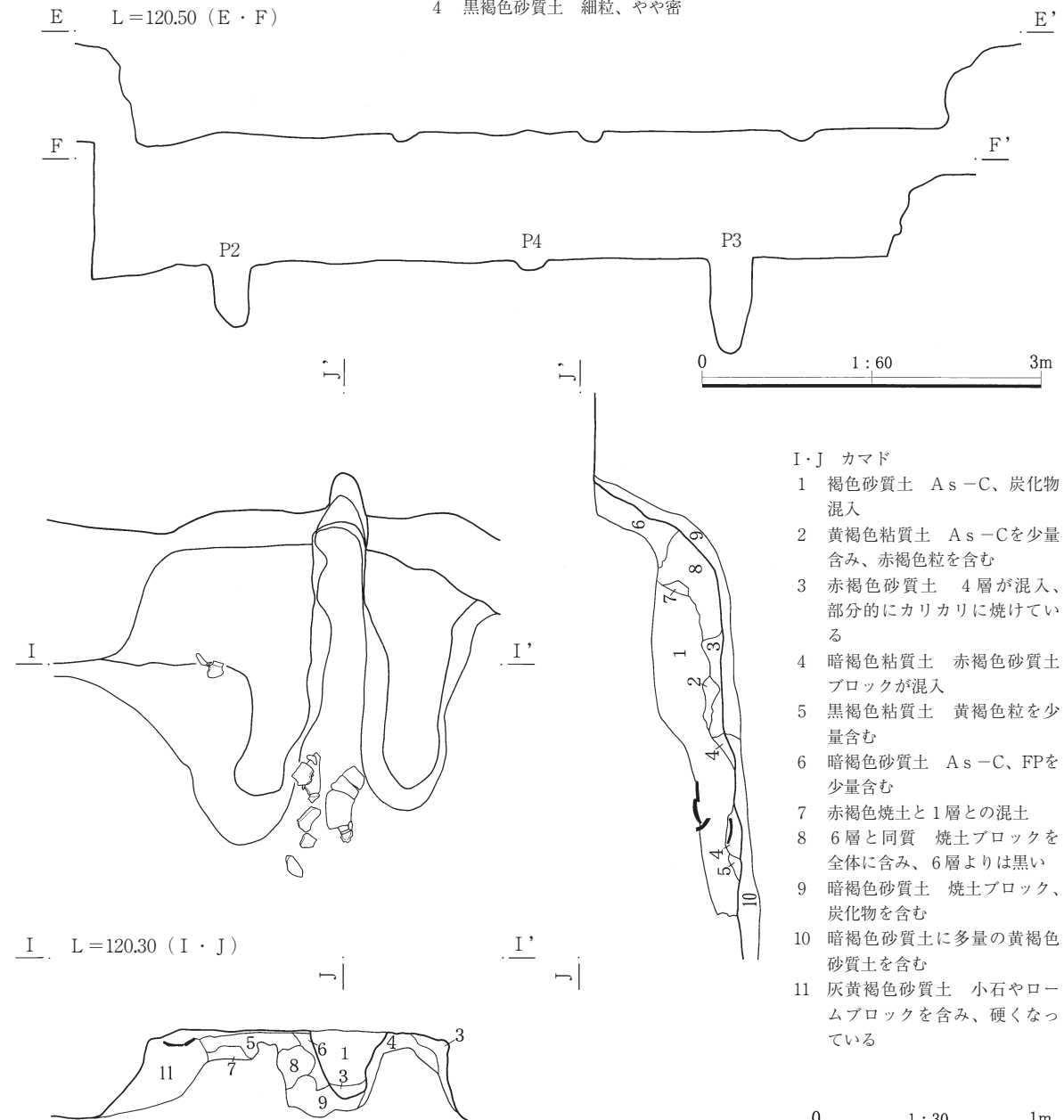
- 12 黒褐色砂質土 ロームブロック混入
- 13 暗褐色砂質土 黄褐色ローム多混、2cm大までのローム10%混入、6層よりも明るい
- 14 13層と同質 ロームが大粒、黒褐色砂質土が混入
- 15 暗褐色砂質土 黄褐色ローム多混、黒褐色砂質土少混
- 16 11層に15層が混入、15層よりも明るく黒褐色砂質土も混入する
- 17 黄褐色砂質土 13層と14層付近に多量の暗褐色砂質土が混入
- 18 黒褐色砂質土に1cm大までのローム10%混入
- 19 暗褐色砂質土にローム粒、炭化物混入
- 20 黒褐色砂質土に1cm大までのローム10%、炭化物、焼土粒混入
- 21 20層と同質 ロームが大粒が多い

G P2

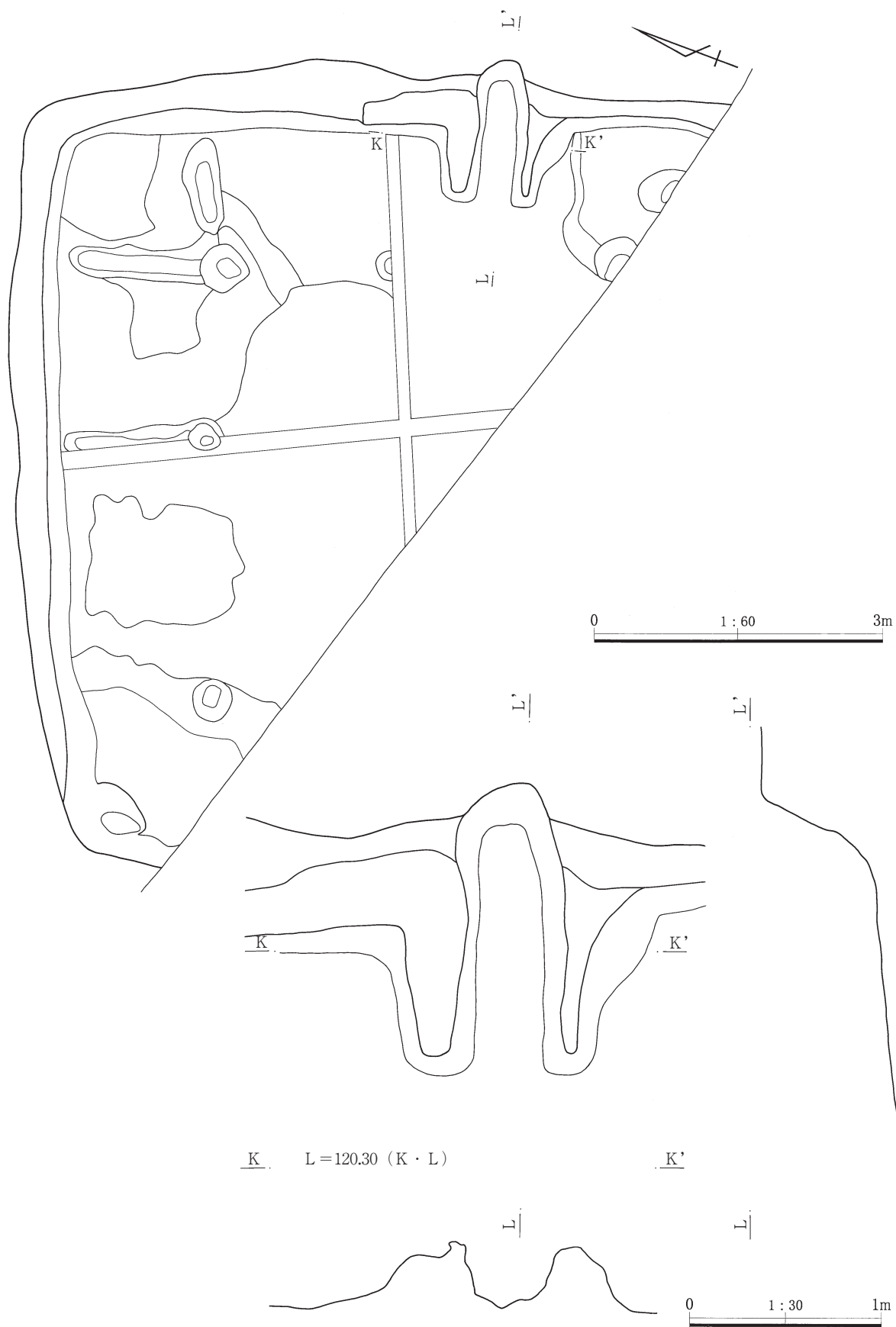
- 1 黒褐色砂質土 細粒、密、ローム粒混入
- 2 1層と同質 ロームが多い
- 3 ロームと1層の斑混土、硬くブロック状

H P3

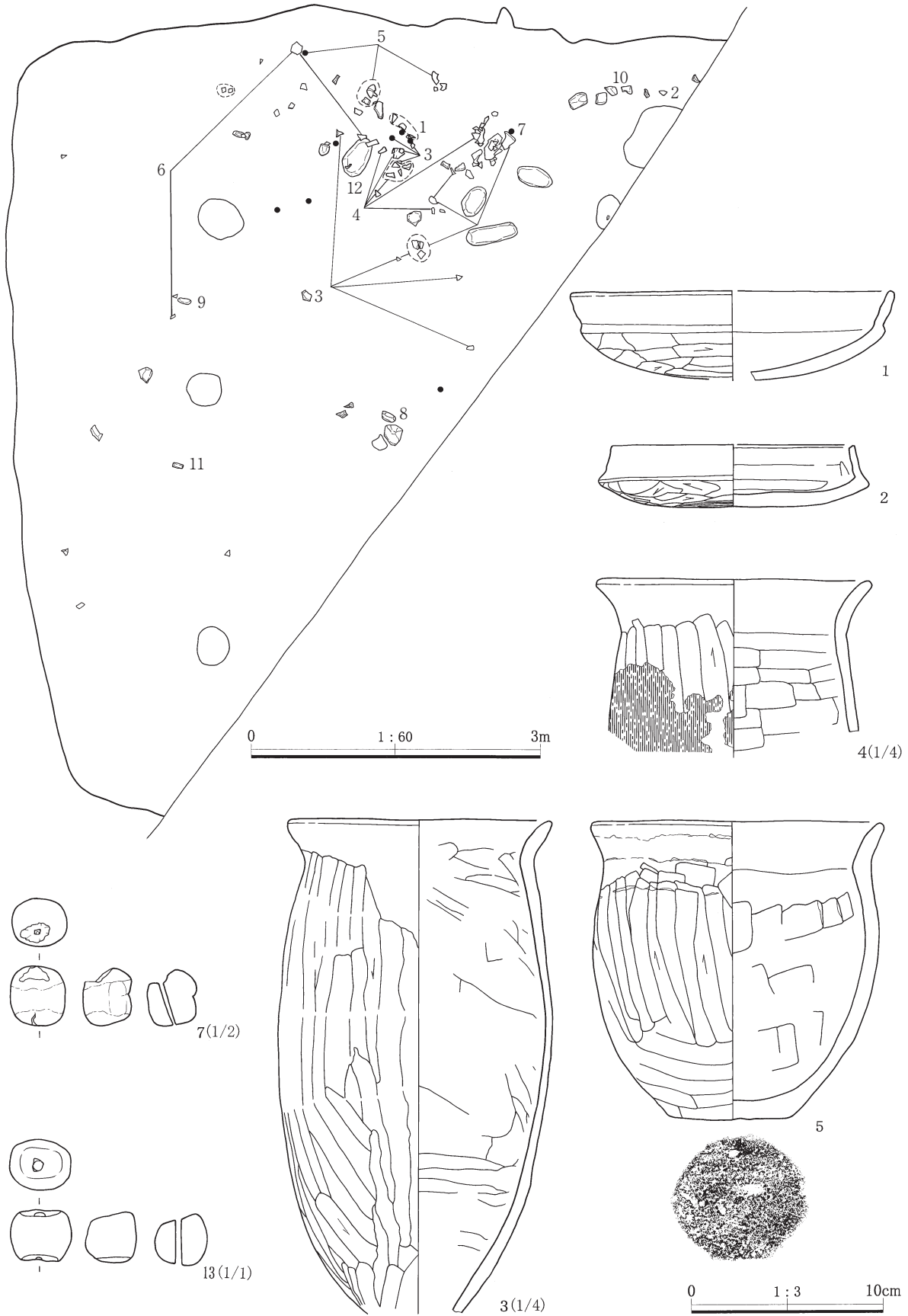
- 1 黒褐色砂質土 ローム多い、しまり弱い、柱痕か
- 2 1層と同質 ロームが主体、しまり強い
- 3 黄褐色ロームのブロック 貼床の材料、堅緻
- 4 黒褐色砂質土 細粒、やや密



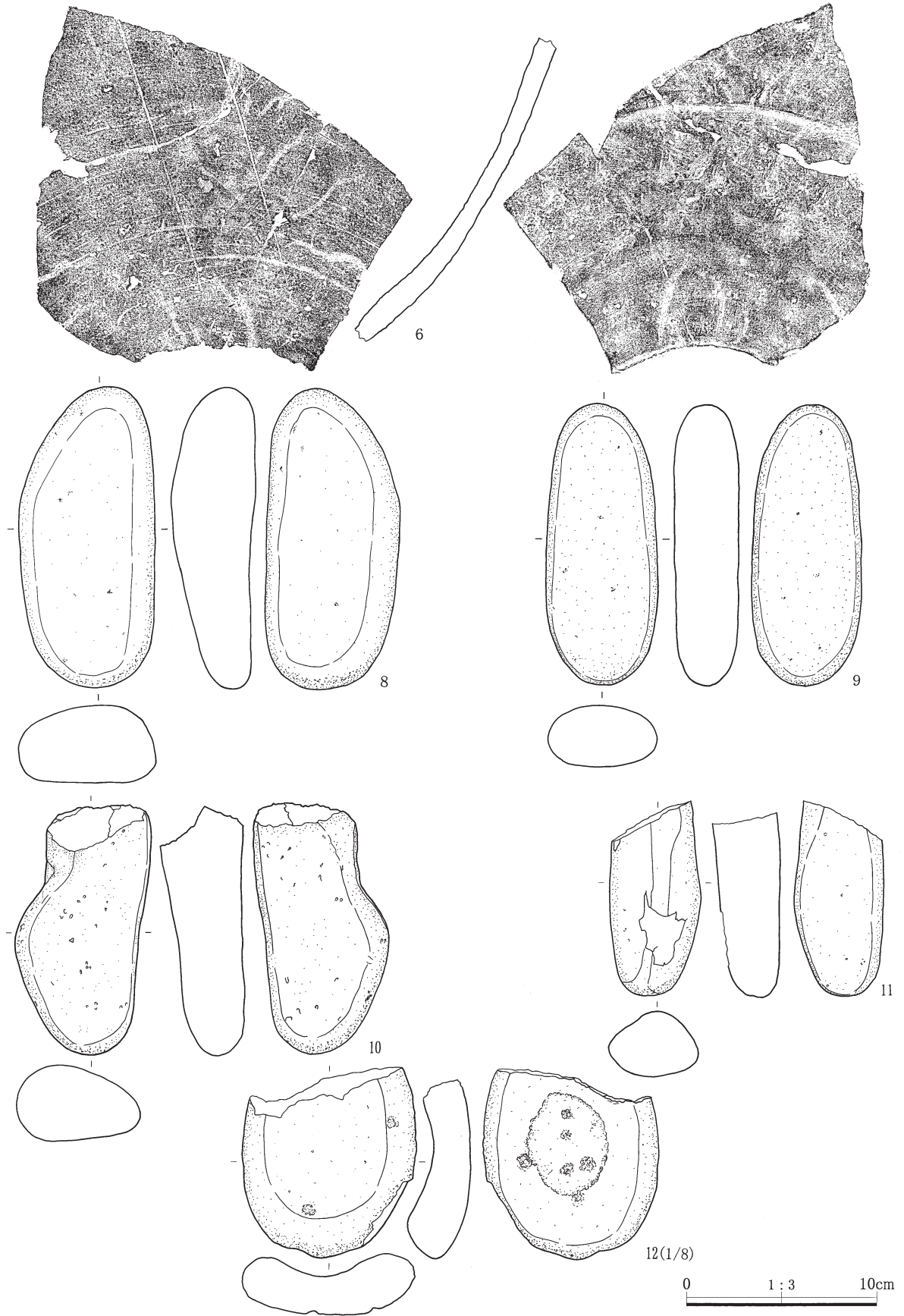
第95図 12号住居跡遺構図(2)



第96図 12号住居跡遺構図(3)



第97図 12号住居跡遺物分布・遺物図（1）



第98図 12号住居跡遺物図(2)

15号住居跡（第99～101図 PL 14・57）

位置 3区、39M～O-16・17グリッド **重複関係** 中央部から南東隅にかけて6号溝が重複し、さらに南東隅に5号溝も重複している。**形状** 長方形、5号、6号溝の重複だけでなく、掘り込みが浅く上面での攪乱もあって遺存状態は良好ではない。**規模** 東西5.55m、南北4.08m、壁高 15～30cm、東壁だけが高く、ほかはその半分である。**面積** 22.64m² **主軸方位** N64° E

覆土 5層に分けた。1層はAs-Cを混入する黒褐色砂質土で、住居跡全体を覆う。2層は壁際にロームが多い。ともに自然埋没である。3層と4層は、ローム漸移層と黒褐色砂質土の混土による、掘り方の貼床である。北に黒褐色砂質土が多く、南はローム漸移層が多い。5層は、重複する6号溝の覆土である。

カマド 東壁の南東隅から1mの所にある。全長150cm以上、壁を境にして燃焼部と煙道が壁の段差を利用して作られている。煙道は、長さが1m近くもあり、屋外に長くのび傾斜が少ない。直径が15～18cmの円筒形、内側に貼った粘質土は赤く焼け、火のまわりの良かったことがわかる。燃焼部は、重複する6号溝で失われている。床面にわずかに残されていた左袖分の粘土で、長さは煙道と同程度であることがわかる。

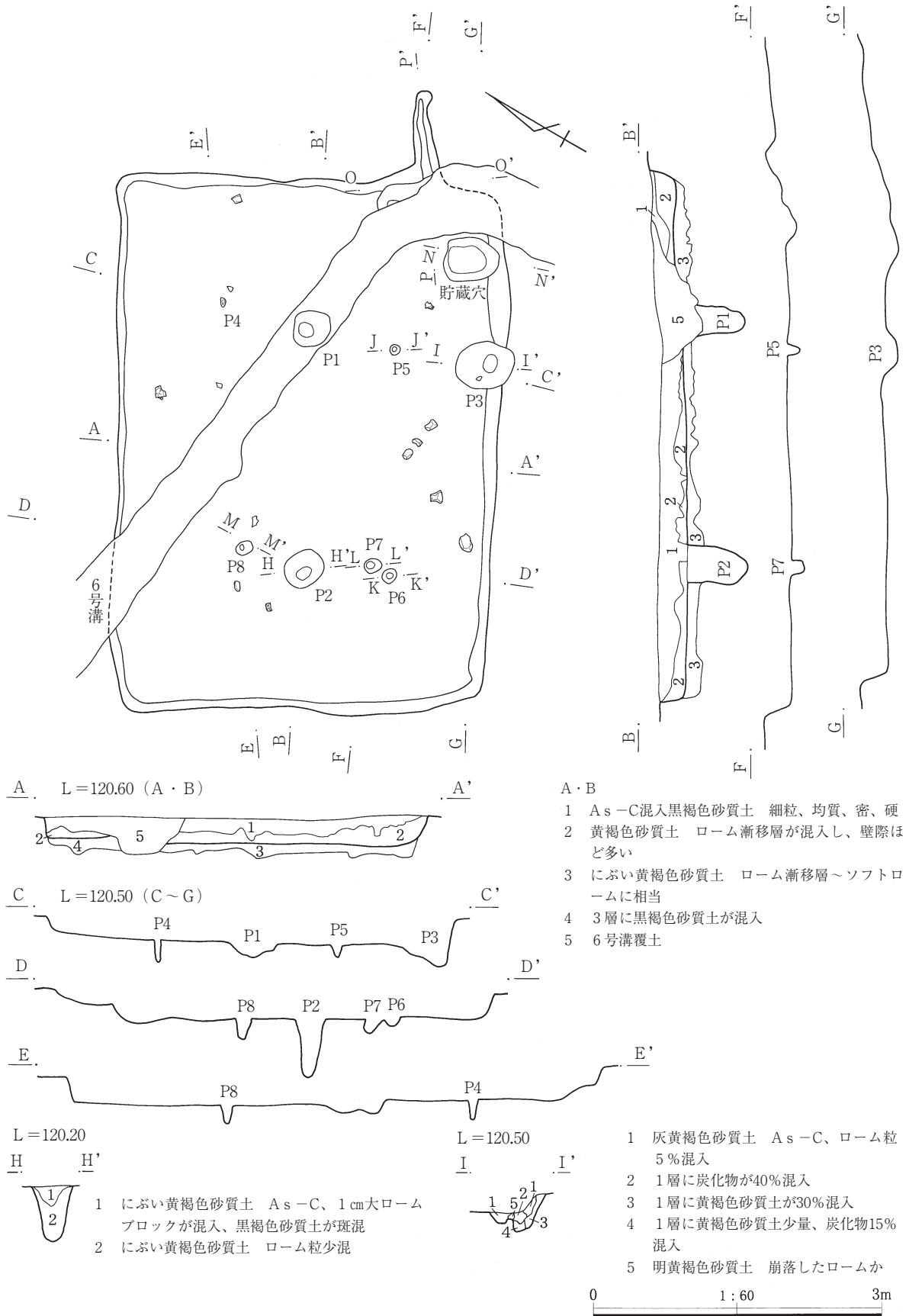
柱穴 2本支柱穴である。長軸線上にある。長軸・短軸・深さは、P1が38・34・56cm、P2が45・37・62cm、柱間は250cmである。P2の3層中には、柱痕を示しているかのように、少量ではあるが粘質土が混入している。柱に塗りつけたようにも見えるが、固定する材料としても埋土に混ぜたのであろう。P3は、長軸65cm、短軸40cm、深さ48cm、調査担当の所見によれば梯子を据え付けた跡である。1層と3層が梯子の根元を固める養生土、炭化物を含む2層と4層が梯子自身の跡かと推定している。P4～P8の5本は、4本組の支柱穴とみて検出したものであるが断定できなかつた。いずれも直径が20cm未満と細くて、浅い。同じ長方形の11号住居跡でも、掘り込みの浅いピット4本が記録されている。それを例にすれば、2本の支柱穴は切妻造りの棟を支える柱で、4本は補助柱穴と見てよいだろう。

周溝 なし **貯蔵穴** 南東隅にある。長軸・短軸・深さは、40・30・20cmの方形である。カマドの焚口から50cm前後と近すぎ、貯蔵穴ではなく土坑の可能性もある。代わるものとしては、南壁の中央寄りに長方形の土坑がある。長軸・短軸・深さは、60・40・48cmで、一部は壁にかかる。掘り方で検出した上に、梯子を据え付けた跡と推定しているものではあるが、カマドとの位置関係ではこれの方が適当である。

床面 硬化面は、中央部付近に範囲が限られていて薄い。安定した状態ではない。掘り方は、全体が掘り下げられているが西壁沿いに限り、幅1m弱の帯状になってさらに一段深くなる。その中壁際では、10cm程オーバーハングしている箇所もある。西壁以外は、中央部から南東隅にかけて、第100図で見るように直径1m前後の土坑状のものが連続している。土坑状のものは、それぞれが1回か1人あたりの掘削量であるらしく、大きさがほぼ揃い、深さも一定である。作業としては、逆時計回りに北から西への順序で進んでいる。同質の土を掘り出すことに目的があったのだろうが、底面はAs-BPの上面止まりでざらつきやすい。単に掘り返すことに目的があったのだろうか。

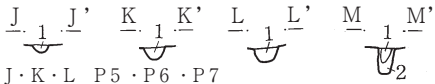
遺物と出土状態 床面かそれに近い状態で出土しているが、少量で散在している。甕をはじめとして小破片がほとんどで、また接合するものも少ない。1の須恵器蓋は貯蔵穴に近く、2の須恵器蓋は北東隅寄り、3の須恵器杯は中央部の北壁寄り、5の高杯は中央部P2の近くからである。6～8の軽石は、南壁の中央部、壁から1m前後の位置で出土した。こも編み石と同じ使われ方をしたのであろう。手頃な大きさに割られていて、側縁には紐かけ用のきざみらしき跡がある。非掲載は、土師器30点、縄文2点、石4点である。

所見 古墳時代後期の住居跡である。11号住居跡と並ぶ、数少ない長方形である。



第99図 15号住居跡遺構図(1)

L=120.20 (J~M)



J・K・L P5・P6・P7

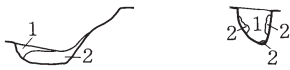
1 As-C混入黒褐色砂質土 におい黄褐色砂質土が斑混

M P8

1 黒色砂質土 As-Cと1cm大までのローム粒20%混入

2 1層と同質 ロームの混入が50%と多い

N L=120.50 N' R R' L=120.20



N 貯蔵穴

1 褐灰色粘質土 炭化物混入

2 明黄褐色砂質土 暗褐色砂質土が斑混、炭化物、焼土混入

R

1 灰黄褐色砂質土 褐色砂質土のブロックが15%混入

2 1層にロームがブロックで混入

O・P カマド

1 におい黄褐色砂質土 細粒、密、被熱で赤い、先端部は焼けて硬化

2 暗褐色砂質土 細粒、密、しまり弱い

3 褐色砂質土

4 褐色~におい黄褐色砂質土 細粒、ローム粒混入

5 4層に大粒の焼土、粘質土炭化物が混入、袖からの崩落か

6 におい黄褐色砂質土 ローム粒混入

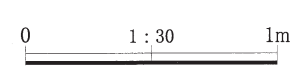
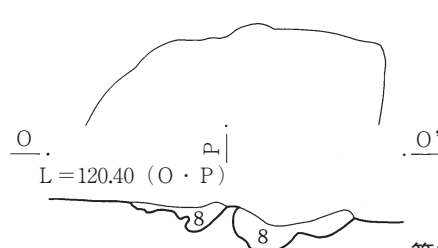
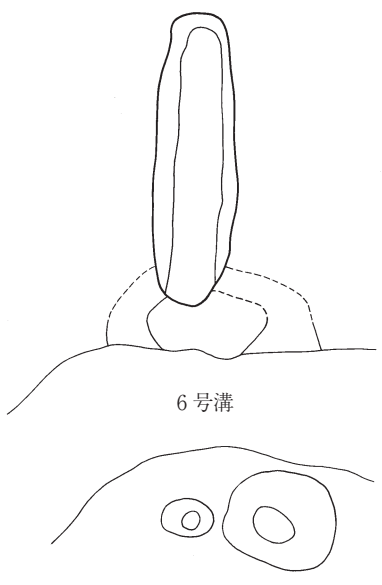
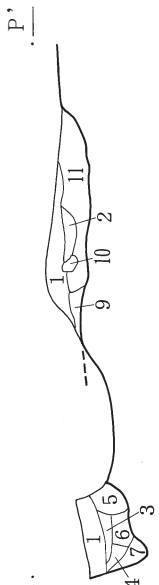
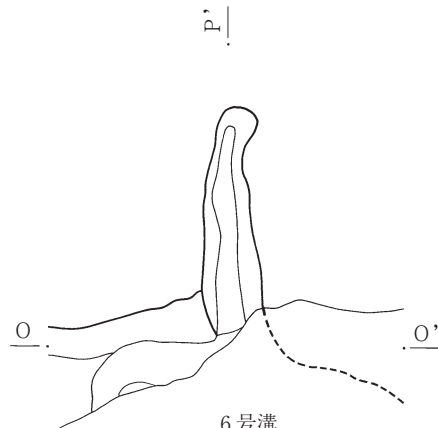
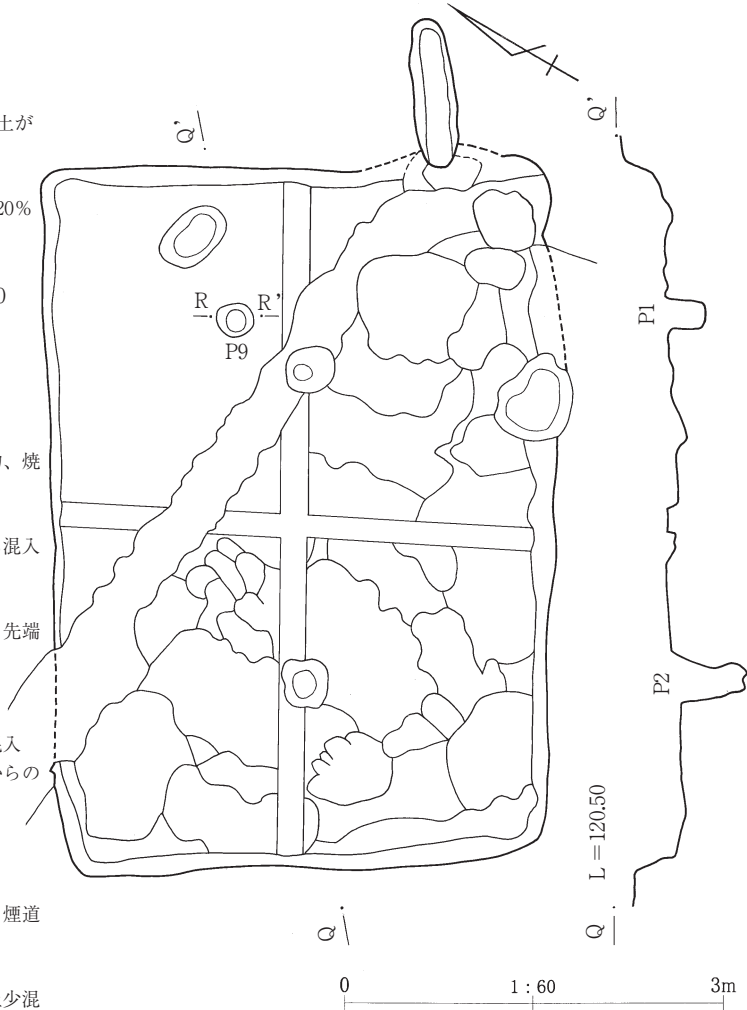
7 黒褐色砂質土 ローム粒少混、しまり弱い

8 6溝による攪乱 7層が主体で粘質土混入

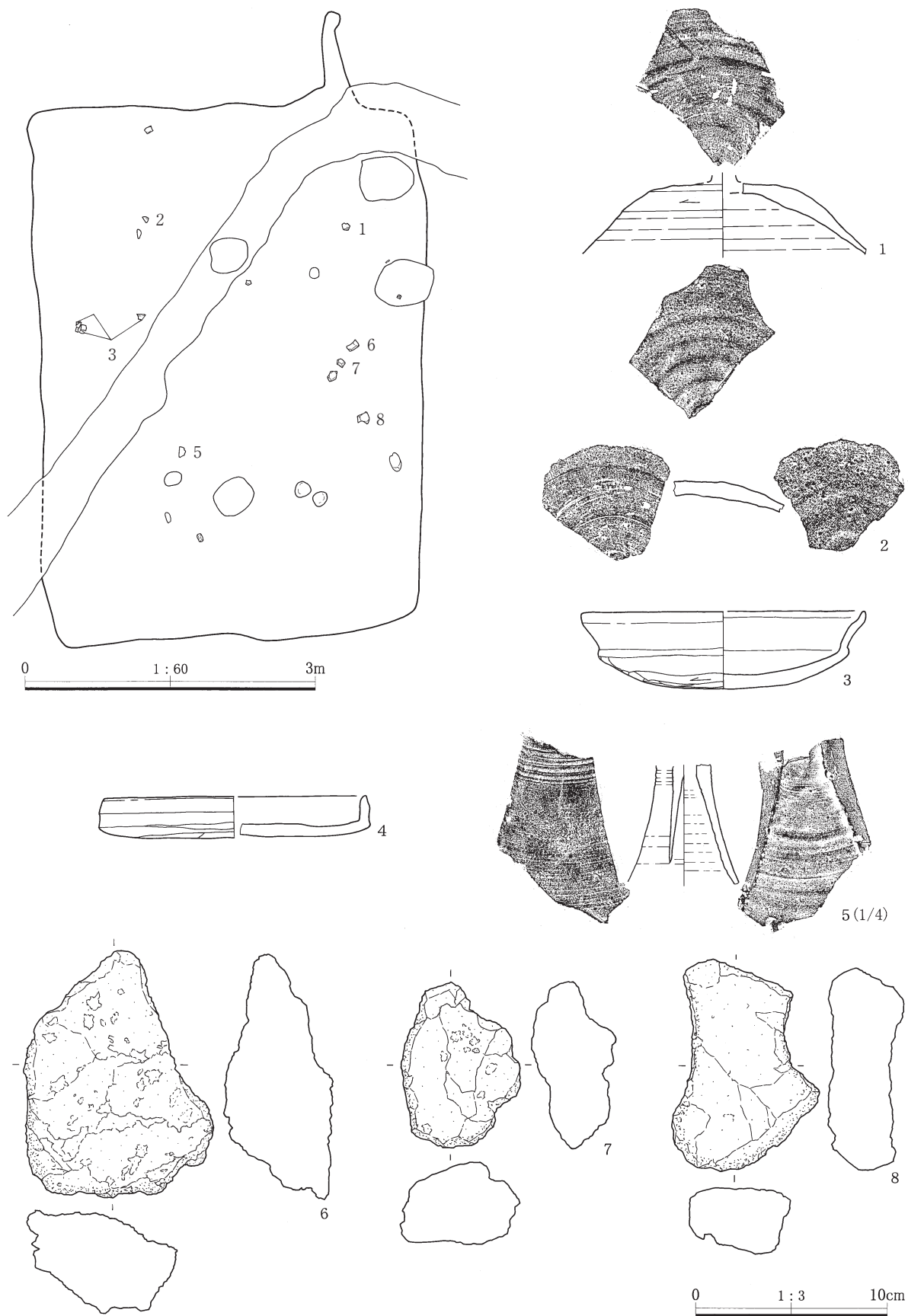
9 焼土 ソフトロームが焼けてカリカリとなる、煙道内部の崩落か

10 9層から剥離したブロック

11 におい黄褐色砂質土 細粒、しまり弱い、焼土少混



第100図 15号住居跡遺構図(2)



第101図 15号住居跡遺物分布・遺物図

17号住居跡（第102～106図 PL15・16・58～60）

位置 3区、39RS-19・20グリッド 重複関係 なし 形状 方形 規模 東西 4.65m、南北4.60m、壁高62cm 面積 21.39m² 主軸方位 N74° E

覆土 20層に分けた。ロームをはじめとして、焼土、炭を混入した土が多く見られる。3層はロームの多いことから土屋根材、6層は壁に貼り付けた網代か、などの調査時のコメントが残されている。18層以下が掘り方である。焼失住居で、人為埋没である。

カマド 東壁中央部と西壁中央部にそれぞれ1基ずつがある。古い東カマドは、壁を境にして燃焼部と煙道部が作られているが、煙道部を残すだけである。長さ55cm、直径が20～28cmの円筒形、内部には粘土が貼られている。傾斜が少ない。掘り方では、袖穴らしい跡が対の位置で検出された。それによると、全長は140cm前後、焚口幅40cm前後である。西カマドは、煙道の先端が屋外にあるだけ、架けていた甕こそ残されていないが、焚口には鳥居状の石組み、燃焼部に甕を転用した支脚を残す。長さは95cm、焚口の幅40cm弱で、煙道が削平されているので全長は150cm前後である。左右の袖には、寺沢川沿いの崖に露出する基盤層から切り出したと思われる、砂岩の切石が使用されている。左袖は長さ29cm、幅16cm、厚さ6cm、右袖が長さ29cm、幅15cm、厚さ6～7cmで、打ち欠いて板状に整形されている。これらは芯材に利用されたもので、カマドの本体部分は暗色帯を使って固められている。

柱穴 4本主柱穴である。長軸・短軸・深さは、P1が28・25・54cm、P2が26・24・70cm、P3が32・30・62cm、P4が32・26・56cmである。柱は、断ち割りをして断面を観察したところでは、いずれも端部が平らだったようで、穴の底面は光沢を帯びるほどの圧着痕がある。柱間は、P1とP2が180cm、P2とP3が190cm、P3とP4が200cm、P4とP1が180cmである。

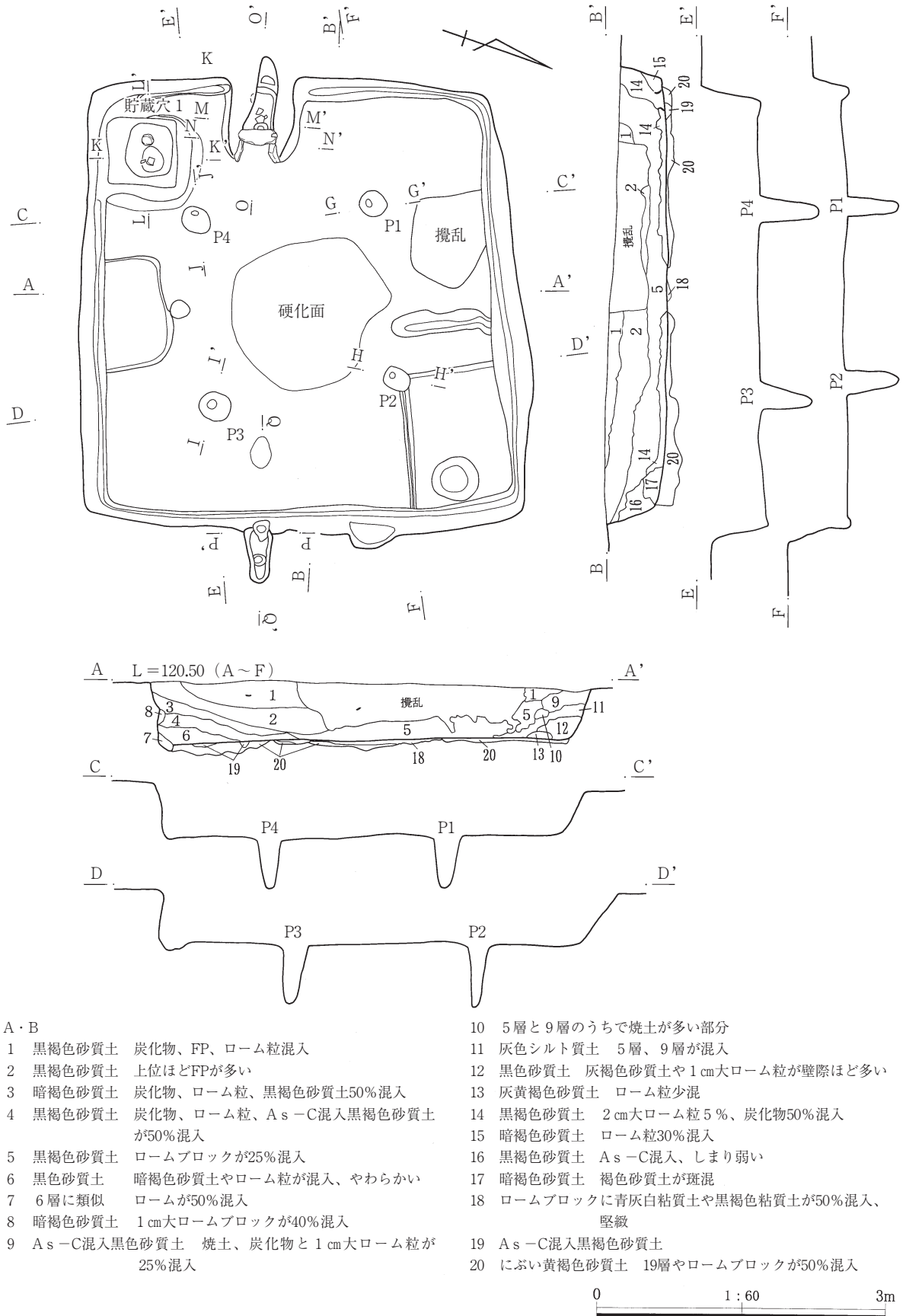
周溝 全周している。幅15cm前後、深さ3～8cmである。

貯蔵穴 南東隅と南西隅の2基がある。それぞれが新旧のカマドに対応するもので、南東隅が古く、掘り方で検出した。長軸66cm、短軸54cm、深さ70cmの方形である。出土した遺物はない。南西隅のものは、長軸56cm・短軸48cm・深さ40cmの方形、粘土帯で住居の隅を仕切った中にある。蓋の跡と見られる段差があり、中からは初めの付いた米が入った甕が出土した（第5章参照）。北東隅からは、床を掘り込むのではなく、逆に曲物を据えて利用したような跡がある。これも南西隅と同じく、壁と主柱穴を間仕切り溝で結び隅を仕切っている。曲物だけではなく、隅が柵のような構造になっているのだろう。

床面 中央部が直径1.50mの範囲で固く締まっている。壁際は、一様に軟弱で、間仕切り溝の長さで床を張りベッド状になるのだろう。南壁中央部は入り口である。間口114cm、奥行き60cm、まわりよりも1～3cm低くなっている。掘り方は、全体が深くなり、主柱穴を境にした段差はない。掘削の単位であるらしい浅い土坑状のものが連続する中に、P4を除いて間仕切り溝がついている。

遺物と出土状態 床直と葦土の上層とに分けられる。前者が7～9、11～14、16、後者が先述のほかである。その中には10の甗のように、北東隅からカマドの中央部の付近まで広く分散しているものがある。また、例外ではあるが、18号住居跡と接合した甗もある。これにより焼失後、埋められているが、さらに廃棄物の捨て場ともなったことがわかる。炭化材は、直径が6cm前後の皮付きの丸木で、枝か若木の幹という印象である。方向は、東西、南北、その他があり、床上3～5cmの間で出土、床とは薄い間層をはさむだけである。カマドの位置を考慮すると、東西方向にあるものが棟木、南北が垂木であった可能性がある。樹種は、第5章参照。非掲載は、土師器363点、石器4点である。

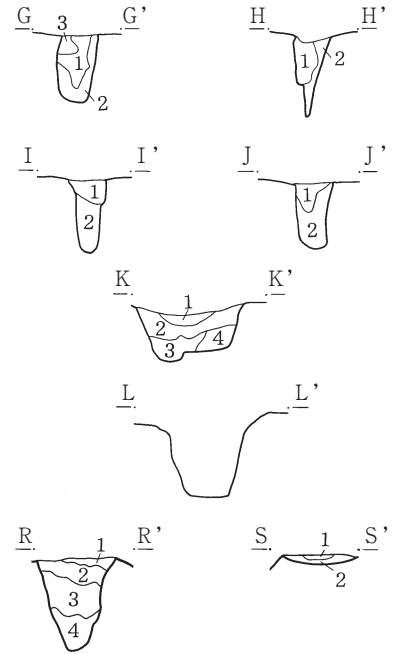
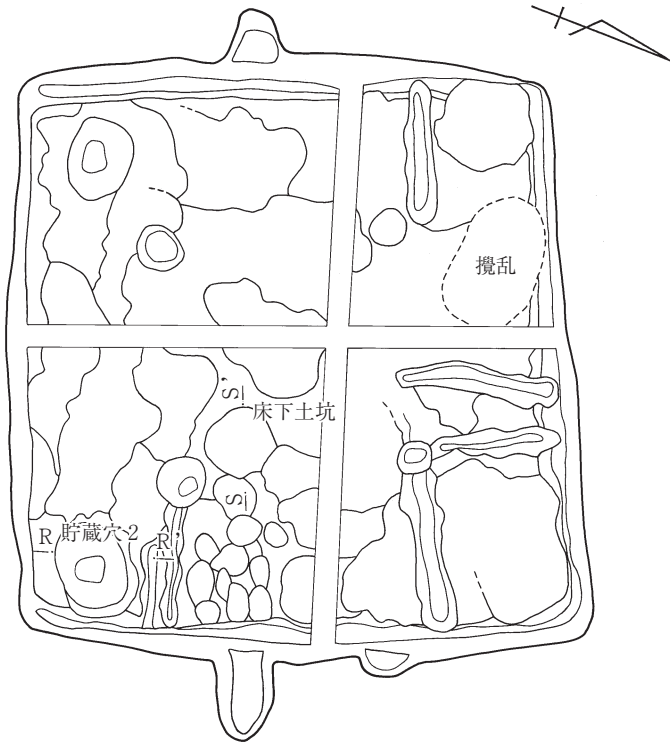
所見 古墳時代後期の住居跡である。焼失して埋められている。



第102図 17号住居跡遺構図(1)

第4節 古墳時代後期の遺構と遺物

L=119.90 (G~L・R・S)



G P1

- 1 黒褐色砂質土 1cm大ローム粒混入
- 2 黄褐色砂質土
- 3 硬いロームブロック

H P2

- 1 黒褐色砂質土 細粒、ローム粒少混、しまり弱い
- 2 にぶい黄褐色砂質土 1層混入

I P3

- 1 黒褐色砂質土
- 2 にぶい黄褐色砂質土

J P4

- 1 黒褐色砂質土
- 2 にぶい黄褐色砂質土 下位にロームブロック混入

K 貯蔵穴1

- 1 暗褐色砂質土 細粒、ローム粒を全体に含み、焼土少混
- 2 黒褐色砂質土 細粒、均質、密、ローム、焼土混入
- 3 にぶい黄褐色砂質土 カマドの粘土混入、密
- 4 黄褐色砂質土 大粒のローム多混、しまり弱い

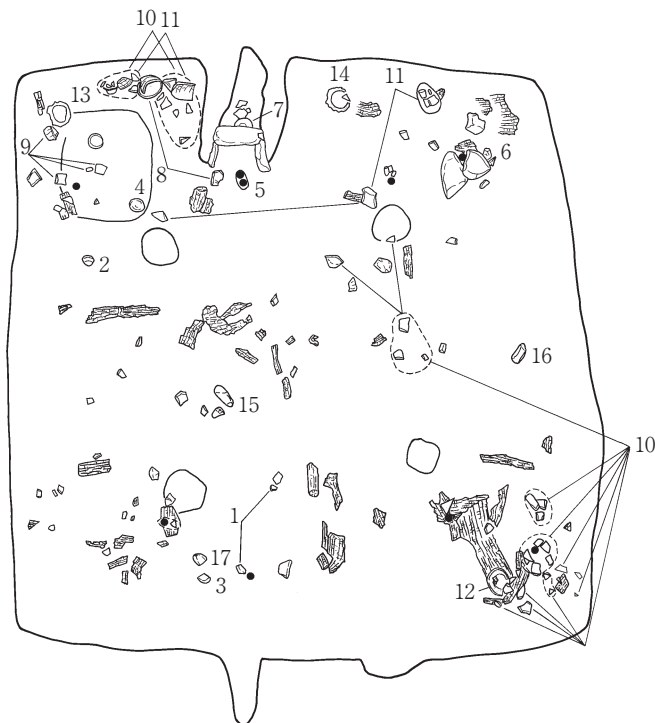
R 貯蔵穴2

- 1 にぶい黄褐色砂質土 1~3cm大ロームブロック40%混入、黒褐色砂質土、焼土少混
- 2 灰黄褐色砂質土 3cm大までのロームブロックが20%混入、黒褐色砂質土少混
- 3 黒褐色砂質土 ロームブロック、青灰色粘質土混入
- 4 暗褐色砂質土

S 住居内土坑

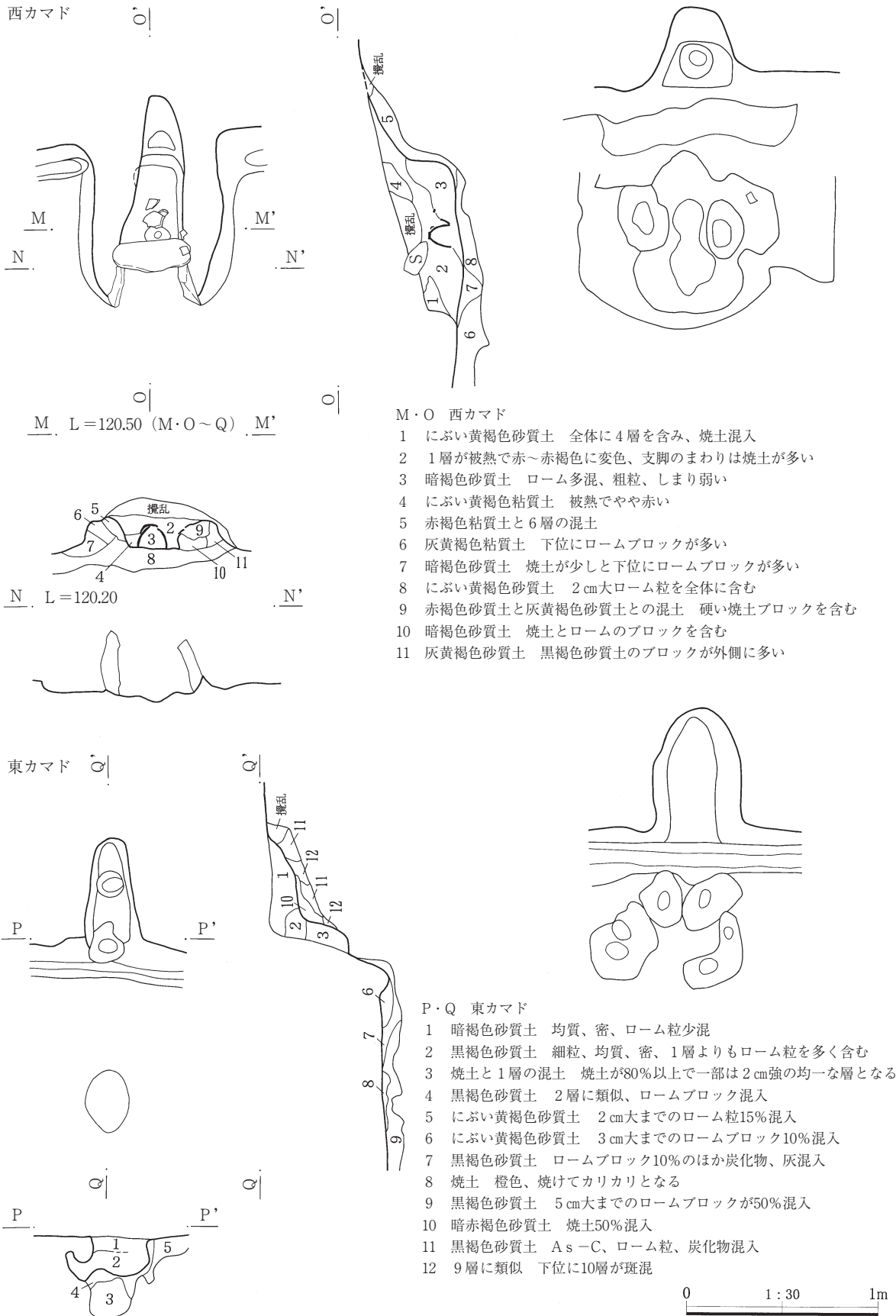
- 1 明黄褐色のロームブロックに2層が混入
- 2 青灰色粘質土に青黒色砂質土が混入

0 1:60 3m



第103図 17号住居跡遺構図(2)・遺物分布図

第4章 検出された遺構と遺物



M・O 西カマド

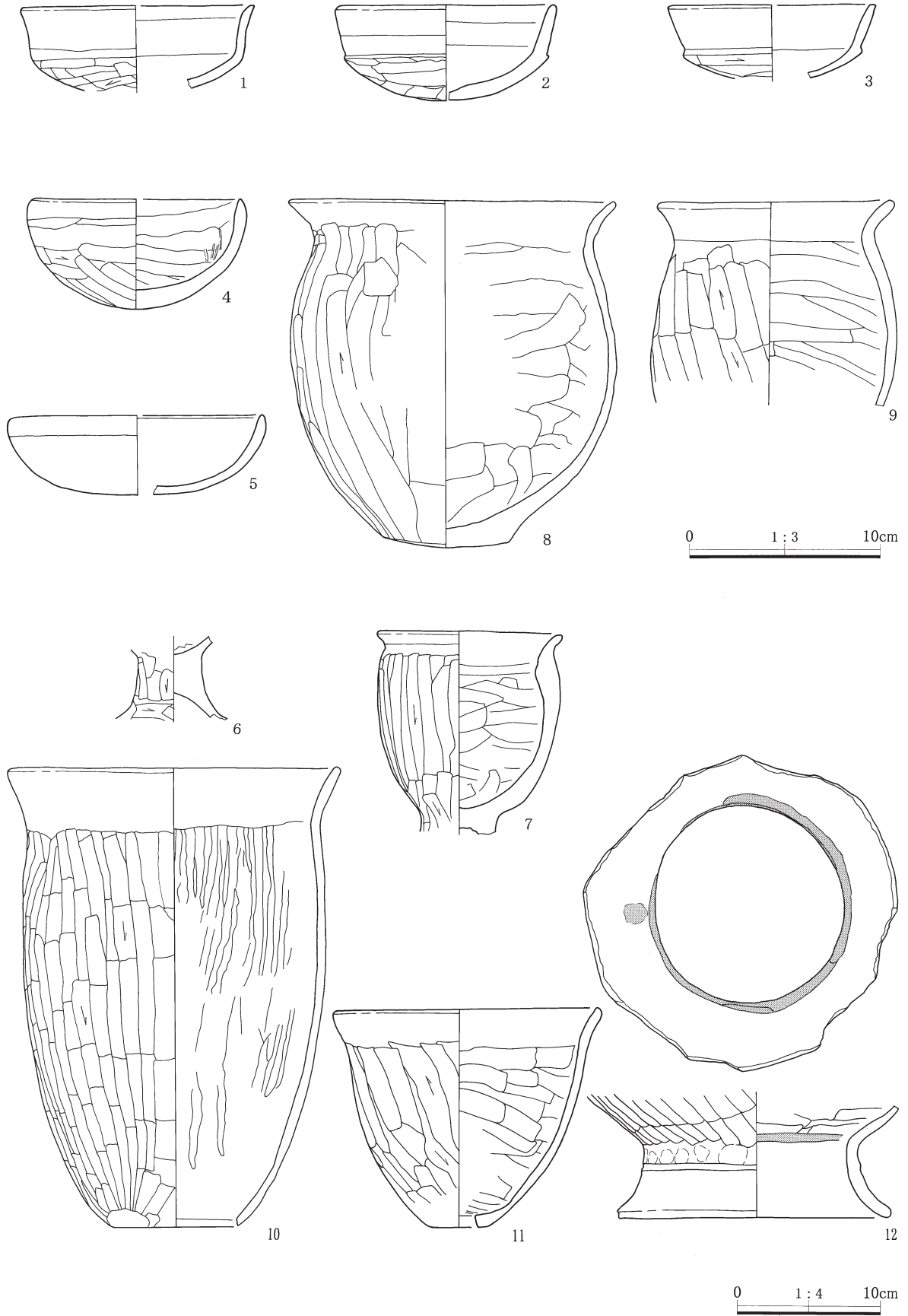
- 1 にぶい黄褐色砂質土 全体に4層を含み、焼土混入
- 2 1層が被熱で赤～赤褐色に変色、支脚のまわりは焼土が多い
- 3 暗褐色砂質土 ローム多混、粗粒、しまり弱い
- 4 にぶい黄褐色粘質土 被熱でやや赤い
- 5 赤褐色粘質土と6層の混土
- 6 灰黄褐色粘質土 下位にロームブロックが多い
- 7 暗褐色砂質土 焼土が少しと下位にロームブロックが多い
- 8 にぶい黄褐色砂質土 2cm大ローム粒を全体に含む
- 9 赤褐色砂質土と灰黄褐色砂質土との混土 硬い焼土ブロックを含む
- 10 暗褐色砂質土 焼土とロームのブロックを含む
- 11 灰黄褐色砂質土 黒褐色砂質土のブロックが外側に多い

P・Q 東カマド

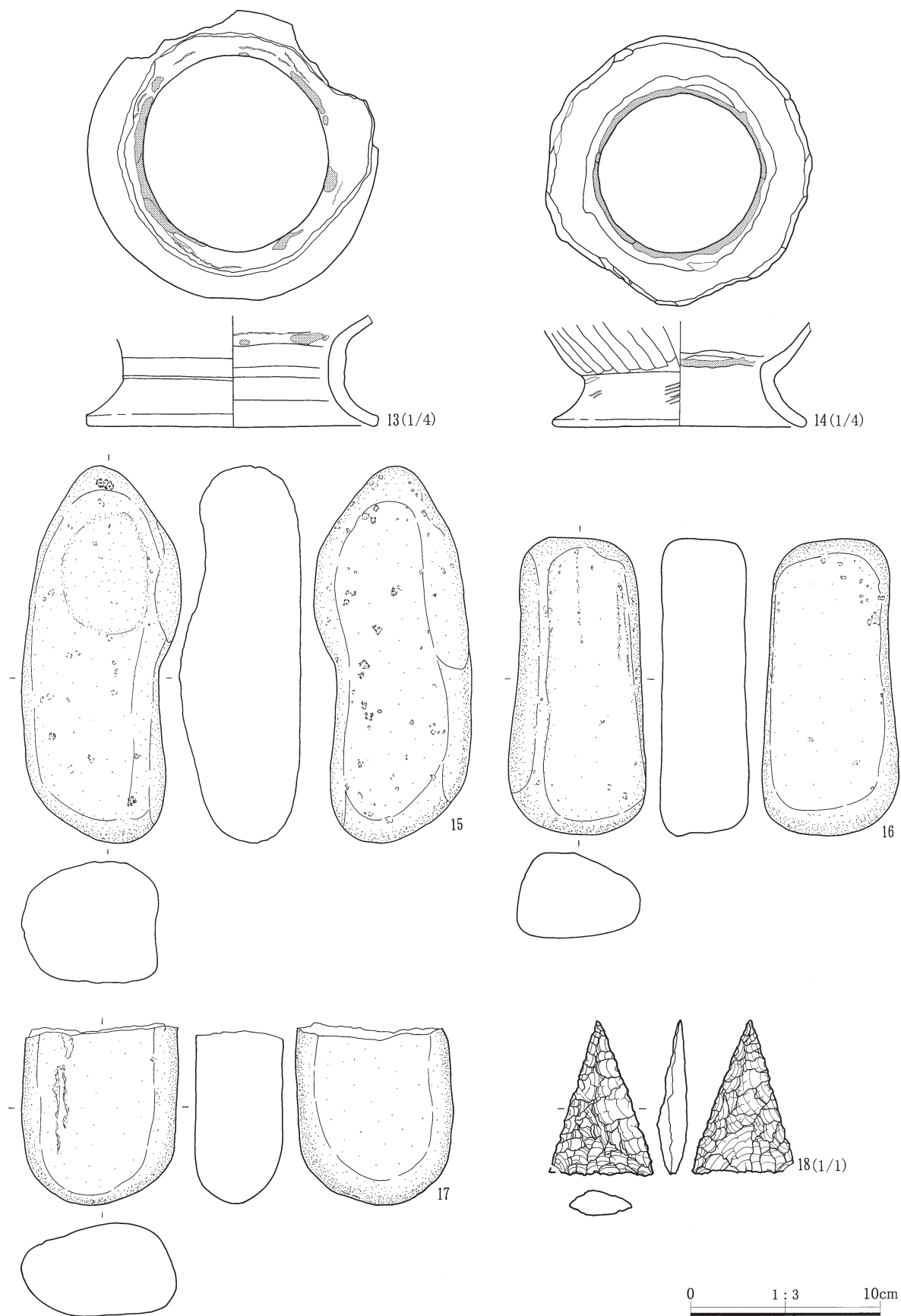
- 1 暗褐色砂質土 均質、密、ローム粒少混
- 2 黒褐色砂質土 細粒、均質、密、1層よりもローム粒を多く含む
- 3 焼土と1層の混土 焼土が80%以上で一部は2cm強の均一な層となる
- 4 黒褐色砂質土 2層に類似、ロームブロック混入
- 5 にぶい黄褐色砂質土 2cm大までのローム粒15%混入
- 6 にぶい黄褐色砂質土 3cm大までのロームブロック10%混入
- 7 黒褐色砂質土 ロームブロック10%のほか炭化物、灰混入
- 8 焼土 橙色、焼けてカリカリとなる
- 9 黒褐色砂質土 5cm大までのロームブロックが50%混入
- 10 暗赤褐色砂質土 焼土50%混入
- 11 黒褐色砂質土 As-C、ローム粒、炭化物混入
- 12 9層に類似 下位に10層が斑混

第104図 17号住居跡遺構図(3)

第4節 古墳時代後期の遺構と遺物



第105図 17号住居跡遺物図(1)



第106図 17号住居跡遺物図(2)

18号住居跡（第107～110図 PL 17・18・60）

位置 3区、39ST-20、49ST-1グリッド 重複関係 なし 形状 方形 規模 東西4.25m、南北4.20m、壁高40cm 面積 17.85m² 主軸方位 N76° E

覆土 21層に分けた。人為埋没の可能性が高く、細かに分層した。表土を除けば、いずれも厚さ5～10cmと薄い。各層ともに大粒のロームが含まれるなど類似している。また、所々に焼土、炭化物も混入している。21層は、ロームブロックと黒褐色砂質土の混土による貼床材である。

カマド 東壁の中央部と西壁の中央部にそれぞれ1基ずつがある。東カマドが古く、西カマドが新しい。東カマドは、壁を境にして燃焼部と煙道が作られているが、燃焼部は作り替えのために削平されていて煙道を残すだけである。煙道は長さ55cm、幅36cm、焼け方は弱い。屋内に散在する石をもとに復元すると、推定全長1m、安山岩を芯にして灰白色粘土を貼付した作りで、焚口には面取りをした砂岩を据えていたことがわかる。西カマドは、全長160cm、焚口は鳥居状の石組みで最大幅25cm、両方の袖口に板状をした安山岩が据えられている。天井と袖は3層と5層で作られ、3層の状態からすると天井の厚さは10cm、天井、袖とも内側は赤く焼け、一部は剥落して4層に混入している。燃焼部内には、棒状をした安山岩の支脚が残る。

柱穴 4本主柱穴である。長軸・短軸・深さは、P1が28・21・70cm、P2が20・18・76cm、P3が26・21・46cm、P4が25・18・71cmである。柱間は、P1とP2が175cm、P2とP3が152cm、P3とP4が168cm、P4とP1が168cmである。P2とP3は、底面に柱の跡らしい鉄分の凝集した跡がある。

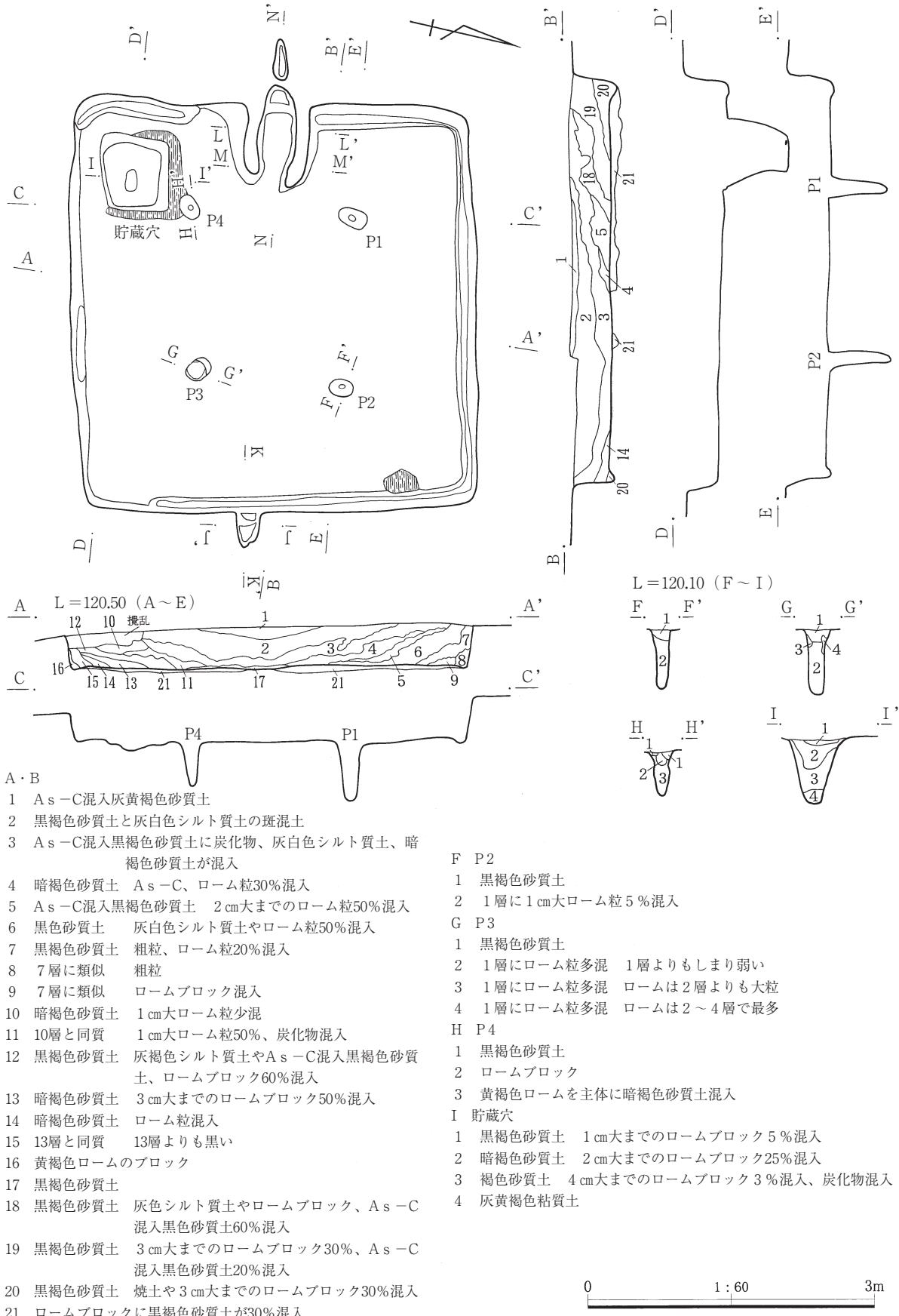
周溝 幅10cm、北が南よりも深く、各辺で深さに違いがある。

貯蔵穴 南東隅と南西隅の2基がある。それぞれがカマドに対応するもので、南東隅のものが古く、貼床の下で検出された。長軸70cm、短軸68cm、深さ78cmの方形である。人為的に埋められたようで、覆土に含まれていたロームがブロック状になっている。南西隅のものは、P4と壁との間1m四方を仕切った中にある。北から南の縁には、灰白色をした粘土の帯が貼られている。中は、東西80cm、南北70cmで床よりも一段掘り下げ、さらに、この中に長軸66cm・短軸56cm・深さ66cmの土坑が掘られている。掘り方は二重で、3～5cmほどの段差が上蓋をするためのものである。北側の壁は外反しているが、残る3辺は直立している。使い勝手の点で、カマド側から出し入れをしやすくするための工夫である。底面には暗色帯が溜まっていたが、これも工夫の跡で、防水のために壁に貼っていたものであろうか。

床面 主柱穴をむすんだ内側は、特に堅く2面になっていた。壁際は、内側に比べると軟らかく、わずかに高い。ここに上物があつたことを連想させる。掘り方は、薄い貼床を剥ぐ程度で、ほかには北西隅と北東隅に浅い土坑がある。中央部では、鋤跡のような小さな波形のくぼみが集中している。間仕切り溝は、東壁で2本が検出されている。北側のものは、断面でローム混じりの土の中に縦に黒土の筋が1条観察されている。間仕切り溝に伏せられていたのは、丸太ではなく板であったことが分かる。調査時の記録には、厚さが2cm前後とある。掘り方は、四隅に土坑状のものがあく程度である。その土坑も浅く、はっきりとしたものではない。住居跡の中央部にあいたものを見ると、鋤の跡らしい小さな波形が連続している。

遺物と出土状態 遺物量が少なく、甕など大型の個体も少ない。1、2の杯、3の小型甕は、カマドまわりの北西隅から出土しているが、やや位置が高い。壁の上から滑り落ちたか、外からの流れ込みである。4～6の甕は、床に近い。ただし、4の甕は、17号住居跡から出土した破片と接合している。7の甗は、南西隅の貯蔵穴からの出土である。8の手づくねは、かまどの右袖口で出土した。9の焼土塊は、床直である。非掲載は、土師器327点、縄文2点、石器5点である。

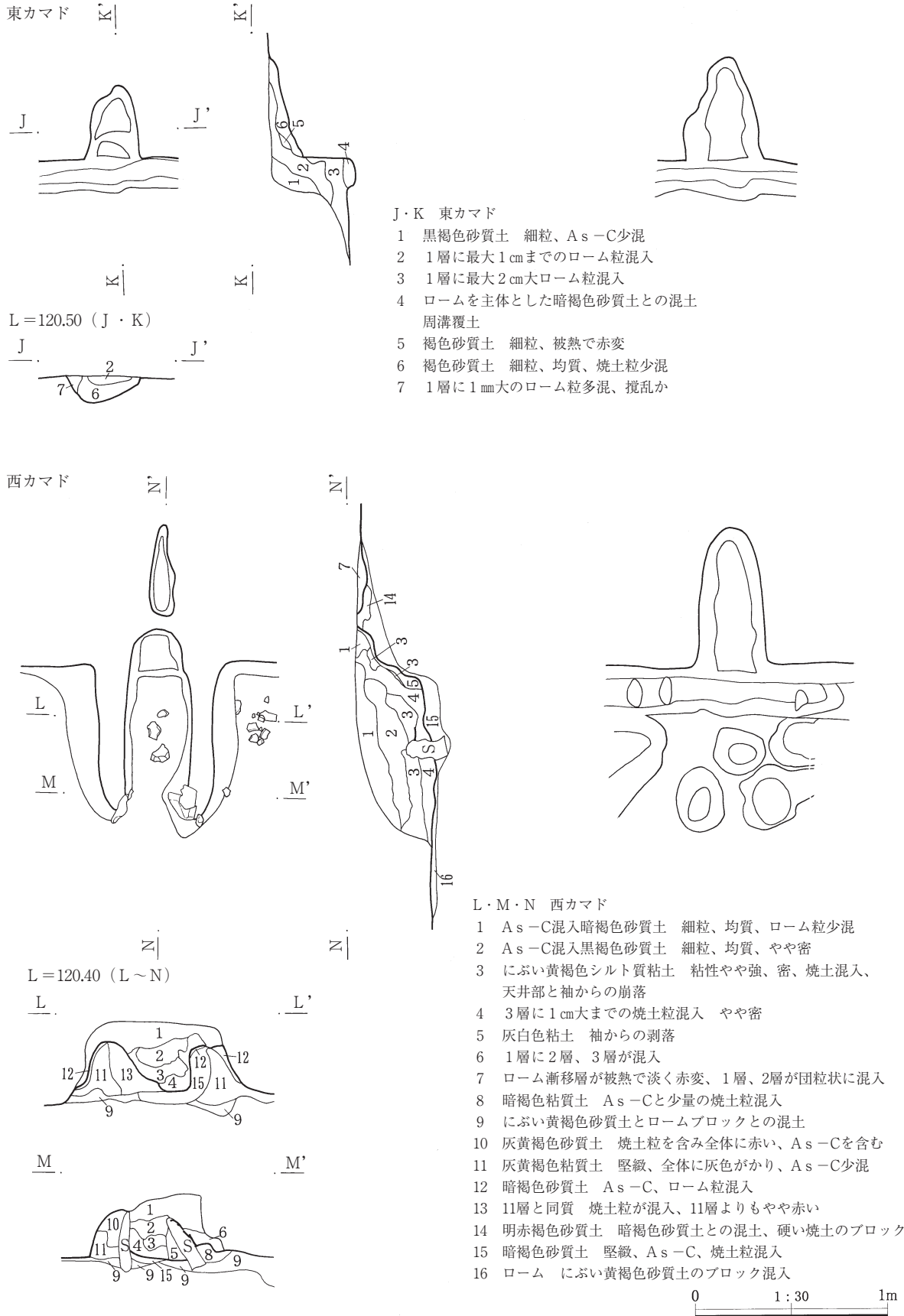
所見 古墳時代後期の住居跡である。



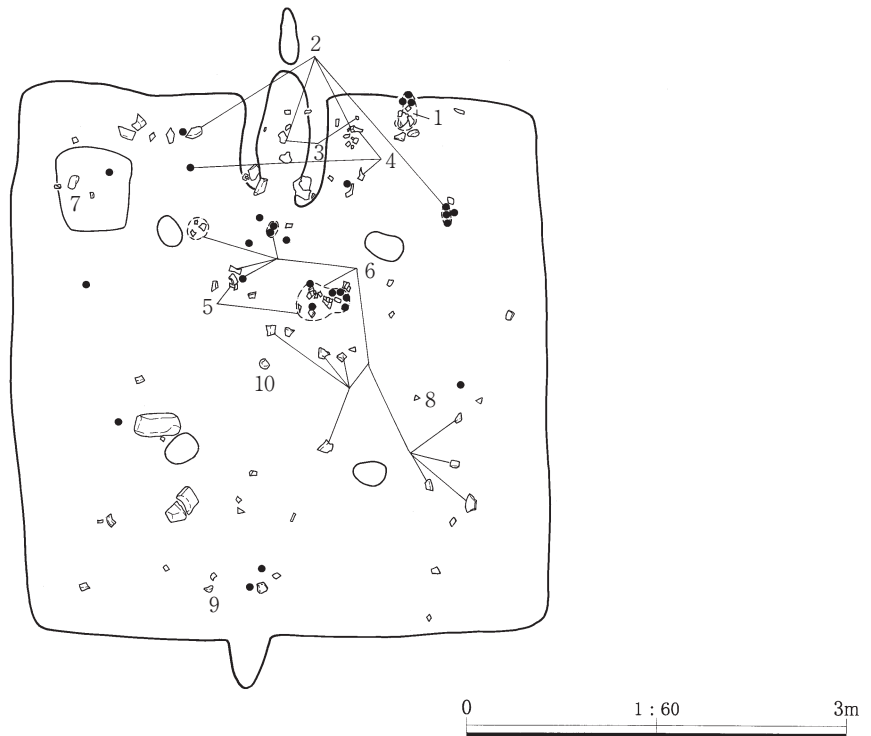
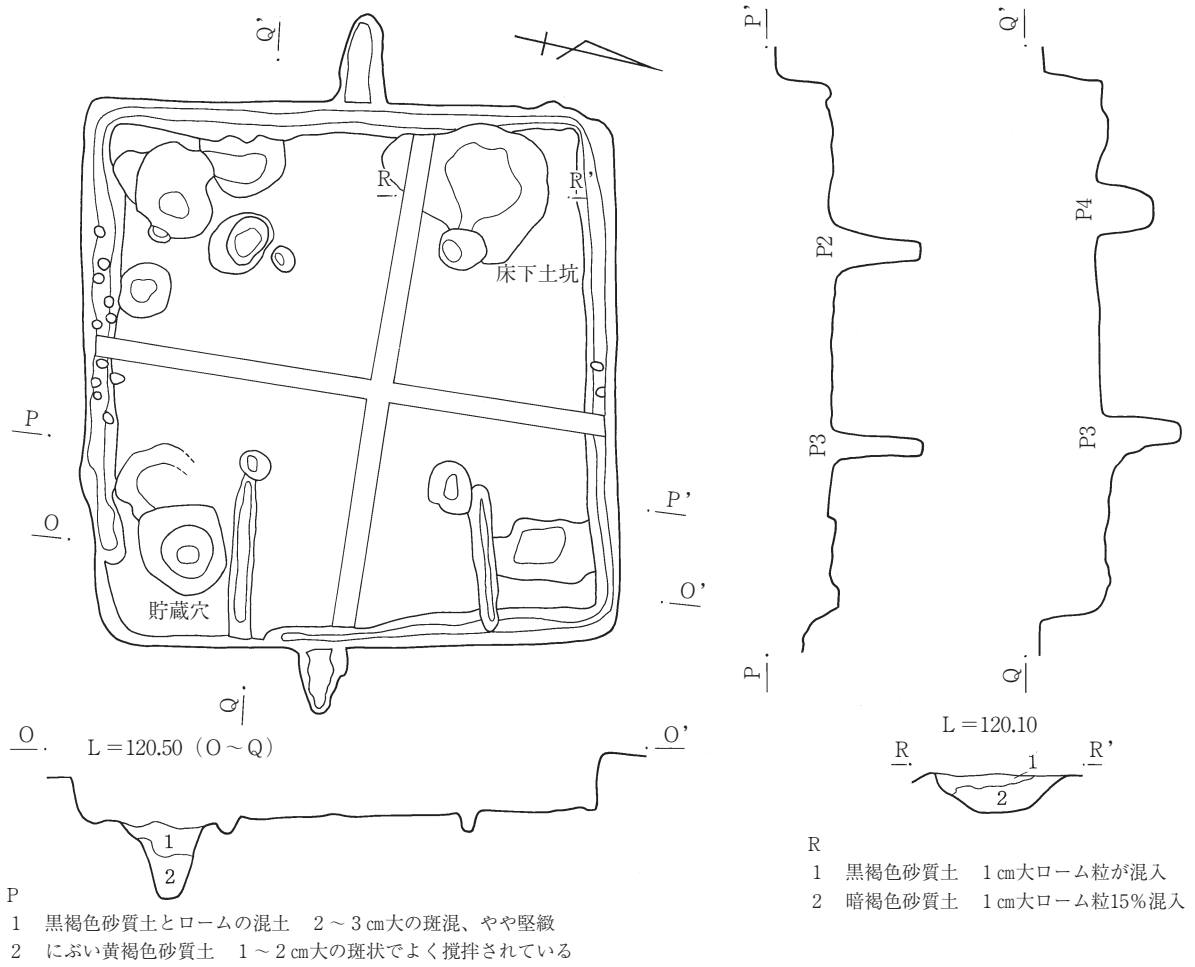
- A · B
- 1 A s - C混入灰黄褐色砂質土
 - 2 黒褐色砂質土と灰白色シルト質土の斑混土
 - 3 A s - C混入黒褐色砂質土に炭化物、灰白色シルト質土、暗褐色砂質土が混入
 - 4 暗褐色砂質土 A s - C、ローム粒30%混入
 - 5 A s - C混入黒褐色砂質土 2 cm大までのローム粒50%混入
 - 6 黒色砂質土 灰白色シルト質土やローム粒50%混入
 - 7 黒褐色砂質土 粗粒、ローム粒20%混入
 - 8 7層に類似 粗粒
 - 9 7層に類似 ロームブロック混入
 - 10 暗褐色砂質土 1 cm大ローム粒少混
 - 11 10層と同質 1 cm大ローム粒50%、炭化物混入
 - 12 黒褐色砂質土 灰褐色シルト質土やA s - C混入黒褐色砂質土、ロームブロック60%混入
 - 13 暗褐色砂質土 3 cm大までのロームブロック50%混入
 - 14 暗褐色砂質土 ローム粒混入
 - 15 13層と同質 13層よりも黒い
 - 16 黄褐色ロームのブロック
 - 17 黒褐色砂質土
 - 18 黒褐色砂質土 灰色シルト質土やロームブロック、A s - C混入黒色砂質土60%混入
 - 19 黒褐色砂質土 3 cm大までのロームブロック30%、A s - C混入黒色砂質土20%混入
 - 20 黒褐色砂質土 焼土や3 cm大までのロームブロック30%混入
 - 21 ロームブロックに黒褐色砂質土が30%混入

- F P2
- 1 黒褐色砂質土
 - 2 1層に1 cm大ローム粒5%混入
- G P3
- 1 黒褐色砂質土
 - 2 1層にローム粒多混 1層よりもしり弱い
 - 3 1層にローム粒多混 ロームは2層よりも大粒
 - 4 1層にローム粒多混 ロームは2~4層で最多
- H P4
- 1 黒褐色砂質土
 - 2 ロームブロック
 - 3 黄褐色ロームを主体に暗褐色砂質土混入
- I 貯蔵穴
- 1 黒褐色砂質土 1 cm大までのロームブロック5%混入
 - 2 暗褐色砂質土 2 cm大までのロームブロック25%混入
 - 3 褐色砂質土 4 cm大までのロームブロック3%混入、炭化物混入
 - 4 灰黄褐色粘質土

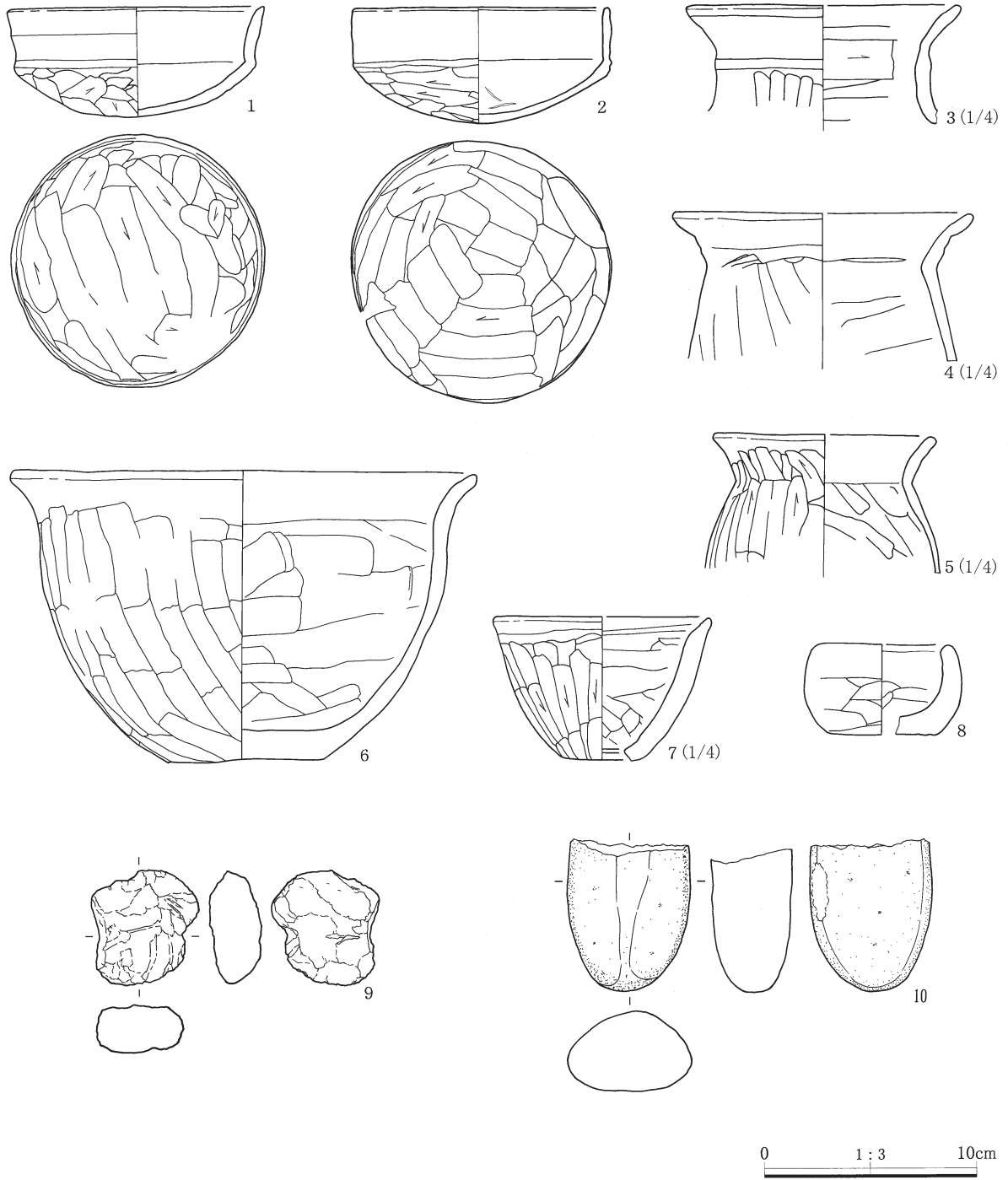
第107図 18号住居跡遺構図(1)



第108図 18号住居跡遺構図(2)



第109図 18号住居跡遺構図(3)・遺物分布図



第110図 18号住居跡遺物図



18号住居跡調査状況



22号住居跡調査状況

第4章 検出された遺構と遺物

23号住居跡（第111～113図 PL21・22・63）

位置 4区、50AB-11・12グリッド、土地改良で床面の近くまで深く削平されている。**重複関係** なし

形状 方形 **規模** 東西4.50m、南北4.20m、壁高10cm **面積** 18.90m² **主軸方位** N56° E

覆土 7層に分けた。褐色、暗褐色、黒褐色と同質の砂質土で、細かに分層されている。厚さ5～10cm、カマドの状態や遺物の出土状態からすると自然埋没である。6層、7層は、掘り方の貼床材である。

カマド 東壁の中央部にある。壁を境にして燃烧部と煙道を作る構造ではあるが、壁外にあった煙道は全て削平されていて燃烧部を残すだけである。長さ70cm、焚口の幅35cm、灰白色シルト質土を主要な材料にして作られている。良好な遺存状態であったらしく、焚口のあたりには多量の焼土が残され、その上面では崩落したと思われる長胴甕が割れて出土している。焼土は掻き出したのか、それとも袖が検出した範囲よりはさらに伸びていたのか、袖口よりも手前にまで広がる。これに対して燃烧部の奥は、あまり焼けていない。また、左の袖口寄りの石は、大きさから見て袖石として使われていた可能性がある。掘り方は、カマドに相当する部分が浅い円形の土坑になるという、この集落では稀な例である。土坑は、歪んでいるが直径は1m前後、深さ12cmである。ロームを掘り残して芯材にした様子はなく、土坑の中はロームを多量に含んだ土で充てんされている。しかし、地業に相当するような、特に固く締められていたという様子ではない。

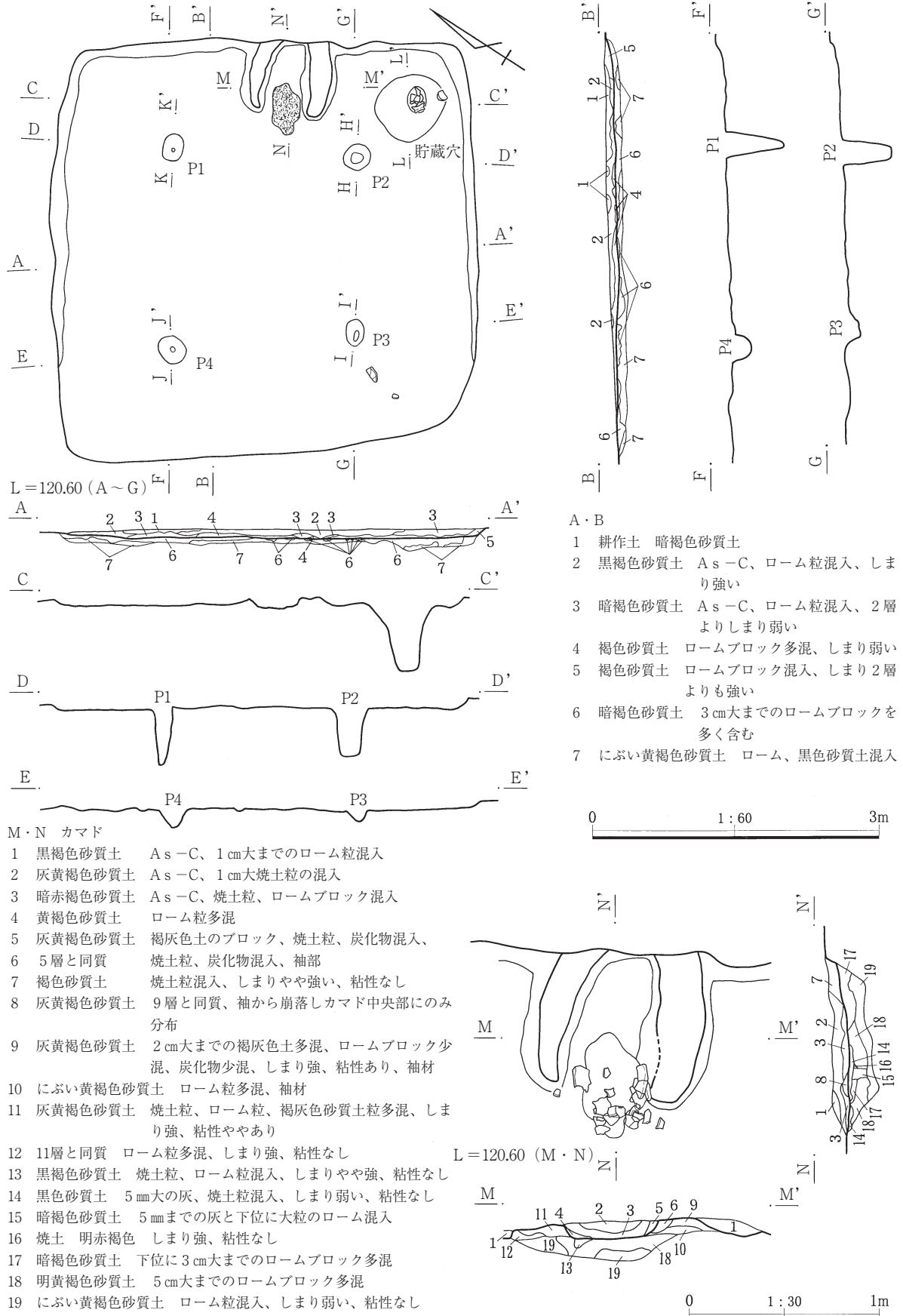
柱穴 4本主柱穴である。長軸・短軸・深さは、P1が29・22・55cm、P2が28・26・50cm、P3が28・20・12cm、P4が31・26・20cmである。柱間は、P1とP2が190cm、P2とP3が186cm、P3とP4が190cm、P4とP1が210cmである。P1とP2は、埋め土が地山のロームと非常に良く似ていて床面では検出することができず、半截してはじめて位置とその状態が判明した。それでも、底面については追加の掘り方調査をして、当初から見てさらに10cm以上も深くなった。掘って、すぐに埋め戻したことを示しているのだろう。また、P1は、覆土の中位に長さ15cmの礫があり、礎石ではないが壁とのすき間に詰め込んで、柱の角度を調整したものか、あるいは固定するためのものと見られている。**周溝** なし

貯蔵穴 南東隅にある。長軸72cm・短軸64cm・深さ68cmの円筒形である。周りには、南側を除いてロームの帯が付けられている。ロームの帯は、穴の縁からは10cm離れていて、わずかではあるが床よりも1～2cm高い。床と段差をつけて、蓋をしていた跡と見られる。中からは、2の杯と5の甕の破片が出土している。2は穴の縁にかかり、蓋の上に置かれていたものが滑り込んだという状態である。

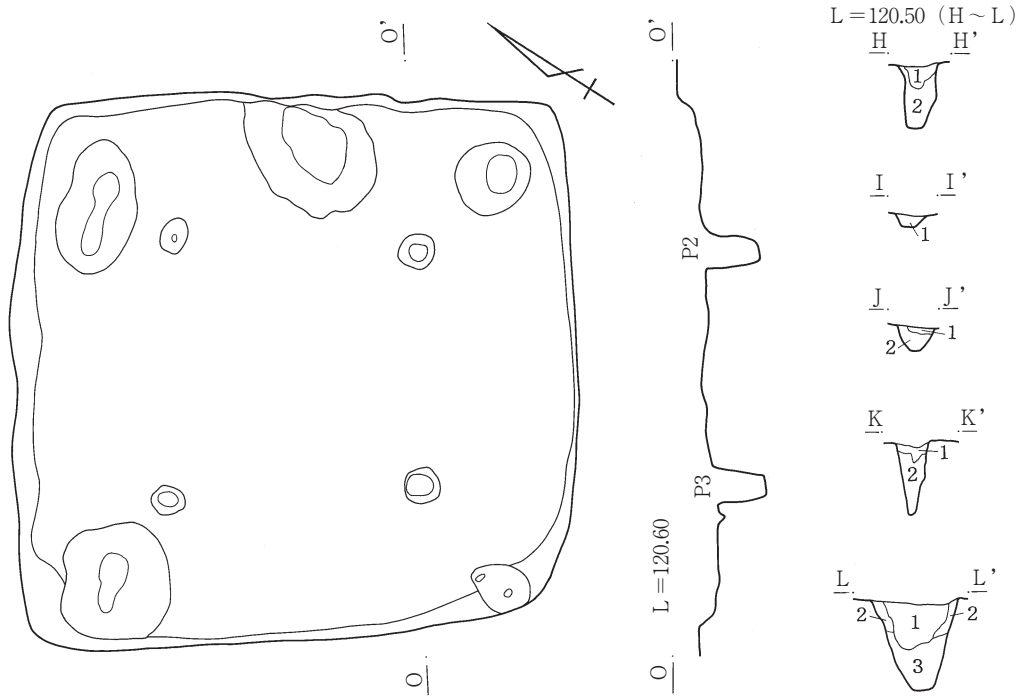
床面 6層と7層が貼り床材であるが、硬化面は薄くて掘り下げたロームの上に薄い膜を貼ったような状態である。全体の掘り込みは浅く、北壁の両隅が円形状の浅い土坑状になる。深さは、いずれも10cm弱である。南壁中央部にある落ち込みは、入口に関係した跡と見られている。長軸が160cm、短軸が90cmの小判型で、ローム層中でも固いAs-OK上面まで掘り込まれている。特に、ピットなどはあいていない。

遺物と出土状態 カマドの焚口周辺から住居跡の北東隅に多い。検出面から床までが10～15cmと浅いため、攪乱がない状態の原位置と思われる。西側半分は、削平の影響なのか遺物が少ない。焚口では、甕4点、杯2点が出土した。8の甕は至近距離で接合しているが、7の甕は南北3mの範囲にあったものが接合している。貯蔵穴の周囲では、1～4の杯、6の甕が出土している。6の甕は、床に伏せて置かれ、壁際の利用状況を示している。1～4の杯も出土している。非掲載は、土師器111点、縄文52点である。

所見 古墳時代後期の住居跡である。



第111図 23号住居跡遺構図(1)



H P2

- 1 黒褐色砂質土 As-C、ローム粒少混
- 2 灰黄褐色砂質土 1cm大のローム粒混入、1層よりしまり弱い

I P3

- 1 黒褐色砂質土 As-C、ロームブロック少混

J P4

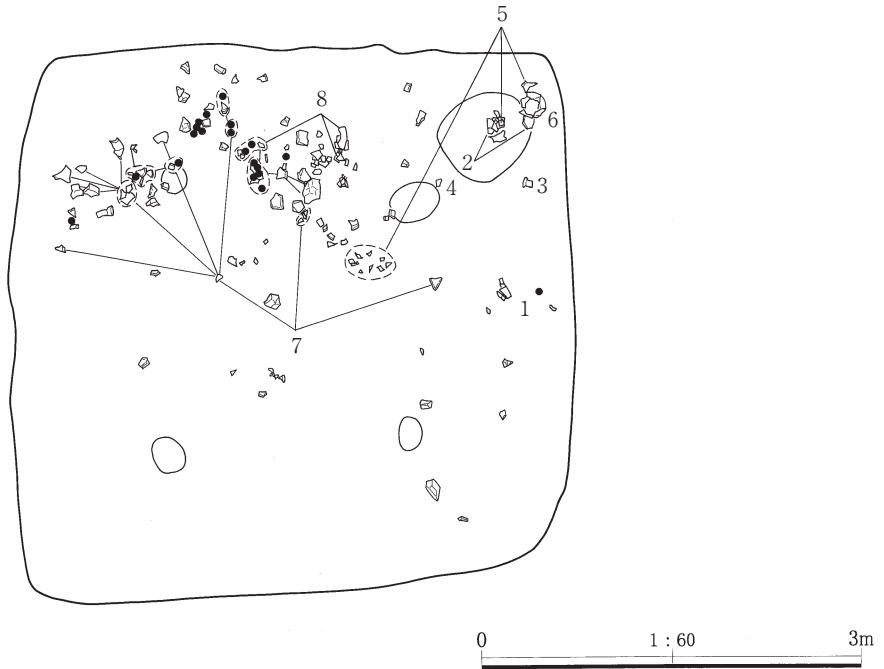
- 1 黒褐色砂質土 Hの1層に同じ
- 2 灰黄褐色砂質土 ローム粒、白色粒混入、Hの2層に同じ

K P1

- 1 黒褐色砂質土 Hの1層に同じ
- 2 褐色砂質土 ローム粒、白色粒混入

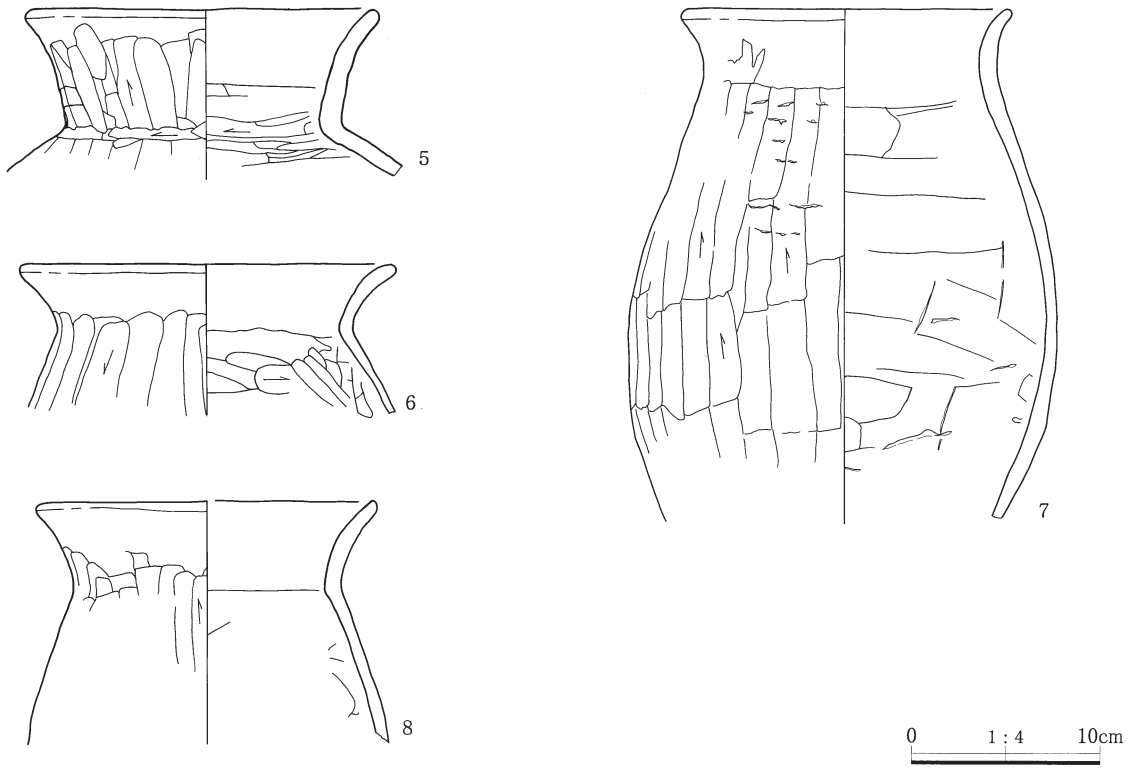
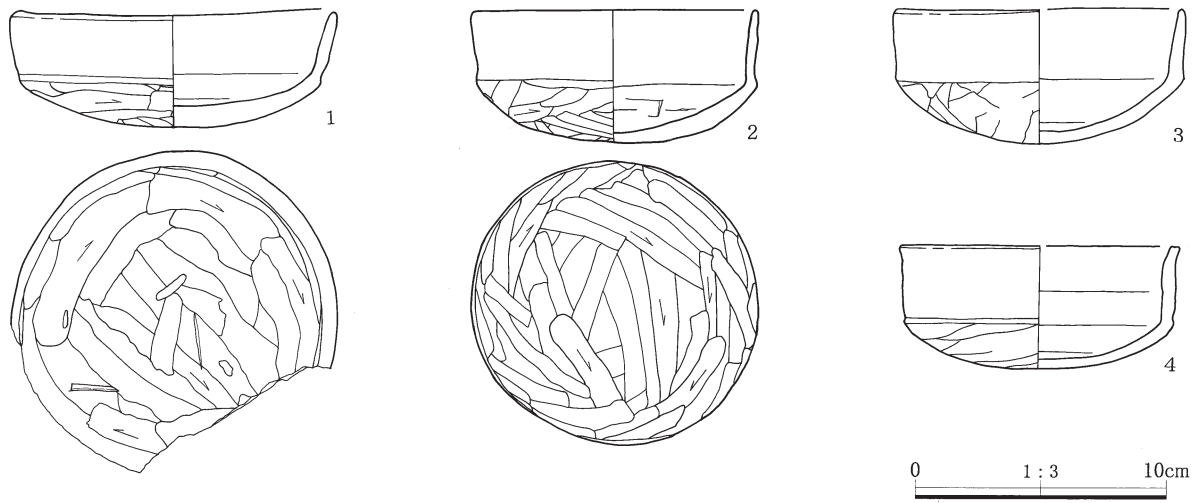
L 貯蔵穴

- 1 におい黄褐色砂質土 As-Cとローム粒少混
- 2 におい黄褐色砂質土 ロームブロック多混、As-C混入
- 3 褐色砂質土 As-C、炭化物少混



第112図 23号住居跡遺構図(2)・遺物分布図

第4節 古墳時代後期の遺構と遺物



第113図 23号住居跡遺物図

3 掘立柱建物跡

概要 1区で1棟、3区で2棟を検出した。それぞれが、住居跡群の縁辺に単独で点在している。この位置関係が、住居跡に対して数軒に1棟というような比率と建物跡の共有的な性格を示しているのであろう。その性格としては、規模の大小や柱穴の特徴から住まいと納屋の2つが浮かんでくる。南面する東西棟の3号が住まい、2号と3号が納屋か倉庫ではないだろうか。

1号は、3区を中心とした住居跡群から東に離れている。台地の中でも、3区からするとやや低くなり、南への傾斜が強くなる箇所である。1号溝は、建物跡の南辺を区画するか排水溝とも指摘されている。2号と3号は、台地の中では中央部の平坦面にあり住居跡にも近い。特に2号は、住居跡に囲まれているようで、2号畠にも隣接している。「**堅穴住居跡+平地建物跡+畠**」の関係で見ることが可能で、**渋川市黒井峯遺跡**のような集落の景観をここでも推定することができる。

検出状況 ローム漸移層前後で確認をした。

構造 側柱式のみで、総柱式はない。規模では、1号と2号がよく似ている。ただし、柱間は三者三様である。2号は、桁行の真ん中にある柱が外側に張り出している。それに対して1号の方は、間の柱そのものがない。

1号	梁間1間×桁行1間	東西2.50m、	南北2.90m	東西棟	N75° W
2号	梁間2間×桁行2間	東西2.90m、	南北2.90m	南北棟	N109° W
3号	梁間1間×桁行2間か	東西3.25m以上、	南北4.95m	東西棟	N108° W

柱穴の特徴 一辺が50~70cmを越す方形のものと、直径が30cm前後の浅い円形のものとに分けられる。3号が前者の例で、柱間の広いことから大型の建物跡であることが分かる。隅にあたる柱穴は、柱列に対して斜交、「ハ」の字に配置されている。台地の中では、見晴らしのきいた中央部にあって中心となる建物であろう。一方、円形のは、住居跡の柱穴程度の規模で掘り込みの浅いことが大きな特徴となっている。軽易な建物を推定させる。住居跡に伴う納屋といったところである。

出土遺物 出土した遺物はない。

重複関係 ほかの遺構と重複しているものはない。

時期 出土した遺物がなく、重複もないことから決め手を欠いている。古墳時代のものと判断したのは、隣接している住居跡との位置関係、柱穴の掘り方が似ていることの2点である。

1号掘立柱建物跡（第114図 PL46）

位置 1区、39C-13グリッド、As-BやAs-B混土を覆土とする遺構面で検出した。南に平行して1号溝がある。さらに南には1号~4号道がある。溝は、建物跡を区画するという見方と排水用という2つの見方がある。

重複関係 なし **主軸方位** N75° W

形態 東西棟、梁間1間、桁行2間、東西2.50m、南北2.90mである。柱穴の長軸・短軸・深さは、P1が26・22・18cm、P2が35・32・19cm、P3が34・24・23cm、P4が29・25・46cm、P5が28・27・40cm、P6が26・24・30cmである。南桁間のP4~P6の3本が北側よりも10~20cm、一様に深い。柱間は、P1とP2が150cm、P2とP3が150cm、P3とP4が260cm、P4とP5が115cm、P5とP6が175cm P6とP

1が255cmである。梁間は、桁行の倍近い長さがある。柱穴の覆土は、暗褐色砂質土でAs-Cのほかにもロームブロックが混入している。締まりは弱い。

出土遺物 なし

所見 柱穴の特徴からすれば軽易な建物跡である。

2号掘立柱建物跡（第114図 PL46）

位置 3区、39KL-17グリッド、9号、10号、12号などの住居跡に囲まれている。2号畠は、北東5mの所にある。

重複関係 なし 主軸方位 N109° W

形態 南北棟、梁間2間、桁行2間、東西2.90m、南北2.90mである。柱穴の長軸・短軸・深さは、P1が28・27・14cm、P2が24・21・10cm、P3が25・25・16cm、P4が23・20・12cm、P5が25・25・8cm、P6が19・14・5cm、P7が23・23・4cm、P8が20・19・8cmである。柱間はP1とP2が140cm、P2とP3が145cm、P3とP4が150cm、P4とP5が140cm、P5とP6が135cm、P6とP7が145cm、P7とP8が140cm、P8とP1が145cmである。覆土は、南側のP3からP5の3本が地山として一般的なAs-C混入黒褐色砂質土であるのに対して、北側の5本はローム漸移層様の混土が主体である。

出土遺物 なし

所見 柱穴は、小型で浅い。竪穴住居跡に付設された建物跡である。

3号掘立柱建物跡（第115図 PL46）

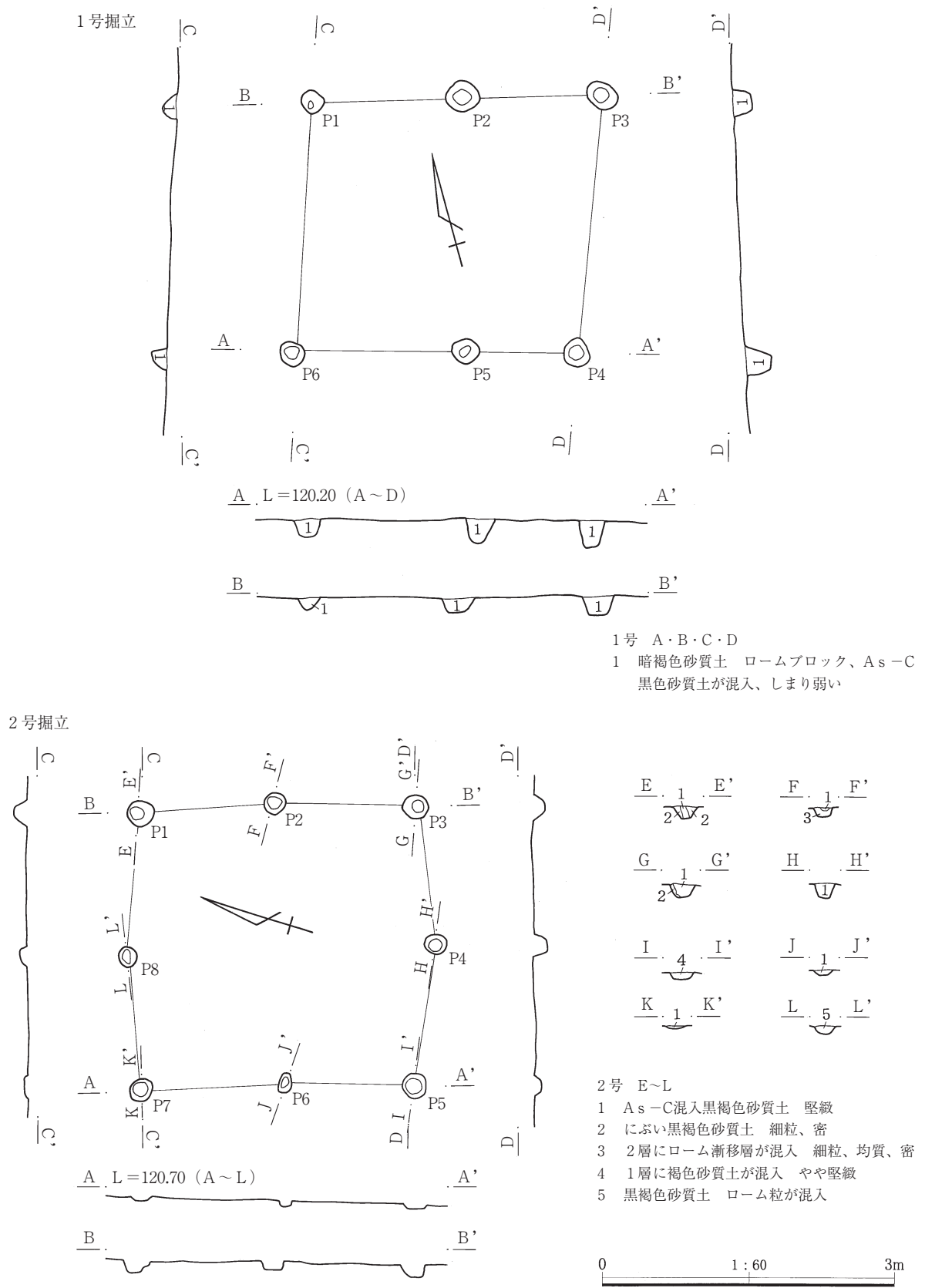
位置 3区、50FG-2・3グリッド、3区の中では西の端、南西側は調査区外である。近くには、19号～21号の古墳時代前期の住居跡、17号、18号といった古墳時代後期の住居跡がある。

重複関係 なし 主軸方位 N108° W

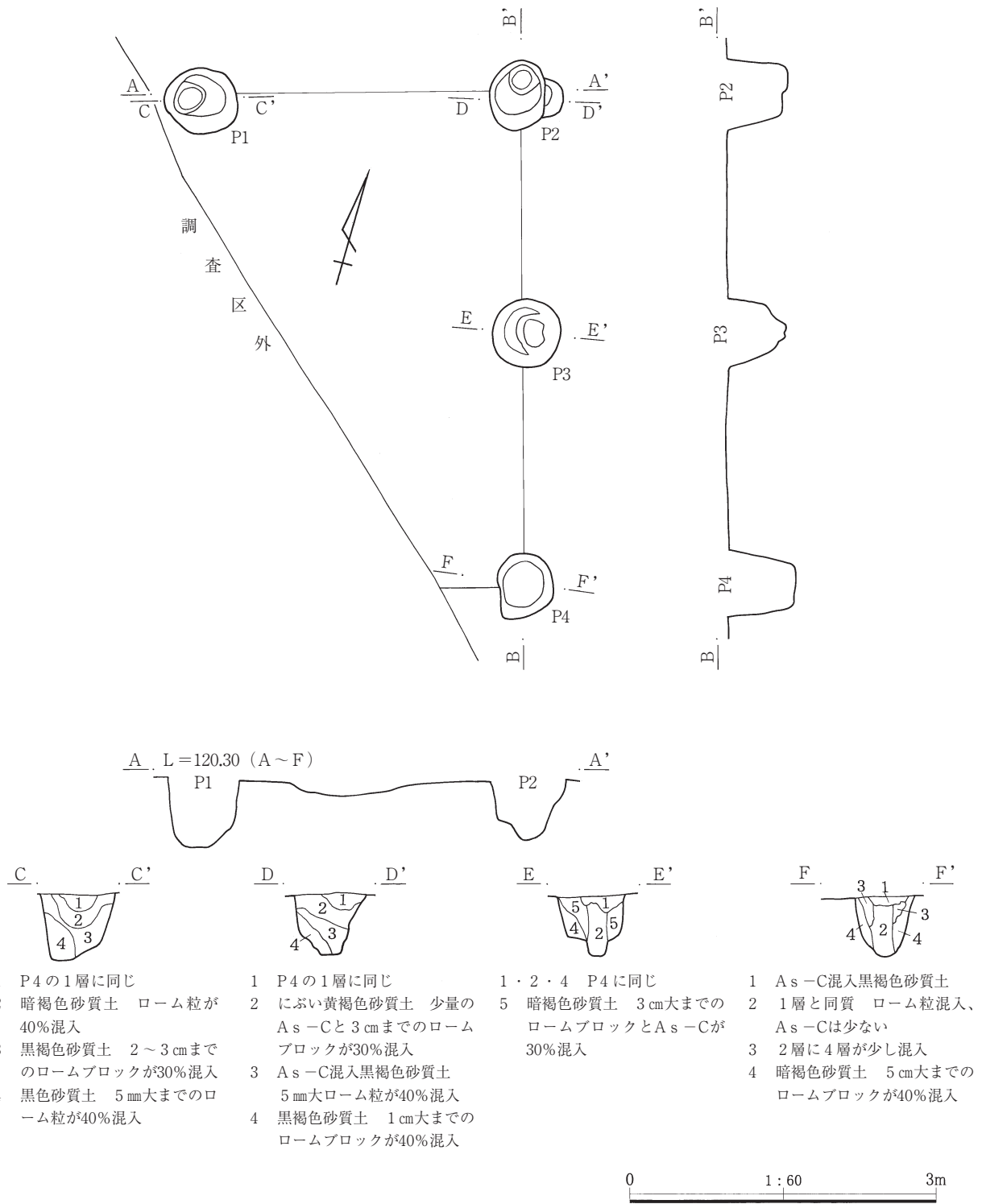
形態 東西棟、梁間1間、桁行2間以上、東西3.25m以上、南北4.95mである。柱穴の長軸・短軸・深さは、P1が73・64・65cm、P2が70・55・60cm、P3が69・68・60cm、P4が60・57・68cmである。柱間はP1とP2が325cm、P2とP3が250cm、P3とP4が245cmである。覆土は、黒褐色砂質土と暗褐色砂質土の混土で、さらにローム粒が混入する。P1とP2の底面には円形の硬化した箇所があって、柱の太さを20cm前後と推定することができる。P3とP4でも埋没土に柱痕の立ち上がりが見られる。柱とすれば太さは、先の2本と同様20cm前後である。また、建物の隅柱にあたるP2とP4は、柱穴の掘り方が柱列に対して斜交する、「ハ」の字の状態にある。

出土遺物 なし

所見 推定東西10m、南北5m、大型の建物跡である。



第114図 1・2号掘立柱建物跡遺構図



第115図 3号掘立柱建物跡遺構図

4 土坑

概要 5区で23号、24号の2基、2区で26号～29号の4基、3区で31号、32号の2基、4区で49号、50号の2基、合わせて10基を検出した。5区の2基は、1号古墳の石室掘り方の調査中に検出をした。後述するように、24号は古墳の築造に伴う祭祀の土坑である。2区のもの、性格を特定できるものはないが、隣接の住居跡との位置関係と覆土の様子から古墳時代と判断した。住居跡の様子からすると、前期にまでさかのぼる可能性がある。3区のもの、検出面ではしっかりとした様子ではあるが、中段以下になると壁がはっきりとしない。さらに、底面は一層はっきりとせず、凹凸があって倒木痕のようである。遺物も出土していない。位置関係を理由にして、住居跡のまわりにある人為的な土坑と判断した。4区のもの、竪穴住居跡の貯蔵穴である。土地改良による切土から削平をまぬがれて、かろうじて貯蔵穴だけが残ったものである。これにより住居跡は、3区と同じような状況が北へと続いていることが分かる。

23号土坑（第116図 PL28）

位置 5区、60M-3グリッド、南半分に1号古墳の石室掘り方北東隅が重複している。

形状 円形

規模 長軸150cm、短軸125cm以上、底面は平坦で、検出面からの深さは20cmである。

覆土 黒褐色砂質土で埋まり、下位になるほど暗褐色砂質土やローム漸移層が斑状に混入している。全体に硬く締まっている。As-Cの混入はない。

遺物 出土した遺物はない。

時期 古墳時代としたが、覆土に見られる特徴からは縄文時代の可能性もある。

所見 縄文時代とすれば、住居跡に近いことから貯蔵穴であろう。古墳時代ならば、重複はしているものの古墳と関係したものであろう。

24号土坑（第116図 PL28）

位置 5区、60M-2グリッド、1号古墳の石室から東にわずか50cmの所で検出された。

形状 円形

規模 長軸87cm、短軸84cm、底面は平坦で、検出面からの深さは20cmである。

覆土 As-Cを混入する黒褐色砂質土で埋め戻されている。

遺物 滑石製模造品の有孔円板1点（調査後、行方不明）が覆土中から出土した。

時期 1号古墳と同時期、7世紀代である。

所見 1号古墳築造に伴う祭祀土坑である。

26号土坑（第116・117図 PL29・70）

位置 2区、39L-12・13グリッド

形状 楕円形、上面は、一見してわかる楕円形であったが、西側だけは壁の中段以下がオーバーハングしている。自然崩落ではなく、壁がしっかりとしていることからムロを意図した人為的な掘り込みと判断した。底面でも、南北の隅だけがさらに一段深く掘り込まれている。間口は50cm前後、奥行きは最大20cmである。

規模 長軸250cm、短軸175cm、底面は平坦で、検出面からの深さは73cmである。

覆土 A s - Cが混入した黒褐色砂質土を4層に分けた。壁際の3層は壁が塊で崩落したような状態で、4層はローム粒が多く混入している。自然埋没である。

遺物 1層から土師器の甕30点、台付甕1点、須恵器の杯2点、縄文土器1点が出土した。いずれも細片で埋没に伴う混入であるが、この中から最上層で出土した須恵器蓋を掲載した。

時期 前期の可能性もある。

所見 隣接する住居跡に伴う土坑である。倒木痕も考えたが、中段以上の壁や安定した覆土の様子からの判断である。

27号土坑（第116図 PL29）

位置 2区、39N-14グリッド、調査区の北側の壁にかかって検出された。

形状 推定方形

規模 東西110cm、南北30cm以上、深さは48cmである。

覆土 A s - Cを混入する黒褐色砂質土で自然埋没。下位ほどロームブロックの混入量が多くなる。

遺物 出土した遺物はない。

時期 覆土に見られるA s - Cの混入状態から前期の可能性はある。

所見 住居跡に伴う屋外施設と考えられる。

28号土坑（第116図 PL29）

位置 2区、39P-14・15グリッド、北側は調査区の壁に掛かり、南半分を検出した。

形状 長方形、南側は攪乱されていたが、南東隅が残されていて形状を復元した。

規模 長軸155cm以上、短軸170cm、検出面からの深さは60cmである。

覆土 A s - Cを混入する黒褐色砂質土が上位にあり、下位は同質の土にロームブロックが多く含まれている。その中には、壁の一部と思われる4層のようなブロックもあり、人為的に埋没している可能性がある。

遺物 土師器の杯や甕の破片が32片出土していたが、掲載したものはない。

時期 覆土に見られるA s - Cの混入状態から、前期にさかのぼる可能性がある。

所見 住居跡に伴う屋外施設と考えられる。

29号土坑（第116図 PL29）

位置 2区、39O-12・13グリッド、南側は調査区の壁に掛かり、北半分を検出した。

形状 楕円形

規模 長軸110cm、短軸76cm、検出面からの深さは33cmである。

覆土 A s - Cを混入する黒褐色砂質土で埋没している。直下には倍以上の大きさの倒木痕があり、その中におさまり上面にできた窪みに溜まったような状態にも見える。倒木痕は、複雑に入り乱れた土層であるのに対して、ここでは均質であることから倒木痕とは区別して人為的なものと判断した。

遺物 出土した遺物はない。

時期 覆土に見られるA s - Cの混入状態から、前期にさかのぼる可能性がある。

所見 住居跡に伴う屋外施設と考えられる。

第4章 検出された遺構と遺物

31号土坑（第117図 PL30）

位置 3区、39M-17グリッド、5号溝が西側に重複している。

形状 不整形、検出はローム面で容易であったが、掘り進むほどに不安定となる。

規模 長軸118cm、最大短軸92cm、検出面からの深さは45cmである。

覆土 4層に分けた。倒木痕のようではあるが、反転した土層はない。混入する軽石の量に差があり、2時期に分けられる。1～3層が新期、4層が古期である。

遺物 土師器の甕が出土したが、小破片でもあり掲載はしていない。

時期 埋没土の様子から古墳時代とした。

所見 掘り方が、下位ほどはっきりとしない。その様子が断面によく現れている。形状の不安定さと覆土の様子から見て倒木痕の可能性はある。

32号土坑（第117図 PL30）

位置 3区、50A-1グリッド、南西3mに20号住居跡がある。

形状 方形

規模 長軸175cm、短軸135cm、底面は平坦で、検出面からの深さは20cmである。

覆土 軽石のほかに焼土が混入した、黒褐色砂質土で自然埋没している。焼土は、東側が多い。

遺物 石が1点出土したが掲載していない。

時期 覆土の様子から古墳時代後期か、それ以降である。

所見 20号住居跡の屋外施設と考えられる。焼土は、炭化物を伴わない。

49号土坑（第117図 PL34）

位置 4区、50A-8グリッド

形状 円形

規模 長軸55cm、短軸51cm、検出面からの深さは23cmである。

覆土 黒褐色砂質土で埋没している。

遺物 掲載していないが、土師器の甕胴部破片が出土した。

時期 古墳時代後期6世紀後半である。

所見 住居跡の貯蔵穴である。このまわりには、南北270cm、東西180cmの範囲に床面が残されていた。

50号土坑（第117図 PL34・35・70）

位置 4区、50C-9グリッド

形状 方形

規模 長軸68cm、短軸51cm、検出面からの深さは36cmである。

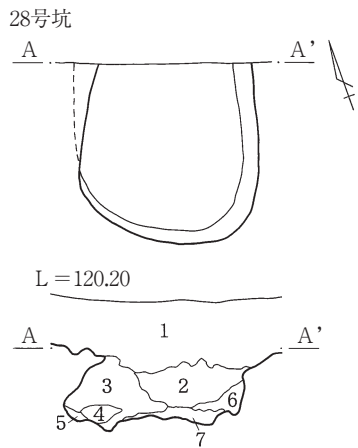
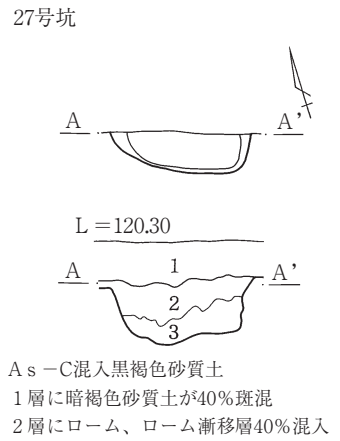
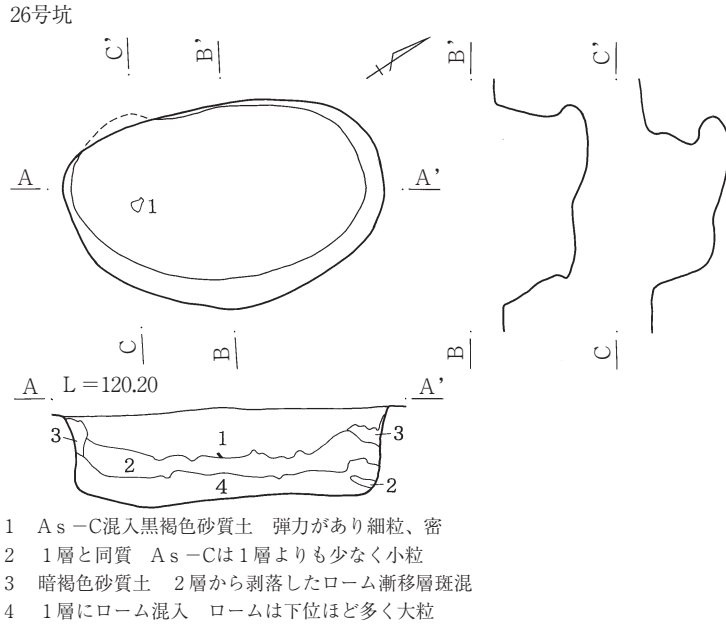
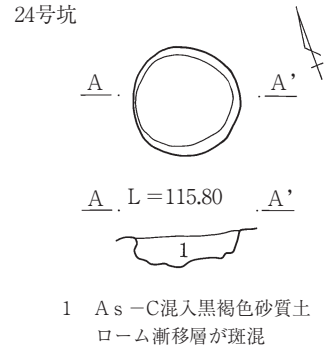
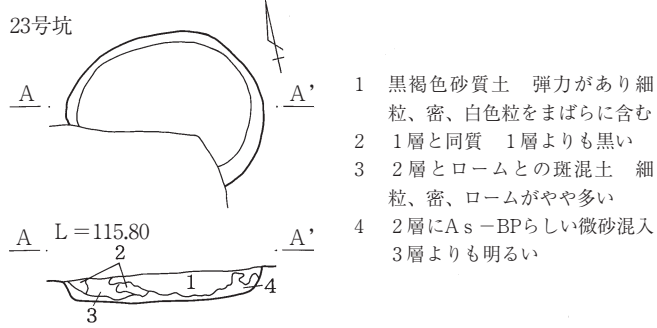
覆土 暗褐色砂質土で自然埋没している。炭化物が混入している。

遺物 土師器の甕（1）が出土した。掲載していないが、須恵器の杯の小破片が出土している。

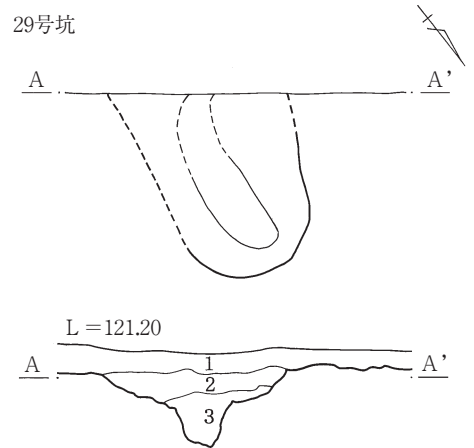
時期 甕の時期から見て、古墳時代後期6世紀後半である。

所見 住居跡の貯蔵穴である。

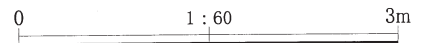
第4節 古墳時代後期の遺構と遺物



- 1 As-C混入黒褐色砂質土 1cm大のロームブロックが3%混入
 2 As-C混入暗褐色砂質土 5cm大までのロームブロック25%混入
 3 黒褐色砂質土 ロームブロック少量混入
 4 硬いロームブロックと崩れたロームの混土 にぶい黄褐色
 5 灰黄褐色砂質土 しまりが強く、硬い
 6 黒褐色砂質土 ロームブロック少量混入
 7 ロームブロックを主に黒褐色砂質土が混入

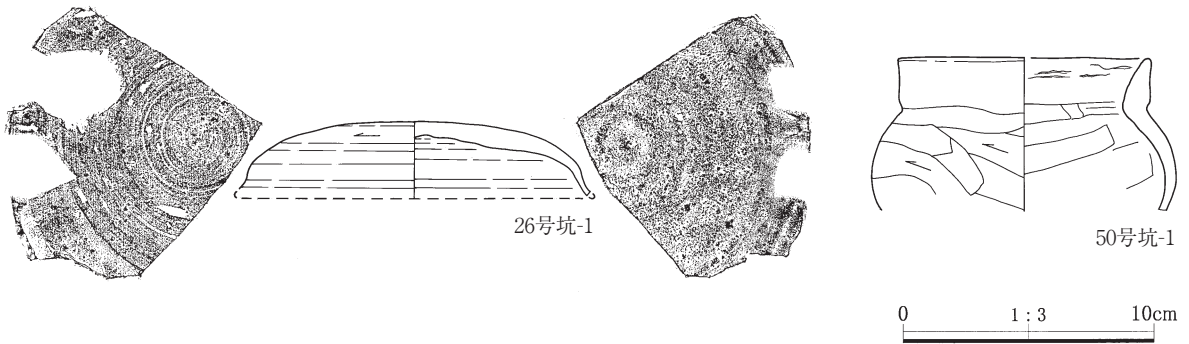
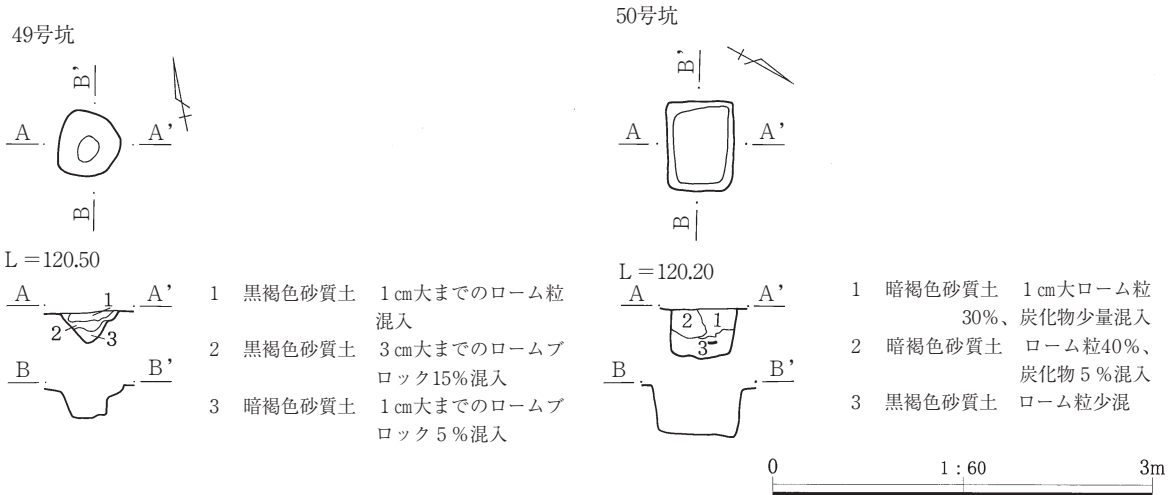
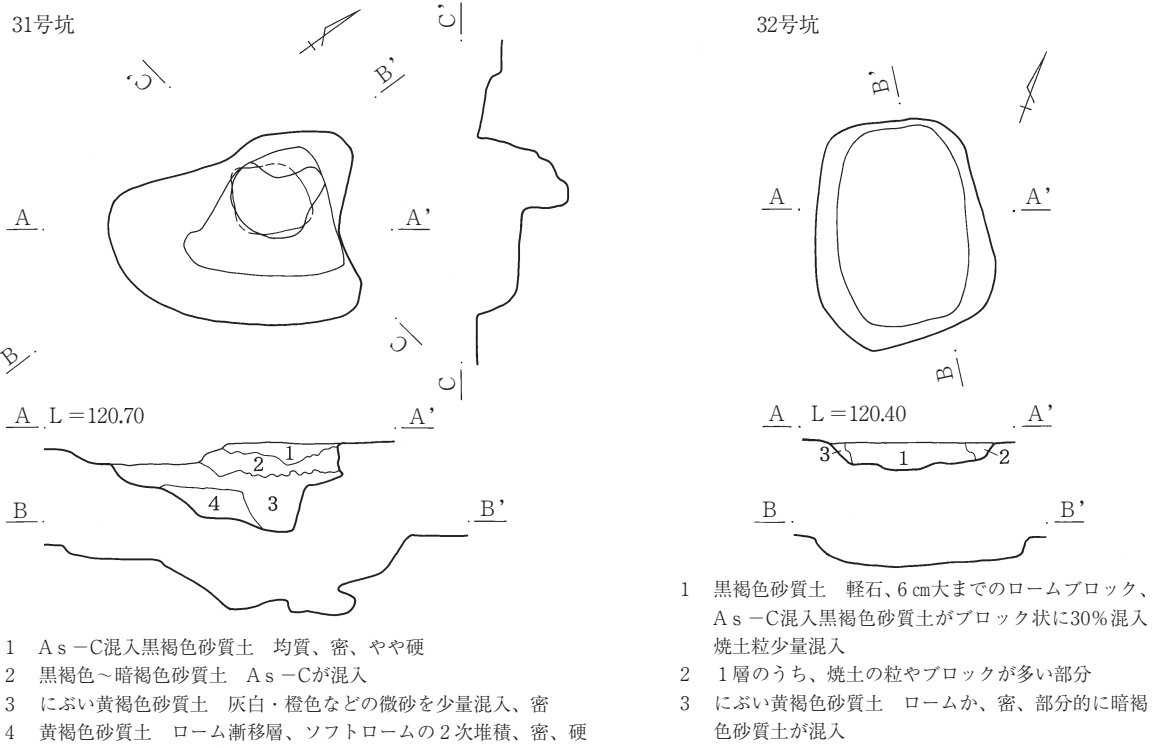


- 1 耕作による攪乱
 2 As-C混入黒褐色砂質土
 上層に耕作による攪乱がある
 3 1層と同質 1層よりも黒い
 暗褐色砂質土が50%混入



第116図 23・24・26・27～29号土坑遺構図

第4章 検出された遺構と遺物



第117図 31・32・49・50号土坑遺構図・26・50号土坑遺物図

5 古墳

1号古墳（第118～122図 PL47・48・72・73）

位置 5区 60K～O-1～4、標高116.20m、寺沢川に面した台地の西斜面中段にある。

重複関係 石室掘り方の北東隅で23号土坑に重複し、同じ掘り方の面で東に1mほど離れて同時期と思われる24号土坑が検出されている。24号土坑からは、調査後に紛失して行方不明となってしまったが、滑石製模造品の勾玉1点が出土していた。古墳の築造時に行われた祭祀跡と考えられる。

墳形 円墳、規模は直径19～20mである。

墳丘と外部施設 上面は、土地改良で整地面以下まで削平されている。整地面は、基本土層の5層中に想定されるが検出した標高116.20mよりも上である。盛り土は、断面Aの8層が相当する。攪乱の可能性もあるが、As-Cが混入する黒褐色砂質土に多量のロームが混ぜられている。葺石は、前庭に続く一部分だけか、あったとしても基壇の裾にめぐらせていた程度であったろう。

前庭 羨門の前は、南への緩い斜面になっている。大きく掘り下げられている様子はない。基壇のあたりから崩落してきた人頭大前後の石と、石に混在して供献した埴瓶1点、土師器の杯1点が破片で出土している。

周堀 西側から前庭にかけて検出した。断面はU字形、幅は最大で1.80m、北になるに従って細く、そして浅くなる。全体にめぐむ様子であるが、北から東は台地を削り出すか、めぐむとしても浅くなっているのではないだろうか。東側でトレンチを入れて確認した限りでは、はっきりとした掘り方は検出できなかった。前庭に近い南寄りの底面には、掘削痕が残されたままである。直径1m前後、土坑のように見えるのは、掘削の単位なのであろうか。必要な土量が確保されたので、整地することなく放置したままという状態である。覆土は、断続的に埋没している。7層、8層、9層は、As-Cを混入する黒褐色砂質土である。8層、9層は、人為的に埋め戻したようにも見える。7層の上面に残る複数の薄いロームは、盛り土が墳丘から断続的に流れ落ちたものであろうか。その後は6層が厚く堆積して、一気に埋没が進んだのであろう。

主体部の構造 粗粒輝石安山岩の自然石を使用した、南開口の両袖型横穴式石室である。開口方向は、S17°Wある。石室の規模は、掘り方からの推定で全長6.20mを測る。玄室は、長さ3.80mの短冊形、幅は奥壁で1.80mである。玄門の方が奥壁側よりも10cm前後狭い。西壁が構築の基準辺で直線的である。一方の東壁は弧を描くようである。壁面構成は、残されていた石からすると1段目が大振りで2段目以降が小さくなるらしい。1段目は横積、2段目以降小口積への変化が推定できる。裏込めは、卵大の玉石と砂利を混ぜている。人頭大くらいの石で被覆している。床面は、卵大から最大で拳大程度の玉石が敷き詰められていた。

羨道 掘り方の圧痕からの推定である。長さ2.40m、幅は1.10m前後で壁は平行する。

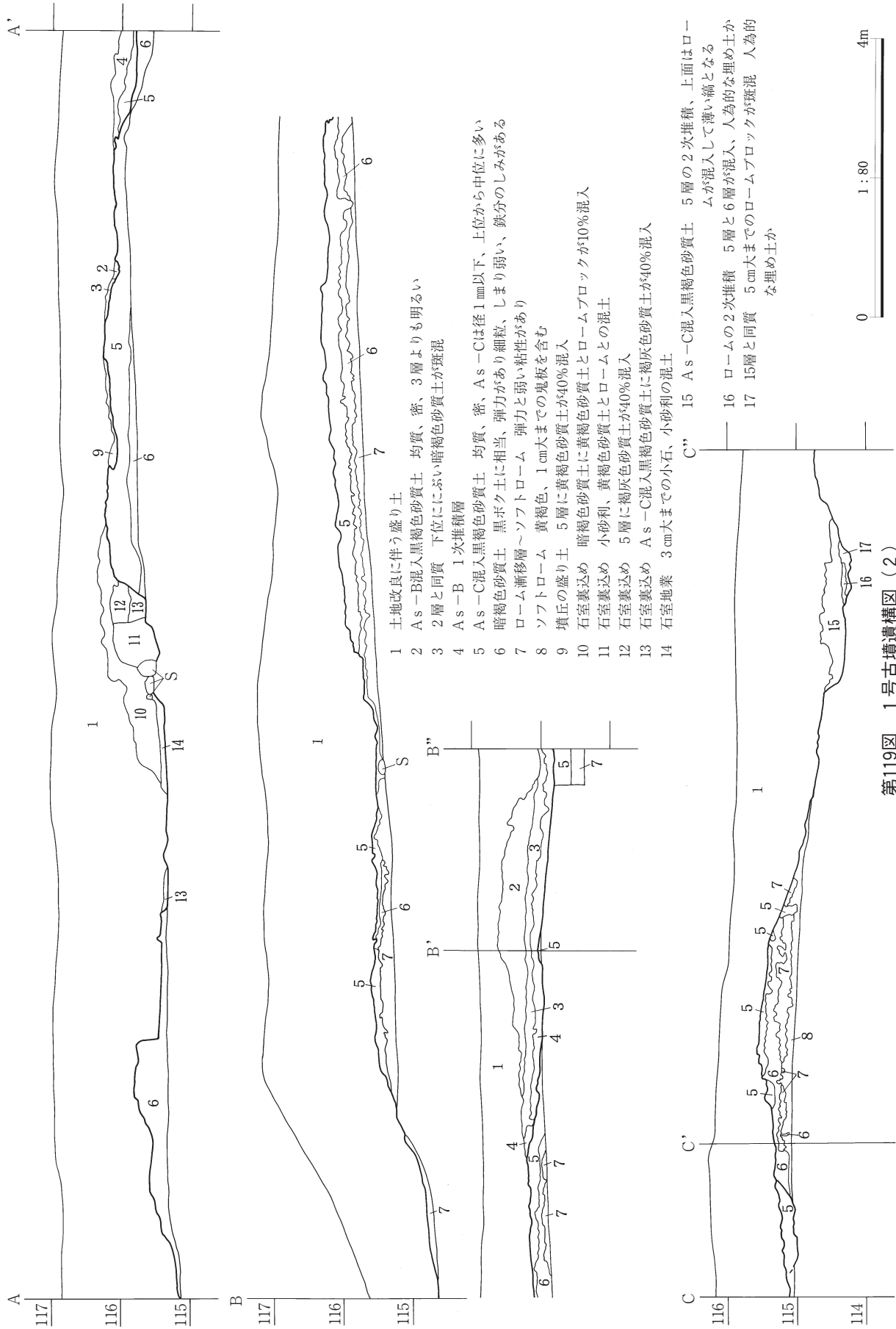
出土遺物 玄室の北東隅で耳環が2点、奥壁に平行、接するように大刀の破片4点、玄室南東隅から鉄族が破片となって出土した。耳環と大刀は原位置であるが、鉄族は攪乱されていた。大刀は、3振り以上がある。前庭からは、羨門から南に1mほどの範囲で埴瓶と杯が破片の状態出土している。埴輪の副葬はない。

石室の構築状況 掘り方は、ローム漸移層まで掘り込み、全長が7.83mの羽子板状で奥壁の幅が3.70m、玄門幅3.25m、羨門幅2.20mである。掘り込み面は既に削平されているが、現状で確認できるAs-C混入黒褐色砂質土からの深さは1mである。構築の順序は、西向きの斜面を少なくとも1m以上掘り込み、上記の掘り方をつくる。西壁を基準辺にして段ごとに壁を積み上げ、裏込めで養生し被覆している。

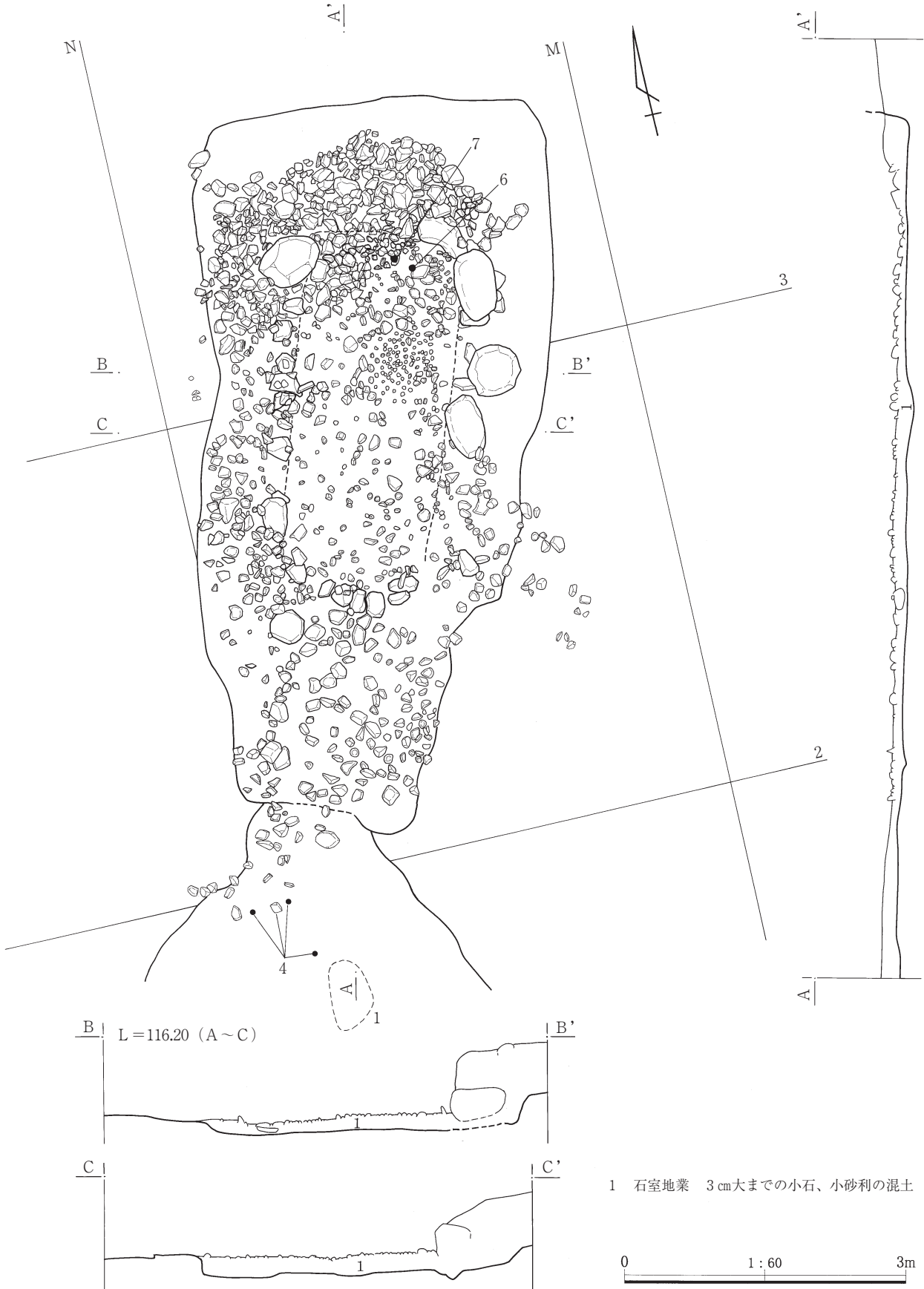
所見 前橋市亀泉町99、100、107番地に所在する。地権者によれば、昭和46年の土地改良までは墳丘が残されていたという。7世紀代の山寄せ古墳で、上毛古墳総覧からは漏れている。



第118図 1号古墳遺構図(1)



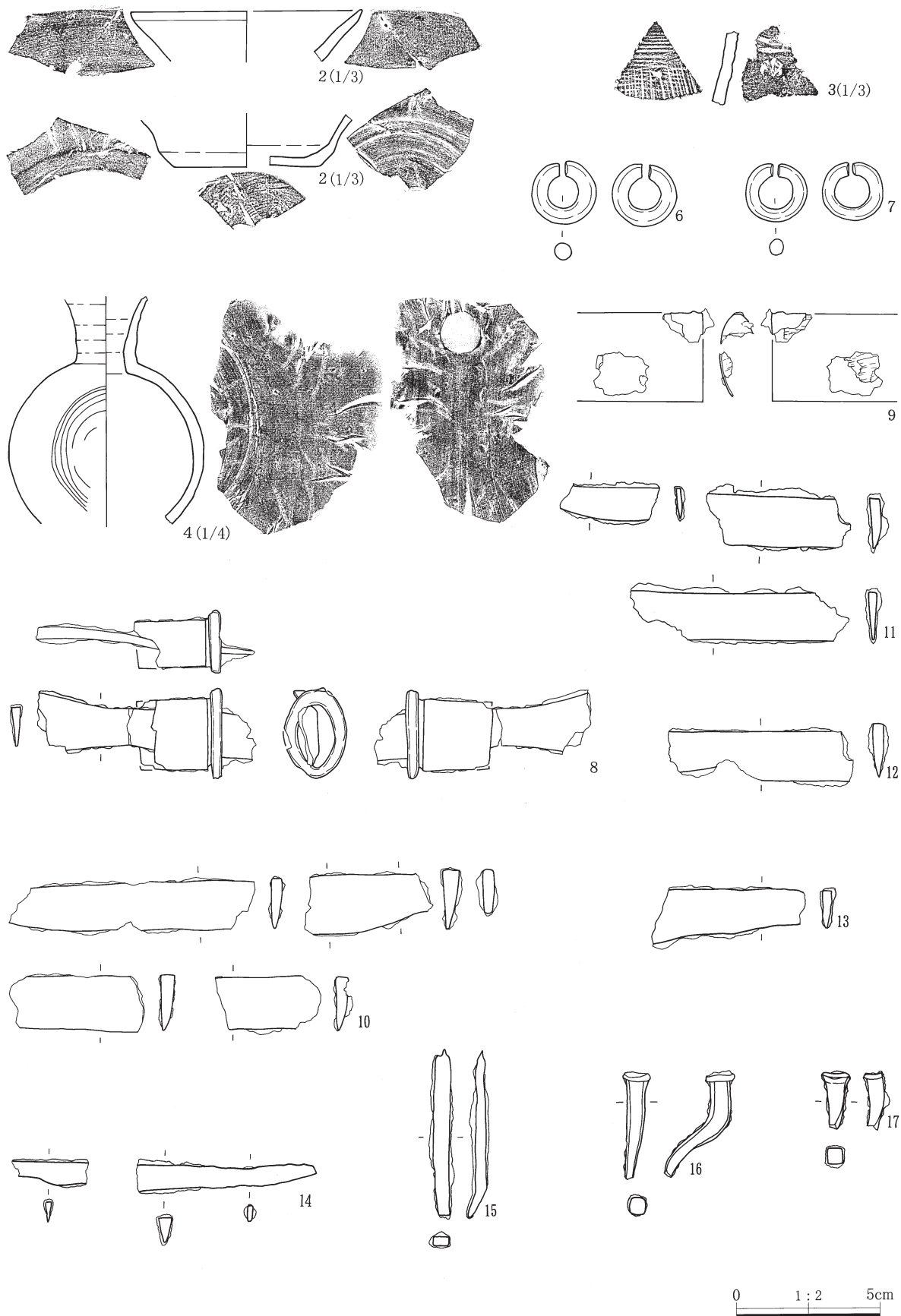
第119図 1号古墳遺構図(2)



第120図 1号古墳遺構図(3)



第121図 1号古墳遺構図(4)・遺物図(1)



第122図 1号古墳遺物図(2)

6 畠

2号畠(第123図 PL44・47)

位置 3区、39J~L-19・20グリッド、3区の中では東の端、台地全体では中央部にあたる。最も高い所といってもよく、平坦で広がりを感じ取れる場所である。住居跡からは東に10m離れているが、同質の覆土や方向の類似から一体のものと見てよさそうである。住居跡は畠を取り巻くようにも見え、互いに離れているのが意識した両者の位置関係を示しているかのようである。

重複関係 中央部に8号溝が重複している。9号溝は、畠に重複しているが覆土に違いはない。また、現在の道の前身と思われる硬化層が、調査区の壁際で側溝とともに検出されている。8号溝は、この道に伴う最も新しい側溝である。3者の関係は、断面AとBで読み取ることができる。

規模 南北10m、東西5mの範囲である。西側は、検出箇所が端が出揃い区画の限界である。残る3方向のうち東はもちろんのことであるが、その範囲は地形の様子から見て南北にも続いている。畠間の痕跡は、7条を検出した。北端の1条は、列がずれている。幅15~18cm前後、深さ5~10cmである。底面には、連続した掘削痕がある。北端の1条だけは列がずれていて、新旧で2条あるようにも見える。この1条を除けば、畠間の間隔は、芯々で150~160cmとほぼ一定している。

走向 N60~65°Eである。等高線に対しては、ほぼ直交している。

耕作土 耕作面は、削平されていて確認できない。ただし、畠間の痕跡内にはAs-Cを混入した黒褐色砂質土が堆積していることから、耕作面も同質の土であると推定することができる。

遺物 なし

所見 住居跡と同時期である。台地の中央部に広がりを持つ畠の一部である。

7 溝

9号溝(第123図 PL44)

位置 3区、39K-20、49K-1グリッド

重複関係 調査区の北東の隅で2号畠に重複して検出される。

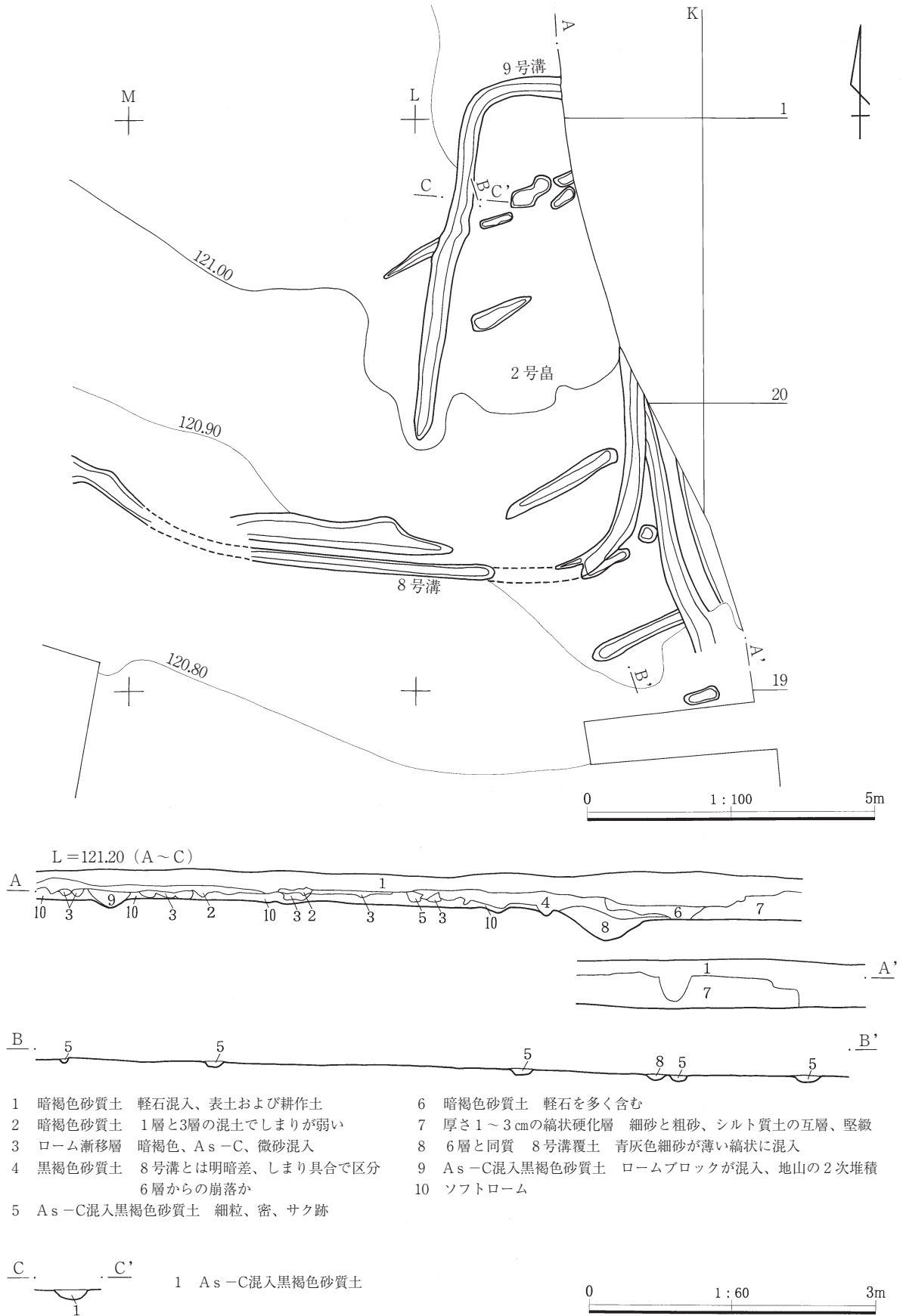
規模 検出長8m、幅30~35cm、深さは10cm前後である。北から南への勾配である。水は流れていない。

走向 ほぼ東西方向で、一方の端が南に折れ曲がっている。

覆土 As-Cを混入する黒褐色砂質土で自然埋没している。重複している箇所を検討した結果、2号畠の覆土との違いはない。

遺物 土師器の杯、埴、器台、甕の細片が各1点ずつ出土している。掲載したものはない。

所見 2号畠の畠跡とは重複しているが、7条あるうちのひとつ東西のものは平行していて、畠を囲う区画という見方もできる。



第5節 平安時代の遺構と遺物

1 概要

平安時代の遺構は、縄文時代と古墳時代の影に隠れているが、各区で断片的に検出されている。1区で溝が2条、道跡が11条、5区で水田とそれに伴う溝2条である。この遺構分布の状態からは、縄文時代や古墳時代までの居住域の様相が消えて、生産や往来する場に変化していることがわかる。集落とすれば中心からは外れた、人の気配が乏しい景色である。

水田は、最も台地の際に寄った箇所ですと畦と段差で区画する谷地田の一部が、水路とともに検出されている。調査したのは、仮称「亀泉高架橋」の橋台のひとつ、国土交通省がピア1（略称P1）と呼んでいる構造物の箇所である。範囲は、13m×13mと限られているが、寺沢川の両側に広がる水田の一面と見て良い。台地の際からの湧水を利用した、溜井灌溉による水田と見られる。プラント・オパール分析では、水田はAs-B下だけではなく、下層にあるAs-C降下前後が開田の時期ではないかとの指摘を受けている。

溝は、1区で2条、5区で水田に伴って2条が検出されている。5区のは灌溉用水路と見てよいが、1区のは道との区別がむずかしい。水を流すのではなく、区画するという見方である。

道は11条もあるが、すべてが1区だけで検出されたものである。1区は、本遺跡と堤沼上遺跡を分ける窪地のような所である。そこでの数の多さは、往来する場として定着していたことを示している。しかし、その方向は、東西にある住居跡に向いているのではなく、調査区外の南北である。幅は、せいぜい30～50cm程度で一定し、薄い硬化面が一直線に続いている。溝との区別は、掘り込まれた深さだけである。溝としたものが、道よりも倍以上に深い。方向は、南北と、北東から南西に向かう2つある。これは時期の差を示していて、重複関係では南北方向が古い。

2 水田

As-B下水田（第124・125図 PL49・73）

位置 5区、60T-10・11、8大区61A～C-8～12グリッド、仮称「亀泉高架橋」の橋台の一つで、範囲は13m×13mである。寺沢川の蛇行によりできた低地が殆どを占めているが、南東の一面には地山が露出している。区画は、台地の裾を削り込んでできている。標高は、現在の地表面が113.10～113.15mである。南への下り勾配であるが、調査範囲を外れるとすぐに台地となる。遺構検出面は、As-Bを取り除いた標高112.00～112.15mである。As-B層は、5～10cmの厚さで堆積している。

なお、下層に遺構があるのか確認するために、断面Aに沿って幅1mでトレンチを設定して調査した。その結果、基盤層は南への下り勾配であること。基盤層の上には、黒ボク土を起源とする土が厚く堆積し、その最上層に水田耕作土のあることの2点が明らかとなった。また、黒ボク起源土の中には、植物や木の枝、葉など有機物が多く含まれている。河道跡の淀みのような状態であろう。木の中には、太さが15cmを超す広葉樹の丸木杭2点がある。有機物は、大型化石として分析し木本22種、草本8種の分類群とその他菌類という結果が出されている。また、2本の丸木杭は、AMS法による放射性炭素年代測定により、cal BP1710

第4章 検出された遺構と遺物

(PLD-3044)、ca1 BP1920、1910、1900 (PLD-3045) という年代が得られている (第5章参照)。

畦の走向と区画 畦は、南北の1条だけである。幅は90~120cmと広く、高さが10cm前後で、等高線に直交して縦に配置されている。南端は、直角方向に西に折れ曲がり、15号溝に接続している。その規模から見て大畦に相当する、基準となるものである。畦の東西には、3~5mの間隔で5cm前後の段がある。西が3段、東は2段である。段は、等高線に沿うようでもあるが直線的で、ほぼ平行しているところから段差を利用した水田の区画と判断した。また、調査区の南側は、溝のように水田面よりも低くなる。台地の際にある溜井から続く溝のようである。基盤層の礫混じりの土からは、湧水が多い。

区画面積 1~6の6区画がある。1区画が16.8m²以上、2区画が7.84m²以上、3区画が16.0m²以上、4区画が9.88m²以上、5区画が16.71m²以上、6区画が22.08m²である。合計は、89.31m²である。

取・配水構造 14号、15号の2条の溝が灌漑用の水路である。詳細は、溝の項を参照。4区画と5区画の間に、5区画の水口にあたる溝のような窪みがある。この窪みは、14号溝の前身であろうか。

耕作土 As-Cを混入する黒褐色砂質土である。断面のA、Bで見ると、足で踏み込んだような凹凸した状態で、非常に軟らかいことがわかる。厚さは10cm足らずの単一層で、断面ではひときわ黒くて色調の点からも上下と区別しやすい状態である。

遺物 掲載した6点の石器は、水田からではなく、断面Aに沿ったトレンチから出土した。断面Aの8層や13層からの出土で1、2がスクレパー、3~6が使用痕のある剥片である。台地上からの流れ込みである。

所見 平安時代、As-B下の水田である。畦を基準として左右を段差で区画した水田である。同様なものが、寺沢川の対岸にある亀泉西久保II遺跡からも検出されている。地形の様子から見て、水田は、寺沢川の両岸に広がる一部である。プラント・オパール分析の結果は、8箇所のうち6箇所ですべて10,000個以上という高い数値が得られている。開田の時期は、4世紀中葉に遡ることが指摘されている (詳細は、第5章参照)。

3 溝

1号溝 (第128・130図 PL43)

位置 1区、39A~D-12グリッド、1号掘立柱建物跡の南3m、基本土層4層中で検出した。

規模 東西方向、検出した長さは12.50m、幅が40~50cm、深さは10~15cmである。西側は途切れているが、本来ないのか1号掘立柱建物跡の西梁の位置と一致している。東側は、さらに続いている。

覆土 As-Cを混入する黒褐色砂質土で自然埋没している。わずかに少量のローム粒が含まれている。

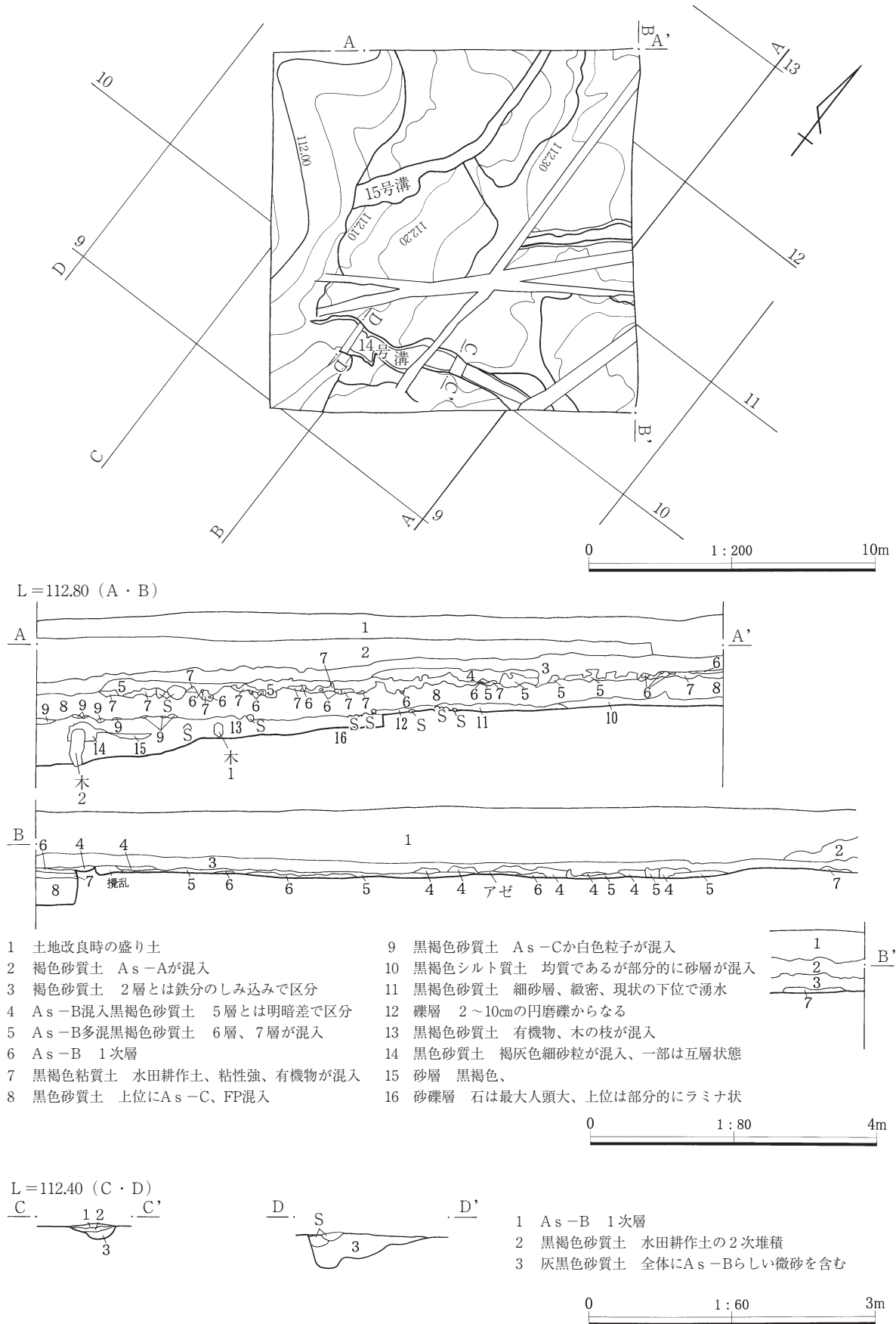
遺物 出土した遺物はない。

所見 特定できる出土遺物や火山灰はないが、覆土の様子からすると古代の可能性が高い。1号~5号道を畝の畝に見立て、その北側を区画する溝と1号掘立柱建物跡に伴う排水用の溝というふたつの見方ができる。

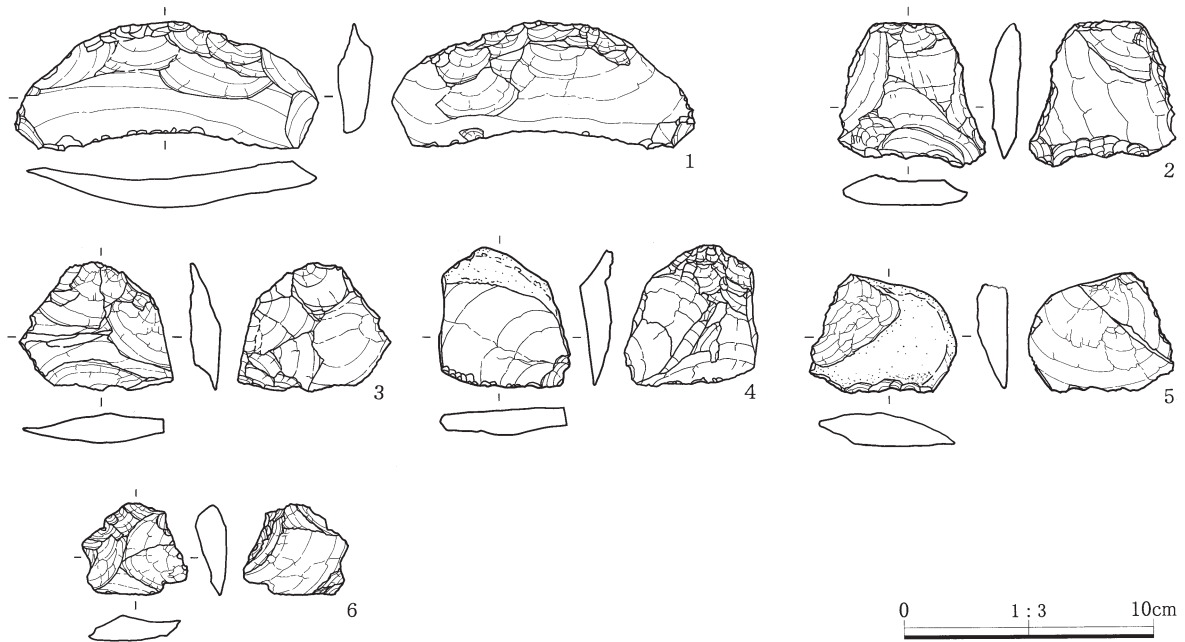
2号溝 (第128・130図 PL44)

位置 1区、39G~I-11~15グリッド、3号住居跡、10号道に重複する。**規模** 南北方向、検出した長さは22m、幅が40cm、深さは20cm前後である。**覆土** As-Bらしい細砂粒が多く混入する黒褐色砂質土で自然埋没している。**遺物** 出土した遺物はない。

所見 道との区別は、道の倍以上という掘り込みの深さである。水の流れた形跡には乏しい。覆土の特徴からすると、1号~5号道に近い時期である。



第124図 P1全体図・14・15号溝遺構図



第125図 P1 遺物図

14号溝 (第124図 PL45・46)

位置 5区、8大区61A・B 9グリッド **規模** 東西方向、検出した長さは8.20m、幅が55~60cm、深さが5~10cmである。南への下り勾配で、南北での高低差は10cmである。南側の深い部分と合流する箇所だけが一段と深くなる。15号溝のような集水枡ではなく、むしろ合流点の堰跡ではないだろうか。この箇所だけが覆土を異にすることから、堰の手前が強い流れで削り込まれたものであろう。

覆土 断面Cでは、As-Bが混入した黒褐色砂質土が堆積し、Dでは上層にAs-Bの1次層が堆積している。時差のあることが分かる。**遺物** 出土した遺物はない。

所見 平安時代、台地の際をめぐり、As-B下水田に配水する灌漑水路である。

15号溝 (第124図)

位置 5区、8大区61A・B 9・10グリッド **規模** 南北方向、中央部でくの字に折れ曲がっている。検出した長さは9m、幅が40~80cm、深さが5~7cmである。はっきりとした掘り方ではなく、周囲よりもわずかに低くして水を溜める方式である。南端の長さ2mほどがわずかに深く、幅も広がっている。これは、自然にできたものではなく、当初から水を集める効果を狙いとしたものであろう。溝の中程では、東からのびてくる畦が接続している。**覆土** As-Bを多く混入する黒褐色砂質土で埋没している。As-Bは、一段深くなる南端にだけ堆積している。それ以外は、砂粒混じりの土で14号溝と似た傾向である。

遺物 打製石斧1点、剥片1点、須恵器碗が1点出土している。未掲載ではあるが、溝の中央部から青磁の碗の底部が1点出土している。あえて円形になるように、高台部分のまわりを打ち欠いている。

所見 平安時代、As-B下水田に配水する灌漑水路である。

4 道

概要 1区で11条を検出した。幅が40～50cm、硬化した薄い面が一直線あるいは直線的に続いているものを指している。検出面は、A s - Bの直下と、A s - Cが混入する黒褐色砂質土中の2面である。前者は、A s - Bを除去するだけで分かり易かったが、後者は掘り込み面も覆土も同じで非常に分かりにくいものであった。7号道は、ほかの遺構調査中に検出された後者の例で、まず断面で硬化した面が確認され、次いで面に広げた。決め手は鉄分の凝集、その上にある極々薄い砂層で、これにより硬化面が識別しやすかった。覆土は、基本土層4層A s - Cが混入する黒褐色砂質土の方が多い。

11条は、次のように南北方向と北東方向の2つのグループに分けられる。

南北方向のグループ 5号、6号、7号、9号、10号

北東方向のグループ 1号、2号、3号、4号、11号、12号

断面の観察では、方向の違いは時差によるもので南北方向が古く、北東のものが新しいことが分かる。5号道と6号道では5号の方が古く、5号道が完全に埋没したところで改めて6号道が掘られている。重複している10号道、11号道、12号道の関係では、10号道が古い。また、10号道と2号溝との関係では10号道の方が古い。時期は、検出時の様子ではA s - B下のものと、それよりもやや古く遡るものがある。しかし、平安時代の中で考えると、これに対応する住居跡は本遺跡の中にはなく、最も近いのは堤沼上遺跡の36号住居跡、1軒だけである。道は、1区だけに多い。文字通りの道ならば、集落の中でどう位置付けるのかが課題である。道という見解で報告するが、1区の一帯は1号溝を北の限界とする畠の跡という調査担当の見方もある。

1号道 (第126・127図)

位置 1区、39CD-9・10グリッド、A s - B下で検出した。2号道と併走している。**重複関係** なし
規模 北東から南西方向、検出した長さは9m、硬化面の幅は30～40cmである。南北の両端は、遺構の確認時点で削平されたものと見られる。検出した範囲での高低差は、30cmである。**覆土** A s - Cを混入する黒褐色砂質土で埋没している。**遺物** 出土した遺物はない。**所見** 平安時代、A s - B降下以前の道である。

2号道 (第126・127図)

位置 1区、39E-6～10グリッド、A s - B下で検出した。1号道と3号道の間にある。**重複関係** なし
規模 北東から南西方向 検出した長さは23mの直線路、硬化面の幅は25～35cm、最大で40cmである。検出した範囲での高低差は、85cmである。**覆土** A s - Cを混入する黒褐色砂質土で埋没している。**遺物** 出土した遺物はない。**所見** 平安時代、A s - B降下以前の道である。

3号道 (第126・127図)

位置 1区、39DE-10グリッド、2号道と4号道の間にある。**重複関係** なし
規模 北東から南西方向、検出した長さは4.8m、硬化面の幅は30cmである。1号道と同じように、南北の両端は遺構の確認時点で削平されたものと見られる。検出した範囲での高低差は、20cmである。**覆土** A s - Bを多く混入する黒褐色砂質土で埋没している。**遺物** 出土した遺物はない。**所見** 平安時代の道である。

第4章 検出された遺構と遺物

4号道 (第126・127図)

位置 1区、39E～G-4～11グリッド、北は途切れているが、南はさらに調査区外に続いている。

重複関係 なし **規模** 北東～南西方向、検出した長さは35.2m、硬化面の幅は40cmである。検出した南北の範囲での高低差は、120cmである。**覆土** A s - Bを多く混入する黒褐色砂質土で埋没している。**遺物** 出土した遺物はない。**所見** 平安時代の道である。

5号道 (第126・127図 PL46)

位置 1区、39I-6～14グリッド **重複関係** 北半分は6号道が重複、5号道が古い。上面には江戸時代の1号畑がある。**規模** 南北方向、検出した長さは38m、硬化面の幅は42～50cmである。検出した南北の範囲での高低差は、105cmである。**覆土** 1次調査の所見では1～4号に比べてA s - Bが少なく、硬化度も弱いと感じたとある。その後、北側を調査した2次調査では、ローム層上に硬い面が続いていた。路面は、ローム層まで掘り込んでいる方が固く、ローム漸移層やA s - Cを混入する黒褐色砂質土では軟らかい。断面Dでは、覆土の中位に黄褐色細砂のレンズ状堆積が複数あり、路面は何度か更新していることが分かる。**遺物** 出土した遺物はない。**所見** 平安時代、6号道の前身である。

6号道 (第126・127図 PL46)

位置 1区、39I-11～17グリッド、12ラインを境に北はロームを直に路面とし、南はA s - Cを混入する黒褐色砂質土を路面としている。南北ともに、厚さ1cm前後の硬化面がある。**重複関係** 断面Dによると5号道よりも新しい。**規模** 南北方向、検出した長さは31.5m、硬化面の幅は30～35cm、途中の4号溝と重複する部分は消失している。検出した南北の範囲での高低差は、110cmである。**覆土** 路面は、黄褐色砂質土に直接覆われている。**遺物** 出土した遺物はない。**所見** 平安時代、A s - B降下前の道である。5号道を踏襲している。路面は10cm高く、芯々で60cmのずれである。

7号道 (第126図 PL47)

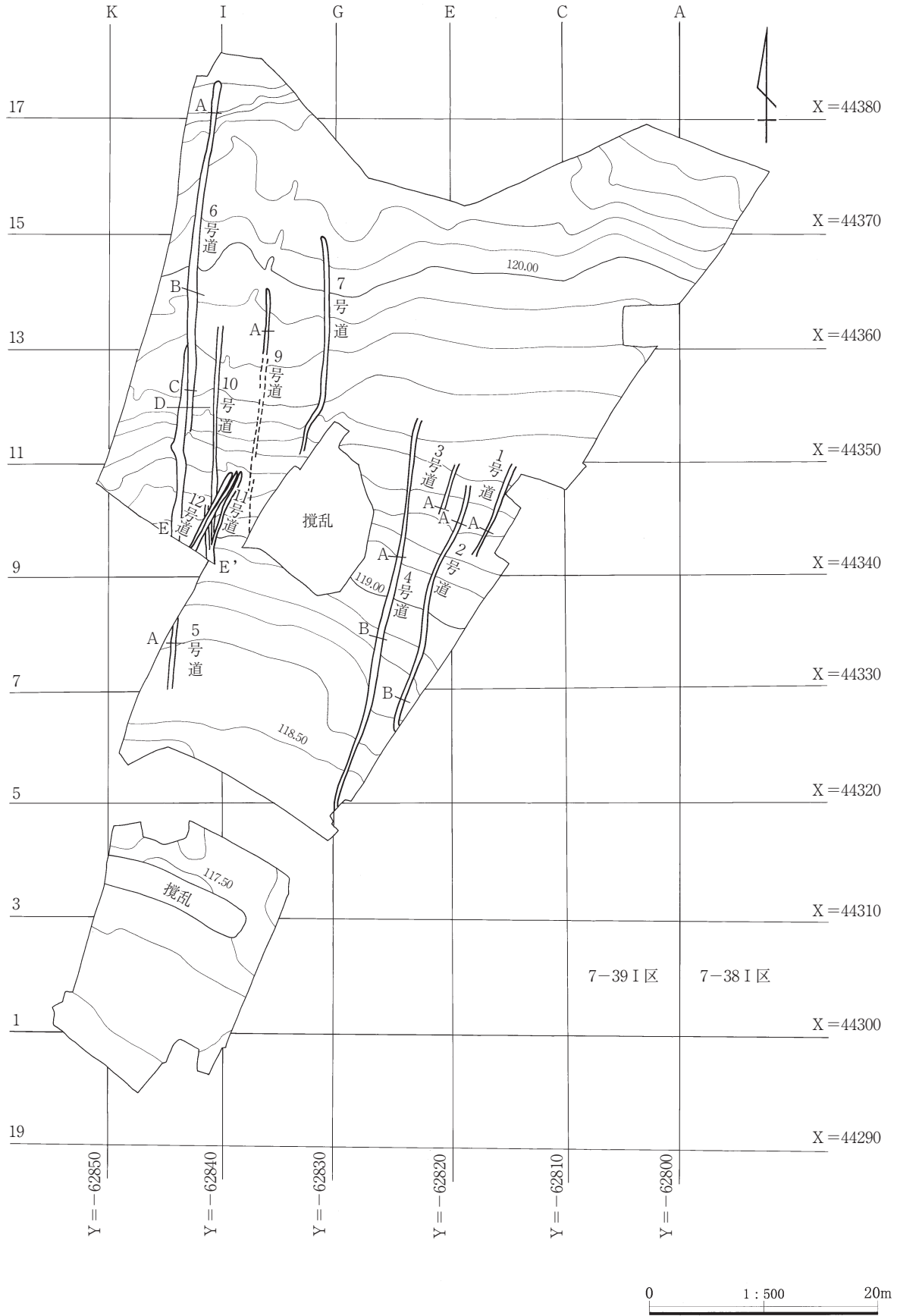
位置 1区、39G-11～14グリッド、1号土器集中の精査で検出した。**重複関係** 南端は1号土器集中に重複、土器集中よりも新しい。**規模** 南北方向、検出した長さは18m、北側の一部は途切れている。硬化面の幅は40～60cmである。検出した南北の範囲での高低差は、75cmである。**覆土** A s - C混入黒褐色砂質土で埋没している。**遺物** 出土した遺物はない。**所見** 平安時代の道である。

9号道 (第126・127図)

位置 1区、39H I 9～14グリッド **重複関係** 1号畑が重複、畑よりも古い。**規模** 南北方向、検出した長さは21.5m、硬化面の幅は20～25cmである。検出した南北の範囲での高低差は、85cmである。硬化面は、厚さがミリ単位の薄い層が幾重にも重なり板状、塊状に剥がれる。**覆土** A s - Cを混入した黒褐色砂質土で埋没している。細砂が混入し、しまりが弱い。**遺物** 出土した遺物はない。**所見** 平安時代の道である。6号道と平行している。A s - Cが混入する黒褐色砂質土中まで掘り込んでいる。

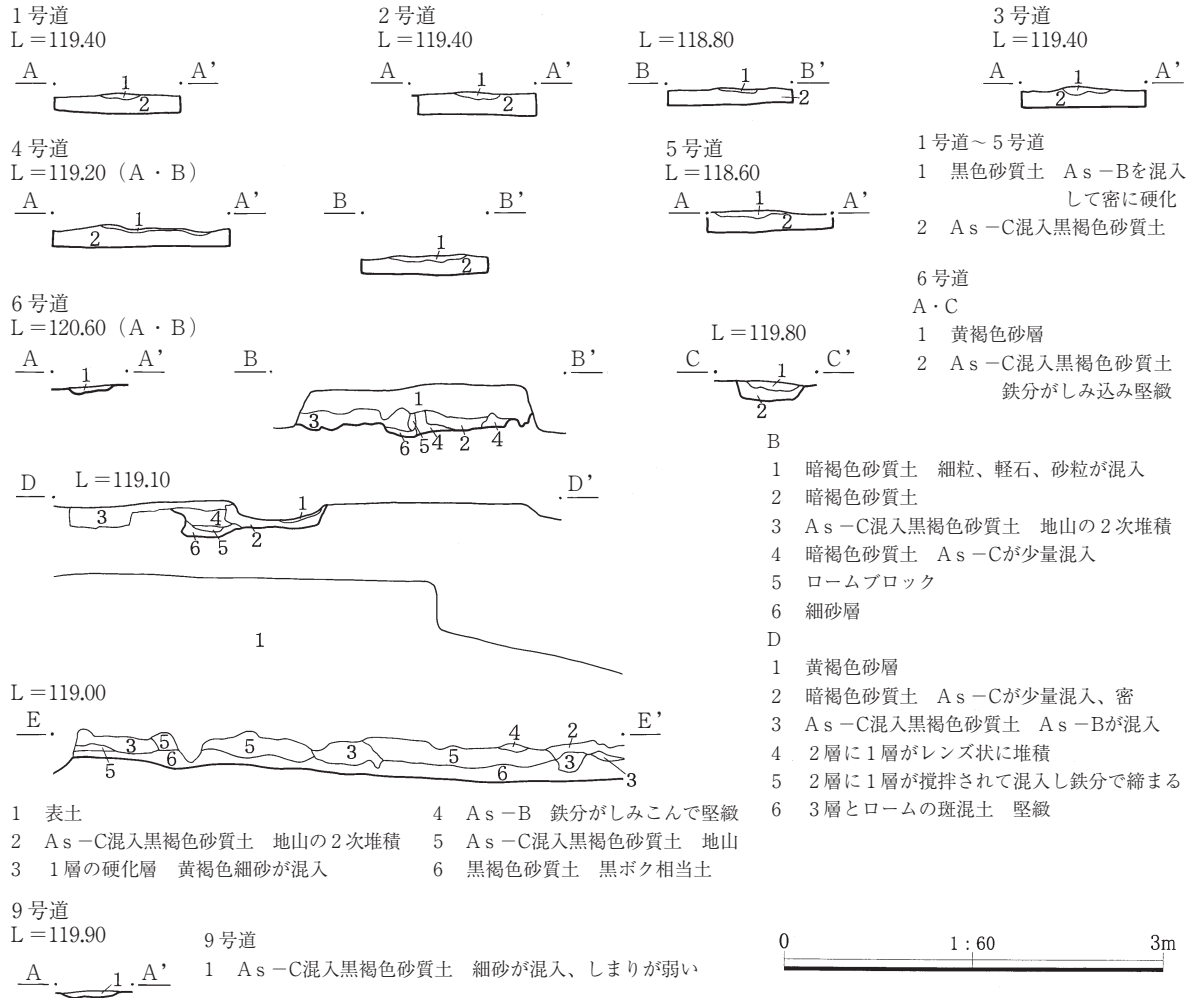
10号道 (第126図)

位置 1区、39I-9～13グリッド **重複関係** 11号、12号道が上面にあり、10号道が古い。



第126図 1～7・9～12号道遺構図

第4章 検出された遺構と遺物



第127図 1～6・9号道遺構図

規模 南北方向、検出した長さは21.5m、硬化面の幅は30～35cmである。検出した範囲での高低差は、85cmである。**覆土** 路面は、As-Cを混入する黒褐色砂質土を踏み固めている。断面Dでは、厚さ30cmほどの硬化層が見られる。**遺物** 出土した遺物はない。**所見** 平安時代の道である。硬化した面はあるが鉄分の凝集なのか、その上下でも硬化しているように見える。

11号道 (第126図)

位置 1区、39H I - 9・10グリッド **重複関係** 10号道よりも新しい。**規模** 北東から南西方向、検出した長さは8m、硬化面の幅は35～45cmである。やや蛇行している。検出した範囲での高低差は45cmである。**覆土** As-C混入黒褐色砂質土で埋没している。**遺物** 出土した遺物はない。**所見** 平安時代の道である。12号道とは、南端は1mを超しているが最も近い所は50cm離れるだけである。

12号道 (第126図)

位置 1区、39H I - 9・10グリッド **重複関係** 10号道よりも新しい。**規模** 北東から南西方向、新旧2条がある。新しい方が長さ7.80m、幅が15～20cm、古い方が長さ7.50m、幅が28～45cmである。検出した範囲での高低差は、45cmである。**覆土** As-C混入黒褐色砂質土で埋没している。**遺物** 出土した遺物はない。**所見** 平安時代の道である。11号道とは50cm離れるだけで、しかも平行している。

第6節 江戸時代以降の遺構と遺物

1 概要

概要 江戸時代でも天明三年浅間山の噴火以後、新しいところでは昭和49年の土地改良まで使われていたような遺構を指している。溝、道など多いという数ではないが、その中には明治11年発行の「上野国郷村帳」勢多郡亀泉村に書き込まれた景色と重なる所があると見て良い。平安時代以降、中世の遺構は検出されず、板碑、五輪塔などの遺物も出土していない。寺沢川の対岸、南西1kmには小泉城があり、亀泉町薬師塚古墳には室町時代頃の薬師を刻んだ石仏がある。しばらくの間は、断絶があったかのようである。

溝は、10条を検出した。内訳は、1区が2条、2区が2条、3区が6条、4区が3条である。この中には、3号や5号のように2つの調査区にまたがっているものや、3号と4号のように調査区の都合で途切れてはいるが同一の溝と見られるものがある。規模は、11号を除き幅が1m前後でほぼ揃っている。また、掘り込みも浅い。畑を区画するのが目的で、3号溝を除けば蛇行しているものはなく、平行するか直交する位置関係にある。厳密に一致するわけではないが、7号、8号の各溝は調査に入る前の地境と重なる。覆土には、大半の溝に1度か2度の付け替えた跡が見られる。ただし、大きな時差はない。地境として区画することが目的だけに、埋没すればその都度掘り返した結果であろう。

11号は、寺沢川から取水して堤沼に続く通称「堤堀」である。土地改良で幅が60cm足らずのU字溝に変身してしまっただが、調査区をはさんで北は台地の際を流れ下り、南は大きく迂回して1区を寸断して、さらに東南方向へと続いている。調査は、トレンチ4本だけの部分的なものであるが、規模、埋没状態のおよそについて知ることができる。水の流れていた形跡は、歴然としている。底面は波打ち、壁もえぐられている。底面に溜まった砂や小石からは、水の量と勢いを感じられ、子供の頃には水浴びをしたという、地元見学者の記憶と一致するかのようである。11号を好例とするように、時期は近世以降のものが大半である。中には、昭和49年土地改良するまで使われていたものが含まれている。9号は第4節古墳時代後期、1号、2号、14号、15号の4条は、第5節平安時代で詳述している。

道は、3区で検出された8号がある。昭和46年と土地改良まで使われていた「中亀街道」である。番号は付けてはいないが、2号畠の脇からも道の跡が検出されている。それは、粗砂と細砂の互層が版築のように固い厚さ30cmほどの断面で、現在は市道として舗装されている下に中心がある。現道の側を調査したために、偶然検出できたのかもしれないが、ここに限らず、現道の下にはこのような例が十分に考えられる。

畑は、1区で道に重複して検出されている。A s - A後のものである。

2 溝

3号溝（第128～130図 PL44）

位置 1区と2区でそれぞれ検出された道の側溝である。1区、39I J - 12・13グリッド、2区、39L M10～12グリッド、東端は10号道に重複して、そこで途切れたようになっている。**規模** 南北方向、1区では長さ6mにわたり検出、2区では長さ9.5mを検出している。市道をはさんで同一のものと判断した。断面Aが

第4章 検出された遺構と遺物

幅75cm、深さ15cm、断面Bが幅70cm、深さ20cm、断面Cが幅約60cm、深さ約30cmである。2区では直線的、断面形も逆台形のしっかりとした掘り方である。道跡は、溝の東側に接して溝と同じ幅の道跡が検出され、1区にも続いていることが確かめられている。道の幅は、断面Aで130cm、Cで70cmである。覆土 軽石を混入した黒褐色砂質土で自然埋没している。出土遺物 縄文土器深鉢の破片3点と剥片3点、陶磁器が各々少量、寛永通宝1枚（未掲載）が出土している。いずれも埋没時の混入である。

所見 As-A降下以後の江戸時代を上限とした、道に伴う溝である。東端は途切れているが、4号溝に続く可能性がある。

4号溝（第128・130図 PL44）

位置 1区、39G~I-14~17グリッド 規模 南北方向、検出した長さは18m、39I-16グリッドで「く」の字に曲がる。新旧2時期のあることが、A~C3箇所の断面で確認されている。規模は、新しい時期でAが幅70cm、Bが90cm、Cが60cmである。深さはAが15cm、Bが25cm、Cが18cmである。Aは、底面が硬化していた。古い時期では、Aが幅90cm、Cが80cmである。Bは計測不可である。覆土 2層が暗褐色砂質土、1層が2層に比べてローム粒を多く含む黒褐色砂質土である。覆土は、色調と混入するローム粒の量で分けたが微差である。ともに自然埋没である。出土遺物 縄文土器深鉢の破片21点と剥片2点、古式土師器に混じって磨耗した土師器甕の破片5点出土している。いずれも埋没時の混入と思われるが、水の流れたことを示すものであろうか。

所見 As-A降下以後の江戸時代を上限とした道の側溝で、3号溝に続く可能性がある。

5号溝（第129・130図 PL44）

位置 2区、39MN-12~18グリッド、3区、39MN-15~18グリッド、6号溝よりも古い。規模 南北方向、検出した長さは33m、幅が70cmから最大115cm、深さは24~36cmである。覆土 暗褐色砂質土と黒褐色砂質土で自然埋没している。4層とした暗褐色砂質土の下層には、水によると思われる薄い細砂層が堆積している。全体に大小のローム粒が混入している。出土遺物 縄文土器と剥片2点のほかに、須恵器杯、古式土師器甕、埴、器台が細片ながら出土している。いずれも掲載はしていない。周囲にある遺構から流れ込んだものである。

所見 江戸時代後期以降である。区画に排水を兼ねたもので、北端は攪乱で途切れているが8号溝に接続していると見られる。

6号溝（第129・130図 PL44）

位置 3区、39M~Q-15~17グリッド 重複関係 15号住居跡の中央部に重複し、東側は5号溝に接続する。また、西では7号溝と接続している。東西方向が検出した主な部分であるが、西側へは直線的に伸び、東側は、南へ直角に折れ曲がり5号溝に接続する。暗褐色砂質土で埋まる2時期にわたる変遷があり、古い時期に7号溝と接続している。さらに、2区にまで続いているかは確認できなかった。規模 検出した長さは23m、幅は古期35cm、新期が40cm、深さは古期が20cm、新期が26cmである。覆土 暗褐色砂質土で自然埋没している。混入するロームの状態に分けた。水は流れていない。出土遺物 掲載はしていないが、打製石斧1点、剥片2点、古式土師器甕ほか17点、寛永通宝1点、キセルの吸口1点が出土している。

所見 江戸時代の後期以降、畑の筆境と見られる。7号や8号にくらべると、掘り方が一段深い。

7号溝（第129・130図 PL44）

位置 3区、39P-17~20、49P1~4グリッド、古い方からA、B、Cの3条からなる溝の総称で、調査区を縦断し7号住居跡、8号溝に重複している。北端は、8号道に接続していたと見られる。**規模** いずれも南北方向である。Aは、検出した長さ13m、幅が30cm以上、深さは5cmである。南は6号溝の古い時期に接続し、北は8号溝に接続していたと見られる。Bは、検出長36mと最も長い。幅は40cm、深さ18cmである。南は6号溝に接続し、北は8号道に接続していたと見られる。8号溝よりは新しい。Cは、検出長11m、幅60cm、深さ12cmである。これも検出状態からすれば、8号溝に接続していたのであろう。Cの覆土には、As-Aが混入し、A、Bも同様でこれにローム粒が含まれている。**出土遺物** 土師器、須恵器の甕や杯、椀、瓶の1~3cm大の破片がポリ袋にして3袋出土した。全部ではないが、中には水に流されて角まで磨耗しているものが含まれている。このほか、剥片、鉄滓が各1点出土している（未掲載）。

所見 覆土の様子からみて、江戸時代後期以降の畑の筆境と見られる。

8号溝（第129・130図 PL44）

位置 3区、39K~P-19・20グリッド、調査区の中央を横断、西は11号住居跡の所で7号溝Aと接続し、東は2号畠の箇所北に折れ曲がって調査区外に続いている。**規模** 検出した長さは29.5m、幅が35cm、深さは12~15cmである。東では現在の市道の前身と見られる道跡と、その側溝に併走しているが8号溝の方が新しい。この道を迂回するように北上している。**覆土** 軽石を多く含む暗褐色砂質土で水の影響なのか、粗砂を多く含む堅く締まっている。**出土遺物** 縄文土器、土師器の甕、杯、高杯、内耳土器の細かな破片が少量出土している（未掲載）。

所見 江戸時代後期以降の畑の筆境と見られる。

10号溝（第129・130図 PL45）

位置 3区、49H-4・5グリッド、調査区の西端にある。**規模** 南北方向、検出した長さは4m、幅が90cm、深さは50cmである。直線で、非常にしっかりとした掘り方ではあるが4区では検出されていない。すぐ東側まで続いている8号溝に接続するのであろう。平行する東西の新旧2条がある。東が古く、西が新しいが覆土に差はない。東は、その中にさらに新旧がある。**覆土** 径1~2cmのローム粒を多く含む、暗褐色砂質土で自然埋没している。ローム粒は下位に多い。底面には、天鋏か踏み鋤の跡が一見するとキャタピラの跡のように複数の列で検出されている。**出土遺物** 土師器の甕1点が出土している（未掲載）。

所見 江戸時代後期以降、底面の掘削痕で分かるように空堀の区画溝である。

11号溝（第131・132図 PL45）

位置 4区の西寄り、50D~I-7~17グリッドで検出された。現在の市道からは東に10mあまりの所を縦断しているが、土地改良以前の筆境に相当するものであろう。**規模** 南北方向、検出した長さは57.5m、検出状態からみて、長さはこの数倍になることはまちがいない。土地改良がされて、現在の地形ではたどることはできないが、台地の傾斜が変換する付近を縦走するものであろう。調査は、幅2mのA~Dの4箇所のトレンチで規模や走向を確認したが、覆土の中位にビニール袋やプラスチック類が混入していたことから、連続した1本の溝であることを確認しただけにとどめた。規模はAが幅3.15m、深さ1.72m、Bが幅7.50m、深さ1.95m、Cが幅5.60m、深さ1.85m、Dが幅3.75m、深さ1.62mである。底面は、Hr-HPを50cm前後掘り

第4章 検出された遺構と遺物

抜き、下位の硬質ロームにまで達している。底面の標高は、北のAが標高117.90m、南のDが標高117.54mとその差は36cm、わずかながら南への下り勾配である。断面形は、葉研、東の方が急な傾斜で西が緩い。底面から1m付近までが、水の流れた跡を示すようにえぐられている。

覆土 土層は69層に細分することができたが、トレンチのAとBが6時期以上、CとDが5時期以上に大別できる。土層説明では、1層～4層にまとめた。1層は、表土で褐色～暗褐色、黄褐色で、上位はA s - Aほかの軽石を多く含み、混入するロームの量で分けた。しまりが弱い。下位は、黒褐色砂質土、黄灰色シルト質土で、下位になると粗砂と細砂の礫層となる。3層は、黒褐色、黄褐色、褐灰色などのシルト質土で、レンズ状の粗砂と細砂が点々とある。4層は、黒褐色、褐灰色、黄褐色などのシルト質土を色調、ロームの混入量、粗砂と細砂で分けた。最下位は、最大で10cmまでの粗砂と細砂の礫層である。一部はラミナ状である。3層の砂層をはさんで4層から劇的に変化しているように見える。色調だけではなく、混入物や土質の特徴からすると、3層で時期を異にすると考えてもよい。4層にはA s - Bの混入が多く見られ、ビニール等の現代物の混入もない。底面やその近いほど粗砂、あるいは直径1cm以上の小石の混入する量が多い。水の流れた時期と空堀の時期が繰り返した結果であろう。埋没で規模を徐々に小さくしながら存続している。

出土遺物 縄文土器や石器から陶磁器までが混在して出土した。覆土の下位からの出土が多く、中には水で洗われて磨耗しているものがある。

所見 堤沼へ通水していた「堤堀」の一部である。

12号溝（第131図 PL45）

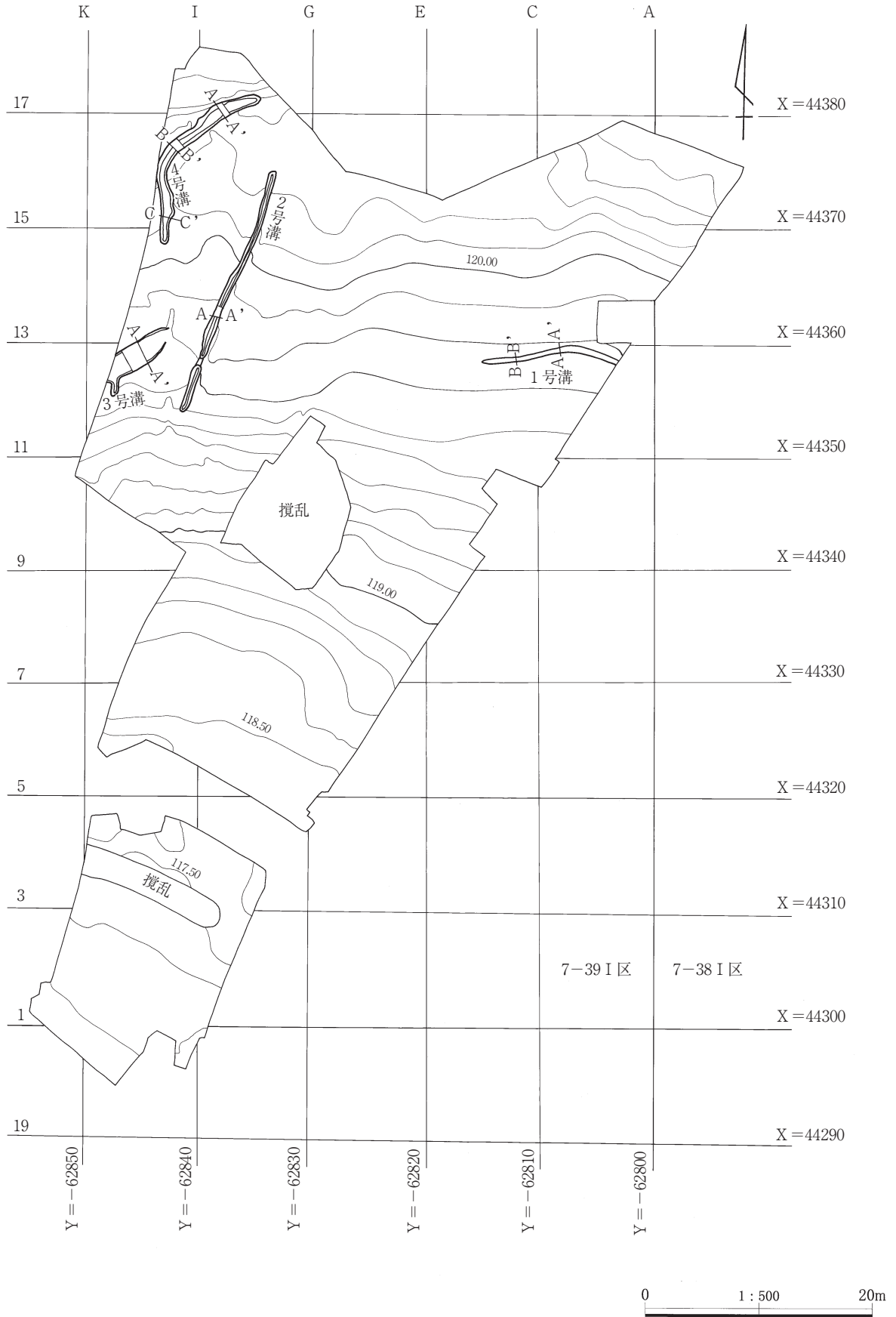
位置 4区、50F～I-11～13グリッド、11号溝の西で13号溝と直交している。土地改良による2mを超す盛土の下で検出されている。13号溝とは直交している。**規模** 検出した長さは19.5m、幅が1.15～1.35m、深さは40cmである。**覆土** 現在の耕作土によく似た、締まりのない黒褐色砂質土で自然埋没している。**出土遺物** 出土した遺物はない。

所見 江戸時代後期以降、13号溝よりも古い差はわずかである。11号溝の枝溝で、畑のまわりを区画する。

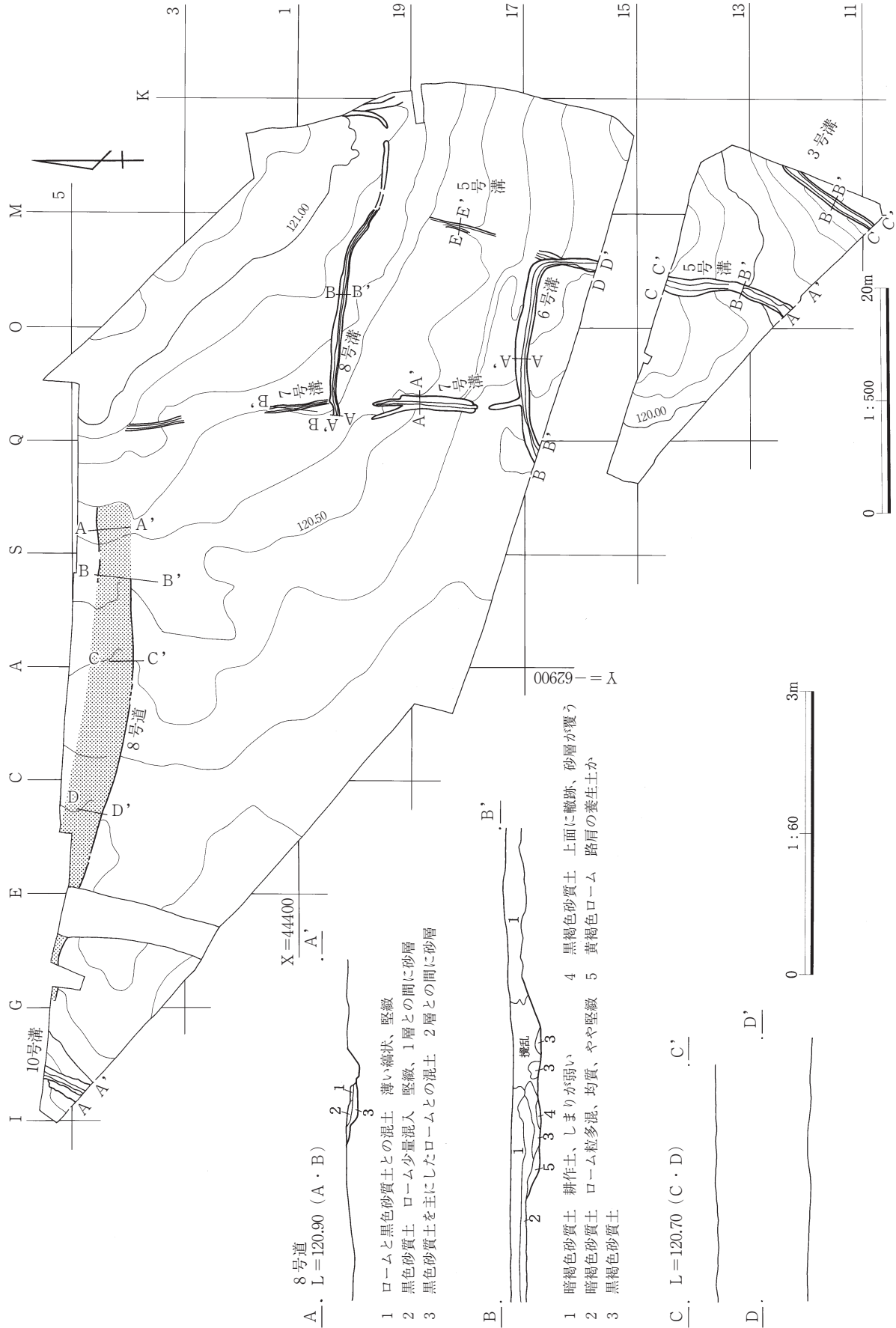
13号溝（第131図 PL45）

位置 4区、50G～J-10～15グリッド、11号溝の西10mを併走している。土地改良による2mを超す盛土の下で検出されている。**規模** 検出した長さは27m、幅が50～120cm、深さは40～45cmである。**覆土** 暗褐色砂質土、黒褐色砂質土による自然埋没である。**出土遺物** 未掲載ではあるが、縄文土器深鉢1点、土師器の甕5点、高杯1点、陶磁器1点が細片ながら出土している。

所見 江戸時代後期以降、12号溝よりも新しい。11号溝の枝溝で、畑のまわりを区画する。



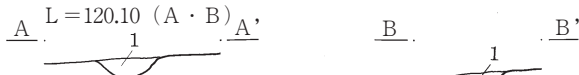
第128図 1～4号溝遺構図



第129図 3・5～8・10号溝、8号道遺構図

第6節 江戸時代以降の遺構と遺物

1号溝



1 As-C混入黒褐色砂質土 ローム粒混入

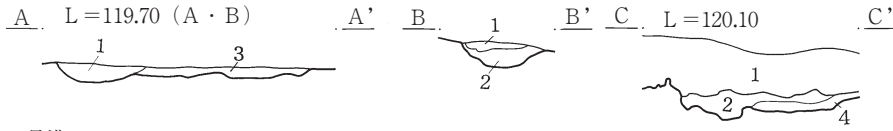
2号溝

L=119.50



1 黒褐色砂質土 As-Bらしい砂粒がやや多く混入
2 ロームブロック

3号溝

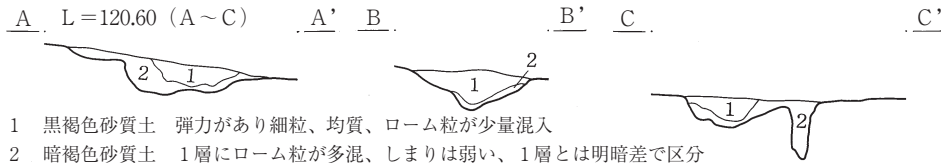


3号溝

A·B·C

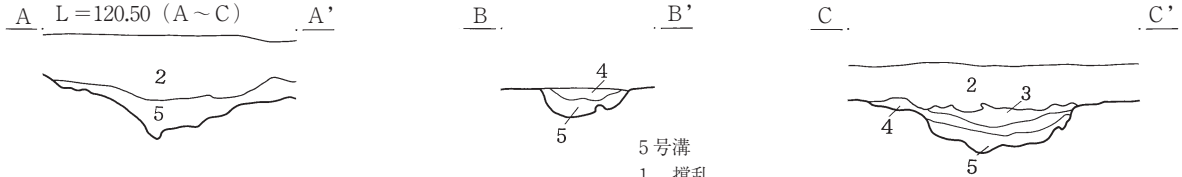
1 黒褐色砂質土 弾力があり細粒、やや密
2 黒褐色砂質土 下位に1cm大までのローム粒が多い、軽石、砂粒混入
3 2層と大粒のロームの攪拌土、4層の硬化していない状態か
4 3層の硬化層 削り出したロームの上面に盛り土、厚さは10cm以上、路面の底面か

4号溝



1 黒褐色砂質土 弾力があり細粒、均質、ローム粒が少量混入
2 暗褐色砂質土 1層にローム粒が多混、しまりは弱い、1層とは明暗差で区分

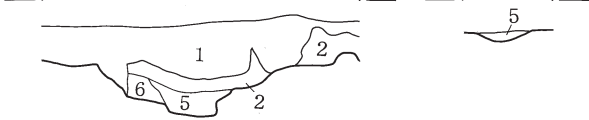
5号溝



5号溝

1 攪乱
2 表土 暗褐色砂質土 As-Aほか軽石が混入
3 暗褐色砂質土 均質、やや密、1cm大までのローム粒が混入
4 暗褐色砂質土 薄い細砂層で5層と区分、ローム粒が混入
5 黒褐色砂質土 均質、やや粘性あり、1~3cm大までのローム粒が混入
6 5層にロームブロックが50%混入 6号溝覆土

D L=120.90 (D·E)



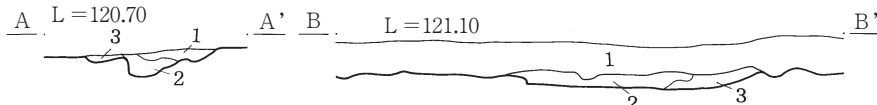
6号溝 L=120.70 (A·B)



6号溝

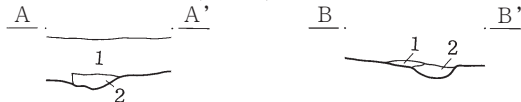
1 暗褐色砂質土 客土
2 暗褐色砂質土 細粒、密、ローム粒がまばらに混入
3 2層と同質 細粒、密、下位に1~3cm大ローム粒が10%混入
4 2層と同質 細粒、密、全体に1~5cm大ローム粒が30%混入

7号溝



1 暗褐色砂質土 細粒、均質、As-Aほか軽石、ローム粒がまばらに混入
2 暗褐色砂質土 細粒、均質、密、下位にローム粒混入
3 1層に、さらに多くのローム粒が混入

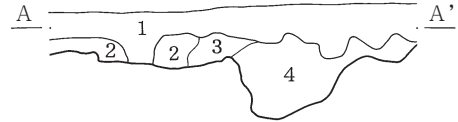
8号溝 L=120.10 (A·B)



1 軽石多混暗褐色砂質土 表土
2 暗褐色砂質土 細粒、均質、密

10号溝

L=119.90

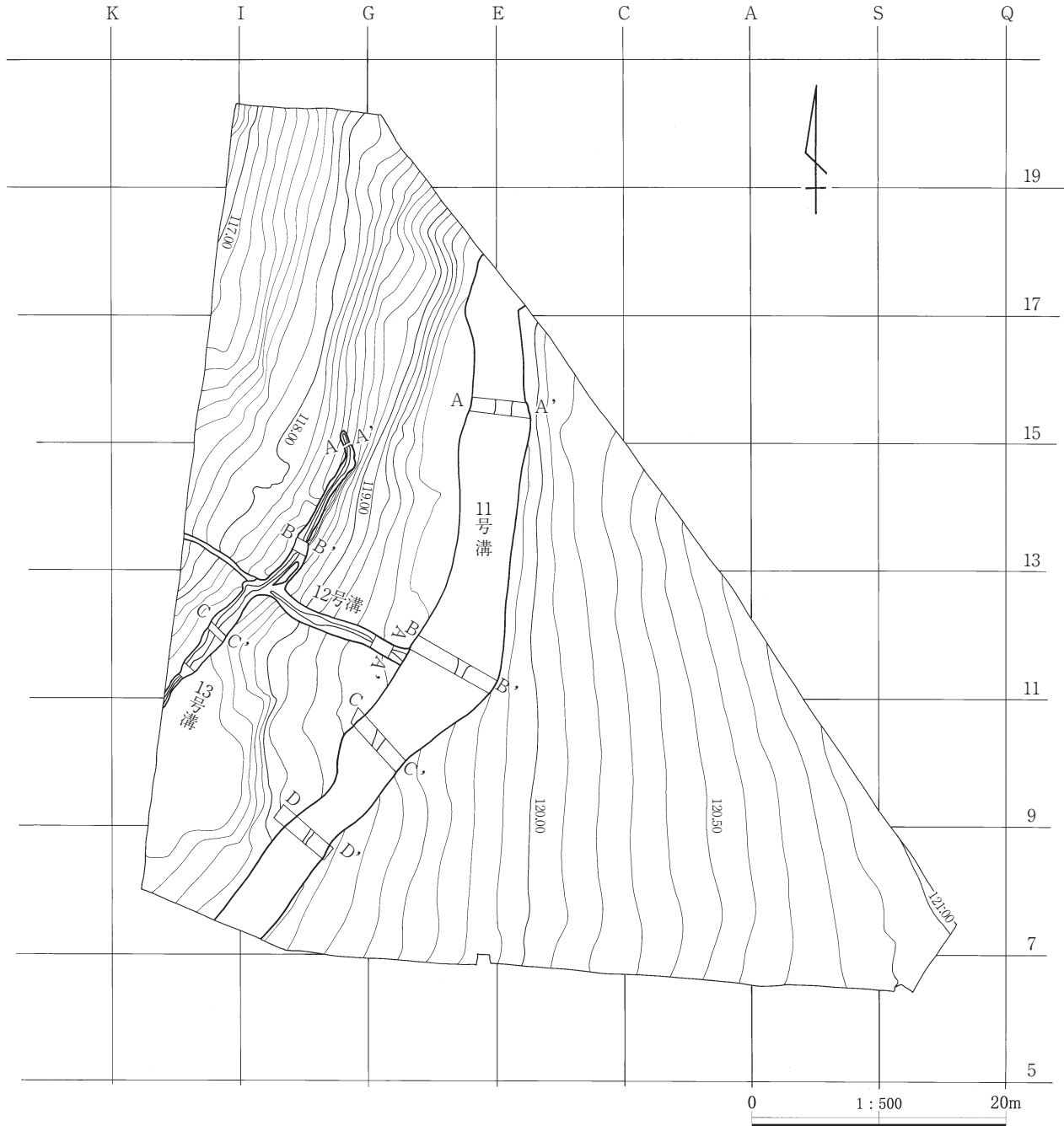


1 黒褐色砂質土 表土
2 暗褐色砂質土 黄褐色砂質土が斑混
3 暗褐色砂質土 1~3cm大のロームブロックが3%混入
4 黒褐色砂質土 1~5cm大のロームブロックが25%混入

0 1:60 3m

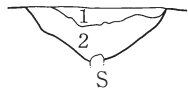
第130図 1~8・10号溝遺構図

第4章 検出された遺構と遺物



12号溝

A L=119.60 A'



- 1 灰黄褐色砂質土 ほぼ均質
- 2 黒褐色砂質土 暗褐色砂質土ブロックが混入、白色粒、ローム粒を含む

13号溝 L=118.70 (A~C)

A A'



B B'

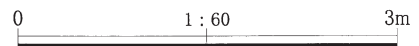


C C'

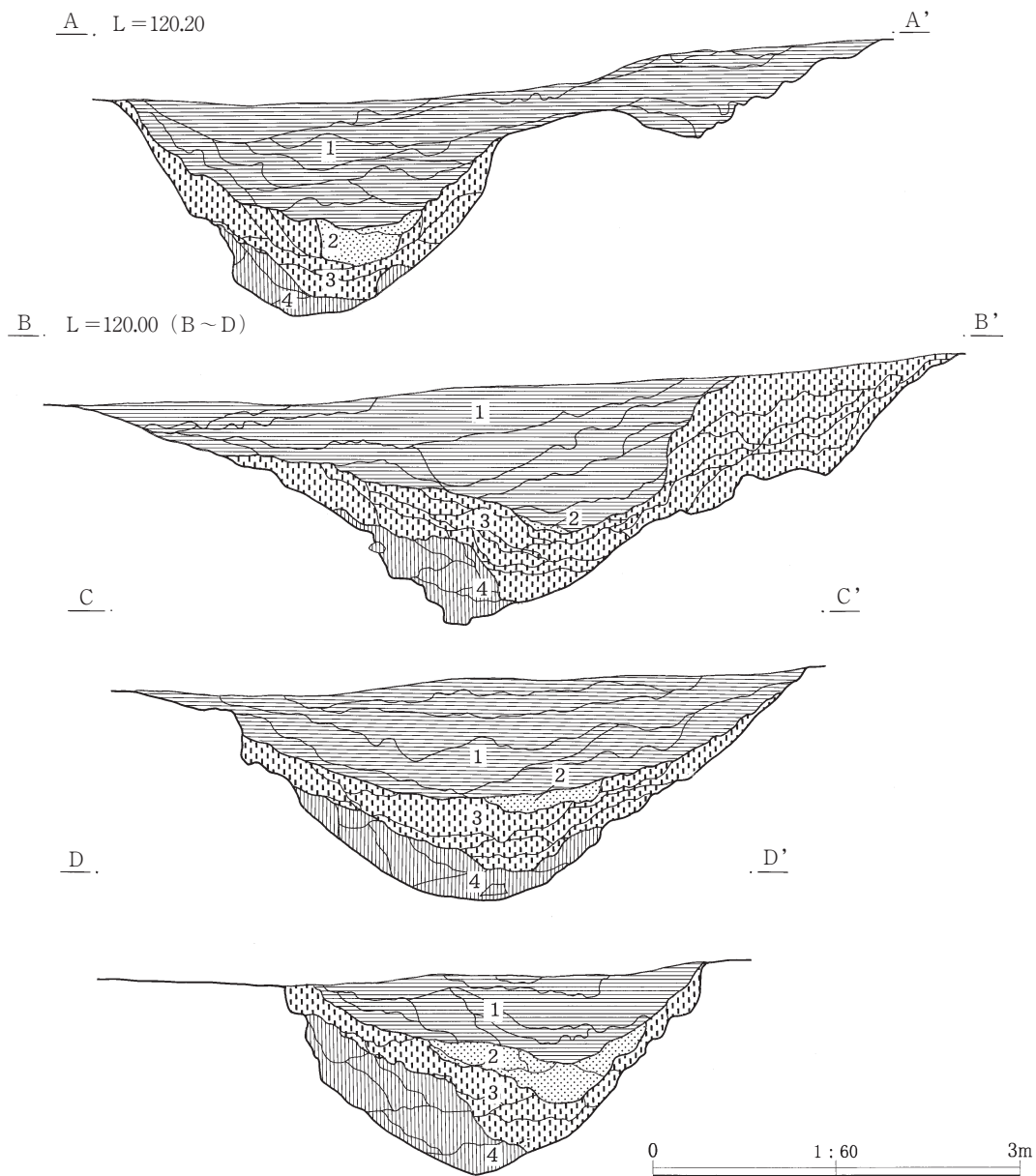


A・B・C

- 1 暗褐色砂質土 均質、しまり弱い
- 2 暗褐色砂質土 ロームブロックが混入
- 3 黒褐色砂質土 現代の攪乱



第131図 11~13号溝遺構図



第132図 11号溝遺構図

1～4層の説明は、186ページ覆土の項を参照

3 道

8号道（第129図 PL47）

位置 3区、49Q～T、50A～F－4・5グリッド **重複関係** 21号住居跡の上面中央部を横断している。
規模 東西方向、検出した長さは45m、幅1.2～1.5m、ローム層中まで掘り込み、そのまま路面としている。路面は、かたく踏みしめられ金属的な音がする位に全面が硬化している。上面には、流れ込んだ砂とロームが踏みしめられて、ミリ単位の厚さで幾重にも堆積している。硬さとともに、長期間にわたり絶えず使われていたことを感じさせる。削平をまぬがれた南側には、幅10～15cm、深さ3～5cmの轍の跡が途切れ途切れに残されている。路面の幅からすれば、荷車が往来した跡であろう。

覆土 黒褐色砂質土で自然埋没している。路面は、薄い砂層で覆われている。

遺物 出土した遺物はない。

所見 江戸時代～現代、土地改良後の市道の南3～5mを併走している。地権者によれば、昭和46年の土地改良まで使われていた「中亀（なかがめ）街道」と通称されていた道跡である。年代の上限は江戸時代としたが、さらに特定できる出土資料はない。唯一の例としては、北100mの旧道三叉路に立つ双体道祖神は、寛政八丙辰六月吉日（1796）とあり、隣り合う石塔からは享保三（1738）、奉造立庚申供養、宝暦五亥（1755）、明和九年辰年（1772）の年号がそれぞれ読み取れる。土地改良で動かされていて、道との直接の関係はないかもしれないが、年代を知る傍証である。

4 畑

1号畑（第133図 PL47）

位置 1区、39I J－10・11グリッド、As－C混入黒褐色砂質土面で検出した。

重複関係 5号道よりも新しい。

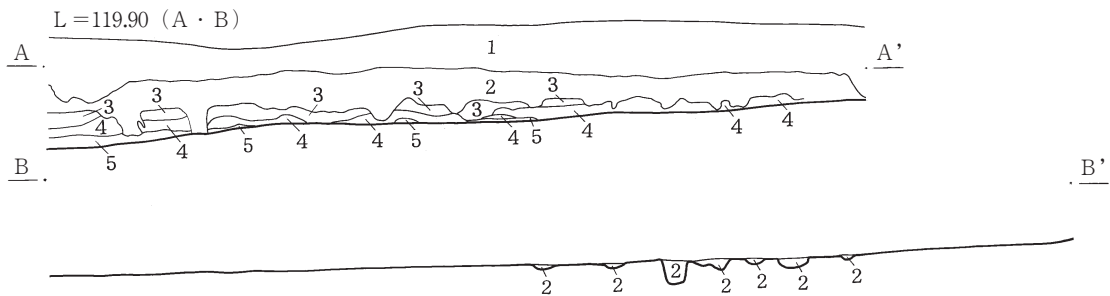
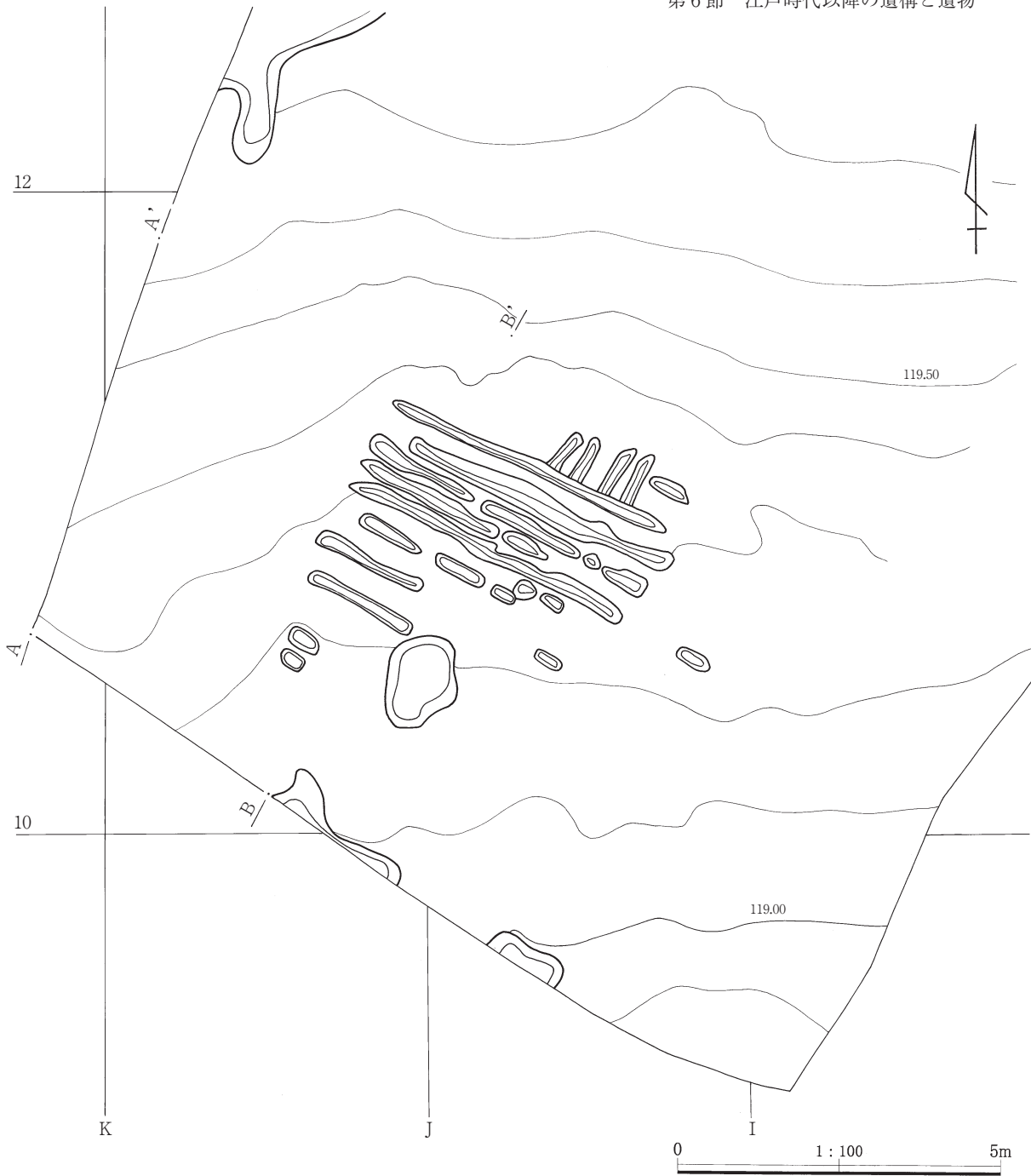
規模 畝が検出されたのは、東西11m、南北9mの範囲である。北と東は溝で区画され、残る2方向はさらに広がる。西の限界は、3号溝までであろう。畝は、新旧2方向がある。東西が新しく、南北が古い。ただし、区画のうちで北の際だけが南北の可能性もある。

掘削痕 畝間は、断面Bが芯々の距離が40cm平均とやや狭く感じられ、断面Aでは55cm平均と広い。掘削痕は、刃幅が15cm、先端が方形の鋤先である。遺存状態が良好な箇所では、16cm、26cm、30cmの間隔で連続していることがわかる。その際、角度が5度以下で一定しており、手慣れた様子がうかがえる。

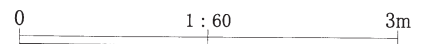
耕作土 暗褐色砂質土

遺物 出土した遺物はない。

所見 江戸時代後期以降の畑である。



- | | |
|--|---|
| <p>A·B</p> <p>1 宅地造成に伴う盛り土 ロームの2次堆積</p> <p>2 暗褐色砂質土 As-Aほかの軽石、砂粒を混入、しまり弱い、表土</p> | <p>3 As-C混入黒褐色砂質土 4層の2次堆積、4層よりも明るく、混入するAs-Cが少ない</p> <p>4 As-C混入黒褐色砂質土 均質、密</p> <p>5 黒褐色砂質土 粘性があり密、黒ボク相当</p> |
|--|---|



第133図 1号畑遺構図

第7節 遺構外遺物

1 掲載した遺物

出土した遺物の量は、遺物収納箱にして45箱である。内訳としては、縄文時代の遺構が13箱、古墳時代の住居跡が22箱、古墳が1箱、土器集中が2箱、溝ほか1箱、遺構外が4箱、旧石器が2箱である。調査区別に見ると、古墳時代の住居跡の軒数が多い3区、4区はもちろんであるが、縄文時代の遺構が集中している5区も全体の半数近くを占めている。

縄文土器は、1区は諸磯b式浮線文が主体であるのに対して、2区はすべてが黒浜式である。3区は黒浜式が60%以上で、諸磯a式がこれに次いでいる。4区はやや量が少なくて、5区になると全出土量の半分以上を占める。4区と5区では、検出された遺構の時期と対応して諸磯b式、同c式が圧倒的に多いが、2区、3区は一時期古くなり、4区、5区とは別な地点が存在することを暗示しているのであろう。

石器は、605点が出土した。これを5区で詳細に検討すると266点が出土し、このうち238点、89%が剥片である。製作工程を裏付ける一連の資料はないが、微細な剥片が多く見られることから、調査区の近くで刃部の加工やその他の調整が行われたことを示すのであろう。磨製石斧などは、破損した刃部を付け直しているものがある。石材は、黒色頁岩、黒色安山岩が主で、黒曜石は20点弱、チャートは5点である。製品は、打製石斧類が少ない。代わって、2点の磨製石斧が目を引いている。スクレイパーは、周縁に入念な加工を施したものは1点だけで、自然面を半身に残した剥片の縁辺に、細かな調整を施しただけのものが大半である。その他の調査区でも、器種、石材の傾向は変わらない。

掲載した遺物は、総数で625点である。遺構別では、住居跡335点、土坑115点、古墳17点、5区P1 6点、土器集中3点、縄文包含層33点、遺構外116点である。これを種類別に見ると、その内訳は縄文土器258点、土師器132点、須恵器12点、土製品15点、金属製品18点、石器・石製品190点となる。選別の基準としては、遺構に帰属していることを第一にして、次に遺構の時期を示すものか遺存状態が良いものを優先的に選んでいる。遺構に帰属させることができない場合は、遺構外遺物として縄文時代から時期不明のものまでを一括にした。詳細は、次の通りである。

縄文土器 深鉢255点、浅鉢3点

土師器 杯32点、埴18点、高杯5点、器台2点、壺6点、小型甕10点、甕37点、台付甕4点、S字口縁台付甕6点、鉢2点、甌7点、置台3点

須恵器 蓋3点、杯3点、高杯2点、甕2点、提瓶1点、短頸壺1点

土製品 手づくね9点、土玉2点、勾玉1点、紡錘車1点、粘土塊1点、焼土塊1点

金属製品 大刀6点、鉄鏃4点、釘3点、刀子1点、耳環2点、銅滓1点

石器・石製品 打製石斧28点、磨製石斧5点、石皿2点、多孔石1点、凹石8点、磨石22点、敲石11点、こも編み石19点、石鎗1点、石鏃13点、石匙5点、石錘1点、おもり4点、スクレイパー33点、砥石4点、剥片26点

このほかには、269点の旧石器が出土している。これらは、平成22年度に「上武道路・旧石器時代遺跡群(2)」として報告する予定である。

縄文土器は、住居跡をはじめとした遺構からと、1区の縄文包含層といった遺構外からのものである。遺

構のものは、時期を特定するために破片の大きさにかかわらず選択をしている。遺構外は、遺構の時期とは関係なく、古いものでは関山式から最も新しいところでは晩期まで変遷を迫るように選んでいる。しかし、選択の結果としては、遺物の出土量が示しているように前期の黒浜式から諸磯b式が多くなり、中期以降では数点しかない中から選ぶという、遺構の時期を反映したものとなっている。

土師器は、これもまた住居跡からがほとんどで、これ以外では古墳と土器集中があるにすぎない。しかし、住居跡の時期や軒数、そして残りの良さからすると、多い数とはいえない。土器組成を意識して器種を揃えようとしたが、接合する以前に甕類は少なく、器台や高杯も同様で、小振りな器種である埴や杯が壁際に残るだけというのが出土の実態である。この遺跡での土器についての特徴といえよう。

須恵器は、1号古墳への副葬品と住居跡から出土したものである。古墳では杯と提瓶が前庭に置かれ、住居跡では高杯、甕が破片で出土しているが数としては少ない。用途が特定されていた器種なのであろう。

土製品のうち、手づくね、土玉、勾玉は祭祀の用途を思い浮かべるが、紡錘車は実用であるらしい。手づくねのうちの何点かは、実用と見てもよいだろうがここに含めた。粘土塊は、炉で使用する枕石と通称されるものの代用品である。この種類の粘土塊は、カマドの支脚では時々見られるが、残る焼土塊は深鉢など口縁部の装飾品か破損した勾玉の一部であろうか。

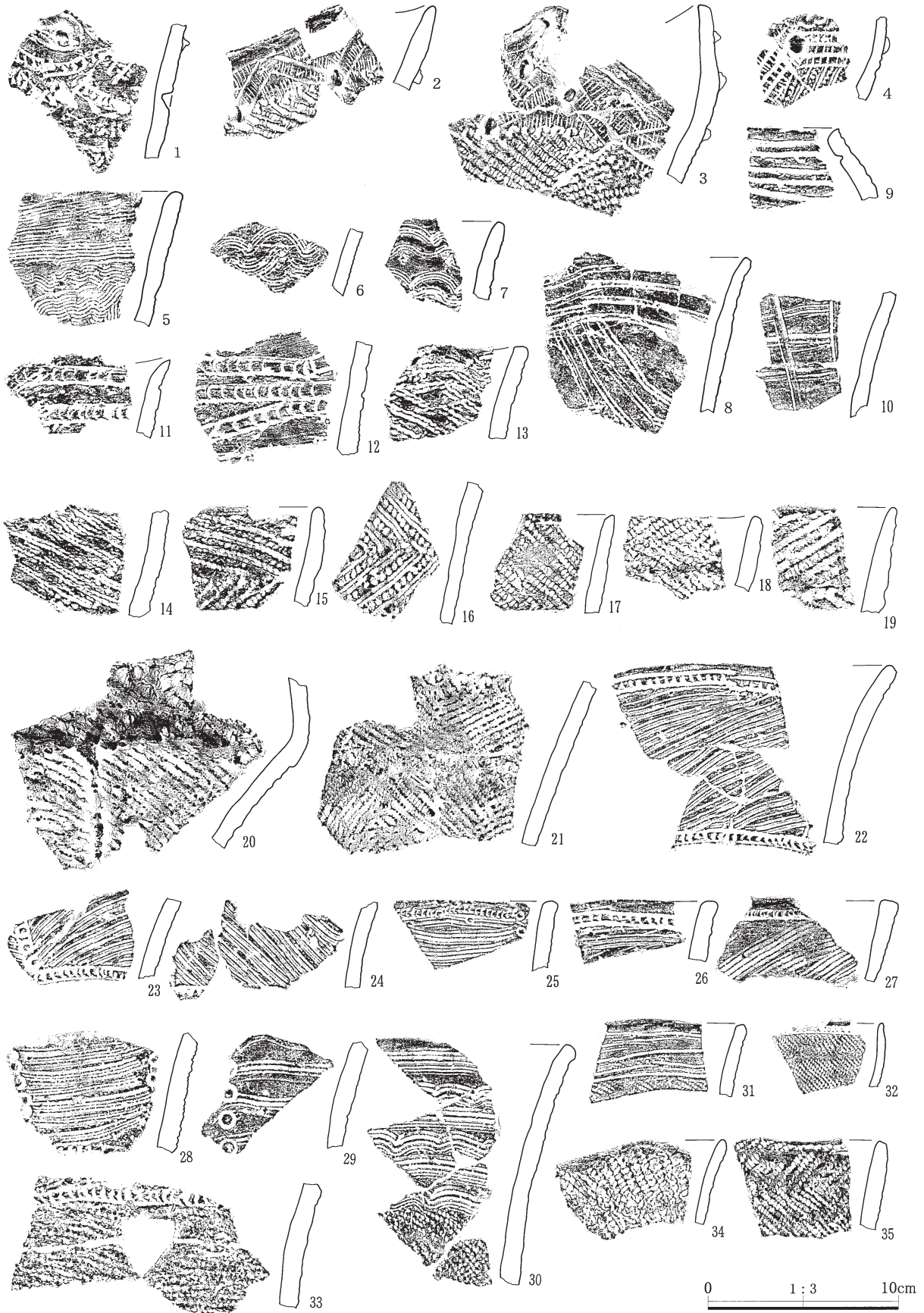
金属製品は、1号古墳の副葬品が主となっている。大刀、鉄鎌は、土地改良の削平した時に四散したもので割れ口が新しく、本来は優に現状の倍以上の長さがあったであろう。耳環は、攪乱をまぬがれた北東隅で出土した。当事業団で保管する300点以上の耳環の中でも稀な中空品である。中空としては、代表的な所では綿貫観音山古墳があり、残る所を集めても5例ほどだという。注目の逸品といえる。銅滓は、1区のグリッドからの出土である。製品が溶けたのか、それとも遺跡内で加工していたものなのか、時期とともに特定できないのが残念な遺物である。

最後の石器・石製品は、遺構から出土したものと遺構外からとが半ばする。定型石器を優先した。

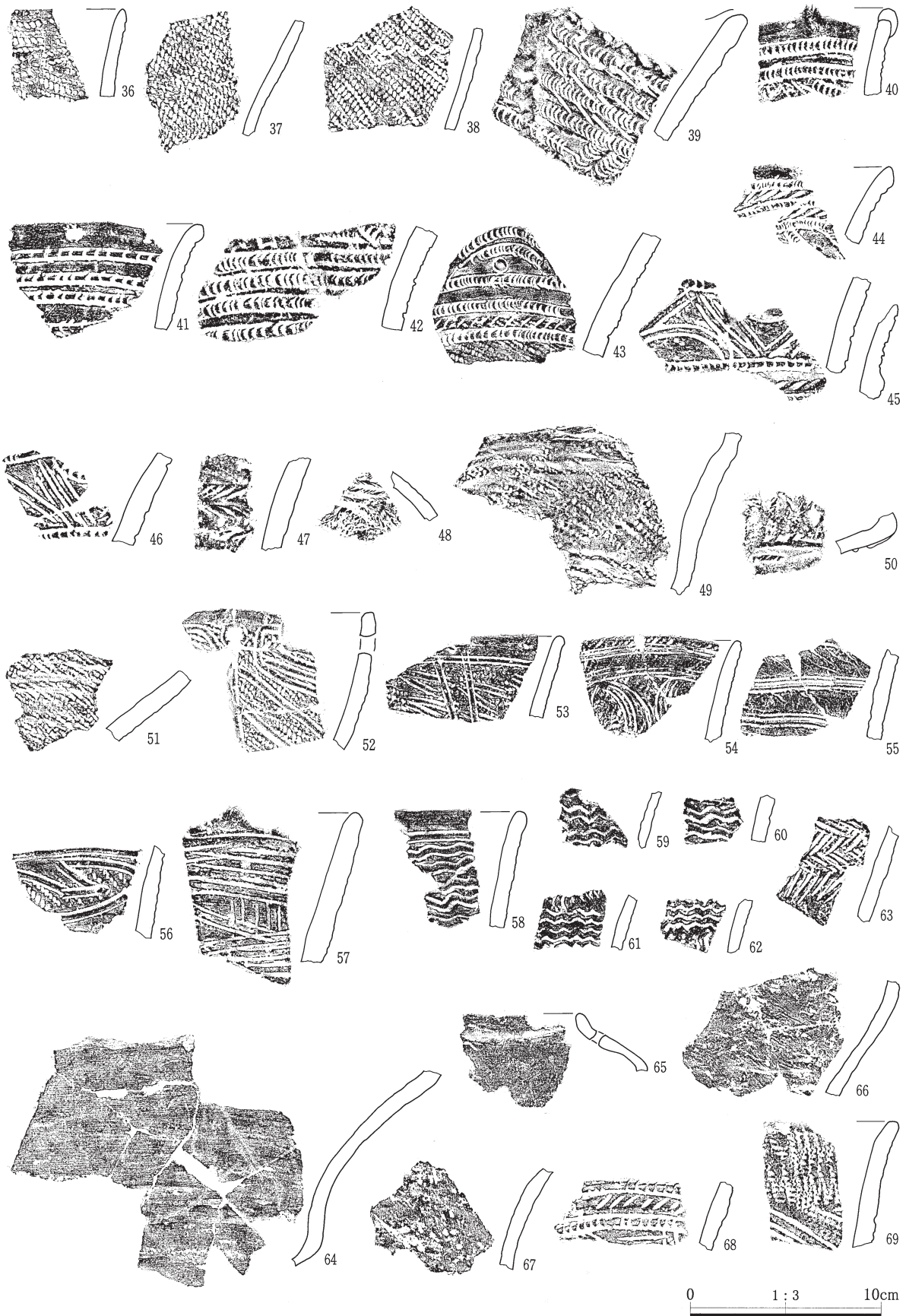
2 遺構外遺物 (第134～138図 PL76～78)

遺構外の遺物は、116点を掲載する。圧倒的に縄文時代が多いのは、全出土量の半分以上を占めるからである。1～4は、関山式、5～21は黒浜式である。5～7が波状沈線文、8～10が平行沈線文、11、12が平行爪形文、13～21が胴部に施文された縄文である。22～38は諸磯a式である。22～29が平行爪形文で区画した中に円形の刺突文を施している。30、31は、縄文地に平行沈線文、32、33は縄文地に平行爪形文を施文している。34～38は縄文を施文するだけの胴部の破片である。39～57は、諸磯b式である。39～44は平行爪形文、45～51は浮線文、52～57は平行沈線文、58～62は山形の平行沈線文、63は矢羽根状の平行沈線文、64、65が浅鉢、66、67が無文である。68～72は浮島式である。68は平行爪形文の間を刻み目で充てん、69、70は波状貝殻文と平行沈線文の組み合わせ、71、72は貝殻腹縁による鋸歯縁文である。73～76が加曽利E式、77が3区で1点だけ出土した晩期である。

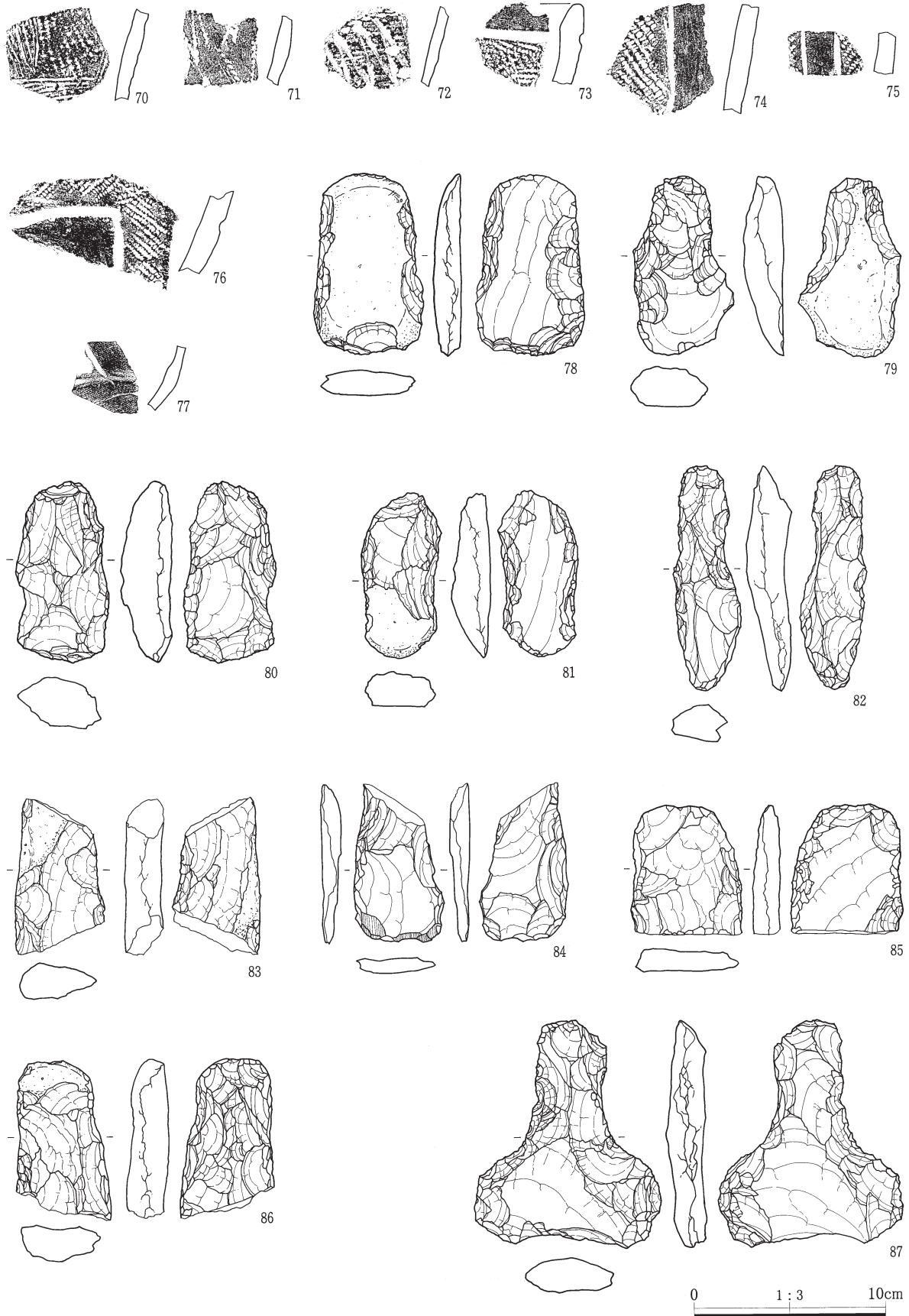
78～87は、短冊形と撥形の打製石斧、88～91は磨製石斧である。92～104はスクレイパー、105～107は石匙、108～113は石鎌である。114は凹石、115は鉄釘、116は銅滓である。



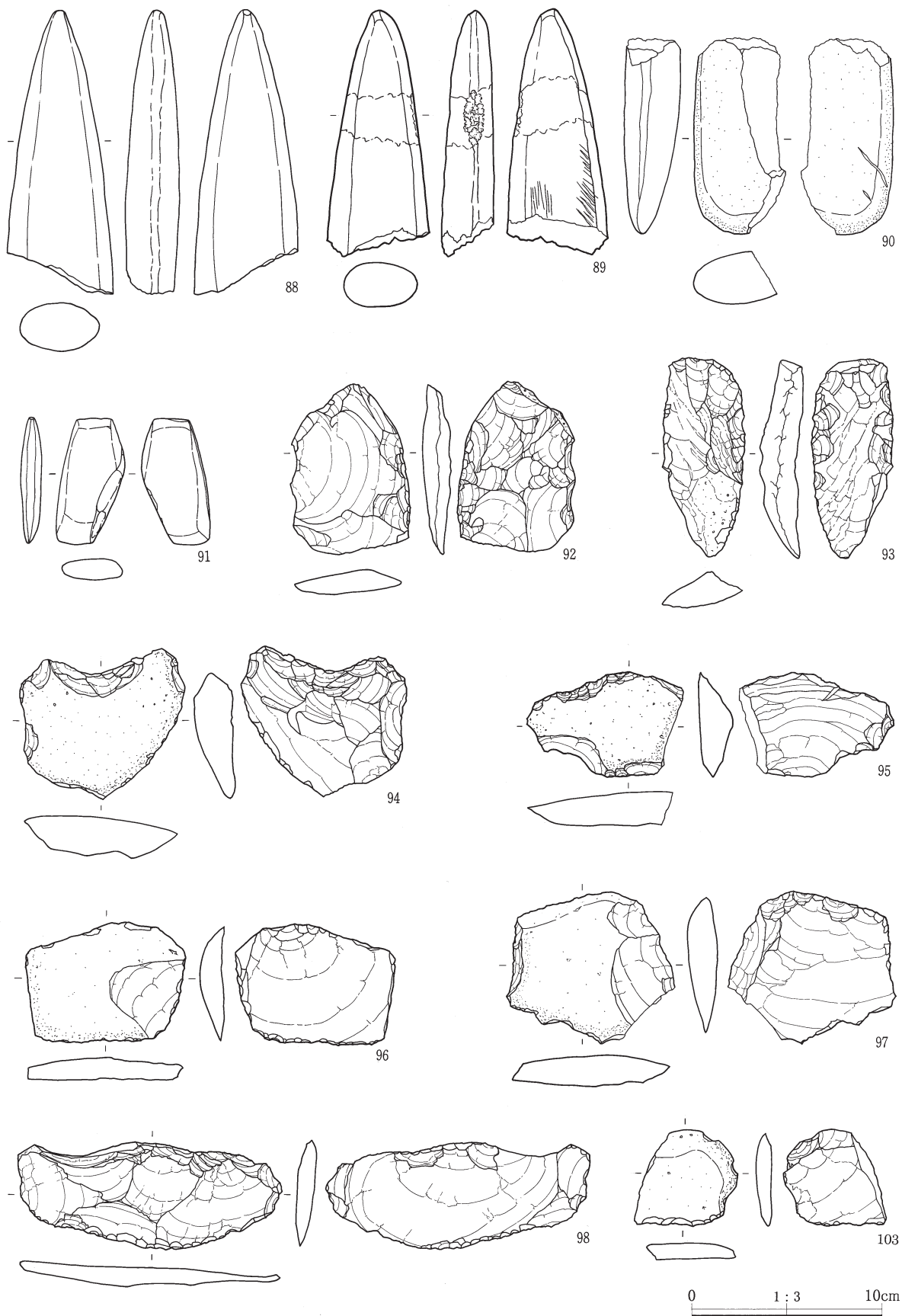
第134図 遺構外遺物図(1)



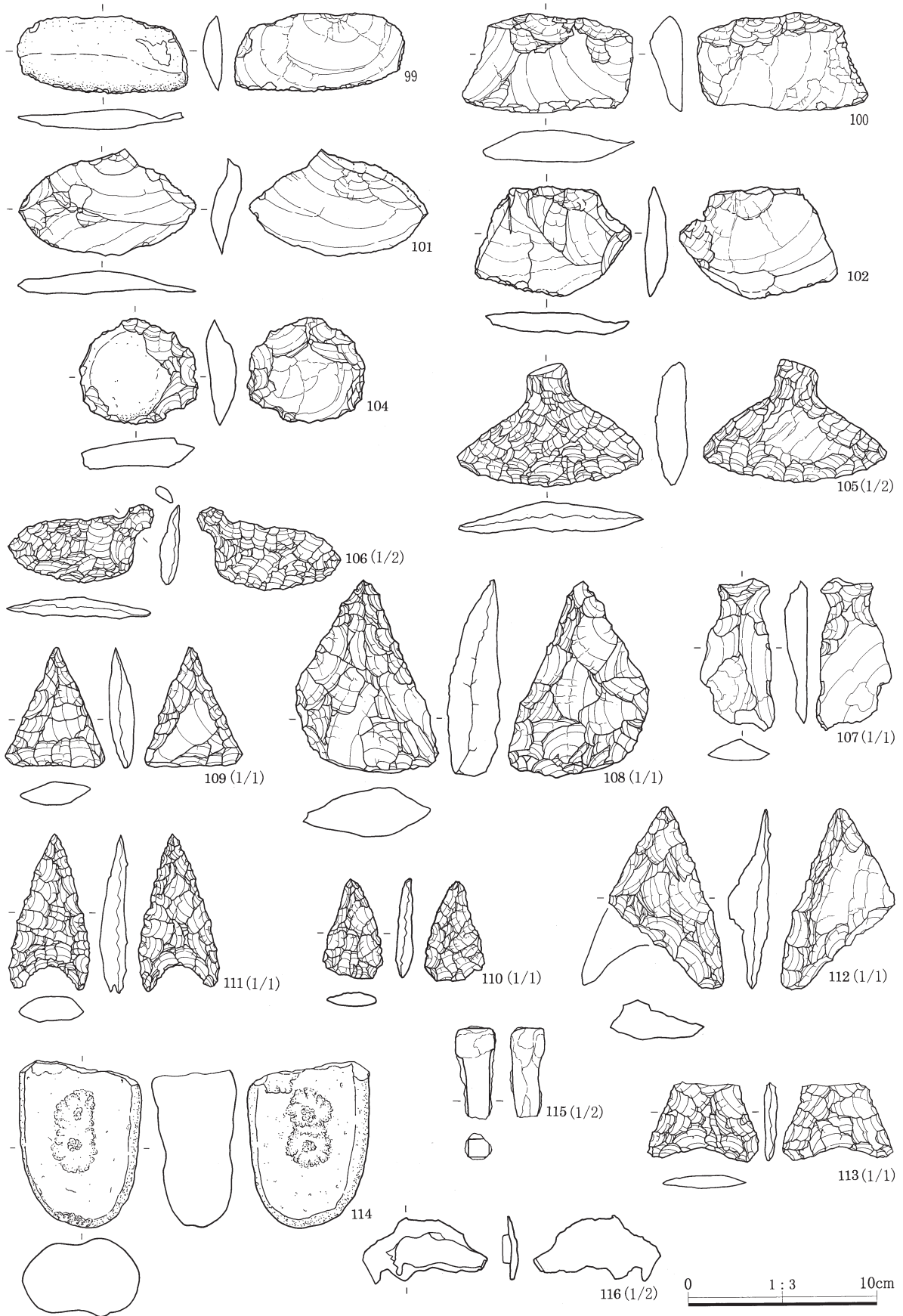
第135圖 遺構外遺物圖(2)



第136図 遺構外遺物図(3)



第137図 遺構外遺物図(4)



第138図 遺構外遺物図(5)

第5章 自然科学分析

1 はじめに

ここでは、次の8つの分析結果を報告する。これらは、5区にあるピア1（略称P1）と通称されている構造物部分から出土した資料をもとにしたもので、そこで検出された水田や溝の説明は第4章第5節で記述している。なお、1区のテフラの特定を目的とした分析も行っているが、その結果は平成21年度刊行予定の「上武道路・旧石器時代編（2）」に掲載する予定である。分析は、以下の通りである。

- 1 亀泉坂上遺跡5区の花粉分析
- 2 亀泉坂上遺跡のプラントオパール
- 3 亀泉坂上遺跡から出土した大型植物化石
- 4 放射性炭素年代分析
- 5 亀泉坂上遺跡出土木材の樹種
- 6 貯蔵穴内出土甕内の内容物分析
- 7 住居跡出土赤色塊の分析
- 8 亀泉坂上遺跡・堤沼上遺跡出土炭化材の樹種同定－古墳時代と古代の用材選択－

2 分析結果

花粉分析では、花粉帯Ⅰ～Ⅲを設定し、大型植物化石分析、プラントオパール分析の各結果を合わせて遺跡周辺の古植生を検討している。

花粉帯Ⅰ 推定4世紀中葉から弥生時代の初頭を中心とした時代

遺跡周辺の丘陵部には、コナラ亜属を中心にクマシデ属－アサダ属やケヤキ属などを交えた落葉広葉樹林が優勢で、スギやヒノキなどの針葉樹などの針葉樹類は生育地を狭め、河道を含めたその周辺には水生植物が生育する湿地や水域の存在も予想されている。

花粉帯Ⅱ 4世紀中葉から浅間Bテフラ降下頃の中世初めを中心とした時代

コナラ亜属を中心とした落葉広葉樹林が遺跡周辺の丘陵部を中心に広く成立していたが、コナラ亜属は次第に縮小していった。河道周辺では幾分水深のある水域が予想されるが、やがては樹木類の堆積により次第に浅くなり、ホタルイ属などがみられる湿地となり、ヨシ属の大群落も成立していた。

花粉帯Ⅲ 中世後半から近世にかかる時期

落葉広葉樹林や常緑広葉樹林が縮小したのに代わって、ニヨウマツ類の急増が特徴的で、アカマツなどの二次林が遺跡周辺丘陵部において急速に拡大していったとみられる。その理由としては、人間の木材利用が大きく影響していると考えられる。この時期、旧河道部では依然として水田耕作が行われており、一部ソバの栽培も行われている。植林が予想されるスギの分布拡大も見られた。

プラントオパールは、8箇所のうち6箇所ですべて10,000個以上という高い数値が得られた。これは水田が検出されていることから当然視できるが、開田の時期としては4世紀中葉以降が推定されている。開田当時は、ヨシ属が繁茂していたのがやがて減少し、代わってキビ属、水田雑草の増加していることが明らかとなった。プラントオパール以外からも、水田耕作が定着していったことが示されている。

大型植物化石は、浅間Cテフラより下層で採取した8試料の分析結果である。木本22、草本8が特定され、その他菌核が得られた。おおむね、落葉広葉樹と考えられ、有用植物としてオニグルミ、コナラ亜属・コナラ属があげられている。堆積環境は、幾分水深があり流れも伴っていた可能性と、やがて、水位の低い湿地が水溜まりに変化したのではないかとされている。また、有害なサポニンを含むエゴノキが出土しているが、民俗例を参考にして河川漁労に利用された可能性がないか、検討していく必要が提起されている。

杭の可能性のある木材の樹種は、2点ともコナラ節と分析された。樹皮つきの芯持ち丸木材で外年輪部分の形成状態をみると秋～冬であるが、年代測定の結果からは両出土材は同時期に採取あるいは堆積したものではないことが明らかとなっている。コナラ属は、花粉分析でも多く検出されており、この試料も遺跡周辺で採取したと考えられる。

放射性年代測定は、AMS法により2本の杭について行った。c a l A D 240年、c a l A D 30、同40、同50年の年代値が得られた。

甕内の内容物分析は、17号住居跡貯蔵穴から出土したものである。埋没時に混入したものではなく、貯蔵穴に収納されていたものである。結果は、甕の中には籾殻がついたままの米が入っていて、住居が焼失した際に灰化したものと考えられる。土器の容量としては少ないが、出土状態からみて食用と考えるべきであろう。米が調理やそれに至るまでの間、どう管理されていたか興味深い結果となった。なお、肝心の甕については、分析終了後所在が不明となり、今報告には掲載していない。

赤色塊の分析は、11号、17号、18号、3軒の住居跡から出土したものについて、化学組成を調べるために蛍光X線分析と鉱物組成を調べるためにX線回析を行った。11号住居跡は、6世紀後半の住居跡である。分析の結果、赤色塊は褐鉄鉱からなるベンガラであり、パイプ状ベンガラ粒子や沼沢湿地付着種群の珪藻化石を含むことから、水性起源の褐鉄鉱であることが推定される。低地に近い5区にある縄文時代の10号土坑では鬼板と呼ぶ、鉄分の凝集層が検出されている。時代は11号住居跡とは大きく異なるが、赤色塊の採取地を考えるヒントである。

炭化材の樹種同定は、22号住居跡をはじめとした12軒、182点の炭化材で行った。4世紀と6世紀の2つの時期に分かれ、合わせて隣接する堤沼上遺跡の14点を掲載して古墳時代と古代の用材選択の傾向を比較した。結果は、182点のうち、クヌギ節が117点、コナラ節が35点とクヌギ節・コナラ節が選択的に利用されている。これに、古代になるとクリが加わる。焼失住居での出土頻度の差は、時期差というよりも材の形状の違いから、構造材の差ではないかと指摘されている。今後は、調査時に用材の出土位置や形態を十分観察、検討する必要性が説かれている。また、クヌギ節、コナラ節の成長について、年輪幅の平均値が試料の多い古墳時代前期でクヌギ節が1.9mm、コナラ節が1.4mmと、ともに成長の悪いことが判明している。類例を待ちたい結果内容である。

最後の自然化学分析は、1区の6箇所地点についてテフラの特定を目的に行った。結果は、下位より榛名箱田テフラ（H r - H A、約3万年前）以降、浅間粕川テフラなど、多くの指標テフラを検出した。これについては、上武道路旧石器時代編（2）で報告する予定である。

1 亀泉坂上遺跡5区の花粉化石

鈴木 茂 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

亀泉坂上遺跡5区において浅間Cテフラの低位より種実類を多く含む木本質泥炭が検出された。この木本質泥炭には花粉化石も良好な状態で保存されていると予想され、種実類と合わせ遺跡周辺の当時の植生を検討するうえで有効な資料が得られることが期待された。こうしたことからこの木本質泥炭およびその上位層について土壌試料を採取し花粉分析を行った。また上位層については稲作の可能性が考えられることから、同試料を用いてプラント・オパール分析も行われている。

2. 試料

試料は第5調査区西壁の2地点より採取された12試料である(図1)。以下に各層・各試料について簡単に記す。

最上部1層は土地改良時の盛土(ローム質土)、2層は褐色の砂質シルトで、赤褐色の酸化鉄集積が縦方向に散在し、1783年に降下した浅間Aテフラ(A s-A)が混入している。3層(試料1)も褐色の砂質シルト(やや粘土質)で、赤褐色の酸化鉄集積が全体に多く認められ、1108年に降下した浅間Bテフラ(A s-B)が混入している。5層(試料2)は黒褐色の砂質シルトで、浅間Bテフラが多く認められる。また低位層が火災状に混入・散在している。7層(試料3)は黒褐色の泥炭質粘土で、浅間Bテフラ(6層)が塊状に観察される。なお本層は浅間Bテフラ直下の水田耕作土層と考えられている。8層(試料4,5)は黒灰色の砂質粘土で、4世紀中葉に降下した浅間Cテフラ(A s-C)が多く混入している(C混)。13層(試料6~8)は褐色の木本質泥炭で中上部にレキが認められ、下部に材片が多く含まれている。最下部15層は青灰色の砂レキである。また本地点の南側においては木本質泥炭と砂レキ層の間に粘土が認められ、この粘土層からも試料を採取した。すなわち木本質泥炭層(13層)の直下は灰色の砂(16層)、さらに下位の14層(試料9~11)は黒色の泥炭質粘土で、砂がラミナ状に認められる。15層の上部は薄層状に認められる黒灰褐色の泥炭質粘土混じりの灰色砂(試料12)で、その下は黄色を帯びた青灰色の砂レキである。

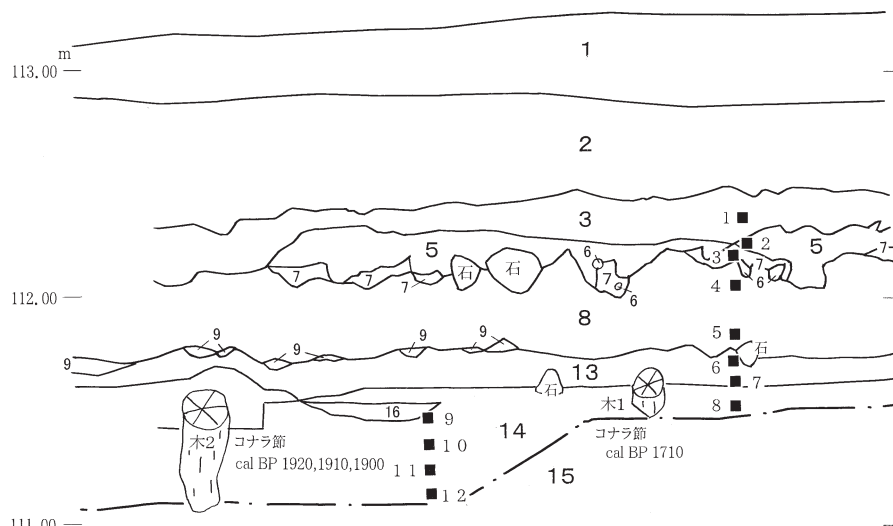


図1 試料採取地点付近の土層断面(5区西壁)と試料採取層準

第5章 自然科学分析

なおこの旧河道部より丸木材2点（いずれもコナラ節）が検出され、AMS法による年代測定が行われている。その結果の詳細については年代測定の節を参照して頂きたいが、木1がcal BP 1710(PLD-3044)、木2がcal BP 1920,1910,1900(PLD-3045)である。

3. 分析方法

花粉分析は上記した12試料について以下のような手順にしたがって行った。

試料（湿重約3～5g）を遠沈管にとり、10%の水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後、0.5mm目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46%のフッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理（無水酢酸9：1濃硫酸の割合の混酸を加え3分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成して行い、その際サフラニンにて染色を施した。

4. 分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は樹木花粉42、草本花粉37、形態分類を含めたシダ植物胞子3の総計82である。これら花粉・胞子の一覧を表1に、それらの分布を図2に示したが、この分布図左側の地質柱状図は2地点を合わせた模式的なものである。また分布図について、樹木花粉は樹木花粉総数を、草本花粉・シダ植物胞子は全花粉胞子総数を基数とした百分率で示してある。なお、図および表においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示し、クワ科・バラ科・マメ科の花粉は樹木起源と草本起源のものがあるが、各々に分けることが困難なため便宜的に草本花粉に一括していれてある。

検鏡の結果、得られた樹木花粉において層位的に変化が認められたことから下位より花粉化石群集帯Ⅰ～Ⅲを設定した。

花粉帯Ⅰ（試料9～12）はコナラ属コナラ亜属の優占とクマシデ属ーアサダ属の増加で特徴づけられる。反対にスギやイチイ科ーイヌガヤ科ーヒノキ科（以後ヒノキ類と略す）は減少傾向を示している。その他マツ属複雑管束亜属（アカマツやクロマツなどのいわゆるニヨウマツ類）、ハンノキ属、ニレ属ーケヤキ属、カエデ属が5%前後の出現率を示している。草本類ではイネ科とヨモギ属が多く、そのうちイネ科は試料11でピークを作るように増加・減少している。またヨモギ属は試料9で多産している。その他カヤツリグサ科、クワ科、カラムツソウ属などが検出されており、最下部試料12においてはシダ植物のゼンマイ科がやや多く得られている。

花粉帯Ⅱ（試料2～8）はコナラ亜属の優占で特徴づけられるが、産出傾向としては上部に向かい緩やかに減少している。スギやヒノキ類、コナラ属アカガシ亜属はなだらかなピークを作るように増加・減少傾向を示しており、ニヨウマツ類は本帯最上部試料でやや出現率を上げ、その後の急増の予兆を示している。その他トネリコ属が試料7で突出した出現を示しており、ニレ属ーケヤキ属も試料6でやや多く検出されている。草本類ではイネ科が試料6、7を除き高い出現率を示している。次いでカヤツリグサ科が多く、試料5より上位で増加し10%を越えている。花粉帯Ⅰで多産していたヨモギ属は減少し、5%前後と安定した出現率を示している。また少ないながら水生植物が検出されており、下部においてガマ属が連続して得られ、上部においてオモダカ属やミズアオイ属が多くの試料で得られている。

花粉帯Ⅲ（試料1）はニヨウマツ類の多産で特徴づけられ、スギも多く得られている。一方他の分類群は

表1 産出花粉化石一覧表

和名	学名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
樹木													
モミ属	<i>Abies</i>	1	3	7	1	4	4	1	2	1	-	-	-
ツガ属	<i>Tsuga</i>	5	2	8	2	3	-	2	3	1	3	-	1
トウヒ属	<i>Picea</i>	-	-	2	2	2	-	-	3	1	1	1	-
カラマツ属	<i>Larix</i>	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	1
マツ属単維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Haploxyylon</i>	1	-	1	-	1	-	-	-	-	2	3	1
マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>	102	16	3	1	4	1	1	3	5	4	5	-
マツ属(不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	24	3	-	-	2	-	-	2	-	2	2	3
コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>	-	-	1	2	1	2	-	-	-	-	-	-
スギ	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don	61	11	25	23	17	10	5	3	4	5	10	27
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	T.-C.	4	15	27	25	17	2	1	2	5	22	9	31
ヤナギ属	<i>Salix</i>	-	2	-	2	-	-	-	-	2	1	4	1
サワグルミ属-クルミ属	<i>Pterocarya-Juglans</i>	1	3	4	4	6	1	9	2	3	2	1	1
クマシデ属-アサダ属	<i>Carpinus - Ostrya</i>	6	28	15	18	13	7	5	6	31	36	15	3
カバノキ属	<i>Betula</i>	-	4	2	4	9	3	-	2	3	5	7	3
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	4	11	4	3	6	2	1	5	4	10	4	10
ブナ	<i>Fagus crenata</i> Blume	5	12	7	18	14	4	4	1	2	-	3	-
イヌブナ	<i>Fagus japonica</i> Maxim.	1	2	2	5	4	-	1	-	-	-	-	-
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	32	55	61	46	71	87	59	102	31	64	52	45
コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	10	10	18	41	32	16	13	2	1	1	1	1
クリ属	<i>Castanea</i>	1	4	3	2	-	6	1	-	-	-	-	-
シイノキ属-マテバシイ属	<i>Castanopsis - Pasania</i>	1	1	-	2	-	3	-	-	-	-	-	1
ニレ属-ケヤキ属	<i>Ulmus - Zelkova</i>	5	8	8	5	9	39	19	6	4	5	7	11
エノキ属-ムクノキ属	<i>Celtis-Aphananthe</i>	2	6	2	4	4	5	6	1	2	1	1	-
フサザクラ属	<i>Euptelea</i>	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カツラ属	<i>Cercidiphyllum</i>	-	1	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-
サンショウ属	<i>Zanthoxylum</i>	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
シラキ属	<i>Sapium</i>	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ウルシ属	<i>Rhus</i>	-	2	1	-	-	1	2	-	-	-	-	1
ニシキギ科	Celastraceae	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-
カエデ属	<i>Acer</i>	-	1	2	-	1	4	-	3	4	1	4	10
トチノキ属	<i>Aesculus</i>	-	1	1	1	-	1	-	1	1	2	1	-
ブドウ属	<i>Vitis</i>	-	6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
シナノキ属	<i>Tilia</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
マタタビ属近似種	cf. <i>Actinidia</i>	-	-	-	1	1	-	1	-	-	-	-	-
グミ属	<i>Elaeagnus</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ウコギ科	Araliaceae	-	1	1	-	-	4	1	1	-	1	2	1
エゴノキ属	<i>Styrax</i>	-	1	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-
イボタノキ属	<i>Ligustrum</i>	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
トネリコ属	<i>Fraxinus</i>	-	-	-	1	1	2	89	8	2	1	2	-
ニワトコ属近似種	cf. <i>Sambucus</i>	-	1	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ガマズミ属	<i>Viburnum</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
スイカズラ属	<i>Lonicera</i>	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
草本													
ガマ属	<i>Typha</i>	-	1	-	-	5	2	2	2	-	2	1	-
ミクリ属	<i>Sparganium</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
ヒルムシロ属	<i>Potamogeton</i>	-	-	-	1	-	-	-	-	-	2	2	-
サジオモダカ属	<i>Alisma</i>	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
オモダカ属	<i>Sagittaria</i>	1	-	3	3	4	-	-	-	-	-	-	-
スプタ属-ミスオオバコ属	<i>Blyxa - Ottelia</i>	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ科	Gramineae	292	564	191	138	209	23	17	223	214	196	484	54
カヤツリグサ科	Cyperaceae	35	151	122	73	74	6	4	25	17	15	17	-
ホシクサ属	<i>Eriocaulon</i>	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ツユクサ属	<i>Commelina</i>	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ミスアオイ属	<i>Monochoria</i>	1	-	-	1	2	-	-	-	-	-	-	-
クワ科	Moraceae	-	10	10	19	7	2	-	4	14	5	26	4
ギンギシ属	<i>Rumex</i>	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
サナエダ節-ウナギツカミ節	<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria-Echinocaulon</i>	-	1	-	-	1	-	-	1	1	1	1	-
イタドリ節	<i>Polygonum</i> sect. <i>Reynoutria</i>	-	3	-	-	-	-	-	-	2	1	1	2
ソバ属	<i>Fagopyrum</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アカサ科-ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	5	8	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1
ナデシコ科	Caryophyllaceae	5	5	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-
カラマツソウ属	<i>Thalictrum</i>	-	2	1	-	3	-	2	10	13	8	8	5
他のキンボウゲ科	other Ranunculaceae	-	1	1	-	-	-	1	2	8	3	1	-
タケニグサ属	<i>Macleaya</i>	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アブラナ科	Cruciferae	24	7	-	1	1	1	-	-	-	-	-	-
ワレモコウ属	<i>Sanguisorba</i>	-	7	-	-	-	1	-	-	-	2	6	8
他のバラ科	other Rosaceae	-	5	1	-	-	2	-	-	1	3	3	10
マメ科	Leguminosae	2	1	1	4	5	1	2	3	5	1	14	8
トウダイグサ科	Euphorbiaceae	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
キカシグサ属	<i>Rotala</i>	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アリノトウグサ属	<i>Haloragis</i>	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
セリ科	Umbelliferae	-	1	-	1	1	1	1	1	1	1	1	2
シソ科	Labiatae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
ヘクソカズラ属	<i>Paederia</i>	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
オミナエシ属	<i>Patrinia</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ツリガネニンジン属-ホタルブクロ属	<i>Adenophora - Campanula</i>	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	1	-
ベニバナ属	<i>Carthamus</i>	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	9	103	30	39	53	25	18	106	604	116	259	146
他のキク亜科	other Tubuliflorae	1	10	2	4	4	1	1	1	2	-	5	12
タンポポ科	Liguliflorae	5	21	1	2	5	-	-	1	1	1	2	13
シダ植物													
ゼンマイ科	Osmundaceae	-	1	-	-	2	2	-	4	6	8	16	53
単条型孢子	Monolete spore	7	21	47	5	25	22	15	49	9	13	28	8
三条型孢子	Trilete spore	1	2	1	1	8	4	2	-	4	1	10	2
樹木花粉													
樹木花粉	Arboreal pollen	267	214	207	215	226	204	222	158	108	171	134	154
草本花粉	Nonarboreal pollen	384	911	367	288	374	66	48	380	885	359	834	265
シダ植物孢子	Spores	8	24	48	6	35	28	17	53	19	22	54	63
花粉・孢子総数	Total Pollen & Spores	659	1149	622	509	635	298	287	591	1012	552	1022	482
不明花粉													
不明花粉	Unknown pollen	6	25	6	7	16	19	18	23	32	27	17	29

T. - C. は Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae を示す

いずれも減少している。草本類では依然としてイネ科が高い出現率を示して最も多く検出されている。またアブラナ科がやや目立って認められ、ソバ属や水生植物のオモダカ属やミズアオイ属も若干得られている。

5. 亀泉坂上遺跡周辺の古植生

以上の花粉分析結果を基に大型植物化石分析結果、プラント・オパール分析結果を合わせ遺跡周辺の古植生について検討した。

花粉帯Ⅰ期：時代については遺物がなく不明であるが、丸木の年代測定結果や上位層に認められている浅間Cテフラの年代（4世紀中葉）から弥生時代の初め頃を中心とした時代ではないかと思われる。この時期の遺跡周辺の丘陵部はコナラ亜属を中心にクマシデ属－アサダ属やケヤキ属、カエデ属などを交えた落葉広葉樹林が優勢であった。一方スギやヒノキ類の針葉樹類は生育地を狭め、その要因については不明であるが一つには土地の安定化が要因ではないかと思われる。すなわち砂レキの堆積から推測される土地の不安定な時期にはスギやヒノキ類が生育していたが、その後の14層にみられる粘土の堆積から次第に河川の影響が弱まり、土地的に安定し、本地点ではクマシデ属－アサダ属が生育地を拡大したことが推察される。また河道を含めその周辺にはガマ属やヒルムシロ属などの水生植物が生育する湿地や水域の存在も予想され、ヤナギ属やハンノキ属、トネリコ属といった湿地林構成要素の樹木類も生育していた。この河道の土手部を中心にイネ科やヨモギ属の草本類が多く生育しており、クワ科やカラマツソウ属およびシダ植物なども生育していた。

花粉帯Ⅱ期：時代としては、下限が浅間Cテフラ降下年代の4世紀中葉、上限が浅間Bテフラ降下年代直後頃の中世初めを中心とした年代と推測される。この期間もコナラ亜属を中心とした落葉広葉樹林が遺跡周辺丘陵部を中心に広く成立していたが、コナラ亜属は次第に縮小していった。また構成樹種も異なり、木本泥炭堆積期の頃はケヤキが増加し、その他イヌシデ、アサダ、カエデ属などがみられた。また河道付近には先のハンノキ属やトネリコ属の成育が推測され、その他オニグルミやエノキ属などもみられたであろう。さらに花粉化石は認められなかったがエゴノキの生育が予想され、ミズキやムラサキシキブ属なども分布していた。この木本泥炭堆積期の初め頃はヒルムシロ属が生育する幾分水深のある水域の存在が予想されるが、上記の豊富な樹木類の堆積により次第に浅くなりホタルイ属などがみられる湿地となり、ヨシ属の大群落も成立していた。

その後の4世紀中葉以降には水田稲作が行われるようになり、カヤツリグサ科、オモダカ属、ミズアオイ属、キカシグサ属、ヨシ属、キビ族などが水田やその周辺に雑草群落を形成していた。この時期の落葉広葉樹林は依然としてコナラ亜属が中心であったが、先のケヤキに代わりクマシデ属－アサダ属（イヌシデ、アサダ）が目立つようになった。この落葉広葉樹林とともにアカガシ亜属の増加も認められ、このアカガシ亜属を主体とした常緑広葉樹林も一部に成立・拡大するようになった。またスギやヒノキ類の針葉樹類の分布拡大もみられ、ニヨウマツ類の増加も認められる。さらに花粉帯Ⅱ期を通じ森林の林縁部や空き地などにはネザサ節型のササ類（アズマネザサなど）やウシクサ族（ススキ、チガヤなど）が草地（アズマネザサーススキ群集など）を形成していた。

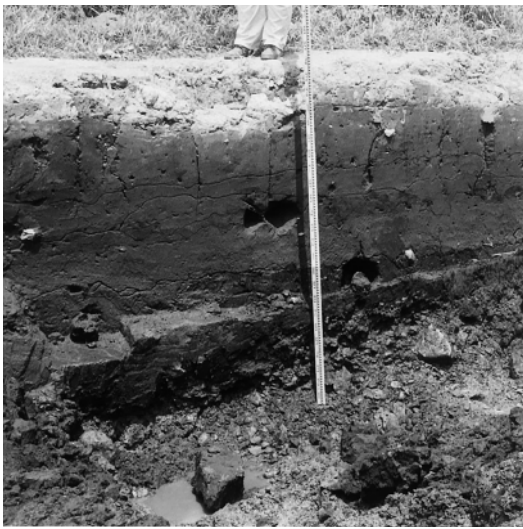
花粉帯Ⅲ期：時代としては中世後半から近世にかかる頃を中心とした時代と推測される。この時期になるとニヨウマツ類の急増が特徴的であり、アカマツなどの二次林が遺跡周辺丘陵部において急速に拡大していったとみられる。また植林が予想されるスギの分布拡大もみられた。一方落葉広葉樹林や常緑広葉樹林は縮小した。これは人間の木材利用が大きく影響していると考えられ、広葉樹類が薪炭材や農耕具などに利用さ

れ破壊された森林の跡地にアカマツなどのニヨウマツ類が侵入し二次林を形成し拡大していったのであろう。

この時期の旧河道部では依然として水田稲作が行われており、一部ソバの栽培も行われるようになった。

6. おわりに

以上のように亀泉坂上遺跡5区における弥生時代?以降の環境変遷が明らかとなった。また稲作のほかソバの栽培も予想された。さらにアブラナ科の栽培も考えられるが、観察されたアブラナ科花粉の形態観察からアブラナやダイコンなどの栽培種かナズナなどの雑草類かを区別することは現時点において非常に難しいのが現状である。よってアブラナ科の栽培については今後の課題としたい。



5区P1の西壁の様子



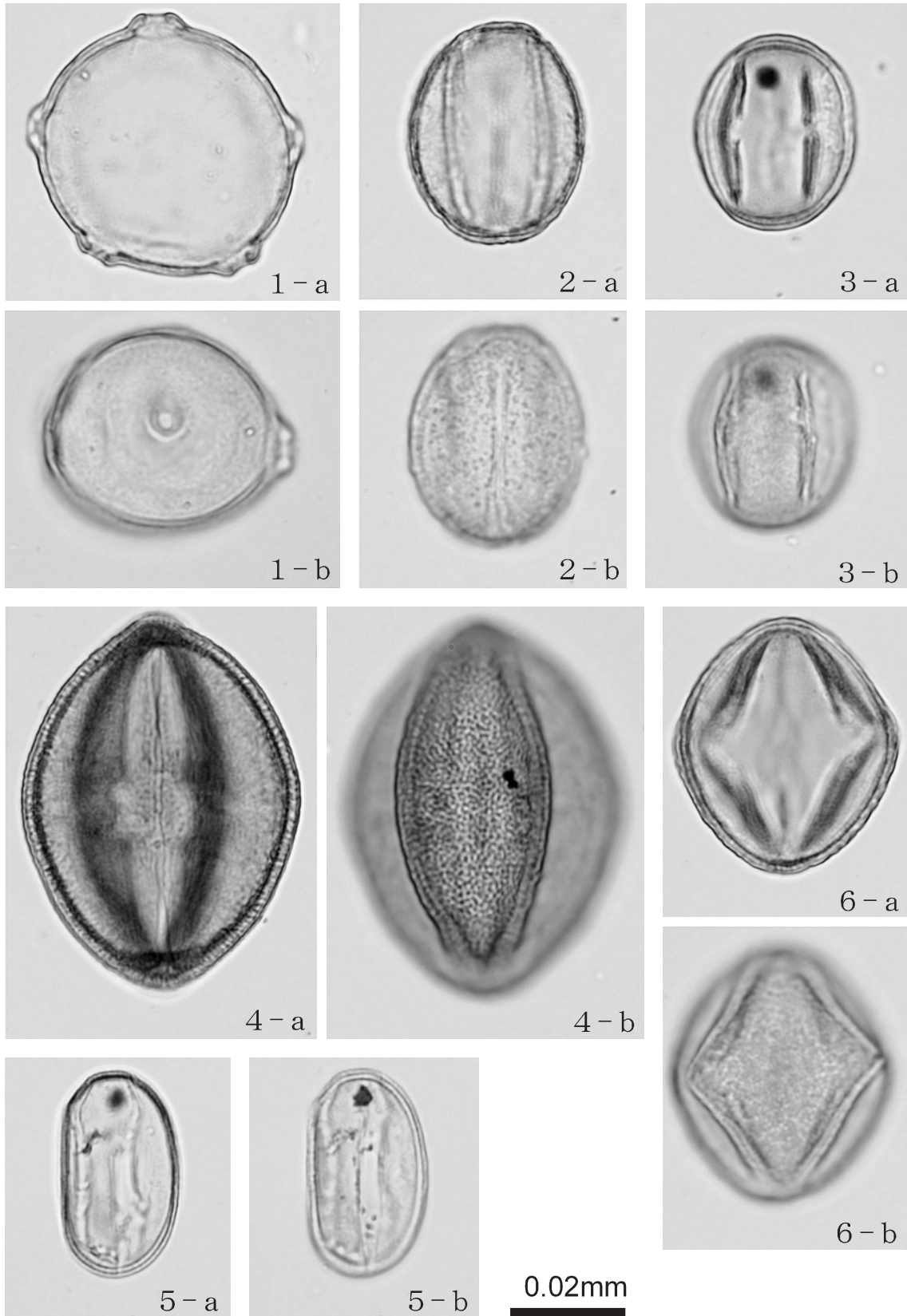
西壁で出土した試料 木2



試料 木1

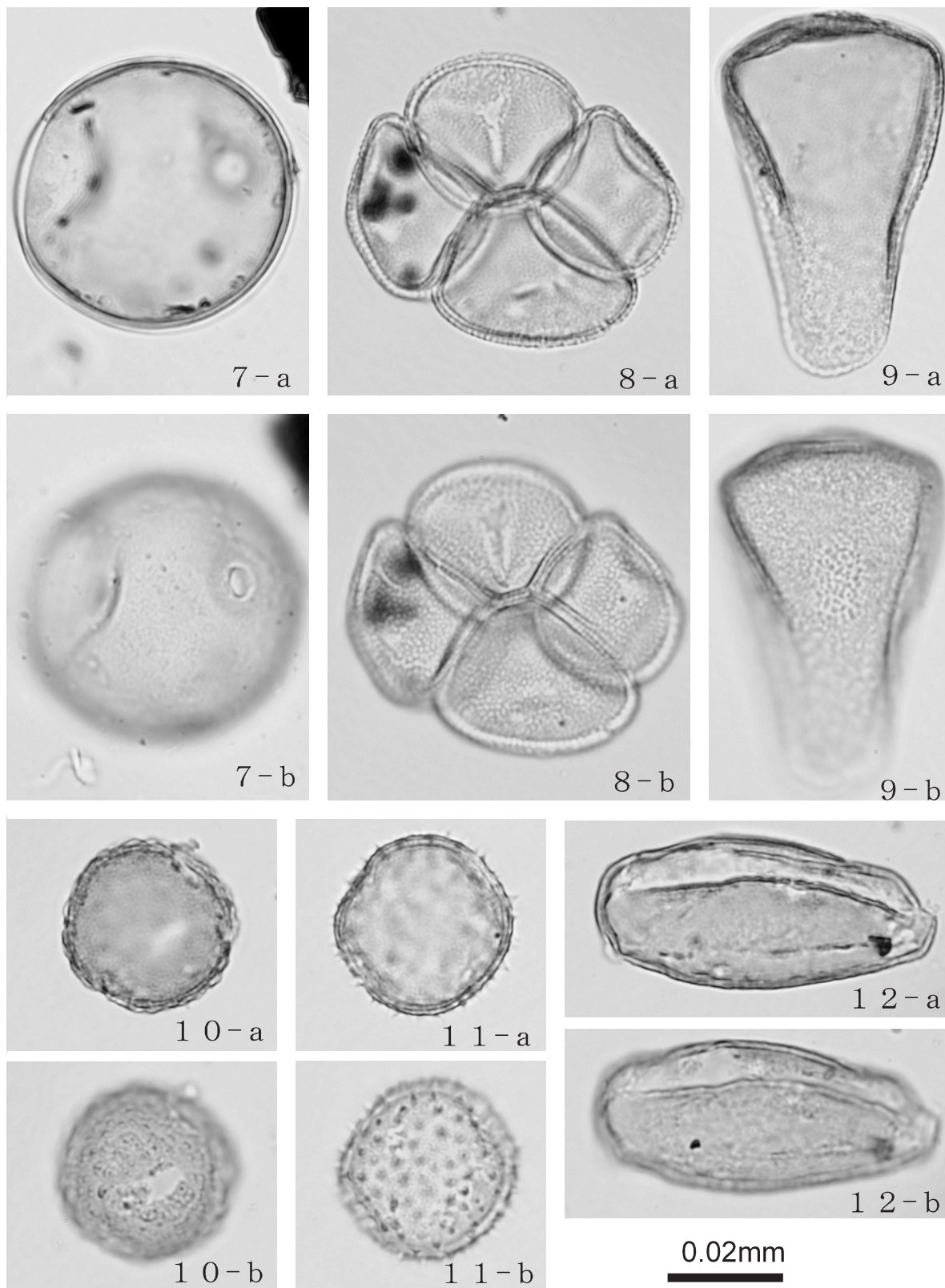


試料 木2



図版1 亀泉坂上遺跡5区の花粉化石 (scale bar : 0.02mm)

- 1 : クマシデ属-アサダ属 PLC.SS 3819 No. 5
- 2 : コナラ属コナラ亜属 PLC.SS 3814 No. 2
- 3 : コナラ属アカガシ亜属 PLC.SS 3818 No. 5
- 4 : シラキ属 PLC.SS 3820 No. 5
- 5 : トチノキ属 PLC.SS 3813 No. 2
- 6 : エゴノキ属 PLC.SS 3812 No. 2



図版2 亀泉坂上遺跡5区の花粉化石 (scale bar : 0.02mm)

7 : イネ科 PLC.SS 3815 No. 2

8 : ガマ属 PLC.SS 3821 No. 5

9 : カヤツリグサ科 PLC.SS 3822 No. 5

10 : キンボウグ属 PLC.SS 3816 No. 2

11 : オモダカ属 PLC.SS 3817 No. 5

12 : ミズアオイ属 PLC.SS 3823 No. 5

2 亀泉坂上遺跡のプラント・オパール

鈴木 茂 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

プラント・オパールとは、根より吸収された珪酸分が葉や茎の細胞内に沈積・形成されたもの（機動細胞珪酸体や単細胞珪酸体などの植物珪酸体）が、植物が枯れるなどして土壤中に混入して土粒子となったものを言い、機動細胞珪酸体については藤原（1976）や藤原・佐々木（1978）など、イネを中心としたイネ科植物の形態分類の研究が進められている。また、土壤中より検出されるイネのプラント・オパール個数から稲作の有無についての検討も行われている（藤原 1984）。このような研究成果から、近年プラント・オパール分析を用いて稲作の検討が各地・各遺跡で行われており、亀泉坂上遺跡においても同様の目的からプラント・オパール分析を行い、稲作の有無について検討した。

2. 試料と分析方法

試料は第5調査区の西壁より採取された8試料（試料番号1～8）である。各試料の土相については花粉分析の節を参照して頂きたいが、おおむね上部（試料1,2）がシルト、中部（試料3～5）が粘土、下部（試料6～8）が木本質泥炭となっている。プラント・オパール分析はこれら8試料について以下のような手順にしたがって行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約1g（秤量）をトールピーカーにとり、約0.02gのガラスビーズ（直径約40 μ m）を加える。これに30%の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により10 μ m以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作成し、検鏡した。同定および計数はガラスビーズが300個に達するまで行った。

3. 分析結果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料1g当りの各プラント・オパール個数を求め（表1）、それらの分布を図1に示した。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は試料1g当りの検出個数である。

検鏡の結果、下部の2試料を除く6試料よりイネのプラント・オパールが検出された。個数としては、全試料10,000個以上で、多くが60,000を越えるなど非常に多く検出されている。また穎の部分（籾殻）に形成

表1 試料1g当たりのプラント・オパール個数

試料番号	イネ (個/g)	イネ穎破片 (個/g)	ネザサ節型 (個/g)	クマザサ属型 (個/g)	他のタケ亜科 (個/g)	サヤヌカグサ属 (個/g)	ヨシ属 (個/g)	シバ属 (個/g)	キビ族 (個/g)	ウシクサ族 (個/g)	不明 (個/g)
1	65,900	1,400	243,100	13,700	19,200	3,700	1,400	15,100	22,000	22,000	26,100
2	27,800	0	190,400	15,900	5,300	0	10,600	5,300	15,900	34,400	21,200
3	81,500	0	402,800	25,600	12,800	0	33,600	1,600	36,800	24,000	43,200
4	65,100	0	258,900	11,300	9,900	1,300	25,500	0	19,800	26,900	24,100
5	75,700	0	298,100	24,700	6,200	0	23,200	0	26,300	15,400	29,300
6	16,300	0	507,400	22,800	9,800	1,300	47,200	0	16,300	14,600	22,800
7	0	0	1,110,300	18,900	17,200	0	63,500	0	0	24,000	36,000
8	0	0	28,700	8,000	0	0	0	0	3,200	6,400	4,800

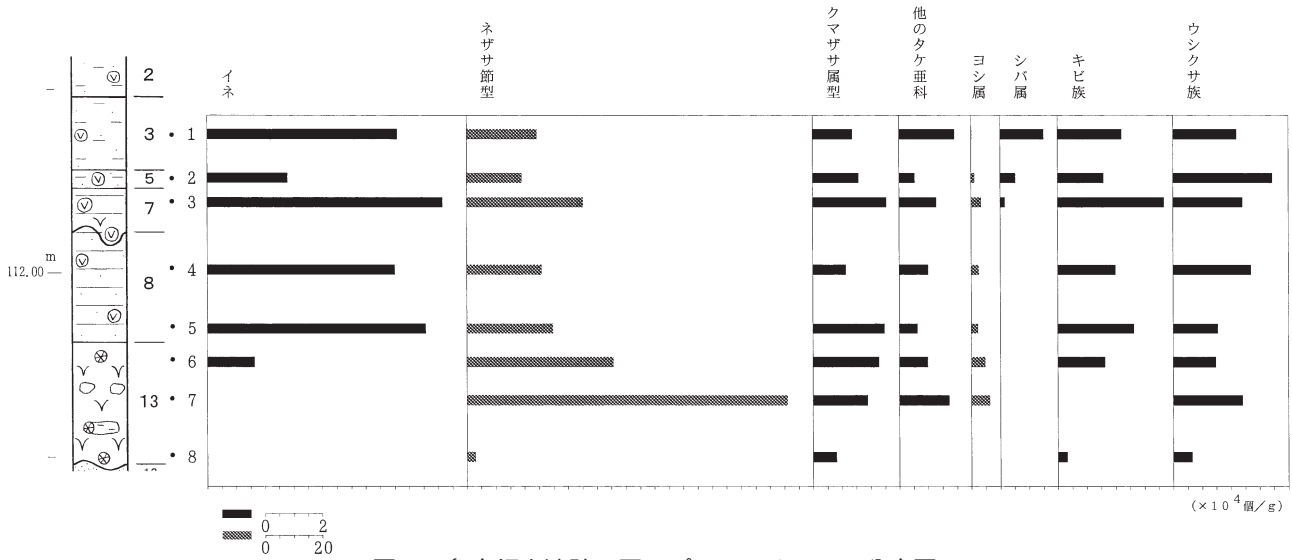


図1 亀泉坂上遺跡5区のプラントオパール分布図

される珪酸体の破片が試料1において若干認められている。最も多く観察されたのはネザサ節型で、多くが200,000個以上を示しており、試料7では1,000,000個を越えている。次いでヨシ属が多く、上部に向かい減少する傾向が認められる。また多くが10,000個以上と生産量の少ないヨシ属としては非常に高い数値を示しており、これはキビ族についても同様である。このキビ族やクマザサ属型、ウシクサ族は20,000個前後を示しており、シバ属は上部においてのみの産出で急増している。

4. 稲作について

上記したように、上位6試料よりイネのプラント・オパールが検出された。検出個数の目安として水田址の検証例を示すと、イネのプラント・オパールが試料1g当り5,000個以上という高密度で検出された地点から推定された水田址の分布範囲と、実際の発掘調査とよく対応する結果が得られている（藤原 1984）。こうしたことから、稲作の検証としてこの5,000個を目安に、プラント・オパールの産出状態や遺構の状況をふまえて判断されている。上記したように本遺跡においてはイネのプラント・オパールが検出された6試料すべてが10,000個以上であり、検出個数のみからはこれら6試料層準における稲作が行われていた可能性は高いと判断される。しかしながらイネが多量に検出されている試料6の土相は木本質泥炭であり、こういった土地で稲作が行われ始めたとは考え難い。この木本質泥炭（13層）と上位の砂質粘土（8層）境界部の浅間Cテフラはレンズ状で認められており、さらに8層中に混入していることから、耕作等で境界部を含め8層および13層上部は乱されていることが推測される。こうしたことから試料6で認められたイネのプラント・オパールは上位の8層中よりもたらされた可能性が高いと思われ、実際に稲作が行われ始めたのは試料5の8層堆積期以降と推測される。すなわち浅間Cテフラ降下後の4世紀中葉以降と考えられよう。

花粉分析において水田雑草を含む分類群であるオモダカ属やミズアオイ属が試料5以上でほぼ連続して検出されており、この稲作は水田稲作と推察される。また水田耕作が考えられている7層（試料3）においてそれを支持する結果が得られたと判断されよう。

以上のように亀泉坂上遺跡5区においては4世紀中葉以降水田稲作が行われるようになったと推察される。

5. 遺跡周辺のイネ科植物

木本泥炭の堆積時（弥生時代初め頃？を中心とした時期）、ネザサ節型が非常に多く検出されており、アズマネザサと予想されるネザサ節型のササ類が多く生育していたとみられる。またススキやチガヤといったウシクサ族も同様のところでの生育が考えられ、花粉分析から丘陵部に成立が推測されている落葉広葉樹林の林縁部や空き地などの日のあたるところにアズマネザサーススキ群集といった草地在り分布していたとみられる。一方この落葉広葉樹林の下草の存在でクマザサ属型のササ類（ミヤコザサ、スズタケなど）も一部に生育していたと考えられる。なお、木本泥炭最下部試料8においては検出されたプラント・オパール数が非常に少なく、これについては木材遺体が多く認められるなど速やかに堆積した結果プラント・オパール密度が低くなったのではないかとと思われる。

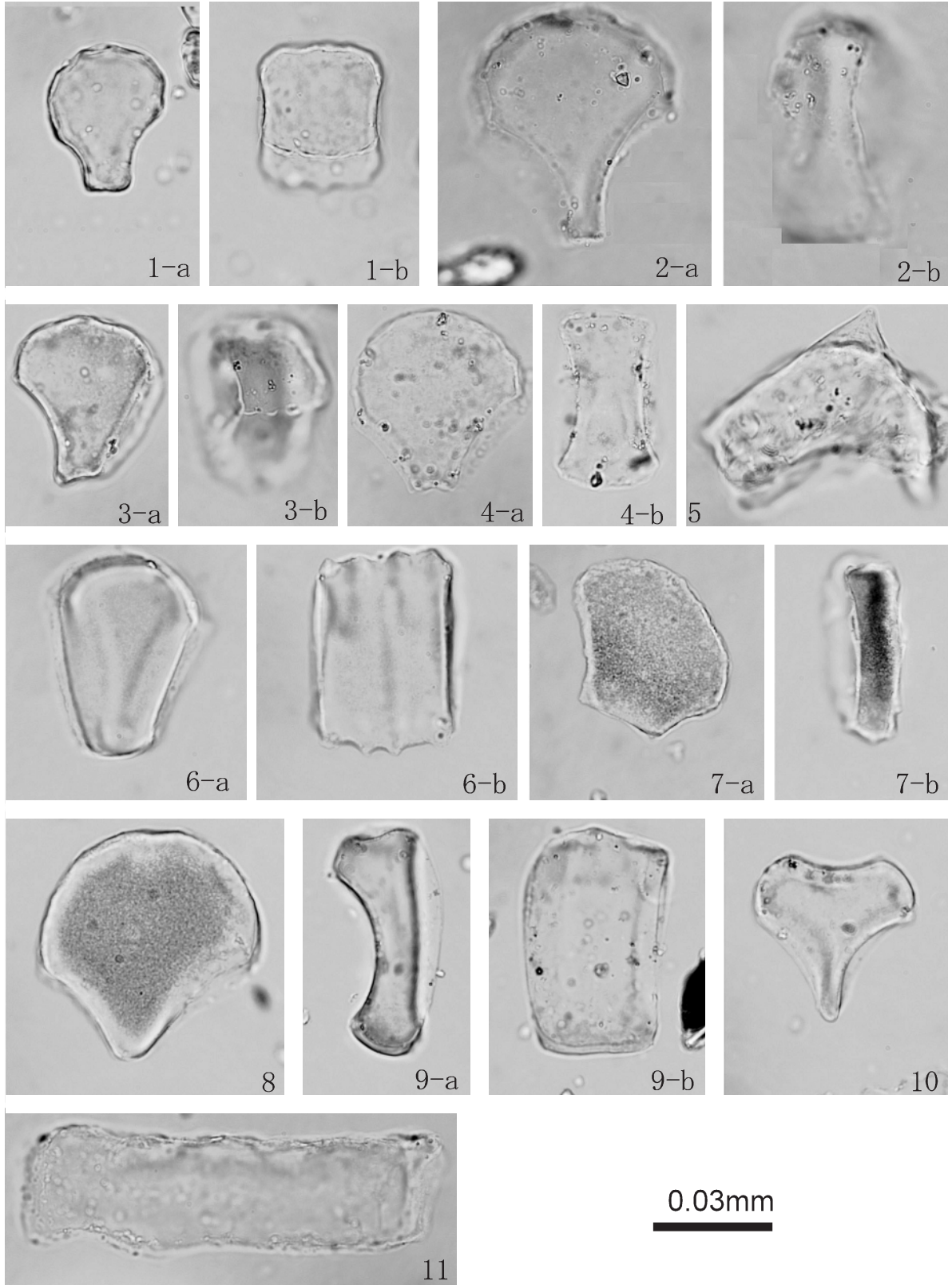
またヨシ属が木本泥炭中で非常に多く検出されており、泥炭が形成される湿地に大群落が成立していた。その後このヨシ属の群落を開拓して水田稲作が始められたと考えられ、ヨシ属は急速に生育地を狭められた。とはいうものの依然として水田周辺の水路や一部この水田内に侵入し生育していたと推測される。

試料3以降においてシバ属が急増しており、浅間Bテフラ降下後において水田周辺の畦道などにシバ属（ノシバなど）が侵入し、生育地を拡大したのであろう。

キビ族についてはその形態からアワ、ヒエ、キビといった栽培種によるものか、エノコログサ、スズメノヒエ、タイヌビエなどの雑草類によるものかについて現時点においては分類できず不明である。しかしながらイネが検出される層準よりキビ族は多産しており、その出現はイネと似た傾向を示していることから、水田雑草として普通にみられるタイヌビエなどの雑草類に由来するキビ族と推測される。

引用文献

- 藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）—数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法—。考古学と自然科学, 9, p.15-29.
- 藤原宏志（1984）プラント・オパール分析法とその応用—先史時代の水田址探査—。考古学ジャーナル, 227, p.2-7.
- 藤原宏志・佐々木彰（1978）プラント・オパール分析法の基礎的研究（2）—イネ（Oryza）属植物における機動細胞珪酸体の形状—。考古学と自然科学, 11, p.9-20.



図版 亀泉坂上遺跡5区のプラント・オパール (scale bar:0.03mm)

1~4:イネ (a:断面、b:側面) 1:No.1、2:No.4、3:No.5、4:No.6

5:イネ穎部破片 No.1

6:ネザサ節型 (a:断面、b:側面) No.6 9:ウシクサ族 (断面) No.2

7:クマザサ属型 (a:断面、b:側面) No.1 10:シバ属 (断面) No.1

8:ヨシ属 (断面) No.3 11:キビ族 (側面) No.2

3 亀泉坂上遺跡から出土した大型植物化石

新山雅広 (パレオ・ラボ)

1. 試料と方法

大型植物化石の検討は、5区P1より採取された堆積物試料が3試料と、抽出済みの試料が5試料の合計8試料について行った。堆積物試料の時期は、4世紀中葉に降下した浅間Cテフラ(C混)より下層にあたるが、遺物は出土していないため不明である。なお、13層中から下部にむかって遺存していた杭(木1)および14層中から下部にみられた杭もしくは立木は、AMS法による放射性炭素年代が実施され、前者でcal AD240年、後者でcal AD30,40,50年の年代値が得られており、堆積物の年代はcal AD240年以降4世紀中葉以前の堆積物であることが推定される。

分析試料は、13層(一括)より採取された試料1、13層上部の試料2-上および13層下部の試料2-下である。

試料は、褐色木本質泥炭であり、上部は礫を含み、下部は大型の木材片を多く含む。これらは、最小0.25mm目の篩を用いて水洗洗浄し、残渣を回収して実体顕微鏡下で大型植物化石の採集・同定・計数を行った。およその処理量は、試料1が30×20×20cm、試料2-上が35×20×10cm、試料2-下が30×20×15cmである。抽出済みの試料は、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団によって2mm目の篩で洗浄後、肉眼によって拾い上げられた大型植物化石で、タッパーに液浸保存されていた。同定および計数は、肉眼および実体顕微鏡下で行った。

2. 出土した大型植物化石

全試料で同定された分類群数は、木本22、草本8であり、その他に菌核が得られた。これら各試料から出土した大型植物化石の一覧を表1に示した。以下に、各試料の大型植物化石を記載する。

堆積物試料：試料1はケヤキ、不明芽が多産し、フジ属、ミツデカエデ、エゴノキ、ヒルムシロ属も比較的多産した。他に、オニグルミ、イヌシデ、アサダ、コナラ亜属果実、サクラ節、キハダ、タラノキ、ミズキ、クサギ、ムラサキシキブ属、スゲ属、ウキヤガラ、ホタルイ属、ボントクタデ、イヌタデ近似種などが僅かに得られた。試料2-上は、ケヤキ、フジ属、エゴノキ、不明芽が多産し、イヌシデ、コナラ亜属殻斗、コナラ属果実・芽、ミツデカエデ、ミズキ、ムラサキシキブ属、ホタルイ属、ボントクタデなどが僅かに得られた。試料2-下は、ケヤキ、フジ属、ミツデカエデ、エゴノキ、不明芽が多産ないし比較的目的立った。他に、イヌシデ、アサダ、エノキ属、ウルシ属、ヒルムシロ属などが僅かに得られた。

抽出済み試料：エゴノキが多産し、オニグルミ、ナラガシワまたはミズナラ殻斗、コナラ幼果・殻斗、クヌギまたはアベマキ果実、コナラ亜属果実、コナラ属果実、エノキ属、フジ属、ミツデカエデ、クマヤナギ属などが僅かに得られた。

3. 考察

(1) 古植生について

木本で同定された分類群は、概ね落葉広葉樹と考えられ、試料採取地点付近には、多産したケヤキ、エゴノキ、蔓性のフジ属が多く見られたであろう。また、ナラガシワまたはミズナラ、コナラ、クヌギまたはア

表1 大型植物化石出土一覧表 数字は個数、()内は半分ないし破片の数を示す

分類群・部位\試料種別・層位・No		堆積物試料			抽出済み試料				
		13層一括	13層上部	13層下部	13層一括				
		1	2-上	2-下	3	4	5	6	7
オニグルミ	核	(1)				(2)			(4)
イヌシデ	果実	2(1)	2	3					
アサダ	果実	2		2					
ナラガシワまたはミズナラ	殻斗					(2)			
コナラ	幼果				1				
	殻斗							1	
クヌギまたはアベマキ	果実					(1)			
コナラ属コナラ亜属	果実	(1)					(2)		
	殻斗		(1)						
コナラ属	果実	(1)	(4)			(3)	(6)		
	芽		1						
ケヤキ	果実	40(2)	54(4)	26(3)					
エノキ属	核	1	1	2(1)		3(1)	1		
サクラ属サクラ節	核	1(4)		(2)			(1)		
フジ属	芽	22	31(2)	16		1			
キハダ	種子	1							
ウルシ属	核			1					
ミツデカエデ	果実	11(1)	3	10		1			
クマヤナギ属	核						(1)	1	
タラノキ	核	1							
ミズキ	核	3	1(1)	1					
エゴノキ	種子/完形	7	11	4	6	2	6	15	10
	種子/大片	(11)	(23)	(3)	(6)	(6)	(9)	(14)	(14)
	種子/小片	(8)	(23)	(3)	(2)	(3)	(4)	(8)	(2)
クサギ	核	1							
ムラサキシキブ属	核	2	2			1		1	
不明	芽	35(多数)	22(多数)	18(多数)				(1)	(1)
ヒルムシロ属	核	10		6					
スゲ属	果実	3					1		
ウキヤガラ	果実	1							
ホタルイ属	果実	3	2						
ボントクタデ	果実	4(1)	2(1)						
イヌタデ近似種	果実	1							
タデ属	果実	2		1					
ナス属	種子	1		1					
菌核			1						

3 亀泉坂上遺跡から出土した大型植物化石

バマキを含むコナラ亜属数種、オニグルミ、イヌシデ、アサダ、エノキ属、サクラ節、ミツデカエデ、ミズキ、ムラサキシキブ属なども混じるような豊かな落葉広葉樹林が成立していたであろう。堆積環境については、13層下部(試料2-下)は池や沼などに生育する浮葉性～沈水性のヒルムシロ属の出土から、幾分水深があり、流れも伴っていた可能性もある。13層上部(試料2-上)は、ホタルイ属、ボントクタデが生育するような水位の低い湿地ないし水溜りであったと予想され、ヒルムシロ属は出土しないことから、堆積環境にやや変化が見られた可能性がある。

(2) 利用植物について

産出した大型植物遺体のうち、主な有用植物は、食用可能なオニグルミ、数種を含むコナラ亜属・コナラ属である。

オニグルミは、明瞭な打撃(利用)痕の見られる核は出土しなかったが、細かい破片は、人が割った可能性がある。コナラ亜属・コナラ属(種名まで同定可能であったのはコナラ、ミズナラまたはナラガシワ、クヌギまたはアベマキ)の細かい果実の破片は、人が加工した可能性はある。しかし、これらの果実は軟らかいため破損し易く、人が利用後の残滓を投棄したにしては、まとまった産状を示していない。コナラ亜属・コナラ属は、幼果・殻斗・芽といった人間が利用しない部位も出土することから、付近に生育していたと考えられる。そのため、細かい果実の破片も落下した果実が他の要因で破損した可能性もある。

食用以外の利用植物では、エゴノキが果皮に有毒なサポニンを含むため、川漁に使用されることが民俗例で知られている(長澤, 2001)。出土種子は、比較的多く、欠損した種子が目立つことから、果皮の利用時に破損したものである可能性がある。しかし、エゴノキ種子は、流路などの遺構で多産することも多く、堅い割には割れ易いことから、欠損して出土することもある。漁労などに人為的に利用されたかどうかを検討するためには、今後特殊な遺構・地点から多産するなど、特異な産状の試料と比較・検討していく必要がある。

4. 主な大型植物化石の形態記載

オニグルミ *Juglans ailanthifolia* Carr. 核

試料3で1/2片が1個出土した他は、いずれも細かい破片である。1/2片のものは、発芽ないし堆積物中の圧力により、縫合線に沿って自然に半分に分かれたものである。側面観は卵円形で先端は鋭頭。表面には、縦方向に不規則な筋が走る。

ナラガシワまたはミズナラ *Quercus aliena* Blume and/or *Quercus mongolica* Fischer ex Turcz. var. *grosseserrata* (Bl.) Rehd. et Wils. 殻斗

試料4で2片が得られた。長径は、約11mmと13mm。表面は磨耗しており、鱗片は一部しか確認できないが、卵形である。肉厚で殻斗径が大型と推定され、鱗片が卵形であることから、ナラガシワまたはミズナラと考えられる。

コナラ *Quercus serrata* Murray 幼果、殻斗

幼果は、殻斗鱗片が卵形で基部が鋭脚である。殻斗は、径が11.5mm程度と小さい。殻斗上端は、やや内側を向き、基部は鋭脚。

クヌギまたはアベマキ *Quercus acutissima* Carruth. and/or *Quercus variabilis* Blume 果実

果実底部の尻(殻斗との付着部)の部分のみが得られた。尻は、径9mm程度と大きく、やや突出する。表

面は瘤状の隆起があり、でこぼこする。

コナラ属コナラ亜属 *Quercus* subgen. *Lepidobalanus* 果実、殻斗

出土果実は、いずれも破片であり、底部ないし尻の部分のみである。試料1は、径9.3mm程度の尻である。試料5は、径9、12mm程度のやや突出する尻で僅かに果皮が付着する。これらは、いずれも大型の尻であるため、コナラ以外のコナラ亜属であり、表面の形態からクヌギ、アベマキではない。従って、カシワ、ナラガシワ、ミズナラのいずれかと考えられる。殻斗は、鱗片が覆瓦状に並び、コナラ亜属と分かるが、長径5mm程度の小さな破片であり、これ以上の同定には至らない。

コナラ属 *Quercus* 果実、芽

果実は、細かい果皮片であったが、試料2-上では長径20mm前後の大きな破片も2個得られた。そのうち、1個は尻が残っており、径5mm程度で若干突出する。コナラ亜属だとすれば、コナラと思われるが、アカガシ亜属の可能性も否定はできない。芽は側面観が卵形、上面観が5角形。

ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino 果実

茶褐色ないし灰褐色で基部には突出した大きな円形の臍があり、そこから灰白色の脈が分岐しながら放射状に広がる。

フジ属 *Wisteria* 芽

黒褐色で鈍い光沢を持つ。長卵形で下端が膨らみ、縦方向の隆起(筋)が発達する。

エゴノキ *Styrax japonica* Sieb. et Zucc. 種子

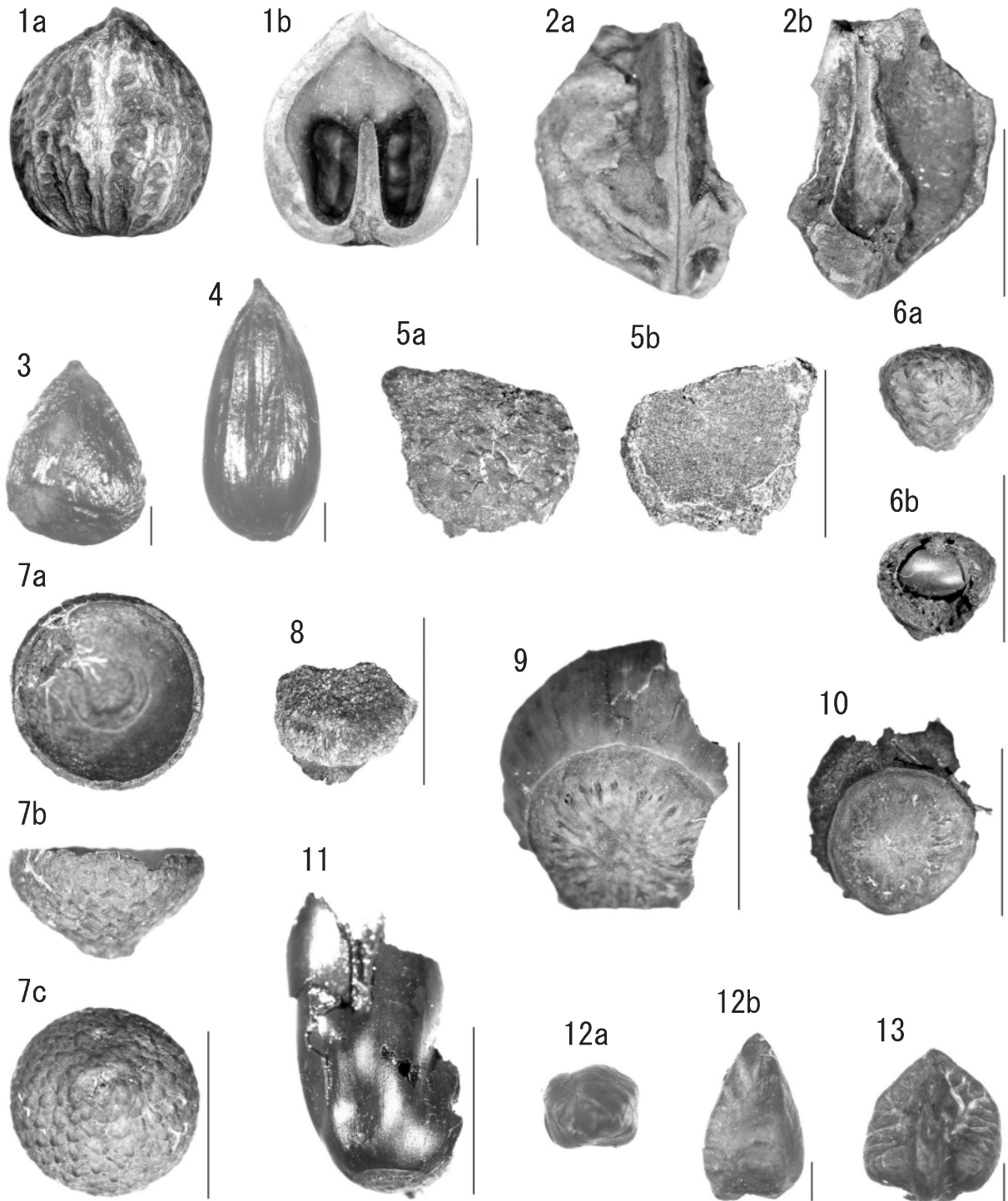
卵形～広卵形で頂部から3本の縦溝が走る。表面には細かな網目紋があり、ざらつく。なお、出土種子は、完形の他に欠損したものが目立った。一覧表中では、僅かに欠損したものや3/4程度残存したものは、完形扱いとした。大片としたものは、1/2～2/3程度残存したものであり、小片は1/2未満の細かい破片である。

不明 unknown 芽

黒色ないし黒褐色。2～4mm前後の円錐形のものや側面観が長卵形、上面観が楕円形のものを含む。なお、堆積物試料では破片が多産し、試料2-上で特に多かった。これらは、夥しい量であったため、採集・計数はしていない。

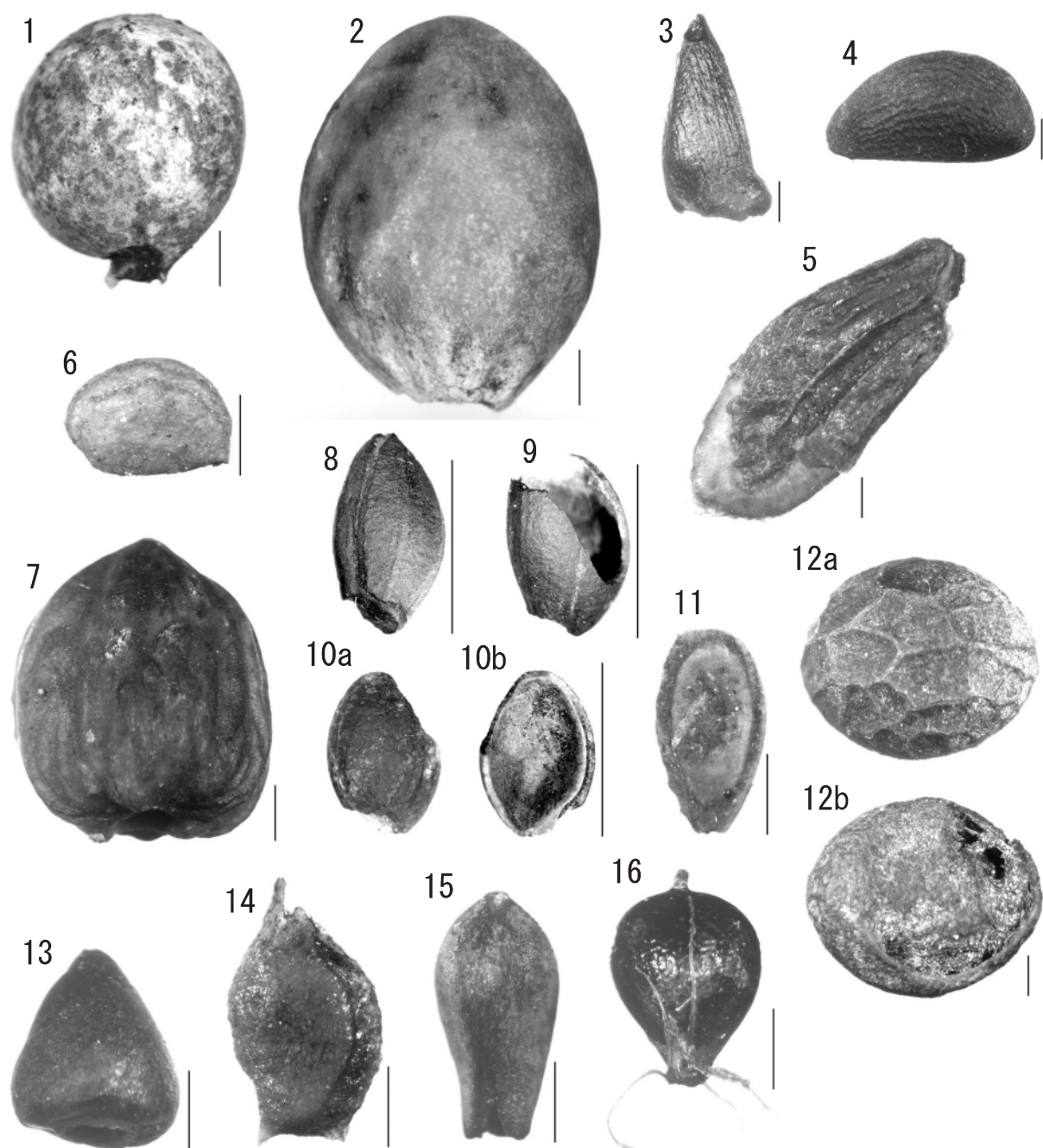
参考文献

北村四郎・村田 源(1971)原色日本植物図鑑 木本編 I. 453p. 保育社.
長澤 武(2001)植物民俗. ものと人間の文化史1010. 312p. 法政大学出版社.



図版1 出土した大型植物化石 (スケールは1、2、5~11が1 cm、3、4、12、13が1 mm)

1、2.オニグルミ、核、試料7 3.イヌシデ、果実、試料2ー下 4.アサダ、果実、試料2ー下
 5.ナラガシワまたはミズナラ、殻斗、試料4 6.コナラ、幼果、試料3 7.コナラ、殻斗、試料6
 8.クヌギまたはアベマキ、果実、試料4 9、10.コナラ属コナラ亜属、果実、試料5 11. コナラ属、
 果実、試料2ー上 12.コナラ属、芽、試料2ー上 13.ケヤキ、果実、試料2ー上



図版2 出土した大型植物化石（スケールは1～4、6、7、11～16が1mm、5、8～10が1cm）

- 1.エノキ属、核、試料1 2.サクラ属サクラ節、核、試料1 3.フジ属、芽、試料
 2-上 4.キハダ、種子、試料1 5.ミツデカエデ、果実、試料2-下 6.タラノキ、核、試料1
 7.ミズキ、核、試料2-上 8～10.エゴノキ、種子、試料6 11.ムラサキシキブ属、核、試料2-上
 12.クサギ、核、試料1 13.不明、芽、試料2-上 14.ヒルムシロ属、核、試料2-下 15.ウキヤガ
 ラ、果実、試料1 16.ホタルイ属、果実、試料2-上

4 放射性炭素年代測定

山形 秀樹 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

上武国道亀泉坂上遺跡より検出された丸木材の加速器質量分析法 (AMS法) による放射性炭素年代測定を実施した。

2. 試料と方法

試料は、JK49木1の丸木 (コナラ節) 1点、JK49木2の丸木 (コナラ節) 1点の併せて2点である (花粉分析の図1参照)。

これら試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨 (グラファイト) に調整した後、加速器質量分析計 (AMS) にて測定した。測定した¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、補正した¹⁴C濃度を用いて¹⁴C年代を算出した。

3. 結果

表1に、各試料の同位体分別効果の補正值 (基準値-25.0%)、同位体分別効果による測定誤差を補正した¹⁴C年代、¹⁴C年代を暦年代に較正した年代を示す。

¹⁴C年代値 (yrBP) の算出は、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、計数値の標準偏差 σ に基づいて算出し、標準偏差 (One sigma) に相当する年代である。これは、試料の¹⁴C年代が、その¹⁴C年代誤差範囲内に入る確率が68%であることを意味する。

表1 放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	試料データ	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	¹⁴ C年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	¹⁴ C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正值	1 σ 暦年代範囲
PLD-3044 (AMS)	木片 (コナラ節) JK49 木1	-28.7	1,800 ± 40	cal AD 240	cal AD 135 - 160 (18.9%) cal AD 170 - 195 (20.4%) cal AD 210 - 255 (46.2%) cal AD 300 - 320 (14.6%)
PLD-3045 (AMS)	木片 (コナラ節) JK49 木2	-26.3	1,965 ± 40	cal AD 30 cal AD 40 cal AD 50	cal AD 0 - 80 (96.6%)

なお、暦年代較正の詳細は、以下の通りである。

暦年代較正

暦年代較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い (¹⁴Cの半減期5,730 ± 40 年) を較正し、より正確な年代を求めるために、¹⁴C年代を暦年代に変換することである。具体的には、年代既知

第5章 自然科学分析

の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚のU-Th年代と¹⁴C年代の比較、および海成堆積物中の縞状の堆積構造を用いて¹⁴C年代と暦年代の関係を調べたデータにより、校正曲線を作成し、これを用いて¹⁴C年代を暦年代に校正した年代を算出する。

¹⁴C年代を暦年代に校正した年代の算出にcalIB 4.3 (calIB 3.0のバージョンアップ版)を使用した。なお、暦年代較正值は¹⁴C年代値に対応する校正曲線上の暦年代値であり、1 σ 暦年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値はその1 σ 暦年代範囲の確からしさを示す確率であり、10%未満についてはその表示を省略した。1 σ 暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示した。

4. 考察

各試料は、同位体分別効果の補正および暦年代較正を行った。暦年代較正した1 σ 暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲に注目すると、それぞれより確かな年代値の範囲として示された。

引用文献

- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代、p.3-20.
Stuiver, M. and Reimer, P. J. (1993) Extended ¹⁴C Database and Revised CALIB3.0 ¹⁴C Age Calibration Program, Radiocarbon, 35, p.215-230.
Stuiver, M., Reimer, P.J., Bard, E., Beck, J.W., Burr, G.S., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, F.G., v.d. Plicht, J., and Spurk, M. (1998) INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000-0 cal BP, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

5 亀泉坂上遺跡出土木材の樹種

三村昌史 (パレオ・ラボ)

1. 試料と方法

ここでは、本遺跡出土材のうち、2点についての樹種同定結果を報告する。分析対象は旧河道出土の木1,2である。このうち、木1は直径12cm程度の芯持丸木材を樹皮付きのまま使用した杭で、また木2は直径15cm程度の芯持丸木材で下方の端部は分枝部にあたる二又となっており、こちらも樹皮が一部に残存している。

プレパラートの作成は出土材から採取された数cm角のブロック試料を用いた。このブロック試料から横断面・放射断面・接線断面の3断面について剃刀を用いて切り取り、ガムクロラールで封入して行った。これらのプレパラートは光学顕微鏡にて40~400倍で検鏡し、所有の現生標本との対照により同定を行った(プレパラート保管No.GNM-2336~2337)。

2. 結果と所見

樹種同定結果を表1に示す。出土材2点はいずれもコナラ節であった。

表1. 樹種同定結果一覧

試料No.	出土地点	器種	樹種	木取り・形状	GNM-
木1	旧河道	杭	コナラ節	芯持丸木 (樹皮残存)	2336
木2	旧河道	—	コナラ節	芯持丸木 (樹皮残存)、端部分枝	2337

コナラ節には、県内の低標高の山野にふつうにみられるコナラ、またそれよりも高標高の山地にみられるミズナラなどが含まれる。今回同時に行われている花粉分析結果を参照すると、コナラ亜属(コナラ節)の花粉は優勢で、本遺跡周辺において木材資源量として多かったことがわかる。木1の杭にコナラ節の材が用いられていたのは、遺跡周辺で身近にみられる樹種のうち、適度な径長の得られるものを選別して用いていたことを反映しているとみられるが、その材は硬く丈夫なため、一方で木材採取に際し材質に着目した選択がなされた可能性も想定される。木2については性格も含め加工木かどうか不明なため深く議論できないが、いずれにしても身近な樹種が用いられたか、自然堆積したものであるといえる。なお、最外年輪部分の形成状態をみると、木1,2ともに秋~冬であるが、年代測定結果からは両出土材は同時期に採取あるいは堆積したものではないことが明らかになっている。

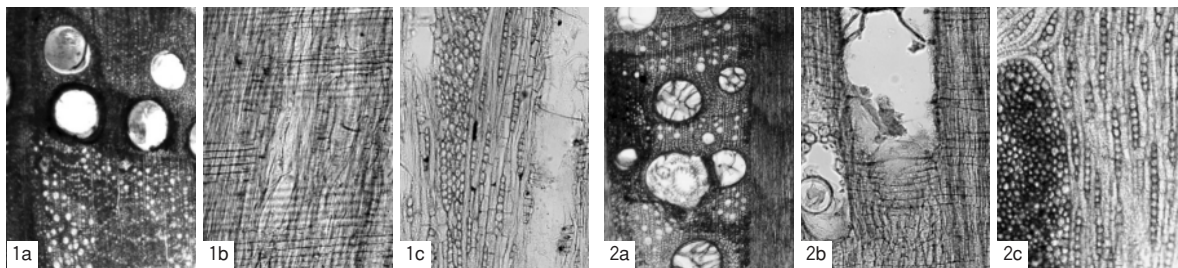
3. 分類群の記載

同定根拠として見出された樹種の木材組織の特徴を以下に示す。

*コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 写真図版1a-1c,2a-2c

年輪の始めに大型の丸い道管が単独で1-2列に並び、晩材では小型でやや角張った道管が火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は単列同性のものに大型の広放射組織が混在する。

いわゆるナラ類の材で、温帯下部~暖温帯に分布するコナラ、温帯に分布するミズナラなどが含まれる。これらはいずれも高木になる落葉広葉樹で、森林植生のなかでしばしば優占する。材は重硬で弾性を有し、保存性は中庸、割裂・加工は困難である。



1. コナラ節 (No.1: JK49 木1)

2. コナラ節 (No.2: JK49 木2)

■ a-1.0mm, b-0.4mm, c-0.4mm

a: 横断面 b: 放射断面 c: 接線断面

写真図版: 出土材・木材組織光学顕微鏡写真

6 貯蔵穴内出土甕内の内容物分析

鈴木 茂・藤根 久 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

亀泉坂上遺跡では、古墳時代後期の焼失住居跡17号住居跡の貯蔵穴内から甕が出土した。この甕内には、軽石混じりの黒～黒褐色土が充填していたが、底部に接する部分には、灰質部分が観察された。

本項では、甕内の底部に接する土壌の内容物を調べるために内容物分析を行った。

2. 試料と分析方法

はじめに、甕を反対に伏せて内容物を取り出して観察したところ、甕底部に接する部分に灰質が見られた。そのためこの灰質部分を薬匙で耳欠き一杯分を採取した。

試料は、遠心管に入れて精製水を加えた後超音波洗浄機を用いて分散した。その後、アスピレータを用いてコロイド分を除去し、マイクロピペットを用いて簡易的なプレパラートを作成して生物顕微鏡で観察した。その結果、イネ科植物に由来する珪酸体化石が特徴的に多く含まれていたことから、定性的に植物珪酸体分析を行った。

3. 結果

検境は、機動細胞珪酸体について200個体以上を目標に行い、機動細胞珪酸体個数を同定・計数した(表1)。

観察の結果、イネの機動細胞珪酸体が2個体認められた。またイネの穎(粃殻)の部分に形成される珪酸体の破片が比較的多く得られた。最も多く観察されたのはネザサ節型で、次いでクマザサ属型、ウシクサ族となっている。その他ヨシ属やキビ族が5個体得られており、シバ属、ジュズダマ属なども認められた。

表1 甕内底部に接する土壌中の機動細胞珪酸体検出個数

試料	イネ	イネ穎部破片	ネザサ節型	クマザサ属型	他のタケ亜科	ヨシ属	シバ属	キビ族	ウシクサ族	ジュズダマ属	不明
甕内土壌	2	19	92	52	4	5	1	5	28	1	19

4. 考察

土壌内の底部に接する灰質からは、若干のイネの機動細胞珪酸体が検出された。稲作の可能性は一般に試料1gあたり5,000個を目安と考えられている(藤原 1984)。ここでの分析ではこうした作業は行っていないが、これまでの経験から考えると5,000個には達していないと思われる。

一方、イネの穎の部分に形成される珪酸体の破片が比較的多く観察された。この珪酸体は水田土壌中でも観察されるが本例ほど多く認められたことはなく、またイネの機動細胞珪酸体よりも多く検出されたことから、水田土壌の可能性は低いと考える。

一般にイネ穎部珪酸体の破片が多く観察される例としては、稲藁と粃殻がいっしょに焼かれた灰や粃殻のみが焼かれた灰試料などが多い(鈴木 1997など)。

試料は、貯蔵穴内の甕内の底部に接する試料であることから、甕内に粃が付いた米が貯蔵され、住居が焼失する際に灰化したことが考えられる。

第5章 自然科学分析

なお、試料中には、ネザサ節型やクマザサ属型がより多く観察された。そのうちネザサ節型はアズマネザサと推測され、ススキ（ウシクサ族）とともに群馬県内では日のあたる開けた丘陵部や森林の林縁部などに普通にみられるササ類である。クマザサ属型のササ類は、ミヤコザサやスズタケ、クマイザサなどが考えられ、森林の下草的に生育していたことが推測される。また、水路や湿地などに生育するヨシ属やジュズダマ属も若干検出された。

このように試料は色々な要素が混じった土壌要素を示すことから、埋積する際に周辺からの土壌が堆積したものとする。

5. おわりに

甕内の底部に接する灰質試料は、貯蔵穴内において籾が付いた米を甕に入れて貯蔵されていたことを示すと推定された。甕は、底部付近のみが出土し、全体形は不明である。具体的な貯蔵穴利用については、今後類例を調査する必要があると考える。なお、ここでは、甕内の土壌中の炭化種子などは検討していない。

引用文献

藤原宏志（1984）プラント・オパール分析法とその応用－先史時代の水田址探査－、考古学ジャーナル、227、p.2-7.

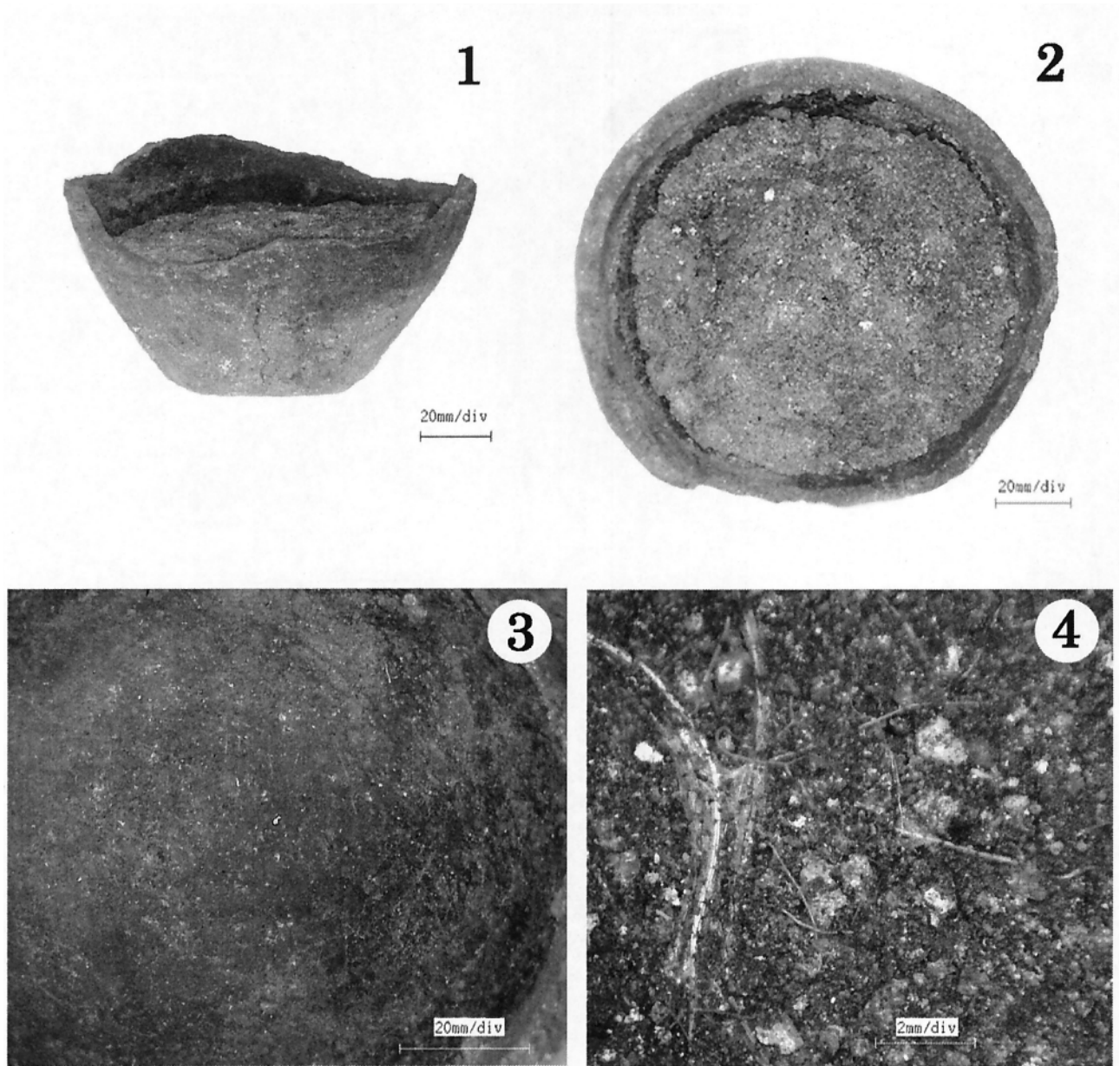
鈴木 茂（1997）小金城跡（第4地点）地下式坑墓内灰試料の植物珪酸体、小金城跡（第4地点）－小金城跡内所在古墳時代・中世遺構の調査－、松戸市遺跡調査会、p.26-27.



甕が出土した貯蔵穴底面の様子

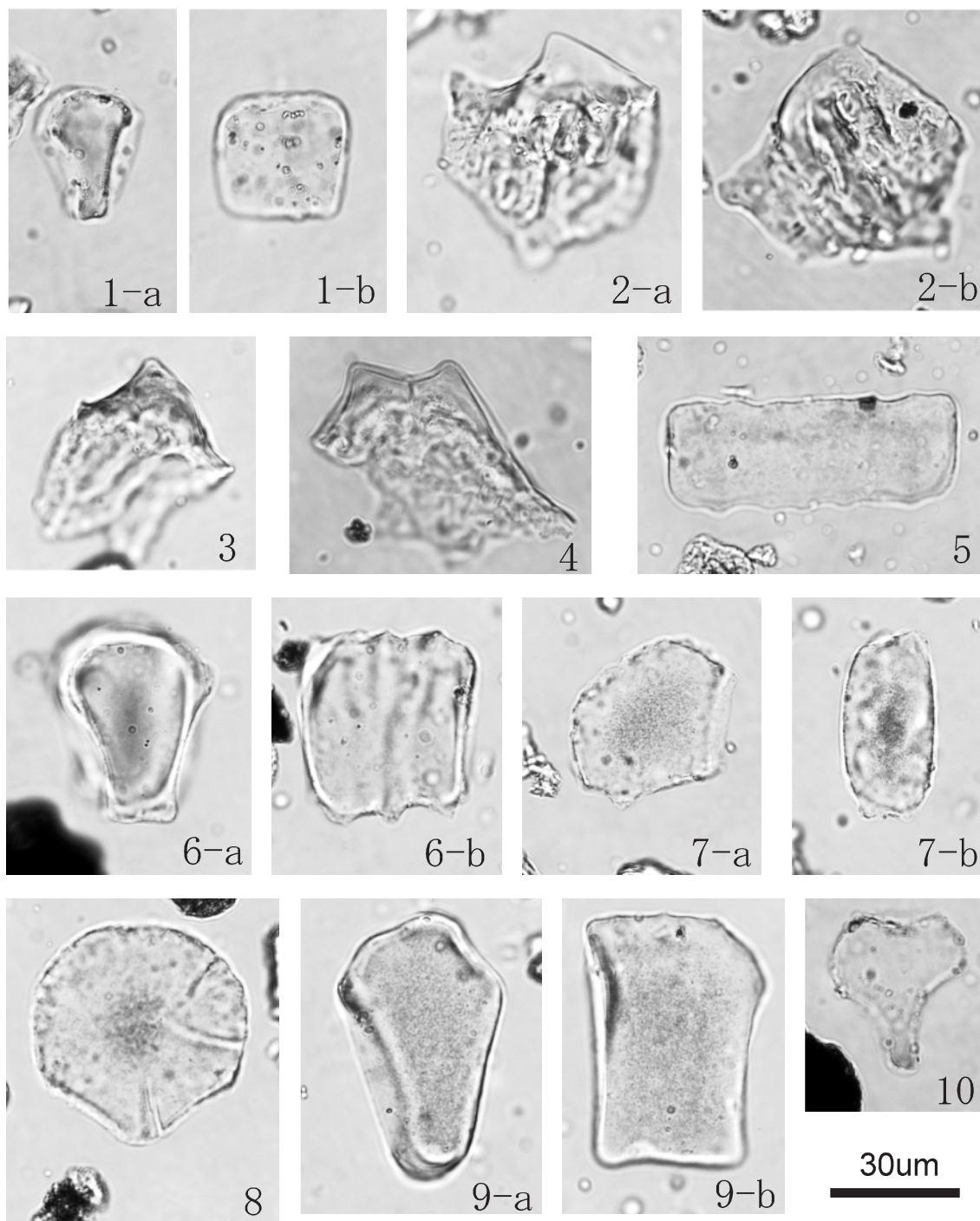


貯蔵穴内甕の出土状況



図版1 17号住居出土土器と内容物

1. 甕側面 2. 甕内容物 3. 甕底部内面 4. 内容物底部



図版2 亀泉坂上遺跡の植物珪酸体

- 1：イネ（a：断面、b：側面）
- 2～4：イネ穎部破片
- 5：キビ族（側面）
- 6：ネザサ節型（a：断面、b：側面）
- 7：クマザサ属型（a：断面、b：側面）
- 8：ヨシ属（断面）
- 9：ウシクサ族（a：断面、b：側面）
- 10：シバ属（断面）

7 住居跡出土赤色塊の分析

藤根 久 (パレオ・ラボ)

1. 試料

亀泉坂上遺跡の調査では、赤色塊が比較的良好な状態で検出された。ここでは、これら赤色塊についてX線分析顕微鏡およびX線回折計を用いて化学組成について検討した。

2. 方法

試料は、状態の良好な赤色塊（直径5mm程度）を選び出した。

測定は、(株)堀場製作所製XGT-5000Type IIを用いた。仕様は、X線導管径10 μ m、電圧50KV、電流0.08~0.10mA、測定時間200秒である。定量計算は、標準試料を用いないFP法（ファンダメンタルパラメータ法）で定量分析を行った。

定量分析を行った元素は、アルミニウム (Al)、ケイ素 (Si)、リン (P)、カルシウム (Ca)、マンガン (Mn)、鉄 (Fe) である。なお、ナトリウムとマグネシウムは軽元素であり測定感度が悪く誤差も大きいため測定していない。

また、11号住居から出土した赤色塊については、赤色物の鉱物組成を調べるためにX線回折を行った。

3. 結果および考察

試料は、いずれも赤味の強い赤色塊である。18号住居から出土した赤色塊は比較的大きい（図版1）。

良好な赤色塊の化学組成は、鉄Feが86.33~89.28%、ケイ素Siが7.98~11.82%、アルミニウムAlが1.40~3.37%などである（表1）。

11号住居出土赤色塊のX線回折では、赤鉄鉱（Hematite; Fe₂O₃）のピークが顕著に検出された（図1）。

こうした鉄含有量が高いこと、11号住居赤色塊についてはX線回折により赤鉄鉱が検出されたことから、赤色顔料としてのベンガラである。

赤色顔料としては、ベンガラのほか水銀種（辰砂HgS）や鉛（鉛丹Pb₃O₄）が知られているが（たとえば成瀬、2002）、ここでは水銀Hgや鉛Pbは検出されていない。

なお、ベンガラは、原材料として鉄鉱石などや褐鉄鉱などが考えられるが、11号住居赤色塊ではパイプ状ベンガラ粒子が観察され、沼沢湿地付着生指標種群の*Eunotia pectinalis* var. *minor*などの珪藻化石が含まれていたことから、水成起源の褐鉄鉱起源のベンガラであることが推定された。

表1. 住居出土赤色塊の化学組成（単位%）

試料	Al	Si	P	Ca	Mn	Fe	合計
11号住居	1.40	11.82	0.13	0.23	0.09	86.33	100.00
17号住居	2.53	9.57	0.00	0.49	0.16	87.26	100.01
18号住居	3.37	7.08	0.00	0.17	0.11	89.28	100.01

4. おわりに

ここでは、住居跡から出土した赤色塊について、化学組成を調べるために蛍光X線分析を行い、鉱物組成を調べるためにX線回折分析を行った。

第5章 自然科学分析

その結果、褐鉄鉱からなるベンガラであり、パイプ状ベンガラ粒子や沼沢湿地付着生指標種群の珪藻化石を含むことから、水成起源の褐鉄鉱であることが推定された。

引用文献

成瀬正和 (2002) 日本の美術2 「No439正倉院宝物の素材」. 至文堂、98p.

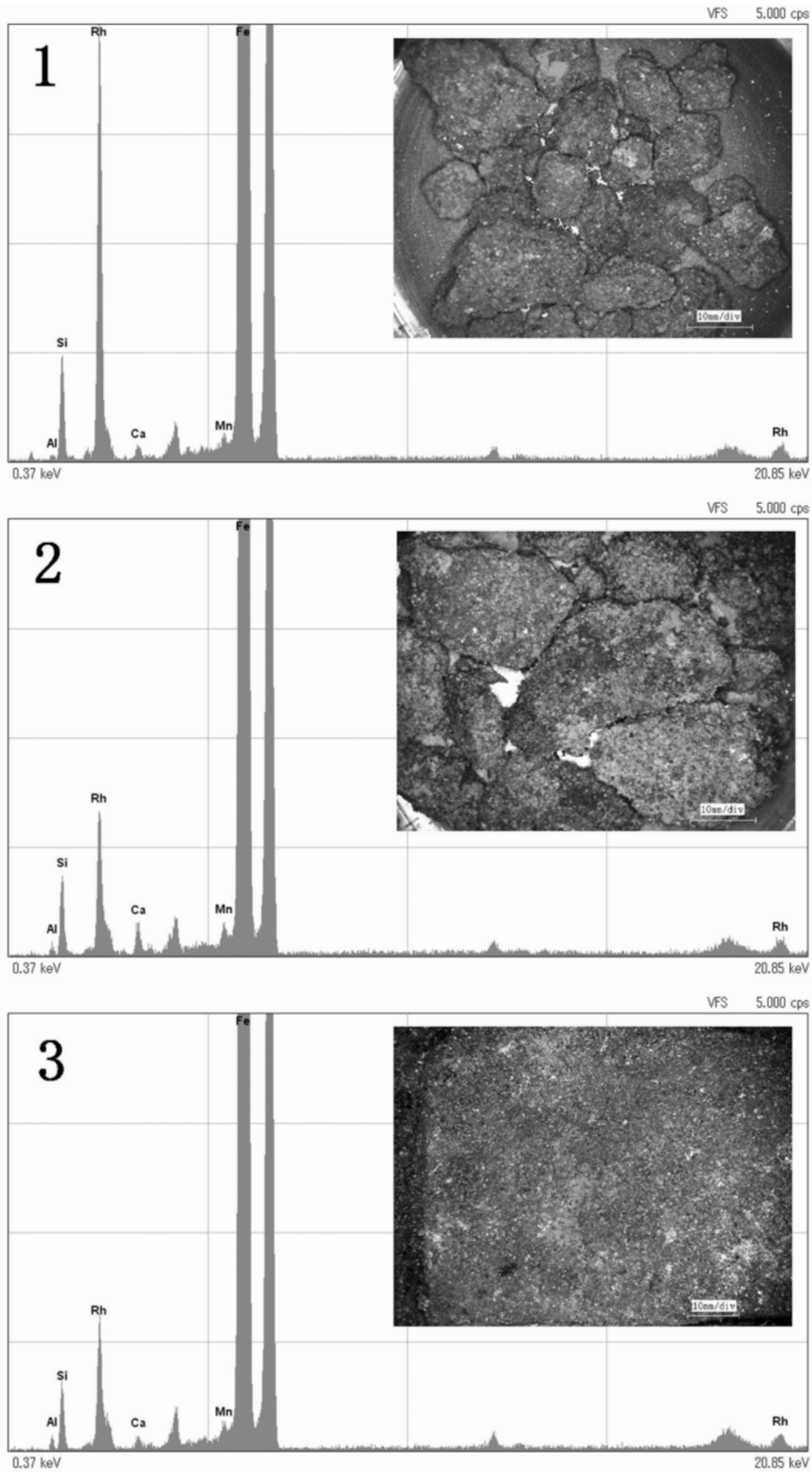
岡田文男 (1997) パイプ状ベンガラ粒子の復元. 日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集、38-39.



11号住居跡南西隅の様子



11号住居跡南西隅ベンガラ出土状況



図版1. 住居内出土赤色顔料の蛍光X線スペクトル図
 1. 3区11号住居 2. 3区17号住居 3. 3区18号住居

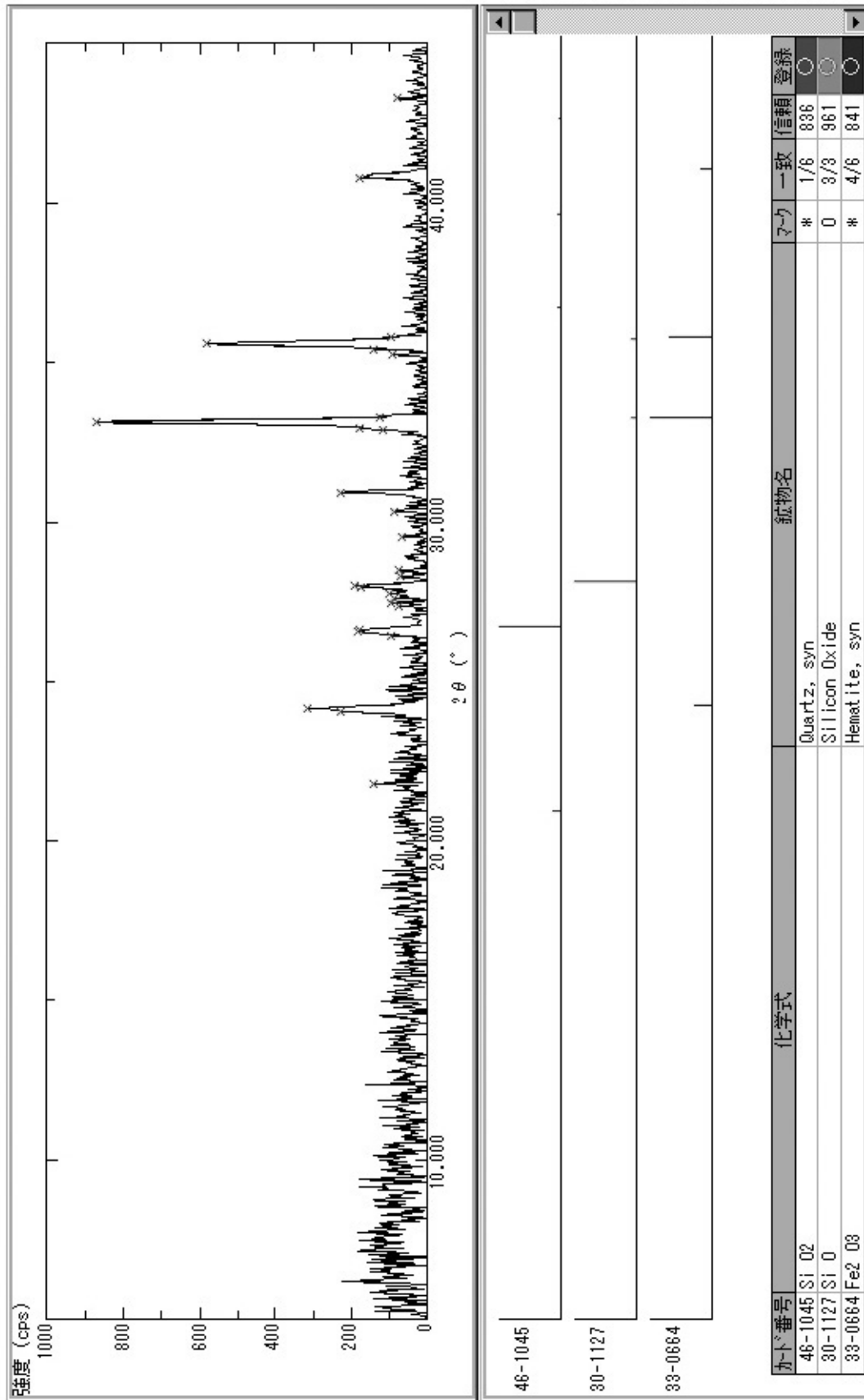


図1. 11号住居出土赤色塊のX線回析スペクトル図

8 上武道路亀泉坂上遺跡・堤沼上遺跡出土炭化材の樹種同定－古墳時代と古代の用材選択－

佐々木由香・植田弥生（パレオ・ラボ）

1. はじめに

群馬県前橋市に位置する上武道路亀泉坂上遺跡・堤沼上遺跡から出土した炭化材の樹種同定結果を報告する。亀泉坂上遺跡は古墳時代前期（4世紀）と後期（6世紀）の住居跡など、堤沼上遺跡は古墳～平安時代の住居跡40軒などが検出された集落である。亀泉坂上遺跡で分析の対象とした遺構は、4世紀の住居跡6軒と6世紀の住居跡6軒の計12軒である。堤沼上遺跡では6世紀後半の住居跡1軒、9世紀の住居跡1軒、古代の住居跡4軒、5号土坑、4号溝の計6軒と2遺構である。

時期別の分析点数は、両遺跡あわせて4世紀118点、6世紀64点、6世紀後半4点、9世紀1点、古代9点の合計196点である。炭化材の中には比較的残存の良好なものが含まれており、法量や木取りが観察できたため、観察可能な材については形状観察を行った。さらに人間活動に伴う天然林の二次林化や二次林の拡大とその利用を考える上で、年輪幅を記録し、平均年輪幅を求めた。ここでは炭化材の樹種同定と形状観察によって、樹種組成、時期あるいは遺構ごとの樹種の比較、平均年輪数から推定する樹種の成長度、木取りと樹種の対応関係を検討し、周辺遺跡の用材傾向と比較した。

2. 試料と方法

各住居跡の試料数は、亀泉坂上遺跡で、6・9・13・16・21・22号住（4世紀）、7・8・10・12・17・23号住（6世紀）の計182点である。そのうち、17号住と22号住は焼失住居跡で、44点、109点というまとまった数の炭化材が出土している。それぞれの住居跡の分析点数を表1に示す。堤沼上遺跡では、6号住（6世紀後半）、10号住（9世紀）、8・26・30・36号住（古代）、5号土坑（古代）、4号溝（古代）計14点である。そのうち、6号住は焼失住居跡の可能性がある。それぞれの遺構の分析点数を表2に示す。

表1 亀泉坂上遺跡の炭化材同定点数

遺構名	同定点数	時期	備考
6住	2	4世紀	
7住	2	6世紀	
8住	8	6世紀	
9住	1	4世紀	
10住	6	6世紀	
12住	3	6世紀	
13住	3	4世紀	
16住	2	4世紀	
17住	44	6世紀	焼失住居
21住	1	4世紀	
22住	109	4世紀	焼失住居
23住	1	6世紀	
合計	182		

表2 堤沼上遺跡の炭化材同定点数

遺構名	同定点数	時期	備考
6住	4	6世紀後半	焼失か
8住	2	古代	
10住	1	古代	9世紀
26住	2	古代	
30住	2	古代	
36住	1	古代	
5坑	1	古代	
4溝	1	古代	
合計	14		

同定用の試料は、炭化材を十分に乾燥させた後、木取りと法量などを観察・計測した。形状観察の項目は、木取り、残存径（または直径か半径）、幅、厚さ、全長、樹皮の有無である。その後、同定可能な部位を観察して一部の材を採取した。さらに横断面（木口）で連続して計数できる範囲で放射方向の幅（放射径）と年輪数を記録し、平均年輪数を算出した。年輪幅は計測が可能であったクヌギ節、コナラ節、クリのみ行っ

た。横断面の観察で、枝のような直径5 cm以下の細い材は小径木、試料の保存状態が悪く取り上げ状態で計測できない細片状に分割した試料は、細片と記録した。

木取りは丸木、角材（二方桁）、板目、柾目、割材、不明に分類した。割材にはみかん割状のものが多く、燃焼もしくは堆積時、取り上げ時などに割れたものもかなり含まれると想定されるため、本来の木取りを示しているかどうかは不明である。

同定方法は、まず炭化材の横断面を手で割り実体顕微鏡で予察し、横断面の特徴から同定可能なクリ、クヌギ節、コナラ節はこの段階で同定を決定した。それ以外の試料と細片のために実体顕微鏡では同定困難な試料は炭化材から横断面（木口と同義）、接線断面（板目と同義）、放射断面（柾目と同義）の3断面を作製し、走査電子顕微鏡で材組織の観察を行い同定した。走査電子顕微鏡用の試料は、3断面を5 mm角以下の大きさに整え、直径1 cmの真鍮製試料台に両面テープで固定した後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡(日本電子(株)製 JSM-T100型)で観察と写真撮影を行った。

炭化材の残片は、再同定可能な大きさの小片にして、チャック付きのビニール袋に入れ（財）群馬県埋蔵文化財事業団に保管されている。

3. 結果

同定結果、木取りの観察結果および計測結果を、表3に示した。

同定結果

亀泉坂上遺跡で同定を行った182点から産出した樹種で確実に同定できたのは、イヌガヤ、スギの針葉樹2分類群2点、コナラ節35点・クヌギ節117点・ヤマグワ1点・トネリコ属1点の落葉広葉樹4分類群154点、落葉樹と常緑樹があるクスノキ科2点、タケ亜科3点とヨシ属1点、ススキ属1点の単子葉類3分類群5点の計9分類群161点が産出した。小片のためコナラ節とクヌギ節に分類できなかった一群はコナラ亜属またはコナラ亜属？（計7点）とした。またクリorコナラ節1点は両者の識別点である広放射組織が確認できないもので、元々ないのか小片のため見えないのかを判断できなかった一群である。その他、細片のため詳細な同定ができない広葉樹1点、樹皮8点、樹皮？1点、同定不可の材1点があった。

堤沼上遺跡で同定を行った14点から産出した樹種は、アサダ1点、コナラ節5点、クヌギ節4点、クリ4点の落葉広葉樹4分類群14点であった。

それぞれの遺跡での時期、遺構別の産出樹種を表4に示す。亀泉坂上遺跡の古墳時代前期の住居跡から出土した樹種はクヌギ節が最も多く88点（74.6%）で、次にコナラ節7点（5.9%）が続き、全体の約80%を占める。古墳時代後期では前期の傾向とは異なり、クヌギ節が29点（45.3%）、コナラ節が28点（43.8%）とほぼ同数産出し、全体の約90%を占める。この傾向は焼失住居跡である22号住（古墳前期）と17号住（古墳後期）の同定数が全体の84%（153点）を示すため、これら2住居跡の用材傾向を反映しているといえるが、この2住居跡以外の用材もコナラ節、クヌギ節が多い。22号住と17号住の樹種組成を図1・2に示す。

堤沼上遺跡では、各遺構の分析点数が少ないため用材傾向はいえないが、古代の遺構には亀泉坂上遺跡と堤沼上遺跡の古墳時代の住居跡では確認できなかったクリ4点が産出した。

以下に同定された材の木材組織を記載し、1分類群につき1点の写真を掲載して同定の根拠とする。

材組織記載

イヌガヤ *Cephalotaxus harringtonia* (Knight) K.koch イヌガヤ科 図版1 1a-1c(22住41)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。仮道管にらせん肥厚があり、分野壁孔は小さなヒノキ

型、1分野に1～2個ある。放射組織は、5細胞高以下の低いものが多い。

イヌガヤは本州の岩手県以南・四国・九州の暖帯から温帯下部の山林の下に生育する常緑小高木である。

スギ *Cryptomeria japonica* D.Don スギ科 図版1 2a-2c(21住47)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材の量はやや多い。分野壁孔は大きなスギ型、1分野に主に2個ある。

スギは本州以南の暖帯から温帯下部の湿気のある谷間に生育する常緑高木である。

アサダ *Ostrya japonica* Sarg. カバノキ科 図版4 17a-17c(6住28)

小型の管孔が単独または2～数個が放射方向に複合して分布し、年輪界では径を減じる散孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単穿孔、内腔に細いらせん肥厚がある。放射組織はほぼ同性、1～2細胞幅、道管との壁孔はやや大きく交互状である。

アサダは温帯の山地に生育する落葉高木である。

コナラ属コナラ亜属コナラ節 *Quercus*. subgen. *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 図版1 3a(22住100) 4a-4b(17住11)

年輪の始めに中型～大型の管孔が1層または数層配列し、孔圏が1層の場合は急に、孔圏が数層の場合は除々に径を減じ、晩材部では薄壁・角形の小型管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、内腔にチロースが発達する。放射組織は単列のものと広放射組織・複合状がある。

コナラ節は暖帯から温帯に生育する落葉高木でカシワ・ミズナラ・コナラ・ナラガシワがある。

コナラ属コナラ亜属クヌギ節 *Q.* subgen. *Quercus* sect. *Cerris* ブナ科 図版2 5a-5b(22住83) 6a(10住53)

年輪の始めに中型～大型の管孔が1層または数層配列し、孔圏が1層の場合は急に、孔圏が数層の場合は除々に径を減じ、晩材部では厚壁・円形の小型管孔が放射状または火炎状に配列する環孔材。接線断面と放射断面は、コナラ節と同様である。

クヌギ節は暖帯の山野に普通の落葉高木でクヌギとアベマキが属する。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 図版4 15a-15b(5坑覆土) 16a(8住53)

年輪の始めに中型～大型の管孔が2～数層配列し、晩材部では非常に小型管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、内腔にはチロースがある。放射組織は単列同性のものだけである。

クリは北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通の落葉高木である。

ヤマグワ *Morus australis* Poir. クワ科 図版2 7a-7c(12住11)

年輪の始めに中型～大型の管孔が配列し除々に径を減じ、晩材部では複合した管孔が斜状・波状に分布し、年輪界の管孔は非常に小型となる環孔材。道管の壁孔はやや大きくて交互状、穿孔は単穿孔、小道管にらせん肥厚があり、内腔にはチロースが発達している。放射組織は異性、主に5細胞幅の紡錘形、道管との壁孔は大きく交互状に配列している。

ヤマグワは温帯から亜熱帯の山中に広く分布する落葉高木または低木である。

クスノキ科 *Lauraceae* 図版2 8a-8c(22住59)

小型の管孔が単独または2～3個が放射方向に複合しやや疎らに分布する散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔と階段穿孔があり、内腔に細かならせん肥厚がある。放射組織は異性、主に2細胞幅、上下端に大きな油細胞が見られる。本遺跡の試料は、クスノキ科の中でも管孔が大型で油細胞の出現頻度が高いクスノキ以外の樹種であるが、これ以上は区別できなかった。

第5章 自然科学分析

クスノキ科は主に暖帯に生育する多くは常緑の高木または低木である。

トネリコ属 *Fraxinus* モクセイ科 図版3 9a-9c(22住58)

中型の管孔が1～2層配列し、その後は非常に小型で厚壁の管孔が単独または2個複合し散在する環孔材。周囲状・帯状柔組織がある。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単穿孔である。放射組織は同性、1～2細胞幅である。

トネリコ属はおもに温帯に生育する落葉高木でシオジ・ヤチダモ・トネリコ・アオダモなど約9種ある。
樹皮 Bark 図版3 10a(22住128) 11a(8住2-2)

主に柔細胞から構成され、接線状や塊状に異質な細胞層が観察された。

タケ亜科 *Gramineae* subfam. *Bambusoideae* イネ科 図版3 12a(17住117)

やや硬質の稈で、維管束は多数が散在する不整中心柱である。各維管束は向軸側に原生木部、その左右に後生木部の2個の管孔、背軸側に篩部があり、全体としては3～4個の穴の集合に見え、周囲は厚壁の繊維細胞からなる維管束鞘に囲まれている。稈の外周に位置する維管束鞘は特に厚く発達し、厚壁の繊維細胞だけの塊も島状に密在し、稈を堅く支持している様子がわかる。このような形質からイネ科のタケ類とササ類を含むタケ亜科であると同定した。

いわゆるタケ・ササの仲間では12属が含まれ、中国や東南アジアからの移入栽培により広まったものが多い。ササ類は多くの野生種があり、タケ類ではハチク・マダケは日本に野生していた可能性があるといわれる。稈の破片や組織のみからは属や種を識別することは難しい。

ヨシ属 *Phragmites* イネ科 図版3 13a(17住33)

直径1.0cmの稈で、葉鞘に囲まれた節部があるが、この節部はタケ・ササ類のように明瞭な段差や縦に溝を形成していない。維管束は不整中心柱で、稈の外周付近には維管束を挟み細胞間隙の空洞が等間隔に配列し、その内側には数層の厚壁細胞層がある。この厚壁細胞層は波状で空洞と空洞の間に張り出している。内方の維管束鞘の発達は弱い。

ヨシ属は川岸や湿地に生育する大型の多年草で、本州以南の川岸や砂質地に生育するツルヨシ、北海道以南の湿地に群生するヨシ、本州以南の水湿地に生育するセイタカヨシがあるが、稈の一部のみから識別することはできない。

ススキ属 *Miscanthus* イネ科 図版3 14a(17住117)

直径6mmほどの稈で、葉鞘に囲まれた節部があるが、この節部はタケ・ササ類のように明瞭な段差や縦に溝を形成していない。稈の外周には厚い厚壁細胞層にかこまれた維管束が1または2層並び、それより内側に散在する維管束の周囲の厚壁細胞層は薄い。

ススキ属は大型になる多年草で一般にはカヤ(茅)と総称され、約7種ある。日本全土の平地から山地の陽地に普通に見られ、刈って屋根を覆う材料とされてきたススキ、北海道から九州の湿地に生育するオギ、東北南部から近畿北部の山中の陽地に生育するカリヤス、関東南部以西の堤防の草地に生育するトキワススキなどがある。現時点では稈の組織から種を識別することはできていない。

4. 考察

用材の樹種選択

用材の樹種の大きな傾向として、亀泉坂上遺跡の古墳時代の住居跡ではクスギ節とコナラ節が全体の8～9割を占め、選択的に用いられていた。古墳時代前期(4世紀)の住居跡には、クスギ節が74.6%と優占し、

それ以外の樹種は、共通性は低く住居跡ごとに異なる傾向が見られ、コナラ節、イヌガヤ、スギ、ヤマグワ、トネリコ属などが1～3点産出した。古墳時代後期（6世紀）の住居跡には、コナラ節が43.8%、クヌギ節が45.3%とほぼ同じ割合を占めた。

堤沼上遺跡の古代に属する遺構では分析点数が14点と少ないため用材傾向はいえないが、クヌギ節・コナラ節に加えて、古墳時代の住居跡にはみられなかったクリが少量産出した。

炭化材が多く出土した焼失住居跡である古墳時代前期の22号住にはクヌギ節が優占し、後期の17号住にはクヌギ節とコナラ節がほぼ同数で見られた（図1・2）。これは時代による傾向差ともいえるが、住居跡ごとの樹種組成の差を示している可能性がある。特に炭化材の形状を比較すると17号住には直径5cm程度の枝のような小径木の丸木材が多いのに対して（全体の54.5%）、22号住には小径木がほとんどみられなく（全体の1.8%）、板目材や柾目材、角材が多い（表6）。そのため、クヌギ節とコナラ節の割合の差は、用材選択の結果というよりも遺存した炭化材の形状の差によって樹種が異なる結果、樹種組成に差がでている可能性がある。その原因として住居跡の上屋構造の差異が考えられるが、炭化材の観察からは不明である。

木取りおよび法量の計測結果

両遺跡を通して、長さが50cmをこえる材も見られたが、出土状態で垂直方向の保存が悪く、幅もしくは計測値は本来の値を示していないと考えられる。木取りについても同様で、割材とした一群は丸木材や板目材、柾目材が燃焼中もしくは堆積中といった検出されるまでの過程や、発掘調査中、整理作業中などに割れた材も多く含むことが想定できる。そうした制約があるものの、亀泉坂上遺跡の炭化材の木取りと樹種の対応関係をみた（表7）。数の多いコナラ節とクヌギ節、その他（単子葉植物は含めない）で比較した結果、残存が悪い材も多く、観察できた試料が少ないため明確な傾向はいえないが、ややクヌギ節に角材や柾目材など、ほかの樹種にはみられない木取りが確認できた。クヌギ節に木取りのバリエーションが多いことは千葉県八千代市の川崎山遺跡d地点の古墳時代初頭の住居跡出土炭化材でも指摘している（植田・佐々木2003）。クヌギ節は割裂性に富み、加工しやすい樹木である。木取りのバリエーションが、材本来の加工しやすさを反映した結果なのか、今後の試料の蓄積を待つて再検討したい。

材の性格

今回同定した試料はすべて遺構から出土した炭化材で、住居跡出土が大半を占める。その性格として17・22号住の焼失住居跡は建築材が多く含まれていることが推定できるが、他の住居跡出土の炭化材の性格については不明である。ただし、7・16号住のカマド出土材のような位置からの出土材は、燃料材の可能性が考えられ、いずれもクヌギ節が使用されていた。材の形態や木取りからは木製品は確認されていないため、ほとんどの単子葉を除く炭化材は建築材もしくは燃料材であると考えられる。焼失住居跡である17号住に産出したタケ亜科、ヨシ属、ススキ属（いわゆる茅）は屋根材や敷物、壁材などであることが推測できる。

クヌギ節の年輪幅

クヌギ節(クヌギかアバマキ)は、現生では関東地方の自然植生である照葉樹林や落葉広葉樹林の中に生育しているか、開発や災害などで破壊された跡地に成立する二次林の主要樹種として生育することが多い。弥生時代以降、遺跡周辺で二次林が成立したといわれているが（千野1991）、当遺跡で圧倒的に多く使用されていたクヌギ節やコナラ節の材は、天然林と二次林のどちらに生育していたものを利用していたかは不明で

ある。一般的に二次林の光環境の良い環境で育つ個体は、天然林で育つ個体よりも成長が良いと考えられている。そこで、成長度をみるためにクヌギ節・コナラ節・クリの年輪幅を記録した。

しかし、遺構出土炭化材は部位の不明な破片がほとんどであり、小径木とした材以外は材の中心から樹皮までの年輪幅を計測していないという問題がある。表8に各住居跡出土の炭化材の平均年輪幅から最小値・最大値・平均値を記した。

亀泉坂上遺跡で古墳時代から出土した炭化材の年輪平均値は、クヌギ節は1.9mmで、コナラ節は1.4mmであった。堤沼上遺跡で古代から出土した炭化材の平均値は観察点数が1～2点と少ないが、クヌギ節は0.7mm、コナラ節は3.8mm、クリは4.9mmであった。クリは成長が良く、クヌギ節・コナラ節は成長が悪いといえる。具体的な例をあげると、22住77のクヌギ節の材では放射径4.8cmに対して年輪数は39本で平均年輪幅1.23mmである。つまり単純に計算して約10cmの太さに成長するのに約40年かかるということになる。今後天然林と二次林に生育する現生のクヌギ節・コナラ節の平均年輪幅がどの位であるかデータを比較していく必要があるが、身近な材では年輪幅が5mm前後の樹木が多いように思える。それに比べると本試料のクヌギ節とコナラ節の年輪幅の数値は、炭化材が熱で収縮していることを考慮してもかなり狭いと思われる。つまり、単純に平均年輪幅のみを考慮すると、成長速度が遅く、生育条件の悪い森林に生育していたことが考えられる。成長が悪いということは、一端伐採してしまうと次に土木用材などに使用できる大きさに成長するのにタイムスパンが長いということになる。一集落を構成する住居材や燃料材に必要な材の量がどのくらいであるか算出する必要があるが、土木用材や燃料材にクヌギ節やコナラ節が選択され恒常的に使用されたと仮定するならば、二次林ではなく成長の悪い森林が存在していたとは考えにくい。今後、成長度の分析から森林がどのくらいのサイクルで再生していくのかといった問題や、二次林の有無等を含め遺跡周辺の森林環境について検討することができよう。ただし、同じ個体でも光環境や樹齢は部位によって差がでるため、年輪幅のみで議論することは難しい。また計測を行った部位はぬか目材（写真図版3a、5a、15a）が少なからず認められたことから樹皮側の年輪が詰まった部分の値から平均年輪値を出している個体が含まれるというバイアスもある。こうした問題を解決するには、樹芯から樹皮まで残存している根株に近い未炭化材のデータを比較していく必要がある。

周辺遺跡との比較

これまでに知られている関東地方の遺構から出土する材として、縄文時代では建築材や燃料材にクリが頻りに利用されるが、弥生時代や古墳時代になるとクリに代わってクヌギ節・コナラ節が多く産出し、奈良・平安時代では再びクリが多くなる傾向が知られている（千野1991、藤根1992、植田2002など）。亀泉坂上遺跡では、古墳時代の住居跡にクヌギ節・コナラ節が多く産出したことから関東地方の典型的な樹種利用の傾向と一致する。

時代による樹種利用の傾向が指摘される一方で、遺跡の位置や立地環境、そして同遺跡内でも住居跡によって異なる樹種選択がなされている事例がある（植田・佐々木2003など）。

古墳時代の関東地方で地域ごとの樹種傾向をみると、群馬県南部を一部含み下総台地から武蔵野台地ではクヌギ節が多く、長野県、栃木県、群馬県、千葉県の一部ではコナラ節、千葉市付近の台地と多摩丘陵では常緑広葉樹が多い傾向があり、これは木材を選択入手していた遺跡周辺の植生を反映した結果と考えられている（千野1988、1991）。しかし、亀泉坂上遺跡・堤沼上遺跡では、集落周辺の植生を直接示す自然木や花粉などのデータに欠けること、木製品などを含めて用材選択が明らかになっていないため周辺植生との比較

は難しい。

群馬県内での樹種同定は、これまで多くの遺跡で実施されてきており試料の蓄積も進んでいる。遺跡周辺の古墳時代の遺跡の例では、高崎市新保遺跡（鈴木・能城1988）、日高遺跡（鈴木・能城1982）、浜川館遺跡（藤根・松葉1998）、前橋市元総社寺田遺跡（藤根1996）、二之宮千足遺跡（藤根1992）などで建築材や土木用材にクヌギ節・コナラ節が多く使用されることが明らかになっている。さらに二之宮千足遺跡ではFAを境として奈良・平安時代ではクヌギ節が減少し、クリ、ヒノキ属、サクラ属、モミ属、ケヤキが多く見られる（藤根1992）。古代になってクリが増加するのが人為的な活動結果によるのか否か、今後検討していく必要がある。

5. まとめ

住居跡を中心とした遺構出土炭化材を樹種同定した結果、古墳時代ではクヌギ節・コナラ節が選択的に利用されていた。また古代になると上記の2種に加えてクリが使われるが、分析点数が少ないことから用材傾向を示すことができない。樹種による残りやすさの違いというバイアスや、炭化材が焼失時あるいは埋没過程で割れ、同じ部材を重複してカウントしている可能性もあるが、単純に材積量からみてもクヌギ節・コナラ節は圧倒的に多かった。また、焼失住居跡によってクヌギ節とコナラ節の割合に差があることは、時期差というよりも材の形状の違いから住居の構造部材の差異を反映している可能性を指摘した。用材の出土位置や形態観察から、具体的にその差異についての検討をしていく必要があるだろう。またクヌギ節・コナラ節の成長の問題については、年輪幅の平均値が試料の多い古墳時代前期でクヌギ節1.9mm、コナラ節1.4mmと成長が悪い結果が得られた。成長の問題については先述したように低地遺跡から出土する土木用材の成長とも比較しながら、今後集落周辺の森林様相と用材利用のサイクルについて検討していきたい。

炭化材は脆く割れやすいという性格上、出土時から同定作業までの間に失われる情報も少なくない。樹種同定だけでなく、樹種ごとの炭化材の性格や、あるいは木取りや樹種との対応関係を観察するには、考古学調査側と自然科学分析側が調査時から共同で作業を行い、情報を抽出していく必要があると思われる。

引用文献

- 植田弥生(2002)白井大宮II遺跡の炭化材樹種同定.群馬県企業局・群馬県埋蔵文化財調査事業団（編）「白井大宮II遺跡」pp.98-102
- 植田弥生・佐々木由香（2003）川崎山遺跡d地点住居跡出土炭化材の樹種同定．八千代市遺跡調査会ほか編「川崎山d地点」pp.167-192
- 鈴木三男・能城修一(1986)新保遺跡出土加工木の樹種．群馬県埋蔵文化財調査事業団（編）「新保遺跡I 弥生・古墳時代大溝編」pp.71-94
- 鈴木三男・能城修一(1982)日高遺跡出土木材の樹種．群馬県埋蔵文化財調査事業団（編）「日高遺跡」pp.372-388
- 千野裕道（1998）子ノ神遺跡出土の炭化物について．厚木市教育委員会編「子ノ神遺跡IV」pp.187-197
- 千野裕道（1991）縄文時代に二次林はあったかー遺跡出土の植物性遺物からの検討ー．東京都埋蔵文化財センター編「研究論集X」pp.214-249
- 藤根 久(1992)二之宮千足遺跡出土材の樹種．「一般国道17号（上武国道）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（自然科学・分析編）二之宮千足遺跡」pp.30-49
- 藤根 久(1996)樹種同定．群馬県埋蔵文化財調査事業団（編）「元総社寺田遺跡III」pp.65-91
- 藤根 久・松葉玲子(1998)浜川館遺跡出土材の樹種構成と周辺遺跡植生．群馬県埋蔵文化財調査事業団（編）「浜川館遺跡群」pp.336-349

補註

堤沼上遺跡については財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団第423集「堤沼上遺跡」（2008）を参照

表3 亀泉坂上遺跡炭化材観察・同定表(1)

遺構	遺物番号	木取り	残存径			全長	樹皮	樹種	放射径(mm)	年輪数	平均年輪幅(mm)	備考
			幅	厚さ	単位(cm)							
6住	35	割材	—	(1.0)	不可	(3.0)	×	コナラ節	15	23	0.65	ぬか目
6住	80	不明	計測不可				×	コナラ節	—	—	—	細片
7住	貯蔵穴	不明	計測不可				×	クスギ節	—	—	—	細片
7住	カマド	不明	計測不可				×	クスギ節	—	—	—	細片
8住	1-1	板目	—	(6.0)	(2.0)	(50.0)	○	コナラ節	17	10	1.70	
8住	1-2	板目	—	(5.5)	(0.5)	(15.0)	○	コナラ節	—	—	—	
8住	1-3	板目	—	(5.5)	(5.0)	(10.0)	○	コナラ節	—	—	—	
8住	1-4	板目	—	(7.0)	(1.0)	(20.0)	×	コナラ節	—	—	—	
8住	2-1	丸木?	半径(2.0)	—	—	(15.0)	×	クスギ節	12	6	2.00	小径木
8住	2-2	樹皮	計測不可				×	樹皮	—	—	—	
8住	2-3	丸木?	計測不可				×	クスギ節	—	—	—	細片、小径木
8住	貯蔵穴覆土	丸木	計測不可				×	クスギ節	—	—	—	細片、小径木
9住	25	丸木?	不可	—	—	(6)	×	コナラ節	15	50	0.30	細片、小径木、髓有り
10住	52	丸木?	半径(1.7)	—	—	不可	×	クスギ節	11	4	2.75	小径木
10住	53	丸木	直径(2.3)	—	—	(7.0)	×	クスギ節	12	4.5	2.67	小径木、髓有り
10住	54	割材	—	不可	不可	(10.0)	×	コナラ節	15	7.5	2.00	
10住	55	丸木	直径(2.5)	—	—	(2.3)	×	クスギ節	—	—	—	小径木、髓有り
10住	61	丸木	直径(3.0)	—	—	(20.0)	×	コナラ節	7	6	1.17	小径木、髓有り
10住	62	割材	—	(3.0)	(1.5)	(15.0)	×	クスギ節	—	—	—	小径木
12住	8	不明	計測不可				×	クスギ節	—	—	—	細片
12住	11	板状	—	(5.0)	(0.3)	不可	×	ヤマグワ	—	—	—	
12住	67	不明	計測不可				×	クスギ節	15	9	1.67	細片
13住	5	不明	計測不可				×	コナラ属	—	—	—	細片
13住	6	不明	計測不可				×	コナラ節	—	—	—	細片
13住	7	不明	計測不可				×	クリorコナラ節	—	—	—	細片
16住	カマド	不明	計測不可				×	クスギ節	—	—	—	細片
16住	76	丸木	直径(0.7)	—	—	不可	—	タケ亜科	—	—	—	
17住	貯蔵穴上面	不明	計測不可				×	コナラ節	9	13	0.69	細片
17住	1	丸木?	残存径(1.5)	—	—	不可	×	クスギ節	17	7	2.43	小径木
17住	2	丸木?	残存径(1.5)	—	—	不可	×	クスギ節	—	—	—	小径木
17住	3	丸木?	残存径(2.0)	—	—	不可	×	コナラ節	13	7	1.86	小径木、髓有り
17住	4	丸木?	不可	—	—	(30.0)	×	コナラ属	—	—	—	小径木
17住	5	丸木?	計測不可				×	コナラ節	—	—	—	細片、小径木
17住	6	丸木?	計測不可				×	コナラ節	—	—	—	細片、小径木?
17住	7	不明	計測不可				×	クスギ節	—	—	—	細片、小径木
17住	8	板目	—	(2.3)	(0.5)	(5.0)	×	クスギ節	—	—	—	細片が大部分
17住	9	丸木	残存径(3.0)	—	—	(15.0)	○	クスギ節	21	7	3.00	小径木
17住	10	丸木	半径(2.2)	—	—	(60.0)	×	コナラ節	25	16	1.56	小径木、髓有り
17住	11	丸木	半径(7.0)	—	—	(30.0)	×	コナラ節	28	23	1.22	髓有り
17住	12	丸木	直径(6.0)	—	—	(22.0)	○	コナラ節	—	—	—	
17住	13	丸木?	計測不可				×	コナラ節	—	—	—	細片、小径木
17住	14	不明	計測不可				×	クスギ節	—	—	—	細片、小径木?
17住	15	不明	計測不可				×	コナラ節	15	23	0.65	細片、小径木、髓有り
17住	16	不明	計測不可				×	クスギ節	—	—	—	細片、小径木
17住	17	不明	計測不可				×	クスギ節	—	—	—	細片、小径木
17住	18	板目	—	(2.0)	(0.5)	(5.0)	×	クスギ節	—	—	—	小径木、髓有り
17住	19	不明	計測不可				×	クスギ節	—	—	—	細片
17住	20	割材	—	(2.5)	(1.5)	(26.0)	×	クスギ節	—	—	—	
17住	21	不明	計測不可				×	クスギ節	—	—	—	細片
17住	22	丸木?	計測不可				×	クスギ節	—	—	—	細片、小径木
17住	23	丸木	直径(5.0)	—	—	(50.0)	×	クスギ節	6	3	2.00	小径木
17住	24	割材	—	(4.5)	(2.5)	(45.0)	×	コナラ節	—	—	—	
17住	25	板目	—	(3.0)	(1.5)	(12.0)	×	コナラ節	7	5	1.40	小径木
17住	26	不明	計測不可				×	コナラ節	18	20	0.90	細片、小径木
17住	27	不明	計測不可				×	コナラ節	—	—	—	細片
17住	28	割材	—	(5.5)	(0.5)	不可	×	クスギ節	—	—	—	
17住	29	不明	計測不可				×	コナラ節	—	—	—	細片、小径木
17住	30	丸木	直径(1.8)	—	—	(12.0)	×	コナラ節	8	5	1.60	
17住	31	半割?	直径(0.5)	—	—	不可	—	タケ亜科	—	—	—	
17住	32	丸木?	直径(3.5)	—	—	(15.0)	×	クスギ節	—	—	—	
17住	33	丸木	直径(1.0)	—	—	(4.5)	—	ヨシ属	—	—	—	
17住	34	丸木?	計測不可				×	コナラ節	—	—	—	細片
17住	35	丸木?	計測不可				×	コナラ節	—	—	—	細片、小径木
17住	36	丸木?	計測不可				×	コナラ節	—	—	—	細片、小径木
17住	37	不明	計測不可				×	クスギ節	—	—	—	細片
17住	38	不明	計測不可				×	コナラ節	—	—	—	細片、小径木?
17住	39	丸木	直径(0.9)	—	—	不可	—	タケ亜科	—	—	—	東状
17住	フク土	不明	計測不可				×	コナラ節	18	18	1.00	細片、小径木?

表3 亀泉坂上遺跡炭化材観察・同定表(2)

遺構	遺物番号	木取り	残存径				樹皮	樹種	放射径 (mm)	年輪数	平均年輪幅 (mm)	備考
			幅	厚さ	全長	単位(cm)						
17住	117	丸木	直径(0.6)	—	—	不可	—	ススキ属	—	—	—	細片
17住	118	丸木	直径(1.8)	—	—	(10.0)	○	コナラ節	8	5	1.60	小径木
17住	119	丸木?	直径(4.0)	—	—	(15.0)	×	コナラ節				小径木
21住	47	不明	不可	—	—	—	×	スギ				細片
22住	フク土①	角材?	—	不可	不可	(4)	×	クヌギ節	12	8	1.50	
22住	フク土②	割材	計測不可				×	クヌギ節	13	7	1.86	細片
22住	21	不明	計測不可				×	クヌギ節	10	2	5.00	細片
22住	22	不明	計測不可				×	クヌギ節	—	—	—	細片
22住	23	割材	—	(6.0)	(2.5)	(20.0)	×	クヌギ節	18	14	1.29	
22住	24	柾目	—	(5.5)	(1.5)	不可	×	クヌギ節				
22住	25	柾目	—	(1.5)	(0.2)	不可	×	不可	—	—	—	
22住	26	板目	—	(6.0)	(2.0)	(18.0)	×	クヌギ節	21	14	1.50	
22住	27	板目	—	(3.0)	(1.3)	(9.0)	×	クヌギ節	—	—	—	
22住	28	割材	—	不可	不可	(7.0)	×	クヌギ節	10	8	1.25	細片
22住	29	不明	計測不可				×	クヌギ節	15	8	1.88	細片
22住	30	柾目	—	(3.0)	(1.0)	(9.0)	×	クヌギ節	—	—	—	
22住	31	不明	計測不可				×	クヌギ節	—	—	—	細片
22住	32	不明	計測不可				×	クヌギ節	—	—	—	細片
22住	33	割材	—	(8.0)	(2.5)	(20.0)	×	クヌギ節	8	5	1.60	
22住	34	不明	計測不可				×	クヌギ節	15	7	2.14	細片
22住	35	不明	計測不可				×	クヌギ節	—	—	—	細片
22住	36	不明	計測不可				×	クヌギ節	—	—	—	細片、劣化
22住	37	不明	計測不可				×	クヌギ節	14	7	2.00	細片
22住	38	不明	計測不可				×	クヌギ節	8	3	2.67	細片、劣化
22住	39	不明	計測不可				×	クヌギ節	—	—	—	細片
22住	40	不明	計測不可				×	クヌギ節	—	—	—	細片
22住	41	不明	計測不可				×	イヌガヤ	—	—	—	細片
22住	42	不明	計測不可				×	樹皮?	—	—	—	細片
22住	43	割材	—	(3.0)	不可	(18.0)	×	クヌギ節	23	11	2.09	
22住	44	不明	計測不可				×	クヌギ節	—	—	—	細片
22住	45	不明	計測不可				×	クヌギ節	17	8.5	2.00	細片
22住	46	不明	計測不可				×	クヌギ節	9	16	0.56	細片
22住	47	不明	計測不可				×	クヌギ節	11	12	0.92	細片
22住	48	不明	計測不可				×	クヌギ節	15	10	1.50	細片
22住	49	不明	計測不可				×	クヌギ節	—	—	—	細片
22住	50	不明	計測不可				×	クヌギ節	—	—	—	細片
22住	51	不明	計測不可				×	樹皮	—	—	—	細片、収縮
22住	52	割材	—	(7.5)	(4.0)	(24.0)	×	クヌギ節	—	—	—	
22住	53	不明	計測不可				×	クヌギ節	—	—	—	細片
22住	54	柾目	計測不可				×	クヌギ節	12	11	1.09	細片
22住	55	不明	計測不可				×	クヌギ節	11	6.5	1.69	細片
22住	56	不明	計測不可				×	クヌギ節	—	—	—	細片、劣化
22住	57	板目	—	(7.0)	(3.0)	(35.0)	×	クヌギ節	28	20	1.40	
22住	58	不明	計測不可				×	トネリコ属	—	—	—	細片、劣化
22住	59	割材	計測不可				×	クスノキ科	—	—	—	細片、
22住	60	不明	計測不可				×	クスノキ科	—	—	—	細片
22住	61	板目材	—	(12.0)	(5.0)	(43.0)	×	クヌギ節	—	—	—	
22住	62	不明	計測不可				×	クヌギ節	—	—	—	細片
22住	63	柾目	—	(3.5)	(2.5)	(12.0)	×	クヌギ節	—	—	—	加工材?
22住	64	柾目	—	(13.0)	(4.0)	(25.0)	×	クヌギ節	—	—	—	
22住	65	割材	—	—	(2.5)	(30.0)	×	クヌギ節	18	13	1.38	
22住	66	柾目	—	(8)	(2.5)	(18.0)	×	クヌギ節	—	—	—	
22住	67	丸木?	計測不可				×	クヌギ節	—	—	—	細片
22住	68	柾目	—	(8)	(2.5)	(15.0)	×	クヌギ節	—	—	—	
22住	69	柾目	—	(6)	(0.5)		×	コナラ属	—	—	—	
22住	70	不明	計測不可				×	クヌギ節	—	—	—	細片
22住	71	不明	計測不可				×	クヌギ節	—	—	—	細片
22住	72	不明	計測不可				×	クヌギ節	—	—	—	細片
22住	73	不明	計測不可				×	クヌギ節	15	10	1.50	細片
22住	74	不明	計測不可				×	クヌギ節	23	17	1.35	細片
22住	75	不明	計測不可				×	コナラ属	—	—	—	細片
22住	76	不明	計測不可				×	クヌギ節	—	—	—	細片
22住	77	割材	—	(8.0)	(5.0)	(75.0)	×	クヌギ節	48	39	1.23	
22住	78	角材	—	(5.0)	(3.0)	(30.0)	×	クヌギ節	45	33	1.36	
22住	79	柾目	—	(10.0)	(2.0)	(30.0)	×	クヌギ節	51	30	1.70	
22住	80	不明	計測不可				×	樹皮	—	—	—	細片、劣化
22住	81	不明	—	(4.0)	(1.5)	不可	×	クヌギ節	—	—	—	
22住	82	不明	—	(4.0)	(3.5)	不可	×	クヌギ節	17	14	1.21	

表3 亀泉坂上遺跡炭化材観察・同定表(3)

遺構	遺物番号	木取り	残存径			樹皮	樹種	放射径 (mm)	年輪数	平均年輪幅 (mm)	備考	
			幅	厚さ	全長							
			単位(cm)									
22住	83	割材	—	(2.5)	(2.5)	(10.0)	×	クスギ節	25	20	1.25	
22住	84	割材	—	(3.0)	(2.0)	(10.0)	×	クスギ節			—	
22住	85	割材	—	(2.5)	(2.0)	(10.0)	×	クスギ節	23	18	1.28	
22住	86	不明	計測不可				×	クスギ節	—	—	—	細片
22住	87	割材	—	(5.5)	(1.5)	(10.0)	×	クスギ節	—	—	—	
22住	88	不明	計測不可				×	クスギ節	—	—	—	細片
22住	89	不明	計測不可				×	クスギ節	—	—	—	細片
22住	90	板目	—	(3.0)	(2.0)	(3.5)	×	クスギ節	—	—	—	
22住	91	—	—	(3.5)	(2.0)	(10.0)	×	クスギ節	—	—	—	不可
22住	92	割材	—	不可	不可	(25.0)	×	クスギ節	—	—	—	
22住	93	割材	—	(4.5)	(3.0)	(75.0)	×	クスギ節			—	
22住	94	板目	—	(5.0)	(2.0)	(6.5)	×	クスギ節			—	
22住	95	板目	—	(7.0)	(2.0)	(25.0)	×	クスギ節	18	16	1.13	
22住	96	板目	—	(12.0)	(3.0)	不可	×	クスギ節	37	20	1.85	
22住	97	不明	計測不可				×	クスギ節	—	—	—	細片
22住	98	割材	(5.0)	(7.0)	(3.0)	(10.0)	×	クスギ節			—	
22住	99	不明	計測不可				×	広葉樹	—	—	—	細片
22住	100	不明	計測不可				×	コナラ節	25	43	0.58	細片, ぬか目
22住	101	割材	—	(3.5)	(2.0)	(5.0)	×	コナラ属			—	
22住	103	割材	—	(5.0)	(3.0)	(20.0)	×	クスギ節			—	
22住	105	角材?	—	(8.0)	(3.5)	(70.0)	×	クスギ節	30	23	1.30	
22住	106	板目	—	(3.5)	(0.6)	(4.5)	×	コナラ節	10	19	0.53	ぬか目
22住	107	角材?	—	(3.5)	(3.0)	(12.0)	×	クスギ節	27	16	1.69	
22住	108	不明	計測不可				×	クスギ節			—	細片
22住	109	板目	—	(6.5)	(2.0)	不可	×	クスギ節	—	—	—	
22住	110	割材	—	(4.0)	(2.0)	(36.0)	×	コナラ節	27	30	0.90	
22住	111	板目材	—	(3.0)	(1.0)	(10.0)	○	コナラ属?			—	
22住	112	割材	—	(4.0)	(2.0)	(8.0)	×	クスギ節	9	6	1.50	
22住	113	角材	—	(6.5)	(2.0)	(45.0)	×	クスギ節	30	20	1.50	
22住	114	割材	—	(4.0)	(1.0)	(4.5)	×	クスギ節	—	—	—	
22住	115	割材	—	(4.0)	(2.0)	(15.0)	×	クスギ節	—	—	—	
22住	116	樹皮?	計測不可				○?	樹皮	—	—	—	細片、劣化
22住	117	割材	—	(4.0)	(0.5)	(10.0)	×	樹皮	—	—	—	劣化
22住	118	樹皮?	計測不可				○?	樹皮	—	—	—	細片、劣化
22住	119	割材	計測不可				○?	クスギ節	8	5.5	1.45	細片
22住	120	板目	—	(4.0)	(2.0)	(12.0)	×	クスギ節			—	
22住	121	板目	—	(4.0)	(1.5)	不可	×	クスギ節	—	—	—	
22住	122	不明	計測不可				×	クスギ節	—	—	—	細片
22住	123	板目?	計測不可				×	クスギ節	—	—	—	細片
22住	124	不明	計測不可				×	クスギ節	—	—	—	細片
22住	125	丸木?	残存径(1.2)	—	—	不可	○	クスギ節	—	—	—	細片、小径木、劣化
22住	128	不明	計測不可				×	樹皮	—	—	—	細片、劣化
22住	129	板目?	計測不可				×	クスギ節	—	—	—	細片
22住	130	不明	計測不可				×	樹皮	—	—	—	細片、劣化
22住	131	丸木?	計測不可				○	コナラ属	—	—	—	細片、小径木
23住	フク土	丸木?	残存径(1.3)	—	—	不可	×	クスギ節	12	4	3.00	小径木、髓有り
合計	182点											

堤沼上遺跡炭化材観察・同定表

遺構	遺物番号	木取り	残存径			樹皮	樹種	放射径 (mm)	年輪数	平均年輪幅 (mm)	備考	
			幅	厚さ	全長							
			単位(cm)									
6住	26	割材	—	(10.0)	(2.0)	(45.0)	×	コナラ節	—	—	—	
6住	28	板目	—	(6.0)	(1.0)	(30.0)	×	コナラ節	—	—	—	28は2点あり
6住	28	板目	計測不可				×	アサダ	—	—	—	小径木、髓有り
8住	53	不明	計測不可				×	クリ	20	2	10.00	細片
8住	119	不明	計測不可				×	クリ	7	1	7.00	細片
10住	108	丸木	直径5	—	—	(15.0)	×	コナラ節	—	—	—	
26住	53	不明	計測不可				×	クスギ節	—	—	—	細片、劣化
26住	60	不明	計測不可				×	クスギ節	11	15	0.73	細片
30住	16	割材	—	(4.0)	(4.0)	(10.0)	×	クリ	12	9	1.33	
30住	17	不明	計測不可				×	コナラ節	15	4	3.75	細片、劣化
36住	25	不明	計測不可				×	クスギ節	—	—	—	細片
5坑	覆土	不明	計測不可				×	クリ	—	—	—	細片(多量)
4溝	1	不明	計測不可				×	クスギ節	—	—	—	細片
合計	13点											

表4 亀泉坂上遺跡の遺構別の樹種組成

時期・遺構 樹種	古墳時代前期						小計	%	古墳時代後期						小計	%	合計
	6住	9住	16住	21住	22住	13住			7住	8住	10住	12住	17住	23住			
イヌガヤ					1		1	0.8%							0	0.0%	1
スギ				1			1	0.8%						1	0	0.0%	1
コナラ節	2	1			3	1	7	5.9%		4	2		22		28	43.8%	35
クヌギ節			1		87		88	74.6%	2	3	4	2	17	1	29	45.3%	117
コナラ属					4	1	5	4.2%					1		1	1.6%	6
コナラ属?					1		1	0.8%							0	0.0%	1
クリorコナラ節						1	1	0.8%							0	0.0%	1
ヤマグワ							0	0.0%				1		1	1.6%	1	
クスノキ科					2		2	1.7%							0	0.0%	2
トネリコ属					1		1	0.8%							0	0.0%	1
タケ亜科			1				1	0.8%					2		2	3.1%	3
ヨシ属							0	0.0%					1		1	1.6%	1
ススキ属							0	0.0%					1		1	1.6%	1
広葉樹					1		1	0.8%							0	0.0%	1
樹皮					7		7	5.9%		1					1	1.6%	8
樹皮?					1		1	0.8%							0	0.0%	1
同定不可					1		1	0.8%							0	0.0%	1
合計	2	1	2	1	109	3	118	98%	2	8	6	3	44	1	64	100%	182

表5 堤沼上遺跡出土の遺構別の樹種同定

時期・遺構 樹種	6c後半		9c	古代					合計	
	6住		10住	8住	26住	30住	36住	5坑		4溝
アサダ	1									1
コナラ節	2		1			1				4
クヌギ節					2		1		1	4
クリ				2		1		1		4
合計	4		1	2	2	2	1	1	1	13

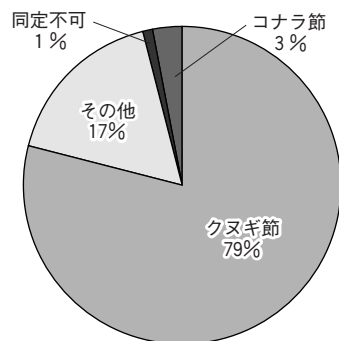


図1 22号住居樹種組成 (n=109)

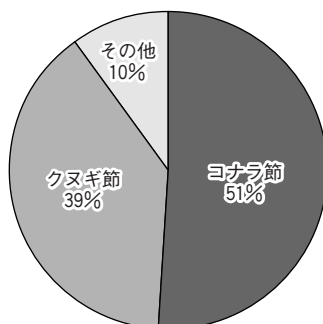


図2 17号住居樹種組成 (n=44)

表6. 亀泉坂上遺跡住居跡出土の小径木の数と全体数からみた割合

時期・遺構 樹種	古墳時代前期						小計	古墳時代後期						小計	総計
	6住	9住	16住	21住	22住	13住		7住	8住	10住	12住	17住	23住		
コナラ節		1					1			1		13		14	15
クスギ節					1		1		3	4		10	1	18	19
コナラ属					1		1					1		1	2
小径木計	0	1	0	0	2	0	3	0	3	5	0	24	1	33	36
同定数	2	1	2	1	109	3	118	2	8	6	3	44	1	64	182
小径木の割合	100%				1.8%		2.5%	37.5%		83.3%		54.5%		100%	19.8%

残存率の悪いものについては肉眼および実体顕微鏡での観察ができないため、実際の割合は多くなると推測される
 単子葉は除く

表7. 亀泉坂上遺跡住居跡出土材の木取りと樹種の対応関係

時期・遺構 樹種	4世紀						小計	%	古墳時代後期						小計	%	総計	
	丸木丸木?	角材	板目	柁目	割材	不明			丸木	丸木?	角材	板目	柁目	割材				不明
コナラ節	1		1		2	3	7	6.2%	6	8		5		2	7	28	46.7%	35
クスギ節	2	5	9	12	20	40	88	77.9%	5	8		2		3	11	29	48.3%	117
その他	1		1	2	2	12	18	15.9%		1		1			1	3	5.0%	21
合計	4	5	11	14	24	55	113	100%	11	17	0	8	0	5	19	60	100%	173

木取りで樹皮としたものは不明に含めた
 板状,板目?は板目に、柁目?は柁目に、角材?は角材に含めた
 丸木?は現況で割れているが、割れ方や形態から本来は丸木と推定した一群
 タケ亜科などの単子葉類は統計に含めていない

表 8. 住居跡出土材の年輪幅 (単位mm)

亀泉坂上遺跡：クヌギ節

住居跡	時 期	計測点数	最小値	最大値	平均値	備 考
22住	古墳前期	35	0.6	5.0	1.6	
8住	古墳後期	1	—	—	2.0	小径木
10住	古墳後期	2	1.2	2.0	1.4	小径木
12住	古墳後期	1	—	—	1.7	細片
17住	古墳後期	3	2.0	3.0	1.9	小径木
23住	古墳後期	1	—	—	3.0	小径木
					平均値	1.9

亀泉坂上遺跡：コナラ節

住居跡	時 期	計測点数	最小値	最大値	平均値	備 考
6住	古墳前期	1	—	—	0.7	ぬか目
9住	古墳前期	1	—	—	0.3	小径木
22住	古墳前期	3	0.5	0.9	1.6	ぬか目
8住	古墳後期	1	—	—	1.7	
10住	古墳後期	2	2.7	2.7	2.7	小径木
12住	古墳後期	1	—	—	1.7	
17住	古墳後期	10	0.7	2.0	1.3	小径木 8
					平均値	1.4

堤沼上遺跡：クヌギ節

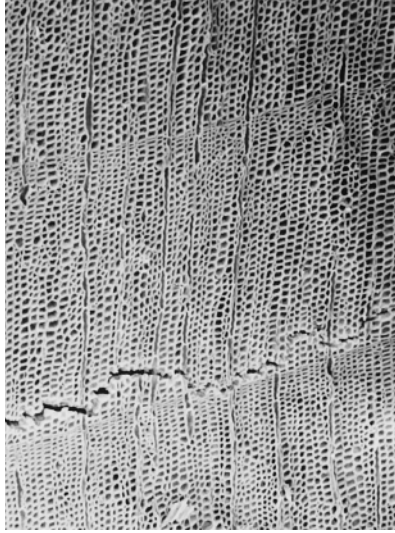
住居跡	時 期	計測点数	最小値	最大値	平均値	備 考
26住	古代	1			0.7	

堤沼上遺跡：コナラ節

住居跡	時 期	計測点数	最小値	最大値	平均値	備 考
30住	古代	1			3.8	

堤沼上遺跡：クリ

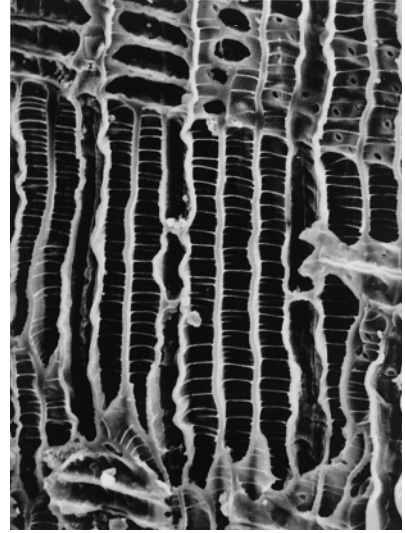
住居跡	時 期	計測点数	最小値	最大値	平均値	備 考
8住	古代	2	7.0	10.0	8.5	
30住	古代	1	—	—	1.3	
					平均値	4.9



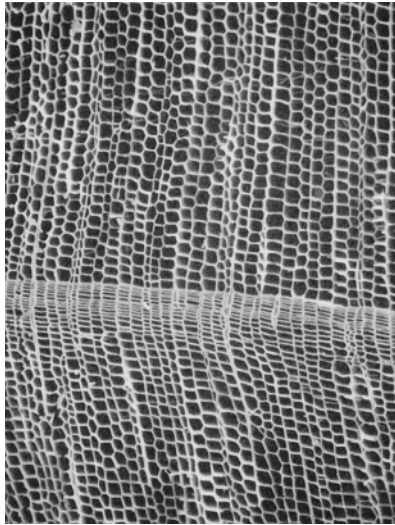
1a イヌガヤ (横断面)
22住41 ber : 0.5mm



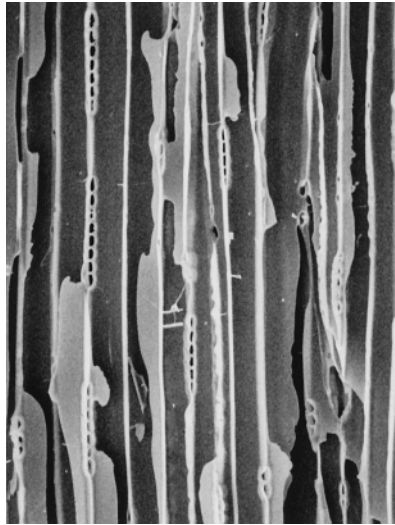
1b イヌガヤ (接線断面)
22住41 ber : 0.1mm



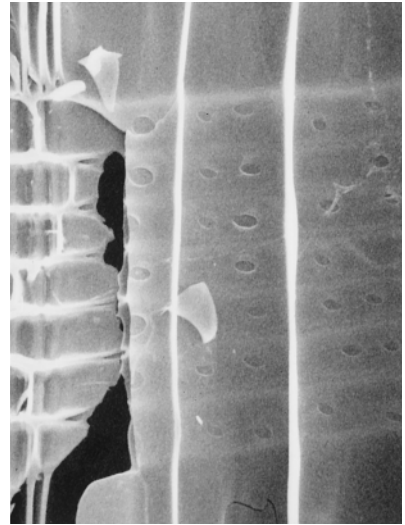
1c イヌガヤ (放射断面)
22住41 ber : 0.1mm



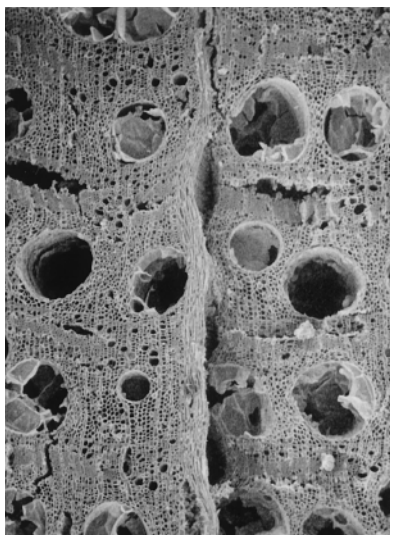
2a スギ (横断面)
21住47 ber : 0.5mm



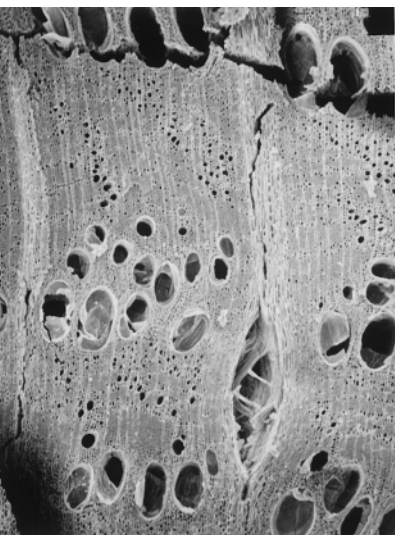
2b スギ (接線断面)
21住47 ber : 0.1mm



2c スギ (放射断面)
21住47 ber : 0.05mm



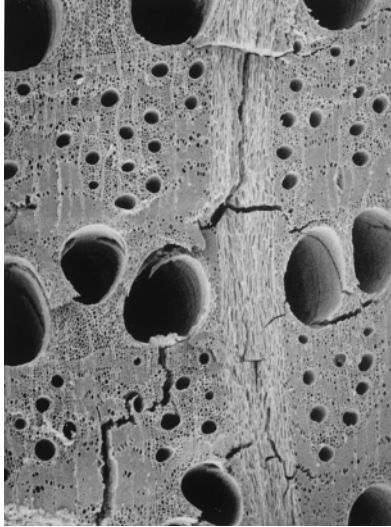
3a コナラ節 (横断面)
22住100 ber : 1.0mm



4a コナラ節 (横断面)
17住11 ber : 1.0mm



4b コナラ節 (接線断面)
17住11 ber : 0.1mm



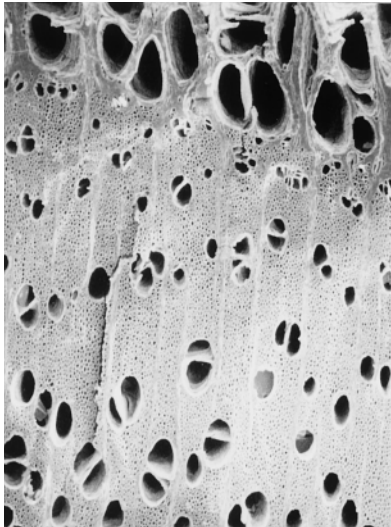
5a クヌギ節 (横断面)
22住83 ber : 1.0mm



5b クヌギ節 (接線断面)
22住83 ber : 0.5mm



6a クヌギ節 (横断面)
10住53 ber : 1.0mm



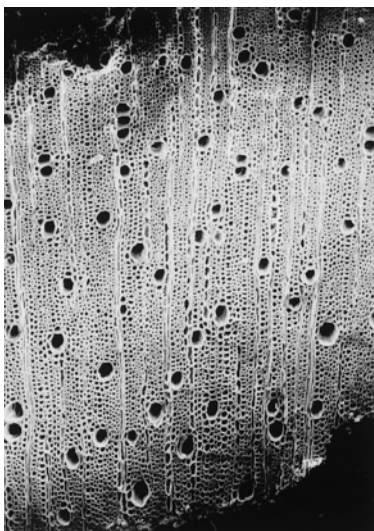
7a ヤマグワ (横断面)
12住11 ber : 0.5mm



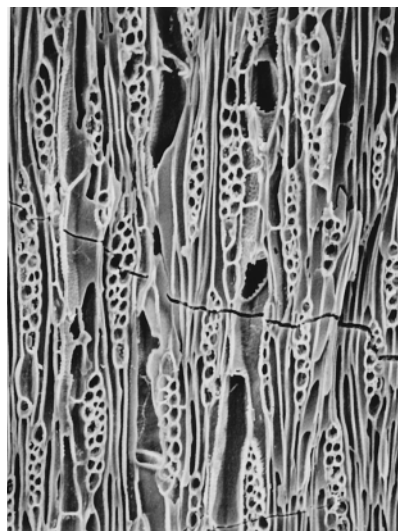
7b ヤマグワ (接線断面)
12住11 ber : 0.1mm



7c ヤマグワ (放射断面)
12住11 ber : 0.1mm



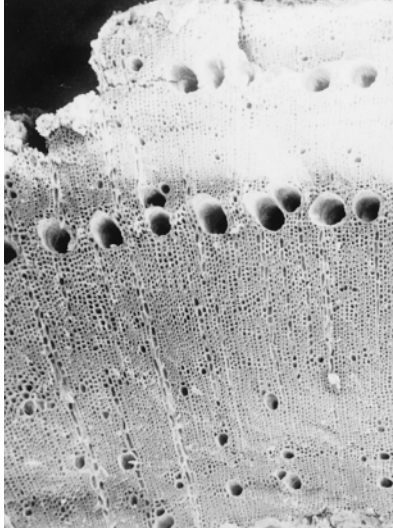
8a クスノキ科 (横断面)
22住59 ber : 0.5mm



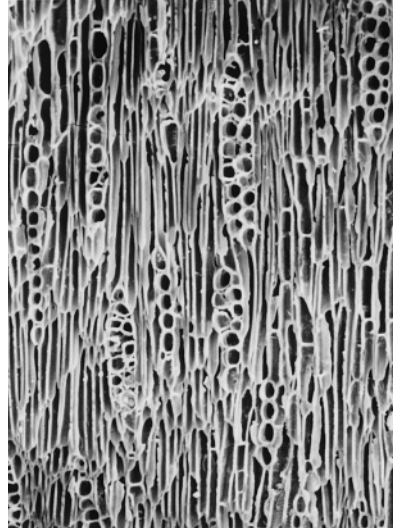
8b クスノキ科 (接線断面)
22住59 ber : 0.1mm



8c クスノキ科 (放射断面)
22住59 ber : 0.1mm



9a トネリコ属 (横断面)
22住58 ber : 0.5mm



9b トネリコ属 (接線断面)
22住58 ber : 0.1mm



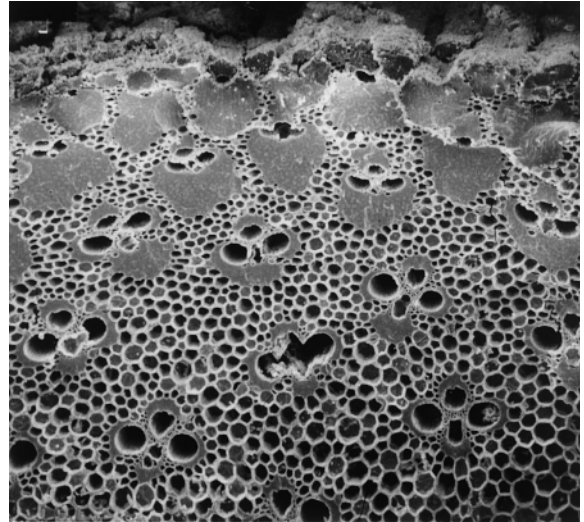
9c トネリコ属 (放射断面)
22住58 ber : 0.1mm



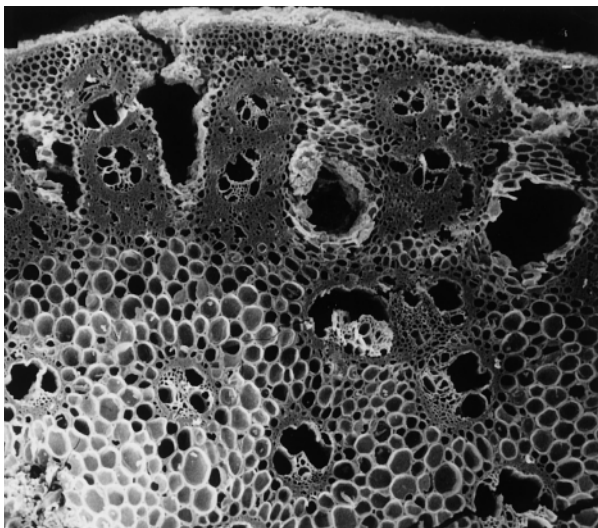
10a 樹皮 (横断面)
22住128 ber : 1.0mm



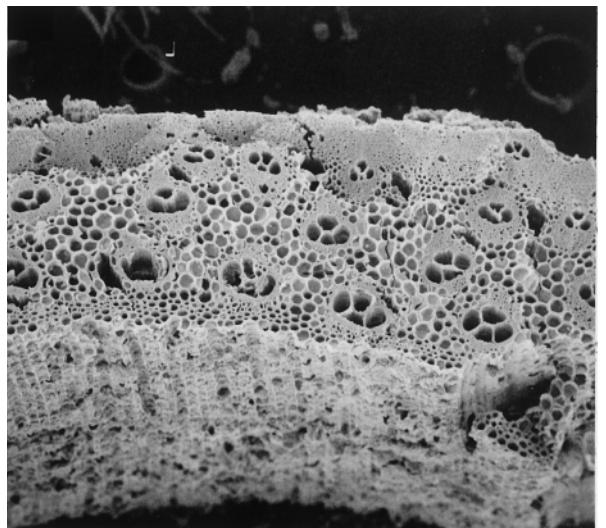
11a 樹皮 (横断面)
8住2-2 ber : 1.0mm



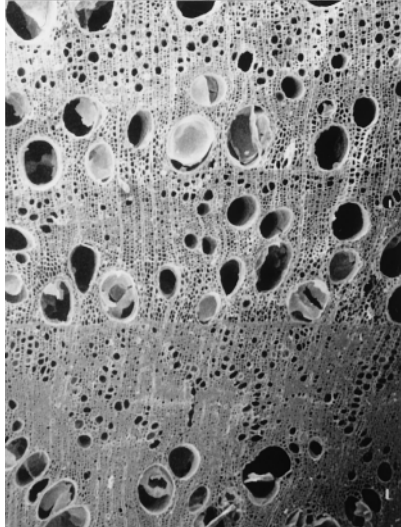
12a タケ亜科 (横断面)
17住117 ber : 1.0mm



13a ヨシ属 (横断面)
17住33 ber : 0.5mm



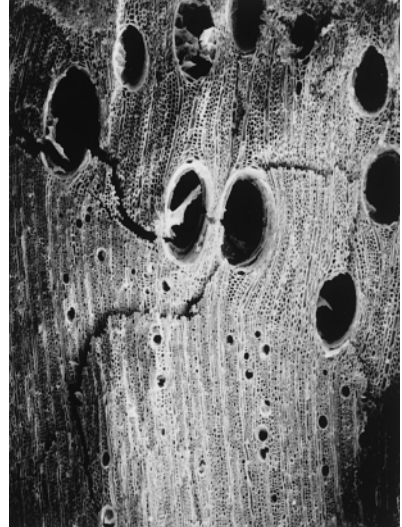
14a ススキ属 (横断面)
17住117 ber : 0.5mm



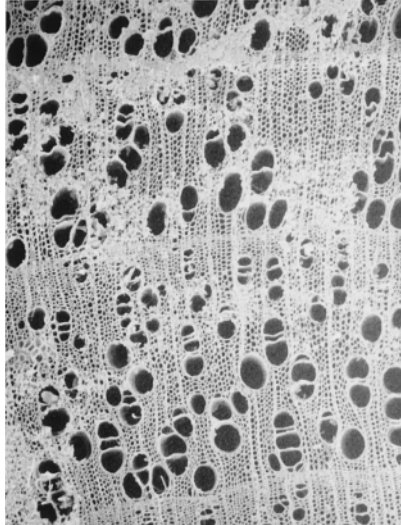
15a クリ (横断面)
5坑覆土 ber: 1.0mm



15b クリ (接線断面)
5坑覆土 ber: 0.1mm



16a クリ (横断面)
8住53 ber: 1.0mm



17a アサダ (横断面)
6住28 ber: 0.5mm



17b アサダ (接線断面)
6住28 ber: 0.1mm



17c アサダ (放射断面)
6住28 ber: 0.1mm

図版 4 堤沼上遺跡出土炭化材の走査電子顕微鏡写真

第6章 調査のまとめ

1 はじめに

亀泉坂上遺跡は、前橋市亀泉町、寺沢川に面した台地上に位置する。隣接する遺跡は多く、これまでに報告されたものでは同じ上武道路以外でも萱野遺跡（1991）、堤沼下遺跡（2000）、堤沼西Ⅲ遺跡（2003）などがあげられ、地域の様子が徐々にではあるが明らかとなっている。遺跡は、第3図で見るように台地、低地で区別されることなく接しているというのが実態で、個々に境界線を引くのは難しい。台地の中を、時代ごとに中心が移動したといったところであろうか。最も近い、同じ台地上にある堤沼上遺跡（2008）とは、市道をはさんで行政上東西に区分しただけである。亀泉西久保Ⅱ遺跡（2008）は、寺沢川をはさんだ対岸を指している。このような遺跡のあり方を見ると、当時の生活環境としては台地上に集落を構え、隣接する谷地を水場などで利用したか、水田として開墾していたと復元するのが自然な姿だといえる。

調査では、旧石器時代から平安時代までの遺構や遺物を検出したほかに、江戸時代に分類したがその中には昭和49年の土地改良の時まで利用されていたような道や溝も含まれている。第4章に詳述したが、内訳としては、住居跡27軒、掘立柱建物跡3棟をはじめとして、土坑85基、溝15条、道9条、古墳1基、ピット45基、水田1箇所、畠2箇所、土器集中1箇所がある。居住、そして生産の場は地形から見てももちろんであるが、古墳群の一面であることが判明したのは、現況からは知ることができない成果である。

主体は、縄文時代、そして古墳時代である。縄文時代は、前期の黒浜式期と諸磯b式～同c式期の集落が4区と5区とで検出され、時期により占地の違うところを見せている。古墳時代では、正円寺古墳に関連する後期の集落と古墳が検出されている。これとは別に、同じ3区と4区で寺沢川沿いでは稀な前期の集落も検出されている。しかし、2つの時期に継続性は見られない。空白の時期をはさみながらも、占地が重複するのはなぜなのか。また、水田など生産の場が明らかではない。課題を残した様相である。

平安時代は、低地に水田が作られていたものの、台地上には前後して居住した跡はなく、溝や道という、より広い範囲での考察を求められる遺構だけである。居住の中心は古墳時代からは大きく変化し、調査区を離れて周縁にあったと見てよい。移動を考えたいところで、台地の東側、堤沼上遺跡や沼西遺跡、さらには萱野Ⅱ遺跡など、浅い谷筋が候補地である。中世は、検出された遺構がない。5区の水田だけでなく、3区の住居跡の上面にはA s - B が堆積したままである。この堆積状態は、隣の堤沼上遺跡でも見られたが開発が放棄されたと見るべきなのだろうか。その後は、現在聞き取れる民家の数、田畑の様子からすると、早くても江戸時代の中頃以降、現代の集落や耕地につながる景観が生まれるのであろう。畑に通じる道や境界となる溝だけが検出されている。上野国郡村帳の景色に近いものがある。

南麓が抱える課題は、まず縄文時代については前期、黒浜・諸磯式期の遺跡の多いことが分布調査で明らかにされているが、規模や継続期間など、実態を解明することが求められている。次いで、弥生時代の遺跡が稀薄だと指摘されている地域である。その事実にはまだ変化はなく、古墳時代以降、いつを画期として地域が抬頭するのか。より地域を限定すれば、大室古墳群がある荒砥川の東とその周辺とでは違いがあるのか。仮にあるとすれば、その原因は何か、である。ここでは、上武道路旧石器時代編（2）として別途に報告する旧石器時代を除き、縄文時代、古墳時代、平安時代について調査の成果をのべ、あわせて今後への課題としたい。

2 縄文時代について

検出された遺構は、住居跡6軒、土坑73基、ピット45基と遺物包含層1箇所である。これらは、2つの時期の集落に分けられる。先行するのが4区の黒浜式期、次いで5区の諸磯b式新段階～同c式期古段階の集落である。南麓では、最も遺跡が多いとされている時期である。全貌は明らかではないが、遺構や遺物の分布からすると川に沿った台地の西斜面に広く展開しそうで、集落の一端をのぞいた、といったところである。浮島式など搬入された土器からは交流の跡を、遺物が分布する範囲の広さからは大規模な集落になる可能性と拠点的な場であったことを読み取ることができる。

寺沢川が流れている低地は、遺跡がある付近で幅がおよそ100m、この付近では目立つというほどの規模ではないが標高600mの中腹にまで達している。一次谷、本谷などと呼ばれるもので、木にととると、幹に相当する谷筋である。5区にある低地は、その一角で川が蛇行して削り込んだ東側の縁にあたる。斜面は緩やかで、台地際の所々は崖をつくるなどして基盤層が露出していた。調査中には、水がしみ出してきた場所である。P1（ピア1）と呼んだ調査箇所では、弥生時代までは湿地か淀みのような状態であったことが分析で判明している（第5章自然科学分析参照）。

下流500mには、1区へと続く枝葉の谷がある。谷の出口には、今は水田となって跡形もないが土地改良の前までは、湧水を溜めてできた沼があったという。元来が湿地で耕作をするには不向き、悪水対策を繰り返して、結果が沼となっただけらしい。縄文時代も、ここに限らず、川沿いの一帯が似たような環境であったろう。旧利根川が流れていた広瀬川低地帯まで1km足らず、目と鼻の先という条件も加わり、生活をする場所としては申し分なかったのではないか。生き物にとっては水場、人にとっては狩猟・採集をする場所といったところである。いかにも、縄文時代にはふさわしい環境である。人は自然と集まり、時によっては集落を形成したものと考えられる。

集落の規模は、全貌をつかめたわけではないが住居跡数軒に土坑を組み合わせただけの小規模なものと考えられる。黒浜式期は、住居跡が1軒だけである。しかし、土坑の数や分布状態からすると、住居跡の数はさらに増すと見られる。地点を変えて、点々と動いているのではないか。一方の諸磯b式～同c式期は、複数の住居跡と群在する土坑の構成で、継続性がある集落である。住居跡の1号と2号が、同じく25号と26号が重複しているところを見れば、3乃至4時期に変遷をしていることが分かる。最終末の様子としては、住居跡に重複する土坑のあること、そのうちのひとつである78号土坑から結節浮線文が出土していることから諸磯c式新段階で終わりを迎える。遺構外として網羅した中には花積下層式や関山I式、加曽利E3式、新しいところでは安行式までである。いずれも少量で遺構に伴うものでないが、絶えず人が集まるような場所であったことが分かる。

遺構の時期は、住居跡を次の一覧に示したが、黒浜式1軒、諸磯b式（新段階）3軒、同c式（古段階）2軒である。土坑は、4区では黒浜式が優勢、5区は諸磯b式新段階と同c式古段階が優勢である。4区と5区の集落は、時期が違おうとしたが、1区の包含層では黒浜式と諸磯b式が混在して見られ、2区では黒浜式だけしか出土しないというように、グリッドでの出土傾向も地点により時期が違っている。この分布状況には、当時の人たちが活動した範囲が反映しているのだろう。墓地や掘立柱の建物跡を想定して調査してみたが、答えを得ることができず次への課題となってしまった。

住居跡の特徴は、次の一覧のとおりである。規模については、最大の25号と最小の24号とでは面積で明らかのように倍近い差がある。形状も時期ごとに統一されていたわけではなく、長方形、方形、隅丸方形が混在した状態である。ただし、内部は、4本の支柱穴、中央付近に埋甕炉を備えているというのが統一感のあ

るところである。

縄文時代住居跡一覧

	時 期	形 状	長軸・短軸(m)	面積(m ²)	主軸方位	柱穴	炉の形態	重複関係
1号住居跡	諸磯b式(新)	長方形	4.50・3.20	14.40	N95° E	4	埋甕炉	2号住居跡より古い
2号住居跡	諸磯b式(新)	方 形	3.60・3.45	12.42	N44° E	4	埋甕炉	1号住居跡より新しい
24号住居跡	黒浜式	隅丸方形	3.10・2.35以上	7.28以上	N63° E	1	埋甕炉	62号～64号土坑より古い
25号住居跡	諸磯c式(古)	隅丸長方形	6.10・5.10	31.11	N30° E	4	埋甕炉	26号住居跡より新しい
26号住居跡	諸磯c式(古)	長方形	4.34・2.74	11.89	N78° W	なし	不明	25号住居跡より古い
27号住居跡	諸磯b式(新)	推定方形	3.86以上・4.78以上	18.45以上	N4° E	1	不明	

土坑は、73基中、いずれも少量ではあるが半数近い37基から遺物が出土した(第32～35図)。遺物の時期は、4区では黒浜式が多く、5区は諸磯b式・同c式が多い。この傾向は、住居跡との共伴関係を示している。分布の傾向は、住居跡のまわりに群在すること。しかも廃屋に重複していることが特徴である。群在・重複するという傾向は、特に5区で顕著である。理由は、活発に活動したからというところかもしれないが、集落として利用していた範囲が予想外に狭いのかかもしれない。一方の4区は、23号住居跡に重複もするが、大半は住居跡からは離れ点在している。4区と5区とでは、集落の景観に違いがあるのだろう。

性格は、落とし穴、貯蔵穴、墓坑、粘土採掘坑の4つがあげられる。21・75・76・79号の4基は、5区にある低地を囲む落とし穴である。等高線に対して直交、低地から見て21号、75号、76号は等間隔の放射状に並んだ上に、さらに75号、76号は縦列するという、念を入れた配置の仕方である。4区に該当するものはないが、まだ、周辺に類例があると思わせるような分布状態である。75号と76号の2基だけ、底面で逆茂木と見られる小ピットを検出することができた。しかし、時期については特定がむずかしい。

貯蔵穴は、直径が1m前後の円形、断面が袋状となるものが該当し、決め手の中に人が入れる程度の広さのあることとした。土坑として検出したうちの、半数以上が該当する。数の多いことが、いかにも重宝した必需品らしい。それでいて長期間にわたって使うものではないため、頻繁に作り替えしたことを現しているのだろう。貯蔵という用途からすれば、利用されるのは一時的なことで、たとえば秋から春までの季節的なものかもしれない。萱野Ⅱ遺跡では、炭化したオニグルミヤクリなどの種実や容器としての深鉢が出土するなど貯蔵用らしい様子が見られたが、これは覆土を水で洗うか、篩にかけた結果である。この結果がすべてに通じるわけではないが、調査では覆土の観察、遺物の出土状態に注意を払うことが大切である。オニグルミヤクリの存在からすれば、収穫の季節である秋以降、という時期は確定できそうである。

墓坑としては、1号・2号住居跡のまわりに集中する一面から離れていること、打製石斧が単独で出土したような26号に可能性がある。確定できたものはない。同じく例外的な存在が、粘土採掘坑とした10号土坑である。一見タヌキ掘りの穴のようであるが、斜め深くまで掘り込まれていて、その先端は暗色帯に達している。暗色帯とその上部には、鬼板と通称されている鉄分の凝集層がある(PL26-4を参照)。厚さは10cm、堅くて一見すると鉄板のようである。浅鉢は、赤彩されることが多い。本遺跡にも例があるが採取したのは粘土ではなく、むしろ浅鉢を赤彩するための原料、この鉄分だったのではないだろうか。遺跡の中でも唯一の例である。最後に、ピットは住居跡からは離れている3区で多く検出された。掘立柱建物跡を念頭に調査を進めたが、確証の得られたものはない。

3 古墳時代前期について

検出されたのは、住居跡10軒、土坑2基、土器集中1箇所である。2基の土坑は、削平をまぬがれた住居跡の貯蔵穴で、住居跡としての数は12軒となる。住居跡は、2区、3区、4区で検出され、台地の中では、見晴らしのきいた頂上平坦部にある。重複はなく、中央の広場を囲うかのように輪を描いて並んでいる。眺望の良さであったかもしれないが、周囲から見れば平坦部を求めて上りつめてしまったような占地の仕方である。当然、川沿いの低地が目的とした耕地であったろうが、見下ろすような感覚で接すると言うにはやや距離がある。むしろ、台地の東側に広々と空いている一帯が主たる生産の場、畠であったろうか。

集落の範囲は、北と東の2方向は限界となり、地形の広がりから見て南と南西の2方向に広がると見てよいらる。特に、川に向かって突き出た格好になる南西方向は、場所を特定するのに都合よく、方形周溝墓がある墓域を考えておきたい一角である。この考えは、隣接する萱野遺跡の例が参考となるであろう。ここでは、台地東端の崖寄りに住居跡群からはやや孤立して方形周溝墓1基のあることが知られている。付け加えれば、川沿いには上毛古墳綜覧（以下綜覧）に記載された6基の古墳があることも傍証で、同じ墓として両者に共通するものがはたらくのではないか。まだ、集落の調査例が少ないので注意を向けられないが、集落の継続性や安定さを知る上で墓域の分析は欠かせない。類例を待つといったところで、今回の調査では検出できなかった水田とともに、今後の課題でもある。

住居跡については、以下のような特徴を持っている。超大型、大型、中型、小型の分類は、今井道上遺跡（1994）の分類基準に拠った。超大型は6.5m以上、大型は5.4～6.5m未満、中型は4.3～5.4m未満、小型は3.2～4.3m未満である。

古墳時代前期住居跡一覧

	形状	長軸・短軸(m)	面積(m ²)	主軸方位	炉	貯蔵穴	柱穴	特記事項
5号住居跡	推定長方形	4.05以上・3.45	13.97	N69° E	中央北	南西隅	1	北東側調査区外
6号住居跡	長方形	5.70・4.50	25.65	N70° E	中央北	南東隅・南西隅2基	4	大型、建て替えあり
9号住居跡	長方形	4.85・4.20	20.37	N84° E	中央2基	南東隅	4	中型
13号住居跡	推定方形	3.40・2.15以上	7.31	N80° E	中央西	不明	なし	南西隅を検出
14号住居跡	推定方形	1.70以上・2.20以上		N80° E	不明	北東隅	なし	北東隅を検出
16号住居跡	方形	6.80・6.50	44.20	N-S	中央北	南東隅	4	超大型
19号住居跡	方形	6.65・5.90	39.23	N60° E		南西隅2基	4	超大型、建て替えあり
20号住居跡	長方形	5.45・4.80	26.16	N53° E	中央北	北東隅	3	大型
21号住居跡	方形	8.40・7.40	62.16	N65° E	中央北	南東隅・南西隅	4	超大型、建て替えあり
22号住居跡	方形	3.30・3.10	10.23	N31° E	中央西	南西隅	なし	小型、焼失住居

形状は、長短軸の差が1m以上ある長方形と1m以下の方形の2者がある。大きな時差ではないが長方形が古くて、方形へと推移している。違いは形状だけでなく、内部の仕様にも現れている。長方形は、掘り込みがローム漸移層の上位までと浅いものに対して、方形はA s - B Pの上面に達するほどで深い。19号と20号は、隣同士で違いを見せた好例で、床面の差が50cmもある。方形は、床面が堅緻で、4本支柱穴、南東隅の貯蔵穴、全周する周溝がセットであるかのように検出されている。しかし、長方形は、床が軟弱で柱穴も浅いのか、掘り方の調査でも相当するものを検出することができなかった。貯蔵穴や周溝についても同様である。炉があるので住居跡であることには間違いはないが、堅穴ではなく、平地式の住居跡なのであろうか。この形状に見る2者は、古墳時代の後期にもあって一時の流行ではない。ここでは、平地式の住居跡が有力と見ておきたい。上屋の分かる一例としては、焼失住居跡である23号住居跡に入母屋造りの可能性がある。残りの方角をした住居跡にも一様にいえる可能性である。

3 古墳時代前期について

規模の点では、超大型住居が16号、19号、21号の3軒、大型が6号の1軒、中型住居が9号の1軒、小型住居が22号の1軒である。主軸方位からは、2つのグループ分けが可能である。また、貯蔵穴の床面をはさんだ上下での検出状況や数からすると、半数以上で建て替えが行われている。貯蔵穴が2基以上あるのは6号、16号、19号、21号の4軒、いずれも大型の住居跡で機能を別にして複数あってもよいが、ここでは集落の継続性や安定さを表しているとおきたい。

遺物の出土状態には、3つの特徴がある。第一は、出土した総量が少ないこと。これは、遺構の遺存状態の良否にかかわらず、規模の大小との無関係である。住居を廃棄するにあつて、道具は持ち出されたとみてよい。第二は、その道具であるが煮炊きに使える大型器種の壺、甕が少ないこと。完形はもちろんのこと、器形をうかがえるものですら少ない。甕は、S字状口縁台付甕よりは単口縁台付甕が個体数の上では多く、輪積痕を持つ甕が伴う。第三は、埴や器台、手づくねといった小型の器種ばかりが目を引き、特に壁際での出土例が半数を占めること。これは、壁の上、屋根との間が棚として使われ土器はそこに置かれていたことと、元来使用頻度が少ない器であったから置き去りにされたのだろう。器形をとどめたものが多いのも、この特徴と、無縁ではない。

遺物組成を見るというのには不十分ではあるが、6号住居跡や19号住居跡にこの時期の特徴が現れている。甕は、S字状口縁台付甕よりは単口縁台付甕が個体数の上では多く、輪積痕を持つ甕が伴う。これは南麓の傾向に合い、S字状口縁台付甕を見ると肩部の横方向刷毛目はなく、深澤編年のⅢ段階からⅣ段階の（深澤1999）の特徴である。

課題として残されたのは、谷地との関係、水田の存否を明らかにすることである。これは、隣り合う江木下大日遺跡でも課題とされたことである。プラント・オパール分析では高い数値がでるものの、遺構がはっきりとしない。その理由としては、古環境研究所早田 勉氏によれば2つのことが考えられるという。ひとつは、堆積する土砂が少ないため、耕作が繰り返されるたびに攪拌されてしまうためだからだという。これならば遺構は確認できなくても、プラント・オパールの分析数値が高いことは説明できる。もうひとつは、遺構はあったが土石流などで流失してしまったことも考えられる、という。この地域は、弘仁九年の地震で被災している。最近では、谷地の調査が除外される傾向にあるが、台地上の集落の動向を占うには調査を行う必要がある。その際は、調査区全体を掘ることに固執せず、例えば複数のグリッドで平面と断面を常にチェックしながら進めたらどうであろうか。谷地は堆積土が薄く、遺構があったとしてもわかりにくいだけに有効な方法かと思う。

前期の集落は、現在のところ荒砥川以西では稀な状況である。まずは遺跡例を増やすことが急務といえるが、近くの萱野遺跡があるほかには、上武道路予定地では富田宮下遺跡（2006）、富田西原遺跡（未報告）だけで貴重な追加例となった。傾向として見えてきたのは、河川、水との関係である。たとえ小河川でも川の流れる谷地に面して遺跡があるようで、灌漑用の水源、そして水量が確保できるかが第一の鍵だったのである。これについては、今後の調査で答えを用意できるが、もうひとつの鍵が課題とした耕地である。2、3の遺跡で、それらしい形跡はあるものの、はっきりとした水田があるのはAs-B下か、それ以降である。

4 古墳時代後期について

検出されたのは、住居跡11軒、掘立柱建物跡3棟、土坑10基、古墳1基、畠1箇所、溝1条である。これらは、1区から5区に分布しているが、土坑のうち2基は、削平をまぬがれた住居跡の貯蔵穴で、住居跡の

第6章 調査のまとめ

数としては13軒となる。住居跡については、継続しようという意識があったのか、中期がそっくり欠落しながらも前期の居住域に重なって作られている。しかし、個々の住居跡は重複することなく、むしろ適度な間隔を保って整然と並んでいるという様子である。2軒の超大型住居跡を中心にした2群構成で、掘立柱建物跡を共有し、一角には畠がある。垣根はなく、住居跡は隣同士が近すぎて数も多すぎるが、掘立柱建物跡、畠との組み合わせは洪川市黒井峯遺跡にある同時期の集落と似ている。3区に限って見れば、10軒を前後する程度で抜き出るような規模ではないが、半数が建て替え、カマドの作り替えをされていて順調な暮らしぶりであることがわかる。6世紀初頭の正円寺古墳以後という見方もあるが、時期としては2度目となる、二ツ岳の噴火に地域がどう対応したのか、に分析の関心が求められる。

前期にはない、新しい動きが2つある。その第一は、台地の東側にまで居住域を広げたことである。具体的には、堤沼上遺跡の様子を指している。前期でもその動きを否定するわけではないが、時期的に見て川沿いが好まれたのであろう。拡大は、時代の流れでもあったろうが、それを加速させたのは6世紀中頃の二ツ岳2度目の噴火である。5世紀には、広瀬川低地帯にも集落が作られている。石関築瀬遺跡、石関西田Ⅱ遺跡がそれで、彼らは中洲のような自然堤防の上にいる。泥流をまともにかぶったという状況にはないが、川沿いの低地、肝心の水田が犠牲となってしまったのだろう。そのため復旧までの一時的な回避策として、自然堤防から見れば後背地であった丘陵部、その一角の台地に立った。回避にはじまり、すぐさま本腰を入れるまでになったというのが拡大の真相ではないか。

第二の動きは、古墳の築造である。南麓で圧倒的な数を誇る、7世紀代、直径が10m前後の円墳が検出された。石室からは、大刀、鉄鎌とともに県内では稀な中空金板貼耳環2点が出土した。その箇所は、北東隅で原位置、2点の間隔は24cm、まさに頭部の幅である。当事業団関 邦一氏によれば、当事業団で保管する200点余の耳環のうち、中空は可能性のあるものを含めても高崎市観音山古墳、高崎市奥原古墳群3点、利根郡川場村生品西浦古墳群2点というだけの稀少品であるという。一部めくれた箇所の色が表裏とも同じ金色であることから金の板としたが、厚さは0.05mm位、中を筒状にするため端部の始末には巧みなどころを見せる。どんな流通事情があったのか、現在のところ、県内では異色な存在である。

思わぬ遺物が出土した古墳であるが調査区の南100m付近には、綜覧に6基の古墳（桂萱村74号～79号）が登載されている。このうち現存するのは3基、対岸には昭和45年に調査された亀泉町薬師塚古墳（桂萱村52号）とほかに3基（桂萱村53号～55号）がある。正円寺古墳後を占う、貴重な一群である。再三、述べたように決して多いといえる数ではない。しかし、これら小さな円墳は、自立した農民層の墓だと考えられている。だとすれば、泥流からの一時的な回避にはじまったことと、丘陵部の開発を軌道に乗せ、墓を築くまでになったことが古墳から読み取ることができる。

最後に住居跡の特徴を見てみる。

古墳時代後期住居跡一覧

	形状	長軸・短軸(m)	面積(m ²)	主軸方位	カマド	貯蔵穴	柱穴	特記事項
3号住居跡	推定方形	1.60以上・2.75	4.40以上	N90° E	東	不明	なし	カマド周辺を検出
4号住居跡	推定方形	不明	不明	不明	東	不明	なし	カマド周辺を検出
7号住居跡	方形	7.70・7.45	57.36	N60° E	東	南東隅	6	超大型、建て替えあり
8号住居跡	方形	4.30・4.20	18.06	N84° E	東・西	南東隅・南西隅	4	
10号住居跡	方形	4.10・3.90	15.99	N80° E	東	東南隅	4	焼失住居
11号住居跡	長方形	3.90・3.00	11.70	N70° E	東	東南隅	なし	入口施設、ベンガラ出土
12号住居跡	推定方形	7.85・6.90	54.16	N72° E	東	南東隅	3	超大型
15号住居跡	長方形	5.55・4.08	22.64	N64° E	東	南東隅	2	
17号住居跡	方形	4.65・4.60	21.39	N74° E	東・西	南東隅・南西隅	4	貯蔵穴から甕出土
18号住居跡	方形	4.25・4.20	17.85	N76° E	東・西	南東隅・南西隅	4	
23号住居跡	方形	4.50・4.20	18.90	N56° E	東	南東隅	4	

形状は、長方形と方形の2者が併存する。ここでも前期と同じく長方形の掘り込みが浅い。カマドはあるものの柱穴も浅く、構造自身、特に上屋が方形とは違うのであろう。規模は、一辺が8m近い超大型住居跡と4～5mの中規模程度の住居跡に分けられる。前期では大型・中型・小型と差があったのに比べて、全体が中型程度の平均化する一方で、限られたものがより大型化した、という様相である。

集落の構成には、少なくとも2群のあることは先述したが、中心は7号、12号2軒の超大型住居跡である。ただし、論拠には乏しくて飛び抜けた規模を持つことくらいで、遺物の上ではほかとの格差は見られない。7号と一群を構成するのは、8号、11号、17号、18号の4軒とみた。3区に限れば全体の半数で、一見、中央部の空白部分、広場を囲うような分布の仕方である。11号を除く3軒は、新旧2基のカマドを持っている。これを住まいとしての継続性と、広場を囲うように規制された結果と考えた。必ずしも東カマドに固執しないで、ここでは向かい合わせの内側になる方が古く、外側が新しい。

掘立柱建物跡は、柱穴の深さに深浅2つのタイプがあって、2号のように浅いものは遺構の確認面をローム層上面にすると完全に消え去ってしまう。このことは、畠跡にもいえることで道路の際で遺構確認面が浅かったために残ったといえなくもない。この状況を考慮すると、2つの遺構とも本来はもっと数多くて、住居跡のまわりに点々とあったのではないだろうか。

5 平安時代について

検出されたのは、寺沢川沿いの低地で水田とそれに伴う溝2条、台地上で道8条、溝2条である。目立った動きとしては古墳時代の様相とはがらりと一変し、台地上から住居跡が消えたことである。寺沢川沿いの低地が水田として利用されるほかは、1区だけに道跡が過度に集中している。一見すると集落の中心からは遠く外れてしまったかのような印象を受けるが、この遺構の分布状態からは、本遺跡一つにとどまらず広い範囲での変動があったと見てよいだろう。現に、台地の東側を占める堤沼上遺跡がそうであるように、8世紀代か遅くとも9世紀前半から出現する遺跡が萱野、萱野Ⅱ、亀泉西久保Ⅱなど、周辺の各台地に点在する。規模は、台地上全面を占拠するというような大きな集落ではなく、確認できるのは数軒かせいぜい10軒を越す程度のものである。規模のほか、これまでは集落が作られなかった所にあるというのが共通した特徴で、新規開発といった立地の仕方である。

5区の水田は、寺沢川の蛇行跡に生まれた低地に作られている。調査したのは小面積で推測の域を出ないが、方向を異にする2本の溝と、わずかに段差をつけただけの区画であることが分かる。寺沢川から取り入

第6章 調査のまとめ

れた水に台地の際からの湧水を足して、灌漑用としたのであろう。川沿いに広がるものであろうが、一つ西側の低地にある荻窪南田遺跡のA s - B 下水田と似ている (2008)。

隣接する堤沼上遺跡では、幅が3 mを超すような大きな溝が掘られている。検出したのは長さ20m足らずであるが下流にあたる堤沼下遺跡 (2003) でも同様な溝が検出されており、1本の溝とすれば全長が500m以上にもなり、取水源を考えるとそれ以上の規模である。新規開発の切り札で、狙いはこれまで開発から除外されてきた水の乏しい浅い谷筋と、その下流である。水の乏しい谷筋に通水するのはもちろんのことであるが、上流と下流を結ぶ地域一体の事業として取り組ませることが、活性化させるための真の狙いであつたらう。

集落は、台地ごとに配置されたようにあるといっても過言ではない。しかし、計画に無理があつたのか、集落の多くは9世紀代で終始するだけで、規模が拡大した様子ではない。台地ごとというように数が多いことから、活況を呈していたかのようであるが、事実は強制された見せかけの集落だつたのではないだろうか。その見方を否定する材料とすれば、水田よりも畠作、さらに鉄や漆といった生業に適した土地柄だといえる。

最後に、今回の調査の中では全くといってよい程に遺構が検出されなかつたのが中世である。前橋市教育委員会の調査では、寺沢川の対岸台地の先端、天台宗如意寺付近には大胡城の出先である小泉城のあつたことが知られ、その西にある薬師堂には南北朝時代のものといわれている薬師三尊立像石仏が祀られている。亀泉町薬師塚古墳の脇にも石仏と五輪塔があり、無人の地というわけではないようである。亀泉町の集落から見て北東、鬼門の方向にあたり、しかも川を隔てたために人がいる気配に乏しいのであろうか。

そこで参考となるのが「上野国郡村誌 2 勢多郡 (2)」(1978)である。そこには、隣り合う堤村が宝永年間上泉村からの新開地だつたというように記載されている。これが事実ならば、開発は江戸時代になってからである。調査の結果は、これに符号するのか江戸時代以降に活動の跡を残している。幹線と呼べるのが8号道と11号溝である。8号道は、土地改良で廃道となつた「中亀街道」で、3区と4区の間を通過し、東にある「山街道」に合流する。その先は赤城山の山麓へと向かう地域の幹線である。幅は4尺程度であるが、いかにも幹線らしく轍の跡さえも硬化している。一方の11号溝は、地権者の記憶から堤沼へ通水する「堤堀」に比定したが、その年代の上限については近世以前に遡り、堤沼上遺跡で検出された大溝とは台地の西と東で対をなす基幹水路の役割を担つたのではないだろうか。

1号畑は、江戸時代天明年間よりも後のものである。3号溝との関係からすると、溝と道だけが検出されている3区も、1号畑のまわりと同じような畑で埋められていたのだらう。

参考文献

- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団第165集「今井道上遺跡」(1994)、第372集「富田漆田遺跡・富田下大日遺跡」(2006)、第377集「江木下大日遺跡」(2006)、第384集「富田細田遺跡・富田宮下遺跡」(2006)、第402集「萱野Ⅱ遺跡」(2007)、第420集「荻窪南田遺跡・亀泉西久保Ⅱ遺跡」(2008)、第423集「堤沼上遺跡」(2008)
- 梁瀬大輔「赤城南麓「江木谷」の中世的景観—記録と記憶による景観復元の試み—」『群馬歴史民俗』第20号 1999
- 鬼形芳夫「赤城山麓における縄文文化の展開」『群馬県史研究』21 群馬県史編さん委員会 1985
- 深澤敦仁「「赤井戸式」土器の行方」『群馬考古手帳』9 1999
- 洞口正史「群馬県種実類調査遺跡集成」『研究紀要 26』群馬県埋蔵文化財調査事業団 2008
- 「上野国郡村帳 2 勢多郡 (2)」1978 群馬県文化事業振興会

遺物観察表

1号住居跡（第8図）PL50

（ ）は推定値、〔 〕は現存値、単位cm

No	種別 器種	平面位置 垂直(cm)	残存状況	口 底 径 径	器 高	胎 土 材	焼 成 色 調	成・整形の特 徴
1	縄文土器 深鉢	4	口縁部破片	— —	—	細砂を含む	酸化焰 5YR5/4にぶい赤褐	波状口縁。R L単節縄文を横位に施文。諸磯aかb式。
2	縄文土器 深鉢	5	胴部破片	— —	—	細砂を多く含む	還元焰 5YR5/4にぶい赤褐	R L単節縄文を横位に施文。諸磯aかb式。
3	縄文土器 深鉢	9 床上19	胴部破片	— —	—	白色粒を含む	還元焰 7.5Y6/4にぶい橙	R L単節縄文を横位に施文。諸磯aかb式。
4	石器 凹石	9 床上137	破片	長〔7.1〕 幅〔6.0〕	厚3.1	粗粒輝石安山岩		140g、表裏両面が摩耗している。

2号住居跡（第9・10図）PL50・51

（ ）は推定値、〔 〕は現存値、単位cm

No	種別 器種	平面位置 垂直(cm)	残存状況	口 底 径 径	器 高	胎 土 材	焼 成 色 調	成・整形の特 徴
1	縄文土器 深鉢	炉	胴部破片	— —	〔7.0〕		酸化焰 5YR5/4にぶい橙	胴部の中央部、被熱して脆い。破損した胴部を炉体に転用している。諸磯aかb式。
2	縄文土器 深鉢	5・6 床上31	口縁部破片	(25.6) —	(19.6)	白色細砂、黒色鉱物細砂を含む	酸化焰 7.5YR6/4にぶい橙	4単位の波状口縁、底部から緩く外反。口縁部はくの字に屈曲。波頂部は弧状の沈線、胴部は横位に2本単位、2段の平行沈線文を間隔を空けて施文。諸磯b式。
3	縄文土器 深鉢	6 床上34	口縁部破片	— —	厚1.0	細砂を含む	酸化焰 10YR7/4にぶい黄橙	波状口縁の波頂部、L R縄文地に幅4mmの半截竹管による横位弧状線文。諸磯b式。
4	縄文土器 深鉢	2 10号土坑覆土	胴部破片	— —	厚0.9	細砂を含む	酸化焰 5YR6/6橙	R L縄文地に幅3～5mmの半截竹管による平行沈線文を間隔をあけて施文。諸磯b式。
5	縄文土器 深鉢	3 床上33	胴部破片	— —	厚0.9～ 1.1	細砂を含む	酸化焰 5YR6/6橙	4と同一個体。
6	縄文土器 深鉢	9 床上34	口縁部破片	— —	厚0.9～ 1.0	細砂を含む	酸化焰 7.5YR5/6明褐	波状口縁。R L縄文地に半截竹管による2条単位の平行沈線内を「ノ」か「ハ」の字の刻目で充てん。諸磯b式。
7	縄文土器 深鉢	1・2住 覆土	胴部破片	— —	厚0.9	細砂、白色粒を多く含む	酸化焰 7.5YR6/6橙	無文地に刻み目を付けた浮線文を貼付。諸磯b式。
8	縄文土器 深鉢	8 床上351	口縁部～胴部破片	— —	厚0.7	細砂を多く含む	酸化焰 7.5YR6/6橙	平縁。R L縄文を横位に施文。諸磯aかb式。
9	縄文土器 深鉢	3 床上34	胴部破片	— —	厚1.0	細砂を含む	酸化焰 5YR5/6明赤褐	R L縄文を横位に施文。諸磯aかb式。
10	縄文土器 深鉢	6 床上31	胴部破片	— —	厚1.0	細砂を含む	酸化焰 5YR5/3にぶい赤褐	R L縄文を横位に施文。諸磯aかb式。
11	縄文土器 深鉢	6 床上31	口縁部破片	— —	厚0.9	細砂を含む	酸化焰 10YR5/3にぶい黄褐	波状口縁。口唇に沿って変形爪形文を施文、以下平行沈線文を施文。浮島Ⅱ式。

12	縄文土器 浅鉢	3・6 床上34・32	胴部破片	— —	厚0.8～ 1.0	細砂を含む	酸化焰 5YR4/6赤褐	有稜浅鉢、外面に赤彩が点々と残る。3点ある。諸磯b式。
13	石器 打製石斧	5 床上36	頭部1/2	長〔6.1〕 幅3.7	厚1.3	黒色頁岩		32g、短冊形、表面に自然面を残す。
14	石器 磨製石斧	8 床上37	完形	長10.2 幅5.1	厚2.2	蛇紋岩		215g、定角式。全面丁寧に研磨。右刃縁が消耗。縦斧。
15	石器 台石	6 床上37	完形	長21.8 幅13.7	厚4.1	粗粒輝石安山岩		1800g、表裏に敲打の跡がある。側縁に固定用打ち欠きがある。
16	石器 凹石	2 床上33	完形	長11.0 幅9.1	厚5.2	粗粒輝石安山岩		710g、表裏両面に2穴がある。右側面には敲打の跡がある。
17	石器 凹石	3 床上29	完形	長8.0 幅7.6	厚4.4	粗粒輝石安山岩		360g、全体が磨耗、表面に2穴、裏面に1穴がある。
18	石器 磨石	3 床上33	完形	長9.3 幅6.9	厚5.1	粗粒輝石安山岩		480g、全体が磨耗、上下両端部に敲打の跡がある。
19	石器 磨石	6 床上31	完形	長10.3 幅6.3	厚4.0	粗粒輝石安山岩		420g、全体が磨耗、裏面と側面に敲打の跡がある。
20	石器 磨石	覆土	完形	長8.5 幅6.5	厚3.2	粗粒輝石安山岩		235g、破碎した礫を使用。表面に直線上の擦痕がある。

5号住居跡（第44図）PL51

() は推定値、[] は現存値、単位cm

No	種別 器種	平面位置 垂直(cm)	残存状況	口径 底径	器高	胎土	焼成 色調	成・整形の特徴
1	土師器 小型甕	7 床直	略完形	11.4 5.6	12.1	細砂を含む	酸化焰 7.5YR7/3にぶい橙	口縁部横撫で、胴部外面頸部～中位まで横方向篋削り、下位斜め方向篋削り。胴部内面横方向篋撫で。

6号住居跡（第48図）PL51・52

() は推定値、[] は現存値、単位cm

No	種別 器種	平面位置 垂直(cm)	残存状況	口径 底径	器高	胎土 石材	焼成 色調	成・整形の特徴
1	土師器 S字口縁台 付甕	1 床上3 床下31	口縁部～肩 部破片	(17.2)	[5.1]	細砂を含む	酸化焰 10YR6/4にぶい黄橙	口縁部横撫で、胴部外面は頸部から下へ斜め方向の刷毛目。内面は横撫で。
2	土師器 台付甕	3 床上1	台部のみ	— (6.7)	[9.0]	細砂を含む	酸化焰 7.5YR5/4にぶい褐	外面縦方向篋削り後、棒状工具によるみがき、裾にだけ横方向みがき。
3	土師器 甕	9 床上24	口縁部破片	(12.0) —	[6.1]	細砂を含む	酸化焰 10YR5/3にぶい黄褐	口縁部先端は粘土紐を貼付して断面三角形に肥厚。外面は撫で後、縦方向に刷毛目。内面は撫で後、横方向の刷毛目。
4	土師器 甕	6 床上3	口縁部破片	— —		微砂を含む	酸化焰 5YR6/6橙	外面は輪積痕を残す。内面は撫で。
5	土師器 壺	4 床上2	口縁部～底 部3/4	10.4 4.0	14.0	細砂を含む	酸化焰 10YR7/2にぶい黄橙	口縁部は緩く外反、先端近くで少し内湾。外面撫で後、縦方向のみみがき。胴部外面縦方向密なみがき。内面は篋撫で。

6	土師器 壺	5・7 床直	略完	13.0 3.4	17.3	細砂を含む	酸化焰 5YR6/6橙	口縁部は緩く外反、外面は横撫で後、棒状工具による縦方向密なみがき。内面は横・斜め方向密なみがき。胴部外面横方向の篋削り。内面篋撫で。
7	土師器 小型甕	7 床上3	口縁部～底部1/2	9.4 5.0	13.3	細砂を含む	酸化焰 5YR6/6橙	口縁部緩く外反、内外面横撫で。頸部～胴部上位縦方向のみがき、中位以下縦・斜め方向篋削り。内面横撫で。
8	土師器 小型甕	8 床上2	胴部～底部破片	— 3.2	[4.5]	細砂を多く含む	酸化焰 5YR4/6赤褐	胴部外面縦方向の篋削り後、中位以下は縦方向刷毛目。内面篋撫で後、横方向の棒状工具による密なみがき。
9	土師器 罎	8 床直	口縁部～底部2/3	13.3 2.6	5.4	細砂を含む	酸化焰 7.5YR5/6明褐	口縁部は帽子のつば状に立ち上がり、先端は内傾。外面横撫で後、棒状工具による横方向みがき。胴部外面は棒状工具によるみがき。内面横方向篋削り後みがき。
10	土師器 罎	1 床上3	口縁部～底部1/3	(9.2) (1.4)	6.2	細砂を含む	酸化焰 5YR5/6明赤褐	口縁部外面横撫で後、縦方向篋削り。内面横撫で。体部外面横方向篋削り。内面篋撫で。
11	土師器 器台	7 床下3	脚部破片	— 12.6	[6.4]	細砂を多く含む	酸化焰 10YR5/4にぶい黄褐	外面縦方向刷毛後、棒状工具による縦方向みがき。中位に3つの円孔。内面横方向刷毛目。
12	土師器 器台	7 床上2	脚部破片	— 10.6	[6.7]	細砂をやや多く含む	酸化焰 2.5YR4/6赤褐	受部との接合は柱状、裾部は短く、先端が内湾する。外面棒状工具による縦方向みがき。内面横方向篋撫で。
13	土師器 器台	8 床上29	脚部破片	— —	[5.2]	細砂を多く含む	酸化焰 7.5YR6/4にぶい橙	脚はラッパ状に開く。外面横撫で後、縦方向の刷毛目。内面篋撫で後、横方向刷毛目。
14	土師器 手づくね	9 床上13	完形	8.4 3.6	6.8	小石、白色鉱物粒を含む	酸化焰 2.5Y6/2灰黄	口縁部は短く、反りは弱い。粘土紐を貼付して折り返したようにしている。胴部外面撫で後、縦方向刷毛目。内面指頭による撫で後、口縁から胴部の中位まで横方向刷毛目。底部は棒状工具によるみがき。
15	土師器 手づくね	7 床上4 床下4・2	完形	9.5 4.2	7.9	細砂を含む	酸化焰 10YR7/2にぶい黄橙	口縁部は短く、反りは弱い。粘土紐を貼付して折り返したようにしている。胴部外面篋撫で後、縦方向刷毛目。内面横方向刷毛目。
16	土製品 不明	2 床直	破片	長 [6.0] 幅2.2	厚1.6	細砂を含む	酸化焰 7.5YR7/4にぶい橙	全体に整形時の指頭痕を残したままである。
17	石器 敲石	8 床上5	完形	長15.6 幅5.9	厚5.4	溶結凝灰岩		670g、上下両端部に軽い敲打の跡がある。
18	石器 磨石	8 床上18	完形	長8.6 幅7.2	厚5.5	黒色頁岩		570g、側面と下端面に磨り面、上端面に敲打痕がある。

No	種別 器種	平面位置 垂直(cm)	残存状況	口径 底径	器高	胎土 石材	焼成 色調	成・整形の特徴
1	須恵器 杯	1 床直~床上 14	1/3	(13.2) —	[3.6]	細砂を含む	還元焰 5P6/1紫灰	右回転撫で後、底部の中央部に 回転斲削り。受部は張り出す。端 部は内傾。
2	土師器 杯	1 床下3	口縁部~底 部4/5	(14.2) —	5.0	細砂を含む	酸化焰 2.5YR5/6明赤褐	口縁部横撫で。体部から底部斲削 り。内面撫で。
3	須恵器 高杯	2 床上7	口縁部~脚 部2/3	— —	[4.6]	細砂を含む	還元焰 5YR6/3オリーブ黄	杯部外面撫で後、脚部寄りにカ キ目、内面撫で。スリットの入 った透孔を3箇所配置。
4	土師器 甕	7 床上1~18 床下1~6	口縁部~底 部2/5	18.3 4.7	40.8	細砂を含む	酸化焰 10YR7/3にぶい黄橙	口縁部内外面横撫で。胴部外面4 ~5回に分けて縦方向斲削り。 内面横撫で。
5	土師器 甕	1・4 床直~床上32 床下1~63	口縁部~胴 部1/2	18.5 —	[35.7]	微砂を含む	酸化焰 10YR7/6明黄褐	口縁部内外面横撫で。胴部外面4 ~5回に分けて縦方向斲削り。 内面横撫で。
6	土師器 甕	4・貯蔵穴 床下49・64	口縁部~胴 部	23.8 —	[8.4]	細砂を含む	酸化焰 10YR7/4にぶい黄橙	口縁部内外面横撫で。胴部外面 縦方向斲削りがき、内面横方向斲 撫で。
7	土師器 小型甕	7 床上2~6 床下6~12	略完形	16.7 —	[18.7]	細砂を含む	酸化焰 10YR6/4にぶい黄橙	口縁部内外面横撫で。胴部外面 3~4回に分けて斲削り、内面 横方向斲撫で。
8	土師器 小型甕	3・7 床上6~12	胴部~底部	— 6.4	[18.7]	細砂を含む	酸化焰 5YR6/4にぶい橙	胴部外面、縦方向斲削り後、下 位から底部周縁斜め方向斲削り。 内面横方向斲撫で。
9	土師器 甕	3 床上6	口縁部~胴 部	(16.2) —	[8.7]	細砂を含む	酸化焰 10YR6/4にぶい黄橙	口縁部内外面横撫で。胴部外面 縦方向斲削り、内面横撫で。
10	土師器 S字口縁台 付甕	4 床上6	胴部~台部	— 6.2	[7.0]	細砂を含む	酸化焰 10YR6/3にぶい黄橙	胴部外面縦方向刷毛目、内面撫 で。台部外面撫で、内面横撫で。 裾部折り返し。
11	石器 砥石	7 床上13	1/2	長[6.3] 幅5.1	厚2.6	粘板岩		115g、4面を使用、表裏2面には 刃物傷がある。
12	石器 こも編み石	2 床上1	完形	長15.4 幅7.3	厚3.2	粗粒輝石安山 岩		550g、上端の尖った稜に敲打の 跡がある。
13	石器 こも編み石	7 床上2	完形	長14.7 幅6.6	厚3.3	石英閃緑岩		510g、表裏の平坦面だけでなく 全体が磨耗している。
14	石器 こも編み石	7 床上7	完形	長14.7 幅5.3	厚3.9	粗粒輝石安山 岩		495g、全体が磨耗、上端に敲打 により剥離した跡がある。
15	石器 こも編み石	2 床上5	完形	長13.0 幅4.8	厚3.5	粗粒輝石安山 岩		306g、全体が磨耗、目立つ使用 痕はない。
16	石器 こも編み石	7 床上4	完形	長11.5 幅5.4	厚4.1	粗粒輝石安山 岩		310g、全体が磨耗、稜線に敲打 の跡が見られる。
17	石器 磨石	7 床上12	完形	長13.0 幅8.0	厚5.1	粗粒輝石安山 岩		830g、磨り跡のほかに敲打の跡 が筋状に見られる。

18	土製品 勺 玉	4 床上11	一部欠損	長(1.7) 幅0.7	厚0.65	微砂を含む	酸化焰 10YR7/4にぶい黄橙	内側の丸みは表現されているが、 全体は厚さが一定でない。
19	土製品 手づくね	覆土	口縁部～底 部	(7.0) (5.4)	2.7	微砂を含む	酸化焰 10YR7/4にぶい黄橙	浅い鉢の器形、口縁部は薄く尖 る。内外面撫で。
20	土製品 手づくね	覆土	底部破片	— (3.0)	[1.2]	細砂を含む	酸化焰 5YR6/6	皿か鉢。外面篋撫で、内面棒状 工具によるみがき。上げ底。
21	鉄 器 刀 子	3 床上3	刀身部	長(4.3) 幅(1.8)	厚0.3			5g、無閔、柄から刃身にかけて の破片。

8号住居跡（第86～88図）PL54・55

() は推定値、[] は現存値、単位cm

No	種 別 器 種	平面位置 垂直(cm)	残存状況	口 径 底 径	器 高	胎 土 石 材	焼 成 色 調	成・整 形 の 特 徴
1	土師器 杯	4・6 床上39～49	口縁部～底 部4/5	14.0 —	4.0	細砂を含む	酸化焰 5YR5/6明赤褐	口縁部内外面横撫で。体部から 底部外面篋削り。内面撫で。
2	土師器 杯	3 床上2	完 形	10.8 —	4.7	細砂を含む	酸化焰 5YR5/6明赤褐	口縁部内外面横撫で。底部外面 篋削り、内面撫で。
3	土師器 杯	4 貯蔵穴内	口縁部～底 部一部欠損	12.0 —	4.9	細砂を含む	酸化焰 5YR6/6橙	口縁部内外面横撫で。底部外面 篋削り、内面撫で。
4	土師器 杯	10 床上5	口縁部～底 部1/3	(13.2) —	[3.8]	細砂を含む	酸化焰 2.5YR5/6明赤褐	口縁部内外面横撫で。底部外面 篋削り、内面撫で。
5	土師器 杯	1 覆 土	口縁部～底 部1/4	(12.0) —	4.8	細砂を含む	酸化焰 5YR6/8橙	口縁部内外面横撫で。底部外面 篋削り、内面撫で。
6	土師器 杯	4・7 床上47・48	口縁部～底 部1/4	(11.6) —	[4.6]	微砂を含む	酸化焰 5YR6/4にぶい橙	口縁部内外面横撫で。底部外面 篋削り、内面横方向撫で。
7	土師器 杯	7 床上40・43	破 片	(12.9) —	[4.0]	細砂を含む	酸化焰 10YR7/3にぶい黄橙	口縁部内外面横撫で。底部外面 篋削り、内面撫で。
8	土師器 杯	7 床上49・50	破 片	(13.6) —	[4.9]	細砂を含む	酸化焰 7.5YR6/4にぶい橙	口縁部内外面横撫で。底部外面 篋削り。内面横方向篋撫で。
9	須恵器 杯	7 床上4・6・ 49	口縁部～底 部1/3	(13.8)	4.5	細砂を含む	還元焰 7.5YR7/1灰白	右回転ロクロ成形。口縁部横撫 で。底部の中央に回転による篋 削り。内面撫で。
10	土師器 甕	10 床上22、床下 59	口縁部～胴 部	17.0 —	[9.6]	細砂を含む	酸化焰 10YR7/3にぶい黄橙	口縁部内外面横撫で。胴部外面 横方向篋撫で、内面篋撫で。
11	土師器 小型甕	1 床上26～33	口縁部～底 部1/3	14.5 5.8	19.6	細砂、岩片を 含む	酸化焰 7.5YR5/4にぶい褐	口縁部内外面横撫で。胴部外面 斜め方向篋削り、内面横方向篋 撫で。
12	土師器 甕	6 床上5	略完形	25.0 8.5	30.6	微砂を含む	酸化焰 10YR6/4にぶい黄橙	口縁部内外面横撫で。胴部外面 中位以上縦方向篋削り、中位以 下横・斜め方向篋削り、内面中 位以上横方向篋撫で、中位以下 縦方向篋撫で。底部の外縁が研 磨されている。
13	土師器 甕	3 床上10	口縁部～胴 部1/3	(30.6) —	[22.3]	細砂を含む	酸化焰 10YR6/3にぶい黄橙	口縁部内外面横撫で。胴部外面 縦方向篋削り、内面斜め方向篋 削り。

14	石器 敲石	1 床上3	完形	長19.5 幅6.8	厚6.4	粗粒輝石安山 岩		1110g、上端に剥落、側面に刃物 のような傷がある。
15	石器 敲石	7 床直	完形	長17.9 幅9.0	厚5.2	粗粒輝石安山 岩		1200g、下端に敲打による剥落と 擦り跡がある。
16	石器 敲石	7 床上2	完形	長16.6 幅7.9	厚4.5	粗粒輝石安山 岩		910g、全体に磨耗しているが目 立つ使用痕は見られない。
17	石器 敲石	7 床下20	完形	長19.0 幅8.4	厚4.5	粗粒輝石安山 岩		1220g、全体に磨耗しているが目 立つ使用痕は見られない。
18	石器 敲石	7・貯蔵穴 床下10	完形	長12.8 幅6.7	厚5.4	粗粒輝石安山 岩		440g、上下両端と表面に敲打の 跡が見られる。
19	石器 敲石	7・貯蔵穴 床下10	完形	長11.1 幅7.3	厚2.9	粗粒輝石安山 岩		280g、全体に磨耗しているが目 立つ使用痕は見られない。
20	石器 敲石	7・貯蔵穴 床下30	完形	長10.1 幅5.5	厚2.9	粗粒輝石安山 岩		158g、側面に敲打による剥落と 紐かけの跡が見られる。
21	石器 敲石	7 床直	完形	長11.4 幅4.4	厚4.4	粗粒輝石安山 岩		240g、上端部に敲打の跡が見ら れる。
22	石器 石槍	9 床上23	両端欠損	長〔6.7〕 幅1.7	厚0.7	黒色頁岩		8g、表裏両面に細かな剥離を施 す。上下両端欠損。
23	鉄器 鉄鏃	5 床上51	茎の一部	長〔3.5〕 幅〔0.5〕	厚〔0.5〕			2g、上下両端欠損、断面方形。

9号住居跡（第51図）PL55

() は推定値、[] は現存値、単位cm

No	種別 器種	平面位置 垂直(cm)	残存状況	口径 底径	器高	胎土 石材	焼成 色調	成・整形の特 徴
1	土師器 杯	9 貯蔵穴 床下74、76	口縁部～底 部1/3	(15.2) —	[4.6]	細砂を含む	酸化焰 7.5YR7/3にぶい橙	口縁部外面横撫で、内面撫で後 横方向みがき。底部内外面撫で 後横方向みがき。
2	土師器 鉢	2 床上6	口縁部～底 部2/3	13.8 4.4	7.1	細砂を含む	酸化焰 10YR7/3にぶい黄橙	口縁部横撫で。体部外面篋削り。 内面撫で後、みがき。
3	土師器 壺	5・9 床上2～7	胴部～底部 1/3	— 8.4	[9.5]	細砂を含む	酸化焰 7.5YR6/6橙	胴部外面縦方向篋撫で、内面撫 で。底部外面篋撫で。
4	土師器 壺	3・6 床上4	胴部～底部 1/3	— 6.0	[12.0]	微砂を含む	酸化焰 2.5Y7/3浅黄	胴部外面横方向撫で後、中位以 下刷毛、縦方向篋撫で、内面は 刷毛調整後、横方向撫で。
5	土師器 甕	5・6 床上1～8	口縁部～胴 部2/3	14.8 —	[20.7]	細砂を含む	酸化焰 7.5YR6/4にぶい橙	口縁部内外面横撫で。胴部外面 上位縦方向・下位斜め方向篋撫 で。内面斜め方向撫で。
6	石器 こも編み石	8 床上6	完形	長16.7 幅6.8	厚4.7	粗粒輝石安山 岩		820g、全体に磨耗しているが目 立つ使用痕は見られない。

10号住居跡（第91図）PL55・56

（ ）は推定値、〔 〕は現存値、単位cm

No	種別 器種	平面位置 垂直(cm)	残存状況	口径 底径	器高	胎土 石材	焼成 色調	成・整形の特 徴
1	土師器 杯	8 床上16・20	口縁部～底 部3/4	12.4 —	4.8	細砂を含む	酸化焰 2.5YR5/6明赤褐	口縁部内外面横撫で。底部外面 斲削り、内面撫で。
2	土師器 杯	4・6 床上17・30	口縁部～底 部2/3	12.2 —	4.5	細砂を含む	酸化焰 5YR7/4にぶい橙	口縁部内外面横撫で。底部外面 斲削り。内面撫で。
3	土師器 杯	4・6 床上17～30	口縁部～底 部1/3	(11.6) —	4.6	細砂を含む	酸化焰 2.5YR5/6明赤褐	口縁部内外面横撫で。底部外面 斲削り、内面撫で。
4	土師器 杯	6・9 床上21～24	口縁部～底 部1/3	(14.6) —	4.8	細砂を含む	酸化焰 5YR6/6橙	口縁部内外面横撫で。底部外面 横方向斲削り、内面撫で。
5	土師器 甕	5・8 床上13・27	口縁部～胴 部	(17.6) —	[8.2]	細砂を含む	酸化焰 10YR7/4にぶい黄橙	口縁部内外面横撫で。胴部外面 縦方向斲削り、内面横撫で。
6	石器 敲石	9 床上23	完形	長14.6 幅6.9	厚4.7	粗粒輝石安山 岩		650g、全体に磨耗しているが目 立つ使用痕は見られない。
7	石器 敲石	6 床上23	1/2	長8.8 幅6.7	厚4.2	粗粒輝石安山 岩		350g、全体に磨耗しているが目 立つ使用痕は見られない。
8	石器 おもり	6 床上17	完形	長6.6 幅6.5	厚3.1	軽石		75g、四角に割った剥片を素材と している。

11号住居跡（第93図）PL56

（ ）は推定値、〔 〕は現存値、単位cm

No	種別 器種	平面位置 垂直(cm)	残存状況	口径 底径	器高	胎土	焼成 色調	成・整形の特 徴
1	土師器 杯	4・貯蔵穴 床上23	口縁部～底 部破片	11.8 —	4.7	細砂を含む	酸化焰 2.5YR6/6橙	口縁部内外面横撫で、底部斲削 り。内面撫で。
2	土師器 杯	6・9・10 床直～床上19	口縁部～底 部1/2	11.6 —	5.4	細砂を含む	酸化焰 5YR5/8明赤褐	口縁部内外面横撫で。底部外面 斲削り、内面撫で。
3	土師器 高杯	7 床上7・9	杯部	(12.6) —	[4.9]	細砂を含む	酸化焰 7.5YR6/4にぶい橙	口縁部内外面横撫で。体部外面か ら脚部は斲削り、内面撫で。
4	土師器 甕	2・4 床上8～14 床下2～17	口縁部～胴 部	10.6 —	[20.7]	細砂を含む	酸化焰 5YR7/3にぶい橙	口縁部内外面横撫で。胴部外面 縦方向斲削り。内面横方向撫で。全 体が、2次焼成で赤変。
5	土師器 甕	2・4・7床上 6・7床下2	口縁部～胴 部	(17.0) —	[13.0]	細砂を含む	酸化焰 2.5Y7/6明黄褐	口縁内外面横撫で。胴部外面 縦方向斲削り、内面横撫で。

12号住居跡（第97・98図）PL56・57

（ ）は推定値、〔 〕は現存値、単位cm

No	種別 器種	平面位置 垂直(cm)	残存状況	口径 底径	器高	胎土 石材	焼成 色調	成・整形の特 徴
1	土師器 杯	3 床下1	口縁部～底 部1/2	(16.4) —	[4.5]	細砂を含む	酸化焰 5YR4/1明赤褐	口縁部内外面横撫で。底部外面 斲削り、内面撫で。
2	土師器 杯	4 床上18	口縁部～底 部1/4	(12.5) —	3.2	微砂を含む	酸化焰 5YR5/3にぶい赤褐	口縁部内外面横撫で。底部外面 斲削り、内面撫で。
3	土師器 甕	3・6 床直～床上16	口縁部～胴 部	18.2 —	[34.2]	細砂を含む	酸化焰 10YR6/3にぶい黄橙	口縁部内外面横撫で。胴部外面 縦方向斲削り、内面撫で。

4	土師器 甕	1・3 床上11～30 床下1	口縁部～胴部	19.0 —	[10.5]	細砂を含む	酸化焰 7.5YR7/3にぶい橙	口縁部内外面横撫で。胴部外面縦方向篋削り、内面撫で。
5	土師器 小型甕	3 床上7～61	口縁部～底部3/4	13.2 5.4	15.2	細砂を含む	酸化焰 7.5YR6/4にぶい橙	口縁部内外面横撫で。胴部外面縦方向篋削り、内面撫で。
6	須恵器 甕	3・5 床上48～70	胴部破片	— —	厚0.9～ 1.3	細砂を含む	還元焰 N5/灰	外面回転による撫で後、下部のみ篋撫で。内面撫で。
7	土製品 丸玉	1 覆土	略完	長2.0 幅1.9	厚1.7	細砂を含む	酸化焰 7.5YR7/4にぶい橙	7.15g、粘土紐を巻き上げて丸くしている。紐孔は片面からの穿孔。
8	石器 こも編み石	6 床上15	完形	長15.8 幅7.1	厚4.4	粗粒輝石安山岩		710g、全体に磨耗しているが目立つ使用痕は見られない。
9	石器 こも編み石	5 床上5	完形	長14.7 幅5.8	厚3.4	砂岩		480g、全体に磨耗しているが目立つ使用痕は見られない。
10	石器 こも編み石	4 床上55	完形	長13.0 幅6.4	厚さ4.2	粗粒輝石安山岩		502g、上端部を打ち欠いている。
11	石器 こも編み石	5 床上56	完形	長10.1 幅4.7	厚3.4	変質安山岩		235g、表面に剥離した跡がある。
12	石器 石皿	3 床上43	一部欠損	長[26.7] 幅24.5	厚5.4	粗粒輝石安山岩		7430g、表面にのみ磨り面がある。
13	土製品 丸玉	覆土	完形	長0.9 幅1.0	厚0.9	細砂を含む	酸化焰 7.5YR6/4にぶい橙	0.85g、小口面は凹面、球形を意識して端正に作られている。

13号住居跡（第52図）PL57

() は推定値、[] は現存値、単位cm

No	種別 器種	平面位置 垂直(cm)	残存状況	長さ 幅	厚さ	石材	色調	成・整形の特徴
1	石器 砥石	9 床上6	完形	7.1 2.9	1.0	頁岩		20g、表裏全体が平滑に研磨されている。剣形石製品の可能性もある。

14号住居跡（第53図）PL57

() は推定値、[] は現存値、単位cm

No	種別 器種	平面位置 垂直(cm)	残存状況	口径 底径	器高	胎土 石材	焼成 色調	成・整形の特徴
1	土師器 罎	3 床上36	口縁部～底部2/3	(16.8) 6.7	10.3	細砂を含む	酸化焰 5YR6/6橙	口縁部先端で最大径。口縁部外面縦方向刷毛目、内面横方向刷毛目。胴部外面斜め方向刷毛目、内面横撫で。
2	土師器 甕	3 床直	口縁部～胴部破片	(13.0) —	15.5	細砂を含む	酸化焰 7.5YR6/3にぶい褐	口縁部内外面横撫で。胴部外面3～4回に分けて斜め方向の刷毛目、内面横方向篋撫で。
3	石器 磨石	3 床上10	完形	長11.9 幅10.5	厚2.5	粗粒輝石安山岩		370g、全体に磨耗しているが目立つ使用痕は見られない。
4	鉄器 鉄滓	覆土	破片	長4.0 3.8 幅3.3 2.7	厚2.8 2.3			椀形滓をサイコロ状に分割したうちのひとつである。

15号住居跡（第101図）PL57

（ ）は推定値、〔 〕は現存値、単位cm

No	種別 器種	平面位置 垂直(cm)	残存状況	口 底 径	器 高	胎土 石 材	焼 成 色 調	成・整形の特 徴
1	須恵器 蓋	3 床上10	天井部破片	— —	[3.7]	細砂を含む	還元焰 5Y7/1灰白	外面回転による撫で後、中央右 回転斲削り、内面撫で。
2	須恵器 蓋	2 床上1	天井部破片	— —	[3.7]	細砂を含む	還元焰 N5/灰	外面回転による撫で後、中央右 回転斲削り、内面撫で。
3	土師器 杯	5 床直～床 上2	口縁部～底 部1/4	(14.5) —	4.0	細砂を含む	酸化焰 7.5YR4/3褐	口縁部内外面横撫で。底部外面 斲削り、内面撫で。
4	土師器 杯	覆土	口縁部～底 部1/5	(13.5) —	[2.1]	細砂を含む	酸化焰 2.5Y4/1黄灰	口縁部内外面横撫で。底部外面 斲削り、内面撫で。
5	須恵器 高杯	5 床上3	脚部破片	— —	[8.2]	細砂を含む	酸化焰 2.5Y7/1灰白	ロクロ整形。4条の沈線をめぐ らせて区画、頂部を上に向けた 長三角形の透孔を配置。
6	石器 おもり	7 床上4	完形	長12.8 幅9.6	厚4.6	軽石		370g、拳大の割石を使用する。 全体が磨耗している。
7	石器 おもり	7 床上6	完形	長8.6 幅6.2	厚4.4	軽石		100g、卵大の割石を使用する。 全体が磨耗している。
8	石器 おもり	7 床上21	完形	長11.0 幅7.0	厚3.8	軽石		160g 拳大の割石を使用する。 側面を打ち欠いている。

16号住居跡（第57図）PL58

（ ）は推定値、〔 〕は現存値、単位cm

No	種別 器種	平面位置 垂直(cm)	残存状況	口 底 径	器 高	胎土 石 材	焼 成 色 調	成・整形の特 徴
1	土師器 埴	9 床上9	完形	9.8 3.2	6.2	粗砂を含む	酸化焰 10YR8/4浅黄橙	口縁部内外面横撫で後、外面弱 い刷毛目。胴部内外面棒状工具に よる横方向の撫でとみがき。底 部外面斲削り。内面撫で
2	土師器 壺	6・8・9 床上1・43・ 55	口縁部破片	15.7 —	[3.8]	細砂を含む	酸化焰 7.5YR5/6明褐	口縁部外面横撫で後、頸部との 接合部に縦方向刷毛目、内面横 撫で後、横方向のみがき。
3	土師器 甕	5・6 床上18～39	口縁部破片	(14.9) —	[4.1]	細砂を含む	酸化焰 2.5Y8/3淡黄	外面横方向刷毛目、内面横と斜 め方向の刷毛目。
4	土師器 甕	8・9 床上1～14	脚部	— 8.6	[5.2]	白色細砂を含 む	酸化焰 10YR7/4にぶい黄橙	外面縦方向の刷毛目、内面斲撫 で後、横方向刷毛目。
5	土師器 S字口縁台 付甕	9 床上6	口縁部～胴 部破片	(17.6)	[6.6]	細砂を含む	酸化焰 5YR5/6明赤褐	口縁部内外面横撫で。胴部外面 下位から中位にかけて、下方か ら刷毛目後、頸部から縦方向刷 毛目、内面縦方向撫で。
6	土師器 S字口縁台 付甕	8・9 床上5・6	台部	— 9.5	[7.4]	微砂を含む	酸化焰 10YR5/6黄褐	外面刷毛目、内面横方向撫で。 胴部との接合部には、砂粒の多 い粘土を貼付。
7	土師器 S字口縁台 付甕	貯蔵穴 床下64	台部	— 8.6	[6.0]	細砂を含む	酸化焰 10YR6/3にぶい黄橙	外面刷毛目後、磨り消し。内面 横撫で。胴部との接合部に砂粒 の多い粘土を貼付。
8	石器 台石	P2 床下64	完形	長18.4 幅21.2	厚5.0	粗粒輝石安山 岩		3560g、全体に摩耗、表裏両面に 磨り面と敲打面に使用。

9	石器 砥石	2 床下45	1/2破片	長〔4.4〕 幅6.0	厚4.8	砂岩		330g、断面四角形。4面を砥面として使用する。刃物の傷跡がある。
10	石器 砥石	7 床上5	一部欠損	長10.9 幅2.9	厚2.7	頁岩		140g、断面四角形。4面とも凹面、長軸に対して弧を描く。

17号住居跡（第105・106図）PL58～60

（ ）は推定値、〔 〕は現存値、単位cm

No	種別 器種	平面位置 垂直 (cm)	残存状況	口径 底径	器高	胎土 石材	焼成 色調	成・整形の特徴
1	土師器 杯	9 床上34・54	口縁部～底部1/5	(12.0) —	[4.3]	細砂を含む	酸化焰 5YR5/6明赤褐	口縁部内外面横撫で。底部外面篋撫で、内面撫で。
2	土師器 杯	5 床上41	口縁部～底部1/4	(10.2) —	[4.9]	細砂を含む	酸化焰 5YR6/6橙	口縁部内外面横撫で。底部外面篋撫で、内面撫で。
3	土師器 杯	8 床上58	口縁部～底部破片	(10.5) —	[3.8]	細砂を含む	酸化焰 5YR5/4にぶい赤褐	口縁部内外面横撫で。底部外面篋削り、内面撫で。
4	土師器 杯	2 床上60	口縁部～底部1/3	(10.8) —	5.7	細砂を含む	酸化焰 2.5YR4/4にぶい赤褐	口縁部内外面横撫で。底部外面篋削り、内面撫で後赤彩。
5	土師器 杯	3 床上26	口縁部～底部破片	(13.0) —	[4.1]	細砂を含む	酸化焰 5YR5/6明赤褐	口縁部内外面横撫で。底部外面篋削り、内面撫で。
6	土師器 高杯	4 床上29	脚部	— —	[5.8]	細砂を含む	酸化焰 5YR5/6明赤褐	外面篋撫で、内面横撫で。
7	土師器 台付甕	1 床下1	台部欠損	(12.6) —	[14.2]	粗砂を多く含む	酸化焰 7.5YR6/6橙	口縁部内外面横撫で。胴部外面縦方向篋削り、内面横撫で。
8	土師器 小型甕	2・3 床上5・6	口縁部～底部3/4	17.0 6.5	18.0	細砂を含む	酸化焰 7.5YR6/3にぶい褐	口縁部内外面横撫で。胴部外面縦方向篋削り、内面撫で。
9	土師器 小型甕	貯蔵穴・2 床直～床上7	口縁部～胴部1/3	12.3	[10.7]	細砂を含む	酸化焰 7.5YR6/4にぶい橙	口縁部内外面横撫で。胴部外面縦方向篋削り、内面横撫で。
10	土師器 甕	2・6・10 床直～床上12、床下1	口縁部～底部4/5	22.3 —	34.0	細砂を含む	酸化焰 5YR6/4にぶい橙	口縁部内外面横撫で。胴部外面縦方向5～7回に分けて篋削り、内面撫で後、縦方向のみがき。
11	土師器 甕	2・3・4 床直～床上12	口縁部～底部3/4	18.2 (3.6)	15.3	細砂を含む	酸化焰 10YR7/3にぶい黄橙	口縁部内外面横撫で。胴部外面縦方向篋削り、内面撫で。
12	土師器 置台	10 床下10	口縁部～胴部	21.7 —	[8.5]	細砂を含む	酸化焰 7.5YR7/6橙	口縁部内外面横撫で。胴部外面縦方向篋削り、内面横撫で。口唇部は対角線に打ち欠き、頸部内面には擦れた跡がある。
13	土師器 置台	2 床上1	口縁部～胴部	17.5 —	[7.7]	細砂を含む	酸化焰 2.5Y7/4浅黄	口縁部内外面横撫で。胴部外面縦方向篋削り、内面横撫で。端部は打ち欠かれ、頸部内面には8箇所擦れた跡がある。
14	土師器 置台	3 床上1	口縁部～胴部	18.6 —	[7.5]	細砂を含む	酸化焰 10YR6/4にぶい黄橙	口縁部内外面横撫で。胴部外面縦方向篋削り、内面横撫で。端部は打ち欠かれ、頸部内面には擦れた跡がある。
15	石器 こも編み石	6 床上47	完形	長19.5 幅7.8	厚6.3	粗粒輝石安山岩		1490g、全体に摩耗しているが目立つ使用痕は見られない。

16	石器 こも編み石	7 床上6	完形	長15.5 幅7.2	厚4.5	粗粒輝石安山 岩		850g、全体に摩耗しているが目立つ使用痕は見られない。
17	石器 こも編み石	8 床上54	1/2	長〔9.5〕 幅8.1	厚4.8	粗粒輝石安山 岩		610g、全体に摩耗しているが目立つ使用痕は見られない。
18	石器 石 鏃	覆 土	略完形	長2.6 幅1.7	厚0.45	黒曜石		1.63g、無茎。基部は平坦。

18号住居跡（第110図）PL60

（ ）は推定値、〔 〕は現存値、単位cm

No	種 別 器 種	平面位置 垂直(cm)	残存状況	口 径 底 径	器 高	胎 土 石 材	焼 成 色 調	成・整形の特 徴
1	土師器 杯	8 床上87	略完形	12.0 —	5.1	細砂を含む	酸化焰 2.5YR6/6橙	口縁部内外面横撫で。底部外面 鈍削り、内面撫で。
2	土師器 杯	8・9・11 床上4・6・ 14・36	略完形	11.8 —	5.4	細砂を含む	酸化焰 2.5YR5/6明赤褐	口縁部内外面横撫で。底部外面 鈍削り、内面撫で。
3	土師器 甕	9・11 床上4・75	口縁部～胴 部破片	(17.0) —	[7.4]	細砂を含む	酸化焰 10YR7/4にぶい黄橙	口縁部内外面横撫で。胴部外面 縦方向鈍削り、内面撫で。
4	土師器 甕	9 床上1・3・6	口縁部～胴 部破片	(18.4) —	[10.2]	細砂を含む	酸化焰 10YR6/4にぶい黄褐	口縁部内外面横撫で。胴部外面 縦方向鈍削り、内面撫で。
5	土師器 甕	6	口縁部～胴 部	(13.5) —	[18.5]	細砂を含む	酸化焰 10YR4/3にぶい黄褐	口縁部内外面横撫で。胴部外面 縦方向鈍削り、内面撫で。
6	土師器 鉢	2・5・6・9	口縁部～底 部2/3	21.6 7.2	13.7	細砂を含む	酸化焰 7.5YR5/4にぶい褐	口縁部内外面横撫で。胴部外面 縦方向鈍削り、内面撫で。
7	土師器 甌	10、貯蔵穴 床下29	口縁部～底 部1/4	(13.4) (3.8)	9.1	白色細砂を含 む	酸化焰 10YR6/3にぶい黄橙	口縁部内外面横撫で。胴部外面 縦方向鈍削り、内面撫で。
8	土師器 手づくね	5 床上2	口縁部～底 部1/3	(5.9) (5.0)	4.3	粗砂を含む	酸化焰 7.5YR7/3にぶい橙	内外面横撫で。全体に厚い作り である。
9	土師器 焼土塊	3 —	完 形	長5.0 幅5.3	厚2.3	スサ入り	酸化焰 7.5YR7/3にぶい橙	49g、卵大の大きさ。スサは跡が 全体についている。
10	石 器 磨 石	6 床上6	1/2	長〔7.1〕 幅5.8	厚3.8	粗粒輝石安山 岩		270g、全体に摩耗しているが目立つ使用痕は見られない。

19号住居跡（第60・61図）PL60・61

（ ）は推定値、〔 〕は現存値、単位cm

No	種 別 器 種	平面位置 垂直(cm)	残存状況	口 径 底 径	器 高	胎 土 石 材	焼 成 色 調	成・整形の特 徴
1	土師器 埴	7 床上7	完 形	10.0 2.8	7.0	細砂を含む	酸化焰 10YR6/4にぶい黄橙	口縁部外面横撫で後、棒状工具 による横方向のみがき、内面横 撫で。胴部横方向鈍削り、内面 横撫で。
2	土師器 埴	4・5 床上2・17	口縁部～胴 部上位破片	— —	[4.5]	細砂を含む	酸化焰 5YR5/6明赤褐	口縁部横撫で。胴部外面横方向鈍 削り。内面撫で。
3	土師器 埴	5・8 床上2・6	口縁部～底 部1/2	(14.0) 3.3	3.1	細砂を含む	酸化焰 2.5YR8/3淡黄	口縁部内外面横撫で。胴部から底 部外面鈍削り、内面鈍撫で。
4	土師器 埴	8 床上4・23	口縁部～底 部2/3	12.4 3.4	5.8	細砂を含む	酸化焰 10YR7/3にぶい黄橙	口縁部内外面横撫で。胴部外面 棒状工具による横方向のみがき、 内面放射状のみがき。

5	土師器 埴	2 床下6	口縁部～底 部1/2	(17.6) 4.3	5.6	細砂を含む	酸化焰 10YR8/3浅黄橙	口縁部内外面横撫で後、縦方向のみがき。胴部外面横方向のみがき、内面横撫で後縦方向のみがき。
6	土師器 高 杯	8 床上14	脚部破片	— 11.7	[7.2]	粗砂を含む	酸化焰 7.5YR6/6橙	外面縦方向篋削り後、縦方向のみがき。内面撫で。
7	土師器 壺	覆 土	口縁部破片	(17.7)	[6.6]	微砂を含む	酸化焰 7.5YR6/4にぶい橙	先端は粘土紐を貼付して肥厚、有段に整形、外縁に刻みがある。外面縦方向篋撫で、内面横方向篋撫で。
8	土師器 台付甕	2・6 床上12～29	台 部	— (10.8)	[8.0]	微砂を含む	酸化焰 10YR7/4にぶい黄橙	外面縦方向と斜め方向の刷毛目、内面横方向刷毛目。
9	土師器 甕	5 床上21	口縁部～胴 部破片	(13.8) —	[8.8]	細砂を含む	酸化焰 7.5YR5/4にぶい褐	口縁部外面横撫で後、縦方向刷毛目、内面横方向刷毛目。胴部外面刷毛目後撫で、内面横方向撫で後、横方向みがき。
10	土師器 甕	5 床上6	口縁部～胴 部破片	(17.6)	[8.4]	細砂を含む	酸化焰 2.5Y6/3にぶい黄	口縁部内外面横撫で。胴部外面撫で後、縦方向篋削り、内面横撫で。
11	土師器 甕	7 床上7	口縁部破片	— —	0.5	細砂を含む	酸化焰 10YR6/3にぶい黄橙	外面縦方向の刷毛目、内面横方向撫で。
12	土師器 甕	2 床上1	胴部破片	— —	0.6	細砂を含む	酸化焰 5YR5/6明赤褐	外面撫で後、横方向刷毛目、さらに縦方向に間隔をあけて刷毛目、内面撫で。
13	土師器 S字口縁台 付甕	2・5 床直、床上2 ～14	口縁部～胴 部破片	(16.7)	[11.7]	細砂を含む	酸化焰 10YR6/3にぶい黄橙	口縁部内外面横撫で。胴部外面中位以下斜め方向の刷毛目後、頸部から斜め方向の刷毛目。内面横撫で
14	土師器 甕	2・5 床直、床上 5・8	口縁部～底 部4/5	14.7 4.5	9.9	細砂を含む	酸化焰 10YR7/3にぶい黄橙	口縁部は粘土を貼付して肥厚する。底部は縦1.4cm、横1.1cmの円孔があく。外面縦方向刷毛目、内面横方向刷毛目。
15	土師器 手づくね	7・8 床上1・7	胴部～底部	— 2.0	[2.8]	微砂を含む	酸化焰 7.5YR5/4にぶい褐	外面みがき、内面撫で。作りは薄く、上げ底。
16	石 器 台 石	5 床上6	完 形	長17.1 幅23.7	厚13.0	粗粒輝石安山 岩		6550g、側面を打ち欠く。表面に敲打痕と刃物の傷跡がある。
17	石 器 こも編み石	8 床直	完 形	長17.4 幅6.8	厚5.2	砂岩		1000g、表裏両面に敲打により剥落した跡がある。
18	石 器 こも編み石	5 床上8	完 形	長14.3 幅6.2	厚5.4	粗粒輝石安山 岩		708g、全体に摩耗しているが目立つ使用痕は見られない。
19	石 器 こも編み石	2 床上17	1/2	長 [6.3] 幅 [5.7]	厚 [2.6]	砂岩		145g、全体に摩耗、裏面が剥離されている。
20	石 器 磨 石	4 床上46	完 形	長11.6 幅8.3	厚4.4	粗粒輝石安山 岩		635g、全体に摩耗、表裏両面に2つの凹穴があいている。
21	石 器 磨 石	覆 土	完 形	長8.4 幅8.2	厚4.0	粗粒輝石安山 岩		285g、全体に摩耗、表裏両面に凹穴があいている。

20号住居跡 (第62図) PL62

() は推定値、[] は現存値、単位cm

No	種別 器種	平面位置 垂直(cm)	残存状況	口 底 径	器 高	胎土	焼 成 色 調	成・整形の特徴
1	土師器 鉢	2 床上8	口縁部～胴 部破片	(18.0) —	[9.8]	細砂を含む	酸化焰 10YR6/3にぶい黄橙	外面横撫で後、横方向刷毛目、 下位縦方向刷毛目。内面撫で後、 横方向刷毛目。
2	土師器 S 字口縁台付 甕	2・5 床上15	口縁部～胴 部破片	(16.6) —	[4.6]	細砂を含む	酸化焰 10YR6/3にぶい黄橙	口縁部内外面横撫で。胴部外面 縦方向刷毛目、内面横撫で。
3	土師器 S 字口縁台付 甕	2 床上11	口縁部～胴 部破片	(14.8) —	[3.9]	微砂を含む	酸化焰 7.5YR5/3にぶい褐	口縁部内外面横撫で。胴部外面 縦方向刷毛目、内面撫で。

21号住居跡 (第68・69図) PL62・63

() は推定値、[] は現存値、単位cm

No	種別 器種	平面位置 垂直(cm)	残存状況	口 底 径	器 高	胎土 石 材	焼 成 色 調	成・整形の特徴
1	土師器 埴	覆土	口縁部～底 部1/4以下	(7.4) 3.2	6.0	細砂を含む	酸化焰 10YR6/3にぶい黄橙	口縁部内外面横撫で。胴部外面 撫で後、縦方向みがき、内面撫 で。
2	土師器 埴	覆土	口縁部～底 部破片	(11.8) —	[4.9]	微砂を含む	酸化焰 7.5YR7/4にぶい橙	口縁部内外面斜め方向のみがき。 胴部外面横方向のみがき、内面 撫で。
3	土師器 埴	5 床上31	口縁部～底 部1/2	(12.0) —	[4.8]	細砂を含む	酸化焰 2.5Y8/3淡黄	口縁部外面横撫で後、縦方向み がき、内面横撫で。胴部内外面横 方向のみがき。
4	土師器 埴	4 床上11	口縁部～底 部1/3	(13.4) —	[5.6]	細砂を含む	酸化焰 5YR5/4にぶい赤褐	外面横方向のみがき、内面横と 斜め方向のみがき。
5	土師器 埴	フク土	口縁部～胴 部破片	(10.8) —	[3.6]	細砂を含む	酸化焰 10YR7/3にぶい黄橙	口縁部横撫で。胴部外面横撫で 後、縦方向みがき。内面撫で後、 縦方向みがき。
6	土師器 甕	7 床上24	口縁部～胴 部破片	(13.8) —	[5.0]	細砂を含む	酸化焰 10YR6/3にぶい黄橙	口縁部外面横撫で後、斜め方向 横撫で、内面横方向刷毛目。口 唇部面取り、刷毛目。胴部外面 縦方向横撫で、内面横撫で。
7	土師器 甕	1 床上31	口縁部破片	— —	0.6	細砂を含む	酸化焰 7.5YR5/4にぶい褐	外面輪積痕を残す。内面弱い刷 毛目。頸部に縦方向刷毛目。
8	土師器 台付甕	9 床上5	口縁部～胴 部	11.0 —	[10.6]	細砂を含む	酸化焰 10YR7/4にぶい橙	口縁部外面撫で後、部分的に横 撫で、内面横撫で。胴部外面縦 方向横削り、内面横撫で後、棒 状工具による横・斜め方向のみ がき。
9	土師器 S字口縁台 付甕	2・4・7 床上1・11	口縁部～台 部2/3	12.8 —	[24.6]	細砂を含む	酸化焰 10YR6/4にぶい黄橙	口縁部内外面横撫で。胴部外面 下位から中位にかけて刷毛目後、 上位に頸部から下方に向けた刷 毛目を重ねる。内面横撫で。台 部外面上位に刷毛目、裾は打ち 欠く。
10	土師器 壺	8 床上3	胴部～底部 破片	— 8.2	[8.4]	細砂を含む	酸化焰 10YR6/4にぶい黄橙	胴部外面横方向みがき、内面斜 め方向のみがき。底部外面木葉 痕、糊跡がある。

11	土製品 紡錘車	2 床下1	一部欠損	長4.3 幅4.4	厚1.5	細砂を含む	酸化焰 10YR7/3にぶい黄橙	17g、軸孔径0.7cm、上面に使用 による摩耗。側面は撫で。
12	土師器 手づくね	4 床下4	胴部～底部 破片	— 2.8	[2.1]	細砂を含む	酸化焰 7.5YR6/4にぶい橙	外面縦方向篋削り、内面撫で。 上げ底。
13	土製品 手づくね	炉覆土	破片	長3.0 幅 [1.5]	厚1.0	細砂を含む	酸化焰 7.5YR6/6橙	棒状、勾玉のように指でつまみ 出している。
14	石器 多孔石	8 床下2	完形	長12.5 幅11.9	厚8.6	粗粒輝石安山 岩		1190g、表裏両面に凹み穴があ いている。
15	石器 凹石	1 床上14	完形	長11.2 幅9.2	厚4.8	粗粒輝石安山 岩		600g、表裏両面に2つの凹み穴 がいている。
16	石器 こも編み石	2 床上8	完形	長17.8 幅6.6	厚4.9	砂岩		890g、全体に摩耗、表裏両面に 敲打による剥離の跡がある。
17	石器 こも編み石	1 床上1	完形	長16.7 幅7.2	厚3.4	変質安山岩		590g、全体に摩耗、側面に敲打 による剥離の跡がある。
18	石器 こも編み石	2 床下6	完形	長14.4 幅6.5	厚3.6	粗粒輝石安山 岩		600g、表裏両面に擦痕、裏面中 央に横方向の擦痕がある。
19	石器 磨石	1 床上6	破片	長 [9.8] 幅 [4.7]	厚 [3.7]	粗粒輝石安山 岩		230g、表裏両面に2つの凹み穴 がいている。
20	鉄器 鉄鎌	8 床上24	破片	長 [4.4] 幅 [0.5]	厚 [0.5]			4g、茎の下半部破片、断面方形。

22号住居跡（第71図）PL63

() は推定値、[] は現存値、単位cm

No	種別 器種	平面位置 垂直(cm)	残存状況	口 底 径	器 高	胎土	焼 色 成 調	成・整形の特 徴
1	土師器 埴	1 床上6	口縁部～底 部1/3	— 3.1	[3.7]	細砂を含む	酸化焰 5YR6/6橙	内外面棒状工具によるみがき。
2	土師器 甕	6 床上2	口縁部～肩 部破片	— —	[5.7]	細砂を含む	酸化焰 5YR5/8明赤褐	内外面縦方向刷毛目、内面横方 向刷毛目。胴部外面縦方向刷毛 目、内面横撫で。
3	土師器 甕	6 床上6	口縁部破片	— —	0.5	微砂を含む	酸化焰 10YR6/4にぶい黄橙	口唇部肥厚、外面縦方向刷毛目、 内面横方向刷毛目。
4	土師器 台付甕	6 床上8	台 部	— [9.9]	[6.7]	細砂をやや多 く含む	酸化焰 7.5YR7/4にぶい橙	外面縦方向刷毛目、内面撫でと 弱い刷毛目。
5	土師器 粘土塊	1 床下1	完形	19.6 5.9	4.6	細砂を含む	酸化焰 5YR5/6明赤褐	540g、棒状、全体にスサ痕と指 頭痕を残している。

23号住居跡（第113図）PL63

() は推定値、[] は現存値、単位cm

No	種別 器種	平面位置 垂直(cm)	残存状況	口 底 径	器 高	胎土	焼 色 成 調	成・整形の特 徴
1	土師器 杯	6 床上2	口縁部～底 部3/4	12.6 —	4.6	細砂を含む	酸化焰 5YR6/6橙	口縁部内外面横撫で。底部外面篋 削り。内面撫で。
2	土師器 杯	3、貯蔵穴 床下4・59	略完形	11.1 —	5.2	細砂を含む	酸化焰 7.5YR5/6明褐	口縁部内外面横撫で。底部外面篋 削り。内面撫で。
3	土師器 杯	3 床上4	口縁部～底 部1/4	(11.4) —	[5.3]	細砂を含む	酸化焰 2.5YR4/4にぶい赤褐	口縁部内外面横撫で。底部外面篋 削り、内面横撫で。

4	土師器 杯	3 床下2	口縁部～底 部1/4以下	(11.0) —	4.8	細砂を含む	酸化焰 7.5YR5/6にぶい褐	口縁部内外面横撫で。底部外面篋 削り、内面撫で。
5	土師器 甕	5・3 床上1・3 床下53	口縁部～胴 部破片	(18.3) —	[8.8]	微砂を含む	酸化焰 10YR7/4にぶい黄橙	口縁部外面横撫で後、縦方向篋 撫で、内面横撫で。胴部外面縦方 向篋削り、内面撫で。
6	土師器 甕	3 床上6	口縁部～胴 部破片	19.8 —	[7.8]	細砂を含む	酸化焰 10YR6/6明黄褐	口縁部内外面横撫で。胴部外面縦 方向篋削り、内面横撫で。
7	土師器 甕	1・2・4 5・6 床上1～3	口縁部～胴 部	16.8	[27.0]	細砂を含む	酸化焰 10YR7/4にぶい黄橙	口縁部内外面横撫で。胴部外面 縦方向篋削り、内面横撫で。
8	土師器 甕	2・5 床上1～7	口縁部～胴 部破片	(18.0)	[12.5]	細砂を含む	酸化焰 10YR6/3にぶい黄橙	口縁部内外面横撫で。胴部外面 縦方向篋削り、内面横撫で。

24号住居跡（第11・12図）PL64・65

() は推定値、[] は現存値、単位cm

No	種 別 器 種	平面位置 垂直(cm)	残存状況	口 径 底 径	器 高	胎 土 石 材	焼 成 色 調	成・整形の特 徴
1	縄文土器 深 鉢	5 床上5	口縁部破片	— —	厚1.9	微砂・繊維を 含む	酸化焰 5YR5/6明赤褐	平縁。LR縄文を施文。黒浜式。
2	縄文土器 深 鉢	5 床下9	口縁部破片	— —	厚0.9	微砂・繊維を 含む	酸化焰 7.5YR4/3褐	平縁。LR縄文を施文。黒浜式。
3	縄文土器 深 鉢	5 床下9	口縁部破片	— —	厚0.8	細砂を含む	酸化焰 7.5YR6/4にぶい橙	平縁。RL縄文を施文。諸磯aか b式
4 ・ 5	縄文土器 深 鉢	5 床下11	口縁部破片	— —	厚0.9	微砂・繊維を 含む	酸化焰 7.5YRにぶい褐	波状口縁。LR、RLの羽状縄文。口 唇部沿いに棒状工具による3 ～4条の刺突列点文がめぐる。 黒浜式。5と同一個体。
6	縄文土器 深 鉢	5 床下13	胴部破片	— —	厚0.8	微砂・繊維を 含む	酸化焰 7.5YR6/4にぶい橙	LR、RLの羽状縄文を施文。 黒浜式。
7 ・ 12	縄文土器 深 鉢	5 床下1	胴部破片	— —	厚0.8	微砂・繊維を 含む	酸化焰 7.5YR5/4にぶい橙	LR、RLの羽状縄文を施文。 黒浜式。8～12と同一個体。
13	縄文土器 深 鉢	7 床下1	胴部破片	— —	厚0.6	細砂を含む	酸化焰 7.5YR4/3褐	RL縄文を施文。諸磯a式。
14 ・ 15	縄文土器 深 鉢	5 床下16	胴部破片	— —	厚0.7	細砂を含む	酸化焰 7.5YR4/4褐	RL縄文を施文。諸磯a式。15と 同一個体。
16	縄文土器 深 鉢	5 床下16	胴部破片	— —	厚0.7	細砂を含む	酸化焰 7.5YR6/4にぶい橙	平縁。RL単節縄文を施文。諸 磯a式。
17	縄文土器 深 鉢	8 床上4	胴部破片	— —	厚0.6	細砂を含む	酸化焰 5YR5/4にぶい赤褐	RL単節縄文を施文。諸磯a式。
18	縄文土器 深 鉢	5 床下9	口縁部破片	— —	厚0.6	細砂を含む	酸化焰 5YR4/4にぶい赤褐	波状口縁。RL単節縄文を施文。 諸磯a式。
19	石器 スク レイパー	9 床上8	完 形	長10.5 幅5.9	厚1.7	黒色頁岩		70g、横剥ぎ剥片を使用。表面は 自然面を利用、裏面に調整。
20	石器 スク レイパー	9 床上2	完 形	長5.0 幅8.7	厚1.5	黒色頁岩		60g、横剥ぎ剥片を使用。縁辺部 を刃部としている。

21	石器 スクレイパー	9 床上3	完形	長5.0 幅5.7	厚1.1	黒色頁岩		30g、縦剥ぎ剥片を使用。縁辺部を刃部としている。
22	石器 磨石	9 床上2	完形	長11.7 幅8.7	厚4.4	粗粒輝石安山岩		630g、表裏両面に磨り面、側面に敲打の跡がある。
23	石器 剥片	5 床下3	完形	長5.5 幅5.7	厚1.2	黒色頁岩		40g、縁辺部に使用した痕跡がある。
24	石器 剥片	5 床下8	完形	長5.3 幅6.9	厚1.3	黒色頁岩		35g、縁辺部に使用した痕跡がある。
25	石器 剥片	9 床上2	完形	長4.4 幅5.0	厚0.8	黒色頁岩		25g、縁辺部に使用した痕跡がある。

25号住居（第16～18図）PL65～67

() は推定値、[] は現存値、単位cm

No	種別 器種	平面位置 垂直(cm)	残存状況	口径 底径	器高	胎土 石材	焼成 色調	成・整形の特徴
1	縄文土器 深鉢	4、1号炉	口縁部～胴部	(19.5) —	[15.3]	細砂を含む	酸化焰 10YR7/3にぶい黄橙	R L単節縄文を施文。諸磯a式。
2	縄文土器 深鉢	7・8 床上1・8	口縁部～胴部	— —	厚0.6	細砂を含む	酸化焰 10YR6/3にぶい黄橙	平縁。幅4mmの半截竹管による平行沈線を口縁部は横位に施文、上に棒状・ボタン状の粘土を貼付。口唇部は篋による凹凸文。胴部は矢羽根状沈線を施文。諸磯c式。
3	縄文土器 深鉢	4・5・7・8 床上9・12	口縁部・底部	(22.6) (9.0)	[28.8]	細砂を含む	酸化焰 10YR7/3にぶい黄橙	平縁。幅4mmの半截竹管による平行沈線を口縁部は横位に施文した上に「ハ」の字や「ボタン状」に粘土を貼付。胴部は縦位の平行沈線で区画し、中を羽状沈線で充てん。その上に棒状・ボタン状の粘土を貼付。諸磯c式。
4	縄文土器 深鉢	2号炉・8 床直	口縁部～底部	(17.5) —	[16.0]	細砂を含む	酸化焰 10YR7/4にぶい黄橙	平縁。口縁は内傾、胴部下位にふくらみがある。幅4mmの半截竹管による平行沈線で、口縁部は横位矢羽根状に施文、上に棒状・ボタン状の粘土を貼付。胴部は縦と弧状の沈線により6分割、矢羽根状の沈線を充てん、上にボタン状の粘土を貼付。諸磯c式。
5	縄文土器 深鉢	7・8 床上7	口縁部破片	— —	厚0.5～ 0.9	細砂を含む	酸化焰 7.5YR7/6橙	平縁。半截竹管による矢羽根状沈線の上にボタン状や耳状の粘土を貼付。諸磯c式。
6	縄文土器 深鉢	2・8・9 床上12・25	口縁部～底部	(11.6) 9.0	21.8	細砂を含む	酸化焰 7.5YR6/4にぶい橙	平縁。幅3mmの半截竹管による平行沈線を連続施文、集合沈線状にする。口縁部は横位に沈線を施文、口唇部外稜に刻みを入れてつまみ出すように凹凸文が付く。諸磯c式。

7	縄文土器 深鉢	4・8 床上7	口縁部・底 部	(18.0) —	[20.1]	細砂を含む	酸化焰 7.5YR6/4にぶい橙	口縁部は1本沈線を縦横不規則に施文。口唇部に刻みがある。胴部は幅7mmの半截竹管による平行沈線を斜格子状に施文、下位に変形爪形文を施文。浮島Ⅱ式。
8	縄文土器 深鉢	覆土	口縁部破片	— —	厚0.8	粗砂・細砂を含む	酸化焰 10YR6/6明黄褐	波状口縁。R L単節縄文。諸磯aかb式。
9	縄文土器 深鉢	6 床上17	口縁部破片	— —	厚0.6	粗砂・細砂を含む	酸化焰 5YR6/4にぶい橙	波状口縁。R L単節縄文。諸磯aかb式。
10 ・ 11	縄文土器 深鉢		口縁部破片	— —	厚1.0	細砂を含む	酸化焰 5YR5/4にぶい赤褐	波状口縁。R L単節縄文地に刻みを持った浮線文を横位・弧状に貼付。諸磯b式。11と同一個体。
12 ・ 13	縄文土器 深鉢	覆土	口縁部破片	— —	厚1.1	細砂を含む	酸化焰 10YR7/6明黄褐	波状口縁。幅9mmの半截竹管による横位の平行沈線で区画し連続爪形文を施文。諸磯b式。13と同一個体。
14	縄文土器 深鉢	8 床上23	胴部破片	— —	厚1.1	粗砂を含む	酸化焰 5YR6/4にぶい橙	幅6mmの半截竹管による平行沈線で弧状に区画、中に連続爪形文を施文。諸磯b式。
15	縄文土器 深鉢	覆土	胴部破片	— —	厚1.1	粗砂・細砂を含む	酸化焰 7.5YR5/3にぶい褐	幅7mmの半截竹管による平行沈線で区画した中に連続爪形文を施文。諸磯b式。
16	縄文土器 深鉢	覆土	胴部破片	— —	厚1.1	粗砂・細砂を含む	酸化焰 5YR6/6橙	幅9mmの半截竹管による平行沈線内に連続爪形文を施文。諸磯b式。
17	縄文土器 深鉢	覆土	口縁部破片	— —	厚0.9	細砂を含む	酸化焰 5YR5/4にぶい赤褐	波状口縁。幅2mmの半截竹管による平行爪形文を施文。浮島Ⅱ式。
18	縄文土器 深鉢	5・6 床上24、床下 1	口縁部破片	— — —	厚0.6	細砂を含む	酸化焰 10YR7/3にぶい黄橙	幅3mmの半截竹管による平行沈線を連続に施文して集合沈線上にする。胴部は平行沈線で縦に区画し、弧状に施文。諸磯c式。
19	縄文土器 深鉢	覆土	口縁部破片	— —	厚0.8	細砂を含む	酸化焰 7.5YR6/3にぶい褐	波状口縁。1本沈線で入り組み状に区画、中に貝殻腹縁文を充てん。興津Ⅱ式。
20	石器 打製石斧	6 床上19	1/2	長[7.2] 幅5.6	厚1.3	黒色頁岩		70g、短冊形。表面に自然面を残す。裏面は側縁と刃部に調整。
21	石器 スク レイパー	8 床上1	完形	長8.9 幅11.6	厚3.8	黒色頁岩		450g、円礫を素材とする。下端部の表裏を加工し、刃部とする。
22	石器 スク レイパー	5 床上19	完形	長5.8 幅7.7	厚1.2	黒色頁岩		50g、縦剥ぎ剥片の縁辺部に使用痕がある。
23	石器 スク レイパー	4 床上8	完形	長7.7 幅7.5	厚1.5	黒色頁岩		72g、縁辺部の1側縁に使用痕がある。

24	石器 スク レイパー	5 床上29	完 形	長6.8 幅8.6	厚1.7	黒色頁岩		70g、縁辺部の2側縁に使用痕がある。
25	石器 スク レイパー	7 床上11	完 形	長4.0 幅8.1	厚0.9	黒色頁岩		50g、縁辺部全体に使用痕がある。
26	石器 スク レイパー	6 床上7	完 形	長5.9 幅6.5	厚0.9	黒色頁岩		40g、縁辺部全体に使用痕がある。
27	石 器 剥 片	7 床下69	完 形	長6.2 幅4.6	厚1.0	黒色頁岩		35g、縁辺部に使用痕がある
28	石 器 剥 片	7 床上17	完 形	長4.7 幅7.3	厚0.9	黒色頁岩		20g、縁辺部に使用痕がある
29	石 器 剥 片	4 床下6	完 形	長9.0 幅6.7	厚2.0	黒色頁岩		110g、縦剥ぎ剥片。縁辺部に使用痕がある。
30	石 器 剥 片	8 床上19	完 形	長3.8 幅8.9	厚1.0	黒色頁岩		30g、縁辺部の2側縁に使用痕がある。
31	石 器 剥 片	4 床上5	完 形	長6.4 幅5.1	厚0.8	黒色頁岩		32g、縁辺部全体に使用痕がある。
32	石 器 磨 石	9 床上19	完 形	長13.1 幅9.8	厚5.3	粗粒輝石安山 岩		620g、磨石のほかには敲石としても使用している。
33	石 器 磨 石	4 床上6	完 形	長6.9 幅6.3	厚5.7	粗粒輝石安山 岩		330g、全体に摩耗している。
34	石 器 石 錐	覆 土	つまみ部欠 損	長〔3.3〕 幅0.9	厚0.6	黒曜石		0.99g、断面三角形。
35	石 器 石 鏃	覆 土	完 形	長1.3 幅1.5	厚0.35	黒曜石		0.73g、無茎、基部の扱りは逆U 字形で深い。
36	石 器 石 鏃	8 床上7	完 形	長1.8 幅1.3	厚0.3	黒曜石		0.48g、無茎、基部の扱りは逆U 字形で深い。
37	石 器 石 皿	5 床上5	完 形	長16.2 幅20.5	厚5.0	粗粒輝石安山 岩		1850g、板状の自然石をそのまま 使用。表面に敲打した跡があり、 台石としても使用。

26号住居（第19図）PL67

（ ）は推定値、〔 〕は現存値、単位cm

No	種 別 器 種	平面位置 垂直(cm)	残存状況	口 径 底 径	器 高	胎 土 石 材	焼 成 色 調	成・整形の特 徴
1	縄文土器 深 鉢	覆 土	胴部破片	— —	厚0.8	細砂を含む	酸化焰 7.5YR6/6にぶい橙	単節RL縄文地に幅3mmの半截 竹管による平行沈線文を横位に 施文。諸磯b式。
2	縄文土器 深 鉢	覆 土	胴部破片	— —	厚0.6～ 1.0	細砂を含む	酸化焰 5YR4/4にぶい赤褐	幅3～4mmの半截竹管による平 行沈線文を横位に施文。諸磯b 式。
3	縄文土器 深 鉢	覆 土	口縁部破片	— —	厚0.6	細砂を含む	酸化焰 2.5Y5/3黄褐	幅4mmの半截竹管による平行沈 線文を施文。口唇部に刻み目が ある。諸磯b式。

4	縄文土器 深鉢	覆土	胴部破片	— —	厚0.7～ 1.0	細砂を含む	酸化焰 5YR5/4にぶい赤褐	幅3mmの半截竹管による平行沈線文を縦位に施文。上に刻み目を持つ粘土紐を縦位に貼付。諸磯c式。
5	石器 石鏃	覆土	完形	長2.05 幅1.5	厚0.2	黒色頁岩		0.65g、無茎、基部は逆U字形に抉れている。
6	石器 剥片	2 床上2	完形	長6.7 幅4.2	厚1.3	黒色頁岩		35g、縁辺部の2側縁に使用痕がある。
7	石器 剥片	2 床上2	完形	長4.6 幅4.5	厚1.2	黒色頁岩		20g、縁辺部に使用痕がある。
8	石器 剥片	3 床上1	完形	長4.9 幅3.9	厚0.7	黒色頁岩		10g、縁辺部の2側縁に使用痕がある。
9	石器 剥片	2 床上6	完形	長5.2 幅4.6	厚1.0	黒色頁岩		33g、縁辺部の2側縁に使用痕がある。
10	石器 磨石	9 床上3	完形	長12.4 幅5.1	厚2.7	砂岩		260g、全体が摩耗している。

27号住居（第20～22図）PL67～69

() は推定値、[] は現存値、単位cm

No	種別 器種	平面位置 垂直(cm)	残存状況	口径 底径	器高	胎土 石材	焼成 色調	成・整形の特徴
1	縄文土器 深鉢	覆土	胴部破片	— —	厚1.2	微砂を含む	酸化焰 7.5YR7/4にぶい橙	無文地に平行爪形文を施文する。諸磯b式。
2	縄文土器 深鉢	覆土	胴部破片	— —	厚0.9	微砂を含む	酸化焰 2.5Y7/4浅黄	平行沈線文で区画した中に爪形文を充てん。諸磯b式。
3	縄文土器 深鉢	覆土	胴部破片	— —	厚0.8	微砂を含む	酸化焰 7.5YR7/4にぶい橙	RL単節縄文を施文後、くびれ部に横位の平行沈線文を施文。諸磯a式。
4	縄文土器 深鉢	6 床上25	胴部破片	— —	厚0.9	微砂を含む	酸化焰 2.5Y7/3浅黄	RL単節縄文を横位に施文。諸磯aかb式。
5	縄文土器 深鉢	覆土	胴部破片	— —	厚0.9	細砂を含む	酸化焰 2.5Y7/4浅黄	RL単節縄文を横位に施文。諸磯aかb式。
6	縄文土器 深鉢	1 床上15	胴部破片	— —	厚0.7	細砂を含む	酸化焰 7.5YR7/4にぶい橙	RL単節縄文を横位に施文。諸磯aかb式。
7	縄文土器 深鉢	覆土	胴部破片	— —	厚0.8	微砂を含む	酸化焰 2.5YR7/4浅黄	RL単節縄文を横位に施文。諸磯aかb式。
8	縄文土器 深鉢	覆土	胴部～底部 破片	— —	厚0.8	微砂を含む	酸化焰 10YR8/4浅黄橙	RL単節縄文を縦位に施文。諸磯aかb式。
9	縄文土器 深鉢	覆土	底部破片	— —	厚0.7～ 1.2	粗砂・微砂を含む	酸化焰 2.5YR5/6明赤褐	無文地に平行沈線文を横位に施文。諸磯aかb式。
10	縄文土器 深鉢	覆土	底部破片	— —	厚0.7	細砂を含む	酸化焰 10YR5/3にぶい黄橙	RL、LR複節縄文を横位に施文。諸磯aかb式。
11	縄文土器 深鉢	覆土	口縁部破片	— —	厚0.7～ 1.8	細砂を含む	酸化焰 7.5YR7/6橙	縄文地に刻み目を持つ浮線文を渦巻き状に貼付。諸磯b式。

12	縄文土器 深鉢	覆土	胴部破片	— —	厚1.0	粗砂を含む	酸化燧 5YR5/4にぶい赤褐	R L単節縄文地に刻み目を持つ 浮線文を貼付。諸磯b式。
13	縄文土器 深鉢	覆土	胴部破片	— —	厚0.8	細砂を含む	酸化燧 5YR5/4にぶい赤褐	縄文地に幅4mmの半截竹管による 平行沈線を連続して横位に区 画、中に弧状の沈線を充てん。 諸磯b式。
14	縄文土器 深鉢	覆土	胴部破片	— —	厚1.0	細砂を含む	酸化燧 10YR7/4にぶい黄橙	幅5mmの半截竹管による平行沈 線を間隔を空けて横位に施文。 諸磯b式。
15	縄文土器 深鉢	覆土	胴部破片	— —	厚1.1	細砂を含む	酸化燧 10YR7/4にぶい黄橙	幅5mmの半截竹管による平行沈 線で横位に区画、間を矢羽根状、 曲線状に施文して充てん。諸磯 b式。
16	縄文土器 深鉢	覆土	胴部破片	— —	厚0.9	細砂を含む	酸化燧 10YR7/3にぶい黄橙	縄文地に幅3mmの半截竹管によ る2条単位の平行沈線を短く、 弧状に連続施文。諸磯b式。
17	縄文土器 深鉢	覆土	胴部破片	— —	厚1.0	粗砂を含む	酸化燧 10YR7/3にぶい黄橙	幅3mmの半截竹管による平行沈 線を横位に連続施文、集合沈線 状にしている。諸磯b式。
18	縄文土器 深鉢	3 床上13	口縁部破片	— —	厚0.9	細砂を含む	酸化燧 5YR5/4にぶい赤褐	幅4mmの半截竹管による平行沈 線で横位に区画した間を縦位に 連続施文、集合沈線状にしてい る。諸磯b式。
19	縄文土器 深鉢	覆土	口縁部破片	— —	厚0.5～ 1.2	細砂を含む	酸化燧 5YR4/6赤褐	幅4mmの半截竹管による平行沈 線を弧状に施文。諸磯b式。
20	縄文土器 深鉢	1 床上1	口縁部破片	— —	厚0.9	細砂を含む	酸化燧 7.5YR4/2灰褐	縄文地に幅3mmの半截竹管によ る平行沈線を連続して施文。諸 磯b式。
21	縄文土器 深鉢	2 床上16	口縁部破片	— —	厚0.7	微砂を含む	酸化燧 10YR7/4にぶい黄橙	棒状工具により縦位に沈線を連 続させ、上に工具を刺突。以下 幅の広い爪形文を横位に連続し て施文。浮島II式。
22	縄文土器 浅鉢	覆土	口縁部～胴 部破片	(33.0)	厚2.4	微砂を含む	酸化燧 7.5YR7/3にぶい橙	無文。外面に赤彩した跡がある。
23	石器 打製石斧	覆土	頭部1/2	長 [5.4] 幅4.2	厚1.4	黒色頁岩		40g、短冊形。横剥ぎ剥片を素材 とする。
24	石器 スクレイパー	2 床上12	完形	長8.7 幅9.1	厚1.9	黒色頁岩		155g、周縁部に使用痕がある。
25	石器 スクレイパー	覆土	完形	長5.2 幅8.1	厚1.2	黒色頁岩		60g、周縁部に使用痕がある。
26	石器 石匙	5 床上1	一部欠損	長 [6.1] 幅3.2	厚0.8	黒色頁岩		18.67g、縦型。つまみ部をはじ め周縁部に調整加工。
27	石器 スクレイパー	覆土	完形	長4.3 幅7.9	厚1.3	黒色頁岩		45g、周縁部に使用痕がある。
28	石器 剥片	6 床上12	完形	長5.1 幅4.6	厚0.5	黒色頁岩		15g、周縁部に使用痕がある。

29	石器 石 鏃	5 床上5	略完形	長2.0 幅1.5	厚0.5	黒曜石		0.81g、無茎。基部が挟れている。
30	石器 磨 石	3 床上3	完 形	長13.8 幅10.9	厚5.5	粗粒輝石安山岩		995g、表裏両面に磨り面と敲打痕がある。
31	石器 磨 石	3 床上3	完 形	長11.4 幅8.7	厚4.8	粗粒輝石安山岩		770g、表裏両面に磨り面と敲打痕がある。
32	石器 磨 石	6 床上7	完 形	長10.2 幅7.7	厚3.3	粗粒輝石安山岩		360g、表裏両面に磨り面がある。
33	石器 磨 石	6 床上3	破 片	長 [11.3] 幅 [5.8]	厚 [3.3]	粗粒輝石安山岩		185g、表裏両面に磨り面がある。
34	石器 台 石	3 床上5	完 形	長21.6 幅27.5	厚6.0	粗粒輝石安山岩		5050g、側面に固定するための打ち欠きがあり、表裏両面に凹穴があいている。
35	石器 台 石	3 床上19	完 形	長29.6 幅20.3	厚11.3	粗粒輝石安山岩		7500g、側面に固定するための打ち欠きがあり、表面だけに敲打の跡がある。
36	石器 台 石	2 床上1	完 形	長24.7 幅24.0	厚10.7	粗粒輝石安山岩		7610g、表面だけを使用。敲打と磨り面がある。

土坑 (第32~35・72・117図) PL70~72

() は推定値、[] は現存値、単位cm

No	種 別 器 種	平面位置 垂直 (cm)	残存状況	口 径 底 径	器 高	胎 土 石 材	焼 成 色 調	成・整形の特 徴
1坑 1	縄文土器 深 鉢	覆 土	胴部破片	— —	厚1.1	細砂を含む	酸化焰 7.5YR5/4にぶい褐	R L、L Rの羽状縄文に結節縄文とコンパス文を施文。関山Ⅱ式。
1坑 2	縄文土器 深 鉢	覆 土	口縁部破片	— —	厚0.5	微砂を含む	酸化焰 10YR4/4褐	波状口縁。R L単節縄文を横位に施文。諸磯a式。
1坑 3	縄文土器 深 鉢	覆 土	胴部破片	— —	厚0.7	細砂を含む	酸化焰 7.5Y6/4にぶい橙	R L単節縄文地に幅7mmの半截竹管による平行沈線間に爪形文を施文。諸磯a式。
1坑 4	縄文土器 深 鉢	覆 土	胴部破片	— —	厚0.9	細砂を含む	酸化焰 7.5YR6/3にぶい橙	縦位の平行沈線文の上に縦列に円形竹管文を施文。諸磯a式。
1坑 5	縄文土器 深 鉢	覆 土	口縁部破片	— —	厚0.9	細砂を含む	酸化焰 7.5YR6/6橙	平行爪形文を横位に施文。口唇部に縦の刻み目。浮島Ⅱ式。
1坑 6	石器 打製石斧	覆 土	完 形	長10.6 幅4.7	厚1.8	黒色頁岩		90g、短冊形。側縁が刃部に向かって広がる。
2坑 1	縄文土器 深 鉢	覆 土	胴部破片	— —	厚0.9	細砂を含む	酸化焰 5YR3/2明赤褐	幅6mmの半截竹管による横位の平行沈線間に爪形文を施文。諸磯b式。
2坑 2	石器 凹 石	床上2	完 形	長11.0 幅4.7	厚1.8	粗粒輝石安山岩		565g、表裏両面に各2つの凹み穴がある。
3坑 1 4	縄文土器 深 鉢	覆 土	口縁部・胴部破片	— —	厚0.6	細砂を含む	酸化焰 5YR5/4にぶい黄褐	平縁。幅3mm、半截竹管の背による平行沈線文を横位に連続して表裏に施文。諸磯b式。2~4と同一個体。

3坑 5	縄文土器 深鉢	覆土	胴部破片	— —	厚0.8	細砂を含む	酸化焰 7.5YR6/4にぶい橙	R L単節縄文地に刻み目を持つ 浮線文を貼付。諸磯b式。
3坑 6	縄文土器 深鉢	覆土	胴部破片	— —	厚0.9	細砂を含む	酸化焰 7.5YR6/3にぶい褐	R L単節縄文を横位に施文。諸 磯aかb式。
3坑 7	縄文土器 深鉢	覆土	胴部破片	— —	厚0.5	微砂を含む	酸化焰 7.5YR4/2灰褐	変形爪形文を施文。浮島Ⅱ式。
6坑 1	縄文土器 深鉢	覆土	胴部破片	— —	厚0.9	細砂を含む	酸化焰 7.5YR6/6橙	R L単節縄文を横位に施文。諸 磯aかb式。
10坑 1	縄文土器 深鉢	覆土	口縁部破片	— —	厚0.9	細砂を含む	酸化焰 10YR3/2黒褐	波状口縁。R L単節縄文を横位 に施文。諸磯aかb式。
10坑 2	縄文土器 深鉢	覆土	胴部破片	— —	厚0.7～ 1.0	細砂を含む	酸化焰 7.5YR4/2灰褐	R L単節縄文地に平行沈線文を 3～4条単位に横位に施文。間 に縦位の平行沈線文を施文。諸 磯b式。
10坑 3	縄文土器 深鉢	覆土	胴部破片	— —	厚0.7～ 1.3	微砂を含む	酸化焰 10YR5/3にぶい黄褐	幅6mmの半截竹管による平行沈 線文を横位・弧状に施文。平行沈 線文の間を1条分肥厚させ凸帯 とする。上には刻み目を持つ。 浮島Ⅱ式。
10坑 4	縄文土器 深鉢	覆土	胴部破片	— —	厚0.7	微砂を含む	酸化焰 10YR5/4にぶい黄褐	半截竹管による平行沈線を鋸歯 状に施文。浮島Ⅱ式。
10坑 5	縄文土器 浅鉢	覆土	胴部破片	— —	厚0.5	細砂を含む	酸化焰 10YR4/4褐	無文。
10坑 6	石器 剥片	覆土	完形	長6.9 幅6.2	厚0.9	黒色頁岩		40g、縁辺部に使用痕がある。
10坑 7	石器 剥片	覆土	完形	長4.5 幅6.0	厚1.8	黒色頁岩		40g、縁辺部に使用痕がある。
10坑 8	石器 剥片	覆土	完形	長3.7 幅5.7	厚0.9	黒色頁岩		15g、縁辺部に使用痕がある。
12坑 1	縄文土器 深鉢	覆土	口縁部破片	— —	厚0.8～ 0.9	細砂を含む	酸化焰 7.5YR6/6橙	波状口縁。口唇部を肥厚させて 渦巻き状にする。諸磯b式。
13坑 1	縄文土器 深鉢	覆土	胴部破片	— —	厚0.5	繊維・微砂を 含む	酸化焰 7.5YR5/4にぶい褐	R L、L Rの羽状縄文を施文。 黒浜式。
13坑 2	縄文土器 深鉢	覆土	口縁部破片	— —	厚0.8	粗砂を含む	酸化焰 10YR8/3浅黄橙	波状口縁。幅5mmの半截竹管に よる平行沈線を口縁部に沿って 3条、以下横位に波状文、平行 爪形文を施文。諸磯b式。
13坑 3	縄文土器 深鉢	覆土	胴部破片	— —	厚0.6	細砂を含む	酸化焰 5YR4/6明褐	L R無節縄文地に平行沈線文を 楕円形に施文。諸磯b式。
13坑 4	縄文土器 深鉢	覆土	胴部破片	— —	厚0.9	細砂を含む	酸化焰 7.5YR5/4にぶい褐	無文地に刻み目を持つ浮線文を 2条単位に貼付。諸磯b式。
13坑 5	縄文土器 深鉢	床上22	胴部破片	— —	厚0.9	微砂を含む	酸化焰 10YR7/3にぶい黄褐	L R単節縄文を横位に施文。諸 磯aかb式。

13坑 6	石器 スクレイパー	覆土	完形	長4.9 幅7.1	厚1.1	黒色頁岩		45g、周縁部に調整加工を施す。
14坑 1	縄文土器 深鉢	覆土	胴部破片	— —	厚0.8	細砂を含む	酸化焰 10YR2/1黒	R L 単節縄文地に平行沈線文を横位・斜位に施文。諸磯b式
14坑 2	縄文土器 深鉢	覆土	胴部破片	— —	厚0.6	微砂を含む	酸化焰 5YR5/4にぶい赤褐	L R 複節縄文を横位に施文。諸磯aかb式。
20坑 1	縄文土器 深鉢	覆土	胴部破片	— —	厚0.8	微砂を含む	酸化焰 10YR6/4にぶい黄橙	R L 複節縄文地に平行沈線文を横位に施文。諸磯b式。
20坑 2	縄文土器 深鉢	覆土	胴部破片	— —	厚1.0	微砂を含む	酸化焰 10YR7/3にぶい黄橙	R L 単節縄文に縦位に平行爪形文を2条めぐらし、間を磨り消している。諸磯a式。
21坑 1	石器 打製石斧	床上14	完形	長10.2 幅5.4	厚1.5	黒色頁岩		80g、短冊形。側縁が刃部に向かって広がる。
25坑 1	石器 打製石斧	床上9	完形	長11.0 幅7.6	厚1.5	黒色頁岩		130g、撥形。表面全体に自然面を残す。
26坑 1	須恵器 蓋	床上6	天井部～端部	— —	(2.8)	細砂を含む	還元焰 5Y5/1灰	ロクロ成形後、天井部中央部に右回転斲削り。
33坑 1	縄文土器 深鉢	床上14	胴部破片	— —	厚0.9	細砂を含む	酸化焰 10YR6/6明黄褐	R L 単節、L R 単節縄文による羽状縄文。黒浜式か。
34坑 1	縄文土器 深鉢	床上25	口縁部破片	— —	厚0.9	繊維・微砂を含む	酸化焰 10YR7/3にぶい黄橙	L R 単節縄文を横位に施文。黒浜式。
35坑 1	石器 打製石斧	床上6	刃部破片	長 [5.6] 幅 [4.2]	厚 [1.6]	細粒安山岩		42g、短冊形か。
36坑 1	縄文土器 深鉢	床上4	胴部破片	— —	厚0.7	繊維・微砂を含む	酸化焰 5YR5/4にぶい赤褐	R L 単節縄文を横位に施文。黒浜式。
38坑 1	縄文土器 深鉢	覆土	口縁部破片	— —		繊維・細砂を含む	酸化焰 5YR5/4にぶい赤褐	R L 単節縄文地に平行沈線文を横位に施文。黒浜式。
38坑 2	縄文土器 深鉢	床上87	口縁部破片	— —		繊維・微砂を含む	酸化焰 5YR5/4にぶい赤褐	L R 複節縄文を横位に施文。黒浜式。
38坑 3	縄文土器 深鉢	床上58	胴部破片	— —		繊維・微砂を含む	酸化焰 7.5YR6/4にぶい橙	R L 単節縄文を横位に施文。黒浜式。
38坑 4	石器 磨石	床上7	一部欠損	長 [9.9] 幅7.0	厚3.1	粗粒輝石安山岩		290g、表裏全体が摩耗。凹石を転用。
43坑 1	縄文土器 深鉢	覆土	胴部破片	— —	厚1.2	繊維・粗砂を含む	酸化焰 5YR6/4にぶい橙	R L 単節縄文を横位に施文。黒浜式。
45坑 1	縄文土器 深鉢	覆土	口縁部破片	— —	厚0.8	繊維・微砂を含む	酸化焰 5YR6/4にぶい橙	平縁。平行爪形文を横位に施文。黒浜式。
45坑 2	縄文土器 深鉢	覆土	口縁部破片	— —	厚1.2	繊維・微砂を含む	酸化焰 7.5YR6/4にぶい橙	平縁。平行爪形文を横位・斜位に施文。黒浜式。
45坑 3	縄文土器 深鉢	覆土	胴部破片	— —	厚1.5	繊維・微砂を含む	酸化焰 5YR6/4にぶい橙	L R・R L 単節の羽状縄文。黒浜式。

45坑 4	縄文土器 深鉢	覆土	胴部破片	— —	厚0.9	繊維・微砂を 含む	酸化焰 10YR5/2灰黄褐	R L単節縄文を横位に施文。黒 浜式。
50坑 1	土師器 小型甕	覆土	口縁部～胴 部破片	(10.0) —	6.0	細砂を含む	酸化焰 7.5YR5/3にぶい褐	口縁部内外面横撫で。胴部外面 横方向筥削り、内面筥撫で。
52坑 1	土師器 埴	床上13	口縁部～胴 部破片	14.0 (3.5)	4.7	細砂を含む	酸化焰 10YR8/3浅黄橙	口縁部内外面棒状工具による縦 方向みがき。上げ底。
53坑 1	土師器 甕	床上9	口縁部～胴 部破片	(15.9) —	(13.7)	細砂を含む	酸化焰 7.5YR6/3にぶい褐	口縁部外面肥厚、指頭痕がある。 胴部外面縦方向筥撫で、内面斜 め方向撫で。
54坑 1	縄文土器 深鉢	覆土	口縁部破片	— —	厚0.8	繊維・微砂を 含む	酸化焰 2.5Y7/3浅黄	平縁。R L単節縄文を横位に施 文。黒浜式。
55坑 1	縄文土器 深鉢	覆土	胴部破片	— —	厚0.9	繊維・微砂を 含む	酸化焰 7.5YR6/4にぶい橙	L R・R L単節の羽状縄文を施 文。黒浜式。
55坑 2	縄文土器 深鉢	覆土	胴部破片	— —	厚0.7	繊維・微砂を 含む	酸化焰 7.5YR5/4にぶい褐	R L単節縄文を横位に施文。黒 浜式。
56坑 1	縄文土器 深鉢	床上28	口縁部破片	— —	厚0.9	繊維・微砂を 含む	酸化焰 5YR5/3にぶい赤褐	平縁。平行爪形文を横位に施文。 黒浜式。
56坑 2	縄文土器 深鉢	床上33	胴部破片	— —	厚1.0	繊維・微砂を 含む	酸化焰 10YR5/2灰黄褐	平行爪形文を菱形に施文。黒 浜式。
56坑 3	縄文土器 深鉢	床上34	口縁部破片	— —	厚0.9	繊維・微砂を 含む	酸化焰 5YR5/4にぶい赤褐	平縁。R L単節縄文を横位に施 文。黒浜式。
56坑 4	縄文土器 深鉢	床上22	口縁部破片	— —	厚0.8	繊維・微砂を 含む	酸化焰 10YR7/4にぶい黄橙	波状口縁。L R単節縄文を横位 に施文。黒浜式。
56坑 5・6	縄文土器 深鉢	床上18	胴部破片	— —	厚1.1	繊維・微砂を 含む	酸化焰 7.5YR7/4にぶい橙	L R・R L単節の羽状縄文を横 位に施文。黒浜式。
56坑 7	縄文土器 深鉢	床上22	底部破片	— —	厚1.1	繊維・微砂を 含む	酸化焰 7.5YR7/4にぶい橙	R L単節縄文を横位に施文。黒 浜式。
56坑 8	石器 剥片	床上27	完形	長3.6 幅5.6	厚0.8	黒色頁岩		16g、縁辺部に使用痕がある。
57坑 1	石器 台石	床上	一部欠損	長 [15.0] 幅 [7.0]	厚7.8	粗粒輝石安山 岩		3260g、表裏両面に多数の凹み穴 があいている。
59坑 1	縄文土器 深鉢	床上22	胴部破片	— —	厚0.7～ 1.1	繊維・微砂を 含む	酸化焰 10YR6/4にぶい黄橙	L R単節縄文を横位に施文。く びれ部に平行沈線文を横位、波 状に施文。黒浜式。
59坑 2	縄文土器 深鉢	覆土	胴部破片	— —	厚1.1	繊維・微砂を 含む	酸化焰 7.5YR6/4にぶい橙	L R単節縄文を横位に施文。黒 浜式。
63坑 1	縄文土器 深鉢	床上28	胴部破片	— —	厚0.7～ 1.1	繊維・細砂を 含む	酸化焰 7.5YR6/4暗褐	R L単節縄文、L R単節縄文を 横位に交差させて羽状とする。 黒浜式。
63坑 2	縄文土器 深鉢	床上29	胴部破片	— —	厚0.6	粗砂を含む	酸化焰 7.5YR3/3明褐	R L単節縄文を横位に施文。諸 磯 a か b 式。
63坑 3～5	縄文土器 深鉢	床上29	胴部破片	— —	厚0.7	繊維・微砂を 含む	酸化焰 7.5YR4/3褐	R L単節縄文を横位に施文。黒 浜式。3～5同一個体。

64坑 1	石器 剥片	床上2	完形	長5.7 幅6.1	厚1.0	黒色頁岩		45g、縁辺部に使用痕がある。
64坑 2	石器 磨石	床下7	完形	長12.8 幅5.2	厚3.4	粗粒輝石安山 岩		330g、全体に摩耗、裏面に2つ の凹み穴がある。
65坑 1	縄文土器 深鉢	覆土	胴部破片	— —	厚0.9	微砂を含む	酸化焰 7.5YR6/4にぶい橙	沈線間を磨り消している。加曾 利EⅡ式。
68坑 1・ 2	縄文土器 深鉢	床上51	胴部破片	— —	厚1.0	微砂を含む	酸化焰 10YR6/3にぶい黄橙	R L単節縄文地に平行爪形文を 横位に連続施文。諸磯a式。2 と同一個体。
68坑 3	縄文土器 深鉢	覆土	胴部破片	— —	厚0.7	繊維・微砂を 含む	酸化焰 10YR7/3にぶい橙	L R単節縄文地に平行爪形文を 横位に施文。黒浜式。
68坑 4	縄文土器 深鉢	床上53	胴部破片	— —	厚0.7	微砂を含む	酸化焰 10YR7/6にぶい黄橙	R L単節縄文を横位に施文。諸 磯a式。
68坑 5	縄文土器 深鉢	床上3	胴部破片	— —	厚0.7	繊維・微砂を 含む	酸化焰 2.5YR4/4にぶい赤褐	R L単節縄文を横位に施文。黒 浜式。
68坑 6	縄文土器 深鉢	床上5	胴部破片	— —	厚0.7	繊維・微砂を 含む	酸化焰 10YR6/3にぶい黄橙	R L単節縄文を横位に施文。黒 浜式。
68坑 7	縄文土器 深鉢	床上26	胴部破片	— —	厚0.5	繊維・微砂を 含む	酸化焰 7.5YR7/3にぶい橙	平行沈線文をハの字に斜行させ、 交点上に円形文を縦列施文。諸 磯a式。
68坑 8	縄文土器 深鉢	床上48	胴部破片	— —	厚0.9	微砂を含む	酸化焰 5YR5/4にぶい赤褐	R L単節縄文を横位に施文。諸 磯a式。
68坑 9	縄文土器 深鉢	覆土	胴部破片	— —	厚0.7	微砂を含む	酸化焰 7.5YR5/6明赤褐	L R単節縄文を横位に施文。諸 磯a式。
68坑 10	縄文土器 深鉢	覆土	胴部破片	— —	厚0.7	微砂を含む	酸化焰 7.5YR5/3にぶい褐	無文。器面調整をしただけの状 態か。諸磯aかb式。
68坑 11	縄文土器 深鉢	覆土	胴部破片	— —	厚0.7	微砂を含む	酸化焰 5YR5/4にぶい赤褐	R L単節縄文を横位に施文した 上に、Lの結節回転が横走する。 諸磯a式。
68坑 12	石器 磨石	床上33	完形	長5.3 幅8.0	厚3.7	粗粒安山岩		270g、破碎した石皿を転用。裏 面に磨り面がある。
71坑 1	縄文土器 深鉢	床上12	胴部破片	— —	厚1.2	繊維・微砂を 含む	酸化焰 7.5YR6/6橙	R L・L Rの羽状縄文を横位に 施文。黒浜式。
73坑 1	縄文土器 深鉢	床上12	底部破片	— —	厚0.8～ 1.9	繊維・細砂を 含む	酸化焰 2.5YR6/3にぶい黄	R L単節縄文を横位に施文。黒 浜式。
74坑 1	石器 剥片	床直	完形	長5.2 幅8.3	厚1.7	黒色頁岩		70g、縁辺部に使用痕がある。
76坑 1	縄文土器 深鉢	床上33	口縁部破片	— —	厚0.6～ 1.0	繊維・微砂を 含む	酸化焰 7.5YR4/3褐	平縁。L R・R L単節の羽状縄 文を横位に施文。上にボタン状 粘土を貼付。関山Ⅱ式。
76坑 2	縄文土器 深鉢	床上35	胴部破片	— —	厚1.1	繊維・微砂を 含む	酸化焰 5YR5/4にぶい赤褐	R L単節縄文を横位に施文。黒 浜式。

77坑 1	縄文土器 深鉢	床直	底部破片	長4.9 幅8.0	厚2.4	微砂を含む	酸化焰 7.5YR6/4にぶい橙	底部の周縁部を打ち欠いている。 黒浜式か。
78坑 1	縄文土器 深鉢	覆土	胴部破片	— —	厚1.0	繊維・微砂を 含む	酸化焰 5YR5/4にぶい赤褐	結節第1種による羽状縄文。黒 浜式。
78坑 2	縄文土器 深鉢	覆土	胴部破片	— —	厚0.9	微砂を含む	酸化焰 5YR5/4にぶい赤褐	平行爪形文を横位に連続して施 文。黒浜式。
78坑 3	縄文土器 深鉢	床上24	胴部破片	— —	厚0.6～ 0.9	細砂を含む	酸化焰 5YR5/8明赤褐	平行沈線文で縦に分割、その間 を矢羽根状沈線で充てん。さら に刻み目を持つ棒状浮文とボタ ン状の貼付文が付く。諸磯c式。
79坑 1	縄文土器 深鉢	覆土	胴部破片	— —	厚0.8	繊維・微砂を 含む	酸化焰 5YR6/4にぶい橙	R L・L R羽状縄文を横位に施 文。黒浜式。
81坑 1	縄文土器 深鉢	覆土	胴部破片	— —	厚1.3	繊維・細砂を 含む	酸化焰 7.5YR6/4にぶい橙	L R単節縄文を横位に施文。黒 浜式。
81坑 2	縄文土器 深鉢	覆土	胴部破片	— —	厚0.9	細砂を含む	酸化焰 5YR5/4にぶい赤褐	平行爪形文を横位に施文。諸磯 b式。
81坑 3	縄文土器 深鉢	覆土	胴部破片	— —	厚0.8	細砂を含む	酸化焰 7.5YR7/4にぶい橙	無文地に刻み目を持った浮線文 を2条貼付。諸磯b式。
81坑 4	縄文土器 深鉢	覆土	胴部破片	— —	厚1.1	細砂を含む	酸化焰 5YR5/4にぶい赤褐	平行沈線文を横位に連続して施 文。諸磯b式。
81坑 5	縄文土器 深鉢	覆土	胴部破片	— —	厚1.1	細砂を含む	酸化焰 5YR5/4にぶい赤褐	R L単節縄文地に平行沈線文を 2段に施文。諸磯b式。
82坑 1	縄文土器 深鉢	床上28	胴部破片	— —	厚1.1	細砂を含む	酸化焰 2.5Y8/3淡黄	平行爪形文を横位に連続して施 文。諸磯b式。
82坑 2	縄文土器 深鉢	床上26	口縁部破片	— —	厚1.1	細砂を含む	酸化焰 5YR5/4にぶい赤褐	波状口縁。平行沈線文を横位に 密に施文。諸磯b式。
82坑 3	縄文土器 深鉢	床上15	胴部破片	— —	厚0.9	細砂を含む	酸化焰 7.5YR6/6橙	R L単節縄文地に平行沈線文を 鋸歯状に施文。諸磯b式。
82坑 4	縄文土器 深鉢	床上2	胴部破片	— —	厚0.8	細砂を含む	酸化焰 7.5YR6/4にぶい橙	R L単節縄文を横位に施文。諸 磯aかb式。
82坑 5	石器 剥片	床上37	完形	長4.8 幅7.1	厚1.1	黒色頁岩		32g、縁辺部に使用痕がある。
83坑 1	縄文土器 深鉢	覆土	胴部～底部 破片	— 9.4	[16.2] 厚0.9	粗砂・細砂を 含む	酸化焰 7.5YR6/4にぶい橙	7～8条の櫛状工具による集合 沈線を横位に施文。胴部の中位 でX状に交差、交点の上下に渦 巻き状の平行沈線文をめぐらす。 諸磯b式。
83坑 2	縄文土器 深鉢	床上2	胴部～底部 破片	— —	[17.8] 厚0.9	細砂を含む	酸化焰 10YR6/3にぶい黄橙	平行沈線文を横位に連続して施 文、胴部でもふくらみの部分に 弧状・渦巻きの文様帯を作る。 諸磯b式。
83坑 3	縄文土器 深鉢	覆土	口縁部破片	— —	厚1.0	細砂を含む	酸化焰 7.5YR6/4暗褐	平縁。R L単節縄文地に平行沈 線文を横位に連続施文、集合沈 線状にする。諸磯c式。

83坑 4	縄文土器 深鉢	覆土	胴部破片	— —	厚0.9	細砂を含む	酸化焰 7.5YR6/4にぶい橙	平行沈線文を連続施文、集合沈線状にする。諸磯b式。
83坑 5	縄文土器 深鉢	覆土	胴部破片	— —	厚0.8	細砂を含む	酸化焰 5YR5/6明赤褐	R L 単節縄文地に平行沈線文を横位に連続施文。諸磯b式。
83坑 6	縄文土器 深鉢	覆土	胴部破片	— —	厚0.7	細砂を含む	酸化焰 5YR5/6明赤褐	平行沈線文を横位に連続施文、集合沈線状にする。諸磯c式。
83坑 7	石器 石匙	覆土	完形	長4.1 幅5.9	厚1.0	黒色頁岩		25g、横形。つまみ部、縁辺部に調整加工がある。

1号古墳（第121・122図）PL72・73

（ ）は推定値、〔 〕は現存値、単位cm

No	種別 器種	平面位置 垂直(cm)	残存状況	口径 底径	器高	胎土	焼成 色調	成・整形の特徴
1	土師器 杯	前庭部	口縁部～底 部1/3	(11.2) —	3.3	細砂を含む	酸化焰 7.5YR4/3褐	口縁部内外面横撫で。底部外面 鈍削り、内面撫で。
2	須恵器 杯	前庭部 床上	口縁部～底 部1/3	(12.0) (7.6)	(4.0) [23.5]	細砂を含む	還元焰 7.5YR6/1黄灰	内外面回転による横撫で。底面右 回転糸切り。
3	須恵器 甕	前庭部	胴部破片	— —	厚0.6	細砂を含む	還元焰 N8/灰白	外面平行タタキ、内面当て具に よる同心円状の当て目。
4	須恵器 提瓶	玄室 床直	口縁部～底 部破片	— —	[15.5]	細粒を含む	還元焰 5Y7/1灰白	口縁部細く外反、ほぞ接ぎ。胴部 球形、回転による成形。棒状工具 によるカキ目。
5	須恵器 短頸壺	前庭部	胴部～底部 破片	— —	[3.8]	細砂を含む	還元焰 10YR6/1褐灰	胴部内外面回転による撫で。付 け高台。
6	鉄器 耳環	玄室 床直	完形	縦外径 2.2	横外径 2.3	縦内径 1.1	横内径 1.1	3g、銅芯金板貼。中空。
7	鉄器 耳環	玄室 床直	完形	縦外径 2.15	横外径 2.05	縦内径 1.1	横内径 1.1	2g、銅芯金板貼。中空。
8	鉄器 大刀	玄室 床直	柄・刀身部 破片	残長7.6 幅1.8	厚0.1			鐔倒卵形、長径3.2、短径2.2、 厚さ0.35
9	鉄器 鞘尻金具	玄室 床直	破片2点	長1.8 幅1.1	厚0.1			内側に木質が付着、端部は截断 されている。
10	鉄器 大刀	玄室 床直	刀身部破片 4点	長8.5 幅1.5	厚0.3			ほか3点は長・幅・厚が3.5・ 1.7・0.4cm、4.0・1.9・0.5cm、 4.3・2.0・0.5cm
11	鉄器 大刀	玄室 床直	刀身部破片 3点	長7.5 幅1.6	厚0.3			ほか2点は長・幅・厚が4.6・ 1.9・0.2cm、3.0・1.0・0.1cm
12	鉄器 大刀	玄室 床直	刀身部破片	長6.7 幅1.7	厚0.3			
13	鉄器 大刀	玄室 床直	刀身部破片	長5.3 幅1.8	厚0.3			柄に近い部分で一方が細くなる。
14	鉄器 刀子	玄室 床直	刀身部・柄 破片2点	長6.3 幅1.2	厚0.3			ほか1点は長・幅・厚が2.7・ 1.1・0.1cm
15	鉄器 鉄鏃	玄室 床直	茎の一部	長5.8 幅0.55	厚0.3			2g、下端部は截頭状、上端はネ ジ切れて尖る。断面長方形。

16	鉄器 鉄釘	玄室 —	略完形	長3.7 幅1.0	厚0.5			2g、頭部方形。くの字に折れ曲がり端部欠損。
17	鉄器 鉄釘	玄室 床直	頭部	長2.0 幅1.0	厚0.5			1g、頭部方形。端部は細く、欠損している。

1号土器集中 (第74図) PL73・74

() は推定値、[] は現存値、単位cm

No	種別 器種	平面位置 垂直(cm)	残存状況	口 底 径	器 高	胎 土	焼 成 色 調	成・整形の 特徴
1	土師器 杯	— —	口縁部～底 部破片	(12.6) —	4.6	細砂を含む	酸化焙 5YR5/4にぶい赤褐	口縁部内外面横撫で。底部外面 撫で後、中央部を篋削り、内面 撫で。
2	土師器 高杯	— —	杯部、脚部	16.6 13.4	[15.5]	細砂を含む	酸化焙 10YR7/3にぶい黄橙	口縁部内外面横撫で、以下篋削 り、内面横撫で。脚部外面横撫 で、内面撫で。
3	土師器 壺	— —	胴部破片	— —	[26.5]	細砂を含む	酸化焙 10YR7/3にぶい黄橙	胴部外面縦方向の篋撫でを4～ 6回に分けて施すが、最大径の 中位以下はやや雑となる。内面 横方向の篋撫で。

5区P1 (第125図) PL73

() は推定値、[] は現存値、単位はcm

No	種別 器種	平面位置 垂直(cm)	残存状況	長	幅	厚	石 材	成・整形の 特徴
1	石器 スクレイパー	西トレンチ	完形	4.4	11.8	1.2	黒色頁岩	80g、縁辺部に使用痕がある。
2	石器 スクレイパー	西トレンチ	完形	5.3	5.7	0.9	黒色頁岩	40g、縁辺部に使用痕がある。
3	石器 剥片	西トレンチ	完形	5.0	5.8	1.2	黒色頁岩	33g、縁辺部に使用痕がある。
4	石器 剥片	西トレンチ	完形	5.5	5.2	1.2	黒色頁岩	49g、縁辺部に使用痕がある。
5	石器 剥片	西トレンチ	完形	4.7	5.8	1.3	黒色頁岩	40g、縁辺部に使用痕がある。
6	石器 剥片	西トレンチ	完形	3.6	4.0	1.2	黒色頁岩	20g、縁辺部に使用痕がある。

縄文包含層 (第40～43図) PL74～76

() は推定値、[] は現存値、単位cm

No	種別 器種	グリッド 位置	残存状況	口 底 径	器 高	胎 土 材	焼 成 色 調	成・整形の 特徴
1	縄文土器 深鉢	—	口縁部破片	— —	厚0.9	繊維・細砂を 含む	酸化焙 10YR6/4にぶい黄橙	平縁。平行爪形文を施文。黒浜 式。
2	縄文土器 深鉢	39F11	胴部破片	— —	厚0.8	繊維・細砂を 含む	酸化焙 10YR7/4にぶい黄橙	平行爪形文を横位に施文。黒浜 式。
3 5	縄文土器 深鉢	39B12	胴部破片	— —	厚1.2	繊維・細砂を 含む	酸化焙 7.5YR5/6明褐	R L単節縄文を横位に施文。黒 浜式。4、5と同一個体。
6	縄文土器 深鉢	39E6 39F6	口縁部破片	— —	厚1.1	繊維・粗砂を 含む	酸化焙 5YR5/6明赤褐	L R縄文地に平行沈線文を鋸歯 状に施文。黒浜式。
7	縄文土器 深鉢	39A14 39F8	口縁部・胴 部破片7点	— —	厚1.1	粗砂・細砂を 含む	酸化焙 5YR6/4にぶい橙	波状口縁。R L無節縄文地に浮 線文貼付。諸磯b式。
8	縄文土器 深鉢	39F7	底部破片	— —	厚0.71.0	細砂を含む	酸化焙 10YR6/4にぶい黄橙	R L単節縄文地に浮線文貼付。 諸磯b式。

9	縄文土器 深鉢	39B8 39G8	胴部破片 6点	— —	厚1.0	細砂を含む	酸化焰 10YR6/4にぶい黄橙	L R 単節縄文地に平行沈線文を横位に施文。諸磯b式。
10	縄文土器 深鉢	39B7 39E7	胴部破片 6点	— —	厚0.7	細砂を含む	酸化焰 7.5YR6/4にぶい黄橙	幅3mmの半截竹管の背面による1本沈線を格子状に施文。くびれ部は横位の沈線で区画。下胴部は無文。浮島式か。
11	石器 打製石斧	38T15	完形	長19.2 幅10.9	厚3.8	黒色安山岩		1150g、短冊形。自然面を残す厚い剥片を素材とする。
12	石器 打製石斧	39G4	完形	長19.4 幅6.8	厚4.3	黒色頁岩		610g、短冊形。自然面を残す厚い剥片を素材とする。
13	石器 打製石斧	39F8	略完形	長15.1 幅7.5	厚3.3	黒色安山岩		300g、撥形。刃部は丸みを持つ。
14	石器 打製石斧	39C19	完形	長13.7 幅7.8	厚2.9	黒色安山岩		242g、撥形。刃部は広がり、薄くなる。
15	石器 打製石斧	39C19	完形	長11.0 幅7.8	厚3.3	黒色頁岩		250g、撥形。刃部は広がり、薄くなる。
16	石器 打製石斧	39G7	完形	長12.8 幅5.0	厚2.0	黒色安山岩		140g、短冊形。
17	石器 打製石斧	39F7	頭部欠損	長〔9.5〕 幅4.7	厚1.8	黒色安山岩		95g、短冊形。
18	石器 打製石斧	39G8	頭部欠損	長〔7.9〕 幅4.9	厚1.2	黒色安山岩		70g、短冊形。
19	石器 打製石斧	38T13	完形	長9.6 幅7.1	厚1.8	黒色安山岩		160g、分銅形。側縁の抉りは深い。刃部は平坦。
20	石器 打製石斧	38T15	完形	長9.0 幅5.5	厚2.7	黒色安山岩		120g、分銅形。側縁の抉りは深い。
21	石器 スクレイパー	39B16	完形	長9.1 幅7.7	厚2.3	黒色安山岩		220g、横剥ぎの剥片を使用。下端部に調整加工を施す。
22	石器 スクレイパー	39B12	完形	長10.0 幅6.5	厚2.6	黒色安山岩		230g、横剥ぎの剥片を使用。下端部に調整加工を施す。
23	石器 スクレイパー	—	完形	長6.6 幅11.1	厚1.2	黒色頁岩		74g、縁辺部の1側縁に使用痕がある。
24	石器 スクレイパー	38T15	完形	長6.5 幅8.4	厚1.4	黒色頁岩		90g、縁辺部全体に使用痕がある。
25	石器 スクレイパー	39H9	完形	長4.5 幅9.3	厚1.7	黒色安山岩		70g、縁辺部の1側縁に使用痕がある。
26	石器 剥片	—	完形	長5.2 幅6.2	厚1.2	黒色安山岩		50g、縁辺部の1側縁に使用痕がある。
27	石器 剥片	39G5	完形	長5.5 幅6.2	厚1.0	黒色安山岩		40g、縁辺部の2側縁に使用痕がある。
28	石器 剥片	39G5	完形	長5.8 幅9.3	厚1.0	黒色頁岩		40g、縁辺部の2側縁に使用痕がある。

29	石器 磨石	39B12	完形	長12.3 幅7.5	厚5.5	粗粒輝石安山 岩		640g、全体が摩耗、3面に凹穴がある。
30	石器 凹石	39H6	完形	長13.0 幅8.0	厚3.4	粗粒輝石安山 岩		480g、全体が摩耗、表裏両面に2つの凹み穴がある。
31	石器 凹石	39E10	完形	長8.8 幅8.2	厚5.6	粗粒輝石安山 岩		470、全体が摩耗、表裏両面に凹穴、上下に敲打痕がある。
32	石器 石鏃	39E7	左脚部欠損	長2.3 幅〔1.4〕	厚0.4	チャート		0.71g、無茎、基部は逆U字形に抉れる。
33	石器 石鏃	39E7	先端部欠損	長〔1.5〕 幅1.4	厚0.7	黒曜石		0.65g、無茎、基部は平坦。

遺構外遺物（第134～138図）PL76～78

（ ）は推定値、〔 〕は現存値、単位cm

No	種別 器種	グリッド	残存状況	長 幅	厚	胎土 材	焼成 色調	成・整形の 特徴
1	縄文土器 深鉢	60S2・3	胴部破片	— —	厚0.9	繊維・細砂を 含む	酸化焰 5YR4/4にぶい赤褐	関山I式。
2 ・ 3	縄文土器 深鉢	60S2・3	口縁部破片	— —	厚1.0	繊維・微砂を 含む	酸化焰 10YR6/3にぶい橙	波状口縁。関山I式。3と同一 個体。
4	縄文土器 深鉢	60R2	胴部破片	— —	厚0.7	繊維・微砂を 含む	酸化焰 7.5YR7/3にぶい橙	関山I式。
5 ・ 6	縄文土器 深鉢	39S18 3区表採	口縁・胴部 破片	— —	厚0.9	繊維・微砂を 含む	酸化焰 7.5YR6/4にぶい橙	平縁。6条の櫛状工具による平 行沈線文を横位・波状に施文。 黒浜式。6と同一個体。
7	縄文土器 深鉢	4区表採	口縁部破片	— —	厚0.9	繊維・微砂を 含む	酸化焰 5YR5/6明赤褐	平縁。平行沈線文を横位の波状 に施文。黒浜式。
8	縄文土器 深鉢	40A18 4区表採	口縁部破片	— —	厚0.8	繊維・微砂を 含む	酸化焰 10YR5/4にぶい黄褐	平縁。平行沈線文を菱形に施文。 黒浜式。
9	縄文土器 深鉢	4区表採	口縁部破片	— —	厚0.9	繊維・微砂を 含む	酸化焰 5YR5/6明赤褐	平縁。平行沈線文を横位に施文。 黒浜式。
10	縄文土器 深鉢	39K18 3区表採	胴部破片	— —	厚0.8	繊維・微砂を 含む	酸化焰 5YR5/8明赤褐	平行沈線文を縦位・横位に施文。 黒浜式。
11 ・ 12	縄文土器 深鉢	4区表採	口縁・胴部 破片	— —	厚0.8	繊維・微砂を 含む	酸化焰 10YR6/6明黄褐	波状口縁。平行爪形文を菱形施 文。黒浜式。12と同一個体。
13 ・ 14	縄文土器 深鉢	4区表採	口縁部・胴 部破片	— —	厚0.9	繊維・微砂を 含む	酸化焰 10YR6/4にぶい黄橙	波状口縁。R L単節縄文を横位 施文。黒浜式。14同一個体。
15	縄文土器 深鉢	60R1 60R2	口縁部破片	— —	厚0.8	繊維・微砂を 含む	酸化焰 7.5YR4/4褐	平縁。L R・R L羽状縄文を横 位施文。黒浜式。
16	縄文土器 深鉢	60R5	胴部破片	— —	厚0.8	繊維・微砂を 含む	酸化焰 7.5YR6/4にぶい橙	正反の合、黒浜式。
17	縄文土器 深鉢	4区表採	口縁部破片	— —	厚0.8	繊維・微砂を 含む	酸化焰 2.5Y7/2灰黄	R L単節縄文を横位に施文。黒 浜式。
18	縄文土器 深鉢	39M20	口縁部破片	— —	厚0.8	繊維・細砂を 含む	酸化焰 5YR6/6橙	波状口縁。L R・R L羽状縄文 を横位施文。黒浜式。

19	縄文土器 深鉢	2区表採	口縁部破片	—	厚1.1	繊維・微砂を含む	酸化焰 2.5Y7/3浅黄	平縁。LR・RL単節の羽状縄文を横位施文。黒浜式。
20	縄文土器 深鉢	39M13	胴部破片	—	厚0.9	繊維・細砂を含む	酸化焰 7.5YR6/4にぶい橙	RL単節縄文を横位に施文。黒浜式。
21	縄文土器 深鉢	60S3	胴部破片	—	厚0.8	繊維・細砂を含む	酸化焰 2.5YR5/4にぶい赤褐	LR・RL単節の羽状縄文を横位に施文。黒浜式。
22 24	縄文土器 深鉢	60P2・S3 27住覆土	口縁部・胴部破片	—	厚0.8	細砂を含む	酸化焰 7.5YR7/3にぶい黄橙	平縁。口縁部と頸部に1条平行爪形文を横位にめぐらせ、その間に斜行沈線で肋骨文を構成する。諸磯a式。23、24と同一個体。
25 27	縄文土器 深鉢	60S2 27住覆土	口縁部破片	— —	厚0.8	微砂を含む	酸化焰 10YR7/3にぶい黄橙	平縁。口縁に沿って平行沈線文1条を横位にめぐらし、以下斜行沈線で肋骨文を構成する。諸磯a式。27と同一個体。
26	縄文土器 深鉢	60S3	口縁部破片	— —	厚0.9	微砂を含む	酸化焰 10YR6/2灰黄褐	平縁。口縁に沿って平行爪形文1条を横位にめぐらし、以下斜行沈線で肋骨文を構成する。諸磯a式。
28	縄文土器 深鉢	60R3	胴部破片	— —	厚1.0	細砂を含む	酸化焰 10YR6/4にぶい黄橙	平行沈線と円形文で肋骨文を構成する。諸磯a式。
29	縄文土器 深鉢	60R3	胴部破片	— —	厚1.0	微砂を含む	酸化焰 5YR6/3にぶい橙	平行沈線と円形文で肋骨文を構成する。諸磯a式。
30	縄文土器 深鉢	60P2・S2、 27住覆土	口縁部～胴部破片	— —	厚1.0	細砂を含む	酸化焰 5YR5/4にぶい赤褐	平縁。平行沈線を横位と波状の3段に施文。以下RL単節縄文を横位に施文。諸磯a式。
31	縄文土器 深鉢	60S2	口縁部破片	— —	厚0.7	細砂を含む	酸化焰 2.5Y7/2灰黄	波状口縁。RL単節縄文地に平行沈線文3条をめぐらす。諸磯b式。
32	縄文土器 深鉢	39L16	口縁部破片	— —	厚2.4	細砂を含む	酸化焰 5YR4/6赤褐	平縁。口縁に沿い平行爪形文1条を横位施文。以下RL単節縄文を横位施文。諸磯a式。
33	縄文土器 深鉢	60P2・R2・ S2	胴部破片	— —	厚1.0	細砂を含む	酸化焰 2.5Y7/2灰黄	RL単節縄文地に平行爪形文を横位にめぐらす。諸磯b式。
34	縄文土器 深鉢	60S3	口縁部破片	— —	厚0.5	細砂を含む	酸化焰 2.5YR4/4にぶい赤褐	波状口縁。RL単節縄文を横位に施文。諸磯aかb式。
35	縄文土器 深鉢	50F3	口縁部破片	— —	厚0.9	微砂を含む	酸化焰 7.5YR6/4にぶい橙	平縁。LR・RL単節羽状縄文を横位施文。諸磯aかb式。
36	縄文土器 深鉢	49L1	口縁部破片	— —	厚0.7	微砂を含む	酸化焰 5YR4/6赤褐	平縁。RL単節縄文を横位施文。諸磯aかb式。
37	縄文土器 深鉢	60R4	胴部破片	— —	厚0.5	微砂を含む	酸化焰 5YR4/6赤褐	RL単節縄文を横位施文。諸磯aかb式。
38	縄文土器 深鉢	60S2	胴部破片	— —	厚0.5	微砂を含む	酸化焰 5YR5/4にぶい赤褐	RL単節縄文を横位施文。諸磯a式。

39	縄文土器 深鉢	60R2	口縁部破片	— —	厚1.0	細砂を含む	酸化焰 5YR5/6明赤褐	波状口縁。平行爪形文を菱形に施文。諸磯b式。
40	縄文土器 深鉢	4区表採	口縁部破片	— —	厚0.8～ 1.1	細砂を含む	酸化焰 5YR5/3にぶい赤褐	平縁。口縁に沿い平行沈線文2条を横位にめぐらし、以下入り組み状に施文。諸磯b式。
41	縄文土器 深鉢	60S2	口縁部破片	— —	厚0.9	細砂を含む	酸化焰 7.5YR5/6明褐	平縁。口縁に沿い平行爪形文を横位施文。諸磯b式。
42	縄文土器 深鉢	60S3	胴部破片	— —	厚1.1	細砂を含む	酸化焰 7.5YR6/4にぶい褐	平行爪形文を入り組み状に施文。諸磯b式。
43	縄文土器 深鉢	60S3	胴部破片	— —	厚1.1	微砂を含む	酸化焰7.5YR5/3 にぶい褐	R L単節縄文地に平行爪形文を横位・弧状に施文。間に円形文を施文。諸磯b式。
44	縄文土器 深鉢	60K2・R2	口縁部破片	— —	厚0.9	細砂を含む	酸化焰 5YR5/4にぶい赤褐	平縁。平行爪形文を弧状施文。間に刻み目。諸磯b式。
45 46	縄文土器 深鉢	60S2	胴部破片	— —	厚1.0	微砂を含む	酸化焰 7.5YR6/4にぶい褐	平行爪形文間に平行沈線を鋸歯状・弧状に施文。諸磯b式。46と同一個体。
47	縄文土器 深鉢	5区覆土	胴部破片	— —	厚1.0	細砂を含む	酸化焰 10YR7/3にぶい黄橙	無文地に刻み目のある浮線文を貼付。諸磯b式。
48	縄文土器 深鉢	60S3	胴部破片	— —	厚0.7	細砂を含む	酸化焰 5YR4/6赤褐	縄文地に細い浮線文を貼付。諸磯b式。
49	縄文土器 深鉢	60T2	胴部破片	— —	厚0.8～ 1.1	粗砂・細砂を含む	酸化焰 7.5YR5/4にぶい褐	R L単節縄文地に刻み目のある浮線文を貼付。諸磯b式。
50	縄文土器 深鉢	5区覆土	胴部破片	— —	厚0.7～ 1.1	細砂を含む	酸化焰 7.5YR6/4橙	R L単節縄文地に刻み目のある浮線文を貼付。諸磯b式。
51	縄文土器 深鉢	4区覆土	胴部破片	— —	厚0.9	細砂を含む	酸化焰 7.5YR6/6にぶい橙	R L単節縄文地に縄目のある浮線文を貼付。諸磯b式。
52	縄文土器 深鉢	60Q2・R2・ 60R3・T3	口縁部破片	— —	厚0.8	細砂を含む	酸化焰 5YR5/8明赤褐	波状口縁。R L単節縄文地に平行沈線で縦に区画、中を肋骨状・曲線状で充てん。波頂部に穿孔。諸磯a式。
53	縄文土器 深鉢	60S2・60S3	口縁部破片	— —	厚0.7	細砂を含む	酸化焰 10YR3/2黒褐	平縁。R L単節縄文地に区画線付き木葉文施文。諸磯b式。
54	縄文土器 深鉢	60T3	口縁部破片	— —	厚0.7	細砂を含む	酸化焰 7.5YR5/4にぶい褐	L R縄文地に縦区画の縦向弧線文を施文。諸磯b式。
55	縄文土器 深鉢	60S3	胴部破片	— —	厚0.8	細砂を含む	酸化焰 5YR5/4にぶい赤褐	R撚糸文地に平行沈線を横位に施文。諸磯b式。
56	縄文土器 深鉢	60S2	胴部破片	— —	厚0.8	微砂を含む	酸化焰 5YR4/4にぶい赤褐	R L単節縄文地に入り組み木葉文を施文。諸磯b式。
57	縄文土器 深鉢	60P2	口縁部破片	— —	厚1.1	細砂を含む	酸化焰 10YR7/6明黄褐	波状口縁。平行沈線を縦位・横位に施文。諸磯b式。
58 60	縄文土器 深鉢	60R2	口縁部破片 胴部破片	— —	厚0.8	細砂を含む	酸化焰 5YR5/6明赤褐	平縁。平行沈線を波状に施文。諸磯b式。60と同一個体。

59	縄文土器 深 鉢	60R2	胴部破片	— —	厚0.5	細砂を含む	酸化焰 5YR5/4にぶい赤褐	平行沈線を横位に施文。諸磯 b 式。
61 62	縄文土器 深 鉢	5区表土	胴部破片	— —	厚0.6	細砂を含む	酸化焰 5YR5/4にぶい赤褐	平行沈線を波状に施文。諸磯 c 式。62と同一個体。
63	縄文土器 深 鉢	60Q1・Q2・ 60R1・R2	胴部破片	— —	厚0.7	細砂を含む	酸化焰 5YR5/4にぶい赤褐	平行沈線を横矢羽根状に施文。諸磯 c 式。
64	縄文土器 浅 鉢	25住59・186、 60T2	胴部破片	— —	厚0.8	粗砂・細砂を 含む	酸化焰 5YR4/6赤褐	有稜、無文。
65	縄文土器 浅 鉢	60S2	口縁部破片	— —	厚0.4～ 0.7	細砂を含む	酸化焰 7.5YR4/4褐	有稜内湾、多孔型。
66 67	縄文土器 深 鉢	25住10 60S2	胴部破片	— —	厚0.7	粗砂・細砂を 含む	酸化焰 5YR5/6明赤褐	無文。施文前に器面調整をした だけである。蜆ヶ森式。
68	縄文土器 深 鉢	5区覆土	胴部破片	— —	厚0.8	細砂を含む	酸化焰 7.5YR5/4にぶい褐	横位の平行爪形文間に刻み目、 下位に平行沈線文。浮島Ⅱ式。
69	縄文土器 深 鉢	60R5	胴部破片	— —	厚0.9	細砂を含む	酸化焰 10YR7/3にぶい黄橙	平縁。貝殻腹縁文を横位施文。 浮島Ⅱ式。
70	縄文土器 深 鉢	60Q1・Q2・ 60R1・R2	胴部破片	— —	厚0.7	微砂を含む	酸化焰 10YR7/3にぶい黄橙	貝殻腹縁文を横位に施文。浮島 Ⅱ式。
71	縄文土器 深 鉢	5区覆土	胴部破片	— —	厚0.7	細砂を含む	酸化焰 7.5YR6/4にぶい橙	貝殻腹縁文を横位に施文。浮島 Ⅱ式。
72	縄文土器 深 鉢	60S2	胴部破片	— —	厚0.6	微砂を含む	酸化焰 10YR8/3浅黄橙	貝殻腹縁文を横位に施文。浮島 Ⅱ式。
73	縄文土器 深 鉢	60R2	口縁部破片	— —	厚1.0	細砂を含む	酸化焰 7.5YR6/4にぶい橙	平縁。口縁に沿い無文帯、以下 R L 単節縄文横位施文。加曾利 E 3 式。
74	縄文土器 深 鉢	60S3	胴部破片	— —	厚1.0	細砂を含む	酸化焰 5YR5/6明赤褐	R L 単節縄文施文後、磨り消し 無文帯。加曾利 E 3 式。
75	縄文土器 深 鉢	60R2	胴部破片	— —	厚0.9	細砂を含む	酸化焰 10YR6/3にぶい黄橙	L R 単節縄文施文後、縦位の沈 線で区画し磨り消す。加曾利 E 3 式。
76	縄文土器 深 鉢	60T3	胴部破片	— —	厚1.1	細砂を含む	酸化焰 2.5Y7/3浅黄	L R 単節縄文を施文後、沈線区 画して磨り消す。加曾利 E 3 式。
77	縄文土器 浅 鉢	39K20	胴部破片	— —	厚0.5	微砂を含む	酸化焰 10YR5/2褐灰	外面はよく研磨されている。安 行Ⅲ式。
78	石器 打製石斧	21住18	完 形	長9.3 幅5.6	厚1.4	黒色頁岩		100g、短冊形。側縁と刃部に調 整を施す。
79	石器 打製石斧	60R2	略完形	長9.3 幅5.3	厚2.1	黒色頁岩		100g、短冊形。側縁に調整を施 す。
80	石器 打製石斧	60R2	完形	長9.4 幅4.8	厚2.6	黒色頁岩		130g、短冊形。側縁に調整を施 す。
81	石器 打製石斧	1区表土	完 形	長8.5 幅4.0	厚2.0	黒色頁岩		80g、短冊形。側縁に調整を施す。 刃部は薄くて丸い。

82	石器 打製石斧	3区覆土	完形	長11.6 幅3.4	厚2.3	黒色頁岩		80g、短冊形。細く尖頭状、側縁に調整を施す。
83	石器 打製石斧	3区覆土	破片	長 [8.1] 幅 [4.6]	厚1.9	黒色安山岩		90g、短冊形。頭部、刃部を欠損。
84	石器 打製石斧	4区覆土	破片	長 [7.9] 幅 [4.6]	厚1.0	黒色頁岩		40g、短冊形。全体に薄い。下端部を欠損。刃部に摩耗痕。
85	石器 打製石斧	4区覆土	破片	長 [6.7] 幅 [5.8]	厚1.5	黒色安山岩		75g、短冊形。全体に薄い。下半部を欠損。
86	石器 打製石斧	2区覆土	破片	長 [8.3] 幅 [4.8]	厚2.0	黒色安山岩		105g、短冊形。下半部を欠損。
87	石器 磨製石斧	39K12	略完形	長 [11.3] 幅 [9.5]	厚1.7	黒色頁岩		170g、撥形。刃部は丸く張り出す。刃部の一部欠損。
88	石器 磨製石斧	60R2	頭部破片	長 [14.8] 幅 [5.5]	厚2.0	緑色片岩		310g、乳棒状。断面は楕円形。刃部を欠損。
89	石器 磨製石斧	60R3	頭部破片	長 [12.7] 幅 [5.3]	厚2.7	緑色片岩		240g、乳棒状。断面は楕円形。着柄痕がある。刃部を欠損。
90	石器 磨製石斧	49O4	刃部破片	長 [10.1] 幅 [4.8]	厚2.9	硬砂岩		200g、定角式。断面は楕円形。両刃。頭部と刃部側縁を欠損。
91	石器 磨製石斧	40C4	略完形	長6.6 幅 [3.6]	厚1.1	蛇紋岩		40g、定角式。断面は楕円形。破損後、再研磨して使用。
92	石器 スクレイパー	39H11	完形	長8.8 幅6.1	厚1.2	黒色頁岩		80g、側縁部に調整加工がある。
93	石器 スクレイパー	3区覆土	略完形	長10.3 幅4.2	厚1.9	黒色頁岩		85g、側縁部に調整加工がある。
94	石器 スクレイパー	4区覆土	完形	長7.9 幅9.6	厚2.2	黒色安山岩		150g、縁辺部に使用痕がある。
95	石器 スクレイパー	4区覆土	一部欠損	長5.4 幅 [8.1]	厚1.8	黒色安山岩		80g、縁辺部に調整加工を施す。
96	石器 スクレイパー	4区覆土	完形	長8.3 幅6.2	厚1.1	黒色安山岩		85g、縁辺部に使用痕がある。
97	石器 スクレイパー	3区覆土	一部欠損	長7.8 幅 [8.5]	厚1.6	黒色安山岩		120g、縁辺部に調整加工がある。
98	石器 スクレイパー	60R3	完形	長5.4 幅13.4	厚1.0	黒色頁岩		80g、縁辺部に調整加工がある。
99	石器 スクレイパー	3区覆土	完形	長4.1 幅8.9	厚1.1	黒色安山岩		40g、表面は自然面、縁辺部に使用痕がある。
100	石器 スクレイパー	3区覆土	完形	長5.2 幅9.0	厚1.7	黒色安山岩		80g、縁辺部に調整加工がある。
101	石器 スクレイパー	4区覆土	完形	長5.6 幅9.4	厚1.6	黒色安山岩		50g、縁辺部に使用痕がある。
102	石器 スクレイパー	3区覆土	完形	長5.8 幅7.5	厚1.1	黒色安山岩		60g、縁辺部に使用痕がある。

103	石器 スクレイパー	3区覆土	破片	長5.0 幅 [4.8]	厚0.7	黒色頁岩		30g、縁辺部に使用痕がある。
104	石器 スクレイパー	表採	完形	長5.5 幅6.2	厚1.6	黒色頁岩		62g、縁辺部に調整加工を施す。
105	石器 石匙	表採	完形	長4.2 幅6.5	厚1.0	チャート		24g、横型。表裏に丁寧な加工を施す。
106	石器 石匙	60T2	完形	長2.8 幅5.1	厚0.7	黒曜石		6g、横型。表裏に丁寧な加工を施す。
107	石器 石匙	60QR1・2	完形	長5.3 幅2.5	厚0.8	黒色安山岩		10g、縦型。つまみの箇所加工を施す。
108	石器 石鏃	60QR1・2	完形	長3.4 幅2.4	厚1.9	黒色安山岩		6g、無茎、基部がわずかに弧を描いている。
109	石器 石鏃	60R2	完形	長2.1 幅1.7	厚0.4	黒色頁岩		1g、無茎、基部は平坦。
110	石器 石鏃	1号古墳	完形	長1.3 幅1.1	厚0.3	黒曜石		0.46g、無茎、基部は平坦。
111	石器 石鏃	39K18-S1	完形	長2.3 幅1.4	厚0.4	黒色頁岩		1g、無茎、基部は逆U字形に抉れている。
112	石器 石鏃	5区覆土	脚部欠損	長3.1 幅 [2.0]	厚0.7	黒色安山岩		2g、無茎、基部は逆U字形に抉れている。
113	石器 石鏃	60S2	先端部欠損	長 [1.3] 幅1.9	厚0.2	黒色頁岩		0.64g、無茎、基部は浅く抉れている。
114	石器 凹石	4区覆土	1/2	長 [8.3] 幅6.3	厚4.0	粗粒輝石安山岩		330g、表裏に2つの凹穴があいている。
115	金属器 鉄釘	覆土一括	1/2	長 [3.2] 幅1.4	厚 [2.8]			8g、頭部、断面は方形。端部を欠損。
116	金属器 銅滓	39C13	破片	長2.3 幅4.3	厚0.5			13g、断面はわずかに丸い。鋳型の砂粒が付着。

